Tohoku Gakuin University Faculty Activities Report 2025

東北学院大学 教員業務・活動報告書 2024

東北学院大学
2025（令和7）年10月31日

東北学院大学
教員業務・活動報告書

2024

東北学院大学
2025（令和7）年10月31日

凡　例

1．業績の範囲

・2024年４月から2025年３月までとする。

2．掲載対象

・2024年４月１日現在で本学に在職するすべての専任の教育職員を対象とする。

3．掲載順序

・文学部（英文学科、総合人文学科、歴史学科、教育学科）、経済学部（経済学科）、経営学部（経営学科）、法学部（法律学科）、工学部（機械知能工学科、電気電子工学科、環境建設工学科、情報基盤工学科）、地域総合学部（地域コミュニティ学科、政策デザイン学科）、情報学部（データサイエンス学科）、人間科学部（心理行動科学科）、国際学部（国際教養学科）、教養学部（地域構想学科）、教養教育センターの順とし、さらに教授（嘱託教授含む）、准教授、講師、助教別に五十音順とした。

・各教員から提出された区分別に、年代の古い順から掲載した。なお、教育活動、研究活動のいずれにおいても時期が複数年にわたる場合には、活動の開始時期を基準として年月日順に記載し、学会等及び社会活動については、就任年月日順に記載した。

4．掲載内容

・掲載内容は、すべて本人からの報告によるものである。

・大学院の授業担当の有無は、2024年度に開講された授業のものである。

・教育活動の区分は、１．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）、２．作成した教科書、教材、参考書、３．教育方法･教育実践に関する発表、講演等、４．その他教育活動上特記すべき事項とした。

・研究活動の区分は、Ａ．学術書、Ｂａ．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）、Ｂｂ．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）、Ｃ．Ｂに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文、Ｄ．一般著書・論文・エッセー（専門分野）、Ｅ．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）、Ｆ．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）、Ｇ．学会における研究発表、Ｈ．翻訳（学術書や原典等）、Ｉ．特許とした。

・共著（論文）の場合、該当頁数の記入にあたって、本人の分担箇所を特定できる場合は、その頁数を記載した。

・芸術分野や体育実技等の分野の教員は、著書・論文等以外の展覧会・演奏会・競技会等での発表のうち、特に顕著な業績と認められるものについて記載した。

教員一覧

学長
教授
大西晴樹

文学部
英文学科
教授
石橋敬太郎
泉順子
植松靖夫
大石正幸
豊島孝之
那須川訓也
バックレイ フィリップ
福士航
吉村富美子
准教授
井出達郎
大沼仁美
森山盛吉

総合人文学科
教授
川島堅二
木村純二
椎名雄一郎
原田浩司
吉田新
准教授
田島卓
渡邊有美
講師
大門耕平
藤野雄大
渡邉蘭子

歴史学科
教授
小沼孝博
兼平賢治
河西晃祐
楠義彦
佐川正敏
櫻井康人
下倉渉
竹井英文
永田英明
七海雅人
政岡伸洋
渡辺昭一
准教授
金子祥之
杵淵文夫
木山克彦
吉植庄栄

教育学科
教授
稲垣忠
加藤卓
紺野祐
佐藤正寿
清多英羽
長島康雄
村野井仁
ロング クリストファー
渡辺通子
准教授
大友麻子
清水遥
髙橋千枝
助教
松本進乃助

経済学部
経済学科
教授
アレイ ウィルソン
泉正樹
伊藤健宏
大塚芳宏
窪田恵子
倉田洋
佐藤純
佐藤康仁
篠崎剛
白鳥圭志
千葉昭彦
舟島義人
前田修也
准教授
板明果
稲見裕介
岩本菜々
黒阪健吾
小林陽介
谷達彦
谷祐可子
田野穂
松前龍宜

吉田　惇
講師
塩見由梨
白井大地
望月理生

経営学部
経営学科
教授
岡田耕一郎
小野慎一郎
折橋伸哉
小池和彰
齋藤善之
佐久間義浩
菅山真次
鈴木好和
藤祐司
根市一志
松岡孝介
松村尚彦
村山貴俊
矢口義教
准教授
井岡佳代子
工藤大介
窪田嵩哉
棚橋則子
堀治彦
森下俊一郎
講師
板橋慶明
宋元旭

法学部
法律学科
教授
阿部未央
池田丈佑
石垣茂光
井上義比古
遠藤隆幸
菊地雄介
木下淑惠
黒田秀治
近藤雄大
佐々木くみ
佐藤英世
佐藤優希
陶久利彦
辻田芳幸
冨田真
宮川基
横田尚昌

准教授
梶谷康久
源島穣
高浜智輝
玉井裕貴
内藤裕貴
羽田さゆり
松浦陽子
松原俊介
楊秋野
講師
井坂正宏
塚原義央

工学部
機械知能工学科
教授
魚橋慶子
小野憲文
梶川伸哉
加藤陽子
城戸章宏
熊谷正朗
斎藤修
星朗
松浦寛
矢口博之
准教授
岡田宏成
佐瀬一弥
濱西伸治
北條智彦
李渊

電気電子工学科
教授
石上忍
岩谷幸雄
大場佳文
小澤哲也
郭海蛟
加藤和夫
川又憲
金義鎭
呉国紅
佐藤文博
嶋敏之
土井正晶
杤修一郎
原明人
准教授
桑野聡子
佐々木義卓
鈴木仁志

環境建設工学科
教授
李　相勲
井川　望
石川雅美
櫻井一弥
鈴木道哉
武田三弘
千田知弘
恒松良純
中沢正利
中村寛治
韓　連煕
宮内啓介
山口　晶
准教授
﨑山俊雄
三戸部佑太

情報基盤工学科
教授
淡野照義
神永正博
郷古　学
志子田有光
鈴木利則
吉川英機
准教授
門倉博之
木下　勉
深瀬道晴
物部寛太郎
講師
森島　佑

地域総合学部
地域コミュニティ学科
教授
岩動志乃夫
伊藤晶文
大迫章史
佐久間政広
清水貴裕
菅原真枝
坪田益美
原　義彦
平吹喜彦
増子　正
柳井雅也
准教授
泉山靖人
遠藤　尚
大澤史伸
品田光春
庄子　元
目代邦康
柳澤英明
講師
一柳貴博

政策デザイン学科
教授
伊鹿倉正司
石川真作
奥山忠裕
熊沢由美
黒坂愛衣
佐藤　滋
和田正春
准教授
小宮友根
齊藤康則
佐久間香子
定池祐季
宮地克典
武藤敦士
講師
市川　樹
河村真実

情報学部
データサイエンス学科
教授
石田弘隆
伊藤則之
坂本泰伸
菅原　研
杉浦茂樹
鈴木　努
武田敦志
牧野悌也
松尾行雄
松本章代
村上弘志
准教授
岩田友紀子
片方　江
木村敏幸
小林信重
佐藤　篤
高橋秀幸
田所裕康
土原和子
星野真樹
講師
杉山佳子
渡邊　圭

人間科学部
心理行動科学科
教授
天野和彦

井　川　純　一
岡　崎　勘　造
加　藤　健　二
金　井　嘉　宏
神　林　博　史
坂　本　　譲
櫻　井　研　三
宍　戸　隆　之
仙　田　幸　子
高　橋　信　二
萩　原　俊　彦
平　野　幹　雄
福　野　光　輝

准教授
臼　倉　　瞳
東海林　　渉
吉　田　雄　大

国際学部
国際教養学科
教授
アンドリューズ　デール
郭　　基　煥
佐々木　郁　子
古　川　弘　子
松　谷　基　和
三　須　拓　也
渡　部　友　子
渡　辺　祐　子

准教授
金　　亨　貞
佐　藤　真　紀
城　山　拓　也
房　　賢　嬉
フリック　ウルリッヒ
李　　承　赫

講師
沓　掛　沙弥香

教養学部
地域構想学科
教授
松　原　　悟

教養教育センター
教授
今　井　奈緒子
岸　　浩　介
金　　永　昊
佐　伯　　啓
信　太　光　郎
千　葉　智　則
塚　本　信　也
中　村　教　博
坂　内　昌　徳
楊　　世　英
リース　エイドリアン

准教授
井　上　正　子
巖　谷　睦　月
原　　貴　子
翠　川　博　之
文　　景　楠

講師
遠　海　友　紀
齋　藤　　渉
西　田　昌　之
宮　本　直　規

助教
千　葉　真　哉

教員業務・活動報告

学　　長

2024年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	大西　晴樹	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

教員業務・活動報告

文　学　部

英　文　学　科

総合人文学科

歴　史　学　科

教　育　学　科

2024年度

所属	文学部　英文学科	職名	教授	氏名	石橋　敬太郎	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	・『イギリス詩Ⅰ・Ⅱ』、『イギリス演劇Ⅰ』および『英米文学演習Ⅰ・Ⅱ』において、学科課程における必要性という観点から到達目標と合致する講義を行うとともに、配布資料の改善を行う。 ・小テストを実施しながら、学生の習熟度を確認にして授業を進める。	
今年度の進捗状況	・上記目標については、小テストを実施して学生の習熟度を確認しながら授業を進めたことにより、有意な結果が得られたことから、ある程度の進捗がみられた。	
来年度の進捗目標	・配布資料を改善して、学生の習熟度の向上に努める。 ・2026年度開講予定の『イギリス文学史Ⅰ・Ⅱ』の配布資料を完成させる。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
宗派を超えて――『背教者』におけるイエズス会のサクラメントの舞台化の意味――	単著	2025年2月	英語英文学研究所　紀要(49)	石橋敬太郎	pp.23-41
『エドワード四世』における新たな歴史観と歴史編纂――ロンドン市民によるイングランド王国表象――	単著	2025年2月	東北学院大学』英語英文学論集(108)	石橋敬太郎	pp.1-8
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標	・著書「イスラーム世界」を題材とした初期近代イングランド演劇を完成させる。 ・北アメリカなど新世界を題材とした初期近代イングランドの演劇作品の時局的な意味を探る研究を進める。				
今年度の進捗状況	・著書の執筆に着手したことから、ある程度の進捗がみられた。 ・新世界を題材とした初期近代イングランドの演劇作品研究については、ベン・ジョンソン作『東行きだよ』の分析に着手したことから、ある程度の進捗がみられた。				
来年度の進捗目標	・著書については、科研費などに申請して公表に向けた準備をする。 ・新世界を題材とした初期近代イングランドの演劇作品については、ジョンソン作『東行きだよ』の論文をまとめる。				

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)（一般）	2024年度～	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年4月～	日本シェイクスピア協会 委員
1987年4月～	日本英文学会東北支部 会員
1987年4月～	日本シェイクスピア協会 会員
1987年4月～	日本英文学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

1. 英語英文学専攻主任
2. 地域連携センター所員
3. 教職課程センター所員

2024年度

所属	文学部　英文学科	職名	教授	氏名	泉　順子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
翻訳作業における様々な辞書の使用法	2024年4月1日～2025年3月31日	「翻訳実践」の授業では、およそ20種類の辞書の特徴と用い方を紹介し、辞書の利便性も意識してもらう場を設けている。インターネット上での検索では簡単には得られないような情報が辞書にはあることを確認しながら、翻訳作業においてはどちらのツールも活かすことが大切であることを認識してもらえるよう心掛けている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
マチルダが目指す高次欲求――Roald DahlのMatildaについて	単著	2025年2月	英語英文学研究所 紀要(49)	泉　順子	pp.43-67
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
Of Human BondageにおけるMildred Rogersの悲劇	単著	2025年1月	東北学院大学英語英文学論集(108)	泉　順子	pp.9-19
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年11月～	絵本学会 会員
2024年10月～2024年10月	英語圏の短篇小説を読む 講師
2024年10月～	日本モーム協会 会員

2024年4月～2024年4月	『ヒーロー＆ヒロインが5分で分かる！マンガ人物大百科 ⑤ビジネス・政治』助言・指導
2024年4月～2026年3月	日本英文学会 東北支部 大会準備委員
2023年10月～	日本英文学会　東北支部 会員
2019年8月～2025年3月	ASLE-Japan / 文学・環境学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	文学部　英文学科	職名	教授	氏名	植松　靖夫	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	文学部　英文学科	職名	教授	氏名	大石　正幸	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業内容に興味を持たせると同時に，学生の自発的な学習を促すための工夫	2020年4月～	学修低下の著しい学生に理解力の涵養のため，理解が進むことを実感できる指導をおこなっている．問題設定と解を自分でおこなわせ，さらに，茫漠とした解を文字化することを通して理解の整理を促している．
授業内容の理解を促進するための工夫	2020年4月～	毎回の授業の冒頭から半分ほどまでを，復習に当て，前回の授業の概略を述べ，授業終了時には次回のための下準備を伝える．
論文作成および研究の指導	2020年4月～	大学院において，論文作成と研究遂行に必須の基礎的事項の指導を細かくおこなっている．
授業内容の理解を定着させるための授業以外の時間を利用した工夫	2020年4月～	授業とは別の時間を（オフィスアワー等を利用し）随時受け付け，学生個人の興味と習熟に沿った始動をしている．
授業内容の組み立てに関する工夫	2020年4月～	問題設定と判断材料，論理的帰結を常時意識させるようにし，項目中心ではなく大きな議論の枠組みで感上げることを意識させている．
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2004年～	日本英語学会

1983年～	日本英語学会 会員
1982年～	日本言語学会 (The Linguistic Society of Japan) 会員
1981年～	Generative Linguistics in the Old World (GLOW) 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	文学部　英文学科	職名	教授	氏名	豊島　孝之	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
反転授業	2022年10月～	大規模講義科目において、予習としてオン・デマンド講義ビデオを視聴させ、教室講義では再度詳説・追加事例を加えて授業を展開している。
学生の習熟度を見極めながら授業を行っている。	2018年～	必修、専門、選択などの科目の性質に応じて、授業形態、学生の興味・習熟度に応じて、授業の進度、説明、練習の分量・方式を試している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
オン・デマンド講義ビデオ	2020年4月～	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
序論：生成文法における経済性『極小主義における説明理論の挑戦 ー- 最適最小性が導く併合とコピー演算 ー-』	共著	2024年12月	開拓社	石井透, 大宗純, 北田伸一, 小町将之, 後藤亘, 杉本侑嗣, 刺田昌信, 豊島孝之, 中島崇法, 林愼将, Andreas Blümel, 宗像孝	pp.2-39
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
生成文法における経済性指針	単独	2024年11月	日本言語学会 第169回大会(札幌)	宗像孝, 石井透, 後藤亘, 豊島孝之	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)(一般)	2021年度～2023年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2024年6月～2024年8月	Promotion & Tenure Committee: University of Arizona, College of Social & Behavioral Sciences, Department of Linguistics
2018年7月～	日本言語学会 会員
1994年1月～	Linguistic Society of America 会員
1990年11月～	日本英語学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動
英語英文学研究所所長 グループ主任 研究環境改善推進委員会委員 AO委員会委員 大学案内編集委員会委員 文学部入試管理委員会委員

2024年度

所属	文学部　英文学科	職名	教授	氏名	那須川　訓也	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
論文作成，および研究発表の指導	2024年4月1日～	今年度は、論文作成および研究発表の指導に重点を置いた教育活動を実施した。具体的には、論文の構成や執筆技法の指導、発表スキルの向上を目的とした機械を設けた。これにより、学生の研究遂行能力の向上が期待された。今後も効果的な指導方法を模索していく。
授業内容全体の組み立てに関する工夫	2024年4月1日～	今年度は、授業内容全体の組み立てを工夫し、効果的な教育活動を実施した。具体的には、学習の流れを整理し、段階的な理解を促すカリキュラムを設計した。これにより、学生の学習効率と理解度の向上が期待された。今後もより良い授業設計を目指して改善を続ける。
授業内容の理解を促進するための工夫	2024年4月1日～	今年度は、授業内容の理解を促進するための工夫を取り入れた教育活動を実施した。具体的には、対話型授業や補助教材の活用、学習の振り返りの機会を設けた。これにより、学生の理解を深め、学習効果の向上を図った。今後もより効果的な学習支援の方法を模索していく。
授業内容への関心を高めるとともに、学生の自主的な学習を促す工夫	2024年4月1日～	今年度は、授業内容への関心を高め、学生の自主的な学習を促すための取り組みを実施した。具体的には、興味を引く教材の活用や、学生が主体的に学べる課題設定を行った。これにより、学習意欲の向上と知識の定着が期待された。今後も効果的な学習支援の方法を探求していく。
授業内容の理解を深め、定着を促すための授業外学習の工夫	2024年4月1日～	今年度は、授業時間外の学習を促進し、授業内容の理解を深める工夫を実践した。具体的には、オンライン補助教材の提供、学習記録の導入、学生同士のディスカッションの機会を設けた。これにより、学習の継続性を高め、知識の定着を図った。今後も効果的な学習支援の方法を模索していく。
2．作成した教科書、教材、参考書		
Oishi, M. & K.Nasukawa. 2024. Introduction to English Linguistics. Llun Press.	2024年4月	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	① 授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切にし、学生からのさまざまな相談に応じる。 ②「音韻論II」の授業用ハンドアウトを改善する。 ③「英語学演習I・II」の授業用ハンドアウトを改善する。 ④「社会言語学I」の授業用ハンドアウトを改善する。
今年度の進捗状況	上記目標①については、授業評価アンケートで好評価を得ることができた。 上記目標②③④については、「音韻論II」、「英語学演習I・II」、「社会言語学I」それぞれの授業用ハンドアウトを改善することで、より分かりやすい授業を展開することができた。
来年度の進捗目標	① 今年度に引き続き、授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切にし、学生からのさまざまな相談に応じる。 ②「音韻論I」の授業用ハンドアウトを改善する。 ③「English Phonetics I・II」の授業用ハンドアウトを改善する。 ④「社会言語学II」の授業用ハンドアウトを改善する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
『生成音韻論の歴史と展望』特別企画　座談会「音韻論はどこへゆくのか」『生成音韻論の歴史と展望 ― 田中伸一教授還暦記念ハンドブック ―』	共著	2025年3月	開拓社	田中 伸一，那須川 訓也，クレメンス・ポッペ，米山 聖子，平山 真奈美，橋本 大樹，渡部 直也，黄 竹佑	pp.361-414

第9章　統率音韻論とエレメント理論『生成音韻論の歴史と展望　― 田中伸一教授還暦記念ハンドブック ―』	共著	2025年3月	開拓社	那須川訓也	pp.202-228
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
音韻論における非対称構造と音声的外在化－伝統的音韻構造とPfPの音韻構造の比較－	単著	2024年6月	関西言語学会, KLS Selected Papers, 6	那須川訓也	pp.95-108
音韻構造とモーラ	単著	2024年4月	開拓社,『音韻研究』(27)	那須川訓也	pp.61-68
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
Phonological insights into syllabic consonants	単独	2025年2月	The 17th Workshop on Phonological Externalization of Morphosyntactic Structure: Theory, Typology and History (PHEX17)(Tokyo Woman's Christian University, Tokyo)	Nasukawa, Kuniya	
Towards understanding the vocalic system of seediq	単独	2024年12月	The Second Meeting of Grant-in-Aid for Scientific Research (S) by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology of the Japanese government (grant number 19H05589) 2024(Chukyo University, Nagoya)	Nasukawa, Kuniya	
語末子音の属する音節位置: 語末子音はコーダではない	単独	2024年12月	国立障害者リハビリテーションセンター研究所高次脳機能障害研究室　Brain & Langauge 研究会 (Zoom meeting)	那須川訓也	
A comparative study of traditional syllable structures and PfP phonological structures	単独	2024年9月	The 16th Workshop on Phonological Externalization of Morphosyntactic Structure: Theory, Typology and History (PHEX16)(Tohoku Gakuin University, Sendai, Japan)	Nasukawa, Kuniya	
The phonological representation of the empathetic utterance-final particle -ne in Japanese	共同	2024年9月	The 30th AMLaP (Architectures and Mechanisms for Language Processing)(University of Edinburgh, Edinburgh, Scotland)	Nasukawa, Kuniya, Ge Song & Sachiko Kiyama	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	① 進化言語学の枠組みで、非時系列音韻（Precedence-free Phonology）をさらに発展させ、音韻構造構築過程について探求する。 ② 今年度に引き続き，様々な音韻表示理論を比較し、分節内構造と韻律構造の相関関係について探究する。 ともに、来年度も国内外の機関誌や学会で、今年度の研究成果をさらに発展させたものを報告できるように努める。
今年度の進捗状況	上記目標①については、その研究成果を国内外の機関誌や学会で発表した（「研究活動」を参照）。 上記目標②についても、その研究成果を国内外の機関誌や学会で発表した（「研究活動」を参照）。 補足：　東北学院大学2024年度研究功績等賞（2025年1月受賞）。

来年度の進捗目標	① 今年度の研究成果をもとに、非時系列音韻（Precedence-free Phonology）をさらに発展させ、音韻構造構築過程について探求する。 ② 今年度に引き続き，様々な音韻表示理論を比較し、分節内構造と韻律構造の相関関係について探究する。 ③ 新たに、オーストロネシア語族の危機言語である太魯閣語（Truku）の音韻現象の調査、および分析を行う。 いぞれの研究に関しても、国内外の機関誌や学会で、今年度の研究成果をさらに発展させたものを報告できるように努める。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(A)	2024年度～2027年度	共同(研究分担者)	現在する言語の大多数が消滅の危機に瀕しており、言語と文化の保存・復興は喫緊の課題である。この問題を解決するために、本研究では、「生理指標付き自然談話コーパス」と「AI対話システム」を活用した「危機言語の擬似動態保存」という斬新な方法を提案し実施する。また、「生理指標付き自然談話コーパス」と「行動実験・視線計測実験・脳機能計測実験」を駆使して、「少数民族の言語の脳内処理過程の解明」に取り組む。
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2024年度～2027年度	共同(研究分担者)	アジア言語では、文末に話し手の命題に対する態度を表す標識が豊富に存在し、言語使用者の感情表現・伝達上の要となっている。文末詞を介した感情伝達は、典型的には音声言語で実現され、頻出する文末詞は2歳ごろから自発的に発話されるようになる。しかし、社会的相互作用に不全感を抱える人々においては、文末詞の運用が非典型的であることが報告されている。本課題は、共感的文末詞といわれる日本語「ね」と中国語「ba」に主眼を置き、それらを産出する際の音韻的特性を明らかにし、そこに付与された感情を認知する神経機序とその個人差を解明することを目的とする。
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2022年度～2026年度	共同(研究代表者)	一般言語学における生成文法理論の見地から、語（形態素）を構成する音韻表示がどのように構築され、それがどのように音声的に具現化されるかを、理論的かつ実証的に明らかにすることを目的とする。従来、言語機能の統語部門は形態・統語表示のみを構築する演算装置であると考えられてきた。これに対し本研究では、音韻表示も統語部門で構築され、統語表示の外在化過程と同じ仕組みで、音韻構造も音声的に具現化（例 線形化、強勢付与、分節音弱化）されるということを理論的に明らかにすると同時に、諸言語の音韻現象を参照・分析し、考案モデルの妥当性を言語類型論的、言語獲得論的、通時的角度からも検討する。
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2022年度～2024年度	共同(研究分担者)	生成文法のミニマリスト・プログラムに基づき、統語（計算）部門で作られる構造（集合）が、どのように音声に写像されるかを、理論的・実証的に明らかにすることが目的である。線型順序のない統語構造に基づいて強勢と韻律が決定され、その特徴によって語順や「移動」などの「統語的」特徴が決定されるという新しいモデル Structure-Phonology-Order (SPO) を提案し、統語と音韻のインタフェイス（外在化）を理論的に明らかにするとともに、英語史コーパスおよび世界の言語の包括的なデータベースを検証することによって、このモデルが歴史的にも言語類型論的にも正しいことを実証する。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年4月～2025年3月	日本音韻論学会 副会長
2018年4月～	日本言語学会 評議員
2017年11月～	Generative Linguistics in the Old World（GLOW） 査読委員

2017年7月～2024年12月	文部科省委託 小学校英語教科化に向けた専門性向上のための講習の開発・実施事業「平成30年度東北学院大学小学校教員のための中学英語免許取得認定講習」(英語音声の仕組み) 講師
2016年1月～	John Benjamins 査読委員
2015年12月～	Glossa 査読委員
2015年5月～	Lingua 査読委員
2013年9月～	Journal of Linguistics 査読委員
2012年11月～	Manchester Phonology Meeting (mfm) 査読委員
2012年11月～	Manchester Phonology Meeting (mfm) 諮問委員会委員
2012年10月～	Old World Conference in Phonology(OCP) 査読委員
2010年10月～	The Linguistic Review 査読委員
2008年10月～	Congreso Internacional Phonetics and Phonology in Iberia (PaPI) 科学評議員
2005年9月～	Restrictive Phonology Research Group (RPRG) 理事
2005年～	Restrictive Phonology Research Group (RPRG) 会員
1998年～	Generative Linguistics in the Old World (GLOW) 会員
1997年～	日本音韻論学会 会員
1993年～	日本言語学会 会員
1993年～	Linguistic Association of Great Britain (LAGB) 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2022年 4月～2026年 3月　グループ主任(2022年度英文学科入学生1G)
2024年 4月～2028年 3月　グループ主任(2022年度英文学科入学生2G)
2024年 4月～　東北学院大学学術振興会　機関誌部会長
2023年 4月～　文学部教員資格審査委員
他

2024年度

所属	文学部　英文学科	職名	教授	氏名	バックレイ　フィリップ	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
論文作成，および，研究発表の指導	2024年4月	
授業内容の理解を促進するための工夫	2024年4月	
授業の進め方，および，授業内容をよく理解させるための工夫	2024年4月	
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
大学模擬授業の講師を務めた	2024年10月3日	

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2008年10月～	Congreso Internacional Phonetics and Phonology in Iberia (PaPI) 科学評議員
2005年9月～	Restrictive Phonology Research Group (RPRG) 理事

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2024年度

所属	文学部　英文学科	職名	教授	氏名	福士　航	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
双方向性を持った授業	2021年4月～	「イギリス演劇」や「文学批評」の授業において、各回の終わりにLMSを利用して学生からのレスポンスを記入してもらい、次回授業の最初に、そのコメントをいくつか紹介しながら意見を返すことで、双方向性のある授業を行っている。
学生が主体的に参加する授業	2021年4月～	「英米文学演習」において、訳読や意見の発表といった個人的な発表だけでなく、グループディスカッションを行い、そのグループでの意見を全体に発表させるなどし、学生が主体的に授業に参加することを促している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
出張講義講師	2024年6月27日	あさか開成高校にて「ロミオとジュリエットの恋の落ち方」という出張講義をおこなった

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2024年度

所属	文学部　英文学科	職名	教授	氏名	吉村　富美子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
zigsaw法による共同学習の推進<英語コミュニケーション演習Ⅰ～4＞	2021年4月～	学生に英文を読ませるときは、学生同士が助け合いながら学習できるようにzigsaw法を取り入れている。専門家グループで協力して担当部分の準備を行わせ、それぞれがホームグループに戻ったときに担当部分を音読し説明させている。このように分担を明確にし、学生通しの助け合いを推進するように工夫している。
プロジェクトの学生による振り返りの実施 ＜Academic Writing Ⅲ・Ⅳ＞ ＜英語コミュニケーション演習Ⅰ～Ⅳ＞	2020年4月～	学生に行わせたプロジェクトについては、詳細な振り返りシートを作成し、それに記入させることで、自分の活動やライティングプロセスの振り返りを行わせ、どのくらい努力をしたか、自分の得意・不得意は何か等自分の特徴をを確認させた。
教員独自の学生による授業評価の実施 ＜英語コミュニケーション演習Ⅰ～Ⅳ＞	2020年4月～	学部で実施する学生による授業アンケートに加えて，授業の効果を測定するために教員自身が考案したアンケートを実施し、授業改善に役立てている。
授業中に学生による相互評価(peer evaluation)などの活動を取り入れた ＜Academic Writing Ⅲ・Ⅳ＞	2020年4月～	学生同士が書いた英文の途中原稿を読み合って，お互い批評をしたり補助したりする相互評価を授業中に取り入れている。
個別指導の実施 ＜Academic Writing Ⅲ・Ⅳ＞	2020年4月～	さまざまなジャンルの英文ライティング課題をいくつかのプロセスを分けて、一つひとつの課題を丁寧に行うことで、最終的にはまとまった英文を書けるように指導している。学生には各学期3つのプロジェクトを課したが、学生の書いたfinal draft一つひとつは分析的評価表を用いて評価しコメントも書いて学生に返却して質問を受け付ける等の個別指導を行っている。
学生によるプロジェクト実施 ＜英語コミュニケーション演習Ⅰ～Ⅳ＞	2020年4月～	学生に各自興味のあるトピックについてonline情報を探して読み、その内容を自分の言葉で言い換えたり要約したりして発表原稿を作成し、presentation sessionsでその内容を英語で説明してもらった。Presentation sessionsでは、司会 (chair)、発表の評価 (evaluation)、時間計測 (timer) 等の会議に必要な役割も英語で行わせている。さらに、話し言葉を書き言葉に再度書き換えさせ、引用のルールに従ってレポートを作成させた。学生の活動が中心だが、教員は工程表作成、実施確認、途中原稿へのフィードバック等を行いプロジェクトが円滑に行われるようにガイドした。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
東北学院中学校高等学校授業づくり研修会講師	2024年12月16日	東北学院中学校高等学校の2つの授業を見せていただき講評を行った。また、この研修会のテーマである「到達度に差のある学級内で全員が学べる授業づくり」というタイトルで講義も行った。
令和6年度英語科研修会ー小・中・高等学校の系統性を踏まえた「話すこと」の指導と評価ー指導、助言、講評	2024年8月9日	令和6年度の英語科研修会で指導、助言、講評を行った。
教員採用試験対策講座専門教養コース（英語）リスニング力の育成法、ライティング力の育成法	2024年6月18日～2024年7月2日	教員採用試験対策講座専門教養コース（英語）の中のリスニング力の育成法、ライティング力の育成法の2つの講座を担当した。

現在の課題・目標	・アカデミックイングリッシュを用いた読み書き指導の充実を目指す。 ・講義科目において、講義内容を自分事と思ってもらえるようなさまざまな活動を学生に行わせたい。
今年度の進捗状況	・英語コミュニケーション演習においては、アカデミックイングリッシュを用いた英字新聞を読み、それをわかりやすい話し言葉の英語に置き換えてプレゼンテーションを行わせたが、学生たちのほとんどの発表は、満足のいく出来であった。Academic Writing 3,4においては、学生たちの書いた英文をChatGPTを用いて大学生にふさわしい表現に言い換えた英文と比較させ、アカデミックイングリッシュの表現と自分の書いた英文との距離を感じてもらった。 ・学生たちは、講義内容に関連するさまざまな活動を行ったり他の学生と意見交換したり宿題に誠実に取り組んだりしていた。

来年度の進捗目標	・ChatGPT, DeepL, GrammarlyなどのAIを用いた機器を適切に使わせながら英文ライティング指導をどのように行うかを探求する。 ・ITやAIに置き換えられない能力を授業を通して学生に身につけさせたい ・英語力の基礎としてのリスニングと音読指導の強化を行う

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
What do we mean by ″paraphrasing″? Dividing a reading-to-write task into distinct stages and recontextualizing appropriate paraphrasing types at the relevant stages	単著	2025年3月	Institute for Research in English Languaeg and Literature, Journal of Institute for Research in English Language and Literature, 49	Fumiko Yoshimura	pp.69-93
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
Effects of nominalization instruction on EFL academic reading	単著	2025年3月	The Research Association, Tohoku Gakuin University, Tohoku Gakuin University Review: Essays and Studies in English Language and Literature, 108	Effects of nominalization instruction on EFL academic reading	pp.
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	英語の引用文における適切な言い換えをどのように指導すべきか
今年度の進捗状況	今年度は、英語の引用文における適切な言い換えをどのように指導すべきかについて、「言い換え」を分類して引用文執筆の指導の中に位置づけることを提案する学術論文を発表した。
来年度の進捗目標	来年度は、ChatGPT, DeepL, Grammarly等のAIを用いた機器を英文ライティング指導に生かすための方法について研究を行いたい。また、ITやAI使用がますます進む世の中において、生徒や学生たちに英語力そのものをつけさせるための指導の在り方についても検討したい。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2018年5月～	全国語学教育学会 会員
2010年3月～	TESOL International Association 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

教職課程センター委員、図書委員、学生委員

2024年度

所属	文学部　英文学科	職名	准教授	氏名	井出　達郎	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
自らの問いと向き合う力の養成	2023年4月～	こちらから問題を与えるだけでなく，自らで問題を発見し，それに向き合う授業づくりを目指した。「演習」では，こちらから基本となる情報を伝えるほかは，テキストがどのような問いを含み，またそれを読む自分たちのどのような問いと関係しているかについて，自ら考える時間を設けた。「アメリカ小説」「アメリカ演劇」の授業では，各回に自らの考察を書てもらい，その次の授業でよいと思えるものを共有した。
学生同士における学びの促進	2023年4月～	教員と学生の間だけでなく，学生同士の間でも双方向の学習が行われるような授業づくりを試みた。「英語II」では，全員がプレゼンテーションを行い，聞いている側もその感想を英語で述べるという試みを行った。「演習」では，担当者がプレゼンテーションを行い，それを受けて学生同士で少人数のグループをつくり，それぞれの意見をまとめあげてミニ・プレゼンテーションを行った。「アメリカ小説」「アメリカ演劇」の授業では，学生からのコメントを授業のはじめに共有した。
自らの問いと向き合う力の養成	2022年4月～	こちらから問題を与えるだけでなく，自らで問題を発見し，それに向き合う授業づくりを目指した。「演習」では，こちらから基本となる情報を伝えるほかは，テキストがどのような問いを含み，またそれを読む自分たちのどのような問いと関係しているかについて，自ら考える時間を設けた。「アメリカ小説」「アメリカ演劇」「文学」の授業では，各回に自らの考察を書てもらい，その次の授業でよいと思えるものを共有した。
学生同士における学びの促進	2022年4月～	教員と学生の間だけでなく，学生同士の間でも双方向の学習が行われるような授業づくりを試みた。「英語II」では，全員がプレゼンテーションを行い，聞いている側もその感想を英語で述べるという試みを行った。「演習」では，担当者がプレゼンテーションを行い，それを受けて学生同士で少人数のグループをつくり，それぞれの意見をまとめあげてミニ・プレゼンテーションを行った。「アメリカ小説」「アメリカ演劇」「文学」の授業では，学生からのコメントを授業のはじめに共有した。
学生との双方向の授業づくり	2022年4月～	学生と双方向の関係で行われる授業づくりに努めた。「英米文学概説」「英語II」「文学」の授業では，毎回まとめと感想を含んだ小レポートをmanabaで提出してもらい，その次の授業でこちらのコメントを付すかたちでフィードバックを行った。「演習」の授業では，未翻訳のテクストを分担して訳したものを提出してもらい，こちらで添削を行い，ポイントを解説した。
自らの問いと向き合う力の養成	2021年4月～	こちらから問題を与えるだけでなく，自らで問題を発見し，それに向き合う授業づくりを目指した。「演習」では，こちらから基本となる情報を伝えるほかは，テキストがどのような問いを含み，またそれを読む自分たちのどのような問いと関係しているかについて，自ら考える時間を設けた。「アメリカ小説」および「アメリカ演劇」では，各回に自らの考察を書てもらい，それに関連する文献なども自分で見つけながら，最終的に自分独自のエッセイを完成させるようにした。
学生同士における学びの促進	2021年4月～	教員と学生の間だけでなく，学生同士の間でも双方向の学習が行われるような授業づくりを試みた。「英語II」では，全員がプレゼンテーションを行い，聞いている側もその感想を英語で述べるという試みを行った。「演習」では，担当者がプレゼンテーションを行い，それを受けて学生同士で少人数のグループをつくり，それぞれの意見をまとめあげてミニ・プレゼンテーションを行った。「アメリカ小説」および「アメリカ演劇」の授業では，学生からのコメントを授業のはじめに共有した。
自らの問いと向きあう力の育成	2020年～	こちらから問題を与えるだけでなく，自らで問題を発見し，それに向き合う授業づくりを目指した。「演習」では，こちらから基本となる情報を伝えるほかは，テキストがどのような問いを含み，またそれを読む自分たちのどのような問いと関係しているかについて，自ら考える時間を設けた。「Academic Writing」では，エッセイとして書く内容を自分たちで決定させ，それに関連する文献なども自分で見つけながら，最終的に自分独自のエッセイを完成させるようにした。

学生同士による学びの促進	2020年～	教員と学生の間だけでなく，学生同士の間でも双方向の学習が行われるような授業づくりを試みた。「英語II」では，全員が英語でプレゼンテーションを行い，聞いている側もその感想を英語で述べるという試みを行った。「演習」では，担当者が英語でプレゼンテーションを行い，それを受けて学生同士で少人数のグループをつくり，それぞれの意見をまとめあげてミニ・プレゼンテーションを行った。
学生との双方向の授業づくり	2020年～	学生と双方向の関係で行われる授業づくりに努めた。オンデマンド形式の授業では毎回まとめと感想を含んだ小レポートを出してもらい，その次の授業でこちらのコメントを付すかたちでフィードバックを行った。 「Academic Writing」の授業では，学習支援システムmanabaで書いたものを提出してもらい，こちらからの添削をコメントをつけて返却した。

2．作成した教科書、教材、参考書

3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等

4．その他教育活動上特記すべき事項

現在の課題・目標	・自分の言葉で考え、発表する力を養成する。 ・英語学修において、インプットだけでなくアウトプットの力も養成する。
今年度の進捗状況	・学生が生成AIの使用することを前提とした授業案を実施することができた。 ・生成AIによって自身の英語を添削させる機会と、自分の力のみでプレゼンテーションをする機会を分け、現代の環境における英語学修の方法を試行錯誤することができた。
来年度の進捗目標	・生成AIを利用しながら、同時に自分の言葉で考え、発表するための適切なやり方を考え、実践していく。 ・現代において文学を教える意義について考察し、学生に伝えていく。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
『アナイス・ニン文学への視点――小説と日記、作家と創意』	共著	2024年12月	三修社	山本豊子編著	pp.230-245
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
Vulnerability in American Literature	共同	2024年10月	第63回日本アメリカ文学会全国大会(中京大学)	講演者：Jennifer Travis (St. John’s University)、司会：生田和也（長崎県立大学）、討論者：井出達郎（東北学院大学）、討論者：小宮山真美子（長野工業高等専門学校）、討論者：髙橋愛（大阪公立大学）	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	・2024年度より開始したアメリカ人作家F．スコット・フィッツジェラルドに関する科研費のプロジェクトを進める。 ・学生の適切なリーディング教材となりえるような現代英米作家の作品を見つけ、翻訳する。
今年度の進捗状況	・主に文献の再読を行い、論じるべき問題を発見し、来年度の国際学会での発表のプロポーザルが受理された。 ・ゼミにて数本の作品を翻訳することができた。

来年度の進捗目標	・すでにプロポーザルが受理されている国際学会の発表の準備を進めるとともに、論文の投稿を行う。 ・引き続き現代の英米作家の動向を調査し、作品を翻訳する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2024年度～2026年度	(研究代表者)	モダニズム期のアメリカ人作家F. スコット・フィッツジェラルドの時間のモチーフを、問いとしての「始まり」と「応答責任」という主題から再考する。フィッツジェラルド作品は、行為や出来事に「始まり」を措定する態度を根源的に問い直し、その行為や出来事に対し、明確な理由を持ち得ないまま向き合う態度を要請する。そこでは、作中に登場する“responsibility”という感覚が、明確な理由から押し付けられる「責任」ではなく、問いから生じる「応答」としての側面を帯びる。この「応答責任」と呼ぶべきものを現代の責任概念の問い直しと共鳴させつつ、現代において読まれるべき新たなフィッツジェラルド像を立ち上げる。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2020年4月～	日本 F. スコット・フィッツジェラルド協会 編集委員会
2019年4月～	日本ロレンス協会 編集委員会
2017年4月～	日本F.スコット・フィッツジェラルド協会 大会・研究会準備委員会
2014年4月～	日本アメリカ文学会
2013年4月～	日本英文学会
2012年4月～	日本アメリカ文学会

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	・大学関係ではない一般の人々の場に文学を広めるための活動について考察する。		
今年度の進捗状況	・例年の英文学科の公開講座を「高校生のための英文学科公開講義」と題し、学科にて高校生向けの講座を企画した。		
来年度の進捗目標	・学科での活動以外にも個人の教員としてできる活動を探っていく。		

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

・学長室副室長

2024年度

所属	文学部　英文学科	職名	准教授	氏名	大沼　仁美	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ICT技術を取り入れた授業	2024年4月1日～	専門的な内容を扱った入門的文献の読解力養成を目的とした授業において、グループ発表の資料作成時、グループ内での協力を促すため、教学系システム（manaba）でグループごとの掲示板を設けオンラインでもコミュニケーションが取れるようにした。
能動的な学習につながる教授法	2024年4月1日～	読解力養成の授業において、グループで資料作成・口頭発表・質疑応答をする場を設け、学生間での理解促進につながる活動を取り入れた。
授業の内容を理解・定着させる教授法	2024年4月1日～	教員による説明では、口頭説明と視聴覚資料を用いて理解を促す工夫をした。また、説明の後に実践的練習や演習を通して理解した知識を使う場を設け、理解度の確認と知識の定着を促進した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2022年4月～	日本英語学会 評議員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2024年度

所属	文学部　英文学科	職名	准教授	氏名	森山　盛吉	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	文学部　総合人文学科	職名	教授	氏名	川島　堅二	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2020年9月～	日本脱カルト協会顧問 委員
2016年9月～	日本基督教学会
2005年4月～	日本宗教学会

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	文学部　総合人文学科	職名	教授	氏名	木村　純二	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Fūryū : Japanese Virtue United with Natural Beauty『Alternative Virtues: Japanese Perspectives on Christian and Confucian Traditions』	共著	2024年12月	Routledge	Junji, Kimura	pp.11-27
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
歌語としての「みたま」（七）	単著	2025年3月	東北学院大学宗教音楽研究所、『東北学院大学宗教音楽研究所紀要』(29)	木村純二	pp.34-40
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
主題別討議「文化・思想としての天皇」	共著	2025年3月	日本倫理学会, 倫理学年報, 74	木村純二、冨樫進、桐原健真、嘉戸一将	pp.75-86
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
主題別討議「文化・思想としての天皇」	共同	2024年9月	日本倫理学会第75回大会(京都大学)	木村純二、冨樫進、桐原健真、嘉戸一将	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2018年7月～	日本基督教学会 会員
2008年11月～	日本思想史学会 会員

2004年4月～	東北哲学会 会員
1997年4月～	日本倫理学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	文学部　総合人文学科	職名	教授	氏名	椎名　雄一郎	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
グループワーク主体の授業運営と、Kahoot!等の導入	2024年4月1日～2025年3月31日	これまでのアクティブラーニングをさらに進め、授業の運営をグループワーク主体とした授業計画を練り実践した。全体は、前回授業のフィードバック、グループ・メンバーの確認と活動、教員による動画を用いた説明と、グループでKahoot!に回答していく内容である。授業で扱う内容は変えていないが、学生満足度がおおきく上昇した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
ヨーロッパ音楽史における教科書と動画リストの作成	2024年4月1日～2025年3月31日	これまで行っていた授業内容を見直して、教科書と動画再生リストを関連付けて、新たなテキストを作成した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	「聖書を学ぶ」等のキリスト教学系の大人数の授業から、課題探究演習のような15人程度の授業までを受け持ち、それぞれの授業タイプにおいて、どのように学生の授業理解度、満足度を上げるかを課題とした。
今年度の進捗状況	大人数の授業では、毎回ランダムに席替えをして、新しいグループで自己紹介、そしてグループワークを中心とした授業展開をおこなった。結果として例年の試験結果よりも高い平均点となり、また授業評価の数値も上げることができた。また授業環境も一切、私語をする学生もおらず、良好な環境の中で、授業ができ、また授業環境についての学生からの意見も一切出なかった。
来年度の進捗目標	大人数の授業で得られた授業運営方法を少人数の授業においても、おこなっていきたい。具体的には50人までの授業では、授業に熱心な学生もいる一方、パソコンで関係ない画面を開けている学生、またテキストを配信しても一回も開いていない学生が数人見受けられる。これらの学生もグループワーク主体の授業となれば、もう少し授業に加わることができるのではないかと考える。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	現在、『バッハのオルガン作品集第1巻』、『バッハとオルガン』の2冊の書籍の出版を進めている。またこれらの書籍を執筆する上で、バッハのオルガン作品の中で、どのようにバッハが弟子たちに教育を施していたかをさらに研究していく。演奏研究については毎年テーマを決めておこなっている。
今年度の進捗状況	今年度前半は演奏研究としてD.ブクステフーデのオルガン作品に焦点をあてて、夏にはドイツのハンブルク、ノルデンで合計3枚のCD録音をおこなった。また歴史的オルガンを使用して、これらのオルガンの新たな知見を得ることができた。書籍の進捗状況では今年度後半に『バッハとオルガン』の全章を書き終えることができた。
来年度の進捗目標	現在の課題である2冊の書籍の刊行を予定している。また昨年度録音したブクステフーデの作品集のCD2枚組を実際に使用したレジストレーションを紹介しつつ、今後の研究の一助とする。 またバッハの弟子たちの教育に関する書籍が今年度新刊として出版されているが、鍵盤楽器の中で、オルガンに関する研究は進んでいないため、オルガン教育の視点で、研究し論文を執筆する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2022年4月～	横浜みなとみらいホールオルガン委員会 専門委員
2022年4月～	日本基督教団讃美歌委員会 実務委員
2022年4月～	秋田アトリオンホールオルガン講座特別講師 講師
2021年5月～	日本オルガニスト協会 副会長
2021年3月～	日本音楽学会 会員
2013年9月～2024年4月	ピティナ（一般社団法人全日本ピアノ指導者協会） 会員
1994年5月～	日本オルガン研究会 会員
1993年5月～	日本オルガニスト協会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
クリスマスコンサート ～相模中央パイプオルガン奉献20周年記念コンサート～	日本バプテスト相模中央教会	2025年1月	バッハを中心としたプログラム
クリスマスコンサート「パイプオルガンで楽しむクリスマスの音楽」	日本基督教団筑波学園教会	2024年12月	北ドイツオルガン楽派の作品を中心としたプログラム
オルガンリサイタル「バッハへのオマージュ」	東京カテドラル関口教会	2024年11月	バッハ以降のオルガン音楽の流れをブラームス『11のコラール前奏曲」を中心に構成した。
パイプオルガンコンサート	日本キリスト教会仙台黒松教会	2024年11月	
パイプオルガンリサイタル「バッハへの道」	盛岡市民文化ホール小ホール	2024年11月	ブクステフーデ、バッハを中心としたプログラム
オルガンコンサート「コラールの楽しみ」	日本基督教団番町教会	2024年10月	コラールを元としたオルガン作品

現在の課題・目標	演奏研究については毎年テーマを決めておこなっている。そして年1回自主リサイタルをおこない、その成果について、発表している。
今年度の進捗状況	今年度は夏にブクステフーデの作品のCD録音を学術研究と合わせて行ったが、それ以外に11月にブラームスの《11のコラール前奏曲集』全曲を中心として「バッハへのオマージュ」と題して、自主リサイタルを東京カテドラル関口教会でおこなった。バッハがどのように後世の作曲家に影響を与えたかを聴き取ることができるプログラムとした。
来年度の進捗目標	2024年度に録音したブクステフーデ作品のCDの発表と合わせて、ブクステフーデ作品による自主リサイタルを東京カテドラル関口教会でおこなう。

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動
宗教音楽研究所のこれまでの事業を精査し、より研究組織としての研究所の位置づけを明確化する。

2024年度

所属	文学部　総合人文学科	職名	教授	氏名	原田　浩司	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
全面的な対面授業の再開	2023年4月～	新型コロナの感染症に十分気を付けながら、対面講義を全面的に再開した。
講義資料のDX化	2022年4月～	コロナ禍も3年目に入り、リモートにも直ちに対応できるよう、教材資料をすべてパワーポイントで作成した資料に切り替えた。配布資料もすべてデジタル化し、各自が端末からダウンロードして閲覧、印刷できるようにした。
ペンネームでのアンケート	2015年4月～	講義の終盤で全受講者にペンネームを用いて質問、意見、感想等を自由に書いて提出してもらい、次回の講義でそれらを紹介する。そこでの質問等に答えながら前回の振り返りを行い、次のテーマへ進行する、という取り組みを実践。
シラバスに即した講義	2011年4月～	各講義の主題に即した基礎知識を伝授すると共に、特に1年次の必修科目である聖書を学ぶ（前期）、キリスト教の歴史と思想（後期）では、他の学際領域と関連付けつつ、広い教養を身に付けられるよう取り組んだ。
プロジェクターの活用	2011年4月～	適宜プロジェクターを使用し、講義の内容に関する画像等の教材資料を用い、視聴覚的に受講生の理解を促すよう取り組んだ。
2．作成した教科書、教材、参考書		
パワーポイントを利用した教材	2011年4月～	聖書を学ぶ・キリスト教の歴史と思想（1年次）、キリスト教学A・B・C・D（3年次選択必修科目）、教理史、キリスト教史（近代）、死生学（学科4年次選択科目）といった担当講義では、パワーポイントによる講義を実施。学生には各所で空欄に下線部を引いたプリントを配布し、重要箇所やキーワードを適宜記入させる工夫をした。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
大学礼拝における説教者	2011年4月～	大学礼拝において説教を担当し、聖書をとおしたキリスト教教育を担当。
スプリング・カレッジ、サマー・カレッジでの学生指導	2011年4月～	スプリング・カレッジ、サマー・カレッジにおいて、礼拝や運営の役割を担うと共に、参加学生たちの指導にあたる。
聖書研究会	2011年4月～2025年1月	講義期間中は、開催曜日を定め、昼休みの時間に聖書研究会（テーマは「キリスト教信仰の基礎」）を実施し、学生たちの指導にあたる。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					

H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2011年6月～		日本基督教学会 会員	
2010年4月～		日本基督教団の諸教会での主日礼拝の奉仕(説教・聖礼典の執行) 講師	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	文学部　総合人文学科	職名	教授	氏名	吉田　新	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		① 大規模教室授業において、双方向型、参加型授業が可能か模索したい。 ② 学内外のフィールドワークを取り入れた授業を提供したい。 ③「人文学演習」において、卒業論文を三年次から具体的に準備できるように指導したい。 ④「新約聖書概説」の教科書作成に取り組みたい。 ⑤「キリスト教学」（「聖書を学ぶ」他）で使用する教科書の作成に取り組みたい。
今年度の進捗状況		① 大規模教室授業において、授業コメントへの返答、レスポンなどを効果的に使い、授業内で意見を集めるなど双方向型、参加型授業を積極的な試みた。学生からは好意的評価を受け、一定の成果を得ることができた。 ② 本年度は論文演習において、課外活動を行うことができ、座学だけではなく、実践的な学びを行うことができ、成果を得ることができた。 ③「人文学演習」において、三年の指導担当学生に対しては授業外で面談を定期的に行うなど、細かな指導を行うことができた。論文作成の意思を強めることができた。 ④ 引き続き「新約聖書概説」の教科書作成に努め、一定の成果を得ている。 ⑤「キリスト教学」（「聖書を学ぶ」他）で使用する教科書の作成のために、来年度以降の実現のために準備を進めており、一定の成果を得ている。
来年度の進捗目標		① 大規模教室授業において、双方向型、参加型授業が可能か模索したい。LMSを効果的に用いたい。 ② 学内外のフィールドワークを取り入れた授業を提供し、実践知を深めたい。図書館の貴重書見学、学院、資料館礼拝堂見学などを授業と連動して行う。 ③「人文学演習」において、卒業論文を三年次から具体的に準備できるように指導したい。定期的に学生との面談を行う。 ④「新約聖書概説」の教科書作成に取り組みたい。 ⑤「キリスト教学」（「聖書を学ぶ」他）で使用する教科書の作成に取り組みたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
『聖書註解 ペトロの手紙一』	単著	2024年12月	一麦出版社	吉田新	pp.1-410
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
Die Rezeptionsgeschichte des Vorbildes vom leidenden Jesus. Die christliche Martyrologie und der erste Petrusbrief	単独	2025年3月	Internationale Hochschule Liebenzell Kolloquium(ドイツ Bad Liebenzell)	吉田新	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標		① 和訳聖書翻訳史の研究　和訳聖書翻訳に関する歴史資料の分析を進め、書籍化をめざす。 ②『ペトロの第一の手紙』におけるメタファーに関する研究を続け、学術論文としてまとめる。 ③ 和訳聖書翻訳史に関するドイツ語の学術書の出版を目指す。		

今年度の進捗状況	① 和訳聖書翻訳史の書籍化のために引き続き、準備を進めている。 ② 本年度、『ペトロの第一の手紙』の註解書を刊行できたのは大きな成果である。また、ドイツで同書に関する研究発表を行った。 ③ 和訳聖書翻訳史に関するドイツ語の学術書の出版の準備を進めるため、ドイツの研究者と意見交換を行った。
来年度の進捗目標	① 和訳聖書翻訳史の研究　和訳聖書翻訳に関する歴史資料の分析を進め、書籍化をめざす。 ②『ペトロの第一の手紙』の苦難の理解に関する研究を進め、ドイツ語で論文等を発表する。 ③ 和訳聖書翻訳史に関するドイツ語の学術書の出版を目指す。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2021年9月～	日本聖書翻訳研究会 会員
2021年9月～	日本聖書翻訳研究会 書記
2017年4月～	日本基督教学会東北支部 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	文学部　総合人文学科	職名	准教授	氏名	田島　卓	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
RTTPを用いた授業の運営	2023年9月1日～	Reacting to the Past(RTTP)というロールプレイング形式のゲームを用いて、旧約聖書概説Ⅱの授業運営を行なった。
manabaの掲示板を活用した双方向学習支援	2020年9月1日～	学生の学習状況を確認し、遠隔授業で欠落しがちな学生相互のつながりの構築のために、各階の小レポートに替えて、掲示板に小レポートと同程度の文章を投稿してもらい、学生相互のやりとりを活性化した。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	①専門教育科目（「旧約聖書概説Ⅰ・Ⅱ」「旧約聖書神学Ⅰ・Ⅱ」「旧約聖書釈義Ⅰ・Ⅱ」）におけるテクストの精緻な読解技法の伝達、内容の高度化を引き続き行う。 ②「旧約聖書神学Ⅰ・Ⅱ」において、専門性を維持しながら、学生のアクティブラーニングを促す。 ③「聖書を学ぶ」「キリスト教学」において、学生同士が知的刺激を与え合う環境を促進し、ディプロマポリシーにより適合した授業展開を図る。
今年度の進捗状況	①専門教育科目（「旧約聖書概説Ⅰ・Ⅱ」「旧約聖書神学Ⅰ・Ⅱ」「旧約聖書釈義Ⅰ・Ⅱ」）におけるテクストの精緻な読解技法の伝達、内容の高度化を引き続き行う。 → 受講者の初期段階の興味・関心・知識レベルと達成目標との間のギャップが埋めきれないことがある。学習者の状況を丁寧に観察・判断する必要がある。 ②「旧約聖書神学Ⅰ・Ⅱ」において、専門性を維持しながら、学生のアクティブラーニングを促す。 → 上記と同様、とくに専門科目の最先端の知見と、受講者の既存知識との間のギャップを埋める必要がある。教授すべきスキームの選別が必要かもしれない。 ③「聖書を学ぶ」「キリスト教学」において、学生同士が知的刺激を与え合う環境を促進し、ディプロマポリシーにより適合した授業展開を図る。 → AIの登場により、アクティブラーニングの性質が変わりつつある。
来年度の進捗目標	基本的にはアクティブラーニングを主軸として授業を構成したいが、特に批判的思考力の涵養が重要と思われる。主体的に思考することを実践させるために、導入と基礎的知識の習得にはこれまでと異なったアプローチをいくつか試してみたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
神の名が置かれる場所と神の名の所有	単著	2025年3月	新教出版社, 福音と世界(2025年3月)	田島卓	pp.60-65
エゼキエルにおける神の不在と臨在	単著	2025年2月	新教出版社, 福音と世界(2025年2月)	田島卓	pp.60-65
ヨシヤの宗教改革と一神教－政治的プロパガンダとその逸脱	単著	2025年1月	新教出版社, 福音と世界(2025年1月)	田島卓	pp.60-65
カナンにおける「イスラエル」－アウトローたちの神	単著	2024年12月	新教出版社, 福音と世界(2024年12月)	田島卓	pp.60-65

申命記における一神教－貧しき者の神	単著	2024年11月	新教出版社, 福音と世界(2024年11月)	田島卓	pp.60-65
申命記における「一」－帝国主義の神？	単著	2024年10月	新教出版社, 福音と世界(2024年10月)	田島卓	pp.60-65
レビ記における隣人愛と第一戒	単著	2024年9月	新教出版社, 福音と世界(2024年9月)	田島卓	pp.60-65
出エジプトの一神教 越境する普遍性のひろがり	単著	2024年8月	新教出版社, 福音と世界(2024年8月)	田島卓	pp.60-65
一神教の問い	単著	2024年7月	新教出版社, 福音と世界(2024年7月)	田島卓	pp.56-61
アブラハムとヤコブを繋ぐもの－自らへの旅立ち	単著	2024年6月	新教出版社, 福音と世界(2024年6月)	田島卓	pp.56-61
破滅の後の救い－創世記における祝福	単著	2024年5月	新教出版社, 福音と世界(2024年5月)	田島卓	pp.50-55

E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）

G. 学会における研究発表

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	旧約聖書全体に関して、一定の見通しを与えるために、旧約各書の研究状況を広く概観し、思想的に重要な点を抽出することで、日本の旧約学に一定の貢献をなしたい。
今年度の進捗状況	『福音と世界』の連載によって、一定の見通しを構築することができている。
来年度の進捗目標	連載を引き続き執筆し、とくに知恵文書の、研究が手薄な箇所に関して、新規に研究に参加する研究者の刺激となるような論点を提示する。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2021年4月～	聖書学研究所
2018年9月～	日本基督教学会 会員
2017年6月～	日本旧約学会 会員
2011年4月～	日本宗教学会 会員
2009年4月～	日本倫理学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	文学部　総合人文学科	職名	准教授	氏名	渡邊　有美	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
教育内容・方法の工夫	2024年4月1日～2025年3月31日	Manabaの機能を利用したアクティヴ・ラーニングの授業を取り入れ、学生のコメントなどを授業内に紹介したり、能動的にかかわることができる授業とした。
2．作成した教科書、教材、参考書		
教材	2024年4月1日～2025年3月31日	授業に応じ、PPTの簡略版、またレジュメの配布、さらにその他参考資料をPDFでアップロードし提供を行った。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	「キリスト教と美術」、「ヨーロッパ文化論」などの授業のための教材（教科書：書籍）を執筆・校正中であり、2026年度秋に出版予定である。	
今年度の進捗状況	2025年度秋に向けての出版予定であったが、出版社変更に伴い、一年先の出版となった。	
来年度の進捗目標	2026年度秋に向けた書籍の出版に勤しむ。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標	サンタ・カーザへの崇敬を中心とした聖母崇敬について目下、発表、論文執筆に向けた準備を行なっている。				
今年度の進捗状況	博士論文の出版に向けた準備を研究とともに行う。				
来年度の進捗目標	英国における聖母崇敬の研究を深める。				

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2022年7月～	早稲田大学イタリア研究所　招聘研究員 研究員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	テンペラ画制作において、ボッティチェッリの《バルディ家祭壇画》の模倣作品を制作中である。		
今年度の進捗状況	下書きをほぼ終え、ジェッソ地への転写が終わり、次は彩色の作業に入る。		
来年度の進捗目標	前述作品についての制作を進める。		

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	文学部　総合人文学科	職名	講師	氏名	大門　耕平	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業内容に興味・関心を持たせるための工夫	2024年4月1日～	授業においては、わかりやすいスライドを作成・配布するほかに、授業支援ツールを用いた意見発表・共有の機会（RESPON）やグループ活動（Kahoot）、360度写真などを用いて、体験的に学ぶ機会を提供している。
授業内容の理解を促進するための工夫	2024年4月1日～	毎回、授業後に小レポートを課し、授業内容のまとめと意見を記述させている。そして、次の授業の冒頭において、グループ活動で小レポートの紹介をする機会を作り、授業内容の理解を深める機会を設けている。
授業内容全体の組み立てに関する工夫	2024年4月1日～	講義形式の授業形式ではなく、議論やディベート、発問に対する回答の機会を設けることにより、主体的・協同的な学びを促す形式での授業をおこなっている。
論文作成、および、研究発表の指導	2024年4月1日～	ゼミにおいて、アンケート調査の実施、論文作成、および、研究発表の仕方について、丁寧に指導している。
ICTを活用したペーパーレス化及びアクティブ・ラーニングに関する取り組み	2022年4月1日～	manabaを用い、講義内容の理解を深めることを目的として、PPT形式の講義資料を作成し、講義後に共有した。これにより、講義中の「ノートをとる」ための時間が軽減され、アクティブラーニング（ディスカッションやグループワーク）を促進することが可能となった。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
新島学園高等学校での講義	2025年3月14日～2025年3月14日	新島学園高等学校2年生を対象として「人文学を学ぶ」と題した模擬授業（50分）を2回担当した。
城北埼玉中学・高等学校での講義	2024年7月29日～2024年7月29日	城北埼玉中学・高等学校を対象に「宗教とパレスチナ問題・キリスト教と彫刻・キリスト教と建築」に関するする模擬授業（60分×3回）をおこなった。

現在の課題・目標	①キリスト教学の授業において、参加学生の興味・関心を引く教材を準備するとともに、キリスト教学を学ぶ意義について生徒から肯定的な意見がでるように工夫する。 ②「キリスト教教育ⅠⅡ」の授業資料を改善し、アクティブラーニングを導入した学習機会を提供する。 ③「人文学演習ⅠⅡ」「論文演習ⅠⅡ」においてゼミ形式での卒業論文作成に関して、充実した探求的研究ができるよう支援する。
今年度の進捗状況	上記目標①について、授業評価アンケート、授業後の小レポートなどから興味・関心が高められたことを確認することができた。 上記目標②について、3Dプリンタやレジンなどを用いた教材を作成し、意欲的な参加を促した。 上記目標③について、授業内だけではなく、オンランツールを用いて卒業論文作成に向けた指導をした。
来年度の進捗目標	上記目標①について、キリスト教学に関する授業資料の修正を行い、より興味・関心を引くための工夫を行い、検証を行う。 上記目標②について、ICT機器やアクティブラーニング、ディベート形式の授業を実施する。また、探求的学びおよびグループワークの機会を設け、主体的な参加を促す。 上記目標③について、3年生の段階で卒業論文のテーマを明確にし、先行研究の整理、論文の全体構成を作成するスケージュールを設定して教育に当たる。4年生については、前期で調査を実施し、後期には卒業論文の執筆および卒業発表に向けての指導を行う。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					

ウィリアム・メレル・ヴォーリズの建築における貢献ーー国会議事堂の建築金物を事例としてーー	単著	2025年1月	東北学院大学学術振興会, 人文学と神学, 22	大門, 耕平	pp.1-17
LGBTQ教育が中学生に与える効果についての研究	共著	2024年6月	東北学院大学キリスト教文化研究所, 東北学院大学キリスト教文化研究所紀要(42)	大門, 耕平, 藤井, 航, 池田, 恵美子	pp.1-15

C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文

D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)

E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)

F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)

G. 学会における研究発表

3Dモデルを用いた空間図形教育の効果の検証	共同	2024年9月	日本教育工学会2024秋季全国大会(東北学院大学 五橋キャンパス)	大門 耕平, 内野 正幸, 田辺 峰晶, XU, Jon, 坂井 武司	
高校女子バレー指導における選手のコンディションを可視化する支援体制が与える影響	共同	2024年8月	日本応用心理学会第90回大会(帝塚山大学　学園前キャンパス)	伊藤将史, 大門耕平, 山本ちさと, 権野めぐみ, 来田宣幸	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	①道徳性の発達についての調査を実施し、検証し、発表する。 ②ICTを用いた教育についての授業実践を実施し、検証し、発表する。 ③学校いごこち度尺度を用いた調査を実施い、検証し、発表する。 ④ウィリアム・メレル・ヴォーリズについて建築金物に着目した調査を実施し、その功績を明らかにする。 ⑤キリスト教主義学校の教員とのネットワークの構築を進める。
今年度の進捗状況	①中学生を対象とする調査を3年間継続して実施できた。また、大学生の道徳性の発達について学会で発表した(「研究活動」を参照)。 ②研究成果を学会で発表した(「研究活動」を参照)。 ③年5回の調査を実施し、データ収集をおこない、調査対象校に生徒支援資料を提供した。 ④研究成果を論文として発表した(「研究活動」を参照)。 ⑤6校のキリスト教主義学校の教員との連携を作ることができた。
来年度の進捗目標	①今年度までの調査データを用いて探求的な分析を実施する。また調査を継続する。 ②ICT(3Dデータ)を用いた教育方法についての教材の作成と実践を行う。 ③今年度までの調査データを用いて探求的な分析を実施する。また調査を継続する。 ④日本における建築金物の歴史についての資料収集、現地調査を実施する。また、講演などで建築金物の保存のための啓発活動を行う。 ⑤キリスト教教育に関する教材の開発を行い、教育実践を行い、検証する。また、各学校での調査のための準備を整える。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年10月～	「宗教と社会」学会 会員
2016年5月～	日本応用心理学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	文学部　総合人文学科	職名	講師	氏名	藤野　雄大	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
史資料センター所蔵史料「東北学院年次報告」の調査と分析	単著	2025年3月	東北学院史資料センター年報	藤野雄大	pp.
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2020年9月～	基督教史学会 会員
2019年9月～	日本基督教学会 会員
2019年6月～	Mercersburg Society 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	文学部　総合人文学科	職名	講師	氏名	渡邉　蘭子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
大学時報第416号「私の授業実践～教育現場の最前線から～」記事執筆（題目「眠くならない授業の構築」）	2024年5月1日～	

現在の課題・目標	・学科専門科目でグループディスカッションを効果的に行う。 →①深い思考力を身につけられる授業にする。 ・すべての授業において学生が授業に集中できるようにresponや小テストのタイミングを工夫する。 →②飽きさせない、集中しやすい授業にする。
今年度の進捗状況	・学科専門科目において、ディスカッションの前に蓄えた知識や自分の意見を整理してレポートを書いてもらい、それを踏まえてディスカッションしてもらったところ、充実した議論になっていた。思考力の向上につながったとの声も多かった。 ・すべての授業においてresponを授業内で二回以上提出させることで集中が切れないようにできた。学生からも効果的だという声があがっていた。 ・「聖書を学ぶ」と「キリスト教の歴史と思想」においてできる限り最後に小テストを行った。学生からも授業に集中しやすかったという声が多くあった。
来年度の進捗目標	・今年度効果があった取り組み（上記）を継続する（ディスカッション、respon、小テスト）（①②）。 ・授業の途中に課す小レポートの採点結果をできるだけ早く学生に提示し、改善点をしっかりとフィードバックする（①）。 ・授業のはじめに「この授業の目標は何か」という点を明確に示す（②）。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
謙遜を促す弱さ―後期アウグスティヌスにおける欲望の癒しをめぐる議論―	単独	2025年3月	教父研究会(東京大学駒場キャンパス)	渡邉蘭子	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	・博士論文の内容を学会発表でブラッシュアップし、出版に向けて準備を進める。 ・西洋古典学連携共同研究会において担当しているキリスト教と夢（特にアウグスティヌス）についての議論をまとめ、出版に向けて準備を行う。 ・アウグスティヌスの研究書（英語）の翻訳を仕上げる。
今年度の進捗状況	・博士論文の一部を学会発表等でブラッシュアップできた（コロキウム・パトリスティクム、教父研究会）。しかし、出版に向けた準備はまだ進められていない。 ・西洋古典学連携共同研究会でキリスト教と夢について2回目の発表を行った。出版社とのやり取りを行っており、現在出版に向けて校正中。 ・アウグスティヌスの研究書（英語）のパート1の翻訳を完了させた。、現在出版に向けて校正中。

来年度の進捗目標	・博士論文の全体をブラッシュアップし、出版に向けて具体的に動く。		
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	文学部　歴史学科	職名	教授	氏名	小沼　孝博	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
動画コンテンツの活用	2023年4月～	オンライン授業を実施した経験をふまえ、対面型の授業においても、従来に比べて動画コンテンツを積極的に取り入れた授業を実践している。
専門購読の授業内容の刷新	2023年4月～	3年生対象の専門購読では、2023年度より、東北学院大学図書館において未整理のまま残されていた約3,000冊の漢籍の整理を開始した。なお手探りの状態が続くが、学生たちの意識も高く、研究・教育に活用できるようデータの採取と入力作業を進めている。
演習科目でのレポート採点	2023年4月～	3年生の総合演習の授業では学期末に字数制限を設定したレポートを、2年生後期の基礎演習Ⅱでは輪読テキストの要約文を課している。それらはすべて添削をおこない、コメントを付して返却し、受講者は修正稿を再提出することになる。添削および評価のポイントは、課題の内容が的確にまとめられているかとい点だけではなく、文法・構成・論理展開など日本語の文章としての正確さに力点を置いている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
漢籍整理のための教材作成	2023年4月1日～	専門購読で実施している漢籍整理に関連する教材・マニュアルの作成を進めている。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
1762-63年のアフガン遣清使節：清朝皇帝宛てアフマド・シャー書簡の「周辺」	単著	2024年6月	満族史研究(23)	小沼孝博	pp.27-54
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
老虎，美麗島に眠る：遷台後のヨルバルスに関する二つの資料	単著	2024年12月	アジア文化史研究(24)	小沼孝博	pp.21-39
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
タシ・ラバトへの道	単著	2025年2月	シルクロード：九州・シルクロード協会会報(31)	小沼孝博	pp.2-8
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					

The Utilization of Resources by Nomad States: Agriculture and Trade in the Junghars	単独	2025年3月	Workshop: The Growth of Eurasian Empires and the Imperial Radius of Action: Analyzing Imperial Dynamics – the Radius of Action and the Radius of Impact(Tokyo: University of Tsukuba, Tokyo Campus, Room 121)	Onuma Takahiro	
老虎、美麗島に眠る:遷台後のヨルバルスに関する資料二件	単独	2024年11月	中国ムスリム研究会第44回定例会(東京:東洋文庫7階会議室)	小沼孝博	
タシ・ラバトへの道:2023年8月キルギス調査報告	単独	2024年5月	科研費基盤(B)「近世・近代移行期のアジア山岳地域における峠の交通と地域変容」第4回研究会(東京外国語大学本郷サテライト4階会議室)	小沼孝博	
清の対中央アジア国書におけるテュルク文面の成立と宮廷訳官	単独	2024年5月	68th ICES(第68回国際東方学者会議)(東京:日本教育会館)	小沼孝博	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B)	2023年度～2026年度	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2023年度～2026年度	共同(研究代表者)	
科学研究費助成事業 文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B)	2020年度～2024年度	共同(研究分担者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2015年～	西南アジア研究会 会員
2010年～	東洋史研究会 会員
2004年4月～	日本中央アジア学会 理事・編集委員 会員
2004年～	東方学会 会員
2000年4月～	満族史研究会 会員
1999年11月～	内陸アジア史学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	文学部　歴史学科	職名	教授	氏名	兼平　賢治	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ゼミ学生を引率しての巡見（史跡等）等の実施	2024年4月～	2024年度は仙台市内の博物館や史跡のほか、岩手県盛岡市の図書館・博物館施設と史跡をめぐる巡見や、京都府京都市・滋賀県彦根市の博物館施設と史跡をめぐる巡見を実施した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
北上川舟運と石巻産井内石・真鶴産小松石との関係	単著	2024年12月	『岩手史学研究』(105)	兼平賢治	pp.55-71
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2020年度～2024年度	個別(研究代表者)	本研究は、盛岡藩政や領民の生活と不可分の関係にある東北地方最大の大河・北上川を研究対象とする。そして、本研究の目的は、北上川流域自治体の文化財行政に携わりながら歴史・民俗の研究を進める研究協力者5名とともに、近世における河川を中心とした自然環境の利用に関心を寄せ、なかでも北上川舟運に着目して、その実態を、新たに整理の進む史料を活用しながら明らかにすることで、先行研究を基に概説されるにとどまる現在の研究状況を克服することにある。 具体的には、北上川舟運については、舟運の現場を取り仕切る肝入をつとめた下柳千葉家の文書群を活用して実態に迫る。また、河川を中心とする自然環境と人々の生活とのかかわりについては、江戸時代を網羅する盛岡藩家老席日記「雑書」190冊の刊行が完了し、すべての記事の文字検索も可能となったことから、この「雑書」を活用し、舟運の実態は勿論、流域の人々の営みのなかに河川がどのように位置づいていたのかを究明することである。 2021年度は、前年度に引き続き新型コロナウイルス感染症が流行し、予定されていた講演会が中止されたり、現地調査やフィールドワークが大きく制限されたなか、感染状況に応じて調査を進めた。おもな研究実績としては、岩手県紫波町で研究協力者とフィールドワーク(江戸時代の河岸跡の確認と石切場の調査)と研究成果の報告会を対面で開催し、課題と成果を共有したこと、岩手県奥州市教育委員会が管理する下柳千葉家文書について概要の撮像を概ね終えたこと、データベースの充実が挙げられる。 北上川舟運に関して収集した文献・データを研究協力者と共有するとともに、盛岡藩家老席日記「雑書」の北上川を含む盛岡藩の自然環境にかかわる記事をデータベース化する作業を進めた。「雑書」の自然環境に関する記事については、天保年間(1830～)までデータベースの構築を進めることができた。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年4月	岩手県 津波石碑調査に関する検討会 アドバイザー
2023年2月～	岩手県花巻市 花巻市史編さん委員会委員
2022年12月～	岩手県紫波郡紫波町 紫波町史編さん委員(委員長)
2022年9月～	岩手県奥州市 奥州市文化財保護審議会委員
2022年8月～	岩手県 岩手県公文書管理委員会委員
2021年10月～2024年4月	神奈川県平塚市 平塚市文化財保護委員会委員
2019年8月～	岩手県遠野市 遠野市史編さん近世部会部会長
2018年5月～	岩手県 岩手県文化財保護審議会委員
2016年10月～	地方史研究協議会 常任委員
2016年6月～	岩手県北上市 北上市史編さん専門委員会委員(近世部会長)
2015年6月～	岩手県遠野市 遠野市史編さん委員会委員
2015年6月～2024年6月	東海大学史学会 編集委員
2014年10月～	岩手県上閉伊郡大槌町 大槌町文化財保護審議会委員
2014年7月～	岩手県紫波町 紫波町文化財調査委員
2012年10月～	岩手史学会 評議員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等

紫波町日詰公民館 初心者古文書講座 講師		2013年7月～	
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	文学部　歴史学科	職名	教授	氏名	河西　晃祐	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
オンデマンド型キャリア教育の実施	2020年～	3年次前期科目「近現代日本と東アジア」の講義に際して、3年生の就活支援のために「就活動画」を作成し、学生への就活支援を行った。
オンライン・アクティブ・ラーニングの一環として、一次史料解読の課題を提示し、毎回提出させている。	2020年～	毎回の講義中に、アクティブ・ラーニングの一環として、一次史料に関する課題を提示し、周囲の学生らと話し合いながら課題解決に至る時間を設け、必ず課題を提出させている。
オンデマンド型講義動画の作成	2020年～	コロナウィルスの流行により、大講義はオンデマンド型講義となったので、映像・画像資料などを取り入れた講義動画を作成した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
オンデマンド型講義動画の作成	2020年～	前期に2本、後期に1本の講義動画を作成した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2017年4月～	日本植民地研究会 理事
2017年4月～	日本植民地研究会理事(日本植民地研究会理事就任（現在に至る）)
2009年4月～	岩沼市史編纂 委員
2007年4月～	NPO法人宮城歴史史料保全ネットワーク 理事

2007年4月～	東北史学会
2007年4月～	NPO法人宮城歴史史料保全ネットワーク理事(NPO法人宮城歴史史料保全ネットワーク理事就任(現在に至る))

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	文学部　歴史学科	職名	教授	氏名	楠　義彦	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
卒業論文作成のマニュアル動画（概要編、ノウハウ編）の作成	2024年7月1日～2024年12月31日	卒業論文作成が進むように、問題の立て方、課題の設定の仕方、アプローチの方法、資料収集、文書作成に至るまで徐々にステップアップするガイドラインを2種類の動画によって学生に提供した。
パワーポイントの利用	2018年～	「ヨーロッパ史専門講読Ⅲ」の授業で、エリザベサン・セクレタリィ・ハンドの文字の判読を指導するために補助的に使用している。
授業評価の実施	2017年4月1日～	学科で決定したすべての授業で実施している。
独自に作成した資料の配布	2017年～	「ヨーロッパ中近世社会史」の授業で、授業内容を図式的に理解できるように工夫している。特に一人ひとりが資料を読み取った結果を、少人数のグループで検討させ発表させている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
ヨーロッパ中近世社会史の教科書『魔女のヨーロッパ史』の作成	2022年7月13日～	楠義彦『魔女のヨーロッパ史』KDP（アマゾン直販）、2022年、全235頁、1700円（税別）。ISBN 978-8-8401-9039-5
東北学院大学文学部歴史学科編『大学で学ぶ東北の歴史』	2020年～	コラム4「日本地震学会とイギリス人の地震観」95-96頁
授業内容のレジュメの作成と配布	2010年1月～	学生の理解を深め定着させるために，授業での板書とは別にレジュメを配布している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2018年～		西洋史研究会理事(西洋史研究会理事)	
2014年1月～		学際魔女研究会会員(学際魔女研究会会員)	
2014年1月～		学際魔女研究会 会員	
1997年～		東北史学会	
1986年4月～		西洋史研究会 会員	
1986年～		日本西洋史学会 会員	
1986年～		西洋史研究会会員(西洋史研究会会員)	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	文学部　歴史学科	職名	教授	氏名	佐川　正敏	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
教員自身が1986年～1998年に文化庁奈良国立文化財研究所（現独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）で研究員・主任研究官として飛鳥地域や藤原宮・京跡、平城宮・京跡の発掘調査と研究に従事した経験を授業に活かしている。また、東・北アジアを中心とする国内外の遺跡で毎年実施してきた考古学的調査・研究の成果、その際に撮影した映像資料に基づいて作成し、更新しているパワーポイントを授業教材として使用している。	2020年4月1日～	考古学概説Ⅰ（1年）、基礎演習Ⅰ（2年）アジアにおける国家の誕生（3年）、考古学実習Ⅰ（2年）、考古学実習Ⅱ・Ⅲ（3年）、考古学総合演習Ⅰ・Ⅱ（3年）、考古学の諸問題Ⅱ（3年）、考古学論文演習Ⅰ・Ⅱ（4年）、考古学の諸問題Ⅲ（4年）， 及び大学院講義科目で実施
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(A)	2021年度～2025年度	共同(研究分担者)	モンゴルのウイグル可汗国地方官衙遺跡であるシャルツ・オール1遺跡の発掘調査と出土瓦塼の調査及びその中国・ロシアとの比較研究

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2018年4月～	岩手県一関市骨寺村荘園遺跡指導委員会 委員
2018年4月～	岩手県「平泉の文化遺産」世界遺産拡張登録検討委員会 委員
2016年11月～	国史跡 鳥海柵跡（岩手県金ケ崎町）整備委員会 委員

2016年11月～	国史跡 上人壇廃寺跡(福島県須賀川市)整備委員会 委員長
2016年4月～	山形県高畠町日向洞窟調査指導委員会 委員
2012年6月～	長野県茅野市尖石遺跡縄文文化賞審査委員会 委員
2010年3月～	福島県南相馬市国指定史跡「泉官衙遺跡」調査・整備検討委員会 委員
2004年6月～	日本旧石器学会会員 会員
2000年9月～	中国社会科学院古代文明研究センター 客員研究員
1998年5月～	宮城県考古学会 会員
1998年2月～	古代瓦研究会 会員
1990年4月～	日本考古学協会会員 会員
1989年9月～	日本中国考古学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	文学部　歴史学科	職名	教授	氏名	櫻井　康人	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
考える力の向上	2021年4月～	演習において自由討論の機会を極力多く設けることで、学生の考える力の向上を図っている。
考える力の向上	2020年4月1日～	演習等において，学生が自発的に自分の考えを発言し，そして他の学生がそれに対する自分の考えを述べられるような雰囲気を作ることに努めている。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
貨幣封から見る十字軍国家の社会構造（1192～1291年）	単著	2025年2月	ヨーロッパ文化史研究(26)	櫻井　康人	pp.99-122
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2019年4月～	西洋中世学会常任委員 会員
2007年4月～	東北史学会評議員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2024年度

所属	文学部　歴史学科	職名	教授	氏名	下倉　渉	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	文学部　歴史学科	職名	教授	氏名	竹井　英文	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ゼミにおける地域史研究活動の実践	2021年4月～	仙台市周辺にフィールドを定め、城館跡の縄張調査、古文書・古記録の調査、石造物や古道の調査、古絵図の調査を行い、総合的に地域史を研究する活動をしている。これまで利府町・松島町をフィールドに調査し、研究成果を『東北文化研究所紀要』に掲載してる。2023年度は黒川郡域の研究を開始した。
「古文書学Ⅰ」の授業における工夫	2021年4月～	古文書に記された文字を解読・読解するだけでなく,①本物の古文書を使っての実演・解説,②パワポによるを使用した解説,③古文書のコピーを配布して折り方・封の仕方を学生に体験してもらう,④サインである花押を実際に書いてもらい,かつ自分オリジナルの花押を作ってもらう,などのことをした。
城館跡での縄張図作成会の実施	2021年4月～	学生有志と仙台市周辺の城館跡の縄張図（平面プランを表した図）の作成会を随時実施している。自ら図を描くという作業を通して,城館の構造を身をもって理解すると同時に,遺跡そのものから歴史・地域を考える手法を学んでもらっている。2023年度は、名取市内の城館跡などで実施した。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
伊達政宗家臣団かるたの作成	2025年3月	
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
『東北中世の城』	共編者（共編著者）	2024年5月	高志書院	竹井英文,齋藤慎一,中井均	pp.1-349
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
宮城県の中近世城館跡をめぐる諸問題：調査研究・保存・整備・活用	単著	2024年5月	[仙台]：宮城県考古学会, 宮城考古学 = The Miyagi archaeology(26)	竹井 英文	pp.3-18
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
中近世移行期陸奥国深谷地域史の研究	単著	2025年2月	東北学院大学学術振興会, 東北学院大学論集. 歴史と文化, 71	竹井英文	pp.1-61
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
東北の中世城館と動物	単著	2024年9月	南部町歴史研究会, ふる里なんぶ(18)	竹井英文	pp.1-12
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					

H. 翻訳（学術書や原典等）			
I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2025年3月～2025年3月		新潟の一冊　池享著　上杉謙信の本音(新潟日報) 寄稿	
2025年2月～		花巻市史編さん委員会中世部会 部会員	
2022年4月～		名取市市史編さん専門部会 専門部員	
2018年6月～		茨城県中世城館跡総合調査委員会 専門委員	
2018年3月～		杉山城跡史跡整備検討委員会（埼玉県嵐山町教育委員会） 委員	
2017年4月～		相馬市史編さん中世部会 執筆委員	
2016年12月～		北上市史編さん委員会古代・中世部会 委員	
2013年10月～		岩櫃城跡保存整備委員会（群馬県東吾妻町教育委員会） 委員	
2013年8月～		笠間城跡調査指導委員会（笠間市教育委員会） 委員	
2012年11月～		静岡県伊豆の国市史跡等整備調査委員会（韮山城跡整備部会） 専門委員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	文学部　歴史学科	職名	教授	氏名	永田　英明	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ゼミ学生を引率した遺跡見学会等の実施	2023年9月～	平城宮跡、飛鳥宮跡などの都城遺跡や寺院遺跡などの見学実習を実施
博物館と連繋した実習的ゼミ学習	2023年～	演習科目に於いて、木簡の製作とこれを活用した展示の作成などの実習的要素を積極的に採り入れ、アクティブラーニングの要素をとりいれた。
博物館情報と連繋した博物館・メディア論授業の実践	2020年9月～	博物館情報・メディア論の授業として、学生による展示紹介動画の製作実習を実施した。
manabaを活用した学生アンケートの実施	2020年4月～	
演習科目に於いて、木簡の製作とこれを活用した展示の作成などの実習的要素を積極的に採り入れ、アクティブラーニングの要素をとりいれた。	2019年4月1日～	
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
『多賀城創建 その歴史的意義を問う』	共著	2025年1月	高志書院	熊谷公男，吉野武，永田英明，ほか計11名	pp.1-350
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
東北城柵官衙研究のあゆみ－文献史学から	単独	2024年9月	宮城歴史科学研究会大会(宮城県仙台市)	永田英明	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2024年4月		花巻市史編さん委員会古代部会 委員	
2024年		大崎市文化財保護審議会 委員	
2024年～		岩沼市文化財保護審議会 委員	
2023年～		名取市史編さん委員会原始古代部会 委員	
2020年～		郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導委員会 委員長	
2018年12月～		仙台市文化財保護審議会 委員	
2018年10月～		岩沼市原遺跡発掘調査指導検討委員会 委員	
2017年4月～		北上市史編さん委員会古代中世史部会（古代班） 委員	
2017年～		NPO法人宮城歴史資料保存ネットワーク理事	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			
東北学院大学博物館長			

2024年度

所属	文学部　歴史学科	職名	教授	氏名	七海　雅人	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ゼミにおいて博物館や遺跡の見学会・研究ミニ旅行・調査実習活動などを行っている。	2010年4月12日～	松島町雄島海底板碑群の調査と東北学院大学博物館における展示作業、中尊寺境内の見学会と薪能運営のボランティア活動、鎌倉市・横浜市ミニ研修旅行、仙台市・石巻市の板碑群をめぐるツアー、東北歴史博物館などの見学。
授業内容をまとめたプリントを配布している。	2010年4月12日～	授業の内容を整理したプリントを作成・配布し、教材として利用している。このプリントの内容は、授業評価により得た受講生の意見を参考にしながら修正・吟味を行っている。
学習事項の理解促進のために授業内容を整理する。	2010年4月12日～	授業のはじめに前回の内容をふりかえり、おわりに今回の内容をまとめ、各回授業内容の整理をおこなっている。あわせて、授業テーマ全体の中における各回の位置づけを明確にしている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	①ゼミ活動について、見学会やフィールドワーク、大学博物館における展示の充実をはかる。 ②ゼミにおける卒業論文の作成・課題研究と就職・進学活動との両立に関して、オフィスアワーの活用なども組み込みながら、より丁寧な学習・進路に関する指導をこころがける。 ③多人数受講者の授業について、配付資料の充実を図り、また投映方法について工夫する。
今年度の進捗状況	①課題・目標②について、3・4年生のゼミにおいて、中尊寺薪能の設営ボランティア活動の参加と中尊寺境内の見学会、鎌倉市・横浜市におけるミニ研修旅行、松島のフィールドワークと東北歴史博物館特別展の見学会、大学博物館の常設展示「中世の霊場と信仰　松島の世界」の展示替え作業を行った。 ②課題・目標②について、卒業論文の作成・就職活動に関する進捗状況について個別かつ定期的に面談を行い、適宜アドヴァイス・指導を行った。 ③前年度授業における反省点をふまえ、配付資料の内容を点検し改善を行った。
来年度の進捗目標	①ゼミ活動について、ひき続き見学会やフィールドワーク、大学博物館における展示の充実をはかる。 ②ゼミにおける卒業論文の作成・課題研究と就職・進学活動との両立に関して、ひき続きオフィスアワーの活用なども組み込みながら、より丁寧な学習・進路に関する指導をこころがける。 ③多人数受講者の授業について、ひき続き配付資料の充実を図り、また投映方法について工夫する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
鎌倉・南北朝時代の亘理郡	単著	2024年	郷土わたり(130)	七海雅人	pp.14-39
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
東北大学大学院文学研究科日本史研究室所蔵「朴沢文書」	単著	2024年	仙台市文化財年報(518)	七海雅人	pp.25-32
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
松島と中世信仰の世界『松島ハンドブック』	分担執筆	2024年	「“伊達”な文化」魅力発信推進実行委員会	七海雅人	pp.24-29
『奥州藤原氏―その光と影』を読む	単著	2024年	吉川弘文館，高橋富雄『奥州藤原氏　その光と影』	七海雅人	pp.251-257
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					

G. 学会における研究発表	
H. 翻訳（学術書や原典等）	
I. 特許	
現在の課題・目標	①中世政治制度史の研究（鎌倉幕府・室町幕府・主従制度など） ②中世東北地方史の研究（平泉藤原氏の政治権力・板碑と霊場の世界など） ③中世東北地方関係史料の集成・東日本大震災津波被災地における歴史的景観の復元
今年度の進捗状況	①課題・目標①について、著書刊行の準備を進めたが、成稿するまでにいたらなかった。複数の講演を行った。 ②課題・目標②について、論考を著した。著書刊行の準備を進めたが、成稿するまでにいたらなかった。複数の講演を行った。 ③課題・目標③について論考を著した。著書刊行の準備を進めたが、成稿するまでにいたらなかった。複数の講演を行った。
来年度の進捗目標	①課題・目標①について、著書刊行の準備をひき続き進める。 ②課題・目標②について、著書刊行の準備をひき続き進める。 ③課題・目標③について、著書刊行の準備を引き続ける進める。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年4月～	松島町史編纂委員会 委員
2024年4月～	花巻市史中世部会 部会長
2024年4月～	平泉の文化遺産拡張登録委員会 委員
2024年4月～	仙台市博物館協会 委員
2024年4月～2025年3月	東京大学史料編纂所外部評価委員会 委員
2023年4月～	平泉遺跡群調査整備指導委員会 副委員長
2023年2月～	花巻市史編さん委員会 委員
2020年9月～	歴史科学協議会 全国委員
2019年4月～2025年3月	宮城県文化財保護審議会（松島部会） 委員
2017年1月～2025年3月	仙台市文化財保護審議会 委員（2021年3月から副会長）
2016年12月～	北上市史編さん古代・中世部会 中世班委員
2013年6月～	東北学院大学中世史研究会 会長
2009年4月～	東松島市文化財保護審議会 委員（2020年4月から副会長）
2007年4月～	NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク 理事
1996年～	東北学院大学中世史研究会 会員
1996年～	歴史科学研究会 会員
1995年9月～	宮城歴史科学研究会 委員
1995年～	日本史研究会 会員
1993年～	宮城歴史科学研究会 会員
1992年～	日本古文書学会 会員
1992年～	史学会 会員
1992年～	歴史学研究会 会員
1990年10月～	東北史学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	
歴史学科長	

2024年度

所属	文学部　歴史学科	職名	教授	氏名	政岡　伸洋	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
フィールドワーク実施する科目において、地域との連携を深めている	2005年4月1日～	歴史学科2年生配当科目「民俗学調査入門Ⅰ」、3年生配当科目「民俗学実習Ⅰ」「民俗学実習Ⅱ」では、アクティブラーニングの手法も参考にしつつ、受講生が直接現地へ赴き、民俗調査を経験してもらうことになっているが、2005年度より県立博物館や市町村の教育委員会、私設博物館、また地元の郷土研究会等とも提携し、調査を実施している。その際学芸員や技師の方々がボランティアで参加してくれているが、学生たちもさまざまな専門分野からのアドバイスが受けられ、学問的関心を深められるようである。また、その成果は発表会や調査報告書の刊行により、地元への還元も行っている。
学生からの質問、感想に対するコメントの実施	2004年4月1日～	授業に対する学生のニーズは多様化しており、これには配慮しつつも限界がある。そこで、講義課目では、授業終了後に質問や感想を出席カードの裏に任意に書かせ、次の授業の冒頭でコメントしてきたが、教員とのコミュニケーションや講義課目に対する関心を深められるようで、学生には好評であった。そこで、オンデマンド授業となった今年度の民俗学概説Ⅱでは、出席確認のResponを自由記述にし、質問や感想を書いてもらい、その内容についてコメントした動画を、次の授業の際に講義内容とは別にアップして見てもらうようにしたところ、教員とのコミュニケーションがとれているといった実感を持ってもらえたようで、非常に好評であった。
前回の授業内容の確認の実施と授業理解の促進	2004年4月1日～	毎回新たな講義内容に入る前に、前回の授業内容を簡単に解説し、学生の理解に配慮している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	①　身近な生活文化の当たり前を問い直す、民俗学の面白さを理解させる。 ②　これを通して、イメージに流されることなく、自ら調べ考え、物事を客観的に把握できる能力を身につけさせる。 ③　そのためにも、地道な基礎的作業と深い思考の重要性を理解させ、実践できる能力を身につけさせる。 ④　地域とのかかわりを重視し、実際の暮らしに触れつつ、座学で終わることなく、より実践的な教育を心掛ける。 といった、民俗学という学問の見方・考え方の訓練を通して、専門分野に関連するような職業はもちろんであるが、それ以外の一般企業等を目指す学生にとっても、さまざまな情報が氾濫する現代社会において、社会人として自ら考え試行錯誤しつつ、よりよく生きるための思考法を身につけてもらえることを目標においている。
今年度の進捗状況	本学民俗学研究室の活動は、民俗学のみならず周辺諸科学の学会や文化財行政でも高い評価を受けており、在学生が優れた研究成果を発表したことで全国学会で表彰され、卒業生の中には博物館の学芸員や文化財担当者など、高度な専門的知識を活かした職業に就く者もほぼ毎年出るようになってきた。また、一般企業に就職した学生たちからも、民俗学で学んだものの見方・考え方が社会に出てからも役立っているという声が聞かれ、これまでも全国紙の教育特集等で取り上げられるなど、学生によって程度の差はあるにせよ、ある程度達成できているのではないかと判断している。 　特に教育面で力を入れている実習科目について、今年度は3年生を対象とした民俗学実習では河原町を中心とする仙台城下町を、2年生を対象とした民俗学調査入門では津波警告板で有名な和歌山県西牟婁郡白浜町富田地区を対象に、地元の教育委員会や博物館とも連携しつつ、本格的な合宿形式の民俗調査を実施することができ、学生たちにとっても貴重な経験となったのではないかと考えている。 なお、アクティブ・ラーニングの手法も参考にしたこれらの活動は、学生たちにとっては日々の教育活動が単なる「お勉強」ではなく、自らの学習成果が地域に対して大きな意味を持つことを実感させたようで、実践的な教育成果として注目して良いのではないかと考えている。
来年度の進捗目標	引き続き、現在の課題・目標にあげた項目について、各学生のニーズに即しつつ、より教育的効果を高められるよう対応していければと考えている。特に実習系科目については、河原町を中心とする仙台城下町および和歌山県西牟婁郡白浜町富田地区での調査もひと段落付いたことから報告書の作成に向けて作業を進めるとともに、新たに塩竈市教育委員会との連携事業として、塩竈市浦戸諸島での合宿形式での調査を計画している。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数

A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
日韓ラウンドテーブル：京都とソウルの都市祭礼（担当：コメント①「新たな日韓比較研究の可能性」）	共同	2024年12月	京都民俗学会第367回談話会（京都民俗学会・ソウル民俗学会共催）（京都（佛教大学））	三隅貴史, 呉文仙, 李玟宰, 今中崇文, 政岡伸洋, 岡田浩樹	
災害の記憶の継承とその活用―和歌山県白浜町富田地区の場合―	単独	2024年10月	日本民俗学会第76回年会(東京（國學院大學）)	政岡伸洋	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	これまで、「歴史的背景を踏まえた、民俗の実践とその意義」という視点から、従来の民俗理解の限界と新たな課題の提示について、関連するテーマを設定し研究を行ってきたが、現在、関心のある具体的な研究テーマは以下の通りである。 ① 被災地における暮らしの復興過程および災害の記憶の継承をめぐる民俗学的課題 ② 国家的周縁域における民俗の展開とその歴史的背景に関する調査研究 ③ 近代における被差別部落の形成過程と差別言説の背景に関する調査分析 ④ 民俗学の展開とその歴史的背景に関する分析
今年度の進捗状況	①については、和歌山県西牟婁郡白浜町富田地区における飛鳥神社秋祭りの津波警告板の読み聞かせの意義について、日本民俗学会年会で発表することができた。また、宮城県南三陸町戸倉波伝谷地区では、村落運営の再編成が行われたこともあり、新たな課題が見えてきた。 ②については、南西諸島では昨年度に引き続き、沖永良部島の世之主伝説を対象に、奄美群島における「琉球文化」的要素の再検討を行うとともに、さらに昨年度から興味を持ち始めた来訪神儀礼と仏教との関連についての調査も開始した。また、東北地方では湯殿山の即身仏についても、非常にあいまいな民間信仰ではなく仏教との関連で再検討を行った。海外では久しぶりに韓国済州島で村落祭祀の現在に関する調査も行うことができた。 ③については、近代部落史の研究成果を民俗学としてどのように取り込んでいくことができるかについて検討するとともに、インドのカースト制度など海外との比較についても研究をはじめつつある。 ④については、これまでの日本における家族・親族研究の学史的再検討を行い、グローバルな議論を念頭にDevelopment and the Current State of Family and Kinship Research in Folklore Studiesと題して発表した。また、民俗学では国内の地方学会の動向も非常に重要であるが、その中でも注目を集める京都民俗学会40周年記念シンポジウムの成果も原稿化し発表することができた。
来年度の進捗目標	①について、和歌山県西牟婁郡白浜町富田地区での調査がある程度データーも集まってきたことから、これまでの成果を地元のみなさまに広く公開しご意見をいただく現地報告会の開催を予定している。これに対し宮城県南三陸町戸倉波伝谷地区を対象とした暮らしの復興過程をめぐる問題については、これまでの成果を整理しつつ、再編成された村落運営組織の調査およびその背景についての調査を行いたいと考えている。 ②について、南西諸島を対象とした研究では、引き続き奄美群島の「琉球文化」的要素の再検討に関する調査検討を行うとともに、来訪神儀礼と仏教遁関連についても引き続き調査を行いたい。また北日本を対象とした研究では、湯殿山の即身仏のほか、ある程度資料が集まりつつある新潟湊祭りについても原稿化を進め、実習科目も利用しつつ塩竈市浦戸諸島でも調査を開始したい。その他、韓国でも民俗行事の現在についての調査を継続したい。 ③では、近代史部落史の研究成果を再検討すると同時に、海外のマイノリティの動向も押さえつつ、民俗学からみた部落問題について原稿化を進め、出版に向けての準備を開始したい。 ④については、戦後民俗学のパラダイム成立のプロセスと背景についての研究を進め、論文化を目指す予定である。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 基盤研究(c)	2024年度～	個別(研究代表者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2024年6月～2024年11月	比較家族史学会2024年度秋季研究大会 運営委員長
2023年4月～	比較家族史学会 理事

2022年8月～	塩竈市文化財保存活用地域計画協議会 調査部会 委員
2014年9月～	ひょうご部落解放人権研究所 会員
2014年9月～	ひょうご部落解放・人権研究所 会員
2010年10月～	岩手民俗の会 会員
2010年6月～	民俗芸能学会 会員
2009年10月～	岩手民俗の会 会員
2008年5月～	現代民俗学会 会員
2004年6月～	東日本部落解放研究所 会員
2004年6月～	東北民俗の会 会員
2004年6月～	東北民俗の会 会員
2004年4月～	東日本部落解放研究所 会員
2003年4月～	日本村落研究学会 会員
2003年4月～	徳島地域文化研究会 会員
2000年8月～	韓国・朝鮮文化研究会 会員
2000年8月～	韓国・朝鮮文化研究会 会員
1998年10月～	比較日本文化研究会 会員
1995年2月～	沖縄民俗学会 会員
1994年6月～	日本文化人類学会（旧日本民族学会） 会員
1994年4月～	部落解放人権研究所 会員
1994年4月～	部落解放・人権研究所 会員
1991年11月～	比較家族史学会 会員
1988年4月～	京都民俗学会（旧京都民俗学談話会） 会員
1988年3月～	日本民俗学会 会員
1988年1月～	近畿民俗学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	文学部　歴史学科	職名	教授	氏名	渡辺　昭一	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
インド鉄道史『鉄道史大事典』	分担執筆	2024年10月	浅倉書店	渡辺昭一	pp.358-361
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
1960年代欧米諸国の対インド開発援助の実態	単著	2025年2月	ヨーロッパ文化史研究(26)	渡辺昭一	pp.3-40
サラ・ロレンツィーニ(三須拓也・山本健訳)『グローバル開拓史―もう一つの冷戦』(名古屋大学出版会、2022年6月)	単著	2024年4月	社会経済史学, 89(1)	渡辺昭一	pp.83-89
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
1960年代のインド援助コンソーシアムをめぐる英米中心の政策決定過程	共同	2024年11月	政治経済学・経済史学会　秋季学術大会(北海道大学)	渡辺昭一	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 科研費基盤（B）	2021年度～	共同(研究分担者)	グローバル債務の歴史的構造―成長と開発の国際連関ー
科学研究費助成事業 日本学術振興会・科学研究費補助金（基盤C）	2021年度～	共同(研究代表者)	南アジア冷戦下の国際援助と軍事的自立化の研究
科学研究費助成事業 科学研究費　基盤B	2020年度～	共同(研究分担者)	ブリティッシュ・ワールドの共通意識と紐帯に関する総合的歴史研究

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2018年4月～	国際武器移転史研究所 研究員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	文学部　歴史学科	職名	准教授	氏名	金子　祥之	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2023年度教育功績等優秀教員（東北学院大学）	2024年7月	
過疎集落・自治体と連携した民俗学教育の実施	2020年4月～	福島県会津地方は、過疎高齢化が極端に進行する地域である。そうした地域と連携し、民俗学の実習を通じて、地域の民俗文化を掘り起こす。それにより、地域文化の保全と、地域の魅力向上に寄与する教育実践を行なっている。
被災集落と連携した民俗学教育の実践	2020年4月～	原発災害により深刻な被害を受けた福島県相双地方の集落と連携し、民俗学教育を実践している。具体的には、民俗学実習により、民俗誌の作成を通じた地域文化の記録化、および震災前後の生活変化を記録する。また民俗芸能の継承支援も行っている。
オンデマンド型講義の提供	2020年4月～	「民俗学概説Ⅰ」「民俗学の諸問題Ⅱ」の講義用にyoutubeチャンネルを開設し、オンデマンド授業に対応した学習機会を提供した。毎回の小課題を通じ授業内容の理解度を確認し、次回の講義においてフィードバックを行なった。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
棟札からみた集落内小祠とその祭祀―川内村小田代集落を事例に	単著	2025年3月	福島の民俗，53	金子祥之	pp.1-14
調査記録からみた福島県浪江町津島の民俗芸能（一）―山口弥一郎による一九六〇年前後の調査記録を対象に	共著	2025年2月	歴史と文化，71	金子祥之・増藤雄大・庄司貴俊・今野実永・佐澤春花・松浦那奈	pp.63-166
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
民俗芸能を《近いもの》にするために―「南津島の田植踊」展の試み	単著	2025年3月	東北学院大学博物館学芸員課程報，47	金子祥之	pp.1-2
南津島の田植踊りと神楽七芸	共著	2025年1月	未来といのち，福島の風が止むとき，1	三瓶専次郎・今野実永・金子祥之	pp.84-89
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 若手研究	2021年度～2024年度	(研究代表者)	本研究では、何ゆえに極小集落が存続し続けることができたのか／あるいはできているのかを、民俗学的なアプローチにより明らかにする。すなわち、人口規模が極端に小さな集落が発揮するレジリエンスを、生活者の立場から解明する。現代の日本社会では、人口規模の小さな集落は統廃合の対象としてみなされ始めている。たしかに極小集落には、のちに廃村に至るものがあり、存続可能性が乏しいように見受けられる。しかしながら、小規模であるにもかかわらず、存続し続けてきた集落があることも確かである。本研究では、小さな集落のレジリエンスを通時的・共時的に分析し、生活者の立場からとらえた村落社会の存続論を展望する。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年6月～	東北民俗の会 常任委員
2024年6月～	東北民俗の会 常任委員
2024年5月～	現代民俗学会 編集委員
2024年4月	竹駒稲荷神社（宮城県）馬事博物館 保存運用委員
2024年4月～	いわき市文化財保護審議会（福島県） 文化財保護審議会委員（民俗）
2024年3月～	日本社会学会『社会学評論』専門委員
2024年3月～	日本社会学会『社会学評論』専門委員
2022年5月～2024年5月	現代民俗学会 第8期運営委員
2020年4月～	東北民俗の会 会員
2017年7月～	檜枝岐村教育委員会檜枝岐村民俗史編さん委員会 専門員（民俗）
2017年6月～	環境社会学会 会員
2017年～	日本社会学会 会員
2016年5月～	現代民俗学会 編集委員
2015年11月～	日本村落研究学会 会員
2014年5月～	現代民俗学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
南津島の田植踊展―未来につなぐバトン	東北学院大学博物館	2024年12月～	金子ゼミで2022年より実施してきた南津島郷土芸術保存会との協働についての展示である。また、福島県立博物館の協力をえて、山口弥一郎氏の実施した津島調査に関する展示も実施した。
修験の残した切紙と呪符	東北学院大学博物館	2024年3月～2024年11月	金子研究室で2022年度・23年度の2年間をかけて実施した、川内村横田家文書（地蔵院旧蔵文書）の展示である。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	文学部　歴史学科	職名	准教授	氏名	杵淵　文夫	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業評価（FD）アンケートの結果（2024年度）	2024年9月20日～2025年2月6日	1学年配当科目「ヨーロッパ史概説Ⅱ」（後期、受講者数153名）の授業評価において、授業の総合評価において5段階評価で平均4.5（科目平均）という評価を受けた。 1学年配当科目「入門演習Ⅰ」（前期、受講者数43名）の授業評価において、授業の総合評価において5段階評価で平均4.8（科目平均）という評価を受けた。
卒業論文の研究テーマに関する個人面談	2020年4月1日～	前年度に引き続き、今年度も「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」の所属学生および「ヨーロッパ史論文演習Ⅰ・Ⅱ」の所属学生を対象に、卒業論文のテーマ選択に関する個別相談を実施した。今年度は、新型コロナウイルス流行のためZoomも活用した。一人当たり平均2回程度で、1回あたりの平均面談時間は20分であった。新型コロナウイルスの流行により、総合演習と論文演習をZoomで実施することが増えたため、学部3・4年生それぞれの卒論研究を進めさせる代替的な方法として、この個別相談を継続した。 その結果、3年生はテーマ選択については学生それぞれの進度にバラツキは出たものの、最終的にはどの学生も卒業論文のテーマを設定することができた。
少人数の授業における学生コメント一覧の作成・配付	2020年4月1日～	少人数の演習型授業「基礎演習Ⅱ」、「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」、「ヨーロッパ史論文演習Ⅰ・Ⅱ」等では、学生が発表した後に、他の受講学生の意見感想を知ることができるようにしている。授業時間内に全員が意見を言えなかったり、口頭では言いにくい内容も多々あると推測されるため、2021年度もこれを継続した。 具体的には、授業内の発表に対して意見や批判を書かせて、それを一覧の形式で取りまとめ、次回の授業で配付した。これによって、発表学生は教員や一部学生の意見だけでなく、他の学生が自分の発表についてどのように考えているかを知ることが出来るようになり、次回の発表にフィードバックするようになった。 なお、2021年度は新型コロナウイルスの流行拡大もあり、記入では主にインターネットツールの（Respon）を活用した。Responの設定等では相応の時間と労力が掛かってしまうものの、記入内容の取りまとめと各学生への配付の作業では負担が軽減された。
演習形式の授業におけるラジオ番組での研究成果発表の実施	2020年4月1日～2025年3月31日	ラジオ番組制作は2015年度以来継続している取り組みである。「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」や「ヨーロッパ史論文演習Ⅰ・Ⅱ」において学部3・4年生は卒業論文を見据えて各自のテーマを設定し，課題の研究を進めている。学生が資料調査や研究に積極的に取り組むように刺激する効果と，情報を他者にわかりやすく伝えるプレゼンテーション能力の涵養を狙いとして，学生の希望者にラジオ番組での研究成果の公表を行わせた。 リスナーの存在を意識することで、参加学生はラジオ番組の出演を想定し課題の調査や研究を緊張感をもって行うようになった。また、ラジオは音声だけでしか情報を伝えることができないメディアであるため，適切な言葉と分かりやすい表現を使えるようになろうと，反省会を企画して改善点を確認するなど主体的に工夫するようになった。 ただし、2020年度に引き続き2021年度も新型コロナウイルスの流行のため、協力ラジオ局のスタジオを利用することができなかったため、活動の機会は限られたが、感染対策を十分に施した上で収録を行った。 コロナ禍が下火になって以降は、地元ラジオ局の協力を得られやすくなり、以前のようにラジオ局の協力のもと発表活動を行っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		

教材「第一次大戦開戦に関する史料」	2020年4月1日～	「基礎演習Ⅱ」の共通テーマとして第一次世界大戦の勃発原因研究を設定した。受講学生が、大戦の勃発原因について一次史料を使って分析できるように、関連史料を邦語訳して授業で活用した。 その史料としては、大戦勃発研究において最も重要視されているものを選び出した。対象としたのは、サライェヴォ事件（1914年6月28日）後からオーストリア=ハンガリー共通閣議（1914年7月7日）までのドイツとオーストリア=ハンガリーの公文書、手記、手紙等である。 授業では、場面ごとに5つに区分して史料を分析させ、学生同士で史料の解釈を議論させた。その成果として、受講学生それぞれがオーストリア=ハンガリーが開戦の方針を固める経緯を考察したレポートを提出した。 歴史上の重要史料に触れることはとても好評であったため、この取り組みは次年度も継続する予定である。
「卒業論文の書き方」（東北学院大学生向け）の執筆	2020年4月1日～	学生が卒業論文の執筆に取り掛かる際に参照するためのマニュアルとして「卒業論文の書き方」を、2015年度以来作成している。2020年度は文献収集の方法が学生にわかりやすくなるよう加筆修正した。2021年度も、「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」の3年生および「ヨーロッパ史論文演習Ⅰ・Ⅱ」の4年生に配付し、卒業論文研究等で活用させた。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
SD「ハラスメント対策講習会」への参加（2024年度）	2025年3月12日	2025年3月12日東北学院大学土樋キャンパスの8号館ホールにて、SD研修プログラム「2024年度ハラスメント対策講演会」に出席した。
文学部歴史学科1年生の第4グループの主任	2024年4月1日～	2024年度入学の文学部歴史学科1年生の第4グループのグループ主任を務めた。 3月下旬以降、他の担当教員やオリエンテーションリーダーとの打ち合わせを行い、4月1日と2日の新入生オリエンテーションに出席した。特に学生のITツールの初期設定や科目履修登録の指導を行った。4月8日には、新入生ウェルカムデーにも出席した。
大学院生の研究構想発表会（2024年度）	2024年4月1日～2025年3月31日	2024年度は、副指導教員を担当している修士課程の大学院生の修士論文構想発表のための準備の予行演習を2度（2024年10月1日、2025年1月17日）実施した。
SA（ステューデントアシスタント）の活用	2023年9月20日～2025年1月22日	1年生配当科目「入門演習Ⅰ」と「入門演習Ⅱ」でステューデントアシスタント（SA）各1名を活用した。SAは学部2～4年生であるが、彼らの協力により授業を効果的に運営することができた。
学内の遠隔授業サポートチームへの参加	2020年4月13日～	新型コロナウイルスの流行により、2020年4月13日に学科長の要請により学内の遠隔授業サポートチームの構成員となった。 4月15日にはそのミーティングに参加し、オンライン授業の実施方法について情報を共有した。オンライン授業に関する学科教員、学部生・大学院生からの質問にも対応した。4月末には、前期授業の実施方法に関するアンケートに従事した。4月15日と5月7日には歴史学科独自のオンライン授業の講習にも参加した。さらに、7月以降は後期授業の実施形態調査に協力した。
「研究・発表の技法」の授業計画の作成	2020年4月1日～	新型コロナウイルスの感染拡大で前期の授業がオンラインになったために、学部1年生は学友も作れず大学に入学した実感を持てないというメンタル上の深刻な問題が生じた。そのため、学科長が「研究・発表の技法」の担当教員数（コマ数）を増やして、対面授業で実施する計画を策定した。 当初の授業計画とは状況（特に受講人数）が大きく変わることとなったため、当初計画にもとづきつつ授業計画を立て直す必要が生じた。そこで、この授業の計画を修正するとともに、担当教員への説明のための資料を作成した。毎授業の30分前に教員控室に集合し、授業内容の説明と調整を担当した。

学生の就職活動の支援	2020年4月1日～	「ヨーロッパ史総合演習」と「ヨーロッパ史論文演習」の所属学生を対象として、就職活動の支援を行った。例年のような、「就活情報交換会」、「OB/OG社会人生活報告会」、「模擬面接」、「就活個別相談会」は実施できなかったものの、適宜、履歴書やESの書き方講座、SPIの講座、就活の進め方講座を実施し、就職活動に関する情報をManabaやメールで断続的に提供し続けた。これらを通じて3年生は次年度の就職活動に向けて、準備を進めるとともに意識を高めた。 その他に、3・4年生の履歴書やESの添削依頼や進路相談にも対応した。 2021年度は新型コロナウイルスの流行によって新卒採用の状況は厳しさを増したものの、ゼミ所属4年生12名中11名が秋の時点で内定を獲得できていた。次年度も就活支援を継続する予定である。
新入生（来年度学部1年生）の履修指導の準備	2019年～	新年度入学生のオリエンテーションにおける履修指導の準備を行った。グループ主任らとの打ち合わせ（3月22日、3月27日）に出席し、学生協力者（オリエンテーションリーダー）と準備の協議を行った。このほかに、履修指導の動画（1年生向け、2年生向け2種類、3年生向け2種類）を作成し、Manabaで公開した。

現在の課題・目標	昨年度設定した「来年度の進捗目標」は以下の通りである。 ①「ゼミ関連」：2024年度は、「総合演習Ⅰ・Ⅱ」において「第一次世界大戦の勃発原因」を共通テーマに設定し、ゼミ全体として研究を行う。「論文演習Ⅰ・Ⅱ」においては、所属学生が卒業論文に向けて着実に研究を進められるように指導をする。 ②「ゼミ以外の授業」：2024年度は、特に1年生科目を多く担当する（4コマ）事情から、新入生が授業に安心して専念できるように留意する。また、ヨーロッパ史に強い関心をもつ学生に応えられるように授業内容を改善する。 ③「授業以外のサポート」：学業との両立の観点から、3年生および4年生の進路選択に関する支援を継続する。
今年度の進捗状況	①ゼミ： 計画通りに進められた。「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」の学生は、第一次大戦勃発論に関する文献として、髙橋進「1914年七月危機―「現代権力政治」論序説―」坂本義和編『世界政治の大変動』岩波書店、1994年を討論した後、七月危機の一次史料を読解した。「ヨーロッパ史論文演習Ⅰ・Ⅱ」の学生は卒業論文計画にもとづいて研究を進め、卒業論文を完成することができた。 ②ゼミ以外の授業： 予定通りに進めた。学部1年生向けの「入門演習Ⅰ」と「入門演習Ⅱ」を担当した。前者では、基本的な研究リテラシーを高め、後者では、学生は教員提示の研究課題にグループワークで取り組んだ。発表水準は昨年通り良かったと考えている。 ③授業以外： 予定通りに進められた。就職活動が早期化している情勢を踏まえて、3年次には前期セメスターのうちからインターンシップへの参加を何度も促し続けた。1月時点で3年次の半数以上が内定取得の見込みが立った。4年次にも例年通りの支援を行い、その結果、留年者1名を除き、それぞれが納得のいく企業から内定を早期に取得した。
来年度の進捗目標	①ゼミ： 2025年度は、「総合演習Ⅰ・Ⅱ」において「第一次大戦後ドイツの金融情勢」もしくは「第一次世界大戦の勃発原因」を共通テーマに設定し、ゼミ全体として研究を行う。「論文演習Ⅰ・Ⅱ」においては、所属学生が卒業論文に向けて着実に研究を進められるように指導をする。 ②ゼミ以外： 2025年度は、特に「ヨーロッパ史概説Ⅱ」に関して、ヨーロッパ史に強い関心をもつ学生に応えられるように授業内容を具体的に変更する。 ③授業以外： 学業との両立の観点から、3年生および4年生の進路選択に関する支援を継続する。

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
19世紀末オーストリアにおける「中欧構想」と工業利害―1900年オーストリア経済協会の全体集会の分析―	単著	2025年2月	ヨーロッパ文化総合研究所，ヨーロッパ文化史研究，第26号	杵淵文夫	pp.123-158頁
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					

世紀転換期における独墺関税連合の構想 ―1900年オーストリア経済学者協会総会の分析―	単独	2024年10月	東北史学会 西洋史部会(福島大学金谷川キャンパス)	杵淵文夫	
世紀転換期オーストリア農業と「中欧保護協定」	単独	2024年5月	日本西洋史学会 第74回大会 近代史部会3(東京外国語大学(東京都府中市))	杵淵文夫	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	昨年度設定した「来年度の進捗目標」は以下の通りである。 ①. 科研費の研究課題を進展させる。具体的には、オーストリア＝ハンガリーの「工業家クラブ」と「農林業利害擁護総本部」の史料分析の結果を、それぞれ論文にまとめて学術誌に投稿する。「オーストリア中欧経済協会」の設立過程の研究に着手する。 ②. 将来的な研究のための準備として、大学の授業とも連携する形で、「第一次世界大戦の勃発原因」の研究を進める。七月危機の史料および現在の主要な研究書を読解する。
今年度の進捗状況	①進捗は部分的にとどまった。日本西洋史学会(5月)と東北史学会(10月)で発表を行ったが、「工業家クラブ」と「農林業利害擁護総本部」に関する研究は、いずれも学術誌に投稿するまでには至らなかった。オーストリア工業利害に関わる「オーストリア経済協会」に関する論文を『ヨーロッパ文化史研究』に投稿し、これは掲載された。 ②Otteの読解を続けるとともに、第一次大戦開戦で重要な役割を果たしたドイツ皇帝ヴィルヘルム2世についての研究状況を把握するため、Ch.Clark, Kaiser Wilhelm IIを読解した。同様に、開戦時のドイツ首相ベートマン＝ホルヴェークについての研究状況を把握するため、Baumgart, Theobart Bethmann-Hollwegを読解した。史料としては、七月危機初期のドイツ大使チルシュキによる本国宛報告書を読解した。
来年度の進捗目標	①. 科研費の研究課題を1年延長申請したことにより、これを完成させる。具体的には、「工業家クラブ」と「農林業利害擁護総本部」の研究結果を、それぞれ論文にまとめて学術誌に投稿する。「オーストリア中欧経済協会」の設立過程の研究も進める。 ②. 将来的な研究のための準備として、大学の授業とも連携する形で、「第一次世界大戦の勃発原因」の研究を進める。七月危機の史料および現在の主要な研究書を読解する。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2022年度～	個別(研究代表者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2020年～	西洋史研究会 評議員
2019年4月～	東北史学会 評議員
2012年4月～	東欧史研究会 会員
2012年～	東欧史研究会 会員
2010年4月～	東北史学会 会員
2008年4月～	ドイツ資本主義研究会 会員
2007年4月～	社会経済史学会 会員
2004年4月～	西洋史研究会 会員
2004年～	日本西洋史学会 会員
2004年～	西洋史研究会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

○入試委員（2023年度～）
入試委員（主任）として、以下の業務に従事した。
受験生・高校生向けの校内ガイダンスや合同説明会に出席し説明を行った（4月22日アエル進学相談会、6月21日一関文化センター進学相談会、6月25日富谷高校校内ガイダンス、7月12日アクティおろしまち進学相談会、9月20日東京農業大学第二高校校内ガイダンス、10月23日矢板中央高校校内ガイダンス、11月11日鹿沼東高校校内ガイダンス、11月13日藤女子高校校内ガイダンス、2025年2月6日アエル進学相談会、2月26日山形県JA進学相談会）。
高校訪問等により、各高校の進路指導教員に大学および入試について説明を行った（6月6日石巻好文館高校、石巻工業高校、石巻西高校。6月20日五橋キャンパス進学懇談会、6月10日宮城第一高校。10月24日宇都宮短大付属高校、文星芸術大学附属高校、文星芸術大学女子高校、作新学院高校）。
オープンキャンパスでは、アドミッションオフィスの部署で高校生向けの個別相談を担当した（6月22日初夏のオープンキャンパス、7月27日夏のオープンキャンパス、12月7日冬のオープンキャンパス、3月28日春のオープンキャンパス）。
総合型選抜や推薦入試の運営や準備に従事した（9月22日総合型選抜A日程の本部運営・受験生の誘導等、11月23日総合型選抜・推薦入試の本部運営・受験生の誘導等、12月13日総合型選抜B日程の会場準備、12月14日総合型選抜B日程の本部運営等）。
大学入学共通テストの運営や準備に従事した（9月12日の入試担当者連絡協議会に出席、12月12日と26日監督者説明会におけるリスニング業務の説明とその準備（11月29日会議含む）、2025年1月10日テスト問題解答用紙等の問題搬入や袋詰め作業、1月17日共通テストの会場設営・点検、1月18日・19日大学入試共通テストの本部運営・リスニングの説明・答案用紙整理等の業務、1月20日共通テスト答案用紙の発送）。
本学の一般入試と共通テスト利用入試の運営や準備に従事した（10月3日入試選抜方法に関する検討委員会に出席、10月7日～9日入試問題の初校、10月28日～30日入試問題の再校、12月2日～4日入試問題の三校、12月16と18日入試問題の念校、2024年1月21日と23日入試問題の下見、1月24日受験生の調査書評価、1月28日入試問題の袋詰め作業、1月29日と30日一般選抜監督者説明会、1月31日一般選抜試験会場設営、2月1日～3日一般選抜前期の本部運営・答案整理作業等、2月4日一般入試業務の残務（サンプルチェック）、2月5日共通テスト得点換算チェック作業等、2月7日一般選抜前期日程の合格者検討の説明会、2月20日追加合格説明会、2月28日一般選抜後期の調査書評価、共通テスト得点換算チェック、問題袋詰め、3月4日一般入試後期の本部運営・答案整理作業、3月7日合格者検討のための説明会）。
編入学・社会人入学・転学部転学科・再入学試験に関しては、3月3日編入学社会人入学試験の本部運営に従事した。
9月15日に、歴史学科の高校生向けイベント「大学で学ぶ東北の歴史探究バスツアー」に引率者として同行した。大学受験に関する高校生の質問にも対応した。
その他に、4月1日以降の新入生オリエンテーション（4月1日、2日、8日）に出席して新入生の履修指導にあたり、4月17日頃まで新入生の履修登録等に関する質問に対応した。学業推薦の指定校追加に関しては、栃木県と新潟県の高等学校を分析して学科長に進言した（5月2日）。また、11月2日の保護者向け就活懇談会に出席した。

○文学部・歴史学科点検評価委員（2017年度～2024年度）
文学部および歴史学科の点検評価委員会のメール審議（2023年7月23日～30日、2025年2月7日～11日）に参加した。

○ヨーロッパ文化総合研究所副所長（2023年度～）
2024年度は東北学院大学ヨーロッパ文化総合研究所副所長として、研究所の実施計画に従事した。本年度は、公開講演会の実施に関する折衝（獨協大学伊豆田俊輔准教授）、公開講演会の司会および運営（7月6日、12月14日）に従事した。また、5月2日と11月7日にヨーロッパ文化総合研究所総会に出席し、2025年1月9日には2025年度の予算ヒアリングに出席した。資料調査では、2025年2月に名古屋大学附属図書館と経済学図書室で、ドイツ公文書のマイクロフィルムの調査を行った。

○一般入試問題（世界史）作成委員、校正委員、採点委員（2015年度～継続）
2024年度は、一般入試の日本史・世界史の「歴史総合」部分の問題作成（大問1つ）、校正（初校：10月7-9日、再校：10月28日-30日、三校：12月2-4日、念校：12月16日と18日、下見：1月21と23日）、採点（2022年2月1-3日、3月4日）に従事した。

○2025年度ヨーロッパ史分野の授業担当者の調整（2015年度～継続）
2025年度のヨーロッパ史分野の授業科目の担当者について、資料を準備した上で、2023年9月4日に調整の話し合いを行った。非常勤講師への依頼等を決定の上、決定内容を学科長に報告した。
また、「歴史学」の非常勤講師の欠員に対応するため、2025年2月に補充のため、候補者への依頼を担当した。

2024年度

所属	文学部　歴史学科	職名	准教授	氏名	木山　克彦	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	文学部　歴史学科	職名	准教授	氏名	吉植　庄栄	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
教員・学生・図書館の協働による自律的な学習者の育成	共著	2025年3月	2024年度「学長教育改革研究助成金・学長研究助成金」研究成果報告書	松村尚彦、吉植庄栄、斎藤渉、遠海友紀、曽根邦敏	pp.1-6
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	文学部　教育学科	職名	教授	氏名	稲垣　忠	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
生成AIの利活用	2023年4月1日～	メディアリテラシー教育論、教育の方法と技術、情報教育論等で生成AIを活用した指導の効率化、学生が生成AIを用いたメディア制作体験、生成AIに関する概論的解説等を行なった。
教育現場へのインターンシップの実施・運営	2022年4月～	文学部教育学科2年次科目「学習支援実践（インターンシップ）」にて、仙台市内の小学校および宮城県内の小学校に学生を派遣し、子どもとの関わりや学習支援について学ぶ授業の運営を担当した。
ルーブリックの活用	2020年～	「研究・発表の技法」において、ラーニングコモンズが作成したライティングルーブリックを学生に紹介し、レポート作成の際に参照するよう指示した。また、成績評価においてライティングルーブリックの一部を活用した。「教育工学実習」では学生自身がルーブリックを作成する学習活動を取り入れた。
学習支援システム（eラーニング）の活用	2020年～	教材公開，レポートやコメントの収集等が行える学習支援（eラーニング）システムmanaba courseを利用し，情報提供の効率化と学習評価との統合、学生へのフィードバックの充実等を図った（担当全科目）
デジタルポートフォリオの活用	2020年～	教職課程履修学生の学習履歴を把握できる「manaba-folio」を用いて学習履歴に基づく学習支援や授業中の課題提出，指導を行った（教職実践演習）
参加型授業の実践	2020年～	ワークショップ、ポスターセッション等参加型の学習活動を取り入れ，学習者の主体的な参加と協働を促す指導を実施した（教育の方法と技術、教育方法、ICT教育論、情報教育論、教職実践演習、メディアリテラシー教育論）
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
文学部FD研修会講師	2025年3月11日	大学の授業における生成AIの活用について
文学部FD研修会講師	2024年8月7日	インストラクショナルデザインと初等中等教育の授業変化について
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	①大学院生の論文指導の充実、学部3年、4年のゼミ生とのつながりを意識した指導 ②eポートフォリオの活用 ③新しいLMS（学習管理システム）の試用
今年度の進捗状況	①については、2名の修士論文の完成とともにその過程で3回の研究発表の機会があった。学部3年、4年の発表会で交流の機会を設け、4年生の1名は本学ではないものの大学院に進学した ②については、チューター面談で重点的に活用した ③については、新しいLMS（学習管理システム）の試用が2025年度からとなったため実践する機会はなかった ④「教育の方法と技術」において自由進度型の授業進行を試みた ⑤生成AIを授業での学生コメントの整理、グルーピングに活用した。メディアリテラシー教育論では学生が生成AIを使った作品づくりに取り組み、著作権やフェイク情報を考える機会とした
来年度の進捗目標	①新科目「ICT活用の理論と方法」についてテキストを刊行し、現在の初等中等教育におけるICT活用を過不足なく学べる授業を実践する ②生成AIの活用をゼミ指導に取り入れ、学生の研究計画の支援等に活用する ③eポートフォリオをゼミ指導に活用する ④大学院博士課程後期の学生および外国籍の博士課程前期の学生指導を指導することになったため、大学院生指導をさらに工夫する

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					

情報活用能力とは『情報活用能力ベーシック活用ガイドブック』	分担執筆	2025年3月	東洋館出版社	稲垣忠	pp.13-17
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
学習者主体の学びの現在地 ～「未来を創る教育セミナー」登壇者の実践から学ぶ	単著	2025年3月	教育総合研究所報告集(25)	稲垣忠	pp.21-30
「保護者向けGIGAスタンダード」の改善と「保護者向けGIGAスタンダード教育プログラム」の実証	共著	2025年2月	日本教育メディア学会研究報告集, 58	若林 雅子,稲垣 忠	pp.61-70
SINETを活用したGIGAスクール構想の推進とネットワーク強化	共著	2025年2月	日本教育メディア学会研究報告集, 58	清和田 順,稲垣 忠	pp.232-236
データを活用した探究学習の評価フレームワークの検討	共著	2025年2月	日本教育メディア学会研究報告集, 58	稲垣 忠,マース アレクサンダー,高橋 雄介,庭井 史絵,登本 洋子,住谷 徹,宮 和樹	pp.149-153
生成AIを用いた振り返りシステム「Ref-Layers」のメタ認知的方略使用への効果	共著	2024年10月	日本教育工学会研究報告集, 2024(3)	大沼 宙生,遠海 友紀,嶋田 みのり,稲垣 忠	pp.9-16
「保護者向け GIGA スタンダード教育プログラム」の 実践と評価	共著	2024年10月	日本教育工学会研究報告集, 2024(3)	若林 雅子,稲垣 忠	pp.87-94
探究学習における情報収集プロセスの可視化方法の検討	共著	2024年7月	日本教育メディア学会, 日本教育メディア学会研究会論集, 57	稲垣 忠,マース アレクサンダー,庭井 史絵,登本 洋子	pp.96-101
生成 AI を用いた PBL シミュレーターの開発	共著	2024年5月	日本教育工学会研究報告集, 2024(1)	稲垣 忠,平井 聡一郎,佐藤 雄太	pp.201-208
NHK for School視聴情報可視化システムから得た視聴ログによる分析	共著	2024年5月	日本教育工学会研究報告集, 2024(1)	岡本 恭介,半田 柊斗,稲垣 忠	pp.223-228
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
学習環境の多様性・柔軟性・開放性『挑戦し続ける学校SOLAN: 自立・自律した学習者のための教育をつくる』	分担執筆	2025年1月	さくら社	稲垣忠	pp.116-120
教育DXの有効活用～個別最適な学びを進めるために『Educasphere』	分担執筆	2024年11月	全国公立学校教頭会, 14	稲垣忠	pp.14-15
教師と生徒がともにつくる挑戦と探究のサイクル『PBLのカリキュラムデザイン 中学生が主体的に創造する探究的な学び』	分担執筆	2024年8月	明治図書出版	稲垣忠	pp.2-4
テクノロジーと学校のビジョン『SCHOOL SHIFT 2 あなたが未来の「学び」を創出する』	分担執筆	2024年8月	明治図書出版	稲垣忠	pp.14-33
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
探究学習の情報収集活動における情報の蓄積・可視化・共有を支援するWebサービスの開発	共同	2025年3月	日本教育工学会2025年春季全国大会(東京)	稲垣 忠, MAAS, Alexander, 登本 洋子, 庭井 史絵	pp.219-220
情報活用能力育成を重視する学校の教員における学習指導に関する意識の特徴	共同	2024年10月	日本教育メディア学会 第 31 回年次大会(鹿児島)	小林祐紀, 秋元大輔, 稲垣忠, 佐藤幸江, 佐和伸明, 渡辺浩美, 中川一史	pp.24-27
探究学習で利用される資料の種類と記録法	共同	2024年9月	日本図書館情報学会第72回研究大会(つくば)	庭井史絵, 稲垣忠, Maas Alexander, 登本洋子	

Exploring API Services to Enhance Information Collection in Inquiry Learning	共同	2024年9月	日本教育工学会 2024 年秋季全国大会(仙台)	Maas, A., Noborimoto, Y., Niwai, F., Itagak, S., Inagaki, T., Horita, T.	pp.607-608
「保護者向けGIGAスタンダード教育プログラム」の開発	共同	2024年9月	日本教育工学会2024年秋季全国大会(仙台)	若林 雅子, 稲垣 忠	pp.477-478
探究的な学習における情報収集を支援するシステム開発のための予備調査	共同	2024年9月	日本教育工学会2024年秋季全国大会(仙台)	登本 洋子, ALEXANDER, Maas, 庭井 史絵, 板垣 翔大, 稲垣 忠, 堀田 龍也	pp.273-274
学習者の探究に向かう態度と授業者による総括的評価の相関	共同	2024年9月	日本教育工学会2024年秋季全国大会(仙台)	金森 千春, 斎藤 貢市, 稲垣 忠	pp.197-198
学習者特性に基づくデジタルドリルの活用傾向の調査	共同	2024年9月	日本教育工学会2024年秋季全国大会(仙台)	志野 奈美子, 吉岡 美穂, 村上 壮, 藤沢 友己, 寺嶋 浩介, 稲垣 忠, 佐藤 靖泰	pp.97-98
GIGAスクール構想下における子どもの端末活用と資質・能力の育成に関する教員の意識との関連	共同	2024年9月	日本教育工学会2024年秋季全国大会(仙台)	岡部 悟志, 木村 治生, 稲垣 忠	pp.37-38
生成AIを用いたPBLシミュレーターのログと評価の分析	共同	2024年9月	日本教育工学会2024年秋季全国大会(仙台)	稲垣 忠, 佐藤 雄太	pp.189-190
Developing a System for Visualizing and Evaluating Information Collection in Inquiry Learning	共同	2024年8月	22nd International Conference for Media in Education ICoME 2024(Tokyo)	Maas, A., Noborimoto, Y., Niwai, F., Itagak, S., Inagaki, T., Horita, T.	pp.250-253

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	①内閣府SIP(戦略的イノベーション創造プログラム)において学習評価に関する研究を行っている。2024年度は研究員を雇用し、教育データを活用した学習評価に関する研究を推進する ②教育データ・生成AIの活用に関するプロジェクトを開始したため、関連する研究成果の発表・報告を行う ③引き続き各地の教育委員会、学校と連携した研究指導等を行う
今年度の進捗状況	①については、研究員および共同研究者との協力のもと、新たな学習支援システムを開発し、7本の学会発表・研究報告を行うこおができた。また、外部アセスメントと教育データの組み合わせの調査、オープンバッジの実証など、新しいテーマへと展開することができた。 ②については、2回の研究発表の他、生成AIに関する教育イベントへの登壇、教育現場での活用が進んだため、解説とともに事例を収録した著書の執筆を開始した。 ③については、各地の教員研修をオンライン、対面で実施した。②の成果をいかし、受講者の授業づくりを支援する生成AIの活用に取り組んだ
来年度の進捗目標	①については、開発したシステムの実証とともに、国際学会を含む論文投稿を進めていく。アセスメントに関しては共同研究者が開発しているシステムと連携させる。オープンバッジは継続的な実証を行う。 ②については、著書を刊行するとともに、研究教員研修での活用を進める。教育データ・生成AIの活用に関するプロジェクトを開始したため、関連する研究成果の発表・報告を行う。 ③引き続き各地の教育委員会、学校と連携した研究指導等を行う。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
競争的資金等の外部資金による研究 戦略的イノベーション創造プログラム	2023年度～2028年度	共同(研究代表者)	「デジタルツインを用いた個別最適な学び方・働き方の実現」(代表者 緒方広明・京都大学)の主たる共同研究グループとして実施

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2025年3月～	日本教育工学会 大会企画委員会副委員長
2024年10月～	教育メディア学会 年次大会副委員長
2024年6月～	文部科学省「各学校・課程・学科の垣根を超える高等学校改革推進事業」委員
2024年4月～2025年3月	日本教育工学会 重点領域副委員長

2023年5月～	文部科学省「デジタル教科書・デジタル教材等の通信環境の調査研究事業」事業推進委員
2023年4月～	文部科学省 学校DX戦略アドバイザー アドバイザー
2023年4月～	文部科学省 次世代の学校・教育現場を見据えた先端技術・教育データの利活用推進（最先端技術及び教育データ利活用に関する実証事業） 企画評価会議委員
2022年7月～	山形県小国高校「新時代に対応した高等学校改革推進事業」運営指導委員
2022年4月～	仙台市教育委員会確かな学力育成プラン検討委員会 副委員長
2022年4月～	仙台市教育委員会仙台市GIGAスクール推進協議会 委員長
2021年10月～	日本教育方法学会 会員
2021年5月～	文部科学省「児童生徒の情報活用能力の把握に関する調査研究」企画推進委員
2021年4月～2024年10月	教育メディア学会 研究委員会委員長
2020年7月～	一般財団法人ジャパンアートマイル 理事
2020年4月～	日本教育工学会 理事
2019年5月～	日本教育情報化振興会情報活用能力の授業力育成事業 委員
2018年9月～	経産省「未来の教室」実証事業教育コーチ 委員
2017年10月～	CRET（教育テスト研究センター）教育テストの評価・解説・活用研究 委員
2017年1月～	CRET（教育テスト研究センター） 教育テストの評価・解説・活用研究委員 委員
2012年4月～	仙台市教育委員会「教育の情報化研究委員会」有識者委員
2012年4月～	NHK 学校放送番組「歴史にドキリ」番組委員 委員
2012年4月～	教育メディア学会 理事
2010年7月～	仙台市教育委員会 仙台版『たくましく生きる力』育成プログラム開発検討会議委員 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

①学長特別補佐（教学改革担当）
②ラーニングコモンズ副所長
③教養教育センターアクティブラーニング部門長
④DX推進委員会 学修データ利活用部会長

2024年度

所属	文学部　教育学科	職名	教授	氏名	加藤　卓	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
教育学入門演習の授業内容の改善と向上	2023年9月～	研究者としての書籍の読み方，レジュメの作成方法，プレゼンの仕方などについて演習を行い，レポートの構成方法や書き方について，記述力を向上させるワークシートを複数作成し，繰り返し学生に記述させることを通して，記述スキルを向上させている。また，プレゼンテーションのスライドに必要な基本的項目を明確にして詳細に指導を行い，プレゼンテーションの技能を的確に向上させている。
ICT教育実践の授業内容の改善と向上	2020年4月～	研究者や教員として，多忙な業務を効率的に行い，効果的な授業ができるよう，必要されるICTモラル・ICTスキルを修得させるようにしている。
初等教科教育法（算数）の授業内容の改善と向上	2019年10月～	初等教科教育法（算数）の授業において，新学習指導要領による幼児教育から高学年に至るまで算数の教育内容と指導方法について指導した。また，よくある学習のつまずきに対してどのように対処すればよいかを指導した。また，模擬授業を通し，指導案の作成力と実践的な指導力を育成した。
算数概説の授業内容の改善と向上	2019年4月～	算数の授業において，事前学修に進んで取り組ませ，幼児教育から高等教育に至るまで数学の系統を俯瞰できるように，広範な内容を指導した。
教員独自の学習活動に関する詳細なデータを集め，的確な評価を行っている。	2018年4月～	出席確認，授業への準備物，事前学修，発言などについて，授業中にバーコードリーダーを活用してデータを収集・蓄積し，形成的評価と指導に生かし，学生の努力を的確に反映する学期末評価を行っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
「教員採用試験対策講座」(正規教育課程外)のイントラネットサイトの作成・運営	2019年5月～	「教員採用試験対策講座」(正規教育課程外)を欠席した受講生や後日さらに学習したい受講生が，自学・自習に取り組めるように，イントラネットサイトの作成・改訂に努め，学習環境の構築を図った。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
NEW EDUCATIONAL CONTENT AND LESSONS ON IDENTIFYING NETS OF CUBE IN HEXOMINOES	単独	2024年7月	15th the International Congress on Mathematical Education(Sydney, Australia)	Takashi KATO	
H．翻訳（学術書や原典等）					

Ⅰ. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2020年3月～		数学教育学会　学会誌編集委員	
2020年2月～		日本STEM教育学会 会員	
2019年10月～		数学教育学会　幼稚園・小学校部会担当	
2019年4月～		数学教育学会　代議員	
2004年～		数学教育学会　正会員 会員	
1998年7月～		遠隔数学実践教育研究会 企画立案・運営等	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	文学部　教育学科	職名	教授	氏名	紺野　祐	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
講義形式科目の毎授業終末における小レポートの活用	2020年4月1日～	アクティブ・ラーニング型授業のひとつの展開として、講義形式の授業すべてにおいて，授業終末に manaba の「レポート」機能を活用して小レポートを書かせている。その内容をA4判プリント1枚程度にまとめ，翌週の授業冒頭で扱い，復習と発展的学習に役立てている。またこれは，学生個人の評価（関心・意欲・態度）にも反映される。
予習促進のための調べ学習「事典課題」の導入	2014年4月～	テキストを使用する講義においては、予習の確実な促進のために、テキストにおける語句の意味やその背景および関連する事項等について、辞書類やウェブを使用・利用した調べ学習「事典課題」を行わせている。その成果の写しを各セメスターで2回回収し、取り組み状況を確認したうえで、成績評価に組み込んでいる。
「道徳の時間」の授業のビデオ参観による授業づくりの理解の促進	2014年4月～	教職課程の授業「道徳教育研究」では、「道徳の時間」の授業づくりの要点を理解させるため、同授業のビデオを提示し、進行に合わせて解説を加えることで、学生による授業づくりの理解を促進している。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	①一時間の授業（講義）において、前時終了時に課した小レポートに基づく復習内容と当日・当該授業時の学習内容とを有機的に連携させ、授業としての一体感を強める。 ②授業（講義）終了時に課した小レポートについて評価上のルールを定め、受講学生にはそれを意識させた小レポート作成を求める。 ③授業（講義）において、概念や歴史に関する学習事項を適切に図式化して提示することで、学習内容の理解と定着をはかる。
今年度の進捗状況	①受講学生の小レポートに基づき毎時「コメントから」のプリントを作成し、その復習内容を当日・当該授業時の学習内容に関連させる導入を意識的に行ったことから、上記の目標はおおむね達成されたと見られる。 ②受講学生が小レポートを作成する際のガイダンスをオリエンテーション時にていねいに行ったところ、形式的に問題の少ない小レポートが提出されている。このことから、上記の目標はおおむね達成されたと見られる。 ③授業（講義）では、作成した講義ノートをPDFファイル化し、MicrosoftのOneNoteを使用して投影した。この授業方法は受講学生に概して好評であり、上記の目標はおおむね達成されたと見られる。
来年度の進捗目標	①授業（講義）においては、受講学生が即時的な学習内容を視覚的に把握しやすくするため、MicrosoftのOneNoteを用いた授業進行を基本とする。 ②授業（講義）においては、評価の観点別の点数配分を見直すことにより、受講生の学修成果のより公平な評価を試みる。 ③授業（演習）においては、受講学生の興味・関心に応じて、多面的・多角的な学習および卒業研究の作成を支援する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
教育評価と「教育の目的」：「学習化」した時代におけるひとつの危機	単著	2025年2月	東北学院大学学術振興会，東北学院大学　教育学科論集(7)	紺野　祐	pp.1-20
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					

G. 学会における研究発表			
H. 翻訳（学術書や原典等）			
I. 特許			
現在の課題・目標	①教育人間学の新たな展開について，これまでの研究を単著としてまとめる。 ②人間の道徳性に関する自然主義的な研究に着手する。		
今年度の進捗状況	①「教育」概念のいっそうの精緻化を図るべく、研究論文「教育評価と「教育の目的」:「学習化」した時代におけるひとつの危機」をまとめることができた。このことから、上記の目標の一部は達成できた。 ②「価値」および「価値観」の概念、ならびに価値に対応する心の働き（志向性）について、資料収集を継続した。		
来年度の進捗目標	①「教育」概念のいっそうの精緻化を図るために、「教育」「教育する」概念と「教授」「教える」概念との差異に関する考察を進める。 ②「価値」および「価値観」の概念、ならびに価値に対応する心の働き（志向性）について、いっそうの資料収集を進める。		
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2024年3月～	東北教育学会 会員		
2023年9月～	東北教育哲学教育史学会 事務局長		
2012年9月～	東北教育哲学教育史学会理事・編集委員 会員		
2003年8月～	日本教師教育学会 会員 会員		
1990年4月～	東北教育哲学教育史学会 会員		
1990年4月～	東北教育哲学教育史学会 会員 会員		
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			
文学部長（2021年4月～）			

2024年度

所属	文学部　教育学科	職名	教授	氏名	佐藤　正寿	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学校における場面設定をもとにした学級経営・生徒指導の実践の構想	2024年～	
良質なデジタル・コンテンツを生かした授業デザインの工夫	2023年～	学校教育に関わる良質なデジタル・コンテンツを適宜活用し、その内容を理解するだけでなく、得られた知見をディスカッションする授業デザインを工夫している。
個に応じた学習指導案作成・模擬授業づくりの取り組み	2023年～	「初等教科教育法（社会）」「授業づくり実践」において、一人一人との対話および指導案へのコメントをしながら、個に応じた学習指導案および模擬授業づくりに取り組んでいる。
受講生全員へのコメントによる学びのフォローの取り組み	2022年～	「初等教科教育法（社会）」「社会概説」「学級経営論」「学級経営・生徒指導実践」「学校経営・協働教育実践」「教育学演習」「卒業研究」において、毎回課している課題に対して受講生全員へコメントを行い、学びのフォローを行う。
学級における「場面指導」を想定した演習活動の取り組み	2022年～	「学級経営論」「学級経営・生徒指導実践」において、具体的に学級内で想定される場面指導について、演習形式でグループごとに発表し意見交流を行う。
実務家教員として小学校教員の経験を生かした取り組み	2020年～	「現代教職論」「学級経営論」「学級経営・生徒実践」「初等教科教育法（社会科）」において，小学校教員の経験をもとにした具体的な資料等を提示し，グループワークの助言に生かした。
視聴覚機器を用いた教材の提示	2018年～	視覚的効果を目的として，教材やポイントとなる内容をプレゼンテーションソフトや動画を使って提示を行った。
書き込み式テキストの作成	2018年～	全ての授業において，書き込み式テキストを毎回作成し準備をする。
参加型の講義	2018年～	ワークショップ型の学習活動を1コマに間に複数回取り入れ，学習者が主体的・対話的に学ぶ環境づくりに努めた。
講義のねらいと評価の明確化	2018年～	講義の冒頭に講義のねらいを提示し，本時間のゴールを的確に示し，終盤ではねらいが達成できたかどうかの自己評価を学生に行った。
学校現場のフィールドワークを生かした学び	2018年～	「現代教職論」「研究・発表の技法」等において，小学校での一日学校体験や授業参観等のフィールドワークを行い，その経験を事後のレポートにまとめさせた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
「教育方法とICT」共著　第7章 授業技術	2023年11月～	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	1　学びへの意欲を喚起する参加型講義の開発 2　ルーブリックと連動させた評価の充実 3　個別最適な学びを目指した学生個々のコメント評価の継続 4　学校現場の経験を生かしたゼミ活動・ボランティア活動の充実 5　実務家教員としての学校訪問（研究指導）の成果の還元
今年度の進捗状況	1については参加活動形態を様々な方法で実施し，効果を確認できた。特に授業においてワークショップ活動を取り入れるだけではなく、意図的なグループ編成を行うことで充実した内容となった。 2については授業内容だけではなく事前学修と事後学修の課題をルーブリックを意識したものとした。その結果学生たちも振り返りレポート内容の質が向上した。 3については、8科目において事後レポートへのコメントを継続することができた。特に初等教科教育法社会においては積極的に学び方について言及をした。また、学生のレポートを次回でコメントともに紹介することで事後レポートへの意欲も高まった。 4については、特に卒業論文において学校現場からアンケート調査をしたり、観察をしたり、現場の教師にインタビューする等して完成させた学生が増え、データ提示の説得力のある充実した卒業論文となった。 5については、訪問した学校の先進的な実践事例を授業内で紹介し、学生たちに最新の情報を具体的に提示することができた。特日「個別最適な学びと協働的な学び」についての具体事例の理解が進んだ。

来年度の進捗目標	充実した教育活動ができたと考えるので、基本的には来年度も1～5の内容を継続する。 特に自分の強みである3～5については、より充実した内容とかるように工夫をしていきたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
小学校における教育実践とその特性 ―社会科教科書の伝統文化内容―『文化創造としての和文化教育 ー過去・現在・未来の絆を紡ぐー』	単著	2024年11月	風間書房	佐藤正寿	pp.141-148
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
小学校社会科において問題を発見し解決していく力を身につけるために『教育展望』	単著	2025年3月	一般財団法人　教育調査研究所, 71	佐藤正寿	pp.25-31
社会科で目指す「多様な学び方」が活きる授業力	単著	2024年12月	第10回日本授業UD学会全国大会抄録	佐藤正寿	pp.
大人もハマる！社会科面白教材発掘の基礎スキル 教師自ら楽しみ追究する『明治図書出版』	単著	2024年7月	明治図書出版, 793	佐藤正寿	pp.4-9
成功する社会科授業開き・大切にしたい5つのポイント「その後」を見通した授業開きを『社会科教育』	単著	2024年4月	明治図書出版, 780	佐藤正寿	pp.4-9
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
小学校社会科教科書における伝統文化に関する資料の内容と傾向	単独	2024年12月	第21回和文化教育全国大会(兵庫教育大学（兵庫県）)	佐藤正寿	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	次のテーマで研究活動を行っている。 1　社会科教科書の分析（特に「伝統と文化」にかかわる内容） 2　多様な学びと学びのユニバーサルデザインとの関係 3　教師の学級経営観の形成 これらについて、論文化や学会発表、学校における調査活動に取り組んでいる。
今年度の進捗状況	1については「小学校社会科教科書における伝統文化に関する資料の内容と傾向」として学会発表を行った。また、「小学校における教育実践とその特性 ―社会科教科書の伝統文化内容―」という論文を発表した。さらに自分が執筆者である中学校社会科教科書も発刊された。 2については、「社会科で目指す「多様な学び方」が活きる個と協働の学び」という形で学会で講演し、提案を行った。また、各種社会科教育研究大会で類似テーマで講演を行った。 3については、14校の小中学校に指導助言で入り、実際に教室を参観して調査を深めることができた。また、教育関連雑誌でその成果を発表した。
来年度の進捗目標	上記の1～3のテーマについて継続する。特に1については、教科書研究の幅を広げ、「伝統と文化」以外の内容と中学校教科書研究も対象とする。また、2の学びのユニバーサルデザインは具体的に取り組んでいる学校を研究調査する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年7月～	NHK学校放送番組 3・4社会科「さすらいのとどうふ犬シロウ」 番組委員
2024年～	京都女子大学附属小学校校内研究会指導講師 講師

2024年～	富山県高岡市立野村小学校校内研究会指導講師 講師
2024年～	富山県小矢部市立津沢小学校校内研究会指導講師 講師
2024年～	仙台市立国見小学校校内研究会指導講師 講師
2023年～	岩手県奥州市立東水沢中学校校内研究会指導講師 講師
2023年～	愛知県小牧市立村中小学校校内研究会指導講師 講師
2023年～	船橋市立薬円台南小学校校内研究会指導講師 講師
2023年～2024年	岩手県奥州市立佐倉河小学校校内研究会指導講師 講師
2022年12月～	仙台市立北六番丁小学校学校運営協議会 委員
2022年12月～	仙台市立七北田小学校学校運営協議会 委員
2022年4月～	NHK学校放送委員（小学校5年社会科） 委員
2022年～	富山県小矢部市立蟹谷小学校校内研究会指導講師 講師
2022年～	岩手県岩泉町立岩泉小学校校内研究会指導講師 講師
2021年12月～	仙台市立泉松陵小学校・松陵中学校学校運営協議会 委員
2021年～	日本カリキュラム学会 会員
2019年～	NPO法人全国初等教育研究会セミナー講師(NPO法人全国初等教育研究会セミナー) 講師
2019年～	仙台市立北六番丁小学校校内研究会指導講師(仙台市立北六番丁小学校校内研究会) 講師
2019年～	和文化教育学会 会員
2019年～	NHK学校放送番組（Eテレ「社会にドキリ」，メディア学習） 委員
2018年～	日本学級経営学会
2017年～	日本授業UD学会UDカレッジ 指導講師 企画立案・運営等
2017年～	日本授業UD学会
2016年～	日本教育工学会 会員
2016年～	全国社会科教育学会 会員
2016年～	日本社会科教育学会 会員
2015年～	岩手県立総合教育センター特別支援講座講師(岩手県立総合教育センター特別支援講座) 講師

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
文部科学省検定済教科書令和7年度版「中学社会地理」「中学社会歴史」「中学社会公民」（教育出版）		2025年3月～	
文部科学省検定済教科書「小学社会3」「小学社会4」「小学社会5」「小学社会6」（教育出版）		2024年3月～	

現在の課題・目標	・小中学校への定期的な研究指導 ・研究会を通じての現場教員への支援 ・学校協議会運営委員として学校経営への参与 ・文部科学省検定済中学校社会科教科書の作成協力
今年度の進捗状況	・14校の小中学校の研究指導に定期的に入り、授業力・学級経営力向上の指導を行った。また、各種研究会からの依頼についても対応し、可能な限り自分の知見を学校教育界に還元した。 ・2校の学校協議会運営委員として助言を行った。 ・文部科学省検定済中学校教科書の発行に携わった。
来年度の進捗目標	・小中学校の研究指導は本学における授業の事例収集、論文の調査も兼ねているので、継続していく。 ・各種研究会では最新の教育事情を伝えることができるように努める ・2校の学校協議会運営委員も継続する。

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	文学部　教育学科	職名	教授	氏名	清多　英羽	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
アクティブラーニングの実施	2023年4月1日～	
双方向の授業実践	2020年4月1日～	パワーポイントの動画を作成した。学生のレポートを講義ごとにフィードバックした。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
全国における類型別ビオトープの特長と現状についての考察	単著	2025年2月	東北学院大学　教育学科論集(7)	清多英羽	pp.21-27
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 若手研究	2022年度～	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年4月～	こども環境学会 会員
2023年4月～	東北教育哲学教育史学会 事務局会計
2019年8月～	全国学校・園庭ビオトープコンクール2019 補足調査員（日本生態系協会） 委員
2013年7月～	日本こども学会 会員
2013年4月～	日本道徳教育学会 会員

1996年4月～		東北教育哲学教育史学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	文学部　教育学科	職名	教授	氏名	長島　康雄	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	文学部　教育学科	職名	教授	氏名	村野井　仁	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
観点別評価の実施	2021年4月1日～	担当科目の評価に関しては，評価の観点ごとに評価規準（到達目標）を明示し，総合的な評価を行っている。教職科目、英語科目については課題ごとにルーブリックを作成し、形成的評価に活用している。
協同的学習の実施	2021年4月1日～	演習、英語科目および教職科目において，グループ活動を取り入れ，学生が主体的に協同学習を行う機会を作っている。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
高等学校用文部科学省検定教科書英語コミュニケーションCrossroads編集・執筆	2016年4月～	Genius English Communication I-III改訂版及びCrossroads English Communication I-III（大修館書店)の編集・執筆（編集代表）
講義資料ハンドアウトの作成	2013年4月1日～	担当するすべての科目において配付資料を作成し活用している。
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
文部科学省検定済教科書の編集	2020年4月1日～	小学校外国語検定教科書New Horizon Elementary English Course 1-2 及び中学校外国語検定教科書New Horizon English Course 1-3(東京書籍）の編集協力者、高等学校外国語（コミュニケーション英語I-III）検定教科書Genius English Communication改訂版I-IIIの編集代表を務めている。

現在の課題・目標	・講義・演習では一方的な知識注入型の講義ではなく，理解し，考え，そして伝える力を伸ばすよう協同学習的な活動を取り組んで指導方法を工夫している。 ・到達目標を明確に示し，妥当性の高い評価を行うようにしている。 ・学生の学ぶ意欲高めるため，教材・授業形態を工夫している。
今年度の進捗状況	・学生の授業評価結果から判断して，講義・演習での工夫は一定の成果を上げていることがわかった。特に英語科教育法（概論）及び英語教育学概論において協同学習の機会を増やしたことは効果的であった。 ・全ての科目においてある程度妥当性の高い評価を行うことができた。 ・学生の授業評価結果から判断して，学生の学ぶ意欲高めるための工夫は一定程度成果を上げていることがわかった。
来年度の進捗目標	・講義・演習において，理解し，考え，そして伝える力をさらに伸ばすよう指導方法を改善する。特に学生の自律性を高める支援をしていく。演習、卒業研究の質を高める。学生の名前をできる限り覚える。 ・到達目標を授業内容に合わせて再度見直し，さらに妥当性、信頼性、実用性の高い評価を行うようにする。 ・学生の学ぶ意欲をさらに高めるため，協同学習，プロジェクト型学習を取り入れて教材・授業形態を工夫する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
『高等学校外国語科用文部科学省検定済教科書Crossroads English Communication III』	共著	2024年4月	大修館書店	村野井仁, Marcel Van Amelsvoort, 大田悦子, Lara Promnitz-Hayashi, 松尾美幸, 矢野賢, 前田昌寛, 西室雅央	pp.1-160
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					

G. 学会における研究発表					
これからの応用言語学研究がなすべきこと：次世代へのメッセージ	共同	2024年12月	大学英語教育学会第7回JAALin JACET学術交流集会(京都市)	小田眞幸、竹内理、村野井仁	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許	
現在の課題・目標	1 第二言語習得に関する単行本執筆を進める。 2 認知比較を中心とした第二言語習得についての研究を進める。
今年度の進捗状況	1 第二言語習得に関する単行本出版企画を準備中であり、現在原稿執筆中である。 2 認知比較を中心とした第二言語習得についての研究成果の発表準備をしている。
来年度の進捗目標	1 第二言語習得に関する単行本の原稿を完成する。 2 認知比較を中心とした第二言語習得についての研究成果をまとめ，論文発表する。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動	
2023年6月～2025年3月	大学英語教育学会(JACET) 第1号事業委員会セミナー担当運営委員
2019年～	大学英語教育学会(JACET) 東北支部副支部長
2018年3月～	小学校英語教科書New Horizon Elementary（東京書籍） 編集協力者
2016年～	高等学校検定教科書英語コミュニケーションI-III Crossroads（大修館書店）編集委員会 編集代表
2003年～	アジア英語教育学会 会員
2002年～	日本第二言語習得学会 会員
2001年～	文部科学省検定教科書中学英語New Horizon English Course（東京書籍） 編集協力者
1987年～	大学英語教育学会(JACET) 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動
副学長（学務担当） 教学組織改編推進室長 全学教育機構長 オープンキャンパス実施委員長 ワンダーフォーゲル部部長

2024年度

所属	文学部　教育学科	職名	教授	氏名	ロング　クリストファー	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2017年～	Language in Society 査読委員
2017年～	Discourse, Context & Media 査読委員
2016年～	East Asian Pragmatics 査読委員
2016年～	Journal of Politeness Research 査読委員
2011年～	Journal of Pragmatics 査読委員
1998年～	社会言語科学会　会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2024年度

所属	文学部　教育学科	職名	教授	氏名	渡辺　通子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
国語科教育におけるアクティブラーニング型授業の工夫	2023年4月～	教員養成における国語科教育の在り方について、受講者が実践の場で活用できるようにするために、言語活動を組み入れる指導方法で実施している。国語科教育は母語を中心とする教科であり、言語が子供の認知能力や思考能力の育成に結びついていることを重視するためである。
アクティブ・ラーニング型の授業作り	2023年4月～	これまで進めてきたワークショップ型授業やグループごとの課題探究学習を継続して組み入れた授業づくりを心掛けた。また、15回のうち最低1回は、授業の事前学習や事後学修に資するようmanabaのプロジェクト機能を活用する会を設定した。2022年度より前面対面授業に戻ったが、一部受講生にはZoomによる受講があった。教室と遠隔地とで、同時進行で授業を進めることにはよりスムーズに進める工夫を要する。
学修意欲の喚起と主体的学修のための工夫	2023年4月～	大学提出のシラバスとは別に，日程表や進め方，レジュメ様式を提示した授業用のシラバスを作成し提示することで、受講生の主体的学修を促している。
manabaコースを活用した授業づくり	2023年4月～	manabaコースの活用は年度ごとに増えている。本年度は個別指導機能を活用することで、受講生とのコミュニケーションが増えた。但し、詳細な確認事項等はオフィスアワーで再確認している。 前々年度からの継続課題は、①正確・公正な出席の確認と、②評価対象としての提出物増加に伴う授業評価の公正性・妥当性・客観性をどのようにするか、まだどのようにして効率化を図るかである。
2．作成した教科書、教材、参考書		
言語活動中心　国語概説【改訂版】ー小学校教師を目指す人のために―　学文社	2022年3月30日～	第13章　コミュニケーションの力【改訂】担当
新たな時代の学びを創る　中学校高等学校国語科教育研究	2019年9月26日～	Ⅳ3－1－1「思考力、判断力、表現力を育てる授業作り　話すこと・聞くこと」執筆（2019．全国大学国語教育学会編　東洋館出版社）
国語科重要用語辞典	2019年～	第4部「【歴史】57　話すこと・聞くことの指導」執筆（2015．高木まさき・寺井正憲・中村敏雄・山本隆春編、明治図書出版）
小学校教育課程実践講座国語	2019年～	「7章2節　汎用的な言語能力の育成」執筆担当（2017．樺山敏郎編　ぎょうせい）
言語活動中心　国語概説ー小学校教師を目指す人のために―	2018年9月15日～	初等教育に必要とされる日本語に関する基礎知識である科目「国語」について、小学校教員養成のためのテキストとして開発した。「13章　コミュニケーションの力」執筆担当（2018．岩崎淳・木下ひさし・中村敏雄・山室和也編、学分社）
『教職エッセンシャル』（学文社）	2013年8月～	2013年度より新規開講の「教職実践演習」（4年次後期対象）に対応した教科書である。 Part4－2執筆担当。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
教員採用試験対策講座「国語」を担当した	2019年4月～	
鹿嶋市小中一貫教育検討委員会でアドバイザーを務めた	2015年11月24日～	小中一貫教育を推進していく上でのグランドデザイン構想についての助言をした。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数

A. 学術書	
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）	
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）	
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文	
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）	
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）	
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）	
G. 学会における研究発表	
H. 翻訳（学術書や原典等）	
I. 特許	
現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年7月	俳句学習に関する新聞報道取材(読売新聞)
2018年～	小中一貫教育推進委員会小中一貫教育推進委員会アドバイザー 助言・指導
2015年11月～	鹿嶋市小中一貫教育検討委員会アドバイザー 委員
2014年7月～	第17～24回白鳥省吾賞審査員(第17～24 回白鳥省吾賞審査員) 寄稿
2014年～	第16 回～　白鳥省吾賞審査員 委員
2013年4月～	読書学会 会員
2009年9月～	日本教育学会 会員
2002年4月～	日本教科教育学会 会員
2001年4月～	国語教育史学会
2001年4月～	コミュニケーション学会 会員
1998年4月～	早稲田大学国語教育学会 会員
1996年4月～	全国大学国語教育学会 会員
1995年4月～	日本国語教育学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	文学部　教育学科	職名	准教授	氏名	大友　麻子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
参加型授業の実施	2018年4月～	・演習形式の科目はもちろん、講義形式の科目においても、ワークショップ型の活動を組み込むことにより、学生が主体的・対話的に学習できる機会を多く持てるように努めた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
小学校教員のための中学英語免許取得認定講習コーディネーター	2022年1月～	
中学校外国語検定教科書New Horizon English Course 1-3（東京書籍）編集協力者	2020年4月1日～	
教員採用試験対策講座 英語Ⅰ	2020年～	中高英語の教員志望者を対象に、教採対策として「リーディング力の育成」の講座を行っている。
教員採用試験対策講座 英語Ⅱ	2020年～2024年	中高英語の教員志望者を対象に、教採対策として毎年計5～10コマの講座を行った。
宮城県中学校・高等学校英語科研修会	2018年～	宮城県教育委員会主催「中学校・高等学校英語科研修会」にて授業実践についての講評を行った。

現在の課題・目標	1．グローバル教育センター副センター長として、留学生の派遣と受入れがより活発に行われるよう、対策を講じる。 2．「教育英語学概論」では、学生が理論と実践の有機的な繋がりをより明確に意識できるよう、講義の仕方を工夫する。
今年度の進捗状況	1．今年度はグローバル教育センターが新設され、副センター長としてセンター業務にあたった。留学生派遣については、「海外研究A」の計画を立て、来年度実施できる見込みとなった。留学生受入れについては、入試方法の改善、交換留学生向けの新受入れプログラムの立案、ホームページの改良などを行い、本学の国際交流の促進に努めた。 2．「教育英語学概論」の講義の仕方としては、学生にとって身近で具体的な話題から始め、そこから徐々に専門的な内容へと繋げていくことで、学生の興味と理解を深めるよう工夫を行った。本科目の内容をきっかけとしてゼミの所属を決めた学生も多く、一定の効果があったと思われる。
来年度の進捗目標	1．引き続きグローバル教育センターの運営にあたり、本学の国際交流の促進に努める。特に留学生の受入れ体制を強化したい。 2．卒業論文のテーマを途中で変更し、完成が遅れる学生もいることから、計画的なテーマ設定、調査、分析、執筆を促すための指導と支援を行いたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
子ども向け文学作品における日英対照分析ーマーガレット・ワイズ・ブラウン『たいせつなこと』を例にー	単著	2024年7月	日本総合文化研究会 The JAIAS Journal(24)	大友麻子	pp.43-62
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
広告宣伝に見る日本語と英語の視点（2024年度東北学院大学文学部教育学科連続公開講義「メディアと英語教育」）	単著	2025年3月	東北学院大学学術振興会，東北学院大学教育学科論集，7	大友麻子	pp.31-33
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					

E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）	
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）	
G. 学会における研究発表	
H. 翻訳（学術書や原典等）	
I. 特許	
現在の課題・目標	昨年度までに収集した日英の絵本のデータ等を用いて、引き続き日英対照研究を行う。
今年度の進捗状況	昨年度までに収集した日英の絵本のデータ等を用いて日英対照分析を行い、論文として発表することができた。
来年度の進捗目標	今年度までの絵本データ分析による日英対照研究の成果を拡張し、認知言語学の理論を適用することで、日本語と英語の言語表現における認知的特性をさらに明らかにする。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2024年11月	東北学院大学文学部教育学科公開連続講義講師 講師
2024年8月	中学校・高等学校英語科研修会 助言・指導
2024年8月	宮城県教科書審査会 外部委員
2023年12月～	表現学会 会員
2023年9月～	日本言語文化学会 会員
2023年9月～	絵本学会 会員
2020年7月～	大学英語教育学会東北支部 紀要編集委員
2018年11月～	東京書籍　中学校英語教科書NEW HORIZON編集協力者 委員
2018年4月～	大学英語教育学会 会員
2018年～	Australian Linguistic Society 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

1. グローバル教育センター副センター長
2. 教職課程センター運営委員
3. 教職課程センター所員
4. AO入試委員
5. 教育学部教育学科(仮称)設置準備委員

2024年度

所属	文学部　教育学科	職名	准教授	氏名	清水　遥	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
連携協力協定に基づく「仙台イングリッシュ・キャンパス」	2023年～	
連携協力協定に基づく「 イングリッシュ・キャンプin美里 」	2022年～	
東北学院大学免許法認定講習	2018年6月1日～	中学校英語免許取得認定講習において講師を務めている。
宮城県小学校外国語活動・外国語研修会	2018年～	講師を務めた。模擬授業を参観し、合評会にて講評を述べた。
宮城県中学校・高等学校英語科研修会	2018年～	講師を務めた。模擬授業を参観し、合評会にて講評を述べた。

現在の課題・目標	①新カリにより，「児童英語概説」の受講者人数が増えるため，授業内容（主にパフォーマンステストの実施方法）と評価方法の調整を行い，到達目標に照らしてふさわしいものにする。 ②フィードバックが遅れた授業があるため，迅速に行う。 ③地域連携協定に基づく小学生への外国語ボランティア事業（仙台イングリッシュ・キャンパス，イングリッシュ・キャンプ in 美里）を継続し，学生への還元と地域貢献に努める。
今年度の進捗状況	①概ね達成できた ②概ね達成できた ③達成できた
来年度の進捗目標	①習熟度に応じた英語の授業の運営 ①新しいLMS等を活用した授業の運営 ③小学校外国語ボランティア事業の継続

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Robust evidence for the simple view of second language reading: Secondary meta-analysis of Jeon and Yamashita (2022)	共著	2024年4月	Cambridge University Press (CUP), Studies in Second Language Acquisition, 46(5)	Akira Hamada,Haruka Shimizu,Yuko Hoshino,Shuichi Takaki,Yuji Ushiro	pp.1355-1372
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
不安はL2読解力に影響を及ぼすのか？：縦断的な検証	単著	2024年8月	大修館書店,『英語教育』, 73(9)	清水　遥	pp.78-78
L2読解が成功するために必要な語彙の閾値は本当に98%なのか？	単著	2024年4月	『英語教育』, 73(1)	清水　遥	pp.77-77
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	①代表者を務める科研を進める。 ②分担者として関わっている科研2件（継続1件，新規1件）について，共同研究を進める。
今年度の進捗状況	①概ね達成できた（計画していた調査を予定通り実施できた） ②概ね達成できた（論文を投稿中である）
来年度の進捗目標	①代表者を務める科研の成果を学会等で発表する ②分担者として関わる科研2件について，共同研究者としての役割を果たす

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 日本学術振興会 萌芽研究	2022年度～	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 日本学術振興会　基盤研究 (B)	2022年度～	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 日本学術振興会　基盤研究 (C)	2022年度～	共同(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2022年4月～	外国語教育メディア学会 会員
2021年4月～	東北英語教育学会 東北英語教育学会研究紀要宮城支部査読員
2018年6月～	日本児童英語教育学会 会員
2018年4月～	小学校英語教育学会 会員
2015年4月～	東北英語教育学会 会員
2007年4月～	日本言語テスト学会 会員
2007年4月～	大学英語教育学会 会員
2006年4月～	全国英語教育学会会員 会員
2006年4月～	関東甲信越英語教育学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	文学部　教育学科	職名	准教授	氏名	髙橋　千枝	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	ICTを活用した教育活動を積極的に取り入れる
今年度の進捗状況	manaba等のツールを使うことに慣れてきた一方で、主体的にICT教材を取り入れ・展開させることに課題がある
来年度の進捗目標	引き続きICT教材を使用しながら、日々進歩する教材について研究し、教育活動だけではなく研究活動にも取り入れていけるようにする。ただし、ICT教材を使うということに集中し、自身の専門性を見失わないような教育活動を行う。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	・幼児期の社会性発達についての研究論文または書籍の執筆 ・幼児期の社会性発達に関する学会発表 ・発達支援に関する書籍の作成
今年度の進捗状況	・今年度は自身の専門である発達支援に関する書籍を出版するため原稿の執筆活動を行なった。 ・現在、専門授業科目における授業の効果検証のデータを分析中である。
来年度の進捗目標	・今年度は自身の専門である発達支援に関する書籍を出版するため原稿の執筆活動を行なったが、まだ刊行されていないため、刊行の手続きを進める。 ・今年度は研修会等の講師は複数依頼を受けたが、学会発表を実施しなかったため、来年度は学会発表を必ず実施する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年6月～	臨床発達心理士認定運営機構有資格者支援特別委員会 委員
2021年6月～	日本臨床発達心理士運営機構スーパーバイザー資格委員会 副委員長
2019年4月～	日本発達支援学会 会員
2019年4月～	日本発達支援学会 理事
2019年4月～	仙台市こども若者局指定管理選定委員

2019年4月～	日本発達支援学会 事務局長
2018年4月～	仙台市保育スーパーバイザー事業 委員
2018年4月～	仙台市保育スーパーバイザー(仙台市保育スーパーバイザー) 助言・指導

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	文学部　教育学科	職名	助教	氏名	松本　進乃助	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
仙台市立上杉山通小学校吹奏楽部指導支援	2021年5月22日～	仙台市立上杉山通小学校吹奏楽部の楽器指導の支援

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

教員業務・活動報告

経　済　学　部

経　済　学　科

2024年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	アレイ　ウィルソン	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	泉　正樹	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
卒業論文集の作成	2022年～	4年生向けの演習において，卒業論文集を作成した。各自でテーマを選択し、中間報告会での検討を経て修正を施したのちに卒業論文集として執筆者に配布した。
授業理解の促進	2020年～	毎回の授業の冒頭で，前回の復習とその回の概略を説明し，授業終了時にはその回のまとめと次回の予告を行った。
学習事項の定着	2020年～	講義系の科目では、各単元の終了時にLMSを利用した「振り返り」を実施し、学習事項の定着を図った。
2．作成した教科書、教材、参考書		
授業スライドの作成	2020年～	講義科目「資本主義経済入門Ⅰ・Ⅱ」で使用するテキストに準拠するパワーポイントスライドを作成した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	①講義「資本主義経済入門Ⅰ・Ⅱ」の理解度を測定できる方策を考える。 ②演習系科目における効果的なレジュメ作成・発表の指導。
今年度の進捗状況	①については、LMSを利用して、授業内で複数回の小テストを実施して成績評価を行なった。 ②LMSを活用して、受講者間での共同作業が行えるようにした。
来年度の進捗目標	①については、成績評価の方法についてさらに検討を行う。 ②については、LMSを活用したレジュメの共同作成をさらに展開する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
目的意識的活動の諸相：基礎理論体系における労働過程論の位置を考える	単著	2025年1月	東北学院大学経済学論集(200)	泉正樹	pp.23-49
20世紀初頭の計算貨幣論とその計量テキスト分析：クナップとイネスを中心として	共著	2025年1月	東北学院大学経済学論集(200)	泉正樹，江原慶，結城剛志	pp.1-21
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	①近年の「自動化」を念頭において、労働の原理的考察を行う ②資本主義が歴史的に発展する構造を定式化する ③計量テキスト分析に着手する
今年度の進捗状況	①については、大学紀要（東北学院大学経済学論集第200号）に論文を掲載した。 ②については、関連文献を読み進めることができた。 ③については、大学紀要（東北学院大学経済学論集第200号）に論文を掲載した。

来年度の進捗目標	①「労働」と社会の変化の変化の関連について考察する ②資本主義が歴史的に発展する構造を定式化する ③市場と社会的再生産とを統一的に把握する枠組みについて考察する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究（C）	2022年度～2024年度	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	伊藤　健宏	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
マクロ経済学入門Ⅰ・Ⅱの実践記録	2024年4月1日～	パワーポイントによる講義。講義用スライドに対応した穴埋め式の配布資料をmanabaで配布し、学生がノートを取りやすいよう便宜を図っている。復習用にmanaba経由でドリルテストを各回5問出題。期末テストの負担を減らしつつ適切に学生の評価ができるように工夫してみた。しかしながら、各回に小テストを配置することによる弊害が相当生じることが受講記録から判別されるため、来年度はシステムが変わることを契機に期末試験に比重を置いた評価方法で行うこととしたい。
マクロ経済学入門の実践	2023年4月～	パワーポイントによる講義。講義用スライドに対応した穴埋め式の配布資料をmanabaで配布し、学生がノートを取りやすいよう便宜を図っている。復習用にmanaba経由でドリル問題を各回6問以上出題。すべてに詳細な解答例をつけ、復習しやすいように配慮している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
マクロ経済学入門の講義ノート	2023年4月～	マンキュー経済学Ⅱマクロ編の内容をベースにパワーポイントにて講義ノートを作成。同時に学生への配布資料と各回終了後に取り組み可能なドリル問題もセットで作成。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Economic effects of pension reform: applying the overlapping generations model to long-term nursing care	共著	2024年4月	The Japanese Economic Review, 75(2)	Takehiro Ito, Kazumitsu Sako	pp.243-268
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	大塚　芳宏	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学生アシスタントを活用したプログラミング指導	2023年4月1日～	カオス時系列解析の講義では、2023年度より学生アシスタント(SA)を2名雇用し、プログラミング指導の効率化を図った。
データサイエンスにおけるBYODの実践	2021年4月1日～	カオス時系列解析の講義では、近年、データサイエンス分野で普及されているPythonを実践形式で行った。履修者にはPCやタブレットを持ってきてもらい、その場で統計分析を行ってもらうものである。受講生が所有するPCのスペックに隔たりがないようにGoogle社が提供するColaboratoryを使用し、高度な統計分析を体感してもらう環境を整備した。
計量経済学Ⅰ・Ⅱ（データ解析・計量経済学）は講義資料，資料で用いたデータをeラーニングシステムmanabaで公開し，復習及び受講生が自宅学習できるよう環境を整備した.	2020年～	
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
道内市町村民幸福度指標の作成	単著	2024年12月	東京財団政策研究所，東京財団政策研究所Review	大塚芳宏	pp.
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
景気動向指数による景気判断と改訂の影響	単独	2024年9月	統計関連学会連合大会(東京理科大学)	大塚芳宏	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2021年10月～2025年3月	地方自治体におけるEBPMの導入促進事業 調査担当，報告書執筆

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	窪田　恵子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年2月～	日本国際経済学会 会員
2024年1月～	European Association of Environment and Resource Economics 会員
2024年1月～	American Economic Association 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	倉田　洋	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学習した事項の定着と授業理解の促進	2020年～	講義動画を配信して授業を行うオンデマンド形式の授業を行った。授業では、受講生がポイントを絞れるよう「学習ガイド」を提示する、集中して見られるように動画をポイントごとに分割する、動画視聴後に小テストを行う、質問・コメントに対して1週間ごとにまとめて回答する、といった工夫を行い、学習した事項の定着、授業理解の促進に努めた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
「ミクロ経済学Ⅰ・Ⅱ」講義動画	2020年～	経済学科3・4年生向け「ミクロ経済学Ⅰ」,「ミクロ経済学Ⅱ」の講義動画。Youtubeを用いて配信を行っている。
「ミクロ経済学Ⅰ・Ⅱ」講義資料	2020年～	経済学科3・4年生向け「ミクロ経済学Ⅰ」,「ミクロ経済学Ⅱ」のパワーポイント教材。受講生には穴埋め形式の教材を配信し、受講中に完成してもらう形をとっている。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
TG推薦　入学前教育　学長室講話　講師	2025年2月14日～2025年2月14日	
東北学院高等学校TGコース　学長室講話　講師	2024年4月19日～2024年4月19日	

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Agritourism, the Inflow of Foreign Workers, and Economic Welfare in Developed Countries『International Trade, Resource Mobility and Adjustments in a Changing World, Contributions to Economics』	共著	2024年10月	Springer Nature	Kenji Kondoh, Hiroshi Kurata	pp.421-436
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Is implicit cooperation reasonable for the economy? Corporate environmentalism under Kantian behavior	共著	2025年1月	Elsevier, Economic Modelling, 146(107029)	H.Kurata, N.V.Long	pp.
Agritourism, the Inflow of Foreign Workers, and Economic Welfare in Developed Countries	共著	2024年10月	Springer Nature, International Trade, Resource Mobility and Adjustments in a Changing World	K.Kondoh, H.Kurata	pp.421-436
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					

Is implicit cooperation reasonable for the economy? Corporate environmentalism under Kantian behavior	共同	2024年11月	Korean Economics and Business Association Meeting 2024(慶南大学校、昌原市)	H.Kurata N.V.Long	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 科研費基盤(C)	2021年度～2023年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2022年4月～	宮城県名取北高等学校　学校評議員会 学校評議員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	佐藤　純	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
・学生が理解しやすいスライドの作成・多数のPDF化した資料やテキストの公開・教科書の内容を丁寧に反映した授業の組立て	2020年4月1日～	オンデマンド授業であったこともあり、学生が理解しやすいスライドを100枚以上作成した。また、授業内容の理解を促進するためにPDF化した資料を多数公開した。その結果、学生のアンケートでは、「話がわかりやすかった」「授業内容が興味深かった」等のポジティブな評価を得ることができた。一方、授業と教科書の内容との関連性が希薄であるとの指摘も受けたため、教科書の内容を丁寧に反映した授業の組立てにも鋭意努めている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切にし、学生からのさまざまな相談に応じる
今年度の進捗状況	上記目標のために、実際に学外引率や個別授業を行ったので、概ね進捗していると考える。
来年度の進捗目標	学生とのコミュニケーションの時間をさらに増やし、学外引率先の多様化や個別指導の充実をはかる。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
『非公式帝国の盛衰－英・アルゼンチン関係史－』	単著	2025年2月	同文舘出版	佐藤純	pp.1-190
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
「非公式帝国」の政治経済学－英・アルゼンチン関係史－	単独	2024年10月	東北史学会(日本)	佐藤純	
大恐慌期のイギリス通商政策と「ヨーロッパ循環」の破綻	単独	2024年5月	社会経済史学会(日本)	佐藤純	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	・出版予定の研究書の内容について、学会発表を行い広く意見を得ることに努める ・研究書を出版する
今年度の進捗状況	・今年度末に『非公式帝国の盛衰－英・アルゼンチン関係史－』を出版した
来年度の進捗目標	・『非公式帝国』の内容を踏まえ、これまでの研究で用いた方法論の精緻化と新たな実証研究に着手する。 ・「非公式帝国」に関する全国学会の準備を進める ・科研費を申請する

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			
共生社会経済学科長を務めた			

2024年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	佐藤　康仁	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
responの活用	2018年～	ほぼ毎回、授業終了時にresponを利用して、授業内容のポイントや「まとめ」、疑問点などを提出させている（授業内容の記憶への定着と正しい理解の促進）
manabaの利用	2017年～	2016年度から経済学部で導入されたeラーニング manabaを利用して，授業資料の公開や小テストの実施，質問用掲示板の設置などを行っている（授業内容の記憶への定着と正しい理解の促進）
ウェブサイトでの授業内容の公開	2016年～	「加齢経済論」等，担当する授業の内容（シラバス，授業配付資料等）をウェブサイトに公開している（2016年度後期からは経済学部e-ラーニング「manaba」に移行）
学習内容の記憶への定着と授業理解の促進	2013年～	毎回，授業開始時には前回授業内容の復習とその回の授業の概略を説明するとともに，授業終了時にはその回の授業内容のまとめを行っている
レスポンス・カードの利用	2013年～	毎回、授業終了時に、授業内容のポイントや質問等を書いてもらうことで、その回の授業内容の受講生（学生）の理解度を把握し、それを授業内容の改善につなげるとともに、次回授業時には質問に対する回答を行うことによって、授業内容の理解を深めるようにしている
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	①授業内容の記憶への定着と正しい理解の促進 ②講義における成績評価方法の改善
今年度の進捗状況	①については、LMSを使用して毎回の講義後にその日の講義内容に関する課題を課すことで理解度の確認を行った。また、次回授業の事前学修課題についても同様にLMSで課した。さらに、LMS上の講義コースに毎回の講義資料を公開することで受講生は必要に応じて復習できるようになっている。 ②については、LMSを活用することで、毎回の講義において事前学修課題、確認課題によって理解度を確認するとともに、数回の学修内容の確認（小テスト）を行うことで、1回の試験で評価するのではなく、総合的に成績評価を行うことが可能となった。
来年度の進捗目標	・授業最終回に実施する授業評価アンケートの結果をふまえて見直しを行う。 ・LMSをより効率的、効果的に活用する方法を検討する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
高齢社会の真相⑧求められる緩和策と適応策	単著	2024年12月	日本経済新聞「やさしい経済学」	佐藤康仁	pp.
高齢社会の真相⑦揺れる給付と負担のバランス	単著	2024年12月	日本経済新聞「やさしい経済学」	佐藤康仁	pp.
高齢社会の真相⑥揺らぐ公的年金の安定性	単著	2024年11月	日本経済新聞「やさしい経済学」	佐藤康仁	pp.
高齢社会の真相⑤目指すべき経済成長は	単著	2024年11月	日本経済新聞「やさしい経済学」	佐藤康仁	pp.
高齢社会の真相④労働力の国際的争奪戦	単著	2024年11月	日本経済新聞「やさしい経済学」	佐藤康仁	pp.

高齢社会の真相③経済成長のカギは生産性向上	単著	2024年11月	日本経済新聞「やさしい経済学」	佐藤康仁	pp.
高齢社会の真相②人口減少のメカニズム	単著	2024年11月	日本経済新聞「やさしい経済学」	佐藤康仁	pp.
高齢社会の真相①長寿化と少子化が同時進行	単著	2024年11月	日本経済新聞「やさしい経済学」	佐藤康仁	pp.
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
櫻井謙介報告「保育政策と所得の格差、再分配効果」へのコメント	単独	2024年6月	生活経済学会2024年第40回研究大会(東北福祉大学)	佐藤康仁	
COVID-19の感染拡大に伴う財政支出拡大の世代間格差への影響	単独	2024年5月	日本経済政策学会第81回全国大会(熊本学園大学)	佐藤康仁	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	①高齢社会の経済政策に関する研究 ②世代会計による日本の世代間不均衡の計測
今年度の進捗状況	・日本の世代会計に関する最新の研究結果を収録した2023年出版の英文の書籍Modern Macroeconomics with Historical Perspectivesが日本地域学会著作賞を受賞した。 ・「日本経済新聞」で、2024年11月22日から12月3日にわたり、やさしい経済学「高齢社会の真相」（全8回）を連載した。
来年度の進捗目標	より一層の研究の進展を図る。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2024年11月～2024年12月	『日本経済新聞』連載「やさしい経済学 高齢社会の真相」（全8回）（日本経済新聞）寄稿
2023年5月～	仙台地方裁判所委員会 委員
2021年10月～	多賀城市行政不服等審査会 会長
2013年10月～	宮城県消費生活審議会 副会長（2017年～）
2011年12月～	内閣府 経済社会構造に関する有識者会議 財政・社会保障の持続可能性に関する「制度・規範ワーキング・グループ」 世代会計専門チーム 委員
1996年10月～	生活経済学会 会員（理事） 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

経済学部長（2021年4月～現在）

2024年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	篠崎　剛	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
オンデマンド講義	2020年～	オンデマンド講義において，Zoomで録画をし，学生のフィードバックに出来る限り対応した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
パワーポイント教材の作成	2014年4月～	国際経済学にて学ぶ内容を授業前に学生が予習できるようパワーポイント資料をHPにアップロードしている。
国際経済学の講義ノート	2010年4月～	国際経済学の講義ノートのパワーポイント教材。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
演習での懸賞論文への参加およびインターゼミナールへの参加	2020年～	
学内外のインターゼミナールへの参加	2017年～	学内での同学部，他学部のゼミまたは他大学とおこなわれるインターゼミナール（全国インターゼミナール大会）へ参加し，学生の成長に資する経験をさせるようにしている

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
The Effect of Cultural Capital on Income Distribution『New Perspectives in the Public and Cultural Sectors』	単著	2024年5月	Springer	篠崎剛	pp.123-138
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 科学研究費助成事業	2023年度～	共同(研究代表者)	

科学研究費助成事業 科学研究費（基盤C）「政治体制と長期の経済成長プロセスの整合性に関する研究」	2018年度～	共同(研究代表者)	本研究では，政治体制の違いが経済成長に与える影響について，経済成長経路上での政治体制（独裁主義から民主主義へ）の変容の在り方とその望ましさを明らかにするものである。そのため，初めの二年間において，経済成長モデルに基づく政治制度の変容の分析および政治家の振舞いに行動経済学的視点を導入した分析を行ったうえで，最終年度にこれらを統合し，より現実的な政策提案を行うことを目指す。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2021年9月～	仙台市スポーツ推進審議会 委員
2019年8月～	Association of Cultural Economics International 会員
2007年～	日本地域学会 会員
2007年～	生活経済学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	白鳥　圭志	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
「インキュベーター路線」から経営破綻へ―平成バブル崩壊前後、北海道拓殖銀行の軌跡―	単著	2024年5月	地方金融史研究	白鳥圭志	pp.62-81
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	千葉　昭彦	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
演習3年生のエクスカーション実施	2016年～	いくつかのグループに分けて仙台市内の街なか（旧奥州街道・東北大学片平キャンパス・国分町通り・広瀬通り・一番町通り・壱弐参横丁など）を歩き、現地で町の成り立ちや変遷を解説
講義において，前回の内容の理解確認と評価方法の工夫	2010年4月～	地域経済論と経済立地論の講義で確認の小テストなどを行い、その次の講義で解答確認を行い、前回講義内容の理解の確認を行っている。また、その採点結果を年間評価に反映させる。 2020年度からは前期・後期ともに遠隔授業だったので、小テストを5回、レポート課題5回実施した
4年生演習卒業論文	2010年4月～	4年生では調査を踏まえた卒業論文の作成を義務付けている。なお，終了後は論集として編集・発行。
3・2年生の演習において1年間で10冊以上の書籍のレポートを提出させ，添削のうえ返却	2010年4月～	主に文献要約を行わせ，添削返却するが，それが一定水準に達するまで再提出を繰り返し，文献の理解が確実になるように指導する。なお，学生の多くがある程度充分な内容把握が出来るようになった段階で，自らの意見を論理的に記述するようなレポートへと課題内容を移行。
2・3・4年生演習合宿	2010年4月～	年間2回の合宿（春季および夏季に3泊4日）を2年生～4年生が合同で行い，3年生は夏にインゼミレポートの中間報告，3年生春は各自の卒論テーマの検討，4年生夏は卒論中間報告，4年生春は卒論報告を行う。また，合宿地周辺地域でのフィールドワーク・エクスカーション（2010年夏山形県山形市・2010年冬宮城県石巻市・2011年夏岩手県八幡平市および盛岡市・2011年冬福島県会津若松市および喜多方市・2012年夏岩手県花巻市）を実施。なお，合宿の日程・場所等については基本的には学生が企画・運営。 ただし、2020年度と2021年度はコロナの影響で合宿を行うことが不可能だったので、夏季休業中と春季休業中にそれぞれ2日間学内で上記のことを行った。
1年生総合演習Ⅰでのディベートトレーニング	2010年4月～	特に1年生後期に次年度以降の演習に備えて，ディベートを実施。「フリーターの是非」や「レジ袋有料化の賛否」「原発再稼動賛否」などの身近なテーマや社会問題を取り上げ，主張の論理性にウエートを置いて話をすることを指導。なお，それぞれの意見に対して論理的な反論も試みる。
1年生総合演習ⅠでDVD/VTRの活用	2010年4月～	経済学科に入学した新入生が必ずしも経済問題に強い関心を持っているわけではない。そこで，関心喚起を目的として時節を考慮したDVD/VTRを利用。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
東北自治研修所での講義	2014年8月～	東北の自治体中堅職員を対象とした中堅職員研修（各90分授業を10回）を行い、様々なアクティブラーニングの方法を通じて，各自治体の問題の所在や解決の方向性を検討。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					

中心市街地『経済地理学辞典』	共著	2024年10月	丸善	経済地理学会	pp.386-387
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
仙台の中心市街地の変容－「仙台都心再構築プロジェクト」を中心として－	単著	2024年12月	経済地理学年報, 70(4)	仙台の中心市街地の変容－「仙台都心再構築プロジェクト」を中心として－	pp.53-57
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2024年6月～	下級裁判所裁判官指名諮問委員会地域委員会委委員 委員
2023年5月～	みやぎ震災復興研究センター 代表
2021年11月～	日本地域経済学会 常任理事（連携・交流委員長）
2021年8月～	角田高校サマーカレッジ 農村の経済問題は農業で理解できるのか 講師
2021年7月～	東北学院榴ヶ岡高校 高大一貫教育説明会 講師
2021年6月～	東北地理学会 評議員
2021年3月～	東北学院高校プレカレッジ 地域経済入門 世界遺産登録と地域経済 講師
2020年4月～	日本地理学会 代議員
2015年11月～	日本地域経済学会 理事
2012年5月～	経済地理学会 編集委員
2012年5月～	学都仙台コンソーシアム企画部 部会長

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	舟島　義人	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
受講生の理解度に応じた授業の実施	2020年4月～	e-ラーニング（respon）を活用して分からない点を確認し，受講者の理解が不足している点を重点的に講義している。
授業時間外の学習の促進	2020年4月～	授業の補足資料を学習支援システム（manaba course）を使って配布し，授業時間外の学習を促している。
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2020年4月～	講義形式の授業においても，学生が自ら考える演習の時間をとっている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
マクロ経済学講義ノート	2024年4月	経済学部3・4年生向けのスライド
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	①学生が数学を使って定量的な経済分析を行えるようになる。 ②大人数講義における学生の主体的な学びを促進する。
今年度の進捗状況	上記の目標①については，授業において経済分析に必要となる数学を適宜解説した。 目標②については，e-ラーニングを活用することで，受講生各自が問題意識を持って受講できるように努めている。
来年度の進捗目標	上記の目標①については，受講生の理解度に応じて説明を工夫する。 目標②については，引き続きe-ラーニングのより効果的な活用方法を模索する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Imperfect information and tourist's response to natural disasters	共著	2024年12月	Pacific Economic Review, 29(5)	Yoshito Funashima, Kazuki Hiraga	pp.586-606
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	①論文“Media-created economic uncertainty”を学術雑誌に掲載する。 ②論文“Countercyclical uncertainty and recession announcements”を学術雑誌に掲載する。 ③論文“The role of renewable energy in energy-related uncertainty”を学術雑誌に掲載する。
今年度の進捗状況	上記の目標①～③について，いずれも改訂作業を行うとともに査読付き学術雑誌に投稿した。
来年度の進捗目標	上記の目標①～③については，必要な改訂作業を行いつつ，査読付き学術雑誌に掲載することを目指す。また，新たな研究テーマに着手する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～	共同(研究分担者)	本研究課題では，オープンマクロ経済学や国際金融論における様々なパズルを実証的かつ理論的に分析を行い，国際金融市場や貿易市場における諸問題の発生メカニズムを明らかにする。国際金融市場は，日々国際的な資本移動の自由度が増している一方で，それに関連した様々なパズルはまだ解決されていないのが現状である。本研究課題では，国際金融市場のパズルがどのようなチャンネルで発生し波及するかを，時系列・クロスセクションだけでなく周期軸からも明らかにする。
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2021年度～2024年度	個別(研究代表者)	新聞報道やツイッターなどのメディアのデータベースに基づき，経済政策の不確実性や経済的な感情を定量化する試みが精力的になされている。作成された指標を用いた実証分析では，経済政策の不確実性が高まることや経済活動に関する消極的な感情は，マクロ経済に負の影響を及ぼすことが指摘されている。本研究では，オールドメディアと近年急速に普及したソーシャルメディアの違いに着目し，マクロ安定化政策が経済政策の不確実性や経済的な感情に及ぼす影響を明らかにする。
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	前田　修也	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

1980年～2024年	経済統計学会会員 会員
1977年～2024年	日本統計学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	経済学部　経済学科	職名	准教授	氏名	板　明果	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
その他の補助金・助成金 公益財団法人鹿島学術振興財団　研究助成	2021年度～	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2021年度～	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年4月～	宮城県行政評価委員会 委員
2018年4月～	宮城県行政評価委員会大規模事業評価部会 委員
2016年10月～	宮城県情報公開審査会 委員
2016年1月～	宮城県再生可能エネルギー等・省エネルギー促進審議会 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2024年度

所属	経済学部　経済学科	職名	准教授	氏名	稲見　裕介	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	教育に携わるに当たって、 1. 学生の能動的な取り組みを促すこと 2. 丁寧に講義を行うこと を目標にしている。
今年度の進捗状況	今年度の進捗状況は以下の通りである: 1については、講義時間中に学生自ら問題を解く時間を設けた他、活発に質問がでたことから、進捗がみられた。 2については、丁寧な講義ができている。
来年度の進捗目標	来年度を迎えるにあたり、 1について、さらに学生が主体的に取りめるよう講義方法を工夫する予定である。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	研究活動に関しては、主に、以下の三つのことに取り組んでいる: 1. Patent buyouts under incomplete informationの研究を進めること 2. Properties of the equilibrium revenues in buy price auctionsの改定作業を進めること 3. Buy price auctions with resale opportunitiesの研究を進めること
今年度の進捗状況	今年度の進捗状況は以下の通りである。 1については、論文の執筆作業を行っている。 2については、論文を国際学術雑誌に再投稿するため改定を行っている。 3については、論文の執筆作業を行っている。
来年度の進捗目標	来年度は、 1～3について、国際学術雑誌に投稿する予定である。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2024年度

所属	経済学部　経済学科	職名	准教授	氏名	岩本　菜々	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	今年度が着任1年目であったので、環境になれることが課題である。
今年度の進捗状況	学生の雰囲気や各種事務とのやり取りなどに慣れてきたが、まだ理解できた、とは言えない状況である。
来年度の進捗目標	学生がどんなことを考え、どう言えばより意欲を引き出せるか、学習効果が高いかについて、新たな演習や講義を通してもっと理解を深めたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	現在着手している論文執筆作業を進める。
今年度の進捗状況	関連する学会に参加し、研究資料収集の出張等を行ったり、情報収集系の作業は進んだが、投稿論文のリバイズ作業が完了していない。
来年度の進捗目標	論文がアクセプトされるように、リバイズ作業を進め、学会発表を行う。次の研究に着手する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	特になし
今年度の進捗状況	特になし
来年度の進捗目標	特になし

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

今年度が着任1年目だったので、委員会活動は少なかったが、保護者説明回やオープンキャンパスに参加し、共通テストの試験監督を行った。委員会活動は、シラバス編集員や学科会議の書紀を担当した。

2024年度

所属	経済学部　経済学科	職名	准教授	氏名	黒阪　健吾	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2022年度～2024年度		

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2018年2月～	International Political Science Association 会員
2018年1月～	American Political Science Association 会員
2017年4月～	日本政治学会 会員
2009年6月～	日本経済学会 会員
2009年6月～	公共選択学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2024年度

所属	経済学部　経済学科	職名	准教授	氏名	小林　陽介	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
manabaを活用した双方向型授業	2020年5月～	課題提出フォームに質問・感想欄を設け、manabaを通じて返答する。多かった質問・意見については次回授業時に紹介し、全体で共有・フィードバックを行う。
2．作成した教科書、教材、参考書		
パワーポイント資料（オンデマンド型授業用）	2020年5月～	オンデマンド型授業用のパワーポイント資料。アニメーション機能を活用して学生が1つ1つじっくりと読み進められるように工夫している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	学生が現実の経済社会の動きに興味を持てるような授業となるよう心掛けている。	
今年度の進捗状況	今年度は授業資料に時事的な内容を含めるよう意識した。	
来年度の進捗目標	今年度の取り組みを継続するとともに、さらなる内容の充実に努めたい。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
信用理論と中央銀行：最近のFRB金融政策との関連で	単著	2024年10月	東京：経済理論学会事務局；2004-，季刊経済理論 = Political economy quarterly / 経済理論学会 編，61(3)	小林 陽介	pp.44-54
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	グローバル金融危機（リーマンショック）後の米国金融の変化に焦点を合わせて研究を行っている。
今年度の進捗状況	今年度はグローバル金融危機後の米国中央銀行FRBの政策動向について論文をまとめた。
来年度の進捗目標	来年度は米国債市場およびビットコインETFに焦点をあわせて研究したい。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2022年4月～	経済理論学会 幹事
2021年～	証券経済学会 理事
2020年4月～	公益財団法人日本証券経済研究所 客員研究員

2019年～	証券経済学会 プログラム委員
2012年～	証券経済学会 会員
2010年～	経済理論学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	経済学部　経済学科	職名	准教授	氏名	谷　達彦	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
「小テスト」の実施	2023年～	授業内容の理解度を確認するため、授業時間内に「小テスト」を実施している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
授業資料の作成	2020年～	授業毎にスライド資料を作成し、スライドに沿って授業を進めている。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2012年4月～	財務省財務総合政策研究所客員研究員 委員
2006年10月～	日本地方財政学会 会員
2006年4月～	日本財政学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2024年度

所属	経済学部　経済学科	職名	准教授	氏名	谷　祐可子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業理解確認の小テスト	2018年4月～	ほぼ毎回の授業（講義）の終わりに、内容確認の小テストを実施した。
学習事項の記憶への定着と授業理解の促進	2010年4月～	授業の冒頭で前回復習および今回概略説明を行ない、授業終了時に今回まとめを行なった。
演習レポート・論文の添削・返却・指導	2010年4月～	各演習の課題レポート等を添削・返却・指導した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
講義・演習で使用する補助教材の作成	2010年4月～	講義および演習で使用する補助資料・配付資料を作成した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	講義内容の理解深化のために可能な限り新しい研究成果や情報も紹介する。 演習での主体的学習を促すために多様な実施方法を取り入れる。 授業時間以外でも学生とのコミュニケーションを図る。
今年度の進捗状況	講義内容を可能な限り更新している。 演習では輪読およびグループ発表などを実施している。 manabaの掲示板や個別指導機能等を利用している。 オフィスアワー等を利用している。
来年度の進捗目標	講義では学生の理解度に配慮した授業速度および内容にする。 演習では主体的学習を促すために多様な実施方法を継続する。 授業時間以外での学生とのコミュニケーション機会を随時もつ。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	幅広く研究交流する。 持続可能な発展に関する理論的・実証的研究を推進する。
今年度の進捗状況	持続可能な森林資源利用に関する先行研究等の収集およびデータ分析を継続している。
来年度の進捗目標	幅広い研究交流を継続する。 持続可能な発展に関する理論的・実証的研究を推進する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	経済学部　経済学科	職名	准教授	氏名	田野　穂	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
確認テストによる理解促進	2023年4月～	1年次配当科目「日本経済入門」では，テーマ別の確認テストを計4回課した。確認テストは用語問題と作文問題から構成され，前者をつうじて講義内容の理解を，後者をつうじて各自の関心のあるテーマの発見を促した。
講義内容の理解促進のためのレジュメを毎回配布。	2022年4月～	3年次以降コース科目「日本経済論」と「日本産業論」では，講義内容の要点を示したレジュメを毎回配布した。配布資料において，受講生が口頭説明等を書き加えすように，余白を出来るだけ広くなるように工夫した。
講義内容の理解促進のためのレジュメを毎回配布。	2022年4月～	2年次配当科目「日本経済入門」では，講義内容のポイントを示した穴埋め形式のレジュメを毎回配布した。とくに，初学者を念頭に置いて基本用語等を丁寧に説明するように工夫をした。
2．作成した教科書、教材、参考書		
レポートの作成に関する教材を作製。	2022年4月～	総合演習においてレポートを作成するうえで必要なスキル（レジュメの作成，読書，政府統計データベースの活用，レポートの作成）について説明した教材を適宜作成した。
レポートの作成に関する教材を作製。	2019年4月～	総合演習においてレポートを作成するうえで必要なスキル（レジュメの作成，読書，政府統計データベースの活用，レポートの作成）について説明した教材を適宜作成した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2024年12月～2024年12月		「産業クラスターの物理的範囲はどこまでなのか：関東の会社役員距離分布」へのコメント(日本経営学会東北部会) パネル司会・セッションチェア等	
2020年6月～2026年3月		北上市史編さん近現代部会 調査協力員	
2012年9月～		日本経営学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	経済学部　経済学科	職名	准教授	氏名	松前　龍宜	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	経済学部　経済学科	職名	准教授	氏名	吉田　惇	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
Does disclosure of success rates induce patients to move to a better clinic? Evidence from in vitro fertilization	単独	2024年7月	European Health Economics Association conference 2024(Vienna, Austria)	Jun Yoshida	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2024年度～	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 若手研究	2022年度～	個別(研究代表者)	

科学研究費助成事業 挑戦的研究(開拓)	2021年度～2025年度		本研究では，都市化や温暖化によってもたらされる都市住民と生物の接触が引き起こす様々なリスク（以下，生物リスクと略す）の適切な管理政策を検討するために，経済学と生態学の融合を行う．都市において生物リスクをもたらす生物種は，都市内に限れば害獣であるものの生態系の中では重要な働きを持つ．この生物リスクは，住民と生物の空間的相互作用とみなせる．そこで，本研究は，人類と生物の接触がもたらすリスクの管理政策を接触の空間相互依存作用を明示のうえ検討することを目的として都市経済学と生態学の統合モデルの構築を行う．
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	経済学部　経済学科	職名	講師	氏名	塩見　由梨	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
responを活用した双方向でのフィードバックの導入	2020年4月1日～	responを活用して教員→学生、学生→教員の双方向でのフィードバック機会を設定した。具体的には、教員→学生の取り組みとして、クリッカー機能を利用して学生がコメントや投票のかたちで意見を出す機会を多く用意し、それに対して次回の講義で教員からのリプライを行なっている。また、学生→教員の取り組みとして、アンケート機能を利用して教員独自の授業内容に関するアンケートを実施し、学生からの講義内容への希望や感想のフィードバックを得ている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	学生の関心に応じた講義内容の改善、演習科目において学生の発言・ディスカッションの機会を増やす工夫
今年度の進捗状況	昨年度の授業で実施したアンケートの結果を踏まえ、講義内容を一部修正した。今年度も同様にアンケートを実施したため、次年度のさらなる改良に役立てたい。演習科目ではディスカッションの時間を増やす、学生のグループ分けを変えてみるなど、学生同士が話しやすい環境構築を試みた。
来年度の進捗目標	学生の関心に気を配り、引き続き講義内容を改善する。また、講義中にクイズ等の機会を増やし、双方向に近い講義環境を目指す。演習科目では学生間で発言の有無のばらつきが大きいため、ディスカッションの方法を指導しよりアクティブな意見交換を促す。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	ステュアート研究についてこれまでの研究成果を広く報告すること、また、次の研究課題として恐慌論研究の論文執筆を進めること
今年度の進捗状況	昨年出版した著書について、いくつかの合評会や書評によるコメントを受けた。本年度はそれに対するリプライというかたちでこれまでの研究成果を報告するとともに、次の課題として『原理』第二編の「諸国民の競争」概念および貨幣数量説批判についての研究を始動した。恐慌論については、原稿を執筆し発表の機会を検討中である。
来年度の進捗目標	学説史研究では調査を進め原稿作成を進める。恐慌論研究に関しては、健康上の事情を考慮しつつ、次年度中に研究発表ができるよう準備を進めたい。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			
生協総代			

2024年度

所属	経済学部　経済学科	職名	講師	氏名	白井　大地	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
教員独自の「学生による授業評価」を実施	2021年4月1日～	学部で実施する「学生による授業評価」に加えて，授業の効果を測定するために教員自身が考案したアンケートを実施している。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2012年～	Econometric Society 会員
2012年～	The Munich Personal RePEc Archive (MPRA), Editor 委員
2012年～	American Economic Association 会員
2006年～	日本経済学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2024年度

所属	経済学部　経済学科	職名	講師	氏名	望月　理生	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	・特に演習を受講する学生一人一人に対する，きめ細やかな対応 ・学生がより講義内容に興味関心をもてるようなトピックスやコンテンツの充実	
今年度の進捗状況	・演習の受講生に対し，フィールドワークの進捗等の細やかな確認と助言を実施した ・興味関心を高めるため，歴史上の話題に触れる際，当時の写真や新聞記事等を引用し，身近なものとして触れる 機会を提供した	
来年度の進捗目標	・今年度の取り組みを継続するとともに，学生にとってより充実した教育を目指したい	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
日本資本主義と漁村開発ー漁港整備および漁場整備を中心としてー『人間復興の地域経済学：地域とくらしの歴史・理論・政策』	共著	2024年12月	自治体研究社	岡田 知弘，岩佐 和幸	pp.35-49
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
「社会的生産＝生活過程」論による沿岸漁業試論－地区漁協による漁業権の配分がもつ意義の再解釈－	単独	2024年6月	漁業経済学会　第71回大会(下関)	望月理生	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標	第二次世界大戦後日本における東北開発に焦点を当て研究を進めている				
今年度の進捗状況	団体史や企業史などの収集および史料の収集を行った				
来年度の進捗目標	今年度に引き続き，来年度も新産業都市建設促進法による新産業都市「仙台湾地区」の行政資料を収集し，研究会発表および学会発表を目指す				

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年8月～2024年11月	2024年度前期（4－9月期）景況調査 調査担当，報告書執筆
2024年4月～	社会経済史学会 会員
2024年4月～	政治経済学・経済史学会 会員

2023年11月～	日本地域経済学会 編集委員
2023年6月～	漁業経済学会 理事
2020年3月～	経済地理学会 会員
2012年5月～	日本地域学会 会員
2012年3月～	漁業経済学会 会員
2011年11月～	日本地域経済学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

教員業務・活動報告

経　営　学　部

経　営　学　科

2024年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	岡田　耕一郎	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学習した事項を記憶に定着させ、授業の理解を促進させる。	2021年4月1日～	授業の最後に配付プリントを参照しながら今回のまとめを説明している。
授業の理解を促進させる。	2021年4月1日～	授業の要点をプリントにまとめて配付している。 液晶プロジェクターを活用して、授業内容に関わる画像をスクリーンに投影している。
実践的な教育の提供	2021年4月1日～	ゼミにおいて，学生と介護サービス組織の人事考課を研究したのち，考課シートを開発し，介護現場で使用した。
ゼミレポートの添削	2021年4月1日～	論文作成スキルを向上させるため，演習のレポートを添削して返却した。
オフィスアワーの実施	2021年4月1日～	学生が講義の内容に関する質問をしたり，勉強方法の指導を受けるための時間を設定し，教育の質の向上に配慮した。
学習した事項を記憶に定着させ、授業の理解を促進させる。	2021年4月1日～	授業の最初に前回のまとめを説明している。
学習した事項を記憶に定着させ、授業の理解を促進させる。	2021年4月1日～	授業の最後に配付プリントを参照しながら今回のまとめを説明している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2021年4月～	日本社会福祉学会 会員
2021年4月～	組織学会 会員
2021年4月～	日本経営学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	小野　慎一郎	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2．作成した教科書、教材、参考書		
桜井久勝（編著）『テキスト国際会計基準（新訂第2版）』（白桃書房）の第3章「財務報告に関する概念フレームワーク」（pp.16-31）を分担執筆	2024年7月	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	着任2年目である2024年度には、以下の点が課題・目標であった。 (1) manaba等の教育支援システムを活用した授業運営方法をさらに改善する。 (2) 複数の授業科目において指定テキストの変更を予定しているため、新規のテキストに応じた講義内容・配布資料を整備する。
今年度の進捗状況	(1) 講義形式科目である「財務会計論Ⅰ・Ⅱ」「連結財務諸表論」では、manabaの小テスト機能を活用し、事前学習（予習課題）と事後学習（復習課題）を効果的に組み込むことができた。演習形式科目においても、manabaの個別指導コレクションやプロジェクト機能を活用した指導を実施できた。 (2) 新たに指定したテキストに基づき、「財務会計論Ⅰ・Ⅱ」「連結財務諸表論」の講義内容や配布資料を整備することができた。
来年度の進捗目標	(1) 新しく導入されるLMSを活用した授業運営方法を構築する。 (2) 2025年度より新規で担当する授業科目である「経営学実習Ⅲ（会計・ファイナンス）」「財務会計論特講Ⅰ・Ⅱ」の講義内容・配布資料を整備する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
第3章 財務報告に関する概念フレームワーク『テキスト国際会計基準（新訂第2版）』	分担執筆	2024年7月	白桃書房	小野慎一郎	pp.16-31
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	2024年度開始時点では、以下の点が課題・目標であった。 (1) 現在の科研費テーマに関する論文を執筆し、学外雑誌に投稿する。 (2) 新たなテーマに関するレビュー論文を執筆し、学内紀要に投稿する。 (3) 科研費（基盤研究(C)）に応募する。
今年度の進捗状況	(1)(2) 当初の予定どおりに進まず、論文を投稿することはできなかった。 (3)「会計指標における持続的・一時的要素の識別と将来業績予測・期待リターン推定への応用」という研究課題名で、2025年度科研費（基盤研究(C)）に応募して採択された。
来年度の進捗目標	(1) 採択された科研費テーマに関するレビュー論文の執筆を進める。 (2) 採択された科研費テーマに関する実証研究を行い、その内容を学会や研究会で報告する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 若手研究	2019年度～2024年度	個別(研究代表者)	
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2025年1月～2025年1月		日本経済会計学会第5回秋季大会 準備委員 企画立案・運営等	
2016年5月～		日本経済会計学会（旧：日本ディスクロージャー研究学会） 会員	
2015年10月～		日本経営財務研究学会 会員	
2009年9月～		日本会計研究学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	折橋　伸哉	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年5月～2025年3月	経済産業省　自動車取引適正化研究会委員 助言・指導
2002年～	産業学会 会員
1997年～	国際ビジネス研究学会 会員
1997年～	組織学会 会員
1997年～	日本経営学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	小池　和彰	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	齋藤　善之	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
総合講座Ⅳ（おもてなしの経営学）では「みやぎおかみ会」との連携のもと宮城県内の旅館ホテルの女将および観光行政・業界から実務担当者を招聘する講義を実施している。（経営学部の複数の教員と共同で授業運営）	2009年～	2017年度の外部講師は、鈴木緑女将（はまなす海洋館・気仙沼市）、佐藤恵里女将（ホテル華乃湯・秋保温泉）、大沼安希子女将（旅館大沼・東鳴子温泉）、梶村和秀氏（宮城県経済商工観光部観光課長）、古津敬浩氏（JR東日本㈱営業部長）を招聘し講義を実施した。
演習（3年）では、地域の経営者らから聞き取り調査を実施している。その成果は報告書にまとめて刊行し、さらに市民向け報告会を実施している。	2000年～	学生が主体的に経営者らにマンツーマンで聞き取りを行い、これを活字化して報告書にまとめ、市民向け報告会で報告するアクティブラーニング型のゼミ活動である。
演習では地域の経営者に直接聞き取りをおこない、その結果を報告書にまとめて刊行している。	1999年～	地域の経営者に対し受講生がマンツーマン形式でライフヒストリーを聞き取り報告書にまとめる
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年4月～	文化庁文化財審議会 委員
2020年～	塩竈市文化財審議会委員 委員
2018年～	宮城歴史資料保全ネットワーク 理事長

2008年～	NPO宮城歴史資料保全ネットワーク 会員
2006年～	東北史学会（理事） 会員
2001年～	海事史学会（理事） 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	佐久間　義浩	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
教員独自の「学生による授業評価」を実施	2020年～	大学で実施する「学生による授業評価」に加えて，授業の効果の測定や改善点を明らかにするため，記名式の授業内容に関するアンケートを，すべての科目で実施している。
監査論におけるディスカッションの実施	2020年～	近年，発覚した粉飾について，粉飾決算企業の公表した内部調査報告書を題材として，粉飾の概要，粉飾を引き起こす要因，公認会計士のあり方，あるべきガバナンス制度の構築について，参加者全員でディスカッションを行い，監査のあり方や社会情勢に関心をもたせた。
演習等における新聞記事の報告	2020年～	各受講生が興味を持った日経新聞等の内容について，毎時間，報告をさせるとともに，その記事に関するディスカッションを参加者全員で行うことによって，社会情勢に関心をもたせた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	・演習参加者の進路・就職相談等を積極的に行う。 ・演習にて課題図書の精読を行う。 ・授業のレジュメを改定する。
今年度の進捗状況	・演習参加者の希望に応じて，随時，進路指導等を行った。 ・『財務会計講義』の精読を行った。 ・監査制度の改定にあわせて，レジュメを改定した。
来年度の進捗目標	・演習参加者の進路・就職相談等を積極的に行う。 ・演習にて課題図書の精読を行う。 ・授業のレジュメを改定する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
営業費の記録と管理『エッセンス簿記会計　第20版』	単著	2024年4月	森山書店	佐久間義浩	pp.*-*
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Corporate Governance Characteristics and Expanded Audit Reporting—Evidence from Japan.	単著	2024年8月	2024 American Accounting Association Annual Meetingプロシーリングズ	Sakuma, Y.	pp.
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
英国	単著	2024年9月	課題別研究部会「公認会計士法の省察と革新」― 最終報告書 ―	佐久間義浩	pp.81-116
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
日本企業の監査報酬の動向（2024年版）	共著	2024年5月	月刊監査役(762)	監査人・監査報酬問題研究会　松本 祥尚，林 隆敏，町田 祥弘，髙田 知実，堀古 秀徳，佐久間 義浩	pp.58-74
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					

G. 学会における研究発表

課題別研究部会「公認会計士法の省察と革新」― 最終報告書 ―	共同	2024年9月	日本監査研究学会(立命館大学)	代表(部会長) 弥永真生 メンバー 新井達哉、異島須賀子、内田千秋、小松義明、佐久間義浩、関口智和、多賀谷充、日野辰哉、野村昭文、藤原英賢、町田祥弘、松本祥尚、茂木哲也、湯川喜雄	
Corporate Governance Characteristics and Expanded Audit Reporting―Evidence from Japan.	単独	2024年8月	2024 American Accounting Association Annual Meeting(Washington DC)	Sakuma, Y.	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	・監査人の情報提供機能を研究する。 ・監査報告書を収集する。 ・戦前戦後の財務諸表監査制度の変遷を研究する。
今年度の進捗状況	・学会と研究会で報告した。 ・1950年代の監査報告書を一部収集した。 ・戦前戦後の財務諸表監査制度に関する文献を収集した。
来年度の進捗目標	・論文にまとめる。 ・継続して監査報告書を収集する。 ・継続して財務諸表監査制度に関する文献を収集する。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 科学研究費補助金(基盤研究C)	2021年度～	個別(研究代表者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2024年9月～	日本監査研究学会 適用後レビュー・メンバー 会員
2024年8月～	日本会計研究学会 特別委員会 委員 会員
2022年9月～2024年9月	日本監査研究学会 課題別研究部会 構成員 会員
2019年12月～	金融庁 公認会計士・監査審査会 公認会計士試験 試験委員
2016年12月～	総務省東北総合通信局 受信者支援団体の公募及び事業実績に係る評価会 構成員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

AO委員

2024年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	菅山　真次	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
経営史の授業方法・評価の工夫	2014年4月～	授業中に毎回小テストを実施するか課題をだし、その結果のみで授業評価を行った。 定期試験は一切実施しなかった。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年1月～	経営史学会

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	鈴木　好和	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
ライオンズクラブの下位組織としての「翼レオクラブ」の部長としての指導を行った。	2020年4月1日～	ライオンズクラブと共同で社会貢献活動を行う。今年は、海岸の清掃や仙台駅のアルコール消毒などを行った。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	藤　祐司	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Empirical Analysis on the Interaction between Corporate Dynamics, Cultural Context and Economic Growth	共著	2024年9月	International Institute of Applied Informatics, IIAI Letters on Business and Decision Science, 4	Yuji Tou,Akira Nagamatsu	pp.1-13
International Cooperation Towards Decarbonization, Originating from India – Case Analysis of Industrial Cooperation in the Semiconductor Sector between India, Japan, and Taiwan	共著	2024年4月	Journal of Technology Management for Growing Economies, 15(1)	Takashi Hattori,Yuji Tou,Chihiro Watanabe	pp.9-19
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
コラム：差別化とイノベーション（3）ー中小企業におけるイノベーションの考え方ー	単著	2025年3月	宮城県中小企業団体中央会, ESPO中央会情報誌(623)	藤　祐司	pp.10-11
コラム：差別化とイノベーション（2）ー差別化に活きるイノベーションー	単著	2025年1月	宮城県中小企業団体中央会, ESPO中央会情報誌(622)	藤　祐司	pp.10-11
コラム：差別化とイノベーション1）ー東北の強みを活かすための差別化戦略の基本ー	単著	2024年11月	宮城県中小企業団体中央会, ESPO中央会情報誌(621)	藤　祐司	pp.10-11
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
製造技術の時代的刷新：脱炭素に向けたモノづくり力とグローバルサウスのDX起爆力の融合 ー 日印脱炭素協力によるジュガード世界標準化との共進	共同	2024年10月	研究・イノベーション学会第39回年次学術大会(オンライン)	@渡辺千仭, 藤祐司	
技術の時代的刷新：脱炭素に向けたモノづくり力とグローバルサウスのDX起爆力の融合 – グローバルサウスに倣うビジネスモデルの刷新	共同	2024年10月	研究・イノベーション学会第39回年次学術大会(オンライン)	@藤祐司, 渡辺千仭	

Empirical Analysis on the Interaction between Corporate Dynamics, Cultural Context and Economic Growth	共同	2024年7月	16th IIAI International Congress on Advanced Applied Informatics (IIAI AAI 2024) (Sunport Takamatsu & Kawata International Conference Center, Takamatsu, Japan)	@Yuji Tou, Akira Nagamatsu	

H. 翻訳（学術書や原典等）	
I. 特許	
現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2021年度～2024年度	(研究代表者)	情報技術の発展により、貨幣価値に換算できない価値が増大する一方、それらの対価として収集されている情報の価値も正しく貨幣価値換算できない。本研究の目的は、デジタル変革により創造されるユーザサイド、情報活用企業サイドそれぞれの価値の規模・効果を把握し、その均衡条件を明らかにすることである。手法としては、デジタル経済下の貨幣価値換算のできない価値に注目し、①デジタル関連の経済活動の創造価値を点数化し、ユーザが得られる社会的厚生を推計、② 情報活用企業のユーザ情報活用のシステムのモデル化および検証を経て、③動的シミュレーションによるユーザサイド、情報活用企業サイドそれぞれの創造価値の均衡点を探る。

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2018年～	日本経営システム学会 評議員
2010年～	日本経営システム学会 会員
2004年～	研究・イノベーション学会 国際問題分科会 幹事
1998年～	研究・イノベーション学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	根市　一志	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
独自アンケートの実施	2022年4月1日～	授業の理解度を確認するための独自のアンケートを実施している。
授業評価の実施	2022年4月1日～	「授業改善のための学生アンケート」を実施している。
自発的に考えさせる。	2022年4月1日～	学修した基礎知識をどのように使うのか、練習問題等を通じて自発的に考えさせる。
効果的なプレゼンテーション	2022年4月1日～	人に自分の考えを理解させるための効果的なプレゼンテーションを考えさせる。また,それを指導する。道具としてマルチメディア機器を活用させている。
基礎知識を理解させ、定着させる。	2022年4月1日～	基礎知識をその科目の体系性を考慮し,できるだけ平易に説明している。さらに,説明後,例を示し,より理解を深めている。前回の講義で説明した内容の概略を講義の初めにもう一度簡潔に説明している。講義の終わりに理解したことをまとめさせている。
学修の必要性を理解させる	2022年4月1日～	専門体系における当該科目の位置づけと必要性を説明している。
テーマと目的を理解させる	2022年4月1日～	テーマの内容について,何を明確にしたいのか,目的をはっきりさせる。目的達成までの手順を論理的に考えさせ,それにしたがった問題を解決させる。
データの分析	2022年4月1日～	客観的な根拠を示すため、何を明らかにしたいのか、明確な目的を理解した上で、データ分析を行う。道具としてデータ分析ソフトウェアを使う。また、それを指導する。
データと情報の収集	2022年4月1日～	目的を達成させるために必要なデータや情報は何かを考えさせる。また,それを指導する。道具としてインターネットを活用している。
responの利用	2022年4月1日～	双方向の授業を行うため、responを利用している。
manabaの利用	2022年4月1日～	講義資料の配布、講義内容の理解度を確認するための小テストにmanabaを利用している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
統計学概論のテキスト	2022年4月1日～	統計学概論IおよびIIのテキストを作成し、学生に提供している。
講義用スライドの作成	2022年4月1日～	講義用のスライドを作成して講義内容の説明に十分時間を費やすようにしている。また,一部の講義スライドはWebからダウンロード可能にし,学生に提供している。
Web教材の作成	2022年4月1日～	講義内容の詳細な説明,講義の補足,教材の提示などを目的に作成している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	①講義概要に記載した到達目標を達成できることを目標に掲げている。そのためには、なぜ当該科目の学修が必要なのか、講義内容がいかに重要なのか、自分で考える力を身につけることがいかに重要なのかを理解させることに重点を置いている。 ②新しい内容を取り入れる。 ③講義内容を理解するための具体的な例を考える。 ④テキストを改善する。 ⑤講義スライドを改善する。

今年度の進捗状況	上記目標①に関しては、その達成度を評価すると、授業で説明した内容を理解し、それをもとに自分の意見を述べることができている。自分の考えを発展的に応用できている。例えば、提出させたレポートをみると、内容を適切に考察し、きちんとまとめることができている。また、発展的な考えもみられる。ソフトウェアの操作だけではなく、結果の評価、考察ができている。小テストなどの成績も概ね良い。 上記目標②に関しては、現在の社会的な出来事など、新しい内容を考慮した説明はできていると思う。 上記目標③に関しては、具体的な例題の作成はできていると思う。 上記目標④に関しては、どのような内容にすれば、より理解が深まるか常に意識して作成しているが、新たな課題も発生するので、その都度改善が必要になっている。また、修得すべき知識として必要と思われる数学的内容を追加した。今年度は、授業内容が変わった科目のテキストを作成した。 上記目標⑤に関しては、どのような内容にすれば、より理解が深まるか常に意識して作成しているが、新たな課題も発生するので、その都度改善が必要になっている。
来年度の進捗目標	来年度は研修休暇のため、上記目標①から⑤に関して改善を考える。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	①非線形関数をデータにフィットするための手法研究 ②非線形関数フィットのベイズ統計的評価の研究
今年度の進捗状況	上記目標①に関しては、継続して研究を行っているが、進捗はあまりない。 上記目標②に関しては、基本的な知識修得レベルにとどまっている。
来年度の進捗目標	上記目標①に関しては、継続していく。 上記目標②に関しては、継続していく。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

体育会剣道部部長

2024年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	松岡　孝介	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
Providing Cost Management Course in English	2024年9月30日～2025年1月27日	
manabaを利用した授業資料の共有	2018年4月～2025年1月27日	すべての授業で，授業資料をすべてmanabaにアップロードして，受講者が閲覧できるようにしている。また、少人数制の授業では、過去のゼミ活動の資料をGoogle for Educationで共有するようにしている。
経営と管理会計の模擬体験	2018年4月～2024年7月	戦略マネジメント・ゲームあるいはビジネス・ゲーム21という教材を用いて，経営と管理会計を模擬体験できる授業を展開した。この授業では、学生たちは計画とコントロールという管理会計の中核的機能が，企業経営において非常に重要な役割を果たすことを実感することができる。
事例を用いた理論と実践の関連付け	2007年4月～2025年1月27日	会計学に関わる講義形式の授業では，必要に応じて，現在学んでいる会計技法を用いて実企業を分析するとどのような結果が得られるのかを示すために，事例を用いるようにしている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
Course Material of Cost Management	2024年9月30日～2025年1月27日	
クリティカルシンキングの講義資料	2015年9月～2024年8月	ゼックミスタ，E.B.・ジョンソン J.E.（1996）『クリティカルシンキング 入門篇』北大路書房、およびゼックミスタ，E.B.・ジョンソン J.E.（1997）『クリティカルシンキング 実践篇』北大路書房に基づいて資料を作成し，毎回配布した。
特別講義（おもてなしの経営学）の講義資料（財務諸表分析，レベニュー・マネジメント，マーケティング・リサーチ）	2011年9月～2025年1月	2011年度から2018年度までは帝国ホテルの事例を用いた経営分析について講義した。この資料はそれ以降も毎年、必要に応じて更新しながら利用した。2019年度はさらに塩釜の事例を用いたマーケティング・リサーチについて講義資料を作成した。また、2019年度および2020年度は、ホテルチェーンの事例を用いた価格設定についての資料を作成した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	コストマネジメント論は、将来の戦略管理会計論への名称変更に備え、授業資料の充実を図る。 少人数制授業ではゲームを通じた実践的な管理会計教育を展開する。
今年度の進捗状況	コストマネジメント論は、英語での開講に切り替え、すべての資料を英文化した。 少人数制授業では、1年生向けの基礎演習で、ゲームを通じた実践的な管理会計教育を展開することができた。
来年度の進捗目標	来年度は他大学へ移籍する。移籍先では会計学研究を一手に担うことになるため、財務諸表分析、財務計画、予算管理と業績評価、コストマネジメント、マネジメント・コントロールなど幅広く管理会計に関わる授業を展開したいと考えている。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Tourism SME disaster management: the case of the Great East Japan Earthquake (by Takatoshi Murayama, Graham Brown, and Kohsuke Matsuoka)『Handbook of Tourism Entrepreneurship (Research Handbooks in Tourism)』	分担執筆	2024年5月	Edward Elgar Publishing, 1	Takatoshi Murayama, Graham Brown, Kohsuke Matsuoka	pp.316-331

Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Resident perceptions of the Tokyo 2020 Olympic Games: An examination of the impact of the COVID-19 pandemic	共著	2025年2月	Elsevier, Annals of Tourism Research Empirical Insights, 6(1)	Takatoshi Murayama, Graham Brown, Atsuhi Akiike, Kohsuke Matsuoka	pp.
Taking an Alternate Route: Redesigning Sales Management Control Systems for New Product Selling	共著	2024年11月	Taylor & Francis, Cogent Business & Management, 11(1)	Kohsuke Matsuoka, Hiromune Ishii, Ying Zhu, Asumi Kawaguchi	pp.
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
観光地の業績測定：観光客エンゲージメントの役割とドライバーの検証	共同	2025年2月	2024年度 日本原価計算研究学会 関東・関西部会(東京都)	◎松岡孝介, 三谷華代	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	アクターネットワーク理論の研究は、Prof. Wickramasingheとの協議内容に基づいて修正を重ねていく。 セールス・マネジメント・コントロール・システムの研究は、データ収集、解析および文献レビューをさらに進める。2023年度中の投稿を目指す。 観光に関わるカスタマージャーニーの文献サーベイを進める。 国内企業において、顧客調査と従業員調査を継続してデータ収集を行う。
今年度の進捗状況	アクターネットワーク理論については文献を読み進めた。 セールス・マネジメント・コントロール・システムの研究は投稿、出版へこぎつけた。 観光に関わるカスタマー・ジャーニーは文献サーベイを終え、草稿を執筆した。 国内企業において、顧客調査と従業員調査を継続してデータ収集を行った。
来年度の進捗目標	アクターネットワーク理論の研究は、2025年9月にJournal of Management Controlの特集号への投稿を検討する。 カスタマージャーニーの論文は出版を目指す。 国内企業において、顧客調査と従業員調査を継続してデータ収集を行う。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
競争的資金等の外部資金による研究 外国人招へい事業 外国人招へい研究者	2024年度～2024年度	個別(研究代表者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2020年度～2024年度	個別(研究代表者)	本研究では、事例研究を通して「収益管理会計」の構築を行う。収益管理会計は、顧客データを用いて収益分析を行い、マーケティング意思決定に役立てる。本研究は、収益管理会計を支える手法や概念を発展させ、原価計算に立脚する伝統的管理会計を補完することを目指す。具体的には、①収益形成過程の促進要因の分析、②収益バランスが安定成長に与える影響の検証、および③顧客生涯価値に基づく資源配分方法の構築を行う。

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2024年1月～	APMAA (Asian Pacific Management Accounting Association) Japan Regional Chapters of APMAA Japan

2022年10月～	Asia-Pacific Management Accounting Association 会員
2021年5月～	一般社団法人 ICTマネジメント研究会 理事 理事
2019年12月～	一般社団法人ICTマネジメント研究会 学生小論文アワード 審査委員 運営参加・支援
2019年1月～	日本戦略MG教育学会 理事
2016年4月～	余暇ツーリズム学会 会員
2007年10月～	日本原価計算研究学会 会員
2005年9月～	日本会計研究学会 会員
2003年9月～	日本管理会計学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

会計・ファイナンス実習室　室長

2024年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	松村　尚彦	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	1．演習型の授業でより学生の参加を促せるようにする。 2．講義型の授業では構成の工夫や具体例を使った解説により、学生にとってより魅力的な講義にする。	
今年度の進捗状況	1の課題について ・ゼミ、基礎演習、文献講読などの演習型の授業で新しいアイスブレイクを導入することで、グループ内の親密度がまし、グループワークでも活発に議論できるようになった。 ・ゼミ3年で経営分析、財務分析、株価の水準などの理論的な知識を使って、実際に投資判断を行うプロジェクト型の学習を実施した。学生は授業以外の時間もmanabaのプロジェクトや自主的に集まって使って課題に取り組むなど、ゼミ活動を積極的に行っていた。 2の課題について 講義型の授業では、できるだけ①授業の概要、②基本知識の習得、③具体例による解説、④学んだ知識の適用という4つの要素を入れ、学生が90分の授業をなるべく退屈しないで聞くことができるように工夫した。 なかでも③の具体例による解説には特に力を入れて学生の理解と興味を喚起することを目指した。 たとえばファイナンスでは、投資アナリストと言われる人たちの予測の的中度がどの位であるのかを調べることで、（プロでも投資で高いリターンを上げるのは難しいという）効率的市場仮説について、実感を持って理解できるようにした。 またファイナンスⅡでは、日銀が大規模な金融緩和政策を是正することができない問題を解説しながら、投機筋がそれを見透かして円売りを仕掛けてきたことなどを、具体的なデータに基づいて紹介した。	
来年度の進捗目標	1．演習型の授業でより学生の参加を促せるようにする。 →更に効果的なアイスブレイクの方法を考える。 →他にも参加型の学びにつながるアクティビティを考える。 2．講義型の授業では構成や具体例による解説により、学生にとってより魅力的な講義にする。 →より一層授業の構成に工夫をこらす。 →学生にとって興味を持ちやすい具体例の素材を更に探していく。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
教員・学生・図書館の協働による自律的な学習者の育成	共著	2025年3月	2024年度「学長教育改革研究助成金・学長研究助成金」研究成果報告書	松村尚彦、吉植庄栄、斎藤渉、遠海友紀、曽根邦敏	pp.1-6
G．学会における研究発表					
教員・学生・図書館の協働による自律的な学習者の育成	共同	2025年3月	学長教育改革研究助成金成果報告(仙台)	松村尚彦，吉植庄栄，斎藤渉，遠海友紀，曽根邦敏	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	1.「資本主義社会の問題」という大きなテーマを探求する。 →経済的な格差、日本における財政の持続可能性などの問題を解決しようとする試みをリサーチする。 →またその根底にある「宗教としての資本主義（ベンヤミン）」という哲学的な問題にもチャレンジしたい。 →大きなテーマなので学術的な成果に結びつけることは難しいが、これからの経済社会を考える上で重要なテーマなので、その成果は学生を中心に還元していきたい。 2. 合理的な資産運用のあり方に関する啓もう活動 →新NISAの導入により資産運用に関する注目が高まっているが、ファイナンスや行動経済学の視点からみて合理的な資産運用とはどのようなものかを探求していく。 →学術的な成果には結び付きにくくても、学生や社会人が健全な経済基盤に守られて生活していく上で重要なテーマなので、その成果は学生や社会人に還元していく。 3. 少子高齢化時代における地域金融機関の役割を考えていく。 →七十七銀行などの取り組みを調査する。
今年度の進捗状況	1の課題について 河村小百合『日本銀行我が国に迫る危機』の内容を掘り下げて授業で学生とともに考えた。 2の課題について 老年期以降に、現役時代に形成した資産が尽きてしまうまでの期間＝資産寿命をいかに長くするかという比較的新しいテーマについて取組み、学生にその概要を紹介した。 3の課題について 七十七銀行の6人の行員とともに、七十七銀行が地方創生のために取り組んでいる事業について学生に紹介した。
来年度の進捗目標	1.「資本主義社会の問題」という大きなテーマを探求する。 →経済的な格差、日本における財政の持続可能性などの問題を解決しようとする試みをリサーチする。 →またその根底にある「宗教としての資本主義（ベンヤミン）」という哲学的な問題にもチャレンジしたい。 →大きなテーマなので学術的な成果に結びつけることは難しいが、これからの経済社会を考える上で重要なテーマなので、その成果は学生を中心に還元していきたい。 2. 合理的な資産運用のあり方に関する啓もう活動 →新NISAの導入により資産運用に関する注目が高まっているが、ファイナンスや行動経済学の視点からみて合理的な資産運用とはどのようなものかを探求していく。 →学術的な成果には結び付きにくくても、学生や社会人が健全な経済基盤に守られて生活していく上で重要なテーマなので、その成果は学生や社会人に還元していく。 3. AI時代の図書館のレファレンスのあり方 →オープン型AIやRAG型AIによる情報探索と新しい図書館の役割を考えていく。 →個別の授業やゼミに即したレファレンスのあり方を考えていく。 4. AIがもたらす教育・研究へのインパクトについて →AIを使った学習の個別化プログラムの作成 →シンギュラリティ時代の大学教育のあり方提言など

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2014年9月～	日本証券アナリスト協会東北地区連絡委員 委員
2013年4月～	世界食料フォーラム・仙台実行委員 事務局委員
2001年4月～	日本ファイナンス学会 会員
1994年～	日本証券アナリスト協会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

図書館長として、図書館サークルの活動支援、ビブリオバトル活動の支援、個別授業やゼミに役立つレファレンス支援、探究授業を中心とした高大連携などを進めて行く。

2024年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	村山　貴俊	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
LMSを活用した講義の実践	2022年4月1日～	LMSを活用し、学生への資料配布のほか、毎回の出席管理および実力確認小テストの実施
アクティブラーニングおよびプロジェクト・ベースド・ラーニングに関するFDの実施	2021年～	経営学部のFD活動の一環としてALとPBLに関する実践例の報告。FD会議の主催と報告者の調整。
おもてなしの経営学での実践教育の展開	2008年～	宮城県の旅館ホテルと連携した実践教育。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
経営学部・研究FD会議の立ち上げと運営	2022年～	経営学部の教育FDに加えて、研究FDの立ち上げと運営も担当
観光に関する国際的な教育機会の提供	2020年～	南オーストラリア大学の研究者と連携して学生および市民に観光学を英語で学ぶ機会を提供
経営学部の遠隔授業実施に関するプロジェクトチームでの活動	2020年～	
FD NEWSの記事および活動報告の作成	2016年～	特色ある講義の1つとして経営学部ビジネスケース研究を紹介する記事を作成。ケース・メソッドという広く認められた教育方法の構成要件を挙げ、それらに要件に沿った講義を展開することの重要性を指摘。FD委員として経営学部のFD活動の報告書作成を担当。
ゼミナールでの観光調査および観光振興策の提案・実施	2015年～	JR小さな旅の企画と実施、塩竈市と共同でのアンケート調査。観光振興策の提案。武田の笹かまぼことの共同商品開発。塩竈スイーツマップの作成。石巻圏DMOの調査協力、蔵王町の観光地競争力調査など
『経営学部生のための学びのガイドブック』を用いた講義の実施	2015年～	「序章 本書の狙いと特徴」「第1章 レポート作成の技法」を用いて、読解・作文の技法、研究・発表の技法の講義を実施。
地域の企業に対する戦略提案	2008年～	地域企業に対してビジネスケース研究、ビジネスケース実習、ゼミナールなどを通じて戦略提案を行った。また、武田の笹かまぼこと連携して新商品の開発と販売も実施した。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Tourism SME disaster management: the case of the Great East Japan Earthquake (by Takatoshi Murayama, Graham Brown, and Kohsuke Matsuoka)『Handbook of Tourism Entrepreneurship (Research Handbooks in Tourism)』	分担執筆	2024年5月	Edward Elgar Publishing, 1	Takatoshi Murayama, Graham Brown, Kohsuke Matsuoka	pp.316-331
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Resident perceptions of the Tokyo 2020 Olympic Games: An examination of the impact of the COVID-19 pandemic	共著	2025年2月	Elsevier, Annals of Tourism Research Empirical Insights, 6(1)	Takatoshi Murayama, Graham Brown, Atsuhi Akiike, Kohsuke Matsuoka	pp.

Tourism SME disaster management: the case of the Great East Japan Earthquake	共著	2024年5月	Edward Elgar, Handbook of Tourism Entrepreneurship	Takatoshi, Murayama, Graham, Brown, Kohsuke Matsuoka	pp.316–331

Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）			
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文			
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）			
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）			
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）			
G. 学会における研究発表			
H. 翻訳（学術書や原典等）			
I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	矢口　義教	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
理論と実践に基づくアクティブラーニング	2020年4月1日～	経営学科講義科目「ビジネス・ケース実習」において、経営学理論の修得に基づく実践的な思考・分析・提案力を養い、地域企業や大手上場企業への実践的戦略提案を行っている。
復興マインドを形成するアクティブラーニング	2020年4月1日～	演習（3年）・（4年）において、CSRの観点から東日本大震災被災地の復興構想をプランニングする指導を展開している。アクティブラーニングを行うことで、受講生の復興マインドの涵養に努めている。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
『入門　企業論』	共編者（共編著者）	2024年4月	創成社	村田大学, 金在淑, 佐久間信夫, 柏木理佳, 矢口義教, 安達啓介, 國府俊一郎, 清水健太, 文載皓, Karki Shyam Kumar, 井上善博, 山田朋生	pp.77-101
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2020年4月～	社会福祉法人仙台市社会福祉協議会若林区社会福祉協議会委員（現在に至る） 委員
2018年6月～	東北学院大学地域連携課「コミュニティソーシャルワーカー（CSW）スキルアッププログラム」講師（2020年6月）（東北学院大学地域連携課「コミュニティソーシャルワーカー（CSW）スキルアッププログラム」講師（2020年6月））
2015年9月～	日本産業経済学会 会員
2015年4月～	仙台市 仙台市コンプライアンス推進委員会 委員
2014年10月～	Society for Business Ethics 会員
2014年10月～	環境経営学会 会員
2014年4月～	日本経営倫理学会 会員
2013年8月～	事業承継学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	経営学部　経営学科	職名	准教授	氏名	井岡　佳代子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	課題は、演習において、2年次から増加する欠席しがちな学生に対して主体的な参加を促すにはどうすればよいのか、また、プレゼンテーションに対する苦手意識を克服してもらうためにはどうすればよいのかである。目標は、専門書の読み方や情報検索・収集の仕方、レポートの書き方、プレゼンテーションの仕方といった大学生に求められる基礎的学修スキルを修得するための授業を設計することである。	
今年度の進捗状況	今年度は着任1年目であり、年間を通して、授業・演習における学生の傾向や履修状況の把握に時間を取られてしまい、設定した目標に対して充分な成果をあげることはできなかった。	
来年度の進捗目標	来年度の進捗目標は、1つは、アイスブレイクの活用である。自己紹介や小クイズをしてプレゼンテーションしやすい環境を整える。2つは、グループワークの活用である。企業研究をグループでやってもらい、メンバーと協力して学ぶことの楽しさを感じてもらう。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
財務的意思決定プロセスと経営目標としてのROEとの関係：日本企業のROE推移に着目して	単著	2025年3月	産業経済研究(25)	井岡　佳代子	pp.94-104
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
日本企業における利益還元政策の変化（1960～2010年）	単独	2024年10月	経営史学会第60回全国大会(東京大学)	井岡　佳代子	
ROE重視の再考：歴史的変遷からの一考察	単独	2024年9月	日本産業経済学会第21回全国大会(立教大学)	井岡　佳代子	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年6月～	日本経営倫理学会 会員
2024年6月～	日本産業経済学会 会員

2023年9月～	社会資本整備審議会道路分科会、道路分科会東北地方小委員会 専門委員 委員
2017年6月～	公益社団法人石油学会 経営情報部会 石油・エネルギー産業史WG 委員
2017年6月～	公益社団法人石油学会 会員
2013年4月～	組織学会 会員
2007年4月～	経営史学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動
入試委員として、入学者選抜に関わる活動に携わった。

2024年度

所属	経営学部　経営学科	職名	准教授	氏名	工藤　大介	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	現在の教育上の課題としては，少人数演習における学生同士の議論をより活発化させるための，ファシリテート方略の確立にあると考えている。学生においては，授業や演習での議論・発言の機会・経験が少なく，不慣れであるため，及び腰となっている傾向が散見される。そのため，学生一人一人の考えを尊重し，闊達な議論を促していくための方略の確立や，授業計画の見直しを行っていく。	
今年度の進捗状況	前期・後期を通じて学生の特性を鑑みながら，演習でのファシリテートの改善を試み，学生からの積極的な発言を引き出すことができた。しかし，1年生向けの演習では試みが通用しない場面があり，まだ改善が必要だと考えられる。	
来年度の進捗目標	来年度は演習や授業において，学生に対して心理的安全性が担保されていることを説明し，自由に意見や考えを表明してよい場であることの認識を高め，より闊達な議論に基づくアクティブラーニングが実施することを目標とする。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
食べ物の健康効果を信じるのはなぜ？：心理学から見たフードファディズム『大学で心理学を学びたいと思ったときに読む本』	分担執筆	2024年5月	誠信書房	工藤大介	pp.14-21
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
能登半島地震に対する支援：支援物資・支援行動の適切性認知と支援者に対する信頼	共同	2025年3月	第11回震災問題研究交流会(早稲田大学戸山キャンパス)	工藤大介，李楊	
東北産農産物・海産物への風評被害払拭に向けたマーケティング戦略を考える	共同	2025年3月	超異分野学会2025 東京・関東大会(ベルサール新宿グランド コンファレンスセンター)	工藤大介，李楊	
学術界におけるハラスメント対策の現状と課題を考える	共同	2024年	日本心理学会第88回大会(熊本城ホール)	高階光梨，大島郁葉，姜静愛，工藤大介，和田杏子，安田拓，本田由紀	
研究者としてのライフプランをファイナンシャルプランナーと考える	共同	2024年	日本心理学会第88回大会(熊本城ホール)	富田健太，讃井知，沖中武，工藤大介，町田規憲	
学部生・高校生プレゼンバトル	共同	2024年	日本心理学会第88回大会(熊本城ホール)	工藤大介，前澤知輝，瀧川諒子，川上澄香	
若手が進路をあきらめないための「新しい支援体制」と「戦略」のありかた	共同	2024年	日本心理学会第88回大会(熊本城ホール)	工藤大介，前澤知輝，西村友佳，残華雅子，今津杉子	

能登半島地震後の支援行動に関する態度と意思決定(2):震災関係者に対する信頼と被災地における行動の不適切さ認知について	共同	2024年	日本社会心理学会第65回大会(日本大学文理学部)	工藤大介, 李楊	
能登半島地震後の支援行動に関する態度と意思決定(1):なぜ私たちは自分にとって不要なものを支援物資として送ろうとするのか?	共同	2024年	日本心理学会第88回大会(熊本城ホール)	工藤大介, 李楊	
2023年福島第一原発処理水放出前後の東北産品に対する態度	共同	2024年	東北心理学会第77回大会(宮城学院女子大学)	工藤大介, 李楊	
健康疑似科学・健康誤情報の蔓延と科学教育	共同	2024年	日本科学教育学会第48回年会(函館工業高等専門学校)	加納安彦, 石井拓児, 工藤大介, 谷伊織	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	現在の研究活動における課題は, 1つ目は科研費課題である「食品の健康効果の信奉」に関して, 調査を進めていくと共に, これまでに行ってきた調査・実験データを論文化することである。また, 2つ目は, 研究データの学会や国際会議での発表を含め, 一般向けの雑誌記事や書籍等, そして出張講義や講演において, サイエンスコミュニケーション活動・アウトリーチ活動を進めていくことである。
今年度の進捗状況	今年度は複数の調査を実施し, 学会等での発表も行った。論文化の進捗状況も順調であり, 来年度は学術誌に投稿予定である。アウトリーチ活動に関しては, 今年度は学会でのシンポジウムで話題提供を行った。
来年度の進捗目標	来年度の研究活動については, 論文の学術誌への投稿に重点を置いて進めていく。まず, 共同研究の論文2本の国内学術誌への投稿を行うと共に, 主著論文2本の国際誌への投稿を行っていく。また, 新たに研究助成金が採択されたため, こちらの研究テーマについて, 調査・実験を進めていく。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 若手研究	2023年度～	個別(研究代表者)	特定の食品・栄養の健康への影響を誇大に信奉する現象であるフードファディズムは, 人々の生命・健康と直結することから, 消費者の不合理な意思決定の中でも特に注目を要する行動である。しかし従来の研究は事例分析が中心であり, フードファディズムを引き起こす心理的メカニズムへの検討は黎明期に過ぎない。定量的アプローチの土台であるフードファディズムの信奉度の測定法の開発や, 影響要因の因果関係の特定など, 喫緊な課題が多数存在している。本研究では, 意思決定研究における消費者の不合理な購買意思決定の研究手法から出発し, フードファディズム発生に至る心理的メカニズムを検討する。

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2024年9月～	日本心理学会ハラスメント対策ワーキンググループ 委員
2022年5月～	日本消費者行動研究学会 会員
2022年5月～	日本心理学会 若手の会幹事
2021年12月～	日本人間行動進化学会 会員
2017年4月～	産業・組織心理学会 会員
2014年4月～	Asian Association of Social Psychology 会員
2013年7月～	Society for Personality and Social Psycholog 会員
2012年4月～	日本心理学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	該当なし。		
今年度の進捗状況	該当なし。		
来年度の進捗目標	該当なし。		

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

学内では総合ネットワーク管理委員会委員他4つの委員会に所属し，各業務に携わってきた。他にはオープンキャンパスでの出張講義や，面接委員や入試試験監督を担当した。

2024年度

所属	経営学部　経営学科	職名	准教授	氏名	窪田　嵩哉	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
事例・研究の紹介	2020年～	理論やフレームワークの学修を促すため、理論やフレームワークに対応する事例を紹介した。また、学習した理論が近年の研究でどのように扱われているかを紹介し、より深い学修に触れ、興味を持つことができるよう工夫した。
学生が主体となってビジネスプランを考えることを中心とした授業の設計	2020年～	学生が主体となり、いちからビジネスプランを作成するよう、授業を設計・運営した。授業では実際に学生がインタビュー調査を行うなど、学生自身が収集した情報をもとにビジネスプランを作っていく過程が体験できるようにした。
2．作成した教科書、教材、参考書		
ビジネス・リサーチ実習　授業資料の作成と改善	2020年～	
起業論Ⅱ　授業資料の作成と改善	2020年～	
起業論Ⅰ　授業資料の作成と改善	2020年～	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	経営学部　経営学科	職名	准教授	氏名	棚橋　則子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学んだ理論の実践（日経STOCKリーグへの参加）	2016年4月～	演習（3年）では，前期で学んだ会計・ファイナンス理論と財務・株価データを分析するためのプログラミング（R言語）を実践するために，後期には日本経済新聞社主催・野村ホールディングス特別協賛の株式投資コンテスト「日経STOCKリーグ」に参加している。2024年度は1チームが参加したが，一次審査を通過することができず残念な結果であった。また，毎年，他学部や他大学と合同ゼミを行っており，聞き手に伝わるプレゼンテーションを検討したり，他人の発表に対して建設的な質問やコメントをしたりと，合同ゼミを通じて社会人に必要なスキルの向上も図っている。
学習意欲のある学生に対する個別対応	2016年4月～	演習を履修している学生から，さらに発展した内容を学びたいという要望があった場合に，授業時間とは別に学習機会を設け，学生の学習機会を失わないようサポートを行っている。また，大学院への進学に関する相談にも応じている。
知識を定着させるための授業設計	2016年4月～	講義形式の授業では，毎回の授業の冒頭で，前回学んだ分析手法に関するミニテストを実施し，授業後には授業内容確認テストに取り組むことで，知識を定着させる仕組みを構築している。また，授業内で計算演習を行う際には，教室内をくまなく巡回し，悩んでいる学生がいたら声がけをするなど，学生が直面している疑問をそのままにしないよう即座に対応できるようにしている。また，演習などの少人数授業では，リアクションペーパーを導入し，教員と学生間の双方向のやり取りを行っている。具体的には，毎回の授業の振り返りを行うとともに，学生の疑問点・学習上の悩みなどを即座に把握し，対応している。
実際に企業が公表している財務諸表を教材として使用	2016年4月～	授業では，計算しやすいように作られた架空の財務諸表を用いるのではなく，実際に公表されている連結財務諸表（2024年度はキユーピー株式会社の連結財務諸表を使用）を用いて行うことで，教科書の内容を抽象的に学ぶのではなく，現実との接点を得ることができるように授業を設計している。
会計初学者を想定した授業構成と教材の工夫	2016年4月～	会計学入門（1年次必修科目）受講者のほとんどが会計初学者であるため，簿記を一切使わず，なるべく学生がイメージしやすい身近な話題から話を始め，毎回の学習トピックへと繋げることを意識している。また，前回の授業の内容が身についたどうかを確認するための「ミニテスト（授業の冒頭に実施／期間中は何度でも受験可）」と，授業の内容をしっかりと理解できているかどうかを確認するための「授業内容確認テスト（授業後に実施）」を実施することで，知識の定着を図る仕組みを構築した。さらに，新型コロナウイルスの影響により，授業がオンデマンド方式になったことから，前述の授業の構成に加え，会計上の取引がよりイメージできるように，図やイラストを多く用いた動画を作成した。対面授業となった現在でも，授業の構成は変えず，オンデマンド教材を作成した際に使用していたスライドを用いて授業を行っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	担当している授業について，これまで行ってきた様々な改善点に加えて，柔軟な授業構成や現在の学生に合わせた対応を行うことで，よりブラッシュアップされた教育を実施する。

今年度の進捗状況	昨年掲げた目標すべてにおいて，ある程度は達成できたと考えている。 1）演習系の科目（主に「基礎演習」「総合演習」）では，受講生に対して何度も問いかけを行い，自らの頭でしっかり考える環境を構築する。 総合演習では，受講者全員にテキストの内容をまとめさせたうえで授業に参加することで，授業内ではテキストの内容についての問いかけを中心に行った。しかし，まとめる際に疑問点もまとめるよう指示しなかった点については少し反省点である。 基礎演習は，グループでの実施となったが，テキストの内容について問いかけを行ったり，あるテーマに関するグループディスカッションを行ったり，さらには事前に学習したことを基に少し発展的な内容について，皆で考え議論し，検討を行った。どちらの授業においても，受講生はある程度は自分で考えている（頭を使っている）という印象を受けた。特に基礎演習（1年生）では発展的な内容でも素晴らしい解答が出ることもあり，効果的であったのではないだろうか。 2）manabaの効果的な使い方を検討する。 担当している大部分の授業では効果的に利用できていると思うが，やはり簿記の授業においては昨年度に続き難しく感じた。現状，テキストとワークブックを使用していることから，別途manabaで練習問題を提示しても，結局消化不良になることが予想される。簿記の授業では，manabaは資料の配付や質問対応など最低限の利用にし，テキストとワークブックの問題をしっかり解けるようにさせることが大事だと思う。 3）担当した授業の振り返りを行い，再度，授業構成などを検討する。 今年度の反省をふまえ，再度授業構成などの検討を行った。その点は来年度のシラバスに反映させている。
来年度の進捗目標	1）演習系の科目では，受講生に対して何度も問いかけを行い，自らの頭でしっかり考える環境を構築する。 2）新しいLMSの効果的な使い方を検討する。 3）演習（3年）の授業内容を検討する。 4）担当した授業の振り返りを行い，再度，授業構成などを検討する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	採択された科研費の研究を進める。
今年度の進捗状況	昨年掲げた目標のうち，2以外はある程度達成できたと考えている。 1）次の研究テーマに関するサーベイ論文を執筆し，投稿する。 現在進めており，来年度の紀要（2025年5月締切）に投稿する予定である。 2）現在取得している科研費の研究を進める。 残念ながらあまり進めることはできなかった。 3）科研費へ応募する。 科研費へ応募し，無事採択された。
来年度の進捗目標	1）サーベイ論文を執筆し，投稿する。 2）現在取得している科研費の研究を進める。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

科学研究費助成事業 若手研究	2021年度～2024年度	個別(研究代表者)	本研究課題の目的は，①日本の会計情報を用いて会計ベータ値を推定し，それがCAPMや3ファクターモデルなどのファクターベータよりもリターンの説明力を有するのか，②会計ベータ値を推定する際，全上場企業の集約利益ではなくマクロ経済指標を用いた場合でもリターンの説明力を有するのか，の2点を明らかにすることである。 本研究課題の特徴は，会計ベータ値の推定の際に，①日本特有の経営者予想情報を用いる点，②全上場企業の集約利益の代わりに日本全体のマクロ経済指標を用いる点，である。本研究は，経営者予想利益や実績利益などの会計情報を用いて推定した会計ベータ値の有用性を示すことで，ディスクロージャー制度に対する政策的な含意を有する。また，誰でも入手可能な会計情報を用いた新たなリスク指標を提示することで，証券投資を行う投資者やアナリストに対して有益となる実証的証拠を提示する。

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2025年1月～2025年1月	日本経済会計学会第5回秋季大会準備委員会 準備委員
2024年10月～	日本会計研究学会機関誌編集委員会 編集委員
2021年9月～2024年9月	日本会計研究学会機関誌編集委員会 幹事
2018年9月～	東北防衛局入札監視委員会 委員
2013年9月～	日本会計研究学会 会員
2012年6月～	日本経済会計学会（旧 日本ディスクロージャー研究学会） 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	経営学部　経営学科	職名	准教授	氏名	堀　治彦	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
クラウド型グループウェアを活用した講義運営	2022年4月～	G Suiteなどを活用し、教材であるPowerPoint形式のファイルなどの共有や学生とのコミュニケーション、研究や学習の進捗管理などのマネジメントを統合的に運用した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
Microsoft PowerPointを使用した講義資料の作成及びWeb会議システムを利用した授業の動画作成、Google forms等を使用した課題の作成。	2022年4月～	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	専門教育科目の充実	
今年度の進捗状況	専門科目及び基礎科目についてはシラバス記載の通り遅滞なく講義を進めることができた。 専門科目については、高度専門職や公務員を志望する学生の期待に応答するメニューを提示することができたうえ、進路実績も良好となった。 大学院においては、専門的講義の提供を通じて、高度職業専門人材の育成ニーズに応える内容を展開している。	
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
減資と地方税制	単著	2024年11月	租税研究(900)	堀治彦	pp.35-43
企業の国際的租税回避行動の変遷と課題	単著	2024年8月	第83回日本会計研究学会 税務会計研究の変遷と展望ースタディ・グループ最終報告書（第14章）	堀治彦	pp.1-25
国際課税改革における多国間条約の議論	単著	2024年8月	国際商事法務, 52(8)	堀治彦	pp.920-925
租税法学界の動向	単著	2024年7月	租税法研究(52)	堀治彦	pp.109-135
税務会計研究学会特別委員会中間報告：「多様な事業体の税務及び会計の体系的研究」	単著	2024年7月	税務会計研究(35)	委員長,平野嘉秋,委員,大城隼人,鯖田豊則,堀治彦(第2部Ⅳ担当),林徳順	pp.115-136
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
国際課税における一方的措置の展望	単独	2025年2月	税務大学校第43回税務研究会(霞ヶ関中央合同庁舎第4号館)	堀治彦	

国際租税法への誘い−税務との架橋−	単独	2024年9月	国際税務に関する会員向け研修会(東北税理士会館)	堀治彦	
判例報告[東京地判令和 5 年 1 月 27 日/令和 2 年(行ウ)211 号]	単独	2024年9月	法務省租税判例研究会(第951回)(オンライン(zoom))	堀治彦	
企業の国際的租税回避行動の変遷と課題	共同	2024年8月	日本会計研究学会第83回大会スタディ・グループ最終報告(早稲田大学)	堀治彦	
減資と地方税制	単独	2024年7月	日本租税研究協会税制基本問題研究会(オンライン(zoom))	堀治彦	
国際租税改革における多国間条約の議論	単独	2024年4月	国際取引法学会金融税制部会(オンライン(zoom))	堀治彦	
税務ガバナンス向上に向けての取り組み	共同	2024年4月	(公社)日本租税研究協会 会員企業交流会 第Ⅰ部「セミナー」(日本工業倶楽部)	村本昌男(キヤノン株式会社)、ファシリテーター:野々村昌樹(EY税理士法人)、堀治彦	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	国際課税の研究及び企業課税に関する研究の推進
今年度の進捗状況	昨年度と課題・目標は同じであるが、進捗として、前年度採択科研費の若手研究(研究代表者)と基盤研究C(研究分担者)としての研究を推進している。これについては本年度の学会発表などを参照。 また、本年度から新たに基盤研究C(研究分担者)の採択もされたことから新しい領域の研究もスタートした。
来年度の進捗目標	2つほど採択されている研究の終了年度となることから、研究のアウトプットを行いつつ、次年度以降の科研費の新規採択につなげる予定である。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2024年度～2026年度	(研究分担者)	租税法規の趣旨・目的の積極的活用それ自体は所与としつつ、その具体的な適用が適切であるのかを検討し、評価する研究が租税法学では求められているといえ、そのために、諸アクターの利害調整の結果として成立する租税法規の趣旨・目的を公式な説明なしに明らかにすることが必要であり、本研究ではその手法を探求する。
科学研究費助成事業 科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2025年度	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 科学研究費助成事業 若手研究	2023年度～2025年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2024年3月～	国際取引法学会 会計監事
2023年6月～	International Fiscal Association YIN(Young IFA Network) Co-representative of Japan branch
2021年～	日本税法学会 会員
2021年～	租税法学会 会員
2020年～	国際取引法学会 会員
2016年～	税務会計研究学会 会員
2012年～	International Fiscal Association 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			

来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

大学院運営においては、2026年度から履修証明プログラムを開始する予定があり、専攻主任である折橋教授（来年度からは研究科長）と大学院課のみなさまと内容の策定作業を行なっている。そのなかで、東北税理士会との包括協定を結ぶべく調整も行なっている。

2024年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	森下　俊一郎	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
グループワーク主体のゼミ発表(3年次演習、研究・発表の技法、基礎演習)	2023年4月1日～	1，2，3年次のゼミはグループワーク中心に学年に合わせて段階的に進めている。1年次(基礎演習)はテキストに沿って、2年次(研究・発表の技法)はテーマを与え、3年次は自分自身のグループでテーマを考え、グループでの議論を交え、受講者が主体的に取り組めるよう指導している。授業の初めに教員が、今日の授業の主旨と解説、調査の指針を与え、それ以降は、グループで話し合いながら課題を進める。授業の最後には各グループで、その日の成果や進捗を発表してもらう。授業後は各受講生が、その日の学びを振り返り、manabaに入力するよう指示している。その受講者のコメントを一つひとつ読み込み、次回以降の授業に活かせるよう参考にしている。
卒業論文作成を見据えた個人指導とゼミ発表(4年次演習)	2023年4月1日～	経営学部で4年間学んだ集大成として本ゼミ(演習)では、卒業論文の提出を課している。前期は、研究の背景と目的、先行研究レビュー、調査研究方法、実調査、考察、まとめなどのプロセス毎に、その方法を解説している。その後で、各自の調査研究の状況を簡潔に報告してもらう。後期は、過去の先輩方の卒業論文をレビューし、論文とはどのようなものか、論文の書き方などを解説するとともに、前期同様、受講生各自の調査研究の報告をしてもらう。また、受講者個別に面談し、卒業論文で悩んでいることの他、就活についても話を聞く機会を設けている。
授業科目(サービス経営論、観光経営論)における理論と事例(ケーススタディ含む)を交えた講義と演習	2023年4月1日～	授業においては、その科目の理論だけではなく、必ず該当する実践事例を交えて解説している。まず、今日の授業のテーマに関わる実企業などで行われた実践事例を前半紹介する。その後で、後半は、その事例を踏まえて、理論的な解説を行う。授業中に各自の演習時間を設け、今日の事例の他に受講生各自が知っている事例を挙げ、受講生自身の言葉で、その事例の理論的解説を行う。このように理論と実践、および、教員による解説と自分自身による事例を繰り返すことにより、受講生の理解を深めている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
授業(サービス経営論、観光経営論)、演習(4年次演習、3年次演習、研究・発表の技法）科目でのオリジナル教材の作成	2023年4月1日～	授業(サービス経営論、観光経営論)、および、演習(4年次演習、3年次演習、研究・発表の技法）科目において、毎回オリジナル教材を作成し、事前に授業科目はmanabaを通じて、演習科目は当日受講生に配布している。受講生にはノートやメモを取ることに終始するより、教材の一部を空欄にして授業中にキーワードを埋めるなど、授業や演習に集中してもらうような教材内容を工夫している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
宿泊業の業態別による顧客満足および不満の要因と背景 ―ビジネスホテル，シティホテル，日本旅館の宿泊客の口コミ分析と比較を通じて―	単著	2024年7月	日本経営システム学会誌，41(1)	森下俊一郎	pp.41-48
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					

若者による温泉地活性化案のテキストデータ分析	単著	2024年11月	経営学論集, 23	森下俊一郎	pp.11-20
仙台近郊の温泉地における現状と訪日外国人観光客受け入れに向けての課題	単著	2024年7月	経営・会計研究, 29	森下俊一郎	pp.1-23

C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文

D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）

E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）

G. 学会における研究発表

大学生との知識共創による温泉街再生のための新たな地域サービス	単独	2025年3月	第13回サービス学会全国大会(立命館大学茨木キャンパス)	森下俊一郎	
地方都市近郊における温泉地の衰退要因の一考察―仙台近郊の秋保温泉、鳴子温泉郷、遠刈田温泉、作並温泉の現状と課題―	単独	2024年12月	第39回日本観光研究学会全国大会(大阪成蹊大学)	森下俊一郎	
Case Studies of Virtual School Excursions during the COVID-19 Pandemic	共同	2024年7月	International Conference on Service Science and Innovation (ICSSI2024)(Fu Jen Catholic University, Taiwan)	Kazuhisa Okazaki, Shunichiro Morishita	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 科学研究費助成事業(基盤C)	2019年度～2024年度	個別(研究代表者)	インバウンド訪日観光客が満足する旅館でのおもてなしとそのマネジメント(19K12570)

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2024年6月～	日本航空(東北支社)との共同研究プロジェクト(リーダー) 運営参加・支援
2022年1月～	International Conference on Sustainable Tourism Management (ICSTM) Technical Program Committees
2020年4月～	日本観光研究学会 会員
2017年4月～	日本経営診断学会 会員
2015年12月～	サービス学会 会員
2004年8月～	日本経営システム学会 会員
2004年6月～	工業経営研究学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	経営学部　経営学科	職名	講師	氏名	板橋　慶明	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
基礎演習において、人間性の理解に資すると思われる幅広い視野からのアプローチをとった。	2023年4月～	大学で学ぶための基礎知識を扱ってから、人と組織に関して様々な視点から深く理解できるように，カウンセリング的視点（カウンセリング・マインド），家族関係内のコーチング、異文化理解といった多彩な内容を取り入れ，現代組織と現代社会において必要とされる人間性の理解と育成に関係した能力を高めることに資する内容とした。
時事問題や国際情勢の検討も含めて、ミクロとマクロの両面からアプローチ（経営心理学Ⅱ）	2021年9月～	経営心理学Ⅱでは、リーダーシップや意思決定（情報の流れを含む）を主に扱っているが、これらのトピックと関連している時事問題や国際情勢もときどき取り上げ、ミクロ的視点とマクロ的視点の両面からアプローチして理解・考察できるようにサポートしている。
経営心理学の理論と実践書の内容との関連についての取り組み（経営心理学Ⅰ）	2021年4月～	授業で経営心理に関する理論を扱うともに、経営や組織の心理などに関係した実践書の内容にも取り組んでもらい、両者の間の関連性などについて検討・考察する機会を提供している。これにより、理論と実践の両面から経営心理を理解できるようになるようサポートしている。
学生に対する（学習や大学生活に関する）個別相談	2020年9月～	大学における学習や大学生活について相談を必要とする学生に対して（オフィスアワーの枠以外でも）個別相談に応じている。自分が望んでいることと現状を確認し，目的達成の障害となっている事柄がある場合には，それについて共に考え，大学生活について適切な意思決定をし，行動を起こすことができるようサポートしている。
発表担当グループによる円滑な演習進行を促進するためのサポート	2020年9月～	3，4年向け演習（ゼミ）において発表担当のグループが円滑にゼミを進行させ，ディスカッションを活性化することができるよう，ゼミ時間外に担当グループとのミーティングの時間を設けることによって，アドバイスやサポートを提供している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	・マネジメントにおける心理的現象に関わる複数の要因に配慮しながら注意深く考える能力を高めてもらえるよう努力する。重要な概念を結びつけながら注意深く考えたり、実践的状況や事例に適用して考えることを促す。情報のバイアス等についても注意を払い、現状分析できるようになることを促す。 ・レポート提出に関して，剽窃・盗用、コピペなどがよくないことを理解してもらい、自分の力で取り組むよう指導する。また、生成AIへの過度な依存についても注意喚起する。 ・集中力に欠ける受講の仕方をする学生に対応し、ながら受講などを減少させる。 ・現代の学生に対応するために必要な理解（学生相談等に必要な理解）を深める。相談を必要とする学生に積極的に対応する。	

今年度の進捗状況	・2年配当講義科目の試験を採点する際には、重要な概念を用いながら注意深く考える能力に重点をおいて評価している。今年度も、前期科目（経営心理学Ⅰ）の試験をレポート試験としたが、実践的内容を含む課題本に取り組むことを必須とし、（選択肢の中から選んだ）課題本の内容と授業の内容を結びつけながらレポートを作成するよう要求した。よく考えられていて、すぐれた内容のものが一部あったが、課題本の内容と授業で扱った重要概念とを結びつけて考えることに苦労している学生が（今年度は）多めであるようにみえた。全般的に見て、一定の水準に達してはいるが、深みのある分析や考察をすることがなかなかできない受講生増えたような印象がある。キャンパス統合の時期以来、このような傾向が強まったように感じられる。とはいえ、授業中に集中して授業を聞き、予習・復習に十分な時間をかけている学生については、考える能力と創造性を伸ばすのにある程度成功していると推測する。後期科目（経営心理学Ⅱ）は、試験として、論述の筆記試験を行った。その中で理論的構造を理解しながら自分の知識や考えをまとめる力を発揮してもらった。また、情報のバイアスや偏りに関する理論を実際の現象や事例に当てはめて社会における情報の偏りや流れの不自然さを検討してもらう努力もしたが、今年度は、限定的結果にとどまった。参考資料を早目に提供し、十分な時間をかけて取り組むことを促す必要があると見られる。 ・今年度も、前期の経営心理学Ⅰのレポート試験において、（ネット等からの）剽窃・盗用の件数は、かなり少ない数に限られた。剽窃・盗用について、参考資料や実際の事例なども紹介しながら注意喚起を行ったので、それがある程度効果を発揮したと思われる。昨年度あたりから、単純にネットから盗用するのではなく、生成AIを用いて作成した文章を使用するというケースが、発生するようになったが、今年度はその傾向が強まったと見られる。生成AIに（過度に）依存したような場合は、根拠不明の議論や関連性のうすい議論を展開したりする傾向が見られ、低得点となるケースが大部分なので、注意喚起したい。2024年度は、経営学入門も担当したが、筆記試験対策として、（授業内容の復習をせずに）過度に生成AIに依存したとみられるケースが数件あり、そのほとんどで単位がとれないという結果となった。 ・キャンパス統合の時期あたりから、教室にはいるものの、PCの画面等のみに注意を払い、授業をほとんど（あるいは全く）聞いてないと思われる受講生がみられるようになった。昨年度は、そのような学生は少数にかぎられたが、今年度は増加したように見られる。オンライン授業の数が結構多いシステムになっているので、真剣さに欠ける学生は、対面授業中に（他の）オンライン授業の課題に取り組むといったことをやりがちなっていると見られる。そのような学生の大部分は、単位を落とすので、注意喚起が必要と見られる。 ・学生の相談についての対応では、学生生活や日ごろの受講（の仕方）についての相談はあまりなかった。試験対策に関する相談は、ある程度あり、対応した。
来年度の進捗目標	・引き続き複数の重要な概念を結びつけながら注意深く考えたり、実際の状況や事例に理論を適用して考えることがきるようになるよう指導する。社会や組織における情報の偏り・バイアス等についても、理論を参考にしながら現実の状況を検討することを促すようにする。 ・剽窃・盗用についての注意喚起を継続し，これらの発生を低く抑える。生成AI使用の問題点についても注意喚起する。 ・対面授業において、授業中に（他の）オンライン授業の課題等に取り組むなどのながら受講の弊害について注意喚起し、これを減少させる。 ・相談を必要とする学生があれば、積極的に対応するとともに、学生への対応能力を高めていきたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	・マズローの理論やそれと関係したマネジメント理論及び心理学理論についてリサーチを進める（リサーチを進める環境を整える）。 ・現代社会の心理的動向について調べ、理解を深める。国政政治の大きな流れやそれと連動する（国内の）時事問題等が、現代社会の心理的動向やマネジメントに大きな影響を与えていると見られるため、これらに対応するための視点や理論の役割について考えて行きたい（情報の流れと偏りに注意を向けつつ）。 ・リサーチにおいて必要となる英語能力を高い水準に維持する。 ・安定した生活・研究環境の確保や自身の体調管理などに関して、状況を改善する。

今年度の進捗状況	・多少対策を始めたが、今年度も体調管理がやや困難となり、授業以外の事柄が、なかなか進展しなかった。自身の体調管理も含めて、研究・生活環境を十分に整えて、何とかリサーチ等のための安定的状態を回復したい。 ・現代社会の心理的動向について、情報操作や管理の影響も含めて、ある程度調べることができた。国際情勢（国際政治の流れ）や時事問題とそれらの背景にある心理的傾向などについても、ある程度情報を収集することができた。 ・英語のリスニングについては、テレビ番組やオンラインサイトなどを利用してブラッシュアップの継続をある程度できた。
来年度の進捗目標	・自身の体調管理や安定した生活・研究環境の確保などについて、状況を改善し、自身の生活・研究環境の回復を行い、リサーチを前進させる環境を整えたい。 ・現代社会の心理的動向とその影響を理解するための視点や理論的フレームワークについて調べることを続けたい。また、国際的政治の大きな転換とその影響、さらに国内の時事問題等にも目を向け、時代の流れとマネジメントとの関係について考えて行きたい。また、現代社会における情報の流れと偏りについても検討し続ける。 ・英語のリスニングの機会をふやすとともに，文献読破量もある程度確保したい。 ・住居の環境や研究室の資料整理状況の改善に取り組みたい。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

1997年9月～	日本経営学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	経営学部　経営学科	職名	講師	氏名	宋　元旭	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		現在の大学教育活動における課題は、ゼミなど演習系授業の受講生が少ない点にあります。また、学生が大学の授業に何を期待しているのかを把握し、それらのニーズを的確に授業内容へ反映させることで、より魅力的で実践的な学びの場を提供したいと考えています。それに加え、近年広がりを見せているAIを教育現場で活用できる方法も工夫したいと思っております。
今年度の進捗状況		今年度は基礎演習およびゼミの履修者数が少なく、4年次ゼミに至っては受講生が不在であった。演習に対する学生の興味を引き起こすため、1年生向けの授業である「経営学入門」、2年生向けの専門科目である「流通論」および「サプライチェーンマネジメント論」を通じて、ゼミの魅力や学びの面白さを効果的に伝えるようにした。また、授業ではResponを積極的に活用し、学生からの意見や質問を積極的に受け付けるようにした。
来年度の進捗目標		来年度の教育活動における進捗目標としては、増加したゼミ生に対して、自身の関心を持つ企業や産業を主体的に調査・分析させることで、経営学の視点から現実のビジネスを読み解く力を養わせたいと考えています。こうした活動を通じて、学術的な知的好奇心だけでなく、就職活動に直結する実践的な気づきや視野の広がりを得てもらうことも目指しています。さらに、教育手法の高度化を図る一環として、AIを活用した学習支援の導入も検討しており、学生の思考力や表現力を引き出す新たな教育デザインの可能性を探っていく予定です。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
垂直的関係におけるCo-opetition 研究の展望――既存Co-opetition 研究の限界と課題――	単著	2024年11月	東北学院大学経営学論集(23)	宋　元旭	pp.21-34
G. 学会における研究発表					
First-Mover Advantages and Late-Mover Advantages in The EV Battery Industry: A Comparative Study of BYD and CATL	共同	2024年7月	EurOMA2024(Esade Barcelona, Spain)	◎Zhongqi Wang, ◎Youngkyo Suh, Wonwook Song	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標		現在の研究目標は3つあります。1つは研究分野である企業間関係の戦略的活用にかかわる経営学理論の発展です。2つ目はバッテリー産業や韓国のモノづくり研修といった現在進行中のプロジェクトを成果としてまとめることです。最後は新たな調査対象とプロジェクトの開拓です。		

今年度の進捗状況	今年度は以下のプロジェクトを実施しました。 ①中国のバッテリー産業調査 昨年度行った共同研究者との調査に基づき、スペインで実施した学会EUROMAで発表を行いました。内容は中国の代表的バッテリー企業であるBYDとCATLの比較分析を行い、それぞれを先行者利益と後発者利益としてとらえることでありました。報告の後、多くの参加者から質問やコメントをもらったため、それを追加調査や分析に活用していきます。 ②韓国モノづくり研修研究 韓国のものづくり研修を担当している韓日財団とコンタクトを取り、研修に関する調査および分析の許諾を得ました。研修の効果が大きかった代表的な企業2社の代表とインタビュー調査も実施しました。 ③ホテル業界のアンケート調査 経営学部とJALの共同プロジェクトで連携方法を探索するため、観光産業の調査としてホテル業界のアンケート調査を実施しました。そのため、観光にかかわる先行研究と企業間関係のレビューを行い、質問項目を作成しました。 ④Co-opetitionのレビュー 企業間関係の戦略的活用にかかわる経営学の理論として重要であるCo-opetitionの垂直的関係への応用についてレビュー論文を作成しました。既存のCo-opetitionの議論は水平的関係をメインに展開されましたが、垂直的関係への拡張が試みられています。その内容を踏まえながら、課題と今後の展望をまとめ、学内の紀要に掲載しました。
来年度の進捗目標	来年度は以下の実施計画を持っています。 ①韓国モノづくり研修研究 韓日財団で実施した既存のものづくり研修から企業を選定し、追加的インタビュー調査を行います。その上、研修の改善などに取り組む予定です。 ②ホテル業界の分析 すでにホテル業界のアンケート調査を実施したので、それを分析し、学会発表および学会誌投稿を目指します。その結果からJALとの共同プロジェクトを深め、新たなテーマも見つけるようにします。 ③スマートフォン開発と企業間関係研究 今年度は他のプロジェクトのため進捗がありませんでした。来年度にはデーターベース化を完成し、定量分析を行った上で、学会発表ができるようにしたいと思っています。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2013年7月～	国際ビジネス研究学会 会員
2011年3月～	組織学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

AO面接委員（任期なし）、経営学部親和会幹事（着任年順）、ハラスメント相談員（任期2年）、「授業改善のための学生アンケート」実施委員（任期2年）、TGGV150担当者

教員業務・活動報告

法　学　部

法　律　学　科

2024年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	阿部　未央	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
自主的な学習を促すための工夫	2022年4月1日～	テストのフィードバックとして、択一・論述問題のポイント解説を行うとともに、成績優秀者の論述を参考答案として公表している。
学生の参加意欲を高める工夫	2022年4月1日～	特に演習では学生の希望を授業内容に反映させているほか、学生同士・学生教員間のコミュニケーションを図る機会を多く設けている。他大学との合同ゼミを通じて、論理的思考力、プレゼンテーション能力、質疑応答への対応力、チームワーク力などを鍛えている。
授業内容の理解を促すための工夫	2022年4月1日～	毎回の授業の冒頭で、前回の復習を行い知識の定着を図るとともに、大事な点をレジメ・パワーポイントで強調して説明することで、学生の理解を高める工夫を行っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
社会保障法判例百選（第6版）	2025年2月	授業の補助教材である百選を分担執筆した。
レジュメの作成・テスト問題の作成・解説	2009年4月1日～	授業の内容を理解するため、毎回レジュメ等を作成し、配信している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
外部講師　山形県城南高校	2024年8月	
出張講義　村田高校	2024年7月	

現在の課題・目標	学生の論理的思考力、コミュニケーション能力およびプレゼンテーション能力を高める工夫をする。
今年度の進捗状況	演習ではグループディスカッションやグループディベートを取り入れることで、学生の主体性・積極性を促した。5大学の合同ゼミでは、人数が多いながらも学生たちがチームワークよく、中身の濃い報告・質疑応答を行うことができ、教員としてそれらをサポートすることができた。
来年度の進捗目標	来年度も上記目標達成に向け継続して実施する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
『社会保障法判例百選（第6版）』	分担執筆	2025年2月	有斐閣	阿部未央	pp.118-119
『労働契約法論』	分担執筆	2024年10月	成文堂	阿部未央	pp.183-207
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
The Workers’ Compensation System for Mental Illness in Japan	単著	2024年6月	The Japan Association of Occupational Health Law, Volume 2 Issue 2	MIO ABE	pp.202-214
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	非正規雇用、ワークライフバランス、メンタルヘルスについての研究を継続して行う。
今年度の進捗状況	非正規雇用の「同一労働同一賃金」「無期転換制度」などに関して、資料収集、論点の整理、裁判例の検討を行い、東北社会法研究会にて報告し、論文を執筆した。 精神障害の労災認定に関して海外雑誌の依頼をうけ、執筆・公刊することができた。
来年度の進捗目標	非正規雇用、メンタルヘルスに関する労災認定基準について、比較法を含めて今後も継続して研究を行っていく。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年10月～	宮城県地方労働審議会 公益委員
2023年4月～	宮城県高齢・障害・求職者雇用支援機構運営協議会 委員（会長）
2019年～	外部講師 個別労働紛争解決研修会 講師
2016年4月～	山形県行政不服審査会 委員（副委員長）
2015年3月～	山形県労働委員会 公益委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

・（全学）法律学科長
・（全学）大学案内編集委員
・（全学）教職課程センター所員
・（全学）施設拡充委員
・（全学）研究室委員
・（全学）教育実習訪問指導委員
・（全学）全学組織運営委員会委員
・（全学）全学教育機構委員
・（全学）入試管理委員会委員
・（全学）オープンキャンパス実施委員会委員
・（全学）ハラスメント対策委員
・（全学）研究不正防止推進委員会委員
・（全学）全学協議会委員
・（全学）科研費申請アドバイザー
・（法学部）法学部点検・評価委員会委員
・（法学部）法学部改革FD委員会委員
・（法学部）基幹構想委員会委員
・（法学部）キャリアアップ支援委員
・（法学部）広報委員

2024年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	池田　丈佑	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	石垣　茂光	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
小テストの実施	2019年4月1日～	前期は200名前後の受講者に対して、5～6回小テストを行い、採点をした上で解説を付して返却した。 後期も、5回の小テストを実施し、解説をmanabaに掲載するとともに、点数を付して返却した。
独自の授業評価アンケートの実施	2018年4月1日～	授業効果を図るため、manabaを用いて、理解したこと、いまだ不十分な個所をあげさせ、次回の授業において解説をするなど、授業に反映させている。また、授業感想等を自由記述させることによって、学生がどのようなことを考えているかを知り、それに答えたり、新たな工夫をするなどしている。
レジュメの配布	2018年4月1日～	毎回分のレジュメを作成し、事前にmanabaに掲載をしている。また、そのレジュメに記載されている練習問題について事前に考えさせ、授業で解説をし、manabaで今一度解答を書かせ、理解度を確認をしている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2024年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	井上　義比古	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
中規模授業におけるアクティブ・ラーニング手法の適用	2019年4月1日～	受講者が150人～200人程度の「政策・行政入門」の授業において、予習・復習用のテキストを用意し、4人ずつのグループに分け、グループ内の話し合いを踏まえた授業内容の「ふりかえり」を全員に提出させるとともに、グループでのディスカッションを通して完成させる「課題」を与えて、グループ単位で提出させる。グループ作業の時間帯には、教員が机間巡回を行い、作業についての指導を行う。
少人数の講義におけるアクティブ・ラーニング的手法の導入	2019年4月1日～	サテライトキャンパスでの単位互換授業など，受講者が少ない講義科目の場合，分析すべきテーマについて受講者に考えさせ，その発言概要を黒板・ホワイトボードに整理しながら議論を進め，最終的には受講者の発言を生かして体系的な結論を導く，という方法をとっている。
講義形態の授業における板書の工夫等	2019年4月1日～	体系的な板書を行い，1つの文字が10㎝角以上になるよう努めるとともに，授業の冒頭で前回の復習を行う。
講義形態の授業における双方向性の確保	2019年4月1日～	講義形態の授業実施に際して，A4判の「質問用紙」を配布し，実名，匿名，筆名を選択させ，質問に答える，という方法を取っている。
基礎演習を通じての発表・意思表明能力向上支援Ⅱ	2019年4月1日～	演習において，「自分の思い」を他者に伝えるための文章を，場面別に書かせ，時間中に全員の作成状況を確認しアドバイスを行うほか，添削して返却している。また，会議能力向上のため，自分たちで決めたテーマにそくして実際に会議運営を経験させている。
基礎演習を通じての発表・意思表明能力向上支援Ⅰ	2019年4月1日～	演習開始冒頭に1～2人ずつ，5分間程度のスピーチをさせている。
演習における学生への心理的支援Ⅱ	2019年4月1日～	演習での学生の発言が仮に間違っていても，必ず良い面を強調する。
演習における学生への心理的支援Ⅰ	2019年4月1日～	演習で報告を担当した学生に対して，演習時間終了時に参加者全員で拍手を送っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
学都仙台コンソーシアム サテライトキャンパス公開講座講師　（単位互換提供科目）「社会情勢論」	2008年4月1日～	

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					

I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2009年6月～		仙台市明るい選挙推進協議会会長(仙台市明るい選挙推進協議会会長）司会，助言・指導	
2007年5月～		宮城県議会情報公開審査会委員（現在は会長） 司会，助言・指導	
1999年4月～		宮城県議会情報公開審査委員会委員 委員長	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	遠藤　隆幸	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
卒論作成とその準備	2024年10月1日～2025年1月10日	卒論作成に向けて、勉強会および合宿を実施した。またその成果を公開の卒論発表会で公表した。
合同ゼミの企画・実施	2024年5月1日～2024年8月31日	大阪経済大学四條ゼミとの合同ゼミを企画した。
LMSを介した双方向授業の実践(演習科目)	2024年4月1日～	LMSを用いて各種課題の採点基準・講評を示した。またオンライン上の判例・文献情報をLMSにリンクし収集を指示した。法情報関係の内容では、適宜Eメールを用い、課題の提出・講評・採点をおこなうことで、講義時間帯以外でも双方向的やりとりができるよう努めた。
manabaを介した双方向授業の実践	2020年～	manabaを用いて各種課題の採点基準・講評を示した。またオンライン上の判例・文献情報をmanabaにリンクし収集を指示した。また、適宜チャットツールを用い、課題の提出・講評・採点をおこなうことで、講義時間帯以外でも双方向的やりとりができるよう努めた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	家族法改正の批判的検討
今年度の進捗状況	実務的課題に焦点を当てた課題探究活動が実施できた
来年度の進捗目標	実務家のゲストスピーカを活用し、本年度の取り組みをより充実させたい。合同ゼミまたは合同コンペの参加も積極的に検討する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	未成年後見法の再定位 社会的養護の法学的分析
今年度の進捗状況	台湾未成年後見法に関する研究成果を今年度中に公表する予定であったが、果たせなかった。
来年度の進捗目標	ドイツ後見法とPflegefamilieに関する研究成果を公表する。また今年度果たせなかった台湾未成年後見法の紹介を公表する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

科学研究費助成事業 科学研究費基盤研究（c）	2019年度～2024年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年1月～2025年1月	新しい土地所有法制一各論Ⅱ（相続法改正） 講師
2024年9月～2024年9月	未成年後見・成年後見の法的課題と今後の展望 講師
2023年7月～2024年6月	日本学術振興会特別研究員等審査会 専門委員
2022年4月～	社会福祉法人宮城県社会福祉協議会運営適正化委員会 運営監視合議体委員長代理
2020年12月～	中国山東省青島市仲裁委員会 外国人仲裁員
2019年4月～	仙台弁護士会懲戒委員 委員
2011年～	比較法学会 会員
2008年～	日本私法学会 会員
2005年～	日本社会〈家族と法〉学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	菊地　雄介	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学習支援システムmanabaのレポート機能を使った各回授業内容の概略レポート提出による学修事項定着の促進	2021年4月1日～	
学習事項の定着確認と全体的な授業計画との関連性の明示	2015年4月1日～	毎回の授業の冒頭に前回の授業内容を要約して説明し、また学期全体の授業計画進行の流れと関連づけて説明することで、各回の授業の位置づけを逐一確認させる。
異なる授業項目の下で共通する事項を意識化させることによる相互参照的学習の活用	2015年4月1日～	以前の関連する授業回の説明をあえて引き合いに出し、相互参照的な効果を意識させることで、教育項目の多角的な学習を可能にするよう工夫している。
各学期授業計画の明示と各回授業進行予定の具体的な説明	2013年4月1日～	各学期の冒頭に各回授業計画の進行予定を詳しく順を追って説明し、学生の自主学習が円滑に進捗するよう工夫している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
中央大学法学部通信教育課程の宮城支部学習会における講師を務めた。	2024年10月19日	2024年2月16日の日経新聞記事「オリックス、中堅海運を買収」を読んでと題し、海運業界のM&Aによる事業承継の試みと会社法の働きについて3時間余の学習会を実施した。
仙台法務局職員専修科研修（会社法）講師	2024年9月27日～2024年10月9日	北海道・東北地方各地の現職法務局員を対象とした専修科研修において会社法（全20時間）の研修講師を務めた。
仙台法務局職員中等科研修（会社法）講師	2024年7月16日～2024年7月30日	仙台法務局研修センターにおいて法務局職員中等科研修（会社法）全16回の研修講師を務めた。

現在の課題・目標	① 教師として何を教えるかより、受講生が何を学ぶことができたかを毎回の授業テーマとして意識する。 ② 授業の進行について行けない受講生が出ないよう各授業回の連携関係を毎回の冒頭で確認するとともに、manabaのレポート機能を活用して受講生に各回の重要事項まとめを記録させることで、各回の事後学修に繋げさせるようにする。 ③ 学生から提出された授業記録としてのレポートに対しては、必要に応じて講評によるフィードバックを施し、学力形成の蓄積を図るようにする。 ④ 講義形式の授業でも、可能な限り多くの学生に語りかけ、反応を確かめることで、理解度や理解困難な箇所を推し量るよう努める。 ⑤ 法律科目の授業で六法を持ち合わせない他学部生のために、スマホやタブレットによる「e-Gov」（電子政府の法令検索）システムの活用を促し、教科書の記述と法令上の根拠とを照らし合わせる習慣の涵養を図る。
今年度の進捗状況	①②　毎回の授業の冒頭と終了時に、各回の授業内容と前回まで及び次回からの授業内容との接続関係について簡略に説明することで、各授業回の内容理解について連続性を持たせるよう工夫する。 ③　提出レポートの講評に際しては、各自のレポート内容に応じて具体的な指摘事項をかなり詳細に提示し続けている。 ④　受講している学生の表情や動きに目を配り、理解度や疑問点等の把握に努める。 ⑤　授業終了時の簡易レポートに参照条文の情報を盛り込ませ、事後学修の成果を盛り込んだ自習ノートにその内容を貼り付けさせることで、学修事項を視覚的にも意識させるようにしている。
来年度の進捗目標	①②　教育支援システムLMSを活用して、各授業回の終了時に小レポート「本日の重要ポイントまとめ」を作成させ、毎回の授業後に行われる事後学修への接続を意識させることで、各自が毎回の授業で得た学修事項について自己確認の機会を与える。 ③④　従来からの努力を継続する。 ⑤　授業に臨む際にPCやタブレット・スマホ等の情報機器を必須のものと明示して、教科書や参考文献の活字情報と、授業で得た口頭情報、情報検索で得られた電子情報を総合的に活用する習慣を身につけさせる。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					

Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）	
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文	
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）	
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）	
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）	
G. 学会における研究発表	
H. 翻訳（学術書や原典等）	
I. 特許	
現在の課題・目標	① 自ら編集と執筆にあたる会社法教科書のアップデート作業に向けた準備を進める。 ② 会社法分野の論文テーマに関する掘り下げを続ける。 ③ 自ら多数の対象条文について執筆を担当した会社法コンメンタールのゲラ出校を待って校正作業を済ませ、刊行にまでこぎ着ける。 ④ 研究者としてのスタート時からの研究テーマである取引決済システムの法について、手形小切手制度がその任を終えた現在において、体系的なシステム再構築の発想を深化させる。
今年度の進捗状況	① 法改正の状況と判例形成の現状について一定の成果を得た。 ③ 出版社の編集作業が大幅に遅れていたが、2024年2月に出版社から再校ゲラが届けられ、その校正作業を完了し、2025年4月21日の刊行を予定している。 ②④ 検討継続中である。
来年度の進捗目標	① 長期休暇を終えた担当編集者との間で改訂作業の大枠と新たな執筆陣および執筆担当の割り振りについて協議を取りまとめる ③2025年4月の第3版発行を実現させる。 ②④検討作業を継続する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2022年10月～2024年9月	社会保険診療報酬支払基金宮城審査運営協議会 委員
2022年10月～2024年9月	社会保険診療報酬支払基金宮城審査運営協議会委員 運営参加・支援
2018年4月～	東北イノベーション人材育成コンソーシアム運営会議 委員
2018年4月～	東北大学出版会評議員会 評議員
2014年10月～2024年10月	日本海法学会理事 会員
2014年10月～2024年10月	日本海法学会会員 会員
2014年10月～2024年9月	東北地方社会保険医療協議会宮城部会 委員・部会長
2014年10月～2024年9月	東北地方社会保険医療協議会 委員・会長
1999年4月～	東北大学商法研究会 会員
1987年7月～	現代企業法研究会（名古屋大学内） 会員
1987年7月～	現代企業法研究会会員（名古屋大学内）(現代企業法研究会会員（名古屋大学内）)
1984年10月～	金融法学会会員 会員
1983年4月～	日本比較法研究所（中央大学内） 嘱託研究所員
1983年4月～	日本比較法研究所嘱託研究所員（中央大学内）(日本比較法研究所嘱託研究所員（中央大学内）)
1981年10月～	日本私法学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			

来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

学長特別補佐（コンプライアンス担当）、内部質保証委員会委員、大学財政専門委員会小委員会委員、学校法人東北学院公益通報者保護委員会委員、基幹教員制度構築委員会委員、体育会洋弓部顧問として、学内各組織の管理運営に当たった。

2024年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	木下　淑惠	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
修得した知識の定着	2024年4月1日	地方自治の演習では、各受講生に1つの自治体をあらかじめ決めてもらい、文献講読の後、その内容に関連して各自治体の実態を調査する回を設けている。それにより、文献で得た知識を現実に結び付けて理解すると同時に、地方自治体の実態をより深く考えるように促している。
授業準備、予習の促進	2022年10月1日～	空欄を設けた授業用レジュメを授業前日までにmanabaを通して配付し、授業の準備と予習を促している。
学習した事項の整理と記憶への定着、授業理解の促進	2020年9月～	講義科目では、毎回、授業のはじめに、その回の全体の構成と達成目標を明示する。授業の最後には、その回の要点まとめを行い、さらに、その回の復習としてふりかえりの小テストを行う。また、次の回の冒頭で、前の回の小テストについて詳しく解説する。また、配付レジュメには空欄をところどころ設け、意識的な学習と復習を促している。
学習した事項についての知識の定着	2020年4月～	講義科目では、半期に3～5回、それまでの複数回の講義内容について小テストを行っている。解答時には各自のノートを振り返ることにより、自らの知識を再確認する機会としている。また、小テスト終了後に重要ポイントの解説を行うほか、必要に応じて多くの受講生が間違えた問題について、次の回の冒頭であらためて解説している。
授業理解の促進	2020年4月～	込み入っていて理解しにくいと考えられる事柄については、その時期のニュースと関連づけて説明するほか、写真や図表を用いたり、また、実例を紹介するなど、できるだけ具体性をもたせた解説を行っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	①授業全体の時間配分に留意し、まとめの時間を一定程度確保できるようにする。 ②講義科目では、受講生の参加が授業の流れを止めてしまうことのないよう、この2つを両立するようにする。 ③小テストの後に、重点項目に加え、受講生の理解の実態を踏まえた解説を行う。
今年度の進捗状況	①まとめの時間を一定程度確保することができたが、そのために講義の終盤がやや駆け足になることがあった。 ②授業の流れを考えながら、受講生の参加を求めることができたが、その分、参加の時間が少なくなった。 ③小テストの後には、重点項目の説明に加え、受講生の理解の実態を意識した解説を行った。
来年度の進捗目標	①授業全体の時間配分に十分留意し、講義部分とまとめの時間のバランスがとれるようにする。 ②引き続き、授業の流れと受講生の参加を両立できるようにする。 ③引き続き、小テストの後に、重点項目に加え、受講生の理解の実態を踏まえた解説を行う。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
「福祉国家」「北欧の高福祉高負担」（2項目）『公共政策学事典』	分担執筆	2024年10月	丸善出版	木下淑惠	pp.222-230
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					

H. 翻訳（学術書や原典等）	
I. 特許	
現在の課題・目標	①スウェーデンの福祉国家成立に関連する資料を収集・整理する。 ②スウェーデンの女性環境について、資料の読み込みを進める。 ③地域活性化について、新しい資料をもとに、今日の基本的な枠組みと課題をまとめる。
今年度の進捗状況	①関連する資料の収集・整理を進めた。 ②関連する資料の整理を進めた。 ③関連する新しい資料を収集・整理した。
来年度の進捗目標	①引き続き、スウェーデンの福祉国家成立に関連する資料を収集・整理する。 ②引き続き、スウェーデンの女性環境について、資料の読み込みを進める。 ③引き続き、地域活性化について、今日の基本的な枠組みと課題をまとめる。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動	
2018年～	北ヨーロッパ学会 理事
2017年～	宮城県国民健康保険運営協議会 委員
2016年～	宮城県後期高齢者医療広域連合　情報公開・個人情報保護審査会 委員
2015年～	宮城県議会　情報公開審査会 委員
2002年～	北ヨーロッパ学会 会員
1998年～	日本比較政治学会 会員
1997年～	日本政治学会 会員
1996年～	日本行政学会 会員
1996年～	日本公共政策学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	黒田　秀治	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
アクティブラーニングおよび双方向授業の実施	2021年4月～	manabaを用いることによって、工学部でのTGベーシック「市民社会を生きる」および法学部での「リーガル・リサーチ」では，テーマの設定，予習の励行，グループごとの討論と結論の取り纏めによって，学生の能動的学修を促すように努めた。
詳細なプリントの作成と論点整理	2020年4月27日～	国際法Ⅰ、同Ⅱの講義では、すでに学習した国内法の知識と関連づけながら，国際法と国内法の異同，国際法の規範的分類および国際先例などを提示したプリントを配付し，授業の進捗と理解の定着という二律背反的な講義課題の調整を図った。
学生の関心を惹起させるテーマの選択と学内施設の利用	2020年4月27日～	「演習一部」および「演習二部」では，可能な限り受講者の意思を尊重し，先例やテーマの選択は彼らに委ねる一方で，随時相談に乗り，レポートの添削を行うなど，受講生の自主性と適切な指導とのバランスをとることを心がけた。
学習内容の記憶への定着と授業理解の促進	2020年4月27日～	国際法Ⅰ、同Ⅱ、および国際経済法の講義では、冒頭で前回の復習と概略を説明し，年間を通じた講義のタイムスケジュールの中で，当日の授業の位置づけを理解させるように努めた。
英米文献を読むための基礎的作法・文献渉猟方法の学習	2020年4月27日～	「外国書購読」では，英米文献を購読する過程で，日本と異なる独特の引用スタイルや文献渉猟方法を教授し，英語・法律学の学習のみならず，英米文献の学習のためのリテラシーの教育に努めた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	1.すべての授業で,学士課程における必要性という観点から,達成目標を見直す。 2.授業時間外でも学生とのコミュニケーションを重視し,学生からの相談・質問に真摯に対応する。 3.新しく設置された「リーガル・リサーチ」で、初年度生が4年間の法学教育の基礎となるべき、専門的なノウハウの習得を獲得するために、徹底的な双方向授業を行う。
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	1.H.L.A.Hart の理論を使用して整序した主権免除および国際法律行為の研究 2.国際法から見た国家の主権的行為の規制の態様の研究 3.国際投資法と国際人権法との交錯に関する論文をまとめる。 4.仲裁判断例を通じて考察する、国際投資法と一般国際法の抵触と競合の整序
今年度の進捗状況	1.上記目標①については，資料を集めている。 2.上記目標②については，最近手を付けたばかりで,進捗がなかった。 3.上記目標③については，新資料が公刊されたため、それを含めて資料を集めた。 4.上記目標④については、資料を集めている。
来年度の進捗目標	1.上記目標①について，視点を変え、法源論の観点からの研究にとりかかる。 2.上記目標②について，資料の収集を完成する。 3.上記目標③について，近年の進展に留意し、さらに資料を収集し、論文をまとめる。 4.上記目標④については、資料を収集し、最近の動向を分析する論文を執筆する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	近藤　雄大	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ゼミ内模擬裁判の実施	2024年10月31日～2025年1月23日	ゼミ生の学力向上を目的として演習一部で模擬裁判を実施した。ゼミ生に民事の事案を提示し、原告班、被告班、裁判官班に分かれ、それぞれの役割に応じて準備をし、授業日を公判期日として事件ごとに議論を行った。最終日に裁判官班のメンバーが判決文の読み上げ、最終的な勝敗を決することになった。
ゼミ合宿（3年生）の実施	2024年9月11日～2024年9月12日	ゼミ生の基本的学力の向上を目的としてゼミ合宿を実施した。それに関連したテーマで，レポートを作成し，提出させた。
学習した内容の定着を図る	2024年4月16日～	毎回の授業の初めに，前回の重要点について復習をおこなっている。
レポートおよび最終試験の講評	2024年4月16日～	2回の中間レポートおよび最終試験の「採点基準」と「解答例」を作成し、それをもとに講評を行った。これらを前提としてレポートの結果に疑問をもった学生や評価に納得がいかない学生に対して詳細に解説した回答書を作成し交付した。
レポートおよび最終試験の講評	2023年4月14日～	2回の中間レポートおよび最終試験の「採点基準」と「解答例」を作成し、それをもとに講評を行った。これらを前提としてレポートの結果に疑問をもった学生や評価に納得がいかない学生に対して詳細に解説した回答書を作成し交付した。
学習した内容の定着を図る	2023年4月14日～	毎回の授業の初めに，前回の重要点について復習をおこなっている。
レポートの講評とフォローアップ動画の配信	2022年4月11日～	最終レポートの解説動画を作成し配信をした。その際の資料として、「採点基準」と「解答例」を作成した。これらを前提としてレポートの結果に疑問をもった学生や評価に納得がいかない学生に対して詳細に解説した回答書を作成し交付した。
学習した内容の定着を図る	2022年4月11日～	毎回の授業の初めに，前回の重要点について復習をおこなっている。
学習した内容の定着を図る	2021年4月11日～	毎回の授業の初めに，前回の重要点について復習をおこなっている。
レポートの講評とフォローアップ動画の配信	2021年4月11日～	2回の小レポートおよび最終レポートの解説動画を作成し配信をした。その際の資料として、「採点基準」と「解答例」を作成した。これらを前提としてレポートの結果に疑問をもった学生や評価に納得がいかない学生に対して詳細に解説した回答書を作成し交付した。
レポートの講評とフォローアップ動画の配信	2020年5月7日～	最終レポートの解説動画を作成し配信をした。その際の資料として、「採点基準」と「解答例」を作成した。これらを前提としてレポートの結果に疑問をもった学生や評価に納得がいかない学生に対して詳細に解説した回答書を作成し交付した。
学習した内容の定着を図る	2020年5月7日～	毎回の授業の初めに，前回の重要点について復習をおこなっている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
授業の補助教材としてのレジュメの作成	2024年4月16日～	授業の内容を理解しやすくするため，毎回補助教材としてレジュメを作成し，配付している。
授業の補助教材としてのレジュメの作成	2023年4月14日～	授業の内容を理解しやすくするため，毎回補助教材としてレジュメを作成し，配付している。
授業の補助教材としてのレジュメの作成	2021年4月11日～	授業の内容を理解しやすくするため，毎回補助教材としてレジュメを作成し，配付している。
授業の補助教材としてのレジュメの作成	2020年5月7日～	授業の内容を理解しやすくするため，毎回補助教材としてレジュメを作成し，配付している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
宮城県行政書士会研修会講師	2024年12月	宮城県行政書士会が実施した「所有者不明土地に関する解説講義」において「新しい土地所有法制ー各論Ⅰ（物権法改正）」というテーマで解説講義を行った。

公務員試験等対策勉強会の実施	2024年10月4日～2024年12月20日	3年生向けに公務員試験等を目指す学生を対象に勉強会を実施した。後期に実施し、債権法分野を中心とした。将来的な公務員試験や各種資格試験の合格を目標として問題演習および解説を行った。
TKCフォローアップ講座　民法Ⅱ（債権法）講師	2024年9月25日～2025年1月25日	法学部で実施しているTKCフォローアップ講座で民法の債権法分野の講師を務めた。毎月テーマを設定し、公務員試験の過去問の検討と解説を動画配信した。毎回10問の小テストを実施し、復習を行うことにより、知識の定着と合わせて解法テクニックの向上を図った。
ランチョンセミナーの企画および講師	2020年11月25日～	法学部主催のランチョンセミナーを今年も引き続き実施した。内容を企画して他の先生方の協力も仰ぎ開催した。

現在の課題・目標	・授業の理解を深めるために，イメージしやすい具体例をあげて説明するように心がける。 ・アクティブ・ラーニングの要素をできる限り取り入れる。 ・評価に不満や疑義のある学生に納得してもらうために，採点基準を明確化し，それに基づいて不満や疑義のある学生に対して十分な説明を行う。 ・演習Ⅰ・Ⅱは連続受講してもらうことにより，卒業までの2年間にわたり単位修得，就職など学生生活全般について相談や指導を行う。 ・将来の目標達成のために意欲ある学生の学習をサポートし、モチベーションの維持を図るため継続的に勉強会を実施する。
今年度の進捗状況	・関係図や補足資料を配布するなどして、学生が具体的なイメージを浮かべて考えられるような工夫をした。 ・2回の中間レポートおよび最終試験の採点基準とそれについての解説をmanaba上で公表した。その上で評価に疑問のある学生については，manabaを利用して採点基準をもとに詳細な解説を記した回答を交付し、その中でなぜその点数なのかを説明した。その結果，ほとんどの学生は納得していた。 ・本年度の卒業生は，全員が演習Ⅰと演習Ⅱを連続受講し，ほとんどの学生が進路を決定して卒業することができた。残念ながら卒業が決まらなかった学生については、卒業までできる限りサポートしていく。また，新4年生もほとんどが連続受講する予定であり，単位修得や就職活動の相談に応じている。 ・学生のキャリアアップおよび将来の目標達成に向けた基礎固めとなるように公務員試験対策の実践的な練習として勉強会を開催した。
来年度の進捗目標	・次年度以降も，本年度と同様の対応を続けていく予定であるが、採点基準についてはより明確化し，学生への説明が分かりやすくなるようにする。 ・公務員試験や各種資格試験への合格者が増加するように、勉強会の実施のみならず個別の進路相談や学習相談にも応じるようにする。 ・新3年生への履修指導を4月中に実施し，単位修得についての意識を高め，また就職についての具体的なイメージをもたせる。また，新4年生には引き続き単位修得と就職活動についてのフォローをする。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	・法学部60周年記念に向けて論文を執筆する。 ・一部無効に関する論文を執筆する。
今年度の進捗状況	・先に発表した論文に続く内容の論稿を執筆するために、必要な裁判例や評釈類を収集した。 ・今までに執筆した論文以降について発表された論文などのフォローを始め，資料の収集を始めたので進捗があった。
来年度の進捗目標	・今回の論稿の続きとなる内容についての論文作成を目指し、資料収集や検討をおこなう。 ・法学部60周年記念号に論文を公表できるようにする。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2008年11月～		日本消費者法学会 会員	
2004年4月～		比較法学会 会員	
2004年4月～		日本私法学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	佐々木　くみ	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2021年4月1日～	授業の予習と復習をリアルタイムに行わせるため，manabaのドリル機能を利用して，ほぼ毎週，予習問題を合格点に達成するため繰り返し解答させ、また、復習問題に全10回解答させた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
日評ベーシックシリーズ『憲法Ⅰ［第2版］』『憲法Ⅱ［第2版］』（日本評論社）	2021年～	問題を噛み砕き，平易な語りかけをすることで，憲法の基礎知識について初学者でも理解できることを目指している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
高校への出前講義の講師を務めた。	2024年8月	向山高校の生徒に対して，憲法判例を素材に，大学での憲法の勉強と高校までの憲法の勉強の違いについて実感してもらう授業を行った。

現在の課題・目標	①専門科目「憲法」の授業について，学生により多くの時間を予習・復習にあてさせるようにする。 ②授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切にし，講義に関する学生からの様々な相談に応じる。
今年度の進捗状況	①については，manabaの復習問題のドリルと小テストの解説の時間を増やした。 ②については，manabaの「個別指導」とメールで学生とコミュニケーションをとり，ある程度の進捗がみられた。
来年度の進捗目標	①専門科目「憲法」の授業について，学生により多くの時間を予習・復習にあてさせるようにする。 ②授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切にし，講義に関する学生からの様々な相談に応じる。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
「アメリカ憲法思想上の『市民』概念」についての一考察：「訴訟当事者としての市民」を手がかりとして	単著	2024年11月	法律時報，96(12)	佐々木くみ	pp.106
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
技能実習生嬰児死体遺棄無罪判決と個人の窮境	単著	2024年5月	法学セミナー(823)	佐々木くみ	pp.27
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	司法権と人権保障のあり方について研究する。
今年度の進捗状況	関連する研究会に出席し、研究を深め、研究論文を執筆した。
来年度の進捗目標	親の権利の憲法学における意義について研究する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2024年10月～		支払基金 審査運営協議会 委員	
2024年10月～		東北地方社会保険医療協議会 委員	
2024年7月～		(公財)せんだい男女共同参画財団 仙台市男女共同参画推進センター 仙台市男女共同参画推進条例に基づく相談及び苦情申出への対応にあたる専門相談員	
2023年10月～		全国憲法研究会 運営委員	
2018年4月～		宮城県労働委員会委員 委員	
2016年5月～		全国憲法研究会 会員	
2015年10月～		多賀城市情報公開・個人情報保護審査会委員 委員	
2000年10月～		憲法理論研究会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	・東北学院大学の洋弓部の部長として東北地区大学のトップチームとなる。		
今年度の進捗状況	・いくつかの大会で、優勝できた。		
来年度の進捗目標	・東北地区大会でのトップを目指す。 ・全国大会でより良い成績を残せることを目指す。		
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			
①公務員試験・連携講座小委員 ②基幹構想委員 ③改革FD検討委員 ④点検評価委員			

2024年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	佐藤　英世	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
レジュメの作成と授業評価	2020年4月1日～	講義科目である「行政法総論Ⅰ」、「行政法総論Ⅱ」、「法曹養成実習Ⅲ」、「日本法と外国法」について、学生が理解を深めることができるようにレジュメを作成し、配布している。行政法総論Ⅰ・Ⅱでは、レジュメをWeb上でも公開している。また、法学部の演習科目、大学院の担当科目を含め、すべての担当授業で授業評価を行っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
教材の作成と配布	2018年4月～	講義科目については、教材を作成し、学生に配布している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年7月～	仙台市個人情報保護審議会 委員
2021年3月～	多賀城市入札監視委員会 委員長
2020年8月～	宮城県個人情報保護審査会 委員
2020年2月～	大崎市都市計画税検討会議 会長
2017年4月～	亘理町入札監視委員会 委員長
2013年4月～	柴田町固定資産評価審査委員会 委員長

2007年5月～	白石市情報公開・個人情報保護審査会 委員長
2004年4月～	東北弁護士連合会弁護士任官候補者推薦委員会 委員
2003年10月～	大崎市情報公開審査会 委員
1985年4月～	日本公法学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	佐藤　優希	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ゼミ論文集の製作	2020年4月1日～	演習一部では判例研究論文，演習二部ではゼミ論文の執筆および提出を単位修得の要件としている。とくに演習二部では，卒業論文としてボリュームある論文を執筆させ，報告会・討論会をしたうえで、ゼミ論文集にすることで，法学部で学んだことの集大成ができるよう丁寧な指導を心掛けている。本年度も演習二部ゼミ生全員が論文執筆し，ゼミ論文集「東北学院法学研究第10号」を発行した。
民事模擬裁判の実践	2020年4月1日～	裁判官，原告，被告に分けて，該当当事者のみに証拠等の資料を配布し，口頭弁論から判決の言渡しまでを行う。法科大学院用の民事裁判DVDを視聴し，裁判傍聴をした後で，民事裁判で行われる答弁書の作成，主張，証拠の提出，判決文の作成等を自分たちが行うことにより実践能力が高まることを目的としている。
演習におけるフィールドワークの導入	2020年4月1日～	裁判傍聴や裁判所見学などを行い，裁判実務に対する理解を高める助力を行っている。
演習におけるディベートの実施	2020年4月1日～	演習においては，時事問題や法律問題について，報告者のレジュメによる報告に基づき議論を行うことで，報告の仕方や効果的なプレゼン方法を学び，ディベート力を向上させるための実践練習を行っている。
manabaのフル活用	2020年4月1日～	manabaを通じて，レジュメおよび資料を配布し，小テスト機能やレポート機能を利用して，小テストおよび論述形式の課題小テストを実施した。
講義ノートの作成	2020年4月1日～	講義および演習では，毎回講義ノートを作成し，授業進行速度の適否や学生の理解度などを記録することにより，授業の改善を図っている。
小テスト問題による授業理解の定着	2020年4月1日～	毎回の講義の最後に司法試験問題や司法書士問題から授業のまとめとなる問題を作成し、小テスト問題を実施した。講義時間のまとめとして小テストを行い、その回の中で小テスト問題の解答および解説を加えることにより，学生自身が講義内容をどれだけ理解できたかを確認することができる。できなかった部分についは、復習させることで知識の定着を図っている。
事例を多用した講義による授業理解の促進	2020年4月1日～	丁寧に授業を行えるよう心がけており、具体的事例を多用し説明することで，抽象的な法律学を身近に感じさせるなど，理解を深める工夫を行っている。
講義動画と詳細なレジュメの配布による授業理解の促進	2020年4月1日～	講義内容の重要ポイント，判例の解説，小テスト問題をまとめた詳細なレジュメも作成し、manabaにアップして，授業理解の促進を図る工夫を行った。
2．作成した教科書、教材、参考書		
ゼミ論文集『東北学院法学研究』第11号発行	2025年3月11日	
民事執行法・保全法のテキスト資料	2023年4月1日～	民事執行法法・保全法の講義時に使用するテキストを作成中である。執筆したものをPDFにして、テキスト資料として、レジュメと共に授業の数日前にmanabaでアップしている。授業では、このテキスト資料とレジュメを使って、講義をしている。
民事執行法・保全法の講義におけるレジュメ	2020年4月1日～	毎回の講義の前に，講義内容の重要ポイント，板書の図解をPDF化したもの，判例，小テスト問題をA4で10枚ほどにまとめたレジュメをmanabaにアップする。予習をしてもらい、授業理解の促進を図る工夫を行っている。
民事訴訟法Ⅰ・Ⅱの講義におけるレジュメ	2020年4月1日～	毎回の講義の前に，講義内容の重要ポイント，板書の図解をPDF化したもの，判例，小テスト問題などをB A4で10枚ほどにまとめたレジュメをmanabaにアップしている。予習をしてもらい、授業理解の促進を図る工夫を行っている。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

体育会ライフル射撃部部長としての指導	2020年4月1日～	体育会ライフル射撃部の部長として，サポートおよび教育面での指導を行っている。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2013年4月～	民事手続法研究会会員 委員
2004年4月～	九州法学会会員 会員
1999年4月～	日本民事訴訟法学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	陶久　利彦	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
障害胎児を引き受ける親の責任『法の理念と現実』	共著	2024年9月	成文堂	陶久利彦	pp.359-370
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

1977年11月～	日本法哲学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	辻田　芳幸	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日(西暦)	概　　要
1．教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)		
シラバスの充実	2021年4月1日～	授業で取り扱う項目を箇条書きで記載して，受講者が予習復習をしやすいように工夫している。
小テストの実施	2021年4月1日～	講義内容に関する知識の定着具合を確認するために，毎回の講義終了時に15分程度の小テストを実施している。
小テストの講評と追加的解説	2021年4月1日～	小テストにおいてとくに正解者が少なかった設問に関して追加的な解説を行い，講義内容を振り返るとともにどのようにして正解に至るかの考え方を示している。
参考資料の配布	2021年4月1日～	新聞記事や裁判例などを積極的に利用し，受講生が講義内容と具体的紛争とを関連づけて理解できるよう配慮している。
講義レジメの作成および使用	2021年4月1日～	制度の趣旨，論理の構造や展開に重点を置いた講義レジメを作成し，使用している。
講義レジメおよび参考資料の事前配布	2021年4月1日～	全ての講義科目において，講義内容をまとめた講義レジメをあらかじめ電子データで配信している。
manabaの積極的利用	2021年4月1日～	小テストを行う際にASAHI Netのmanabaを積極的に利用し，学生が復習として問題を再検討できるようにしている。また，講義レジメを蔵置して学生が予習や復習を効率的に行えるよう工夫している。
小テストの実施	2019年4月1日～	講義内容に関する知識の定着具合を確認するために，毎回の講義終了時に15分程度の小テストを実施している。
小テストの講評と追加的解説	2019年4月1日～	小テストにおいてとくに正解者が少なかった設問に関して追加的な解説を行い，講義内容を振り返るとともにどのようにして正解に至るかの考え方を示している。
参考資料の配布	2019年4月1日～	新聞記事や裁判例などを積極的に利用し，受講生が講義内容と具体的紛争とを関連づけて理解できるよう配慮している。
講義レジメの作成および使用	2019年4月1日～	制度の趣旨，論理の構造や展開に重点を置いた講義レジメを作成し，使用している。
講義レジメおよび参考資料の事前配布	2019年4月1日～	全ての講義科目において，講義内容をまとめた講義レジメをあらかじめ電子データで配信している。
シラバスの充実	2019年4月1日～	授業で取り扱う項目を箇条書きで記載して，受講者が予習復習をしやすいように工夫している。
manabaの積極的利用	2019年4月1日～	小テストを行う際にASAHI Netのmanabaを積極的に利用し，学生が復習として問題を再検討できるようにしている。また，講義レジメを蔵置して学生が予習や復習を効率的に行えるよう工夫している。
小テストの実施	2017年4月1日～	講義内容に関する知識の定着具合を確認するために，毎回の講義終了時に15分程度の小テストを実施している。
小テストの講評と追加的解説	2017年4月1日～	小テストにおいてとくに正解者が少なかった設問に関して追加的な解説を行い，講義内容を振り返るとともにどのようにして正解に至るかの考え方を示している。
参考資料の配布	2017年4月1日～	新聞記事や裁判例などを積極的に利用し，受講生が講義内容と具体的紛争とを関連づけて理解できるよう配慮している。
講義レジメの作成および使用	2017年4月1日～	制度の趣旨，論理の構造や展開に重点を置いた講義レジメを作成し，使用している。
講義レジメおよび参考資料の事前配布	2017年4月1日～	全ての講義科目において，講義内容をまとめた講義レジメをあらかじめ電子データで配信している。
シラバスの充実	2017年4月1日～	授業で取り扱う項目を箇条書きで記載して，受講者が予習復習をしやすいように工夫している。

manabaの積極的利用	2017年4月1日～	小テストを行う際にASAHI Netのmanabaを積極的に利用し，学生が復習として問題を再検討できるようにしている。また，講義レジメを蔵置して学生が予習や復習を効率的に行えるよう工夫している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
法学講義レジメ集	2019年4月1日～	講義内容の理解を助けるために作成した補助教材である。制度趣旨や論理構造が理解できるように，図を用いて説明している。また，社会問題をときには数値で理解できるように，統計を示して説明している。さらに，法学初学者である受講生が法学により親しめるように，レジメの一部を空欄にし受講者自身が記入しながら学習できるようにしている。
知的財産法2講義レジメ集	2019年4月1日～	講義内容の理解を助けるために作成した補助教材である。制度趣旨や論理構造が理解できるように，図を用いて説明している。
知的財産法1講義レジメ集	2019年4月1日～	講義内容の理解を助けるために作成した補助教材である。制度趣旨や論理構造が理解できるように，図を用いて説明している。
法学講義レジメ集	2017年4月1日～	講義内容の理解を助けるために作成した補助教材である。制度趣旨や論理構造が理解できるように，図を用いて説明している。また，社会問題をときには数値で理解できるように，統計を示して説明している。さらに，法学初学者である受講生が法学により親しめるように，レジメの一部を空欄にし受講者自身が記入しながら学習できるようにしている。
知的財産法2講義レジメ集	2017年4月1日～	講義内容の理解を助けるために作成した補助教材である。制度趣旨や論理構造が理解できるように，図を用いて説明している。
知的財産法1講義レジメ集	2017年4月1日～	講義内容の理解を助けるために作成した補助教材である。制度趣旨や論理構造が理解できるように，図を用いて説明している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

1996年6月～	工業所有権法学会会員 会員
1994年10月～	日本私法学会会員 会員
1992年5月～	著作権法学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	冨田　真	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	宮川　基	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
講義レジュメの作成	2024年4月1日～2025年1月31日	刑法各論Ⅰ・Ⅱで講義レジュメを作成した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
大学図書館と蔵書	単著	2024年10月	DH國際書房, LAW BOOKS(106(544))	宮川　基	pp.
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年11月	簡易裁判所判事推薦委員会 簡易裁判所判事推薦委員会委員
2024年6月	仙台矯正管区 視察委員会運営アドバイザー
2024年4月～2024年10月	初任研修課程刑務官初等科 講師
2023年12月～	東北弁連弁護士任官候補者推薦委員会 弁護士任官候補者推薦委

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2024年度

所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	横田 尚昌	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ 教育活動

教育実践上の主な業績	年月日(西暦)	概要
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)		
大学と職業との接続を意識した授業	2017年4月1日～	法律の基礎概念をしっかりと理解していれば，社会に出てから複雑な問題に直面しても，法的思考をもって的確に解決する道筋がつけられるはずである。このことを念頭に，基本的な法律知識を繰り返し履修生に説明し定着を図る。毎回の授業では，必ず前回に行った授業の内容を振り返る。そして全体の中で今何を学んでいるのか，その位置づけを明確にする。
授業に対する学生の反応への対応	2017年4月1日～	授業の内容や進め方については，折に触れて学生から寄せられた生産的な意見や要望を真摯に受け止め改善に努めているが，未だ不十分なところ多々あることを自覚しPDCAサイクルを意識してメリハリのある授業の工夫をする。
講義のポイントを説明する。	2017年4月1日～	教科書中のどの部分に力点をおいて講義するのか，また省略する個所についてはその理由を明確にする。 その科目で学ぶ内容の組立て方が履修生にわかるように工夫する。
基本的な知識が理解できていないために、出された問題を不必要に難しく考えすぎて、収拾がつかなくなる場合が少なくないことを示す授業	2017年4月1日～	難しいことを事細かに覚えるのではなく、根幹となる概念や用語をしっかりと身につけることによって体系的理解が深まることに気づいてもらえる授業の工夫をする。
演習二部履修生(4年生)による就活体験談	2017年4月1日～	3年生以下の演習では，就職先を決めた4年生に就活体験談を語ってもらう時間を設けて，企業は大学生活のどの点に着目しているのか、また今後の大学生活をいかに過ごしていくべきかについて、受講生各人が自らに考え直すきっかけ作りをする。
授業に対する学生の反応への対応	2015年4月1日～	授業の内容や進め方については，折に触れて学生から寄せられた生産的な意見や要望を真摯に受け止め改善に努めているが，未だ不十分なところ多々あることを自覚しPDCAサイクルを意識してメリハリのある授業の工夫をする。
足下の基本的知識がわかっていないために理解が進まない場合が少なくないことを示す授業	2015年4月～	難しいことを事細かに覚えるのではなく、根幹となる概念や用語をしっかりと身につけることによって体系的理解が深まることに気づいてもらえる授業の工夫をする。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
菊地雄介ほか著『レクチャー会社法(第3版)』(2022年，法律文化社)「第4章 株式」を分担執筆	2022年4月25日～	菊地雄介ほか著『レクチャー会社法(第3版)』(2022年，法律文化社)「第4章 株式」を分担執筆
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
外務員の告知受領権(判批・大判昭和9年10月30日)	単著	2025年3月	有斐閣,『保険法判例百選(第2版)』(別冊ジュリスト271号、2025年)	横田尚昌	pp.128-129
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					

D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）			
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）			
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）			
G. 学会における研究発表			
H. 翻訳（学術書や原典等）			
I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	法学部　法律学科	職名	准教授	氏名	梶谷　康久	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	・学生にとって取り組みやすい講義の構成 ・学生が教科書を自ら読む習慣の提供 ・法学への興味喚起	
今年度の進捗状況	・いくつかの方法を講義で実践し、興味の程度を確認できた。 ・教科書を読む習慣については不十分なため、引き続き検討する。 ・法学への興味の喚起については不十分なため、引き続き検討する。	
来年度の進捗目標	・教科書を用いた講義を提供する。 ・より基礎的事項を定着させることを目標とする。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
登記とは何か――「相続登記の義務化」と登記の位置付け	単著	2025年1月	日本不動産学会誌, 38(3)	梶谷康久	pp.13-17
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標	・不動産をめぐる法律関係について、現在の不動産の意義を確認し、必要な法解釈を検討する。 ・権利の性質についての検討を進める。				
今年度の進捗状況	・登記に関する論考を提出することができた。				
来年度の進捗目標	・様々な方向からの検討が必要なため、外国法を参照した研究を進めていく。				

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2025年度		

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年11月	債権法改正と賃貸借 講師
2024年4月～	宮城県公共工事等入札・契約適正化委員会 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

・法学政治学研究所所員
・ラーニングコモンズ所員
・法学部キャリアアップ支援委員会委員

2024年度

所属	法学部　法律学科	職名	准教授	氏名	源島　穣	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	着任初年度のため、本学の学生の水準に合わせた授業を実施する。
今年度の進捗状況	講義科目の課題提出状況や、演習科目の報告状況を常に確認することで学生の水準を把握し、 授業内容を毎回アレンジして実施した。
来年度の進捗目標	さらなる改善を図り、より学生にとって理解しやすく、満足度の高い授業を実施する。 公務員志望者をはじめ、キャリア教育にも力を入れる。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
『インフォーマルな政治の探究：政治学はどのような政治を語りうるか』	共編者（共編著者）	2025年3月	吉田書店	松尾 隆佑,源島 穣,大和田 悠太,井上 睦	pp.1-336
『世界の社会福祉年鑑』	分担執筆	2024年11月	旬報社	宇佐見耕一,小谷眞男,後藤玲子,原島博, 岡伸一	pp.141-145
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
技能実習制度が存続した理由：＜地方＞から読み解く	単独	2024年6月	非国家的政治研究会 第19回(オンライン)	源島穣	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	学術書の分担執筆の完成、投稿中の査読付き論文の掲載を目指す。 科研費の採択課題1年目の計画を遂行する。
今年度の進捗状況	今年度、分担執筆の論文2本を抱えていたが、1本は無事スケジュールどおりに刊行できた。 もう1本も年度内に刊行できる見込みである。 投稿中の論文も査読中なので、掲載を目指したい。 科研費の採択課題も概ね計画通りに遂行できた。
来年度の進捗目標	投稿中の論文の掲載を実現する。 科研費の採択課題の2年目の計画も遂行し、学会報告を行う。 報告時に得られるコメントを踏まえて論文執筆ならびに投稿する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

科学研究費助成事業 若手研究	2024年度～2026年度	個別(研究代表者)	移民(労働移民)は、就労を通じて税や保険料を納付することで、少子高齢化に直面した福祉国家に貢献している。しかし、多くの福祉国家では移民排斥が生じている。 そこで本研究は、イギリスを対象に福祉制度に着目して移民排斥が生じる原因解明と対応策を示す。具体的には、移民だけに福祉を提供する選別的福祉制度が、受給対象から外れた国民を排外主義へ向かわせ、移民排斥に至る原因であったことを解明する。 本研究は分析を通じて、移民を納付者として受入れておきながら、高齢の長期受給者になる前に国民の反移民感情を高めて排斥する福祉国家の権力作用を描く。その上で、受給対象を普遍化した福祉制度を対応策として示す。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年12月～2024年12月	有権者の選択 政治は変わった？(news every.)
2019年12月～	日本行政学会 会員
2015年4月～	日本比較政治学会 会員
2015年4月～	日本政治学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

着任1年目のため、委員会業務の内容を覚えることに専念した。
来年度は、より積極的な貢献を目指したい。

2024年度

所属	法学部　法律学科	職名	准教授	氏名	高浜　智輝	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
双方向型授業	2023年4月1日～	少人数の授業では、学生全員が発言する機会を設けることを意識した。具体的には、発表者の学生に質問するだけでなく、他の学生にも意見を求めることにより学生全員が集中して授業に臨むよう取り組んだ。
電子資料・パワーポイントを用いた授業	2023年4月1日～	manabaを通じてパワーポイント資料を事前配布し、学生が手元で資料を確認しながら講義に臨めるように工夫した。 国税職員等の外部講師を招聘し、学生が実務にも興味を持つ機会作りを行った。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	講義科目で使用するレジュメ・資料等の平易化
今年度の進捗状況	今年度担当した講義科目である租税法Ⅰ・Ⅱについてレジュメ・資料を作成したが、相乗り科目の性質上経営学部の学生への配慮の観点から、現在のものよりもわかりやすい言葉で作り直している状況である。判例は紹介にとどめ、学生自身が考える時間を設けた。 演習科目については、3コマ1サイクルの形でグループワーク課題を設定し、学生が数多くの社会的問題について学習する機会を設けている。
来年度の進捗目標	平易にしすぎても学生のためにはならないため、学生の様子・回収したコメントを確認しながら適切な難易度のレジュメ・資料の作成を行う。 演習科目については課題の適切性について確認したうえで、グループワークを実施する。 講義科目については、次年度以降相乗り科目では無くなるため、法的視点を重視した講義運営に切り替える。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
わが国における災害及び感染症に係る 租税法上の対応について―東日本大震災、能登半島地震及び新型コロナウィルス感染症における対応措置の検討を中心に―	単著	2025年1月	東北学院大学法学政治学研究所紀要(33)	高浜　智輝	pp.82-114
税務行政執行共助条約における徴収及び保全共助について	単著	2025年1月	税大ジャーナル，37	高浜　智輝	pp.1-24
税務行政執行共助条約の保全共助要請に基づく保全処分の適法性	単著	2024年11月	ジュリスト(1604)	高浜　智輝	pp.135-138
アメリカ連邦税法におけるパートナーシップ債務の取り扱い－Tribune Media Co. v. Commissioner T.C. Memo 2021-122を素材として－	単著	2024年4月	獨協法学(123)	高浜　智輝	pp.307-324
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					

パートナーシップ持分譲渡における事業体アプローチと集合体アプローチについて－1954 年法及び今日の取扱いの検討を中心に－	単独	2025年3月	2025年度国際取引法学会全国大会(明治学院大学)	高浜　智輝	
パートナーシップ持分譲渡における事業体アプローチと集合体アプローチについて－1954年法及び今日の取扱いの検討を中心に－(中間報告)	単独	2025年1月	国際取引法学会第76回金融税制部会(オンライン開催(Zoom))	高浜　智輝	
税務行政執行共助条約における徴収共助に関する考察	単独	2024年12月	日本組織会計学会2024年度第1回研究会(成城大学)	高浜　智輝	
アメリカ合衆国における実体論と集合体論についての基礎的考察－Rawat巡回裁判所判決の検討を中心として－	単独	2024年11月	第1回九州東北若手租税法研究者研究会(熊本学園大学)	高浜　智輝	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	事業体課税(特にパートナーシップ課税)に関する諸問題について諸外国の議論と比較法的に検討した論文を引き続き執筆する。 その他租税法に関連する諸問題について検討し論文を執筆する。また、他の法領域や法解釈の問題についても租税法と絡めながら研究活動を行いたい。加えて、研究資金獲得活動にも力を入れたい。
今年度の進捗状況	2024年度は、上記の課題に関する論文を1本投稿し、研究報告を3回行った。研究報告を踏まえた論文は、次年度投稿・掲載予定である。また、文献収集を進めることができたため、論文として形にしたい。 上記以外の論点について、2本の論文と1本の判例評釈を投稿した。アンテナを広げるためにも引き続き、専門領域以外の研究にも取り組んでいきたい。
来年度の進捗目標	上記の課題目標から引き続き事業体課税に関する論文の執筆・投稿を行う。特に、出資・分配に関する課税上の問題について執筆する。他の租税法上の論点についても研究を進める。特に、文書送達・送達共助における執行管轄に関する論文や米国の文言主義・目的論主義の観点照らし、わが国の租税法における文理解釈のあり方について研究を進めたい。 これらの執筆活動に合わせ、学会・研究会発表も積極的に行う。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2022年10月～	租税法学会 会員
2021年4月～	国際租税協会 会員
2020年9月～	国際取引法学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	法学部　法律学科	職名	准教授	氏名	玉井　裕貴	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
全国合同民事訴訟ゼミナールへの参加	2022年～	演習一部・二部において「全国合同民事訴訟ゼミナール」へ参加した。他大学との報告・議論を通じて、学生のモチベーションや学修意欲が大きく高まった。引き続き、大会参加を前提としたゼミ運営のあり方を模索している。
反転授業の実施	2022年～	「リーガル・リサーチ（法学部生入門）」では、講義内容を確実に身につけてもらうため、事前予習用の教材と教科書を用意し、反転授業を実施した。受講生の理解促進、また、上級学年になってからの学修に資するものとなっていることを期待する。
学習内容の理解促進と興味関心を高める。	2021年～	報道等で話題となった事件や、教科書事例などを多用し、概念や制度の理解の促進を図っている。また、法技術的側面の強い内容の説明に際しては、ビジュアルでの資料提供の方法を工夫したり、学生がメモをする上での留意点などを説明した上で解説を行うなど、精確に理解することができるよう工夫している。また、各単元終了毎に復習問題を作成・配信し、各自自習できるような工夫を行った。
入門講義における興味・関心の喚起	2021年～	「リーガル・リサーチ（法学部生入門）」では、法学学習をスタートさせる学生がスムーズに学習を進行させることができるよう、上級生がつまづいている内容についてインタビューを行った上で、それを重点的にフォローする形で、講義を構築した。 「民事手続法入門」では、学問分野の全体像を示すという講義目的に加え、3年次以降の関連科目にスムーズに取り組むことができるよう、言葉の定義などは、特に入念に講義するようにし、多くの受講生が着実にステップを踏むことが出来るよう留意した。また、モデルケースや、訴状サンプル、フローチャートなどを多用し、受講生の興味・関心を喚起することに努めた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
玉井裕貴『学びの基礎を身につけるー法学部生入門ハンドブック』（ミネルヴァ書房、2025年）	2025年3月	
『民事手続法入門ー講義ノートー〔第3版〕』（自費出版、2023）	2023年9月～	
『リーガル・リサーチー法学学習メソッドを学ぶー』（自費出版、2023）	2023年4月～	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
2024年度第2回法学部FD研修会における報告	2025年2月18日	

4．その他教育活動上特記すべき事項	
現在の課題・目標	①学生とのコミュニケーションを充実させ、講義へフィードバックさせる。 ②学生が興味・関心を持つような授業の設計変更を行う。 ③演習科目の実践内容をより充実させる。
今年度の進捗状況	①SAを活用し、より緊密に学生とコミュニケーションをとり教育活動に繋げた。 ②とくにリーガルリサーチについては、講義内容が書籍として結実した。 ③ゼミ大会への参加など、大きな成果を挙げた。
来年度の進捗目標	①引き続き、オフィスアワーの充実などを通じて、学生の教育活動に活かす。 ②引き続き、学習内容の見直しに努め、より充実した講義内容となるよう強める。 ③ゼミ大会における報告の質向上に向けて、講義内容等を見直す。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					

『学びの基礎を身につける　一法学部生入門ハンドブック』	単著	2025年3月	ミネルヴァ書房	玉井裕貴	pp. i -198
『民事執行・保全法入門』	分担執筆	2024年9月	日本評論社	川嶋四郎	pp.26-34
倒産法的公序『ケース別 一般条項による主張立証の手法―実体法と手続法でみる法的構成の考え方―』	共著	2024年7月	ぎょうせい	玉井裕貴	pp.180-193

Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）

Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）

C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文

D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）

E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）

G. 学会における研究発表

事業再生プロセスにおける裁判所関与のあり方－ドイツの裁判外再建手続における「モジュール」構想に示唆を受けて－	単独	2024年7月	第二東京弁護士会・民事訴訟問題特別委員会(東京)	玉井裕貴	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	①主たる研究分野に関する研究を進める。 ②対外的な研究者との学術上の交流を進める。 ③研究領域の拡大・強化を図る。
今年度の進捗状況	①近々公表した論文に基づき、研究会等での方向を実施した。 ②全国規模の研究会に積極的に参加し、研究活動の人的広がりを大きく広げた。 ③新たな研究会に参加し、他分野との交錯領域にかかる研究に着手した。
来年度の進捗目標	①主たる研究テーマについて、引き続き定点観測を行い、次の論文に備える。 ②今年度と同様、研究会に積極的に参加し、研究をすすめる。 ③交錯領域における研究を進める。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2019年4月～	利府町 個人情報保護審査会委員
2019年4月～	利府町 情報公開審査会委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	法学部　法律学科	職名	准教授	氏名	内藤　裕貴	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業範囲の明示ならびに学生が自己学習するに際しての配布資料への配慮	2017年4月1日～	各回の授業の冒頭で、授業で取り扱う範囲を明示するとともに、会社法学の論理的思考を整理する際に一助となるような資料を受講生に配布し、学生が自主学習しやすいように工夫した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	初学者である学生にとって商法や会社法をより身近に感じやすくするための授業の設計
今年度の進捗状況	担当授業科目において作成した教材の再点検を行っている。
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
商法・会社法研究ノート(第22回)取締役の業務執行局面における専門家の知見に対する「信頼の権利」についての一考察	単著	2025年3月	月報司法書士 / 月報発行委員会 編(637)	内藤裕貴	pp.58-65
株式併合に係る株主総会決議後に株式を取得した株主の株式買取請求権行使の可否［東京高等裁判所令和4年6月17日決定(LEX/DB25595646)］	単著	2024年10月	速報判例解説 新・判例解説Watch 商法 No.181	内藤裕貴	pp.1-4
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
商事法判例研究 退職慰労金不支給に係る取締役の不法行為責任[福岡高判令和4.12.27]	単著	2024年9月	東京：経済法令研究会, 金融・商事判例 = The financial and business law precedents(1698)	内藤 裕貴	pp.2-7
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
日本《公司法》中的董事对第三人责任	単独	2024年8月	北京航空航天大学”中日公司法论坛”第二期(北京航空航天大学)	内藤裕貴	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	EUの第二次株主権指令に伴い、ドイツで導入されたKnow Your Shareholderについての研究
今年度の進捗状況	上記に関する規定である株式法67d条の運用状況等について調査している。
来年度の進捗目標	2025年度中に、株式法67d条に関する研究論文を公表する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

科学研究費助成事業 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))	2022年度～2025年度	(研究分担者)	本研究は、株式会社その他の法人企業における実質的支配の透明化の確保と実質的支配者に対する体系的規律の構築が国際的な共通課題であるとの認識のもと、この面における法制化や実効性確保等の点で先行する英独仏の実質的支配者開示制度および同制度と機能的に連動する英独仏の支配株主責任法制・法理との比較法研究を、日本のみならず英独仏における会社法研究への理論的貢献を目指す観点から、展開するものである。本研究は、会社等における実質的支配者の開示制度を支える理論的根拠を明らかにするとともに、同制度の会社法制としての位置づけおよび支配株主責任法制等との接合の可能性・必要性を解明しようとする国際共同研究である。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2024年10月～	日本海法学会会員 理事
2021年4月～	仙台北税務署 国税モニター
2019年5月～	日本海法学会会員 会員
2016年4月～	日本私法学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	法学部　法律学科	職名	准教授	氏名	羽田　さゆり	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ゼミ活動において学習させる工夫	2020年4月1日～	基礎演習Ⅰ Ⅱ・演習一部において、学生が発表を行う前に事前に時間をかけて説明をし，レジュメの例を示し模擬発表も行うことによって、発表すべき内容や方法について理解を深めさせるように努めている。
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2020年4月1日～	レジュメを毎回作成している。授業の冒頭にその回の概略を記載して示し，前回の復習を必ず行い，レジュメの最後には，授業終了後にその回のまとめを自習できるよう穴埋め式の箇所を設けている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
講義用レジュメ・動画	2020年4月1日～	担当講義のレジュメを作成し、パワーポイントによるスライドを動画にして毎回作成し上映している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
TG推薦オリエンテーションにおける法学ガイダンス	2024年6月6日	TG推薦オリエンテーションにおいて、法律学科に関心を持つ付属高校生を対象として法学ガイダンスを行った。

現在の課題・目標	1、分かりやすいレジュメを作成するとともに、パワーポイントを用い講義の効果を高める。 2、オンライン学習に適した内容・実施方法・成績評価方法を工夫する。 3、演習における学生への対応を適切に行う。
今年度の進捗状況	1については、レジュメ配布・パワーポイント動画の工夫を昨年に引き続き行った。出席をとった後ただちに退席する学生は、今年度は目立たなかった。講義時間帯によるのかもしれない。経済学部の講義において、民法全体を薄く広く紹介する工夫を行い、それなりの手ごたえを感じた。 2については、昨年度の取り組みを基本的にそのまま引き継いだが、全体的に単位取得率・成績共にさらに下がった。試験に関する情報を与えても、それを生かそうとしない様子が強くうかがわれたため、勉強させる工夫を一層講じる必要があると感じた。 3については、グループワークを取り入れたところ、取り組みの熱意の差で学生間に不和が生じかねない様子が見られた。班ごとの発表準備に適切に介入することにより、班による発表にまつわる学生間のトラブルを未然に防ぐよう心掛けた。
来年度の進捗目標	1について。レジュメ・スライドの工夫を継続しつつ、さらにイラストの使用など学生のイメージに訴える工夫を重ねることで、学生の講義参加度を上げていきたい。 2について。引き続き、学生の学習環境の変化に合わせて、学力向上につながるような講義方法を工夫する。生成AIなどに頼らずに、自分の頭で考えさせるような方策を取り入れる所存である。 3について。グループワークを取り入れつつ、さらに学生の頑張りを評価できるよう、学生の様子に注意しながら、学修効果を高める工夫を重ねたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	1、消費者問題研究を進める。 2、「震災と子ども」研究を進める。 3、「葬儀・祭祀に関わる契約トラブル」の研究をする。
今年度の進捗状況	1については、EU法について多少調査を進めたところである。さらに検討を深めていきたいと考えている。 2・3については、研究的に行き詰まり、論文執筆が滞っているところである。いずれもどこから手を付けていいのかが難しいところであるが、消費者問題を端緒として何か手を付けることができればと考えるに至っている。
来年度の進捗目標	1、2、3のいずれも研究を継続する。 まずは特定商取引法の改正問題に関する論文の執筆を進め、消費者問題の角度から子供の財産問題や祭祀の問題を検討していきたい。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年7月	宮城県公益認定等委員会 委員（法律）
2021年5月～	仙台市社会福祉協議会・契約締結委員会 委員（学識経験者）
2021年1月～	宮城県青少年問題協議会 委員
2019年11月～	日本政治法律学会会員（理事） 会員
1996年10月～	日本私法学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

教務委員
シラバス校正委員

2024年度

所属	法学部　法律学科	職名	准教授	氏名	松浦　陽子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業における小テストによる理解度の確認（講義科目）	2023年4月～	これまでに蓄積した小テストを毎週実施し、知識の確認と定着を促した。その解説を授業内に行い、理解度を確認した上で授業を進めた。小テストに基づく評価を導入することにより、それぞれの学生の理解度に応じた教育と評価ができるよう配慮している。
演習二部における卒業レポート指導とゼミの記録集への記録	2023年4月～	演習二部においては、学生個々人の国際法研究を深めるために、卒業レポートの作成を指導し、完成させた。最終的には、ゼミの記録集に、卒業レポートの表紙及びQRコードを記録した。
英語学習の成果としての翻訳の作成（外国書講読）	2022年4月1日～	「外国書講読」において学生の英語学習の成果を翻訳としてまとめた。
学習発表の機会を通した4年間の研究の意識化（演習科目）	2021年4月～	一つの論点や事例研究について，文献講読とプレゼンテーション・ディベート・ディスカッションなどの学習発表を組み合わせることにより，研究を深め，かつ，参加者同士の議論を促している。これらの作業をとおして、基礎演習ⅠおよびⅡでは基本的な専門教育の土台を作り、演習一部では国際法事例研究、演習二部では各自の興味に合わせた国際法研究を進めた。
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進（講義科目）	2021年4月～	授業の冒頭で前回の学習とのつながりを確認し，新たな項目へと進むことにより，学習事項の学問的位置づけを明らかにする。その上で学習事項を時事問題や卑近な例に例えて説明することで，記憶への定着と理解の促進を図っている。今年度は特に、responの機能を用いて、授業内でアンケートをとり、それについて国際法の視点で解説することで、各回の理解を促進する機会を増やした。
レジュメ配布による学習事項の確認（講義科目）	2021年4月～	半期の授業内容に関するレジュメをmanaba上にアップロードし、学生がいつでも使用可能な状態にした。レジュメは、参考文献を参照できるように注を付し、学ぶ意欲のある学生が自発的に学習しやすいよう配慮している。また，時事問題を積極的に取り入れ，新たな国際問題を国際法の視点で学習できるよう配慮している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
小テストの作成およびその解説の公表	2023年3月～	授業科目において知識とその理解度の確認および知識の定着に寄与するため、小テストを作成した。また、その小テストに関し、manabaをとおして、あるいは授業内に、解説を行った。
講義で使用するレジュメ等	2020年4月～	レジュメには毎回の講義概要を掲載し，重要項目を穴埋めにするなどの工夫をしている。また，毎年情報を更新し、脚注を付けて典拠および参考文献を明示することで、学生が主体的に調べやすいよう配慮している。このレジュメはmanaba course上で配布している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	①教科書を始めとして専門書などの書籍を読ませる読書会を開催するなど、学生が学術書に触れる機会を増やしたい。 ②一次資料を重視し、虚心坦懐に学生に判断させる授業を今後も心掛けたい。
今年度の進捗状況	①授業やゼミにおいて、専門書を紹介し、該当箇所を議論する機会を設けることができた。 ②ゼミや外国書講読において、一次資料を読む機会を学生に提供することができた。 ③担当する法学部の学生のみならず、国際学部の学生に対し、課外で、指導する機会を得た。
来年度の進捗目標	①リーガル・リサーチ及び国際法の講義において、わかりやすく、かつ、学術的意味のある説明を日々更新する。 ②演習科目においては、国際法学の視点から、一次資料を重視して、学生の思考力を養うよう心掛ける。 ③外国書講読においては、英語レベルの向上と、英語を通じて世界の新たな視点を提供するよう心掛ける。 ④国際法の模擬裁判に関心を持つ法学部および国際学部の学生に対し、指導を継続する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
東日本大震災から考えるILC「災害時の人の保護」に関する条文草案の課題	単著	2025年1月	東北学院大学　法学政治学研究所紀要(33)	松浦　陽子	pp.151-188
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
いわゆる「パンデミック条約」の作成過程におけるインフォデミック関連規定の経過	単著	2024年9月	日本評論社, 法の科学(55)	松浦　陽子	pp.176-181
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	①災害支援の国際法の研究 ②感染症対応とインフォデミックに関する国際法の研究
今年度の進捗状況	①については、2025年1月公刊の本学法学政治学研究所紀要第33号において論文を寄稿した。 ②については、2024年9月公刊の『法の科学』第55号において研究ノートを寄稿した。
来年度の進捗目標	①インフォデミックに関する国際法の研究を継続する。 ②義務的ワクチン接種の問題を国際人道法の見地からさらに研究する。 ③国際法上の国家性に関する議論の再検討に着手する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年12月	少年司法と国際準則 講師
2024年8月～2024年8月	法学概論 講師
2024年5月～	宮城県大崎市情報公開審査会 大崎市情報公開審査会委員
2024年4月～2024年5月	法学概論 講師
2024年4月～	宮城刑務所視察委員会 視察委員
2018年～	国際法協会日本支部 会員
2012年～	日本国際経済法学会 会員
2000年～	世界法学会 会員
1999年～	民主主義科学者協会 法律部会 会員
1999年～	国際法学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

法学部広報委員会委員長、Jura編集委員
法学部基幹構想委員会委員
法学部改革FD検討委員会委員
法学部点検評価委員会委員長
全学点検評価委員会委員
法学部共同研究プロジェクトメンバー
AO面接委員

2024年度

所属	法学部　法律学科	職名	准教授	氏名	松原　俊介	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学習内容の定着	2021年4月～	毎回の講義で復習問題を掲載し、次の講義の初めに解説を行った。また、manabaを用いて複数回小テストを実施して、記憶の定着を図った。
講義に関するアンケートの実施	2021年4月～	定期的にmanabaを用いてアンケートを実施して講義に対する要望を聞き、講義に反映させることを心掛けた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
講義レジュメの作成	2021年4月～	毎回の講義で教科書を補うレジュメを配布した。レジュメには空欄をもうけることでオンデマンド授業への参加を促した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2022年度～2024年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2024年度

所属	法学部 法律学科	職名	准教授	氏名	楊 秋野	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ 教育活動

教育実践上の主な業績	年月日(西暦)	概要
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
責務違反論と違法性の意識の可能性	単著	2025年2月	東北学院法学, 85	楊秋野	pp.1-20
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
大規模事故における刑事過失責任――予見可能性を中心に――	単著	2025年1月	東北学院大学法学政治学研究所紀要, 33	楊秋野	pp.189-222
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	法学部　法律学科	職名	講師	氏名	井坂　正宏	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	法学部　法律学科	職名	講師	氏名	塚原　義央	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
『帝政期ローマの法学者：ケルススの分析を中心に』	単著	2024年10月	早稲田大学出版部	塚原 義央	pp.1-228
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2018年4月～	日本ローマ法研究会 会員
2011年4月～	法制史学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

教員業務・活動報告

工　学　部

機械知能工学科

電気電子工学科

環境建設工学科

情報基盤工学科

2024年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	教授	氏名	魚橋　慶子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
機器運用資料の提示によるシステム制御工学教育	2019年9月20日～	工学部機械知能工学科3年生対象「システム制御工学」の授業において，システム制御理論を実際に利用し機器を動かす様子を説明した資料を，何度か履修者へ提示した。計算や公式の応用を理解できるよう，工夫した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
理数基礎教育センター相談員	2023年4月～	
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
血管運動系症状と気温や内臓による周波数応答の遷移	単独	2024年12月	計測自動制御学会東北支部60周年記念学術講演会(仙台市)	魚橋慶子	
Comparisons of extended divergence on a foliation by deformed probability simplexes with other divergences	単独	2024年9月	Geometry Days - TUIASI 2024(Ia i, Romania)	Uohashi K.	
変形確率単体による葉層構造上の拡張ダイバージェンス	単独	2024年7月	名古屋数理情報科学研究会 2024(名古屋市)	魚橋慶子	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年4月～	日本音響学会東北支部評議員 会員

2021年10月～	日本音響学会 会員
2021年1月～2024年12月	計測自動制御学会代議員 会員
2016年9月～	日本女性医学学会 会員
2012年3月～	日本数学会幾何学分科会拡大幹事 会員
2007年4月～	システム制御情報学会 会員
1998年6月～	日本数学会 会員
1997年4月～	日本応用数理学会 会員
1996年12月～	計測自動制御学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	教授	氏名	小野　憲文	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
「プログラミング基礎」に関するWeb（電子）教材を用いた授業	2023年4月1日～	担当している「プログラミング基礎」は全て自作のWeb（電子）教材を使用して授業を進めている。主な内容はコンピュータリテラシーとC言語の入門に関するものである。教材はレポートや試験問題も掲載されるため，学内からのみ閲覧可能である。この制限を緩和するためにほぼ同内容の教材を研究室のホームページに掲載している。この研究室掲載の教材はどこからでも閲覧可能であり，学生の自宅からの復習にも役立っている。 特に、今年度は学外学習に関して強化をはかった。
「メカノデザイン工作演習I・II」に関するWeb（電子）教材を用いた授業	2020年4月1日～	本講義のうち、機械製図の内容をWeb上に掲載した。この電子教材には、3D動画も含まれており、学生は視覚的に対象物を確認することができる。
「熱流体解析工学」に関するWeb（電子）教材を用いた授業	2020年4月1日～	本講義の内容はすべてWeb上に掲載されている。この電子教材には，流れに関する静止画および動画が含まれており，学生は視覚的に流れの計算方法や計算結果を確認することができる。これは，式の誘導・展開を中心とする数値流体工学の講義とは一線を画するものである。また，流れの計算を行うプログラムも本ページに掲載されており，学生は授業中にそれをダウンロードし，動かすことができる。2020年度からはグーグルアプリに対応し、より効果的な学生の自学が期待できる。
「基礎流体工学」に関するWeb（電子）教材を用いた授業	2020年4月1日～	本講義に関するWeb（電子）教材を用いた学習環境は、数値計算・動画生成ソフトが含まれており、これにより学生のより一層の学習効果の向上が見込まれる。また、2020年度から、グーグルアプリを利用した学習環境も構築し、学生の自学補助に役立つことが期待できる。
卒業研究による総合的成果を担当学科目に反映させる教育研究の実施	2020年4月1日～	学科科目「卒業研究I,II」において「流体工学分野における学習環境の開発」に関する指導を行ってきた。これは，学部4年生が開発することによって自分が学びたい部分・未修得な部分をその開発教材に反映できるという特色を持っている。卒研生が主体となって作成した教材を担当科目の授業中に使用し，受講学生への学習効果や学生の声をフィードバックすることによって更なる教育環境・教材の改良をはかる教育研究を実施している。今年度は特に数値熱流体工学の学習環境整備をさらに充実させている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	1.学生が自主的に予習・復習できる環境に関しWebを中心に構築・進展させ、アクティブラーニングも視野に入れる。 2.演習科目に関して学生の理解度・解答作成速度などに対応できる課題の作成・出題を行う。 3.すべての授業において学生とのコミュニケーション増大の方策を練り実践する。
今年度の進捗状況	1.1年生の科目「プログラミング基礎」「メカノデザイン工作演習II」について、自作教材を随時改良した。 特に「メカノデザイン工作演習II」の資料を充実させた。 2.「基礎流体工学」、「熱流体解析工学」においてWebでの学習環境に改良を施した。 3.「機械知能工学実験II」については「ポンプの性能試験装置」に関してさらに改良を施し、満足のいく結果が得られるようになった。
来年度の進捗目標	1.学生からのフィードバック（理解しずらい点）を鑑み授業内容、教材の修正に常に努める。 2.授業形態によっては、学生とのやり取りが不十分であるため、事前事後の来室(電子メールでの問い合わせを含む)LMSの個別指導機能等に対応し、さらに発展させる。 3.学生が授業外に学習できる環境をさらに整備する（Web教材、双方向的）。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					

Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）	
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）	
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文	
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）	
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）	
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）	
G. 学会における研究発表	
H. 翻訳（学術書や原典等）	
I. 特許	
現在の課題・目標	1.産学官連携につながる熱流体機械関連制御技術・環境をさらに整備する。 2.新たな流れの数値解析手法とその結果表示方法、流れの可視化方法についての環境構築を行う。 3.室内の空調および電子機器の冷却に関わる研究について新たな手法および知見を得る。 4.大気圧プラズマの基礎的研究環境を整え、進展させる。
今年度の進捗状況	1.企業との研究については双方向に更に検討している段階である。 2.新たな熱流体計算・実験環境の構築を整えてきている。 3.実質的に利用価値のあるハード・ソフト開発を行うことができた。 4.最新の結果については、講演会・報告書で発表済または発表予定である。
来年度の進捗目標	1.産官との連携を継続するとともに新たな領域への拡大をさらに模索する（新規の予定あり）。 2.未公表の技術・開発物を精査し、改良を加えて公開可能とする。 3.新規収集データ・手法について、順次発表するための時期・場所・方法を検討し、実践する。 4..異分野の研究にも参加し、自己の研究領域を拡大する（新規の予定あり）。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2009年5月～	工学部機械TG会事務局長

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	教授	氏名	梶川　伸哉	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
卒業研究ゼミの開催	2020年4月1日～	卒業研究の各学生担当テーマとその進行状況の相互理解、および問題解決策を議論する目的で週一回実施している。(オンラインと対面の併用)
映像を用いた授業内容の解説	2020年4月1日～	4年次の「ヒューマンマシンインターフェイス」の授業において、映像資料を用いた解説を行い、理解と興味の向上に努めている。また、身近な機器を取り上げ、そのインターフェイスの良し悪しについての調査とプレゼン，ディスカッションの場を設けている。
Webを利用したレポート課題	2020年4月1日～	3年，4年次に開講される「制御工学」「システム工学」において，Webを利用した課題提示と回収を行ない，学習状況の把握と学習習慣の定着に努めている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
学生実験資料の作成	2020年4月1日～	機械知能工学実験Ⅰ、Ⅱのテーマである「表面筋電位の計測」、「ロボットの制御」で使用する解説資料を作成し，使用している。(Web上で公開)
授業補助資料の作成	2020年4月1日～	「制御工学」「システム工学」「ヒューマンインターフェイス」の授業で使用する補助資料を作成し，使用している。(今年度はWebを介した配布)
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Low-Cognitive-Load Navigation System for the Visually Impaired Using Head Rotation	共著	2025年1月	International Journal of Mechanical Engineering and Robotics Research, 14(1)	Shinya KAJIKAWA, Satoshi KOHARADA	pp.14-25
透析時細胞内外体液移動とその生存率への影響－多周波数生体インピーダンス法による検討－	共著	2025年1月	東京医学社，腎と透析，98(1)	猪岡英二，栗田宗幸，千田幸夫，戸恒和人，佐藤慶祐，佐藤壽伸，関野慎，竹内和久，梶川伸哉	pp.114-121
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
弾性薄板とスライダクランク機構によるロボット関節駆動	共同	2024年5月	日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会(宇都宮市)	門馬稜介，梶川伸哉	

頭部強制回旋による歩行軌道の変化	共同	2024年5月	日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会(宇都宮市)	細田真生, 吉田航, 梶川伸哉	
粘弾性負荷を有する舌用ジョイスティック	共同	2024年5月	日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会(宇都宮市)	庄子恵介, 菊地輝, 梶川伸哉	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 科学研究費補助金基盤研究(c)	2022年度～	個別(研究代表者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2020年9月～2024年6月	東北防衛局入札監視委員会 委員、委員長(2022～2024)
2013年～	みやぎ高度電子機械人材育成センター 運営委員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	教授	氏名	加藤　陽子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
論述式演習問題（レポート課題）の実施	2021年4月1日～	講義に関連する課題について論述する事により、講義内容を多角的に理解する事を目的とする。
関連研究の紹介	2021年4月1日～	
演習問題の提示による理解度の促進	2021年4月1日～	講義内容のポイントを確認する演習問題に取り組む事により、受講者の理解度を促進する
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	学生の自主的な学修を促す事。
今年度の進捗状況	各講義におけるレポートの提出率（初回）は90%以上となったが、再提出の場合にはばらつきが見られ、80%以上、50％未満が見られた。
来年度の進捗目標	各講義における理解の完成度を自主的に向上させるように促す。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
A Simple Method for Visualization and Quantitative Evaluation of Single and Collective Cell Migration in Bright Field Microscopy Images	単著	2024年8月	Digital Medicine and Healthcare Technology	Yoko Kato	pp.1-23
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	マボヤ被嚢組織と細胞運動について、実験的および数値解析的に評価した。
今年度の進捗状況	顕微鏡下画像を用いた細胞運動の評価手法に関し、論文を1本公刊した。
来年度の進捗目標	マボヤ被嚢（組織・細胞）と胎盤内における血流に関する研究を平行して取り組む。各テーマにおいて1本、論文を公刊する事を目標とする。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年9月～	東北防衛局　入札監視委員会
2024年7月～	一般社団法人　日本キチン・キトサン学会 理事

2010年3月～	一般社団法人　日本キチン・キトサン学会 会員
2010年2月～	CSJ 会員
2009年12月～	ASME 会員
2009年12月～	ACS 会員
2008年7月～	ASCB 会員
2007年5月～	ISJ 会員
2002年1月～	SPIE 会員
2001年5月～	IEEE 会員
2001年3月～	JSMBE 会員
1997年7月～	JSME 会員
1996年6月～	JCA 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	教授	氏名	城戸　章宏	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学生フォーミュラ大会への参加を通じたモノづくり教育の実践	2022年4月1日～	
演習プリントの作成による復習効果の向上への取り組み	2006年4月～	
学生フォーミュラ大会，モーターショウへの参加を通じたモノづくり教育の実践	2003年4月～	
2．作成した教科書、教材、参考書		
自動車関連の最新動向の調査資料	2017年4月～	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2016年4月～	一般社団法人日本雪工学会 会員
1991年4月～	公益社団法人自動車技術会 会員
1984年4月～	一般社団法人日本機械学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2024年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	教授	氏名	熊谷　正朗	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
オンラインホワイトボードを併用した遠隔授業と事後学修用記録の保存提供	2020年5月1日～	講義の遠隔化にともない、以下のスタイルを採用した。 講義の資料はオンラインホワイトボードであるmiro.comのサービス上に構築し（科目よって、従来のスライド資料ベースの配布PDFの貼り付け、従来板書型＋講義ノート公開型科目では、ある程度の骨格部分を用意）、講義中（オンタイム）では、この画面をZoomで中継しつつ、そこに書き込みながら解説をするスタイルとした。これは「消えない黒板」であり、講義前から学生が内容を直接見ることができるURLを提示（Zoom画面から消えても、直接開けば任意の場所が講義中にも確認できる）、講義後も年度末まで保存した。また、自分の手元に再構成できるデータの提供もした。アンケートによれば、講義の録画の提供も含め、事後学習にかなり活用されていた。加えて、前回までの内容をコピーして今回の内容のスタートとすることで、複数回にわたる内容でも扱いやすいなど、講義する側にも利点は多い。 講義は対面に戻ったが、このスタイルはそのまま踏襲しており、講義中、講義前後に受講者が活用している。
専門科目の必修化に伴う講義内容の抜本的見直し	2015年4月～	カリキュラム改訂に伴い、以前は「ほぼ全員履修」の選択と「2/3程度の学生が履修」の選択だったメカトロニクス2科目が必修となったことから、2015年に抜本的な見直しを行った。コンセプトは「専門科目としてのメカトロニクスから機械の教養としてのメカトロニクスへの移行」であり、全員が学び、かつ全員が必要水準に達することの実現を目指した。そのためには枝葉の理論よりは総合的な知識とセンス獲得を優先した。また講義スタイルも従来の板書主体から変更し、毎回決まったフォーマットでのスライド16枚(A3用紙1枚にカラー縮刷して配付)＋重要点などを板書で補足するようにした。配付付きスライド化により、写真を含むビジュアルな資料が提供できるようになったこと、意欲ある学生は板書に気を取られることなく講義内容をメモしていけるなど、狙い通りの効果を得た。上記同様、資料はWEBでも配付している。 なお、資料配付をするノートを取らなくなる可能性が高いが、本科目ではノートのチェックを成績評価に加えており、ほぼ全員が何らかの形（配付資料へのメモ含む）でノートを取っている。 後述の企業技術者向けのメカトロニクスセミナーとの相互運用で内容の修正は続けている。 他の科目への展開については、一部本科目の評価方式を適用しつつ、現状で検討中である（おもに時間確保が課題）。
講義ノートのオンライン化とWEBでの一般公開	2003年9月～	以前の授業評価アンケートにて［字が読めない］［図が書き写せない］との指摘があり，その対応策として講義ノートをWEB上で作成し，公開することとした。復習などの他，病欠などの際の補填にも活用できる。現在，学外からも膨大なアクセスがあり，他大学の教員からも活用されている形跡がある。電子情報化したことで修正も容易となった。 ※2003年9月～継続
テスト・レポート電子処理システムの開発および運用	2003年9月～	膨大な量の小テスト，レポート，単位の実質化に伴う復習シートの，試験の答案での集計業務の省力化，ミスの低減，データ保存を目的として，処理システムを開発した。独自のマークシートを開発し，それをスキャン，解析することで集計を行う。これにより，プレゼン系科目の学生同士の相互評価にも対応できた。 ※2003年9月～継続（2020以降は提出オンライン化で利用停止中）
2．作成した教科書、教材、参考書		
ロボット博士の基礎からのメカトロニクスセミナー	2011年1月18日～	メカトロニクスセミナーの実施のために作成した資料，教材は講演終了後に研究室WEBページで提供しており，一般からも利用できる。 現時点で27+1回分，延べ1500ページを超える資料となっている。 ※2011年1月18日～継続

オンライン講義ノート	2003年9月～	担当する4講義（および旧担当あわせて11科目）の講義ノートをWEB上で作成し，公開している。これにより受講学生の自習，病欠に於ける欠損などを穴埋めすることが可能となったほか，外部からの参照も多く，社会貢献ともなっている。本報告執筆時点で総計700万回の参照があり，“マニピュレータ”“座標変換”などの主要キーワードをネット検索した際にトップクラスの上位に表示される（一般にネットにおける評価が高いことを示す）。そのほかに公開している技術情報と含め，1日平均500人程度の利用者がある。 ※2003年9月～継続
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
中学生の特別授業受け入れ（工学に関わる啓蒙活動（コラボ授業）多賀城市立東豊中学校＋東北学院中学）	2024年8月27日	
ロボット博士の基礎からのメカトロニクスセミナー（仙台市地域連携フェロー活動）	2011年1月18日～	社会活動である仙台市地域連携フェローの活動の一環として，地域のエンジニアのためのメカトロニクスの総合セミナーを企画し，仙台市産業振興事業団を会場に実施している。開発業界においては，自分の専門性を高めることも重要ながら，幅広く技術的知識をもつことが大事であり，周囲の分野との連携のためにも「隣も知る」ことが大事である。その観点から，「技術的雑学」を提供することを目的に様々な講演を行ってきた。本学卒業生も聴講に来ることがある。同内容を地域の企業にも出張講座している(のべ30回以上)。また、ここで確立した講義スタイルを学科科目の講義にも応用している。 ※2011年1月18日～
ロボット教育特別コースの設置（ロボット研究会）	2005年1月～	機械知能工学科ではロボットに関する講義はいくつかあるが，ロボット関連技術は座学では到底学べず，実践が必要である。一方で，卒業研究の時点で学ぼうとしても時間は足りない。そこで，積極的意欲をもった，配属前の1～3年生以下の学生を募集し，研究室への出入り，工具等の使用を許可し，消耗品も一部提供することで，自らロボットを学ぶ機会を提供することとした。これまでに，ロボットコンテストに参加して上位入賞したほか，希望者が研究室に正式に配属となり，技術習得の段階をすぐに越えて本題に入るなど，大きな効果が得られている。このコースを分析し，教育論文にもまとめた。 ※2005年1月～継続（コロナ禍で活動低下中、2023年度に復活作業を開始して数名が実験室に来ている）
出前授業の実施	2003年～	高校・高専からの依頼に応じて，出前授業を行った。テーマは［ロボットをつくる］であり，ロボットの基礎の講義とともに，高校における科目が如何に意義のあるものかを説いた。
知能ロボットコンテストの運営	2000年～	毎年仙台市で6月に開催されている知能ロボットコンテストの運営に深く関与している(2011年は震災の影響で10月開催)。過去に実行委員長も4回務めた(直近は2018年)。本コンテストは中学～大学生の参加が多く，ロボット技術教育の効果もある大会であり，現に，本大会の参加者の中から優れたエンジニアも育っている。上記ロボット研究会も主たる目標は本大会への参加である。 ※2000年1月以前より継続 ※2020,21年度は開催を模索したがコロナ禍で断念

現在の課題・目標	●この20年間の教員としての取り組みを通して、一通りの技術教育のフォーマットを得るに至ったが、現状では「ある程度意欲を持つ者」「かなり意欲を持つ者」には効果が認められるものの、「意欲のない者」「関心のない者」に対しての効果が薄い。担当分野は、現在では機械技術の必須分野であるため、興味ある者を伸ばすことだけにとどまらず、後者に対しても必要知識を身につけさせる必要があり、この改善が必要である。一つには興味をより持ってもらうことであるが、ある程度は強制的に学ばせるための手法の検討も必要と思われる。 ●単位の実質化に伴う、予習復習のエビデンスのある実施形態準備。 ●遠隔授業で導入したオンライン方式の良い点の対面授業への活用（常時ハイブリッド対応・講義映像の提供など） ●講義ノートページのインタラクティブ化、具体的には簡単な練習問題の提示や計算練習を可能とするような改修。 ●技術的専門知識の普及啓蒙および獲得支援。 ●引越の影響が未だに残る。2023年は自身のことよりも全学の学務部副部長として移転・新課程などに関わる業務に時間を優先したこともあって、2024年も学務部副部長のまま学科長兼務となり、まだ引越作業が完了していない。

今年度の進捗状況	●3年前に遠隔化対応のため新たに導入したオンライン併用型の講義スタイルの完成度をあげ、概ね安定した。全員対面の授業でも遠隔システムを使うことで画面の拡大提供、録画提供などを行っている。大学のZoom廃止－GoogleMeet導入の移行の対応の目処もついた。 ●カリキュラム変更に際して、メカトロニクス講義の大幅変更を行い、9年目として継続して様子を見ているが、内容面では安定したと考えられる。他の科目もオンライン化時にコンテンツに修正を加えているが、それも安定を見た。また、次期カリキュラムで科目構成を変更することとし、その内容検討を始めた。 ●単位の実質化に伴う復習の方式として「講義の中で重要であったと考える図とその説明を3点まとめる」を実施し，理解の促進と苦手な者への学修機会の二つの面で一定の成果を得ている。受講者からは、授業評価アンケートなどでも好評価を受けている。この復習とあわせて予習も行うように誘導しており、本年度は3科目で実施した。ただ、復習に比べて予習の程度が弱く感じられた。 ●サーバの更新作業は始めているが、大きめのソフトウエア開発を行う必要があり，その時間を確保できていない。また、先にレポート類のオンライン提出・採点・閲覧システムの構築が必要と考えている。 ●啓蒙活動については，ここ数年間，仙台市地域連携フェロー・仙台市地域企業課題解決マイスターとしての活動を通して，かなりの成果をあげているほか，主に自治体、産業界に種々の貢献を果たしている。企業への出前も継続して実施している。 ●2023年度より全学教養教育科目である「課題探究演習」の担当を始め、2024年も継続し、25人の受講者での実習の体制に目処をつけた。本科目では文系学部の学生を含めて、3次元設計と3次元プリンタによる実習を提供し、目立った成果が得られた。
来年度の進捗目標	●2025年度特例事項：引越の影響からの立て直し（2024年度でも完了しなかった） ●2025年度特記事項：学科長兼学務部副部長(予定、含むLMS更新サポート業務)兼4年グループ主任（および宛職業務）という過負荷状態でも教育の質を維持する。 ●2025年度特記事項：教学系システムの2025年度更新に向けて、移行の支援体制を整え、障害や要支援案件に備える。 ●全体の見通し背景：科目内容についてはほぼ安定したが、担当科目の変更による講義内容の調整を引き続き行う。 ●2020年度に導入したオンラインホワイトボード型の講義を対面授業で実施、ハイブリッド化するための効率化を進める。特に教室ハイブリッドする場合の展開・撤収の迅速化を図る。 ●実質化の手法については今年度の方式を継続するほか、予習の実効性向上を検討する。従来は紙での回収であり、昨年度はPDF提出としたがその手段の効率化を図る。 ●上記について、学生諸君の自習を促す教育面のIT支援が必須となるため，その実装を進める。 ●技術的専門知識の啓蒙活動についてはこれまでの水準を維持する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
身の回りに見つけるメカトロ雑学 第133回～第144回「プラントエンジニア（雑誌）」『身の回りに見つけるメカトロ雑学 第133回～第144回「プラントエンジニア（雑誌）」』	単著	2024年	公益社団法人日本プラントメンテナンス協会	熊谷正朗	pp.各号による-各号による
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
4輪独立駆動型鉄道車両制御のための小型実験機の開発	共同	2024年12月	計測自動制御学会東北支部 60周年記念学術講演会(仙台)	白寄陽明，熊谷正朗	
受動型球面リンク機構を用いた荷台慣性分離機構 Spherical Dish の試作	単独	2024年5月	ロボティクス・メカトロニクス講演会2024(宇都宮)	熊谷正朗	
遊星歯車を用いた差動駆動操舵機構を有する全方向移動車輪ロボットの実装	共同	2024年5月	ロボティクス・メカトロニクス講演会2024(宇都宮)	熊谷正朗，中田竜輔	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	●2022年度に採択された科研費の、玉乗りロボットの動特性の測定に関する研究では学内負荷の高さによって大幅な遅延が生じ、研究期間の延長手続きをした。2026年度内に研究が完了するように進める。これを通してメカトロニクス関連の技術の発展に貢献すること。現時点では教育および大学運営業務に重点を置いており(置かざるを得ない)、研究とのバランスをどのようにするかは課題である。 ●開発した技術成果の学内外への還元の方法。
今年度の進捗状況	●本年度も学内用務に多くの時間を割かざるを得なかったため，研究に回せる時間が大幅に減り、進捗は芳しくない。とくに、学務部副部長と学科長と3年グループ主任の兼務は負荷が高い。 ●学生原案による卒業研究では種はできているが、それを学術レベルまで育てるには至っていない。 ●現状では学会等での学術発表にとどまっており、広く一般業界向けへの提示が不十分である。技術の総論的な面は知己起業課題解決マイスター事業、および学外から依頼の技術講演を通して地域への還元を行っている。 ●研究発表にはつながりにくいが、パイプオルガン模型の開発を行っている。 ●研究の根幹に関わる(現時点で公表すべきではない)ものではない、製作した要素技術などについては、SNSを通じて比較的高頻度に紹介し、関心を得ている。
来年度の進捗目標	●球面誘導モータの開発は科研費の支援期間終了後も効率改善に挑む。 ●科研費研究への取り組み。 ●パイプオルガンの開発は引き続き継続する(25年度、学内共同研究予定)。 ●教育コンテンツを有するサーバのリプレイスとコンテンツ管理の改善を行う。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2022年度～2025年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年	仙台市各種委員：第70回仙台市児童・生徒理科作品展 審査員 委員
2024年	知能ロボットコンテスト運営委員 委員
2024年	宮城県および仙台市のICT，メカトロニクス関連分野の民間企業向け補助金の審査委員(非公開) 補助金申請の評価・審査を行った。
2023年4月～	仙台市地域企業課題解決マイスター (マイスター)

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

●学務部 副部長(全学，2023-2024年度)
●機械知能工学科長(2024-2025年度)
●教学系システム更新に伴うLMSサポートチーム(リーダー)

2024年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	教授	氏名	斎藤　修	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業内容充実のためのプリント作成	2024年4月1日～2025年3月31日	
実験において専門知識の内容理解のためのプリント作成、添削指導およびプレゼンテーション方法の指導	2024年4月1日～2025年3月31日	
授業内容理解のための添削指導	2024年4月1日～2025年3月31日	
学生による相互評価の実施	2024年4月1日～2025年3月31日	学生による相互評価の実施
大学院博士（前期）課程学生の講義用資料の作成	2024年4月1日～2025年3月31日	
卒業研究ゼミの開催	2024年4月1日～2025年3月31日	
学生による授業評価の実施	2024年4月1日～2025年3月31日	
チューターおよびオフィスアワーによる学生への指導	2024年4月1日～2025年3月31日	
2．作成した教科書、教材、参考書		
基礎からの材料加工法プリント資料作成	2024年4月1日～2025年3月31日	
機械知能工学実験テキスト作成	2024年4月1日～2025年3月31日	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	

今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2024年4月		社団法人　精密工学会東北支部商議員 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	教授	氏名	星　朗	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
毎回の講義の内容に関して，復習問題ならびに予習課題などを次週までの宿題として課すことにより，自学自習する習慣を付けるようにしている。	2021年～	「基礎熱力学」，「応用熱力学」，「工学総合演習Ⅰ」において，毎回の講義に関する復習問題ならびに予習課題を，自学自修してもらうようにしている。次週の講義で解答例を解説するとともに，宿題を回収・評価している。
講義の最後に，その日の講義内容の理解度をチェックする目的でQuiz（小テスト）を実施している。	2021年～	「基礎熱力学」，「応用熱力学」，「工学総合演習Ⅰ」ならびに「応用熱工学特論」において，講義中に説明した内容についてQuizの問題解法を通じて理解度を確認している。「環境エネルギー工学」においては，「eco検定」の受検にも対応できる内容でQuizを実施している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
その日の講義で扱う例題，Quiz，復習問題ならびに予習課題を，A4 用紙1枚の両面に印刷したプリントを毎講義において用意している。また，講義資料をmanaba上に公開している。	2022年4月～	「基礎熱力学」，「工学総合演習Ⅰ」において，講義で扱う例題，Quiz，復習問題ならびに予習課題をA4 用紙1枚に纏めて，毎時間に配布するようにしている。「応用熱力学」，「環境エネルギー工学」ならびに「応用熱工学特論」については，講義資料および講義で扱う例題をmanaba上に公開しており，自ら予習・復習できるようにしてある。
その日の講義で扱う例題，Quiz，復習問題ならびに予習課題を，講義資料としてmanaba上に公開している。	2020年4月～	「基礎熱力学」，「工学総合演習Ⅰ」，「応用熱力学」，「環境エネルギー工学」ならびに「応用熱工学特論」において，講義で扱う例題，Quiz，復習問題ならびに予習課題を講義資料としてmanaba上に公開しており，自ら予習・復習できるようにしてある。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
日本機械学会2024年度技術と社会部門講演会において，「熱電発電システムへの潜熱蓄熱技術の応用 ―マンニトール−水混合物質の融点と融解潜熱量の検討―」というタイトルで修士論文の成果の一部を講演した。	2024年11月16日	
日本機械学会2024年度年次大会において，「熱電発電システムへの潜熱蓄熱技術の応用　－マンニトール−水混合物質の熱物性－」というタイトルで修士論文の成果の一部を講演した。	2024年9月10日	
日本機械学会エンジンシステム部門　第3回スターリングサイクル機器の性能向上・用途拡大に関する調査研究会において「スターリングエンジン教材を用いる工学教育を振り返る」というタイトルで講演した。	2024年7月13日	
4．その他教育活動上特記すべき事項		
日本機械学会　技術と社会部門主催「第17回　新☆エネルギーコンテスト」において学生のアイディアを投稿し、株式会社アド・ソアー賞を受賞した。	2024年10月19日	

現在の課題・目標	①卓上ミニ実験，測定器などの実物に触れることを通して，体感的に講義内容に興味を持ってもらい，理解度を深めてもらうようにする。 ②毎回の講義で実施するQuiz，自学自習のためのHome Work等を充実させる。
今年度の進捗状況	上記目標①については，メインの実施科目である「基礎熱力学」において、新キャンパスの講義室の構造上から実施には至らず残念な結果であった。大学院講義「応用熱工学特論」では、少人数で対面授業が可能であったため、実物を用いたミニ実験を行うことができた。 上記目標②については、例題，Quiz，復習問題ならびに予習課題を講義資料として配布することで、理解力の向上に繋がったものと思う。さらに，manaba上に講義資料や講義中の例題・解答などを公開したことにより，予習・復習の自学自修ができるようになったものと考える。
来年度の進捗目標	上記目標①に関しては，良い成果に繋がることが期待されるので，AV機器を効果的に活用して大講義室でも実施可能な新しい教材を準備するなどして，内容をさらに充実させていきたい。 上記目標②に関しては，予習・復習も含めた形で自学自習できるHome Workの充実を，さらに図っていきたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
熱電発電システムへの潜熱蓄熱技術の応用―マンニトール-水混合物質の融点と融解潜熱量の検討―	共同	2024年11月	日本機械学会　合同講演会　技術と社会の関連を巡って：過去から未来を訪ねる(函館)	◎野村 亮太, 星 朗, 大久保 英敏	
マンニトール－水混合物質を利用した流動性のある潜熱蓄熱材	共同	2024年10月	The 45th Japan Symposium on Thermophysical Properties(長岡市)	◎星　朗, 野村亮太, 大久保英敏	
熱電発電システムへの潜熱蓄熱技術の応用－マンニトール-水混合物質の熱物性－	共同	2024年9月	日本機械学会2024年度年次大会(愛媛)	◎野村 亮太, 星 朗, 大久保 英敏	
江川太郎左衛門英龍から韮山反射炉を考える	共同	2024年7月	日本技術史教育学会2024年度総会　研究発表講演会(東京)	◎星　朗, 大久保英敏	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	①外部研究者との共同研究，外部資金の調達などを目指す。 ②1編/年の学術論文の発表，1回/年の国際会議発表を目標とする。 ③地域に根ざした研究テーマを模索する。
今年度の進捗状況	上記目標①については，外部研究者との共同研究に着手し，外部資金の調達に至った。 上記目標②については，1編の学術論文が採択され、さらに1編が投稿中である。国際会議発表は学内業務ならびに講義が多忙のため，残念ながらできなかった。 上記目標③については，鳴子の温泉旅館との共同研究が中断している。
来年度の進捗目標	上記目標①に関しては，現在の企業と共同研究を継続予定である。 上記目標②に関しては，学術論文、ならびに国際会議での発表を計画している。 上記目標③に関しては，新規テーマを開拓していきたい。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年2月～	日本熱物性学会 会員
2024年4月～2026年3月	日本機械学会 環境工学部門運営委員
2023年4月～	日本伝熱学会 東北支部長
2017年4月～	日本技術史教育学会 会員
2017年4月～	日本冷凍空調学会 会員
2016年12月～	日本機械学会 フェロー
2016年6月～	宮城県工業高等学校学校評議員(宮城県工業高等学校学校評議員)
2008年6月～	自動車技術会 フェロー
1990年4月～	日本太陽エネルギー学会 会員
1990年4月～	自動車技術会 会員
1990年4月～	日本伝熱学会 会員

1990年4月～		日本機械学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	教授	氏名	松浦　寛	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
LMS（Moodle）を活用したeラーニングシステムの構築（機械設計学，機構学，機械知能工学実験1）をおこなった．	2020年4月～	資料の円滑な配布が可能となった．学内からのアクセスのみ対応できる出席管理を可能とした．予習復習課題の提出を時間単位で把握でき，提出内容をソフトでコピー＆ペーストチェックソフトを使うことでコピペ率を出すようにしたことで成績上位者と下位者で明らかな相関が得られた．これらを教育系学会で発表した．
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
レーザー調理器における冷却方法の改良	共同	2025年3月	日本機械学会第55回東北学生会卒業研究発表講演会(八戸工業大学)	高橋秀，菅原颯斗，赤間洸太，浅沼昇輔，松浦寛	
レーザー調理器におけるシュミレーションの有用性評価	共同	2025年3月	日本機械学会第55回東北学生会卒業研究発表講演会(八戸工業大学)	目崎碧都，赤間洸太，浅沼昇輔，松浦寛	
ワイヤ特化型ロボットアームの開発	共同	2025年3月	日本機械学会第55回東北学生会卒業研究発表講演会(八戸工業大学)	菅原柚稀，佐藤 慎之助，千賀 颯斗，松浦寛	
RGB光を用いた食用油劣化診断装置の改良	共同	2025年3月	日本機械学会第55回東北学生会卒業研究発表講演会(八戸工業大学)	伊藤恭生，濵髙有輝，松浦寛	
熱可塑性樹脂砥石を用いたCMG加工条件の最適化	共同	2025年3月	日本機械学会第55回東北学生会卒業研究発表講演会(八戸工業大学)	木村夏輝，足達拓光，木村亮馬，松浦寛	
Siウエハを対象にした不織布砥石の研削性能評価	共同	2025年3月	日本機械学会第55回東北学生会卒業研究発表講演会(八戸工業大学)	大内陸，南條健人，佐々木拓巳，塔ケ崎巧，松浦寛，相澤崇史	
RGB光を用いた食用油の劣化診断装置の改良	共同	2024年9月	精密工学会秋季大会学術講演会(長岡科学技術大学)	濵髙有輝・松浦　寛・佐々木洸人・濱本将一・木村亮馬	

LN結晶の鏡面加工に使用可能な熱可塑性樹脂軸付き砥石の開発と性能評価	共同	2024年8月	砥粒加工学会ABTEC2024(東京都立大学南大沢キャンパス)	菅井悠人, 菅原 颯斗, 小幡望美, 松浦寛	
不織布砥石を用いた半導体材料表面の研削加工に関する研究	共同	2024年8月	砥粒加工学会ABTEC2024(長岡科学技術大学)	佐々木拓巳, 南條健人, 塔ケ崎巧, 松浦寛, 國枝泰 博, 相澤崇史	
CMG加工装置の開発と性能評価	共同	2024年8月	砥粒加工学会ABTEC2024(長岡技術科学大学)	足達拓光, 南條健人, 木村亮馬, 松浦寛	
高出力レーザを用いた加工装置の開発及び性能評価	共同	2024年8月	砥粒加工学会ABTEC2024(長岡技術科学大学)	赤間洸太, 菅原颯斗, 浅沼昇輔, 佐藤慎之助, 松浦寛	
内面的要素によるグループワーク及び発表成果への影響に関する研究	共同	2024年8月	コンピュータ利用教育学会PCカンファレンス(東京都立大学 南大沢キャンパス)	菅井悠人・関村明迪・千賀颯斗・松浦寛	
学力平均化されたグループ学習における機械設計学の成績比較	共同	2024年8月	コンピュータ利用教育学会PCカンファレンス(東京都立大学 南大沢キャンパス)	佐久間大・佐々木拓巳・南條健人・松浦寛	
アーバンキャンパス化が及ぼす学生の学習態度への影響	共同	2024年8月	コンピュータ利用教育学会PCカンファレンス(東京都立大学 南大沢キャンパス)	赤間洸太・足達拓光・濵高有輝・菅原颯斗・松浦寛	
Wi-Fiセンシングを屋外異常検知へ応用するための一検討 ～ 農作物の鳥獣被害対策に向けて ～	共同	2024年7月	電子情報通信学会技術研究報告(北海道)	◎鈴木 利則, 森島 佑, 小倉 振一郎, 松浦 寛	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2025年度	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2022年度～2024年度	共同(研究代表者)	
その他の補助金・助成金	2021年度～2024年度	共同(研究分担者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2025年3月～	砥粒加工学会 理事
2024年～	精密工学会　超砥粒ホイールの研削性能に関する研究専門委員会 監事
2014年～	精密工学会東北支部 商議員
2014年～	精密工学会　精密工学会東北支部　商議員 会員
2011年～	一般社団法人光産業技術振興協会　戦略技術策定委員会委員 委員
2008年～	一般社団法人光産業技術振興協会　JIS規格　光受動部品標準化部会 委員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	教授	氏名	矢口　博之	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	講義における教育研究等の質の向上や改善のために，以下の2項目について，前年度における授業評価の評点を上回るように努力する． ① 担当授業科目（2年生～3年生） ② 卒業研究指導（4年生）
今年度の進捗状況	今年度の前期については，すべての授業科目において，講義アンケートの評価が，前年度を下回った．しかし，後期については評価アンケートの評価がかなり上回る結果となった．
来年度の進捗目標	前期で評価を下げた科目について，綿密に講義内容をチエックして次年度の講義に臨むとともに，現在評価を下げた理由を自己分析している．しかし，今年度も，アンケートの母数が非常に低いうえ，自由記載欄への記入が全くなくなり，自己分析も困難な状態である．

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	現在，以下の内容に関する研究をメインに行っている ① 新たな振動型磁気アクチュエータの動作原理の確立 ② アクチュエータを構成する振動コンポーネントの非線形振動解析 ③ 位相制御型アクチュエータの開発 ④ 電磁振動ポンプの開発 ⑤ 管外検査用アクチュエータシステムの開発 ⑥ 駆動周波数の異なるアクチュエータの動作原理の確立
今年度の進捗状況	上記①～④のアクチュエータおよびポンプにおいて，本年度の進捗状況は，約55％である．更に⑤のアクチュエータシステムについては，5％未満となる．更に，新規テーマの⑥については，今後精力的に取り扱う．
来年度の進捗目標	次年度は①から④までのテーマについての完成度を90％まで，⑤のアクチュエータシステムについては，試行錯誤で実機を試作し，完成度を50％程度まで引き上げたい．

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2024年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	准教授	氏名	岡田　宏成	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
実験実習科目における新規実験テーマの立ち上げ	2024年	1年生対象の自然科学実験ファンダメンタルズにおいて，重力加速度の測定に関する新たな実験を新規に立ち上げた．実験に使用する器具を自作し，装置類を組み上げるとともに，実験テキストやスライドの作成を行った．
復習演習のオンライン化	2021年～	
予習レポートのオンライン化	2021年～	
実験課題のオンライン化	2020年～	自然科学実験ファンダメンタルズの物理学実験テーマに関するスライドと動画を作成して，オンタイム/オンデマンドでの受講を可能にした．
講義ノートのスライド化	2020年～	オンライン授業に対応するために講義ノートをスライド化した．それに伴って図や表も追加してより充実した講義内容に改善した．
manabaを利用したオンライン学修	2020年～	manabaの小テスト，ドリル機能を利用して講義内容の予習復習を促すための課題の提出を行った．
工学基礎教育センター利用の促進	2020年～	小テストなどの成績が不振な学生に対し，工学基礎教育センター学習相談コーナーを利用する補習レポートを課した．
レポートのプレゼンテーション化	2020年～	毎回の講義内容に関するレポート課題を，書画カメラやプロジェクターを用いたプレゼン形式で評価した．そのための課題内容や評価方法を前年度の方法より改善した．
復習用のパワーポイント資料の作成	2020年～	プロジェクターを使用した復習用パワーポイント資料を作成して，毎回の講義の冒頭で，前回の講義内容を視覚的に復習した．
予習・復習を促すための講義毎の課題の作成とその評価	2020年～	今回の講義内容に関する復習問題と，次回の講義内容に関する予習問題をレポートの課題として毎回提出した．講義の冒頭で復習問題の解説を行い，予習問題に沿った内容で講義を進めた．
2．作成した教科書、教材、参考書		
実験科目における新規実験テーマの教材作成	2024年	1年生対象の自然科学実験ファンダメンタルズにおいて，新規実験である「自由落下による重力加速度の実測」を立ち上げ，落下運動と重力加速度の関係を理解するための実験器具を自作した．また，実験指導を行うためのテキストやスライド，データ解析に用いるデータシートを作成した．
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）

G. 学会における研究発表

Fe-Mn-Ga合金における30at%Ga周辺の結晶構造特性と磁気特性	共同	2025年3月	日本金属学会2025年春期講演大会(東京都立大学南大沢キャンパス)	北原壮太、岡田宏成、淡路智	
FCC型Fe50Mn25Ga25の構造特性と磁気特性に与えるFe, Mn置換効果	共同	2024年9月	日本金属学会2024秋期講演大会(大阪大学豊中キャンパス)	北原壮太、岡田宏成、淡路智	
Fe and Mn substitution effects on FCC-type Fe50Mn25Ga25 alloy	共同	2024年8月	The 5th International Symposium on Advanced Magnetic Materials and Applications(Dong Hoi City, Quang Binh Province, Republic of Viet Nam)	Sota Kitahara, Hironari Okada, Satoshi Awaji	
Structural and Magnetic Properties on Fe-rich Fe-Mn-Ga alloys	共同	2024年7月	International Conference on Magnetism 2024(Bologna, Italy)	Hironari Okada, Sota Kitahara	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)（一般）	2023年度～2025年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2008年～	日本高学力学会 会員
2004年～	日本磁気学会 会員
2003年～	日本物理学会 会員
1999年～	日本金属学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	准教授	氏名	佐瀬　一弥	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
プレゼン動画作成による全受講者参加型オンデマンド発表会	2021年9月1日～	
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	数学科目（主に線形代数学）におけるデジタル技術を用いた授業改善
今年度の進捗状況	線形代数学の担当は本年度が初めてであった。本年度の実施では以下の工夫を行った。 (1)デジタルノートの利用：授業中に手を動かして計算することが重要な科目であるため、教員が板書してそれを写させる作業は必須と考えていた。しかし、黒板は視認性や記録に課題があるため、タブレット上での手書きデジタルノートを活用した。ノートは授業後に期限付きで共有した。 (2)授業録画と配信：授業の様子はビデオカメラで録画し、授業後に配信した。これにより、復習の補助だけでなく欠席者への配慮も実現できた。 (3)LMSによるレポート：LMSでの小テストやレポート機能を活用した。これにより、採点の作業軽減を達成し、十分な量の問題演習に取り組ませることができた。 (4)グラフ描画ツールの活用：線形代数では図形的な理解も重要である。グラフ描画ツールを活用して、視覚的な理解を補助した。 以上の取り組みはおおむね反応が良好で今後も続ける予定である。ただし、担当初年ということもあり、授業のペース配分や内容の分量には調整の余地がある。また、予習を取り組ませる必要性も残っている。
来年度の進捗目標	来年度は前年度の課題を踏まえ、また、今後のLMS変更への対応を念頭に、以下の改良を行う。 (1)予習促進：予習の必要性について言及する回数を増やすほか、予習用の課題を追加することなどを検討し実践する。 (2)新LMSへの移行：授業を進めつつ、新しいLMSへの移行を進める。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Surgical skill analysis using explainable AI in endoscopic sinus surgery	共著	2025年1月	Proceedings of 2025 IEEE/SICE International Symposium on System Integration (SII)	Kaito Yamada, Masanobu Suzuki, Kou Miyaji, Koki Ebina, Kazuya Sase, Teppei Tsujita, Xiaoshuai Chen, Takashige Abe, Shunsuke Komizunai, Yuji Nakamaru, Taku Senoo, Akihiro Homma, Atsushi Konno	pp.287-291
Real-Time Calculation of Strain Energy Density in a Fingertip for Haptic Distribution Rendering	共著	2025年1月	Proceedings of 2025 IEEE/SICE International Symposium on System Integration (SII)	Kazuya Sase, Haruki Kato, Hikaru Nagano, Masashi Konyo	pp.446-451

Surgical technique analysis using dynamic measurement of surgical instruments for practical laparoscopic surgery training	共著	2025年1月	Proceedings of 2025 IEEE/SICE International Symposium on System Integration (SII)	Lingbo Yan, Takashige Abe, Koki Ebina, Masafumi Kon, Madoka Higuchi, Kiyohiko Hotta, Jun Furumido, Naoya Iwahara, Shunsuke Komizunai, Teppei Tsujita, Kazuya Sase, Xiaoshuai Chen, Yo Kurashima, Hiroshi Kikuchi, Haruka Miyata, Ryuji Matsumoto, Takahiro Osawa, Sachiyo Murai, Toshiaki Shichinohe, Soichi Murakami, Taku Senoo, Masahiko Watanabe, Atsushi Konno	pp.271–274
脳神経外科手術模擬のためのくも膜下腔3Dモデルの作成手法の提案	共著	2024年8月	計測自動制御学会論文集, 60(8)	陳 暁帥, 高橋 優里, 加藤 萌喜, 須田 智輝, 澁谷 紗也華, 佐瀬 一弥, 辻田 哲平, 岡 和彦, 近野 敦	pp.476–484
Development of a System for Determining Technique Level of Vascular Anastomosis Using Hand Motion	共著	2024年8月	Journal of Robotics and Mechatronics, 36(4)	Xiaoshuai Chen, Taro Shoji, Ryosuke Kowatari, Koki Ebina, Yoshifumi Kobayashi, Moeki Kato, Hinaha Kabasawa, Taisei Suzuki, Kazuya Sase, Teppei Tsujita, Shunsuke Komizunai, Kazuhiko Oka, Atsushi Konno	pp.801–812
A surgical instrument motion measurement system for skill evaluation in practical laparoscopic surgery training	共著	2024年6月	PLoS one, 19(6)	Koki Ebina, Takashige Abe, Lingbo Yan, Kiyohiko Hotta, Toshiaki Shichinohe, Madoka Higuchi, Naoya Iwahara, Yukino Hosaka, Shigeru Harada, Hiroshi Kikuchi, Haruka Miyata, Ryuji Matsumoto, Takahiro Osaa, Yo Kurashima, Masahiko Watanabe, Masafumi Kon, Sachiyo Murai, Shunsuke Komizunai, Teppei Tsujita, Kazuya Sase, Xiaoshuai Chen, Taku Senoo, Nobuo Shinohara and Atsushi Konno	pp.1–24

Surgical skill analysis focused on tissue traction in laparoscopic wet lab training	共著	2024年6月	Surgery Open Science, 21	Koki Ebina, Takashige Abe, Madoka Higuchi, Kiyohiko Hotta, Jun Furumido, Naoya Iwahara, Taku Senoo, Shunsuke Komizunai, Teppei Tsujita, Kazuya Sase, Xiaoshuai Chen, Yo Kurashima, Hiroshi Kikuchi, Haruka Miyata, Ryuji Matsumoto, Takahiro Osawa, Sachiyo Murai, Atsushi Konno, Nobuo Shinohara	pp.7-13
Validation and motion analyses of laparoscopic radical nephrectomy with Thiel-embalmed cadavers	共著	2024年	Current Problems in Surgery, 61(10)	Lingbo Yan, Koki Ebina, Takashige Abe, Masafumi Kon, Madoka Higuchi, Kiyohiko Hotta, Jun Furumido, Naoya Iwahara, Shunsuke Komizunai, Teppei Tsujita, Kazuya Sase, Xiaoshuai Chen, Yo Kurashima, Hiroshi Kikuchi, Haruka Miyata, Ryuji Matsumoto, Takahiro Osawa, Sachiyo Murai, Toshiaki Shichinohe, Soichi Murakami, Taku Senoo, Masahiko Watanabe, Atsushi Konno and Nobuo Shinohara	pp.101559
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
3D スキャナを用いた個体別手モデルの作成と寸法差による見た目の印象	共同	2024年	ロボティクス・メカトロニクス講演会2024(日本)	細谷悠真，小野寺玲偉，佐瀬一弥	
個体別指モデルによる接触反力と接触面積の個人差再現の試み	共同	2024年	ロボティクス・メカトロニクス講演会2024(日本)	小野寺玲偉，加藤明樹，佐瀬一弥，永野光，昆陽雅司	
内視鏡下副鼻腔手術における機械学習を用いた手術技量の数値化	共同	2024年	ロボティクス・メカトロニクス講演会2024(日本)	山田海俊，鈴木正宣，宮路洸，海老名光希，佐瀬一弥，辻田哲平，陳暁帥，安部崇重，小水内俊介，中丸裕爾，妹尾拓，本間明宏，近野敦	
3 次元指先簡易解剖学モデルにおける皮下 SED 分布の妥当性評価	共同	2024年	ロボティクス・メカトロニクス講演会2024(日本)	加藤明樹，佐瀬一弥，永野光，昆陽雅司	

外傷処置遠隔支援システムの開発	共同	2024年	ロボティクス・メカトロニクス講演会2024(日本)	青木大地, 村上壮一, 小水内俊介, 佐瀬一弥, 辻田哲平, 陳暁帥, 安部崇重, 倉島庸, 妹尾拓, 七戸俊明, 金井理, 近野敦	
腹腔鏡手術カダバートレーニングにおける機械学習を用いた術者技量評価システムの開発	共同	2024年	第42回日本ロボット学会学術講演会(日本)	晏凌波, 安部崇重, 海老名光希, 今雅史, 堀田記世彦, 渡辺雅彦, 七戸俊明, 樋口まどか, 村井祥代, 小水内俊介, 辻田哲平, 佐瀬一弥, 陳暁帥, 妹尾拓, 篠原信雄, 近野敦	
データ駆動圧力分布レンダリングのためのMoCapを用いたデータ収集	共同	2024年	ハプティクス研究委員会第33回研究会(日本)	小野寺玲偉, 佐瀬一弥, 永野光, 昆陽雅司	
内視鏡下副鼻腔手術における段階別技量評価手法の検討	共同	2024年	第25回 計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(日本)	山田海俊, 鈴木正宣, 宮路洸, 海老名光希, 佐瀬一弥, 辻田哲平, 陳暁帥, 安部崇重, 小水内俊介, 中丸裕爾, 妹尾拓, 本間明宏, 近野敦	
篤志献体を用いた腹腔鏡手術トレーニングにおける機械学習による手術技量評価と説明可能AIによる結果説明の試み	共同	2024年	第25回 計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(日本)	晏凌波, 安部崇重, 海老名光希, 今雅史, 堀田記世彦, 渡辺雅彦, 七戸俊明, 樋口まどか, 村井祥代, 小水内俊介, 辻田哲平, 佐瀬一弥, 陳暁帥, 妹尾拓, 近野敦	
術中超音波画像を用いた完全埋没型腎腫瘍の三次元形状推定方法の検討	共同	2024年	第25回 計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(日本)	加藤 萌喜、川田 諒、近野 敦、小水内 俊介、岡 和彦、辻田 哲平、佐瀬 一弥、小林 吉文、陳 暁帥	
腎腫瘍摘出手術術中超音波画像における腫瘍リアルタイム検出のための深層学習モデルの応用	共同	2024年	第25回 計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(日本)	川田 諒、加藤 萌喜、小林 吉文、佐瀬 一弥、辻田 哲平、小水内 俊介、近野 敦、岡 和彦、陳 暁帥	
腹腔鏡下腎腫瘍摘出手術支援における複合現実技術による臓器の変形・変位の提示	共同	2024年	第25回 計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(日本)	菊地 俊哉、小林 吉文、加藤 萌喜、近野 敦、辻田 哲平、佐瀬 一弥、小水内 俊介、岡 和彦、陳 暁帥	
腹腔鏡手術ナビゲーションの開発を目的とした臓器重畳表示のための位置合わせ手法の提案	共同	2024年	第25回 計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(日本)	小林 吉文、近野 敦、佐瀬 一弥、辻田 哲平、小水内 俊介、岡 和彦、加藤 萌喜、川田 諒、陳 暁帥	
皮膚の機械的挙動の触覚情報符号化	共同	2024年	第25回 計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(日本)	山形 修平、石塚 裕己、佐瀬 一弥、大城 理	
指腹へのデータ駆動触覚レンダリングに向けた補間に基づく圧力分布推定	共同	2024年	第25回 計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(日本)	小野寺 玲偉、佐瀬 一弥、永野 光、昆陽 雅司	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					

現在の課題・目標	触覚提示技術の基礎研究と応用展開。特に手指における時空間的な皮膚感覚の提示についての研究を行い、指の解剖学的構造を考慮した実時間変形シミュレーションやデータ駆動のアプローチを取り入れる。
今年度の進捗状況	指の解剖学的構造を考慮した力学モデルを作成し、実時間変形シミュレーションを実装することで目的を達成した（国際会議で受賞）。データ駆動のアプローチについてもプロトタイプが完成し、国際会議で発表した。
来年度の進捗目標	機械学習の技術をより積極的に取り入れ、データ駆動手法の精度を向上させる。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2024年度～2027年度	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2022年度～2024年度	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(A)	2022年度～2024年度	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 若手研究	2022年度～2025年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年10月	サイエンスデイin多賀城2024に出展
2024年7月	サイエンスデイinララガーデン長町2024に出展
2024年7月	サイエンスデイ2024に出展
2024年6月～2024年6月	第36回知能ロボットコンテスト運営補助 運営参加・支援
2020年1月～	日本バーチャルリアリティ学会 ハプティクス研究委員会 幹事
2018年3月～	日本バーチャルリアリティ学会 ハプティクス研究委員会 委員
2018年1月～	計測自動制御学会 触覚部会 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	准教授	氏名	濱西　伸治	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
東北文化学園大学　知能情報システム特別講義 「スポーツバイオメカニクスの最前線」	2024年4月25日	

現在の課題・目標	オムニバス形式で担当したオンライン授業において，同科目を履修する多数のクラスに同じ講義動画を用いるのではなく，あるクラスのレポートの回答内容を反映させた講義動画を別のクラスに公開することで，高い教育効果を図る．
今年度の進捗状況	担当した授業回では，同じ週に5クラス分の動画を公開する必要があったため，準備の煩雑さから，全てのクラスで同じ講義動画を用いざるを得なかった．
来年度の進捗目標	来年度も同様の形式で講義を担当することから，講義内容についてはどのクラスも共通の動画を用い，レポート提示部分の動画をクラスごとで変えることで，対応できないか検討中である．その際，クラス間でのレポートの難易度や公平性については慎重に検討する．

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
剣道面防具用衝撃低減サポーターの評価と試装	単独	2024年9月	第56回　日本武道学会(福岡市)	◎濱西伸治	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	″「新生児耳疾患スクリーニング装置の開発と新生児外耳・中耳モデルを用いたシミュレーション」 中耳の各部位のパラメータ（ヤング率や密度など）を変化させて，実際の新生児における動特性と同様の結果となるように解析を行う． 「コンタクトスポーツ難聴予防のための衝撃低減サポータの提案」 アメフト用のサポータについては，東北大学アメフト部ヘッドコーチの助言・協力を得ながら，ヘルメットに組み込む予定である．また，剣道用のサポーターについては，濱西が発起人となり立ち上げた，強豪大学の監督・指導者とともに『未来の剣道に関する研究懇話会』を引き続き継続し，情報交換を行う． 「簡易型耳管開放症検出装置の開発」 モデルの各部位のパラメータ（ヤング率・粘性）と耳管開放症の重症度との関係を明らかにする．″

今年度の進捗状況	″「新生児耳疾患スクリーニング装置の開発と新生児外耳・中耳モデルを用いたシミュレーション」 新生児の聴覚器官のサイズの個人差が外耳・中耳動特性に及ぼす影響をシミュレーションにより実現することに成功した．また，実際の装置では，これまでの周波数掃引型の刺激（スイープ音）ではなく，様々な周波数を同時に出力する「チャープ音」を用いることで，計測時間の劇的な短縮化に成功した． 「コンタクトスポーツ難聴予防のための衝撃低減サポータの提案」 アメフトのヘルメット用のサポータについては，3Dプリンターにより試作したサポーターに力センサを組み込み，過大な衝撃を検知・警告するシステムを試作することに成功した．また，剣道用のサポーターについては，「蜘蛛の巣」の形状をしたサポーターを剣道の面防具の内部に組み込み，竹刀による打撃時に，サポーターを用いない場合に比べて70％近くの衝撃低減を実現した． 「簡易型耳管開放症検出装置の開発」 これまで本研究室で取り組んでいた「有限要素法による鼻咽頭モデル」と組み合わせることにより，「鼻咽頭・耳管モデル」の構築に成功した．各部位のパラメータ（ヤング率・粘性）と耳管開放症の重症度に加え，飲み込み動作に困難と伴う嚥下障害の重症度についても解析が可能となった．″
来年度の進捗目標	″「新生児耳疾患スクリーニング装置の開発と新生児外耳・中耳モデルを用いたシミュレーション」 上記の成果を論文としてまとめ，投稿する予定である． 「コンタクトスポーツ難聴予防のための衝撃低減サポータの提案」 上記の進捗状況で述べたような優れた衝撃低減性能を有するサポーターは，スポーツ界に与えるインパクトが非常に大きく，特許取得を進めながら国内外に広く公表することで，近い将来のスポーツ関連企業との共同研究・開発の可能性を探っていきたい． 「簡易型耳管開放症検出装置の開発」 本研究室で開発し，現在は東北大学病院で使用されている上記装置から得られたデータと，モデルによるシミュレーションとの比較により，装置の有用性およびモデルの妥当性を検討したい．″

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2018年～	日本武道学会 会員
2003年4月～	日本機械学会　バイオエンジニアリング部門 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	五橋キャンパスへの移転後も，「工学部剣道部」として活動を継続しているが，部員の所属を工学部以外の学部にも広げて部員の確保を図る．個人としては，剣道七段の合格を目指す．″
今年度の進捗状況	工学部以外の部員が多数入部し，工学部と他学部の割合はほぼ半数ずつとなった． また，個人としては5月に剣道七段の審査に合格した．
来年度の進捗目標	東北学生剣道連盟への加盟については，「一大学一団体」の原則に則り，工学部剣道部の加盟は認められていない．そのため，現在は一般団体として活動を行っている．参加可能な一般向けの大会での上位入賞を目指す．

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	准教授	氏名	北條　智彦	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	材料に関する興味を持ってもらう. 材料系科目の受講生を増やす. 卒業研究の研究室配属希望者を増やす.	
今年度の進捗状況	材料工学の授業では最新の情報を提供できるように授業のスライドを更新した. 材料系科目の受講生増加は今後も課題である. 卒業研究の研究室配属の希望者は定員以上であった.	
来年度の進捗目標	材料に関する興味を持ってもらえるように授業のスライドを更新する.	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Stress and Plastic Strain Partitioning Behaviors and Those Contributions to Martensitic Transformation of Retained Austenite in Medium Manganese and Transformation-Induced Plasticity-Aided Bainitic Ferrite Steels	共著	2025年2月	日本鉄鋼協会, ISIJ International, 65(2)	Tomohiko Hojo, Motomichi Koyama, Bakuya Kumai, Yutao Zhou, Yuki Shibayama, Ayumi Shiro, Takahisa Shobu, Hiroyuki Saitoh, Saya Ajito, Eiji Akiyama	pp.284-296
Grain boundary nanochemistry and intergranular corrosion of Fe-0.01 wt.%P alloy: Roles of elemental segregations and misorientation	共著	2025年1月	Elsevior, Acta Materialia, 283	Saya Ajito, Kazuya Tojima, Hiroshi Kakinuma, Kohei Ikeda, Yongjie Zhang, Tomohiko Hojo, Goro Miyamoto, Motomichi Koyama, Tadashi Furuhara, Eiji Akiyama	pp.
Role of retained austenite and deformation-induced martensite in 0.15C-5Mn steel monitored by in-situ neutron diffraction measurement during tensile deformation	共著	2024年12月	日本鉄鋼協会, ISIJ International, 64(14)	Takayuki Yamashita, Satoshi Morooka, Wu Gong, Takuro Kawasaki, Stefanus Harjo, Tomohiko Hojo, Yoshitaka Okitsu, Hidetoshi Fujii	pp.2051-2060
Stress-Controlled Hydrogen Embrittlement Failures for U-bend High-Strength Steel	共著	2024年9月	Elsevior, International Journal of Hydrogen Energy, 88	Yuki Shibayama, Tomohiko Hojo, Motomichi Koyama, Eiji Akiyama	pp.1010-1016
Evaluation of Shear-Punched Surface Layer Damage in Ultrahigh-Strength TRIP-Aided Steels with Bainitic Ferrite and/or Martensite Matrix Structure	共著	2024年9月	MDPI, Metals, 14(9)	Koh-ichi Sugimoto, Shoya Shioiri, Junya Kobayashi, Tomohiko Hojo	pp.

超高強度QP-TRIP鋼板の温間V曲げおよび水素脆化特性	共著	2024年8月	日本鉄鋼協会, 鉄と鋼, 110(10)	北條智彦, 長坂明彦, 田畑千早, 柴山由樹, 小林純也, 秋山英二	pp.740-752
Influence of austenite grain boundary misorientation on hydrogen-induced intergranular crack propagation in a medium carbon martensitic steel	共著	2024年7月	Elsevior, Acta Materialia, 274	Ji Hoon Kim, Goro Miyamoto, Akinobu Shibata, Tomohiko Hojo, Motomichi Koyama, Yongjie Zhang, Tadashi Furuhara	pp.
Mechanism of local hydrogen entry into Fe sheets induced by atmospheric corrosion: Significance of potential, pH, and rust layer thickness	共著	2024年4月	Elsevior, Corrosion Science, 232	Hiroshi Kakinuma, Saya Ajito, Tomohiko Hojo, Motomichi Koyama, Eiji Akiyama	pp.
Delayed Fracture Stress Thresholds Degraded by Shear Punching Process in Ultra-High-Strength Steel Sheets: Analysis using an In-Plane Bending Test with Numerical Assimilation	共著	2024年4月	Elsevior, Journal of Manufacturing Processe, 119	Takashi Matsuno, Yuya Ueda, Tomoya Takahashi, Takayuki Hama, Tomohiko Hojo, Yuki Shibayama, Mohd Ridha Muhamad, Yoshitaka Okitsu, Masato Takamura	pp.1005-1021
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
超高張力TRIP型マルテンサイト鋼板の十字引張強さに及ぼす水素の影響	共同	2025年3月	(一社) 日本鉄鋼協会　第189回春季講演大会, 東京都立大学(東京)	近藤稔, 小笠原俊平, 木藤海琉, 長坂明彦, 北條智彦	
超高強度TRIP型ベイニティックフェライト・マルテンサイト鋼板の温間V曲げおよび水素脆化特性	共同	2025年3月	(一社) 日本鉄鋼協会　第189回春季講演大会, 東京都立大学(東京)	小笠原俊平, 木藤海琉, 近藤稔, 長坂明彦, 北條智彦	
超高強度TRIP型ベイニティックフェライト・マルテンサイト鋼板の温間V曲げに及ぼす水素の影響	共同	2024年11月	(公社) 日本金属学会北陸信越支部　(一社) 日本鉄鋼協会北陸信越支部 令和6年度　連合講演大会(長野)	木藤海琉, 小笠原俊平, 近藤稔, 北條智彦, 長坂明彦	
超高強度TRIP型ベイニティックフェライト・マルテンサイト鋼板のV曲げに及ぼす水素の影響	共同	2024年11月	(公社) 日本金属学会北陸信越支部　(一社) 日本鉄鋼協会北陸信越支部 令和6年度　連合講演大会(長野)	小笠原俊平, 木藤海琉, 近藤稔, 北條智彦, 長坂明彦	
超高強度 TRIP 型マルテンサイト鋼板の十字引張強さに及ぼす水素の影響	共同	2024年11月	(公社) 日本金属学会北陸信越支部　(一社) 日本鉄鋼協会北陸信越支部 令和6年度　連合講演大会(長野)	近藤稔, 小笠原俊平, 木藤海琉, 北條智彦, 長坂明彦	
大気腐食環境下におけるFe板への水素侵入挙動に及ぼすpHの影響	共同	2024年11月	(公社) 腐食防食学会　第71回材料と環境討論会(沖縄)	柿沼 洋, 廣本 祥子, 北條智彦, 味戸沙耶, 小山元道, 秋山英二	
TRIP型マルテンサイト鋼の小型曲げ試験における変形組織その場観察と3次元EBSD解析	共同	2024年11月	(一社) 塑性加工学会　第75回塑性加工連合講演会(沖縄)	佐藤誉洋, 渡邊優斗, 藤田大樹, 清水一行, 松野　崇, 渡邊育夢, 北條智彦	
プレス成形した高強度鋼板の遅れ破壊評価	共同	2024年9月	(一社) 日本鉄鋼協会　第188回春季講演大会(大阪)	北條智彦, 湯瀬文雄, 河盛　誠	

温間圧延TBM鋼の温間引張特性に及ぼす残留オーステナイトの影響	共同	2024年9月	(一社)日本鉄鋼協会　第188回秋季講演大会(大阪)	服部克海・小林純也・倉本繁・伊藤吾朗・北條智彦	
ベイニティックフェライトとマルテンサイトを母相とする低合金TRIP鋼板の引張特性に及ぼす加工熱処理の影響	共同	2024年9月	(一社)日本鉄鋼協会　第188回秋季講演大会(大阪)	深作隼也・赤間翔伍・小林純也・倉本繁・伊藤吾朗・北條智彦	
熱間圧延後に再結晶化を施した高強度TRIP型ベイニティックフェライト鋼板の微細組織と機械的特性	共同	2024年8月	(一社)日本機械学会　2024茨城講演会(日立)	中村 優斗, 尾林 和将, 服部 克海, 小林 純也, 北條 智彦, 倉本 繁, 伊藤 吾朗	
加工熱処理を施した低合金TRIP鋼板の成形性と微細組織	共同	2024年8月	(一社)日本機械学会　2024茨城講演会(日立)	赤間翔伍, 尾林和将, 服部克海, 小林純也, 北條智彦, 倉本　繁, 伊藤吾朗	
合金TRIP鋼板の耐水素脆化特性に及ぼす加工熱処理条件の影響	共同	2024年8月	(一社)日本機械学会　2024茨城講演会(日立)	諏訪 綾佑, 松井 璃音, 深作 隼也, 小林 純也, 北條 智彦, 倉本 繁, 伊藤 吾朗	
TRIP型マルテンサイト鋼板の微細組織と機械的特性に及ぼす熱間圧延後の再結晶化処理の影響	共同	2024年8月	(一社)日本機械学会　2024茨城講演会(日立)	松信浦主, 松井璃音, 深作隼也, 小林純也, 北條智彦, 倉本　繁, 伊藤吾朗	
Al-Zn-Mg-Cu合金の引張変形中の内在水素放出挙動	共同	2024年5月	軽金属学会　第146回春期大会(名古屋)	北條智彦, 菊池護, 大志田宜明, 味戸沙耶, 柿沼洋, 秋山英二	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	論文となっていないデータの論文化を行う. 外部資金獲得.
今年度の進捗状況	9報の論文を出すことができた. 企業との共同研究ができた. 科研費の研究分担者として研究を進めることができた.
来年度の進捗目標	論文となっていないデータの論文化を行う. 外部資金獲得.

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(A)	2024年度～2028年度	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年6月～	公益社団法人自動車技術会 会員
2021年6月～	一般社団法人軽金属学会 編集委員
2020年4月～	一般社団法人日本塑性加工学会 会員
2017年4月～	公益社団法人腐食防食学会 会員
2014年4月～	一般社団法人軽金属学会 会員
2002年6月～	一般社団法人日本鉄鋼協会 会員
2001年2月～	公益社団法人日本材料学会 会員
1998年12月～	一般社団法人日本機械学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2024年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	准教授	氏名	李　淵	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
講義説明資料の改善	2021年4月1日～	
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	実施方法を工夫して、マルチレベルに合わせる講義を実施する。
今年度の進捗状況	講義内容に基づき、事前に関連資料を公開したうえに、板書とスライドを併用し、進め方を改善した。
来年度の進捗目標	例題を集めて分類し、演習用の教材作成を計画する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
『連続体力学・電磁解析の基礎』	共著	2025年2月	東北大学出版会	坂　真澄、李　淵	pp.1-175
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	計画通りに、研究を進める。
今年度の進捗状況	予定通りに進んでいた。
来年度の進捗目標	研究結果をまとめて発表する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	石上　忍	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Consideration on expanding to low frequency range for a folded ultra-broadband antenna	共著	2024年11月	2024 IEEE Asia-Pacific Microwave Conference	Shinobu Ishigami, Ken Kawamata, Katsushige Harima, Shingo Inori	pp.471-473
Time Domain Characteristics of Ultra-Wideband Folded Long-Hexagon Antenna Using the Pulse TDR and TDT Analysis	共著	2024年11月	2024 IEEE Asia-Pacific Microwave Conference	Ken Kawamata, Shinobu Ishigami, Shingo Inori, Katsushige Harima	pp.280-282
Basic study on improving accuracy in extraction of electromagnetic field waveforms by independent component analysis	共著	2024年9月	2024 25th International Conference on Computational Problems of Electrical Engineering	Shinobu Ishigami, Ken Kawamata, Nao Takahashi	pp.
Influence of Electrode Surface Roughness on Electromagnetic Field Radiation Due to Micro-Gap ESD Below 1 kV	共著	2024年9月	2024 International Symposium on Electromagnetic Compatibility	Ken Kawamata, Shinobu Ishigami, Osamu Fujiwara	pp.646-650
Influence of Electrode Surface Roughness on Radiated Electromagnetic Field Strength due to Micro-Gap ESD	共著	2024年5月	2024 IEEE Joint International Symposium on Electromagnetic Compatibility, Signal & Power Integrity: EMC Japan / Asia-Pacific International Symposium on Electromagnetic Compatibility, TueAM1C.3	Kanaru Yamaki, Ken Kawamata, Shinobu Ishigami	pp.123-125
Calibration of Broadband Antenna Using the Standard Field Method With VNA Considering the Near Field	共著	2024年5月	2024 IEEE Joint International Symposium on Electromagnetic Compatibility, Signal & Power Integrity: EMC Japan / Asia-Pacific International Symposium on Electromagnetic Compatibility, TueAM1C.1	Shinobu Ishigami, Ken Kawamata, Shigeki Minegishi	pp.119-121
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
これからのEMC（情報通信審議会電波利用環境委員会主査代理）『電磁環境工学情報　月刊EMC』	単著	2025年1月	科学情報出版, 37	石上　忍	pp.31-31

EMC測定・試験のポイント 基本・共通用語19 Sパラメータ『電磁環境工学情報 月刊EMC』	単著	2024年4月	科学情報出版, 36(12)	石上 忍	pp.113-115
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
独立成分分析を用いた電磁雑音波形抽出の精度向上に関する検討	単独	2025年3月	電気学会 電磁環境研究会(鳥取温泉「観水庭こぜにや」(鳥取県))	石上 忍,, 松野壮吾, 川又 憲, 髙橋直央	
電極表面粗さが球電極対ESDの放射電磁波強度に与える影響	共同	2025年1月	電子情報通信学会環境電磁工学研究会(高知県教育会館 高知城ホール 大会議室(高知市))	川又 憲, 石上 忍, 藤原 修	
広帯域折返しアンテナの低周波数帯域への拡張に関する検討	単独	2024年10月	電子情報通信学会 環境電磁工学研究会(あきた芸術村 温泉ゆぽぽ(秋田県仙北市)), EMCJ2024-54	石上 忍, 川又 憲, 張間勝茂, 祷 真悟	pp.98 - 102
IECにおける電磁両立性標準化の動向報告(2)	単独	2024年6月	電子情報通信学会 環境電磁工学研究会(ホテルサンシティー函館(函館市)), EMCJ2024-10	石上 忍	pp.17 - 22
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2023年10月～	情報通信審議会 情報通信技術分科会 電波利用環境委員会 主査代理
2020年4月～	情報通信審議会 情報通信技術分科会 CISPR/A作業班 主任
2017年11月～	電気学会 電磁環境部会 委員
2017年11月～	IEC SC77B国内委員会 委員長
2016年4月～	国立研究開発法人情報通信研究機構 協力研究員（2018年4月より 特別研究員）非常勤職員
2015年9月～	IEC ACEC国際委員 委員
2015年9月～	IEC ACEC国内分科会 分科会長
2015年1月～	静電気学会
2011年8月～	CISPR/A エキスパート 委員
2006年3月～	IEC TC77 WG13（作業部会）エキスパート 委員
2006年3月～	電磁環境両立性標準化委員会（IEC TC77国内委員会）幹事
2003年1月～	電気学会
1992年1月～	IEEE（米国電気電子学会）
1991年4月～	電子情報通信学会

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	岩谷　幸雄	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2020年5月～	日本音響学会2020年秋季研究発表会　遠隔開催実行委員長 会員
2020年1月～	Chair of IEEE SPS Sendai chapter 委員
2019年5月～	日本音響学会理事 会員
2017年3月～	仙台市環境影響評価審査会委員 委員
2015年10月～	国際計量研究連絡委員会　音響・超音波・振動分科会委員 委員
2014年5月～	情報処理学会東北支部運営委員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2024年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	大場　佳文	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

1996年6月～	電気学会会員 会員
1987年5月～	電子情報通信学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	小澤　哲也	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
科学技術社会と倫理	2024年4月1日～2025年3月31日	科学技術社会と倫理の新規開講に際して、新しいオンデマンドビデオを制作した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
科学技術社会と倫理	2024年4月1日～2025年3月31日	科学技術社会と倫理の新規開講に際して、新しい投影用スライドを制作した。加えて、作成したオンデマンドビデオは、1週間の開講期間を設けた。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
SD研修プログラムへの参加	2025年3月12日	SD研修プログラム「2024年度ハラスメント対策講演会」へ参加した。
FD研修プログラムへの参加	2025年2月25日	「中教審大学院部会資料からみる大学院学生支援制度について」に参加した。
FD研修プログラムへの参加	2024年12月5日	障害のある学生への修学支援　合理的配慮や授業での支援についての再確認へ参加した。
SD研修プログラムへの参加	2024年8月6日	いまなぜリベラルアーツなのかに参加した
4．その他教育活動上特記すべき事項		
高校生向けの大学案内活動	2025年3月17日～2025年3月17日	岩手教育会館の高校生向け進学相談コーナーで大学案内を担当した。
高校生向けの出張講義活動	2025年2月20日～2025年2月20日	小高産業技術高等学校にて大学案内の講義を担当した。
高校生向けの出張講義活動	2025年2月19日～2025年2月19日	新屋高校にて大学案内の講義を担当した。
高校生向けの大学案内活動	2025年2月18日～2025年2月18日	一関市の高校生向け進学相談コーナーで大学案内を担当した。
高校生向けの大学案内活動	2025年2月12日～2025年2月12日	秋田アルヴェの高校生向け進学相談コーナーで大学案内を担当した。
高校生向けの大学案内活動	2025年2月10日～2025年2月10日	山形テルサの高校生向け進学相談コーナーで大学案内を担当した。
高校生向けの大学案内活動	2025年2月6日～2025年2月6日	アエルの高校生向け進学相談コーナーで大学案内を担当した。
高校生向けの出張講義活動	2025年2月5日～2025年2月5日	八戸商業高校にて大学案内の講義を担当した。
高校生向けの出張講義活動	2024年7月25日～2024年7月25日	角田高校にて大学案内の講義を担当した。
高校訪問活動	2024年6月21日～2024年6月21日	白石方面の高校訪問活動を担当した。
高校訪問活動	2024年6月18日～2024年6月18日	古川方面の高校訪問活動を担当した。
高校生向けの大学案内活動	2024年5月17日～2024年5月17日	アエルの高校生向け進学相談コーナーで大学案内を担当した。
高校生向けの出張講義活動	2024年5月14日～2024年5月14日	聖和学園高校にて大学案内の講義を担当した。

現在の課題・目標	2024年度から開講された科学技術社会と倫理のオンデマンドビデオを制作する。 2024年度から担当した電力応用工学の講義資料を制作する。
今年度の進捗状況	2024年度から開講された科学技術社会と倫理のオンデマンドビデオを作成した。 2024年度から担当した電力応用工学の講義資料を作成した。

来年度の進捗目標	2024年度の科学技術社会と倫理のオンデマンドビデオ内で取り入れた自動車業界の構成図において、 日産自動車と本田技研が統合する動きを示したので、その内容を反映した内容に作り変えること。 2024年度から担当した電力応用工学の講義資料内に、新規に開発された商品情報を掲載すること。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	植物に電圧刺激を与えることで、成長速度が変化することを実験している。
今年度の進捗状況	電圧刺激を与えることで、カイワレ大根の成長に変化が見られたが、サンプル数が足りなかったため、定量的評価が難しい状況にある。
来年度の進捗目標	カイワレ大根の成長のサンプル数を増やす。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2020年4月～	電気学会東北支部役員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	芸術に対する能力はありませんので、芸術に関する活動をしていません。 実技としては、はんだ付けなどのモノ作りが得意である。
今年度の進捗状況	フライス盤でアルミニウムの削りだし加工に挑戦している。
来年度の進捗目標	旋盤を使いこなせていないので、旋盤でアルミニウムの削りだし加工に挑戦してみたい。

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

長年にわたって入試委員を頑張っており、大学の広報活動に注力しています。

2024年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	郭　海蛟	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学生実験における工夫	2024年4月1日～2025年3月31日	実験は座学と違い、一人一人の理解し方と実現する習慣の違いがはっきり現れる科目である。最初から詳しく説明しすぎると個人差が現れにくくなる。詳細の手順を任せて、実験の過程の中で、それぞれのやり方を見てから、その良しあしを教えるように工夫した。それにより、その学生の癖を直せる効果が大きく、これの実務により役に立つ
演習科目における工夫	2024年4月1日～2025年3月31日	演習の場合は課題を与えて、そして回答を解説するのが普通ですが、それだと学生達が自分が何故できないなのかが分かりにくい場合がある。それに対して、学生の解答をよく見て、いくつかの共通な誤りのパタンーガあり、その誤りのパタン一を指摘しながら、正しい考え方を説明し、学生達に正解を与えるだけではなくてどこで間違ったなのかもわかるように工夫を行った。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	学生達の理解の仕方、課題の解き方、実験のやり方などについてもっと把握する必要があるという課題があると思います。教育は双方向の問題で、自分が一生懸命にやればそれでよいというだけでは済むことではありません。相手がどれぐらい理解したかもとても重要である。少しでも相手の理解の仕方、課題の解き方、実験のやり方などわかるように方法を探すのが目標とします。
今年度の進捗状況	学生の理解の仕方、課題の解き方、実験のやり方など少しでもわかるような方法として、よく学生達とコミュニケーションを行うように心がけています。自分の考え方ではなくて、学生の考え方を聞き出して、それを修正しながら説明することを取り入れるようになった。時間がかかることになるが少し効果があると思います。ただし、授業中に多く取り入れると時間がかかりすぎで、内容の消化が難しい場合もあります。
来年度の進捗目標	より効率的な学生とのコミュニケーションの方法を探すのも一つの目標にしたいと思います。新しいLMSなどの利用も一つの方法である。また、学生の注意力を高めることも引き続き目標とします。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
A Study on New PWM Signal Generation and Control Methods Application in Power Electronics Control	単独	2024年12月	TENCON2024(シンガポール)	Haijiao GUO	
シミュレーションを用いた繰り返し制御によるインバータ駆動の検討	共同	2024年11月	自動制御連合大会2024(姫路商工会議所)	◎尾形亮太，郭海蛟	
3次繰返し制御の初期応答改善と感度関数の両立に関する検討	共同	2024年11月	自動制御連合講演会2024(姫路商工会議所)	◎小薗井陽彦，郭海蛟	
H．翻訳（学術書や原典等）					

I. 特許	
現在の課題・目標	1. 高次繰返し制御について、感度関数のロバスト性と初期応答の改善の両立ができれば設計法として実用性が高くなるのでその方法のかいはつを目標とする。 2. いろいろな制御方法をパワーエレクトロニクス分野における応用に関する研究 3. SRGを用いる風力発電をより効率を高める研究
今年度の進捗状況	1. 高次繰返し制御系の初期応答の改善についていろいろ有用な結果が得られました。国内の大会にて発表した。 2. PI制御が正弦波について広範囲の周波数にわたりうまく追従できないと個を明らかにし、その代わりに内部モデル原理の有効性をシミュレーションにより明らかにした。その成果を国際大会と国内大会にて発表した。
来年度の進捗目標	今年度の課題を更に発展すると共にその成果を国内と国外にアピールを行う予定である。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動	
2014年～	計測自動制御学会東北支部運営委員会顧問 会員
2010年1月～	計測自動制御学会東北支部 顧問
2010年～	IEEE Senior Member 委員
1995年～	IEEE

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	加藤　和夫	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
工学に関わる啓発活動の講師	2024年8月27日	東北学院大学工学総合研究所，および多賀城市教育委員会が主催の工学に関わる啓発活動において「からだの電気をみてみよう」と題したコラボ授業の講師を務めた。

現在の課題・目標	① 講義受講生の更なる理解度向上に貢献できるよう講義内容の改善を行う。特に昨年度に引き続きBYODを使った教材の更なる改善を行い，魅力ある講義資料の作成を行う。 ② 昨年度に引き続き高校生や中学生を対象した出前授業や工学に関する啓発活動において，受講者が楽しく，興味深く体験できる工学実験教材の開発・改良を行う。 ③ 大学院生への教育・指導において，共同研究を行っている他大学，他分野の教員を交えての研究発表やディスカッションを通して，大学院生自身の専門分野に加え他分野の知識を深める教育を行う。
今年度の進捗状況	① 講義時間外に復習・予習課題を課し，講義内容の理解の定着を促すなど進捗が見られた。また，今年度はBYODを使ったこれまでの教材の改善を行うことができたため進捗が見られた。 ② 高校生や中学生を対象した出前授業や工学に関する啓発活動において，これまでの工学実験教材の改良を行うことができたため進捗が見られた。 ③ 研究室に所属する大学院生の修士研究の教育の一環で，共同研究を行っている工学とは異なる専門分野の専門家に対し研究発表を行ってもらい，ディスカッションを実施することができた。このため大学院生にとって自身の研究テーマの幅を広げることができたため進捗が見られた.
来年度の進捗目標	① 講義受講生の更なる理解度向上に貢献できるよう講義内容の改善を行う。特に今年度に引き続きBYODを使った教材の更なる改善を行い，魅力ある講義資料の作成を行う。 ② 高校生や中学生を対象した出前授業や工学に関する啓発活動において，今年度に引き続き受講者が楽しく，興味深く体験できる工学実験教材の開発・改良を行う。 ③ 大学院生への教育・指導において，今年度に引き続き共同研究を行っている他大学，他分野の教員を交えての研究発表やディスカッションを通して，大学院生自身の専門分野に加え他分野の知識を深める教育を行う。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Influence of Spatial Frequency on Human Subconscious and Related Neural Activity Using the Implicit Association Test	共著	2025年1月	International Journal of Affective Engineering, Vol.24(No.1)	K. Kato, T. Suzuki, H. Kadokura and A. Ishikawa	pp.41-56
エラー関連電位に基づくBMIの精度向上の検討 ― 学習データ拡張方法の考察 ―	共著	2025年1月	電気学会論文誌C（電子・情報・システム部門誌），Vol.145(No.1)	荒 翔太，加藤 和夫，門倉 博之，石川 敦雄	pp.52-58
空間周波数特性を有する移動ターゲットに対する視覚探索時の視線応答	共著	2024年10月	電気学会論文誌C（電子・情報・システム部門誌），Vol.144(No.10)	紺野 圭吾，加藤 和夫，門倉 博之，石川 敦雄	pp.978-984
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					

動作ガイドがある運動想起に伴う事象関連電位に関する研究	共同	2025年3月	令和7年度 東北地区若手研究者研究発表会(仙台)	◎佐藤雄琉, 加藤和夫	
Empirical mode decomposition-based removal of blink artifacts from single-electrode electroencephalogram signals	共同	2024年12月	The 18th International Conference on Biomedical Engineering (ICBME 2024) (Singapole)	◎K. Kato, Kadokura	
脳波時間―周波数解析に基づく情動反応に関連する大脳神経活動の評価	共同	2024年9月	生体医工学シンポジウム2024(東京)	◎栗原大地, 加藤和夫, 門倉博之, 石川敦雄	
Wavelet Synchro-Squeezed変換を用いた潜在的意識に関わる自発脳波の時間周波数解析	共同	2024年5月	第63回日本生体医工学会大会2024(鹿児島)	◎栗原大地, 前田蒼, 加藤和夫, 門倉博之, 石川敦雄	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	① 生体情報計測に基づく視環境評価に関する研究を継続して実施する。本年度は, 新たな実験タスクを導入・実施することにより, 新しい知見を得ることを試みる。 ② 生体情報計測に基づいた情動に関する研究を実施する。 ③ 生体信号処理方法の開発に関する研究を実施する。
今年度の進捗状況	① これまで研究を進めてきた視環境が視線探索に与える影響に関する実験結果をまとめ, 国内の学会誌に査読付き論文として投稿し, 発行された。しかし, 目標に掲げた新たな視環境評価の実験を進めることができなかった。 ② 脳波測定に基づく快不快情動に関する研究を進め, 国内学会での発表を行った。 ③ 単極脳波に混入する瞬きアーチファクトを除去する信号処理方法について研究を進め, 国際学会で発表を行った。
来年度の進捗目標	① 本年度に引き続き生体情報計測に基づいた情動に関する研究を実施する。 ② 本年度に引き続き生体信号処理方法の開発に関する研究を実施する。 ③ 生体情報計測に基づいた入力デバイスの使いやすさの評価に関する研究を実施する。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 学術研究助成基金助成金(基盤研究C)	2020年度～2024年度	共同(研究代表者)	空間周波数が潜在的な感覚に与える影響と関連する大脳神経活動の評価を行う.

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2021年6月～	みやぎ高度電子機械人材育成センター運営会議 運営委員
2016年8月～	国際複合医工学会 会員
2016年8月～	国際複合医工学会 評議員
2006年～	日本人間工学会 会員
2001年3月～	電気学会 会員
2000年5月～	日本生体磁気学会 会員
1999年～	日本磁気学会 会員
1994年10月～	電子情報通信学会 会員
1994年～	生体医工学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	川又　憲	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
より効果的な知識定着をおこなうため，学生自らの自主学習を促すための授業システムの構築を継続して進めている．本年度は演習および実験系の科目において，自学による予習・復習課題の設定を行う。	2020年4月1日～	授業における学習内容，課題を持ち帰り，日常的に自主学習が行われるよう，授業システムの整備を継続して進めている．課題は，なるべく学生が取り組みやすいように工夫し，第一段階は昨年度まで自主的な学習機会の定着を目指した。特に自主的な演習問題の取り組みにより確実な実力が定着するための方法について検討した。2020年度においては，動画によるオンデマンド授業資料の作成を行い，本年度ではこれらの資料の改訂を行い，より効果的な自主学習プログラムの構築を行う。
学生の能動的な学習によるアクティブ・ラーニングを推進するため，専門分野の演習課題に対する取り組みの機会，ならびに実験・実習による学びの機会を連携させ，確実な知識定着を図る。	2020年4月1日～	アクティブラーニングの一環として，演習科目での学生自身の能動的な課題取り組みに加え，板書による解法のプレゼンテーションを行わせ，他の学生に「教え・伝える」プロセスを設けて，より効果的な知識定着を行えるよう務めている．また，実験・実習系科目にける主体的な学習ならびに考察力の向上を進めるための改題設定を行っている．演習科目では，学生の問題解法力を向上させるため，効果的な演習課題の絞り込みを行っている。本年度においては実験の補助資料として学生実験テーマの動画資料を作成し，オンデマンドにて公開した。
情報工学分野の体系化された講義，演習，さらには実験・実習科目のより効果的な知識定着と，学習効果の向上に向け，情報通信工学分野のカリキュラム・マップの整備を行っている。	2020年4月1日～	体系化された情報通信工学分野において，知識伝達型の講義科目と，基礎問題の解決能力を身につける演習科目，さらには課題解決力を身についける実験・実習科目のカリキュラム体系に従って，各科目の位置づけおよび科目間の連携を意識させるための説明の強化を進めている。本年度は2018年からスタートした通信工学基礎Ⅰ，Ⅱならびに情報通信工学実験のカリキュラム上の連携を再確認し，カリキュラムと内容の整合の確認，改善点の抽出，次回カリキュラム変更に向けた改正点について検討した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
情報基盤工学科科目「情報通信工学実験Ⅰ，Ⅱ」に関する実験指導資料の整備と実験テーマの構築	2020年4月1日～	3年生の科目となる「情報通信工学実験Ⅰ」および「情報通信工学実験Ⅱ」において，実験導資料を作成すると共に座学講義との関係整備を行った．さらに，開講一年目にて実験課題の整備，実験指導書の作成，レポートの管理法などについて，授業の構築作業と実施を行った。また，本年度は実験に関する動画資料の作成を行い，実験指導の補助資料を充実させた。
情報基盤工学科科目「通信工学基礎Ⅰ，Ⅱ」に関する講義資料の整備と改訂	2020年4月1日～	「通信工学基礎Ⅰ」および「通信工学基礎Ⅱ」において，講義資料の整備を行った．さらに，内容の見直しを行い，資料の改定作業を継続して進めている。また，通信工学基礎演習Ⅰについては，演習解法に関する動画資料の作成を行った。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
講義科目および実験科目に関する動画資料の作成	2020年4月1日～	感染症予防の観点から実施される遠隔授業に対応するため，各担当科目の動画配信資料の作成を行った。
ノートPCとバーコードリーダーによる授業出席管理システムの構築と運用	2020年4月1日～	必修等の主要科目への出席を促すため，授業への出席をとることとしている。この際，学生証のバーコードをリーダーで読み取り，PCで出欠状況を管理できるシステムを構築し，運用している。これにより，長期欠席者へのアラームや，出欠状況の把握が容易になった。本システムを継続的に運用している。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数

A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
耐電金属球間衝突ESDの放射電界測定波形を用いた火花電圧と火花長の推定	共著	2025年3月	電気学会, 電気学会論文誌A（基礎・材料・共通部門誌）, Vol. 145(No. 3)	藤原修, 川又憲	pp.66-75
Consideration on expanding to low frequency range for a folded ultra-broadband antenna	共著	2024年11月	2024 IEEE Asia-Pacific Microwave Conference	Shinobu Ishigami, Ken Kawamata, Katsushige Harima, Shingo Inori	pp.471-473
Time Domain Characteristics of Ultra-Wideband Folded Long-Hexagon Antenna Using the Pulse TDR and TDT Analysis	共著	2024年11月	2024 IEEE Asia-Pacific Microwave Conference	Ken Kawamata, Shinobu Ishigami, Shingo Inori, Katsushige Harima	pp.280-282
Basic study on improving accuracy in extraction of electromagnetic field waveforms by independent component analysis	共著	2024年9月	2024 25th International Conference on Computational Problems of Electrical Engineering	Shinobu Ishigami, Ken Kawamata, Nao Takahashi	pp.
Influence of Electrode Surface Roughness on Electromagnetic Field Radiation Due to Micro-Gap ESD Below 1 kV	共著	2024年9月	2024 International Symposium on Electromagnetic Compatibility	Ken Kawamata, Shinobu Ishigami, Osamu Fujiwara	pp.646-650
1000V以下の帯電金属球間の衝突ESDに伴う放射電界の火花抵抗則を用いた計算波形と特異性	共著	2024年9月	電気学会, 電気学会論文誌A, Vol.144(No.9)	藤原修, 川又憲	pp.377-384
Influence of Electrode Surface Roughness on Radiated Electromagnetic Field Strength due to Micro-Gap ESD	共著	2024年5月	2024 IEEE Joint International Symposium on Electromagnetic Compatibility, Signal & Power Integrity: EMC Japan / Asia-Pacific International Symposium on Electromagnetic Compatibility, TueAM1C.3	Kanaru Yamaki, Ken Kawamata, Shinobu Ishigami	pp.123-125
Calibration of Broadband Antenna Using the Standard Field Method With VNA Considering the Near Field	共著	2024年5月	2024 IEEE Joint International Symposium on Electromagnetic Compatibility, Signal & Power Integrity: EMC Japan / Asia-Pacific International Symposium on Electromagnetic Compatibility, TueAM1C.1	Shinobu Ishigami, Ken Kawamata, Shigeki Minegishi	pp.119-121
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
独立成分分析を用いた電磁雑音波形抽出の精度向上に関する検討	単独	2025年3月	電気学会　電磁環境研究会(鳥取温泉「観水庭こぜにや」（鳥取県))	石上　忍,, 松野壮吾, 川又　憲, 髙橋直央	
電極表面粗さが球電極対ESDの放射電磁波強度に与える影響	共同	2025年1月	電子情報通信学会環境電磁工学研究会(高知県教育会館 高知城ホール 大会議室（高知市))	川又　憲, 石上　忍, 藤原　修	
広帯域折返しアンテナの低周波数帯域への拡張に関する検討	単独	2024年10月	電子情報通信学会　環境電磁工学研究会(あきた芸術村 温泉ゆぽぽ（秋田県仙北市)), EMCJ2024-54	石上　忍, 川又　憲, 張間勝茂, 祷　真悟	pp.98 - 102
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)（一般）	2024年度～2026年度	共同(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年7月～2027年6月	電気学会・電力品質確保及び電磁環境保護に係るIEC規格整備の動向調査専門委員会・幹事 会員
2024年4月～2027年3月	電気学会「ESD現象のEMC的解明のための計測・評価技術調査専門委員会（第2期）」委員 会員
2020年4月～	「ESD現象のEMC的解明のための計測・評価技術調査専門委員会」委員 会員
2020年4月～	電気学会基礎・材料部門　電磁環境技術委員会 会員
2009年4月～	電気学会 基礎・材料・共通部門　電磁環境技術委員会1号委員 会員
2006年4月～	日本学術会議電気電子工学委員会URSI分科会「電磁波の雑音・障害」小委員会（URSI-E委員会） 委員, 2024- 委員長

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	金　義鎭	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2017年～	映像情報メディア学会　※ 東北支部庶務幹事
2010年4月～	映像情報メディア学会　※ 会員
2008年～	コンピュータ利用教育学会 会員
2006年～	教育システム情報学会 会員
1998年～	電子情報通信学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	呉　国紅	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2．作成した教科書、教材、参考書		
東北学院大学電気電子工学実験指針（Ⅲ）（Ⅳ）	2024年11月～2025年2月	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	・授業内容を時代の発展に合わせて更新すること ・授業中に学生とのコミュニケーション時間を増やすこと ・授業時間以外で学生とのコミュニケーションの機会をもっと多く作ること ・自分の研究室所属以外の学生達とのコミュニケーションも増やすこと ・アクティブラーニングの実施拡大 ・授業のためのDX技術の活用
今年度の進捗状況	・特に専門科目の講義では、学生がそもそも知っている技術知識が少ないため、授業中に活発に質問したり、発言したりすることが少ない傾向がある。これを考慮に入れ、授業中に学生が答えやすい質問を用意することや、教員側から学生に回答させること等の対策を講じ、授業の雰囲気を活発させる努力をしている。 ・学生主催のイベント、スポーツ大会、合宿に積極的に参加し、また食堂や学校活動の場において、主動的に学生と会話交流を行い、学生の心理状況や考えなどを理解することを努力している。 ・教育用ツールの活用や配布資料のディジタル化を留意している
来年度の進捗目標	・今までに学生に評価された点を継続しつつ、更に学生の状況に応じた改善を絶えずに行うこと ・DXやAI技術の導入と活用を積極的に図ること

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
Phase Shift PWM制御を用いたトランスレスSTATCOMによる配電系統電圧の安定化に関する研究	共同	2025年3月	東北地域若手研究発表会(仙台市)	加賀　琉生海、呉　国紅	
DFIG発電機と多端子自励式HVDC送電回路構成の　洋上風力システムの安定運転に関する研究	共同	2025年3月	令和7年電気学会全国大会(東京)	花田　凜, 長南　英樹, 呉　国紅	
PVとEVが導入された配電系統におけるトランスレスSTATCOMによる電圧補償効果の検討	共同	2025年3月	令和7年電気学会全国大会(東京)	太田　拳伍, 呉　国紅	
数理最適化ソルバーを用いたマイクログリッドの最適経済運用に関する検討	共同	2025年3月	令和7年電気学会全国大会(東京)	大川　達也、呉　国紅	
燃料電池発電FCおよび電気自動車EVが導入されたマイクログリッドの過渡的電気特性に関する研究	共同	2025年3月	令和7年電気学会全国大会(東京)	尹　一博,　呉　国紅, 和　敬涵	

多端子洋上風力発電システムにおける直流送電回路事故時の過渡電気特性に関する検討	共同	2025年3月	令和7年電気学会全国大会(東京)	長南英樹, 花田凛, 呉国紅, 和敬涵	
ハイブリッドマイクログリッドシミュレーションモデルを用いた母線電圧の安定化効果に関する検討	共同	2025年3月	令和7年電気学会全国大会(東京)	五十嵐隼斗, 大川達也, 呉国紅, 和敬涵	
Modeling and Fault Characteristic Analysis of Grid-forming Electrochemical Energy Storage	共同	2024年11月	The 8th IEEE International Conference on Energy Internet (2024)(Zhuhai, China)	Y. Xu, J. He, Meng. Li, X. Du, X, Chen, G. Wu	
A Novel Hybrid Model Utilizing Data-Physical Integration for Urban Air-Conditioning Loads Forecasting	共同	2024年11月	The 8th IEEE International Conference on Energy Internet(2024)(Zhuhai, China)	J. Li, W. Ma, Z. Liu, J. He, J. Dou, Q. Duan, G. Wu	
An Experimental Approach to DC Voltage Stabilization in a Hybrid Microgrid System	共同	2024年11月	ICRERA2024(Nagasaki, Japan)	Guohong Wu、Hayato Igarashi	
Pilot protection of submarine cables for flexible low frequency transmission system for offshore wind power based on sliding mode observer	共同	2024年10月	China HVDC and Power Electronics Annual Meeting of CSEE(Tianjin, China)	Y. Wei, M. Li, Z. Zuo, D. Zhang, J. He, G. WU	
直流多端子自励式HVDC構成の洋上風力送電システムおける電力変換器の出力電気特性の比較検討	共同	2024年8月	電気学会関係東北支部連合大会(秋田県本荘市)	花田　凜、呉　国紅	
無効電力補償装置の協調制御による配電電圧の安定化効果に関する検討	共同	2024年8月	電気学会関係東北支部連合大会(秋田県本荘市)	太田 拳伍、呉 国紅	
系統連系時のマイクログリッド最適経済運用における最適解析手法の比較検討	共同	2024年8月	電気学会関係東北支部連合大会(秋田県本荘市)	大川　達也、呉　国紅	
マイクログリッド電源としてのPEFC燃料電池の電気特性に関する研究	共同	2024年8月	電気学会関係東北支部連合大会(秋田県本荘市)	尹　一博、呉　国紅	
半導体直流遮断器を適用した洋上風力発電システムの直流送電回路事故時の電気特性に関する検討	共同	2024年8月	電気学会関係東北支部連合大会(秋田県本荘市)	長南　英樹、呉　国紅	
Enhancement Effects by Introduction of a LCL AC filter for Grid-connected DC-AC Inverter in a Hybrid Microgrid System	共同	2024年8月	電気学会関係東北支部連合大会(秋田県本荘市)	Hayato Igarashi, Guohong Wu	
A Comparative Study of Different Power Collection Methods Applied to Multi-terminal HVDC Transmission Circuit for Offshore Wind Power System	共同	2024年7月	The International Council on Electrical Engineering Conference, 2024(Kitakyushu, Japan)	Riku Komuro, Hideki Chonan, Guohong Wu	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年1月～2025年3月	東北地域若手研究発表会実施委員会 実施委員
2024年10月～	IEEE 1894 committee member (IEEE Guide for Online Monitoring and Recording Systems for Transient Overvoltages in Electric Power System) 委員
2024年9月～2025年3月	「電気学会誌」取材・記事(《電気学会誌》) 学術調査立案・実施
2018年12月～	IEEE Tran. On Smart Grid論文審査委員会 委員
2018年9月～	IEEE Tran. On Sustainable Energy論文審査委員会 委員
2017年10月～	IET Generation, Transmission & Distribution論文審査委員会 委員

2017年4月～	International Tran. on Electrical Energy Systems論文審査委員会 委員
2016年8月～	東北学院大学工学総合研究所中学校啓発活動 講師, 実演
2016年8月～	日本電気学会上級会員 会員
2015年11月～	IEEE Senior Member 会員
2012年8月～	International Journal of Smart Grid and Clean Energy 委員会 編集委員会委員
2011年8月～	International Journal of Science and Engineering 委員会 編集委員会委員
2009年8月～	電気学会東北支部連合大会実施委員会 パネル司会・セッションチェア等
2007年11月～	日本電設工業協会と教職員・学生の懇談会 情報提供, 運営参加・支援
2006年8月～	電気学会電力・エネルギー部門YPC審査委員 会員
2005年8月～	電気学会電力・エネルギー部門論文誌審査委員 会員
1996年4月～	日本電気学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	佐藤　文博	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
遠隔講義に関する効果的な手法	2020年～	オンデマンド，オンライン講義における特性を最大限に利用した，学習意欲を高める工夫を行っている．
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Design of continuous repeater power transmission coil for wireless power transfer system for EVs with consideration of vehicle deviation	共著	2024年	AIP Advances, 14(3)	A. Saito, Y. Oishi, S. Miyahara, F. Sato, H. Matsuki	pp.035001
Study on the characteristics of power transmission side of leaky magnetic field canceling coil for non-contact power transfer while in operation	共著	2024年	AIP Advances, 13	M. Yokosawa, H. Kojima, S. Miyahara, F. Sato, H. Matsuki, O. Ito, K. Inada	pp.025231
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
小型電動モビリティの緊急時を想定したバックアップ電源の運用に関する研究	共同	2025年3月	令和7年東北地区若手研究者研究発表会(仙台)	◎大崎優斗，新田拓海，松木英敏，伊藤修，宮原敏，佐藤文博	
機能化シャーレを用いた細胞培養環境管理システムの構築に関する基礎的検討	共同	2025年3月	令和7年東北地区若手研究者研究発表会(仙台)	◎原唯，城前りりか，佐藤文博，伊藤修，宮原敏	
EV用走行中ワイヤレス給電システムのコイル構成に関する検討	共同	2025年3月	令和7年東北地区若手研究者研究発表会(仙台)	◎日髙佳祐，齋藤陽，佐藤文博，伊藤修，宮原敏	
Basic Study on the Application of Wireless Power Transfer to Sensing Systems related to Funcutionalized petri dishs	共同	2025年1月	The 16th Joint Conference on Magnetism and Magnetic Materials and Intermag(New Orleans)	◎R. Jomae, Y. hara, M. Yokosawa, F. Sato, O. Ito	

Fundamental Study of Factors leading to Pereformance Variations in Cancellation Coil Systems for Wireless Power Transfer	共同	2025年1月	The 16th Joint Conference on Magnetism and Magnetic Materials and Intermag(New Orleans)	◎M. Yokosawa, F. Sato, S. Miyahara, H. Matsuki, K. Inada, T. abe	
Investigation of transmitting coil with rotating magnetic field in real-time monitoring system for laboratory animals	共同	2025年1月	The 16th Joint Conference on Magnetism and Magnetic Materials and Intermag(New Orleans)	◎Tatsuki Omori, Fumihiro Sato	
小型マウスのリアルタイムバイタルサイン計測に向けた送受電コイル構成の最適化に関する検討	共同	2024年9月	令和6年電気学会基礎・材料・共通部門大会(松山)	◎長谷 航汰, 大森 達貴, 佐藤 文博, 吉川 雄朗	
小型電動モビリティの効率的な運用を想定した充電システム最適化に関する研究	共同	2024年9月	令和6年電気学会基礎・材料・共通部門大会(松山)	◎横田 賢祐, 小嶋 久斗, 佐藤 文博, 宮原 敏, 伊藤 修, 松木 英敏	
モビリティ用移動中非接触給電における漏洩磁界低減用コイル設置構成に関する基礎検討	共同	2024年9月	令和6年電気学会基礎・材料・共通部門大会(松山)	◎横澤 将貴, 宮原 敏, 佐藤 文博, 松木 英敏, 稲田 賢, 安部 拓馬	
飛行ドローンにおける完全自律運航を想定した双方向電力伝送システムの構築に関する研究	共同	2024年9月	令和6年電気学会基礎・材料・共通部門大会(松山)	◎鈴木 颯太, 佐藤 文博	
機能化シャーレに関するセンシングシステムへのワイヤレス給電適用の基礎検討	共同	2024年9月	令和6年電気学会基礎・材料・共通部門大会(松山)	◎城前 りりか, 原 唯, 横澤 将貴, 佐藤 文博, 伊藤 修	
複数中継コイルに着目したEV用走行中非接触給電システムにおける路面側コイル構成に関する検討	共同	2024年9月	令和6年電気学会基礎・材料・共通部門大会(松山)	◎齋藤陽, 宮原敏, 佐藤文博, 松木英敏	
実験小動物の生体情報情報遠隔測定システムに向けたワイヤレス給電装置の開発	共同	2024年9月	令和6年電気学会基礎・材料・共通部門大会(松山)	◎大森達貴, 佐藤文博	
A Study of Roadside coil configuration in Wireless Power Transfer system for EV's using Repeater Coils	共同	2024年5月	The 16th Joint Conference on Magnetism and Magnetic Materials and Intermag(New Orleans)	◎A. Saito, S. Miyahara, F. Sato, H. Matsuki	
A Study on the Transmission Side Coil configuration Focusing on the Characteristics of Continuous Repeater Coil in a Running wireless Power Transfer system for EV's	共同	2024年5月	IEEE International Magnetics Conference (Intermag)(Rio de Janeiro)	◎A. Saito, S. Miyahara, F. Sato, H. Matsuki	
Research on Wireless Power Transfer Coil for Real-Time Body Temperature Telemetry System	共同	2024年5月	IEEE International Magnetics Conference (Intermag)(Rio de Janeiro)	◎Tatsuki Omori, Fumihiro Sato	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

非接触給電システム及び自立走行型電動移動体	特許7482545	2024年5月2日	

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2020年～	電気設備学会東北支部役員 会員
2011年4月～	国土交通省宮城ブロック総合評価委員 委員
2010年～	照明学会東北支部幹事 会員

2001年6月～	電気学会各種委員 会員
1995年～	IEEE会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	嶋　敏之	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2021年4月1日～	毎回の授業の冒頭で，前回の復習とその回の概略を必ず説明し，授業終了時にはその回のまとめを行っている。
ナノテクノロジー工学に最先端技術を理解するための自学自習時間を取り入れた	2021年4月1日～	3年生向けの講義において，次世代薄型ディスプレイ(FPD)のスタンダードになりうる薄膜作製技術についての理解を深めるため、Webにより調査させ、分析させた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Effect of Light Elements on the Structure and Magnetic Properties for Microfabricated Sm(Fe-Co)-B Square Dot Arrays	共著	2024年	2024 IEEE 14th International Conference “Nanomaterials: Applications & Properties” (IEEE NAP-2024)	S. Hatanaka, Y. Mori, S. Ito, M. Doi and T. Shima	pp.
Enhancement of Coercivity for Sm(Fe-Co)12-B Thin Films by Introduction of Sm Seed Layer	共著	2024年	J. Magn. Soc. Jpn, 48	Y. Mori, S. Nakatsuka, S. Hatanaka, M. Doi and T. Shima	pp.17-20
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
Cu 添加によるSmCo5 系薄膜の構造と磁気特性	共同	2025年3月	日本金属学会2025年春期(第176回)講演大会(東京都立大学南大沢キャンパス)	村形 幸作、工藤 至恩、土井 正晶、嶋 敏之	
非化学両論組成Fe2MnGax 合金の作製と磁気特性の磁場中熱処理効果	共同	2025年3月	日本金属学会2025年春期(第176回)講演大会(東京都立大学南大沢キャンパス)	岡田 典之、嶋 敏之、土井 正晶	
Nb 添加によるSm（Fe-Co）12-B 薄膜の熱耐性の向上	共同	2025年3月	日本金属学会2025年春期(第176回)講演大会(東京都立大学南大沢キャンパス)	森 裕一、中塚 奏賀、土井 正晶、嶋 敏之	
Enhancement of coercivity for microfabricated Sm(Fe-Co)-B dot arrays with La-Ga cap layer	共同	2024年12月	Australian Institute of Physics Congress co-locating with NF017, COMMAD 2024 & ANZCOP 2024(Melbourne, Australia)	Y. Mori, S. Hatanaka, M. Doi, T. Shima	

Sm(Fe-Co)12-B 薄膜の構造と磁気特性	共同	2024年9月	第48回日本磁気学会学術講演会(秋田大学 手形キャンパス)	森裕一、中塚奏賀、土井正晶、嶋敏之	
Smシード層導入によるSm(Fe-Ni)12-B薄膜の構造と磁気特性	共同	2024年9月	日本金属学会2024年秋期(第175回)講演大会(大阪大学 豊中キャンパス)	中塚 奏賀、森 裕一、土井 正晶、嶋敏之	
Ag下地層を導入したFeNi薄膜の構造と磁気特性	共同	2024年9月	日本金属学会2024年秋期(第175回)講演大会(大阪大学 豊中キャンパス)	三浦 勇人、石井 翔生、平川 智己、土井正晶、嶋 敏之	
ポリイミド基板上に作製した高保磁力 SmCo5系薄膜の構造と磁気特性	共同	2024年9月	日本金属学会2024年秋期(第175回)講演大会(大阪大学 豊中キャンパス)	村形 幸作、三浦 勇人、工藤 至恩、土井正晶、嶋 敏之	
円形配列Sm(Fe-Co)-Bパターンの作製とドット径による磁気特性の変化	共同	2024年9月	日本金属学会2024年秋期(第175回)講演大会(大阪大学 豊中キャンパス)	伊藤 慎梧、佐藤 聖真、畑中 辰汰朗、土井正晶、嶋 敏之	
Improvement of coercivity for Sm(Fe-Co)12-B thin film by grain boundary diffusion and Sm seed layer insertion	共同	2024年9月	Workshop on Magnetic Frontiers, Magnetic materials and motors for green energy applications(Darmstadt, Germany)	Y. Mori, S. Nakatsuka, M. Doi and T. Shima	
Effect of light element diffusion through artificial grain boundaries in microfabricated Sm(Fe-Co)-B dot arrays	共同	2024年9月	Nano materials- Application and Properties (NAP2024)(Riga, Latvia)	S. Hatanaka, Y. Mori, S. Ito, M. Doi, T. Shima	
Improvement of coercivity of SmCo5 thin films fabricated at reduced preparation temperature on thermally oxidized Si substrates	共同	2024年8月	The 5th International Symposium on Advanced Magnetic Materials and Applications (ISAMMA 2024) (Dong-Hoi, Vietnam)	K. Murakata, Y. Miura, M. Doi, and T. Shima	
Improvement of coercivity for microfabricated Sm(Fe0.8Co0.2)12-B thin films with Sm seed layer	共同	2024年8月	The 5th International Symposium on Advanced Magnetic Materials and Applications (ISAMMA 2024) (Dong-Hoi, Vietnam)	S. Ito, S. Hatanaka, M. Mori, M. Doi, and T. Shima	
Structure and hard magnetic properties of Sm(Fe-Co)-B thin films	共同	2024年7月	The 35th Joint Interlaboratory Workshop on Nano-Magnetics (JIWON) (Hana Square, Korea University, Seoul, Korea)	Y. Mori, M. Doi and T. Shima	
Effect of pseudo-diffusion layers on the magnetic properties for microfabricated Nd-Fe-B grid patterns	単独	2024年7月	The 35th Joint Interlaboratory Workshop on Nano-Magnetics (JIWON) (Hana Square, Korea University, Seoul, Korea)	T. Shima	
Structure and magnetic properties of Sm(Fe-Co) thin films by introducing several seed layers	共同	2024年7月	International Conference on Magnetism 2024 (ICM2024) (Bologna, Italy)	Y. Mori, M. Doi and T. Shima	
Improvement of thermal stability of Sm(Fe-Co)12 thin films by simultaneous addition of B and Cu elements	共同	2024年7月	International Conference on Magnetism 2024 (ICM2024) (Bologna, Italy)	Y. Mori , S. Nakatsuka , S. Ito , M. Doi , T. Shima	
Effect of additive elements on the structure and magnetic properties for SmCo5 thin films at reduced preparation temperature	共同	2024年7月	International Conference on Magnetism 2024 (ICM2024) (Bologna, Italy)	Y. Miura, K. Murakata, M. Doi, T. Shima	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）					

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 Scientific Research (B) (General)	2023年度～2026年度	共同(研究分担者)	本プロジェクトでは、新たなデータ駆動型研究アプローチを用いて問題を克服し、μ0Mr>1.2 Tおよびμ0Hc>2.0 Tという固有磁気特性に近い特性を持つSmFe12系異方性焼結磁石を開発します。
競争的資金等の外部資金による研究 データ創出・活用型マテリアル研究開発プロジェクト	2022年度～2030年度	共同(研究協力者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2023年4月～	日本金属学会 東北支部理事
1990年4月～	日本金属学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	土井　正晶	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Effect of Light Elements on the Structure and Magnetic Properties for Microfabricated Sm(Fe-Co)-B Square Dot Arrays	共著	2024年	2024 IEEE 14th International Conference “Nanomaterials: Applications & Properties” (IEEE NAP-2024)	S. Hatanaka, Y. Mori, S. Ito, M. Doi and T. Shima	pp.
Enhancement of Coercivity for Sm(Fe-Co)12-B Thin Films by Introduction of Sm Seed Layer	共著	2024年	J. Magn. Soc. Jpn, 48	Y. Mori, S. Nakatsuka, S. Hatanaka, M. Doi and T. Shima	pp.17-20
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
Cu 添加によるSmCo5 系薄膜の構造と磁気特性	共同	2025年3月	日本金属学会2025年春期(第176回)講演大会(東京都立大学南大沢キャンパス)	村形 幸作、工藤 至恩、土井 正晶、嶋 敏之	
非化学両論組成Fe2MnGax 合金の作製と磁気特性の磁場中熱処理効果	共同	2025年3月	日本金属学会2025年春期(第176回)講演大会(東京都立大学南大沢キャンパス)	岡田 典之、嶋 敏之、土井 正晶	
Nb 添加によるSm（Fe-Co）12-B 薄膜の熱耐性の向上	共同	2025年3月	日本金属学会2025年春期(第176回)講演大会(東京都立大学南大沢キャンパス)	森 裕一、中塚 奏賀、土井 正晶、嶋 敏之	
Enhancement of coercivity for microfabricated Sm(Fe-Co)-B dot arrays with La-Ga cap layer	共同	2024年12月	Australian Institute of Physics Congress co-locating with NF017, COMMAD 2024 & ANZCOP 2024(Melbourne, Australia)	Y. Mori, S. Hatanaka, M. Doi, T. Shima	
Sm(Fe-Co)12-B 薄膜の構造と磁気特性	共同	2024年9月	第48回日本磁気学会学術講演会(秋田大学 手形キャンパス)	森裕一、中塚奏賀、土井正晶、嶋敏之	
Smシード層導入によるSm(Fe-Ni)12-B薄膜の構造と磁気特性	共同	2024年9月	日本金属学会2024年秋期(第175回)講演大会(大阪大学 豊中キャンパス)	中塚 奏賀、森 裕一、土井 正晶、嶋敏之	

Ag下地層を導入したFeNi薄膜の構造と磁気特性	共同	2024年9月	日本金属学会2024年秋期(第175回)講演大会(大阪大学 豊中キャンパス)	三浦 勇人、石井 翔生、平川 智己、土井 正晶、嶋 敏之	
ポリイミド基板上に作製した高保磁力 SmCo5 系薄膜の構造と磁気特性	共同	2024年9月	日本金属学会2024年秋期(第175回)講演大会(大阪大学 豊中キャンパス)	村形 幸作、三浦 勇人、工藤 至恩、土井 正晶、嶋 敏之	
円形配列Sm(Fe-Co)-Bパターンの作製とドット径による磁気特性の変化	共同	2024年9月	日本金属学会2024年秋期(第175回)講演大会(大阪大学 豊中キャンパス)	伊藤 慎梧、佐藤 聖真、畑中 辰汰朗、土井 正晶、嶋 敏之	
Improvement of coercivity for Sm(Fe-Co)12-B thin film by grain boundary diffusion and Sm seed layer insertion	共同	2024年9月	Workshop on Magnetic Frontiers, Magnetic materials and motors for green energy applications(Darmstadt, Germany)	Y. Mori, S. Nakatsuka, M. Doi and T. Shima	
Effect of light element diffusion through artificial grain boundaries in microfabricated Sm(Fe-Co)-B dot arrays	共同	2024年9月	Nano materials- Application and Properties (NAP2024)(Riga, Latvia)	S. Hatanaka, Y. Mori, S. Ito, M. Doi, T. Shima	
Improvement of coercivity of SmCo5 thin films fabricated at reduced preparation temperature on thermally oxidized Si substrates	共同	2024年8月	The 5th International Symposium on Advanced Magnetic Materials and Applications (ISAMMA 2024) (Dong-Hoi, Vietnam)	K. Murakata, Y. Miura, M. Doi, and T. Shima	
Improvement of coercivity for microfabricated Sm(Fe0.8Co0.2)12-B thin films with Sm seed layer	共同	2024年8月	The 5th International Symposium on Advanced Magnetic Materials and Applications (ISAMMA 2024) (Dong-Hoi, Vietnam)	S. Ito, S. Hatanaka, M. Mori, M. Doi, and T. Shima	
Structure and hard magnetic properties of Sm(Fe-Co)-B thin films	共同	2024年7月	The 35th Joint Interlaboratory Workshop on Nano-Magnetics (JIWON) (Hana Square, Korea University, Seoul, Korea)	Y. Mori, M. Doi and T. Shima	
Structure and magnetic properties of Sm(Fe-Co) thin films by introducing several seed layers	共同	2024年7月	International Conference on Magnetism 2024 (ICM2024) (Bologna, Italy)	Y. Mori, M. Doi and T. Shima	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	栫　修一郎	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2017年1月～	日本鉄鋼協会 会員
2009年10月～	IEEE (IEEE Magnetics Society) 会員
2001年5月～	応用物理学会 会員
1996年～	日本磁気学会 会員
1995年7月～	電気学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	原　明人	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
スライドと板書による理解度の向上	2021年4月1日～	スライドと板書による理解度の工場
manabaを使った講義	2021年～	パワーポイントを使った講義、アクテイブラーニング、manabaを使ったレポートなど
manabaを使った双方向講義	2020年5月～	パワーポイントを使った講義、アクテイブラーニング、manabaを使った双方向講義
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Heterogeneous monolithic complementary thin-film transistor with n-channel polycrystalline-silicon and upper p-channel double-gate polycrystalline-germanium thin-film transistors on a glass substrate	共著	2025年1月	IOP Publishing, Jpn.　J. Appl. Phys., 64	Yuto Ito,Daiki Goshima,Akito Kurihara,Akito Hara	pp.01SP241-1-01SP241-6
Four-Terminal Polycrystalline-Silicon Vertical Thin-Film Transistors on Glass Substrates for pH Sensor Applications	共著	2024年9月	The Electrochemical Society, ECS Trans., 114(3)	Kosei Suzuki,Masahide Nitta,Tetsuo Tabei,Akito Hara	pp.49-54
Performance of Double Gate P-ch Cu-MIC Poly-Ge TFTs on Flexible Plastic Substrates and Their Feasibility for CMOS Inverter	共著	2024年7月	Wiley Online Library, Wiley Online Library, 55(1)	Akito Kurihara,Sho Suzuki,Toshiyuki Tsuchiya,Tetsuo Okuyama,Akito Hara	pp.1479-1482
Performance evaluation of polycrystalline Si1-xGex thin-film transistorsfabricated by continuous-wave laser lateral crystallization on glass substrates	共著	2024年6月	IOP Publishing, Jpn. J. Appl. Phys., 63(6)	Tatsuya Sagawa,Kuninori Kitahara,Akito Hara	pp.061001-1-061001-7
Evaluation of extremely thin polycrystalline germanium films and their TFT performance fabricated at 400 ℃ by Cu-induced crystallization on a glass substrate	共著	2024年5月	IOP Publishing, Jpn. J. Appl. Phys., 63(5)	Sho Suzuki,Akito Hara	pp.051001-1-051001-7
Four-terminal polycrystalline-silicon vertical thin-film transistors on glass substrates	共著	2024年4月	IOP Publishing, Jpn. J. Appl. Phys., 63(4)	Kosei Suzuki,Kotaro Kusunoki,Yuto Ito,Akito Hara	pp.041002-1-041002-7
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
Poly-Ge TFTとOxide TFTを利用したハイブリッドCMOSの検討	単独	2025年3月	2025年　春　応用物理学会(東京理科大学)	栗原義人、五嶋大喜、原明人	
ガラス基板上の縦型ダブルゲートpoly-Si薄膜トランジスタを用いたCMOSインバータの特性	共同	2025年3月	2025年　春　応用物理学会(東京理科大学)	鈴木 康聖、原 明人	
ガラス基板上LSIに向けたhigh-k 4端子縦型poly-Si薄膜トランジスタ	共同	2025年3月	2025年 東北地区若手研究者発表会(東北学院大学)	庄子大貴, 鈴木康聖, 原明人	
ガラス基板上の4端子縦型poly-Si薄膜トランジスタのpHセンサ応用	共同	2025年3月	2024年度生体医歯工学共同研究拠点成果発表会(東京科学大学　すすかけ台)	鈴木康聖、原明人、田部井哲夫	
Four-terminal polycrystalline-silicon vertical thin-film transistors on glass substrates and their application as pH sensors	共同	2024年12月	The 9th International Symposium on Biomedical Engineering(アクトシティ浜松コングレスセンター)	K. Suzuki, T. Tabei and A. Hara1	
ゲートラストプロセスによるガラス基板上のダブルゲートpoly-Ge TFT の開発	共同	2024年12月	2024年　応用物理学会　東北地区学術講演会(東北大学)	五嶋大喜、伊藤壮琉、栗原義人、原明人	
下層にpoly-Si TFTおよび上層にpoly-Ge TFTを利用したガラス基板上モノリシック異種半導体CTFT	共同	2024年12月	2024年　応用物理学会　東北地区学術講演会(東北大学)	伊藤悠人、五嶋大喜、栗原義人、原明人	
ガラス基板上のp-ch 4端子多結晶シリコン縦型薄膜トランジスタ	共同	2024年11月	第21回薄膜材料デバイス研究会(龍谷大学)	鈴木康聖 、庄子大貴、原明人	
ゲートラストプロセスによるフレキシブルプラスチック基板上の ダブルゲートCu-MIC p-ch poly-Ge TFTの開発	共同	2024年11月	第21回薄膜材料デバイス研究会(龍谷大学)	栗原義人、五嶋大喜、伊藤悠人、原明人	
下層にNi-MIC poly-Si TFTおよび上層にCu-MIC poly-Ge TFTを利用した ガラス基板上モノリシック異種半導体CTFT	共同	2024年11月	第21回薄膜材料デバイス研究会(龍谷大学)	伊藤悠人、五嶋大喜、栗原義人、原明人	
Four-Terminal Polycrystalline-Silicon Vertical Thin-Film Transistors on Glass Substrates for pH Sensor Applications	共同	2024年10月	ECS prime 2024(Hawaii)	K. Suzuki, M. Nitta, T. Tabei and A. Hara	
ガラス基板上の4端子縦型poly-Si薄膜トランジスタのpHセンサ応用	共同	2024年9月	2024年　秋　応用物理学会(朱鷺メッセ)	鈴木康聖、田部井哲夫、原明人	
ゲートラストプロセスによるガラス基板上のダブルゲート poly-Ge TFTの開発	共同	2024年9月	2024年　秋　応用物理学会(朱鷺メッセ)	五嶋大喜、栗原義人、鈴木翔、原明人	
Heterogeneous and monolithic complementary TFT consisting of an underlying n-ch top-gate poly-Si TFT and a upper p-ch double-gate poly-Ge TFT on a glass substrate	単独	2024年9月	2024　International Conference of Solid State Devices and Materials(姫路)	Yuto Ito, Daiki Goshima, Akito Kurihara and Akito Hara	
Low temperature poly-Ge TFTs on glass and plastic substrates	単独	2024年9月	2024　International Conference of Solid State Devices and Materials(姫路)	Akito Hara, Hitoshi Suzuki, Sho Suzuki, Yuto Ito, Daiki Goshima, Akito Kurihara	
Double gate p-ch Cu-MIC poly-Ge TFT on a glass substrate by gate-last process	共同	2024年8月	2024 International Meeting of Information Display(Korea)	Daiki Goshima, Sho Suzuki and Akito Hara	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）					

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究C	2022年度～2024年度	共同(研究代表者)	
競争的資金等の外部資金による研究	2016年度～2024年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2017年4月～	応用物理学会 東北支部幹事
2017年4月～	応用物理学会 東北支部 幹事
2008年6月～	電子情報通信学会 会員
2006年11月～	日本表面真空学会 会員
1988年2月～	応用物理学会 会員
1985年1月～	日本物理学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
セミコンジャパン　2024	東京ビックサイト	2024年12月～2024年12月	東北学院大学半導体材料デバイス研究室で行っている半導体研究の展示

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	准教授	氏名	桑野　聡子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
講義におけるアクティブラーニング的学習方法の試み	2020年5月～	実験実習講義において、実験動画を作成し、さらにmanabaにおける実験内容の振り返りテストを作成した。このことにより受講生に授業として動画を視聴するだけでなく、テストに回答する為に、動画を複数回に渡り確認させることで学習効果を深めさせた。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
自然科学実験ファンダメンタルズ　改訂版第7版（東北学院大学工学部）について、学生が予習・復習しやすくなるように、実験動画に加え、オンラインによる小テスト、講義解説を行った。	2020年5月～	予習・復習テストの課題を出すことで、円滑な修学に繋げた。また、それらのテストの解説を実験内容の解説に加えて、説明した。加えて、基礎化学演習などの他の関連科目の講義において、当実験講義についての内容を解説することで、実験における予習・復習が円滑に進む様にした。
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
合気道部部長	2024年4月1日～	

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2013年2月～	日本物理学会 会員
2009年9月～	日本表面科学会会員 会員
2008年5月～	日本金属学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	准教授	氏名	佐々木　義卓	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
初年次基礎科目における学習支援	2024年4月～2025年3月	工学部1年生の必修科目である微分積分学や線形代数学の授業において、毎時、授業時間の1/3程度は理解を深めるための演習時間に設定している。この時間を利用して直接指導を行うとともに、学生の理解度の把握にあたった。また、主に高校時の基礎知識の補充を行うベーシック数学では、演習中心の指導を通じて、学習内容の定着を図った。授業時間外にも適時時間を設けて学生の学習サポートを行ったり、復習用の教材を整備することで、学習内容の定着・深化に努めた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	学生の習熟度把握に努め、とりわけ学習支援が必要な学生に適時指導を行うことで学力向上を図る。
今年度の進捗状況	演習の時間を通じて、学生の習熟度把握ができるようになってきた。また、復習する機会を増やすように、毎時ホームワークの教材を提供するなどして、学生の学修内容の定着を図っている。 一方、授業内容と受講生の基礎知識との間のギャップも見えてきており、改善を図ってきた。
来年度の進捗目標	授業内容を精査するとともに、学生の学力向上に適う教材を作成する。適切な復習・予習が行える機会・環境を整備していく。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
多重Mahler測度と多重T値について	単独	2024年9月	日本数学会2024年度秋季総合分科会(大阪大学)	佐々木 義卓	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	・種々の多重ゼータ関数の整数点における特殊値の性質の解明 ・多重ベルヌーイ数および関連するゼータ値の性質の解明 ・ゼータMahler測度を通じた多重ゼータ値の性質の解明 ・多重対数積分を用いた多重Mahler測度の計算方法の確立
今年度の進捗状況	・多重Hurwitzゼータ値の双対公式を解明した。 ・多重Mahler測度とレベル2の多重ゼータ値の関係を解明した。
来年度の進捗目標	・多重Mahler測度と多重サイン関数、代数曲線に付随する多重ゼータ値の関係の解明

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2024年度～2026年度	個別(研究代表者)	
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2006年10月～		日本数学会会員 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	**場　　所**	**開催年月日（西暦）**	**発表・展示等の内容等**
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			
・授業改善のための学生アンケート実施委員 ・教職課程センター運営委員			

2024年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	准教授	氏名	鈴木　仁志	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2．作成した教科書、教材、参考書		
21世紀のキーテクノロジーを学ぶⅡテキスト	2022年7月21日～	電子顕微鏡で目に見えない物質の形態、構造を調べてみよう　～回折現象を用いた物質の解析～
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
工学基礎教育センター相談員	2020年4月1日～	講義の分からない学生に対する補助教育業務　週1コマ
電気電子工学科グループ主任	2019年4月1日～	
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
Al-SiO2系粒子の形態と構造に関する研究II	共同	2025年3月	日本物理学会　2025年春季大会(オンライン)	◎藤田悠宇希, 五十嵐蓮尚, 大坪稔, 石井浩平, 鈴木仁志	
Mg-Si系、Mg-SiO2系粒子の形態とその構造	共同	2024年11月	第53回結晶成長国内会議(工学院大学)	◎藤田悠宇希, 砂田悠登, 白田祥丈, 鈴木仁志	
Al-SiO2系粒子の形態と構造に関する研究	共同	2024年9月	日本物理学会　第79回年次大会(2024年)(北海道大学)	◎藤田悠宇希, 大坪稔, 石井浩平, 鈴木仁志	
Low temperature poly-Ge TFTs on glass and plastic substrates	共同	2024年9月	2024 International Conference on Solid State Devices and Materials(Arcrea HIMEJI)	◎Akito Hara, Hitoshi Suzuki, Sho Suzuki, Yuto Ito, Daiki Goshima, Akito Kurihara	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究（C）	2024年度～2025年度	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2024年9月	多賀城市との連携協力協定の一環として開催する 2025年度 工学に関わる啓発活動 司会, 講師
2024年8月	東北学院中高大一貫教育事業として開催する 2024年度 工学に関わる啓発活動 司会, 講師
2024年8月	多賀城市との連携協力協定事業の一環として開催する 2024年度 工学に関わる啓発活動 司会, 講師
2009年2月～	日本地球惑星科学連合会員 委員
2008年～	中学生対象 工学に関する啓発活動 講師
2003年6月～	日本結晶成長学会員 会員
2000年1月～	日本物理学会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	李　相勲	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Development of low-cost rolling base isolation system for seismic protection of rubble stone masonry buildings in Himalayan Mountain range	共著	2024年11月	Frontiers in Built Environment	Jiro Takagi, Takeshi Masui, Yoshikazu Araki, Kohju Ikago, Sanjay Pareek, Sanghun Lee, Yusuke Suzuki, Ryuta Enokida, Jia Guo, Kshitij C. Shrestha, Iori Fukuda, Hayato Miyagawa	pp.
Feasibility of sliding base isolation for rubble stone masonry buildings in the Himalayan Mountain range	共著	2024年7月	Frontiers in Built Environment	Yusuke Suzuki, Mayako Tada, Ryuta Enokida, Jiro Takagi, Yoshikazu Araki, Sanjay Pareek, Sanghun Lee, Kohju Ikago, Jia Guo, Kshitij C. Shrestha, Iori Fukuda, Takeshi Masui	pp.
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
PC 枕木に対するサステナブル補修システムの開発	共同	2025年2月	令和6年度 土木学会東北支部技術研究発表会(宮城県仙台市)	奈良 優樹, 柳谷 藍, 門脇 良樹, 李 相勲	
ボールベアリングを用いた転がり免震効果と残留変位低減手法に関する研究	共同	2025年2月	令和6年度 土木学会東北支部技術研究発表会(宮城県仙台市)	今野 倖太朗, 三浦 直己, 髙橋 賢祐, 李 相勲	
RC床版の複合劣化に対する非破壊試験とその評価	共同	2025年2月	令和6年度 土木学会東北支部技術研究発表会(宮城県仙台市)	高橋 賢有, 小岩 慎太郎, 李 相勲	

塩害及び凍害によるRC床版の複合劣化の振動測定に関する解析的研究	共同	2025年2月	令和6年度 土木学会東北支部技術研究発表会(宮城県仙台市)	高野璃来, 大友真道, 李 相勲	
Study on the effect of rolling seismic isolation using ball bearings and the methods to reduce residual displacement	共同	2025年2月	2025 Annual Conference of the Korean Society of Hazard Mitigation(Jeju Shinwha World, South Korea)	Sanghun Lee, Kotaro Konno	
PC 梁の自己修復システムに対する非破壊試験	共同	2024年11月	非破壊検査協会 2024年度 秋季講演大会(宮城県仙台市)	柳谷藍, 奈良優樹, 門脇良樹, 李相勲	
床版の複合劣化に対する非破壊試験とその評価	共同	2024年11月	非破壊検査協会 2024年度 秋季講演大会(宮城県仙台市)	小岩 慎太郎, 高橋 賢有, 李 相勲	
Study on Construction of Self-Repairing System for Prestressed Concrete	共同	2024年10月	Korea Institute for Structural Maintenance and Inspection, 2024 Autumn Conference(The Westin Chosun Busan Hotel)	Yoshiki Kadowaki, Sanghun Lee	
Study on the rolling-type seismic isolation effect and residual displacement reduction method using ball bearings	共同	2024年10月	Korea Institute for Structural Maintenance and Inspection, 2024 Autumn Conference(The Westin Chosun Busan Hotel)	Kotaro Konno, Sanghun Lee	
塩害および凍害によるRC床版の複合劣化に対する測定システムの構築	共同	2024年4月	日本非破壊検査協会東北支部第11回 支部会・講演会(宮城県仙台市)	高橋 賢有, 吉田 慎悟, 小松 柊希, 李 相勲	
プレストレストコンクリート梁に対する自己修復システムと非破壊検査	共同	2024年4月	日本非破壊検査協会東北支部第11回 支部会・講演会(宮城県仙台市)	門脇良樹, 今野倖太朗, 李相勲, 遠藤孝夫	
サーマルカメラによる各種鋼材の塑性ひずみにおける温度変化に関する研究	共同	2024年4月	日本非破壊検査協会東北支部第11回 支部会・講演会(宮城県仙台市)	今野 倖太朗, 佐藤 優大, 李 相勲	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))	2019年度～2023年度	共同(研究分担者)	途上国の組積造建物耐震化に向けた滑り免振機構の開発と社会実装基盤の整備

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2020年～	建築学会 会員
2015年10月～	土木技術奨励賞選考委員会委員 委員
2012年～	コンクリート教会 会員
2010年4月～	非破壊検査協会 鉄筋コンクリートの非破壊検査試験部門委員会 幹事
2010年～	非破壊検査協会 会員
2006年4月～	韓国防災学会 会員
1999年4月～	土木学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	井川　望	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	石川　雅美	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
1）コンピュータプログラミング	2020年4月～	1）全15回の授業のうち11回の課題を与え，提出状況を確認している。 2）課題については，授業時間中に20分程度の時間を与えて，学生自身が考え理解する機会を設けた。 3）授業開始時に，前回の課題の解説を行った。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年4月～2026年3月	日本コンクリート工学会　年次学術講演会実行委員長 会員
2022年5月～	土木学会 会員
2022年5月～	土木学会 東北支部副支部長
2022年3月～	日本コンクリート工学会 コンクリート工学年次大会委員
2021年4月～	日本コンクリート工学会
2021年4月～	日本コンクリート工学会 マスコンクリートソフト普及委員会委員長
2019年4月～	国土交通省東北地方整備局事業評価監視委員会　副委員長 副委員長

2019年4月～	国土交通省　東北地方整備局　樋門等健全度評価検討委員会　委員 委員
2019年4月～	国土交通省 東北地方整備局 宮城ブロック総合評価委員会　委員 委員
2018年5月～	公益社団法人 日本コンクリート工学会　マスコンクリートのひび割れに関する調査委員会　幹事長 会員
2018年4月～	インフラメンテナンス国民会議 東北フォーラム フォーラムリーダー
2018年4月～	インフラメンテナンス国民会議　東北フォーラム　フォーラムリーダー 委員
2017年5月～	公益社団法人　日本コンクリート工学会　マスコンクリートソフト普及委員会　幹事 会員
2017年4月～	ダム工学会　会員 会員
2016年4月～	公益社団法人 プレストレストコンクリート工学会 会員 会員
1981年～	公益社団法人 日本コンクリート工学会　フェロー会員 会員
1981年～	公益社団法人 土木学会　正会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	櫻井　一弥	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
実施プロジェクトへの学生参加による建築実務教育	2022年4月～	実際に進んでいる建築やまちづくりのプロジェクトに学生を参加させることにより，講義や演習で学んだ内容が実社会でどのように活用されているか学習させる機会を積極的に設けている（主に卒論生や大学院生が対象）。
少人数対話方式（エスキース）による学生の自主的な建築作品制作の促進	2022年4月～	学生が提案する建築空間（図面や模型）に対して，一対一での対話方式（エスキース）によるデザインの高度化を図るとともに，自主的な制作を促すような指導を行っている。
施工中の現場見学，完成した建物の見学による都市・建築の現場感覚の涵養	2022年4月～	施工中の建物や完成した後の建物の見学会などを行い，三次元空間のスケール感を涵養する講義・演習を行っている。
建築初学者に対する建築教育の効果的な導入に関する工夫	2022年4月～	初等教育で全く触れる機会のない建築やデザインに関する興味と理解を深めるため，画像・映像などのビジュアル資料や模型による講義・演習を心がけている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
宮城県知事指定建築士技術講習の講師	2022年4月～	宮城県建築士事務所協会の依頼に基づき，建築士に対するCPD事業の一貫として開催された知事指定講習の講師を務めた。
一級建築士定期講習の講師	2022年4月～	建築士法で3年に一度の受講が義務づけられている一級建築士の定期講習において，建築技術教育普及センターの依頼に基づき年に数回の講師を務めた。
建築家の講演会等に対する学生の積極的な参加促進	2022年4月～	仙台市内などで開催される，一般向けの建築関連講演会やセミナーに学生を積極的に参加させ，社会との接点を増やすよう指導している。

現在の課題・目標	1）事前事後の学習をしやすい資料・課題の配布や明示、授業内外での学生間の教えあいを促す取り組みなど、学生主体による学びのための工夫を取り入れる。 2）授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3）授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 ※　教育改善アンケートにおいて以下の2項目で達成度を測る。 3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。
今年度の進捗状況	1）事前事後の学習をしやすい資料・課題の配布や明示、授業内外での学生間の教えあいを促す取り組みなど、学生主体による学びのための工夫を取り入れた。 2）授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝えた。 3）一方向の開設とならないよう注意して講義を進めた。 3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進めた。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保した。
来年度の進捗目標	1）来年度も、事前事後の学習をしやすい資料・課題の配布や明示、授業内外での学生間の教えあいを促す取り組みなど、学生主体による学びのための工夫を取り入れる。 2）授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3）授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					

C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
下増田公民館・下増田児童センター	共同	2024年12月	第3回JIA東北建築大賞2024 公開二次審査(仙台)	櫻井一弥, 太田秀俊, 安田直民	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	1）建築家として、社会的に意義ある建築作品を生み出し、地域の発展に寄与する。 2）デフォレスト館の保存修復に向けた活動を積極的に行う。 3）地方公共団体の公共施設整備にかかる審査員などを積極的に引き受ける。 4）土樋新棟の設計定例会議に出席し、よりよい建物となるよう意見を具申する。
今年度の進捗状況	1）いくつかの建築作品を関連雑誌等に発表することができた。 2）デフォレスト館の保存活用基本計画に関する調査を実施することができた。 3）いくつかの自治体の委員を任命され、実施することができた。 4）土樋新棟の設計定例会議に出席し、意見を述べることができた。
来年度の進捗目標	1）建築作品の設計を積極的に行い、然るべき方法で発表する。 2）デフォレスト館の保存修復に向けた活動を積極的に行う。 3）引き続き東北地方を中心に地方公共団体の公共施設整備に積極的に関わる。 4）土樋新棟の計画に関わり、全学的に有意義な建物となるようアドバイスする。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年9月～	楢葉町多機能拠点土地活用推進会議 委員
2022年3月～	多賀城市歴史的風致維持向上協議会 委員
2020年7月～	宮城県収用委員会 委員
2020年7月～	登米市指定管理者選定委員会 委員
2019年5月～	宮城県大河原町大規模事業評価委員会 委員
2015年5月～	NPO法人　とうほくPPP・PFI協会 理事
2014年10月～2025年3月	宮城県多賀城跡調査研究委員会 委員
2014年4月～	日本建築家協会東北支部役員　事業委員会 委員長
2013年4月～	日本建築学会東北支部　建築デザイン教育部会
2012年4月～	管理建築士定期講習 講師
2012年3月～	せんだいデザインリーグ　卒業設計日本一決定戦　審査員(せんだいデザインリーグ　卒業設計日本一決定戦)
2011年4月～	日本建築家協会東北支部宮城地域会　事業委員会 委員長
2010年5月～	一級/二級/木造建築士　定期講習 講師
2010年4月～	仙台建築都市学生会議　アドバイザリーボード　アドバイザー(仙台建築都市学生会議　アドバイザリーボード　アドバイザー) 助言・指導
2009年10月～	公益社団法人　日本建築家協会 会員
2004年7月～	日本建築学会　司法支援建築会議運営委員会　調査研究部会
2002年4月～	日本建築学会東北支部　建築デザイン教育部会
2000年5月～	日本インテリアコーディネーター協会 会員
2000年4月～	日本建築学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
第1回　のとボイス	金沢みらいのまち創造館	2025年2月	シンポジウム
現在の課題・目標	1）建築家の地位向上と地域の発展のために、学外活動を積極的に行う。 2）建築作品の賞には積極的に応募する。		
今年度の進捗状況	1）シンポジウムなどを通して、学外での活動を行うことができた。 2）いくつかの賞に応募した。今回は選外となった。		
来年度の進捗目標	1）シンポジウムや展覧会等には積極的に参加するとともに、自ら企画を行う。 2）建築作品に関する賞には積極的に応募する。		

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

1）学校法人東北学院　理事長特別補佐（キャンパス整備担当）
2）東北学院大学キャンパス整備推進本部　委員
3）東北学院文化財委員会　委員
4）デフォレスト館保存活用計画策定委員会　委員長
5）同WG　委員長
6）土樋キャンパス再整備計画推進WG　委員

2024年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	鈴木　道哉	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
講義内容を理解できているか確認させる時間・機会を設ける。	2020年～	授業でこまめに小テストを行いこれに伴い毎回の授業の復習の動機付けを行い、学生自身に自分の理解度を確認させる。
多様な評価方法を採用する。	2019年～	期末試験による評価の比率を下げ、小テスト、レポート課題など多様な評価方法を実施する。
学習の動機付けを行う。	2019年～	建築分野で当該の知識がなぜ必要となるかを積極的に授業で解説していく。
2．作成した教科書、教材、参考書		
建築設備	2021年～	独自に教材を作成し、毎回配布して学習効果を高める工夫をしている。また毎年、最新情報に更新していく。
建築設備計画	2021年～	独自に授業教材を作成するとともに、設備設計演習課題及び解答を作成して、授業に取り入れ理解度アップを図っている。適宜、最新情報に更新していく。
建築環境工学	2021年～	独自に教材を作成し、毎回配布して学習効果を高める工夫をしている。また毎年、最新情報に更新していく。
建築環境計画	2021年～	独自に教材を作成し、毎回配布して学習効果を高める工夫をしている。また毎年、最新情報に更新していく。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	1.事前事後の学習をしやすい資料・課題の配布や明示、授業内外での学生間の教えあいを促す取り組みなど、学生主体による学びのための工夫を取り入れる。 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに，個々の課題等の意図を学生に伝える。（継続） 3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。
今年度の進捗状況	1.に関して：授業中に演習問題で学生間の教えあいを促すように時間をとった。 2.に関して：初回に到達目標を説明した。また建築士の出題を例題として用いて、どのレベルまで到達すれば良いかを理解させた。 3.に関して：LMSの個別連絡機能を活用し、成績が振るわない学生に指導した。またLMSで学生からの質問に適宜、回答した。
来年度の進捗目標	1.に関して：継続して講義中に教えあいの時間を確保していく。 2.に関して：継続して授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに，個々の課題等の意図を学生に伝える。 3.に関して：継続して、LMSの機能を利用して双方向のコミュニケーションに努める。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	各種の複合用途建物のエネルギーシステムの効率的運用によるエネルギーの効率向上の研究を実施していく。
今年度の進捗状況	事務所と集合住宅の複合用途建物のエネルギーシステムの効率的運用によるエネルギーの効率向上の研究を実施した。
来年度の進捗目標	2024年度と異なる複合用途施設のエネルギーシステムの効率的運用によるエネルギーの効率向上の研究を実施する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2019年4月～	日本建築学会東北支部　環境部会 委員
1996年4月～	日本建築学会LCA評価小委員会委員 会員
1996年4月～	空気調和衛生工学会会員 会員
1993年4月～	日本建築学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度　入試委員
工学部総務委員会　委員

2024年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	武田　三弘	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
実験用の動画や写真撮影を行い、疑似体験できるようなパワーポイントによる講義の実施	2020年4月1日～	専門科目（コンクリート工学，鉄筋コンクリート工学，コンクリートメインテナンス工学）については材料や機械，劣化現象などイメージが出来ないものが多いため，写真や動画などを多く取り入れ，理解力の向上に努めた。
最新の情報を取り入れたパワーポイントの作成	2020年4月～	講義内容については、毎年最新の情報を取り入れてパワーポイントを作成している。
コンクリート技士・主任技士試験の問題を用いた小テストの実施	2015年9月～	講義後の小テストには，コンクリート技士・主任技士の試験問題で出題された問題から関係する箇所をピックアップした問題を出題している。卒業後，この資格試験を受験する際には，大いに役に立つ内容となっている。
一問一答のクイズ形式による学習内容の確認	2010年4月～	講義の冒頭で，前回までの講義の中で重要な事項を質問し，答える形式を繰り返し，記憶に定着させる事を行っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
Acoustic Emission and Related Non-destructive Evaluation Techniques in the Fracture Mechanics of Concrete, Fundamentals and Applications Second Edition, WOODHEAD PUBLISHING SERIES IN CIVIL AND STRUCTURAL ENGINEERING	2020年11月～	MASAYASU OHTSU,etc.: Acoustic Emission and Related Non-destructive Evaluation Techniques in the Fracture Mechanics of Concrete, Fundamentals and Applications Second Edition, WOODHEAD PUBLISHING SERIES IN CIVIL AND STRUCTURAL ENGINEERING,2020.11
閲覧資料の作成（コンクリートメインテナンス工学）	2020年4月1日～	コンクリートメインテナンス工学においては、内容が特殊すぎて、適当な教科書が無い状況のため，自ら講義資料を作成し、それをGoogle上で閲覧できるようにしている。
講義内容の復習のための課題の作成（コンクリート工学，課題1～13）	2019年4月6日～	各講義内容の復習として課題（コンクリート技士・主任技士）を出し，その内容について添削・説明した.
配付資料の作成（環境建設工学実験）	2018年4月9日～	コンクリート実験における報告書の書き方や実験方法について書かれた教材を作成し配付している。特に耐力計算用の精算書の作成や，コンクリートの応力ーひずみのデータを準備し，エクセルを使用したグラフ作成なども実施している。
演習問題の作成（14回分，線形代数学）	2018年4月9日～	講義中に行った内容の課題を出題し，復習を兼ねて演習問題を解く課題を14回分準備している。翌週解答を行い，間違った課題に関しては再度解き直しをやり，正解するまで解かせるような工夫をして理解力に努めている。
コンクリート工学の教科書として「コンクリート工学［第3版］」を発行した。	2017年9月～	大塚浩司，武田三弘，小出英夫，阿波　稔，子田康弘：コンクリート工学［第3版］，朝倉書店，2017.9
鉄筋コンクリート工学のため「新版 鉄筋コンクリート工学［第2版］」を発行した。	2016年4月～	大塚浩司，小出英夫，武田三弘，阿波　稔，子田康弘：新版 鉄筋コンクリート工学［第2版］，技報堂出版，2016.4
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
高校生橋梁模型コンテストの審査委員長を努める。	2018年8月～	国土交通省東北地方整備局東北技術事務所が実施している「高校生橋梁模型コンテスト」の審査委員長を2018年から担当し，参加した高校生の作品に対して様々な講評を行っている。
JABEEアンケートや講義中に行ったアンケートにおける学生からの意見に対応している。	2018年4月9日～	線形代数学では，「課題の提出時に部屋にいない事が多い」に対して部屋にいる時間帯を知らせたり，コンクリート工学では「計算方法が知りたい」に対しては，講義の前に板書で解答を示すなど対応している。
JABEEアンケートにおける「分かりやすい講義に努めた教員」のアンケートで上位にある。	2016年4月13日～	本学科ではJABEEを受審しており，環境建設独自にJABEEアンケートを行っており，その中で，「分かりやすい講義に努めた教員」というアンケートで一位となった．なお，昨年度は二位，一昨年は一位であった.

現在の課題・目標	事前事後の学習をしやすい資料・課題の配布や明示、授業内外での学生間の教えあいを促す取り組みなど、学生主体による学びのための工夫を取り入れる。

今年度の進捗状況	授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。
来年度の進捗目標	授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
粗骨材の混入率や溶脱がX線造影撮影法によるコンクリートの強度推定に及ぼす影響	共著	2024年6月	コンクリート工学年次論文集, Vol.46(No.1)	鴇 泰幸, 髙橋　諒, 田村　優汰, 武田 三弘	pp.1699-1704
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
粗骨材の割合がX線造影撮影法を用いた強度推定に及ぼす要因について	共著	2024年9月	令和6年度土木学会全国大会79回年次学術講演会, V-844	髙橋 諒, 武田 三弘	pp.
簡易透気試験を用いたコンクリート表層評価における測定深さに関する研究	共著	2024年9月	令和6年度土木学会全国大会79回年次学術講演会, V-832	海沼 飛鳥, 武田 三弘	pp.
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
TOPICS～仙台市煉瓦下水道～	単著	2024年7月	コンクリート工学, コンクリート工学	武田　三弘	pp.566-567
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
鉄筋コンクリート製構造物の耐久性改善構造及び鉄筋コンクリート製構造物の改善方法	7496964		2024年5月31日		

現在の課題・目標	本年度は，以下の5つの研究テーマについて研究を行うことを目標にした。 ・津波履歴を受けた建築基礎部の塩害に関する研究 ・簡易透気試験におけるコンクリート表層評価に関する基礎研究 ・FRC砕石を用いたコンクリートの物性およびCO?吸収量に関する基礎研究 ・X線造影撮影法による実コンクリート構造物を想定した強度推定に関する基礎研究（その2） ・CfFAを用いたモルタルの自己修復に関する基礎研究
今年度の進捗状況	本年度実施した5つの研究テーマについては，すべて順調に成果が得られ，卒業研究発表会では3つのテーマについて「最優秀講演賞」と「優秀講演賞」を獲得することが出来た。また，研究成果については，土木学会東北支部技術研究発表会にて3件発表することが出来た。
来年度の進捗目標	来年度の研究テーマとしては， ・フライアッシュと微生物を用いた自己修復コンクリートの研究 ・高出力X線発生装置によるコンクリート構造物の補修状況の確認方法に関する研究 ・FRC砕石を用いた環境配慮型コンクリートの利活用に関する研究 ・塩分吸着性能を有する補修材の補修効果の検証 ・簡易透気試験を用いたプレキャストPC床版の品質評価に関する研究 ・簡易透気試験を用いたコンクリートの密実性評価に関する研究 ・コンクリートに発生する色むらに関する研究 ・養生マットがコンクリートの密実性に及ぼす影響 の8テーマについて実施する予定である。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年2月～2026年1月	公益社団法人日本コンクリート工学会「選挙管理委員」委員

2023年12月～2024年11月	一般社団法人日本非破壊検査協会2024年度秋季講演大会実行委員会実行委員 委員
2023年6月～2025年5月	・公益社団法人日本コンクリート工学会「役員候補推薦・調整委員会」委員
2022年11月～	一般社団法人　非破壊検査協会 会員
2022年10月～2024年9月	・公益社団法人日本コンクリート工学会「助成金検討委員会」委員
2022年10月～2024年9月	公益社団法人日本コンクリート工学会　助成金検討委員会委員 委員
2020年8月～	東日本高速道路株式会社東北支社宮城地域技術懇談会委員 委員
2020年8月～	東日本高速道路株式会社東北支社宮城地域技術懇談会 委員
2020年4月～	東北地方整備局総合評価委員会専門部会委員 委員
2018年8月～	高校生橋梁模型コンテスト審査委員長 委員長
2018年6月～	多賀城市都市計画審議会委員 委員
2016年7月～	松島町入札監視委員 委員
2015年9月～	国土交通省東北地方整備局道路ドクター 委員
2014年3月～	宮城県コンクリート診断士会会長 委員
1999年9月～	東北学院大学工学部TGしびる会事務局長 委員
1989年4月～	公益社団法人　日本コンクリート工学会 会員
1989年4月～	公益社団法人　土木学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	千田　知弘	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2023年度教育功績等優秀教員	2024年	
オフィスアワーを拡大し，学生が任意時間に質問をしに来れるようにした．また，学生室の一部を開放し，当該科目に限って自習できるようにしている．	2018年～2024年	オフィスアワーは教員が自分の予定等を鑑み指定するものであり，学生が行ける時間に設定されているとは限らない．また，質問をしたい学生が大勢いる場合，オフィスアワー内に終わらないことがある．そこでオフィスアワーに限らず，学生の質問に応じることにした．また，聞いたことをすぐに確認できるように，学生室の一部を開放し，すぐに復習できるようにした．今年度は，コロナ禍ということもあり，毎週土曜日に5時間ほどzoomをつなげ，学生の質問対応を行った．
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	1．図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど，学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 2．授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに，個々の課題等の意図を学生に伝える。 3．授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。
今年度の進捗状況	1.に関しては、板書の半分近くを図を用いた説明とし、また、建設関連や災害関連の時事ネタと、現在取り組んでいる勉学との関係性を都度説明に入れた． 2.に関しては，数回の講義に1回の割合で何度も説明し，レポート提出の重要さを示した．また，講義内で企業の方を招聘し，力学を学んだ先にあるものを実感してもらう機会を設けた． 3.に関しては，演習時間等で意見を聞くと共に，オフィスアワーの時間を多く設けた．本年度は，状況に応じて，グループワークを取り入れた． 上記の成果は，学科が独自に行っている学生による教育改善アンケート(JABEEアンケート)で高い評価を受け、取り組んでいる内容に多くの好感が示されていた．また，3年連続となる学科1位の評価を得た．
来年度の進捗目標	本年度，学生から高い評価を得たので，来年度も継続して実施していく． 1．図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど，学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 2．授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに，個々の課題等の意図を学生に伝える。 3．授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 なお，本目標は，学科教員の共通目標と定められている．

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
逆断層に起因する地盤変動がワーレントラス橋に与える損傷に関する数値解析的検討	共著	2024年6月	土木学会，土木学会論文集，80(13)	若槻直暉，千田知弘，中沢正利，馬越一也，渡邊浩佑	pp.
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
ゴムの一面せん断試験時に接着層に生じる応力に関する数値解析的検討	共著	2024年9月	土木学会，令和6年度土木学会全国大会第79回年次学術講演会，79	渡邊浩佑，荒川弦太郎，千田知弘，寺澤貴裕，植田健介，佐藤京	pp.

逆断層に起因する地盤変動が8径間のワーレントラス橋に与える損傷に関するFEM解析	共著	2024年9月	土木学会, 令和6年度土木学会全国大会第79回年次学術講演会, 79	音山樹里, 若槻直暉, 千田知弘, 中沢正利, 馬越一也	pp.
逆断層に起因する地盤変動が4径間のワーレントラス橋に与える損傷に関するFEM解析	共著	2024年9月	土木学会, 令和6年度土木学会全国大会第79回年次学術講演会, 79	若槻直暉, 音山樹里, 千田知弘, 中沢正利, 馬越一也	pp.
せん断変形作用時に積層ゴム製支承の接着層に生じる最大主応力に関する数値解析的検討	共著	2024年9月	土木学会, 第44回地震工学研究発表会講演論文集, 44	荒川弦太郎, 千田知弘, 寺澤貴裕, 植田健介, 佐藤京, 渡邊浩佑	pp.1-5
接着層に着目した90° 剥離強さ試験と一面せん断試験時に生じる内部応力状態に関する数値解析的検討	単著	2024年9月	土木学会, 第44回地震工学研究発表会講演論文集, 44	荒川弦太郎, 千田知弘, 寺澤貴裕, 植田健介, 佐藤京, 渡邊浩佑	pp.1-4
せん断の影響に着目した地盤変動によるワーレントラス橋の損傷挙動と径間数との関係性に関する一考察	共著	2024年9月	土木学会, 第44回地震工学研究発表会講演論文集, 44	若槻直暉, 千田知弘, 中沢正利, 馬越一也, 音山樹里, 菅野恭平	pp.1-6
7N/mm載荷時の90° 剥離強さ試験体と水平せん断ひずみ250%時の一面せん断試験体に生じる相当応力に関する一考察	共著	2024年9月	土木学会, 第44回地震工学研究発表会講演論文集, 44	渡邊浩佑, 千田知弘, 寺澤貴裕, 植田健介, 佐藤京, 荒川弦太郎	pp.1-6
ゴム材料に着目した90° 剥離強さ試験と一面せん断試験時に生じる内部応力状態に関する数値解析的検討	共著	2024年7月	土木学会, 第27回橋梁等の耐震設計シンポジウム講演論文集, 27	渡邊浩佑, 千田知弘, 寺澤貴裕, 植田健介, 佐藤京, 荒川弦太郎	pp.1-8
積層ゴム製支承を対象としたFEM解析における接着層のモデル化の有無の影響	共著	2024年7月	第27回橋梁等の耐震設計シンポジウム講演論文集, 27	荒川弦太郎, 千田知弘, 寺澤貴裕, 植田健介, 佐藤京, 渡邊浩佑	pp.9-16
せん断の影響に着目した地盤変動によるワーレントラス橋の損傷挙動と径間数との相関性に関する数値解析的検討	共著	2024年7月	土木学会, 第27回橋梁等の耐震設計シンポジウム講演論文集, 27	若槻直暉, 千田知弘, 中沢正利, 馬越一也, 音山樹里, 菅野恭平	pp.261-268
強制変位が床版にのみ作用する条件下におけるワーレントラス橋の主構に生じる損傷挙動に関する一考察	共著	2024年7月	土木学会, 第27回橋梁等の耐震設計シンポジウム講演論文集, 27	音山樹里, 若槻直暉, 千田知弘, 中沢正利, 馬越一也, 菅野恭平	pp.269-274
地盤変動による損傷を考慮したワーレントラス橋の地震時挙動と径間数の関係	共著	2024年7月	土木学会, 第27回橋梁等の耐震設計シンポジウム講演論文集, 27	菅野恭平, 若槻直暉, 千田知弘, 中沢正利, 馬越一也, 音山樹里	pp.275-282

C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文

D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)

E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)

F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)

G. 学会における研究発表

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	耐震防災系の論文を2本以上投稿する.
今年度の進捗状況	耐震防災系において, 査読論文1編, 査読無し論文9編が学術誌に掲載されたので, 目標を達成できたと考える. ただ, 惜しむらくは, 査読論文2編がリジェクトされたので, 来年度に向けてブラッシュアップを図り, 更なる掲載数増加を図りたい.
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
その他の補助金・助成金	2022年度～2023年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2023年4月～	土木学会・地震工学委員会・性能に基づく橋梁等構造物の耐震設計法に関する研究小委員会 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	恒松　良純	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	1. 事前事後の学習をしやすい資料・課題の配布や明示、授業内外での学生間の教えあいを促す取り組みなど、学生主体による学びのための工夫を取り入れる。 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 ※　教育改善アンケートにおいて以下の2項目で達成度を測る。 3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。
今年度の進捗状況	1. 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど，学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに，個々の課題等の意図を学生に伝える。 3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 3.1授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	①景観計画における補助制度の実情に関する研究 ②景観まちづくりに関する色彩基準に関する研究 ③図書館建築における空間構成と計画に関する研究 ④土樋キャンパス周辺の街路景観に関する研究 ⑤図書館建築における避難に関する研究
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年4月～	日本建築学会　建築計画本委員会 会員
2024年4月	日本建築学会　建築計画委員会　計画基礎運営員会　委員 幹事
2024年4月	日本建築学会　建築計画本委員会 幹事
2023年10月～	国立大学法人　秋田大学大学院　非常勤講師 講師
2022年12月～	仙台市景観総合審議会 会長（2024年10月～）　副部会長（～2024年9月）
2022年12月～	仙台市景観総合審議会 屋外広告物部会 部会長
2022年4月～	日本建築学会　建築計画委員会　計画基礎運営員会　空間研究小委員会 主査
2021年10月～	女川町　都市計画審議会 副会長
2021年4月～	日本建築学会　東北支部 常議員
2018年12月～	宮城学院女子大学　非常勤講師
2018年6月～	多賀城市都市計画審議会委員 委員
2015年4月～	日本建築学会　建築計画委員会　計画基礎運営員会　委員 会員
2014年4月～	日本建築学会　建築計画委員会 計画基礎運営委員会 委員
2012年4月～	建築計画委員会　空間研究小委員会 委員（2012年4月～2018年3月：幹事・2019年4月～2022年3月：出版WG主査・2022年4月～：小委員会主査）
2012年4月～	日本建築学会　建築計画委員会　計画基礎運営員会 委員
2008年9月～	国土交通省東北地方整備局 東北地方道路研究会
2008年9月～	国土交通省東北地方整備局　東北地方道路研究会(国土交通省東北地方整備局　東北地方道路研究会)
2008年4月～	日本建築学会　東北支部　建築計画部会 委員
2007年4月～	日本建築学会　東北支部　建築計画部会　部会員 会員
2006年4月～	日本建築学会　建築計画委員会　計画基礎運営員会　空間研究小委員会 会員
2002年4月～	日本建築学会　建築計画委員会 空間研究小委員会 委員
2000年11月～	人間・環境学会会員 会員
1995年4月～	日本建築学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	中沢　正利	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進（構造力学Ⅲ）	2024年4月～2024年8月	毎回の授業後に復習用の計算課題を出題し，次週の授業前までに提出させてチェックし、次週の授業で返却するとともに模範解答を示した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
「構造力学Ⅲ」	2024年4月～2024年8月	学生が独自に予習できるように、構造力学問題集を作成して配付した。総ページ数30P程度。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	以下の項目についてより一層努力する。 ①図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。また、ネット上のURLを与えて、自習学習を促す。 ②授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 ③授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。
今年度の進捗状況	①講義中の機会を捉えて実務の話をし、その際には実例写真や参考となる動画を見せるようにした。 ②計算を要する課題を与えるようにしており、間違えた場合は計算精度を高めるために復習させることにした。 ③授業の開始時にシラバスのコピーを配付して説明をした。また、授業時以外にもメイルによる質疑応答を推奨し、レポートの再提出などを通して指導を継続した。
来年度の進捗目標	①事前事後の学習をしやすい資料・課題の配布や明示、授業内外での学生間の教えあいを促す取り組みなど、学生主体による学びのための工夫を取り入れる。 ②授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 ③授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
逆断層に起因する地盤変動がワーレントラス橋に与える損傷に関する数値解析的検討	共著	2024年6月	土木学会，土木学会論文集，80(13)	若槻直暉，千田知弘，中沢正利，馬越一也，渡邊浩佑	pp.
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
逆断層に起因する地盤変動が8径間のワーレントラス橋に与える損傷に関するFEM解析	共著	2024年9月	土木学会，令和6年度土木学会全国大会第79回年次学術講演会，79	音山樹里，若槻直暉，千田知弘，中沢正利，馬越一也	pp.
逆断層に起因する地盤変動が4径間のワーレントラス橋に与える損傷に関するFEM解析	共著	2024年9月	土木学会，令和6年度土木学会全国大会第79回年次学術講演会，79	若槻直暉，音山樹里，千田知弘，中沢正利，馬越一也	pp.
せん断の影響に着目した地盤変動によるワーレントラス橋の損傷挙動と径間数との関係性に関する一考察	共著	2024年9月	土木学会，第44回地震工学研究発表会講演論文集，44	若槻直暉，千田知弘，中沢正利，馬越一也，音山樹里，菅野恭平	pp.1-6
せん断の影響に着目した地盤変動によるワーレントラス橋の損傷挙動と径間数との相関性に関する数値解析的検討	共著	2024年7月	土木学会，第27回橋梁等の耐震設計シンポジウム講演論文集，27	若槻直暉，千田知弘，中沢正利，馬越一也，音山樹里，菅野恭平	pp.261-268
強制変位が床版にのみ作用する条件下におけるワーレントラス橋の主構に生じる損傷挙動に関する一考察	共著	2024年7月	土木学会，第27回橋梁等の耐震設計シンポジウム講演論文集，27	音山樹里，若槻直暉，千田知弘，中沢正利，馬越一也，菅野恭平	pp.269-274

地盤変動による損傷を考慮したワーレントラス橋の地震時挙動と径間数の関係	共著	2024年7月	土木学会, 第27回橋梁等の耐震設計シンポジウム講演論文集, 27	菅野恭平, 若槻直暉, 千田知弘, 中沢正利, 馬越一也, 音山樹里	pp.275-282

C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文

D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)

E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)

F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)

G. 学会における研究発表

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	①他大学の研究者との共同研究をより一層進める。
今年度の進捗状況	①学会の研究委員会に可能な限り参加し、遠隔会議システムによる委員会開催及び幹事会の運営に協力した。 ②来年度から本格的な耐候性鋼橋腐食調査を実施するための講習会に参加した。
来年度の進捗目標	①他大学の研究者との共同研究をより一層進める。 ②可能な範囲で耐候性鋼橋腐食調査を実施し、実データの蓄積に努める。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2023年2月～2026年3月	ネクスコエンジ東北支社「特殊橋梁の設計に関する技術検討会」助言・指導
2022年5月～2025年7月	ネクスコエンジ東北支社「更なる耐震補強検討会」コメンテーター, 助言・指導
2021年5月～2026年3月	土木学会構造工学委員会「災害時の緊急架設を目的とした緊急仮設橋に関する調査研究小委員会」顧問
2020年8月～2026年3月	日本鋼構造協会　土木鋼構造診断士専門部会 委員
2015年9月～2026年3月	国土交通省東北地方整備局　道路ドクター(国土交通省東北地方整備局　道路ドクター)

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

副学長(点検・評価担当)

2024年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	中村　寛治	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業改善目標を3つ設定し、実施した。	2024年4月1日～2025年1月27日	1．事前事後の学習をしやすい資料・課題の配布や明示、授業内外での学生間の教えあいを促す取り組みなど、学生主体による学びのための工夫を取り入れる。 2．授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3．授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。
最新の環境問題の情報資料を利用した説明	2020年4月1日～	NHK等で放映される環境問題の内容、および新聞記事を加え、知識と現実問題のリンクを重視した講義を行っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
環境建設工学実験、環境保全工学、環境工学Ⅱの配布資料を見直し、より理解しやすいように手直しをした。	2024年4月1日～2025年1月27日	
授業の配布資料の改訂	2020年4月1日～	情報リテラシー、環境建設工学実験、環境保全工学、環境工学Ⅱの配布資料を見直し、オンライン授業で理解しやすいように手直しをした。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
『バイオレメディエーションの現代技術』	共著	2024年7月	コロナ社	中村寛治、奥津徳也、椎葉究　他	pp.108-131
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
自然環境中に放出される細菌の残存性について ―原生生物による捕食の影響―	単著	2024年9月	環境バイオテクノロジー学会誌	中村寛治	pp.
Grazing resistance developed in Escherichia coli K-12 during coexistence with a bacterivorous protist.	共著	2024年5月	PLoS ONE	Kanji Nakamura, Keisuke Miyauchi	pp.
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
Isolation of Bacterivorous Protists from River Water and Their Impact on Bacterial Survivability	単独	2024年6月	ASM Microbe 2024(アトランタ ジョージア州)	Kanji Nakamura	

H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 科学研究費補助金挑戦的研究(萌芽)	2019年度～2023年度	個別	Flectobacillus属の糸状化細菌による捕食環境センシング技術の確立
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2017年8月～		多賀城市水道事業運営委員会　委員 委員	
2016年5月～		東北地方整備局新技術活用評価会議　委員 委員	
2005年4月～		環境バイオテクノロジー学会　会員 会員	
2005年4月～		土木学会会員 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	韓　連熙	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
独自テキストの作成	2024年4月1日～	必要と考えられる教科には，独自の試料を作成し，配布している。
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2024年4月1日～	毎回の授業の冒頭で，前回の復習とその回の概略を説明し，授業中は説明した内容を含む問題を提示し，理解の確認を行う。授業終了時にはその回のまとめを行っている。
ビジュアルな授業	2024年4月1日～	授業を円滑に実施するためパワーポイントを利用している。さらに，レポートを提出させ，これを評価することで修学状況を把握し，アドバイスを与える。
「学生による授業評価」と授業進度等に関するアンケートの実施	2024年4月1日～	学部で実施する「学生による授業評価」を担当科目で実施している。さらに，授業の効果を測定するために教員自身が考案したアンケートを，毎年度実施している。
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2020年4月1日～	毎回の授業の冒頭で，前回の復習とその回の概略を説明し，授業中は説明した内容を含む問題を提示し，理解の確認を行う。授業終了時にはその回のまとめを行っている。
「学生による授業評価」と授業進度等に関するアンケートの実施	2020年4月1日～	学部で実施する「学生による授業評価」を担当科目で実施している。さらに，授業の効果を測定するために教員自身が考案したアンケートを，毎年度実施している。
独自テキストの作成	2020年4月1日～	必要と考えられる教科には，独自の試料を作成し，配布している。
ビジュアルな授業	2020年4月1日～	授業を円滑に実施するためパワーポイントを利用している。さらに，レポートを提出させ，これを評価することで修学状況を把握し，アドバイスを与える。
2．作成した教科書、教材、参考書		
「自然科学実験ファンダメンタルズ」のおける実験テキスト作成	2024年4月1日～	「化学実験」分野の4テーマの実験テキストを作成した。
「化学」における教材プリント作成	2024年4月1日～	環境に応用されている化学原理と演習問題を穴埋めの形式の教材プリントを作成した。
「環境の化学」における教材プリント作成	2024年4月1日～	環境に応用されている化学原理と演習問題を穴埋めの形式の教材プリントを作成した。
「自然科学実験ファンダメンタルズ」のおける実験テキスト作成	2020年4月1日～	「化学実験」分野の4テーマの実験テキストを作成した。
「環境の化学」における教材プリント作成	2020年4月1日～	環境に応用されている化学原理と演習問題を穴埋めの形式の教材プリントを作成した。
「基礎化学演習」における教材プリント作成	2020年4月1日～	様々な化学原理と演習問題を穴埋めの形式の教材プリントを作成した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	●作成教材プリント内容（パワーポイント）の改善 ●講義中の学生とのコミュニケーション ●学生の学習（予習・復習）のチェック ●（学科教育目標） 1．図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 2．授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3．授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 ※　教育改善アンケートにおいて以下の2項目で達成度を測る。 3.1授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。	

今年度の進捗状況	●作成教材プリント内容（パワーポイント）の改善について：見やすいパワーポイント作成とわかりやすい例題を増やす。 ●講義中の学生とのコミュニケーションについて：学生への質問と学生からの質問を講義中いつでもできるように積極的に促す。 ●学生の学習（予習・復習）のチェックについて：開始から5分程度に前回の学習内容のまとめを説明，終了前の5分程度に再度講義内容をまとめて説明する。 ●環境の化学では、二酸化チタンを用いた光触媒の有機物分解の過程を説明した。現在に、二酸化チタン系の光触媒の生活用品の利用についても説明を行った。 ●授業中の重要スライドを自分でまとめさせる宿題を課し、修得した知識を学生自身が確認できるようにした。また、そのとき分からなかった点も書かせ、授業中に回答するようにした。 ●授業毎の重要なポイントを到達目標と関連付けて説明を行い、学生自らは到達目標のみならず、さらに応用可能な部分などについて考えるよう促した。
来年度の進捗目標	●作成教材プリント内容（パワーポイント）の改善について：最新データの追加。 ●講義中の学生とのコミュニケーションについて：学生への質問と学生からの質問を講義中いつでもできるように積極的に促す。 ●学生の学習（予習・復習）のチェックについて：授業開始5分程度に前回の学習内容のまとめの説明と宿題の確認、終了前の5分程度に再度講義内容をまとめて説明すると共に予習・復習の課題を設けて説明を行う。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	●液中プラズマにおけるヒドロキシラジカルの生成に関する研究を進める。 ●オゾン酸化反応に関する研究を進める。 ●上水用の凝集剤を用いた水質実験に関する研究を進める。 ●生物膜製作の基礎的研究を進める。
今年度の進捗状況	●液中プラズマにおけるヒドロキシラジカルの生成に関する研究について：電圧増幅器を用いて高電圧による水中プラズマを発生させ、p-CBAの減少量からヒドロキシラジカルの生成について検討と測定実験を行った。 ●オゾン酸化反応に関する研究について：強力な酸化作用を持っていると言われているオゾンを用いて水中有機物質（p－CBA）の除去について基礎的な研究を行った。 ●様々な上水用の凝集剤を用いた水質実験に関する研究について：近年開発された上水用の凝集剤を用いて水質（濁度など）実験を行った。 ●生物膜製作の基礎的研究について：沖縄県などで火山活動により発生した軽石を用いて生物膜の担体として応用可能かについて基礎的な研究を行った。
来年度の進捗目標	●上水用の凝集剤を用いた水質実験に関する研究について：近年開発された高塩基度のポリ塩化アルミニウムを用いて様々な添加物が存在する原水に対しての効果を色度や濁度、アルカリ度などの測定による検討を行う。 ●水中プラズマを用いて水中添加物による水の性質変化に関する研究を行う。 ●オゾン酸化作用に関する研究について：様々な水中有機物質の除去効果について検討を行う。また、触媒などの添加剤の併用作用についても検討を行う。 ●生物膜に関する研究について：軽石以下の吸着性のある様々な材料について基礎的な研究を行う。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2015年4月～	日本水道協会 特別会員

2015年4月～	日本水道協会 委員
2012年4月～	日本環境化学会会員 会員
2009年8月～	日本オゾン協会会員 委員
2009年4月～	日本オゾン協会 会員
2006年6月～	土木学会会員 会員
2003年4月～	電子スピンサイエンス学会会員 会員
1999年4月～	日本水環境学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

1. 東北学院大学知的財産審査委員会委員会
2. 環境建設工学専攻主任

2024年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	宮内　啓介	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
事前事後の学習をしやすい資料・課題の配布や明示、授業内外での学生間の教えあいを促す取り組みなど、学生主体による学びのための工夫を取り入れる。	2024年4月1日～2025年3月31日	
予習・復習の時間の設定	2020年～	授業終了後に復習問題をmanabaにて公開し、授業の復習時間を設定した。また、次の授業を受けるための予備知識をつけるための予習問題も同様に公開した。正答率が悪い問題があったときは、考え方の動画をmanabaにて公開した。
独自の授業アンケートの実施	2019年～	15 回の授業の終わりに、全学で実施す るアンケートの他に独自のアンケートを 実施して授業の効果を確認し、次年度 の授業実施の参考にしている。
授業担当者会議の開催（自然科学実験ファンダメンタルズ）	2019年～	毎学期終了後に、他学科担当の非常勤講師も含めて話し合いの場を持ち、授業の進め方やテキストの改訂について話し合っている。
学生から質問・感想を集めて回答する	2019年～	毎回の授業終了時にresponを用いて授業の振り返りをおこない、同時に質問・感想を集めて、質問・感想とそれに対する回答のプリントを作成してmanabaで公開し、必要に応じて次の授業でコメントした。
2．作成した教科書、教材、参考書		
自然科学実験ファンダメンタルズ	2019年～	1年生の教養科目の教科書。必要に応じて改訂している。
「先端の科学と技術」プリント	2019年～	1年生の教養科目用プリント
「環境生物工学」プリント	2019年～	3年生の専門科目用プリント
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
宮城県工業　大学見学対応	2024年12月3日～2024年12月3日	大学説明、模擬授業、研究室案内

現在の課題・目標	1．事前事後の学習をしやすい資料・課題の配布や明示、授業内外での学生間の教えあいを促す取り組みなど、学生主体による学びのための工夫を取り入れる。 2．授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3．授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。
今年度の進捗状況	1.パワーポイントのファイルをpptxファイルとpdfファイルでmanabaにて公開した。授業は録画して、動画を公開した。 2.授業開始から数回は、基準の明示を行なった。試験前も同様に、評価方法を説明した。レポートを課すときもその意図を説明した。 3.responで授業の質問・感想を募集して、質問を全てテキストにまとめ、それに対する回答をつけて公開した。それを学生が読むように、そのやり取り中から復習問題の一部を出題した。
来年度の進捗目標	1.学生同士の教え合いの場を作れるか、やってみる。 2.引き続き明示に努める 3.新たなシステムで同様のことが可能か、検討して実行する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					

E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
亜ヒ酸酸化細菌Pandoraea sp. NE5の亜ヒ酸酸化に関与する遺伝子群の同定	単独	2025年3月	日本農芸化学会2025年度大会 (札幌コンベンションセンター)	宮内啓介	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	1.国際共同研究の統括 2.基盤Cの研究
今年度の進捗状況	1.ベトナムはペンディングのまま、カンボジアは進んでいる 2. 業務に押されてあまり進まず
来年度の進捗目標	1. 国際共同研究の統括 2. 基盤Cの残りの実験をやる 3. 論文を書く

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 国際共同研究加速基金(海外連携研究)	2023年度～2026年度	(研究代表者)	メコンデルタの地下水ヒ素汚染現地（カンボジア）に設置した地下水ヒ素浄化実験装置を用いて現地適合性を実証する研究を行う。また、本地域における水需要として量的に大きい灌漑農業用水の確保のために、上記地下水ヒ素浄化技術を適用し、浄化のための最適プロセスを確立する。本研究では、ヒ素浄化に必要な亜ヒ酸酸化のための微生物担体としてコークスを用いるが、コークスとヒ素の間の脱着機構を明らかにすることと、コークス表面で亜ヒ酸酸化に関与する微生物の同定を行うことで、本システムの科学的基盤を形成する。さらに、汚染水の浄化によって生じるヒ素と鉄の共沈物中のヒ素を固定化する方法を開発し、その安全性とリスク評価を行う。
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2019年度～2024年度	(研究代表者)	土壌や水のヒ素汚染を浄化する方法として、植物を用いた浄化方法（ファイトレメディエーション）が有効な手段の一つとして考えられている。シダ植物の一種であるモエジマシダは、ヒ素高蓄積植物として知られており、環境中のヒ酸を根から吸収するが、亜ヒ酸はヒ酸に酸化してから吸収する。申請者は、モエジマシダ根圏から、亜ヒ酸酸化反応を行う細菌Pandoraea sp. NE5株を単離した。しかし、NE5株は従来知られている亜ヒ酸酸化酵素遺伝子を保持していない。そこで本研究では、NE5株の亜ヒ酸酸化機構や根圏でのヒ素吸収への関与の仕方を明らかにすることで、モエジマシダを用いたヒ素汚染浄化方法の開発に貢献する。

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2025年3月～2025年3月	宮城県工業　模擬授業 講師
2023年4月～	多賀城市環境審議会委員長 司会
2021年4月～	多賀城市環境審議会 会長
2013年6月～	環境バイオテクノロジー学会理事 会員
2012年1月～	日本微生物生態学会会員 会員
2012年1月～	Assistant Editor of Microbes and Environments 委員
2011年8月～	日本生物工学会北日本支部委員 会員
2007年3月～	ゲノム微生物学会会員 会員

2006年4月～	土木学会会員 会員
2004年1月～	アメリカ微生物学会会員 会員
2000年4月～	環境バイオテクノロジー学会会員 会員
1996年4月～	日本生物工学会会員 会員
1994年1月～	日本農芸化学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	山口　晶	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
工学総合演習IIにおける企業による実務に関する実習（地盤工学分野の2回）	2024年	
交通工学での建設コンサルタント協会による実務実習	2022年～	
試験直前まとめ演習の実施	2014年4月～	期末試験直前にまとめの演習を課し，これまでの講義の復習を行わせている。
小テストの実施	2005年4月～	複数回小テストを行うことで，学生の理解を促している。
土木学会東北支部技術研究発表会の学生の参加	2001年3月2日～	土木学会東北支部主催の技術研究発表会に参加し，卒業研究の内容を，学生に発表させている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
地盤力学II　パワーポイント講義資料，穴埋めノート，小テスト問題作成	2024年4月	講義15回分のパワーポイントの作製と公開，講義内容の穴埋めノート15回分，小テストの作成
交通工学　オンライン講義資料，穴埋めノート，小テスト問題作成	2021年4月～	講義15回分のパワーポイントの作製と公開，講義内容の穴埋めノート15回分，小テストの作成
測量学I　講義内容の穴埋めノートの作製と配布，パワーポイントによる遠隔講義の実施	2020年4月1日～	講義15回分のパワーポイントの作製と公開，講義内容の穴埋めノート15回分
地盤力学I　講義内容の穴埋めノートの作製と配布，パワーポイントによる遠隔講義の実施	2020年4月1日～	講義15回分のパワーポイントの作製と公開，講義内容の穴埋めノート15回分
地盤力学I　演習プリント	2014年4月～	演習プリント13回分，まとめプリント1回分
測量学I　演習プリント	2014年4月～	演習プリント9回分，まとめプリント1回分
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
東北学院大学オープンキャンパスにおける地盤災害に関する模擬講義	2024年7月27日	
工学総合研究所　工学に関わる啓発活動	2021年8月～	地盤災害の説明

現在の課題・目標	学科の教育改善目標は以下のとおりである。下記の内容を意識しながら講義を行うこととする。 卒業研究については，学生の主体的行動を促すような教育方法を実施する。また学生の発言を促すようなコミュニケーション方法を意識する。 1．事前事後の学習をしやすい資料・課題の配布や明示、授業内外での学生間の教えあいを促す取り組みなど、学生主体による学びのための工夫を取り入れる。 2．授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3．授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。

今年度の進捗状況	学科の教育改善目標については以下の通り 1について 例年実施している穴埋めノートの配布は全部の講義で実施した。事前に記入してある学生はほとんどいないが，事後学習や欠席した際の自己学習に活用している様子は確認できた。演習の時間は学生同士の相談を可にしたが，あまり相談している様子は見られなかった。 2について 各単元や内容が実務でどのように利用されるか，なぜその知識が必要かを極力説明していくように努力した。それが学生に伝わっているかどうかは分からない。 3について 演習等については学生の様子を見ながら進めたが，講義時間中に全く演習に手をつけない学生がかなりいたことが気になる。講義時間中に真面目に取り組む学生の方が少ない様子。講義終了後にはほぼ毎回質問に来る学生がいたので，質問しやすい環境は作れていると思う。
来年度の進捗目標	上記に載せた学科の教育改善目標については引き続き，意識して教育活動を実施する。また学期はじめに新たな教育改善目標が設定されるので，それも考慮して進めたい。

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
縦型回転式攪拌混合処理工法による改良杭の支持力に対する先端貫入量と地盤物性の影響	共著	2024年10月	材料学会，第16回地盤改良シンポジウム論文集	八木澤 結、山川 優樹、竹田 敏彦、松井 倫嗣、山根 行弘、山口 晶	pp.207-212
フライアッシュを原料とする地盤改良材で改良したベントナイトのコーン指数と一軸圧縮強さ	共著	2024年10月	材料学会，第16回地盤改良シンポジウム論文集	山口 晶，伊藤 純，片田 吉孝，小川 孝治	pp.557-563
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	地盤改良会社と共同研究では，攪拌混合工法における混合不良が発生する原因について卒業研究として研究を行っている。 レストム工法研究会との共同研究では，毎年，現場で問題になっている課題について卒業研究として取り組むようにしている。
今年度の進捗状況	地盤改良会社と共同研究を行っている内容については，かなり方向性がはっきりしてきて，実験結果もおおよそある程度の結論がでつつある。その内容を現場にどのように当てはめるかを今後検討していく必要がある。 レストム工法については今年度はレストム材，山砂，高炉セメントを混合して一番経済性がよく効果の高い混合割合を見つける研究を行った。これについてもある程度現場に役に立つ結論が得られた。 いずれも現場での問題点がはっきりしており，また研究目的もわかりやすいことから，学生も積極的に取り組んでいる。
来年度の進捗目標	地盤改良の会社との共同研究とレストム工法研究会との共同研究は引き続き実施したい。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2024年11月～	蔵王町再生可能エネルギー発電設備設置協議会 委員長
2024年9月～2025年3月	みやぎ太陽光発電施設実態調査及びデータベース作成等業務 外部有識者委員会(単年度) 委員

2024年8月	工学総合研究所　工学に関する啓発活動 講師
2024年3月～	名取市最終処分場用地選定委員会 委員
2023年～	仙台市宅地保全審議会　技術専門委員会 委員長
2022年12月～	宮城県環境審議会 委員
2022年6月～	地盤工学会 選挙管理委員
2022年～	レストム工法研究会 技術アドバイザー
2020年4月～	富谷柔道スポーツ少年団　団長
2019年11月～	スポーツ少年団認定指導員
2019年7月～	高校生ものづくりコンテスト 宮城県大会　測量部門　審査員
2018年6月～	地盤工学会 代議員
2017年～	仙台市宅地保全審議会 委員
2016年4月～	全日本柔道連盟　C級審判員
2016年～	全日本柔道連盟　C指導員
2007年6月～	地盤工学会 東北支部地盤災害研究委員会
2001年～	地震工学会 会員
2000年～	土木学会 会員
1997年～	地盤工学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	富谷柔道スポーツ少年団での関わりは10年に達し，代表としても5年たった。試合で勝つことよりも，人間的に強くなるために柔道をしてほしい，と思っているが，理解している保護者としていない保護者がいるように思う。試合に勝つことを重視してほしくないと思っているが，勝ち負けがある格技なので，やむを得ない部分もある。試合に勝つことと日々の練習から肉体的にも精神的にも強くなることの両方のバランスをとることが大事だと思う。
今年度の進捗状況	今年度は団体戦で宮城県内の大会で2度優勝した。ただし，優勝をすることが目的ではなく，一生懸命取り組めば負けてもいい，と言い続けた。勝負の世界でどちらの考え方がいいのか，わからないが，強くなくても楽しんで柔道を続ける子がいてもいいと思っているので，そういう子も続けていけるような運営の仕方を今後も模索しながら指導を続けたい。
来年度の進捗目標	来年度は，富谷柔道スポーツ少年団が地域移行クラブとして申請し，認められたので，中体連に認められた団体として中学生の大会に出場する。完全なボランティア活動なので，正直にいうと面倒であるが，なかなか自分に変わる人が出てこないことがあるので，社会貢献と思って青少年の健全育成に今後も貢献したい。

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

来年度学科長予定
TGグランドビジョンのWG委員として働いた。
スポーツ少年団の青少年の健全育成のボランティアと学内業務に両立が現在のところ心配である。

2024年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	准教授	氏名	崎山　俊雄	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
企業や卒業生と連携した技術教育・キャリア教育	2024年～	実務的要素の強い「生産管理」では、最先端の建設技術や技術者のキャリアに対する理解を深めるために企業や卒業生と連携した授業運営（特別講義・現場見学）を実施している。授業アンケートでも、企業による先端技術の紹介は極めて評判がよい。
予習課題の事前採点と弱点克服のための効果的な解説	2022年～	法律を扱う「建築法規」は特に「繰り返し学習」が重要との判断から、毎回10問程度の予習・復習テストを課した上で、授業の前半では予習課題の正答率を踏まえた演習解説を行い、後半を新たな単元解説に充てる形式で講義を実施している。演習問題→弱点の把握→補足解説を連動させた講義展開は、学生アンケートにおいて「分からなかった問題を集中的に解説してくれるので理解が進む」との回答が見られるなど、一定の効果を有することが確認されている。
クイズ形式等（問いかけ）による学生の授業参加の促進	2020年～	「西洋・近代建築史」および「日本建築史」においては、多くの建築や美術の事例を取り上げるため、著名な建物の名称や所在地、設計者などについて小テスト形式で学生に問いかけたり、学生の反応を見ながら進行する授業方法を意識している。小テストは前の週に範囲を提示して予習を促し、解答の集約にはLMSを活用し、結果は成績評価に反映することとしている（総合的な成績評価方法については初回の講義で資料を配布して詳しく説明している）。学生の授業参加を促し、メリハリのある授業を心掛けている。
講義録画の提供による学習内容の定着と自主学習の促進	2020年～	座学を中心とする「西洋・近代建築史」「日本建築史」「建築法規」「生産管理」では、対面授業（スライド＋音声）を録画し、自主学習のために提供した。コロナ禍のオンライン授業で修得した効果的な技術は、以後も継続して活用している。
実技・芸術系科目の評価に対するルーブリックの公開と活用	2020年～	受講者にとって評価基準の分かりにくい実技・芸術系科目「建築設計製図Ⅰ」および「建築デザイン演習」では、ルーブリックを活用して作品の評価を行っている。評価基準は説明は初回の講義で行い、要求水準（到達目標）を明示し、ルーブリック表を採点表としてフィードバックすることで、一貫性ある採点を心がけている。ルーブリックは毎年更新している。
ミニッツペーパーを活用した双方向性の確保とレベル別発展学習の促進	2019年～	ミニッツペーパー（LMSを使用）を活用し、講義内容に対する振り返り、疑問点、授業評価（意見や要望）などを記入してもらい、理解度把握・授業改善・学習意欲向上のために活用している。これらは原則として翌週までに返却しているが、学科専門科目（建築コース）の40名程度の講義では一人々々に1500字程度の短文コメントを付してフィードバックし、学生一人々々に目配りするように心がけている。また、特筆されるべき振り返りや疑問点については成績に反映するとともに翌週の授業において紹介または補足説明することでフィードバックしており、学生の到達レベルに応じた発展的な学習を促すコメントを意識している。個別のフィードバックは学生アンケートでの評価も高く、学生の参加意欲の向上に一定の効果を有することが確認されている。
地域の建築文化に対する視点の醸成	2016年～	建築やまちづくりの分野では、地域への視点が極めて重要である。そこで「日本建築史」においては、特に仙台市、多賀城市、宮城県、東北地方、キリスト教への視点を重視した事例の紹介等を心がけている。数回のレポート課題では地域的課題を取り入れた。また講座配属学生を対象とするジュニアセミナーや卒業研究では、東北地方の歴史的建造物の調査等を通して、地域貢献への視点を育てることを意識している。
建築設計教育における初学者向け対話指導の工夫	2016年～	建築設計の初学者に対する指導において、学生個々人の感性や考えを尊重しつつ、より建築的に思考を深め、造形を発展させていくための対話型指導（1対1指導）を実施している。また、意欲的な取り組みを促すため、オフィスアワー以外の時間でも、可能な限り丁寧に1人1人の学生と向き合うことにしている。
2．作成した教科書、教材、参考書		

「科学技術社会と倫理」のオンデマンド講義映像（作成・更新）	2024年～	「科学技術社会と倫理」の映像教材を作成した（複数教員によるオンデマンド授業）。地球環境や自然災害など、身近な現象と科学技術の関係をわかりやすく伝えることを意識するとともに、現代社会の高度で便利な生活には功罪両面があることを伝えることを心がけた。通年開講の映像授業だが、「今」の状況を講義に取り込むために、原則として毎期の内容更新（再録画）を行っている。
「生産管理」の講義スライド・配布資料（作成・更新）	2023年～	建築生産および建築施工管理に関する講義資料を更新した。建設現場での技術に関する内容を多く含むため、「NHKスペシャル」や「プロフェッショナル」等の映像コンテンツを積極的に活用し、視覚的に理解しやすい教材の作成を心がけた。
「日本建築史」の講義スライド・配布資料（作成・更新）	2016年～	日本建築の、古代から現代に至るまでの歴史に関する講義資料を作成・更新した。特に宮城県内および東北地方の歴史的建築を多く取り上げ、地域文化を理解することを促す内容の充実化に努めた。
「西洋・近代建築史」の講義スライド・配布資料（作成・更新）	2016年～	西洋建築の、古代から現代に至るまでの歴史に関する講義資料を作成・更新した。写真や図面を多用して視覚的に理解できる内容とすることを心がけるとともに、「歴史を学ぶことの意味」や「歴史からの学び方」を意識的に伝え、「歴史を学ぶことの楽しさ」を体験してもらえるような内容を心がけた。
「建築法規」の講義スライド・配布資料・LMS教材（作成・更新）	2016年～	建築基準法の重要事項を解説する講義資料を作成・更新した。特に難解な法律用語に対し、当該条文が如何なる目的で定められ、何を、どのように規制しているのかの理解を促す内容とした。特に説明と例題を交互に並べ、予習・復習にも活用しやすい資料づくりを目指した。また、受講者が繰り返し自主学習できるようにLMSの演習教材を充実させ、あるいは補足的な解説動画を作成して、事後学習教材として提供した。
「フレッシュパーソンセミナー」の講義スライド・配布資料（作成・更新）	2016年～	初年次学生に対する導入的専門科目の講義資料を作成・更新した。作成に際しては、関連分野の最新の動向を調べて資料に反映させるとともに、図や写真、時に映像を用いて視覚的に理解できる内容とした。また、特に大学での学びが実社会にどのように関わっていくのかの理解を促す内容とすることを心がけた。

3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等

4. その他教育活動上特記すべき事項

現在の課題・目標	【学科で定めた共通の授業改善目標】 1. 事前事後の学習をしやすい資料・課題の配布や明示、授業内外での学生間の教えあいを促す取り組みなど、学生主体による学びのための工夫を取り入れる。 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。※教育改善アンケートにおいて以下の2項目で達成度を測る。 3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。 【個人で定めた授業改善目標】 4. 授業内で、授業の目的や重要な点のまとめや振り返りを行い、学生の理解と知識の定着を促すような試みを実施する。 5. 予習・復習時間が適切な分量になるように課題の再検討を行い、学生アンケート等において成果を確認する。 6. 配属学生とのコミュニケーションによる、きめ細かな卒業研究および就職活動の指導を実施する。
今年度の進捗状況	1. 全ての担当講義で画像を中心としたスライド教材を作成（更新）した。座学系の講義では、授業を録画し事後に復習教材として公開した。特に録画の公開は受講者から好評で、授業アンケートや教育改善アンケートにおいて肯定的な意見が見られた。改善の取り組みは概ね順調に進捗した。 2. 初回の授業で丁寧な説明を行った上で、適時補足した。特に美意識や価値観を評価対象する建築設計課題（作品）では評価基準が曖昧になりがちな点が課題であったので、丁寧な説明と一人一人との対話を重視した。授業アンケートでは肯定的な評価が増え、改善の取り組みは概ね順調に進捗した。 3.1 学生の反応を見ながら授業を進めることを心がけた。授業アンケートからは肯定的な評価が見られ、改善の取り組みは概ね順調に進捗した。 3.2 manabaの個別指導（コレクション）、対面授業の前後、およびミニッツペーパーを活用した。特にミニッツペーパーを用いた双方向性には学生からも好意的な意見が多く、改善の取り組みは概ね順調に進捗した。 4. 授業の冒頭で前回の復習を実施するとともに、当該講義のテーマと全体の中での位置づけを示した上で、その日の講義を行った。復習から始める手法は学生からも好評で、改善の取り組みは概ね順調に進捗した。 5. 前年度の授業アンケートを踏まえて予習課題と復習課題を見直した。授業アンケートの結果は良好で、改善の取り組みは概ね順調に進捗した。ただし、目標とした自主学習時間には及ばず、継続的な改善が必要と考えている。 6. 研究室所属学生の研究・就職活動状況を常に把握し、指導に活かすことを心がけた。

来年度の進捗目標	【学科で定めた共通の授業改善目標】 1. 事前事後の学習をしやすい資料・課題の配布や明示、授業内外での学生間の教えあいを促す取り組みなど、学生主体による学びのための工夫を取り入れる。(継続) 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。(継続) 3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。※教育改善アンケートにおいて以下の2項目で達成度を測る。(継続) 3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。 【個人で定めた授業改善目標】 4. 授業内で、授業の目的や重要な点のまとめや振り返りを行い、学生の理解と知識の定着を促すような試みを実施する。(継続) 5. 予習・復習時間が適切な分量になるように課題の再検討を行い、学生アンケート等において成果を確認する。(継続) 6. 配属学生とのコミュニケーションによる、きめ細かな卒業研究および就職活動の指導を実施する。(継続) 7.2024年度の新規担当科目(建築デザイン演習・科学技術社会と倫理)については、受講者アンケート等を活用して特に重点的に内容の改良・改善に取り組む。(新規)

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					

現在の課題・目標	1. 審査付きの学術論文誌への継続的な投稿(筆頭著者で年1編以上) 2. 審査無しの学術論文誌および学会口頭発表への継続的な投稿(筆頭著者で年2編以上) 3. 内外の競争的資金の継続的な獲得(年1件以上) 4. 研究成果および関連分野での積極的な社会・学内貢献(随時)
今年度の進捗状況	1. 学術論文の投稿は未達となったが研究成果が対象建物の文化財登録に結実した。 2. 達成した(2編)。 3. 科研費・基盤(C)での継続課題(最終年度)を実施した。25年度からの新規課題にも応募し、基盤(C)に採択となった。 4-1. 異分野の研究者や郷土史関係者が多く参加する地域史の研究会に参加して交流を継続した。 4-2. 東北学院宗教センターが発行する『水曜通信』に連載を持った(年10回寄稿) 4-3. 県内外3件の歴史的建造物の調査をゼミ生と実施した。うち1件の成果は『東北学院史資料センター年報』に執筆し、学内外に公表した。 4-4. 重要文化財 東北学院旧宣教師館　保存活用計画策定委員会の学内委員として活動した。 4-5. 東北学院史資料センターが主催したシンポジウムの企画に携わり、基調講演を行なった。 4-6. 歴史的建造物の保存・修復・活用を担う実務技術者「ヘリテージマネージャー」の養成講座で講師を務めた。
来年度の進捗目標	1. 審査付きの学術論文誌への継続的な投稿(筆頭著者で年1編以上)(継続) 2. 審査無しの学術論文誌および学会口頭発表への継続的な投稿(筆頭著者で年2編以上)(継続) 3. 内外の競争的資金の継続的な獲得(年1件以上)(継続) 4. 研究成果および関連分野での積極的な社会・学内貢献(随時)(継続)

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤C	2019年度～2023年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年	宮城県ヘリテージマネージャー養成講習会 講師
2022年4月～	「ヤマモ味噌醤油醸造元店舗」「旧髙橋家住宅」建築調査 助言・指導, 調査担当
2018年4月～	日本建築家協会
2011年4月～	建築史学会 会員
2000年8月～	日本建築学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	該当活動なし		
今年度の進捗状況	該当活動なし		
来年度の進捗目標	該当活動なし		

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

1）東北学院史資料センター　運営委員/調査研究員
2）教務委員
3）学修データ利活用部会　委員
4）AO委員
5）工学部外部評価対応委員会　委員
6）環境建設工学科2年グループ主任
7）重要文化財 東北学院旧宣教師館　保存活用計画策定委員会　委員／同WG委員
8）工学研究科修学支援委員

2024年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	准教授	氏名	三戸部　佑太	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		以下の学科の授業改善目標に即して授業の改善を目指した. 1. 事前事後の学習をしやすい資料・課題の配布や明示、授業内外での学生間の教えあいを促す取り組みなど、学生主体による学びのための工夫を取り入れる。 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。
今年度の進捗状況		1. 授業に使用するスライドの事前配布、授業を録画した動画の公開など、学生が事前事後学習に取り組みやすいような取り組みを継続した。また、毎回の授業時間内に小課題を解く時間を設け、その中で学生間での教え合いを促すことも例年通り継続して実施した。 2. 初回授業において到達目標や成績評価の基準を明示した。また、毎回の授業で小課題に取り組む意義を伝えるとともに、レポート課題の説明およびフィードバックを丁寧に実施することを心がけた。 3. 授業内における小課題の解答時間において、質問を呼び掛ける他、解答状況を見ながら理解度を確認し、適宜補足説明を行った。また、manabaを通じた質問等にもなるべく早く回答するように心がけた。
来年度の進捗目標		上記3つの目標のいずれについても、概ね満足するような授業の実施方法となっていたものと考えているが、学科独自で実施しているわかりやすい講義のアンケートでは水理学を挙げる学生の数が伸びていない。学生の基礎学力や想像力は年々変化しているため、学生の理解度の確認やそれに応じた補足説明資料の作成＆適切な進行速度の維持など、学生の状況に応じた対応を目指したい。また、来年度はLMSの移行が実施されるため、その中でも上記3つの目標を満たせるように努力したい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
砕波ジェット着水時間に着目した砕波波高推定手法の検討	共同	2024年11月	第71回海岸工学講演会(秋田アトリオン)	◎三戸部佑太, 鈴木陽斗, 相馬康希	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標		1. 開発する基礎技術の高度化を進め、現地のモニタリングや実験における計測に応用することで、種々の現象解明に寄与する 2. 防災教育のためのツール開発を行い、また実際に防災教育へ用いていく 3. 個々の研究の質を高め学術誌への投稿を行う			

今年度の進捗状況	1. 今年度は卒業研究においてモニタリング等の基礎技術の開発を希望する学生が少なかったこともあり、研究にかけられる時間もやや少ない状況であった。一方で、取り組んでいる各技術の発展に向け、基礎的な検討をある程度進めることはできた。 2. 一方で、防災教育ツールの開発については卒業研究で取り組む学生も多く、新たに開発を始めたものを含め様々な進展が得られた。津波避難を体験するゲームではサイエンスデイ2024において仙台市長賞を受賞するなど、外部からも一定の評価が得られている。 3. 現在、開発を進める画像計測技術の英文ジャーナルへの投稿準備を進めている。本年度中に発行には至らないが、確実に採択・発刊につなげられるよう準備を進めている。
来年度の進捗目標	1. 次年度も引き続き開発を進めるとともに、行政機関との情報共有も行い、実用性も踏まえた検討を進めたい。 2. 引き続きより良い防災教育ツールの開発を目指し、アイデアを具現化していく。また、作成したツールを実際の防災教育へ活用していけるように活動したい。 3. 現在準備している論文の完成度を高め、採択されるように努力する。また、日本語の学術誌投稿も含め、積極的に取り組んでいく。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2017年4月～	土木学会東北支部幹事 会員
2014年～	国際水理学会（IAHR）会員 会員
2013年～	自然災害学会会員 会員
2008年～	土木学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

・環境建設工学科教育改善委員会（副委員長およびFD小委員長）

2024年度

所属	工学部　情報基盤工学科	職名	教授	氏名	淡野　照義	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	自然科学実験ファンダメンタルズ「落下実験」の開発
今年度の進捗状況	自然科学実験ファンダメンタルズ「落下実験」の授業実施
来年度の進捗目標	自然科学実験ファンダメンタルズ「分光（仮題）」の開発

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	機械学習のナノポーラス構造解析への応用（共同研究） 機械学習のテラヘルツ分光データ解析への応用
今年度の進捗状況	機械学習のナノポーラス構造解析への応用（共同研究）：　解析システムの各部分について進捗があったが、引き続き開発が必要である。 機械学習のテラヘルツ分光データ解析への応用：　解析に必要なソフトウェアの導入中
来年度の進捗目標	機械学習のナノポーラス構造解析への応用（共同研究）：　解析システムを完成させ、共同研究者の実験データを解析する。 機械学習のテラヘルツ分光データ解析への応用：　解析に必要なソフトウェアの導入を完了し、今までに共同利用実験で蓄積してきたデータを解析する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

1983年～	日本物理学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2024年度

所属	工学部　情報基盤工学科	職名	教授	氏名	神永　正博	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
工学部向け数学教育の実践	2020年4月1日～	工学を学ぶ上で必要となる数学、数学的な考え方は、標準的な数学のカリキュラムとは異なっている。講義では、理論的に興味深いが、応用上不要と思われる部分をカットし、必要な部分に説明を集中している。「情報セキュリティ工学」では、Pythonによる実習に取り組み、「確率統計学」でRによる実習の導入に取り組んだ。今年度は、『Pythonで学ぶフーリエ解析と信号処理』（コロナ社）を出版し、フーリエ解析の講義にPythonと信号処理を導入した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Perturbation of discriminant for one-dimensional discrete Schrödinger operator with complex-valued sparse periodic potential	単著	2025年3月	The Tohoku Mathematical Journal, 77	Masahiro Kaminaga	pp.1-15
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
『Pythonで学ぶ暗号理論』	共著	2024年9月	コロナ社	神永正博, 吉川英機	pp.1-200
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
離散的ランダム行列の暗号理論への応用について	単独	2024年9月	夏の作用素論シンポジウム(信州大学)	神永正博	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2022年4月～	工学研究科委員会 電気工学専攻専攻主任

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	工学部　情報基盤工学科	職名	教授	氏名	郷古　学	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
講義資料のブラッシュアップ	2024年4月～2025年3月	
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2020年～	前回の講義で実施した課題のなかから、いくつかの回答を選び紹介することで、前回講義内容の復習を行っている。2022年度はオンライン講義が主だったため、講義動画内で、前回課題の回答の中から、いくつかピックアップして、学生に紹介した。
講義内容の定着を目的とした課題の実施	2020年～	講義(「情報工学基礎」)において、講義内容の定着を目的とし、講義で扱った内容に関する課題をオンラインで実施し、毎回採点し評価に組み込んでいる。
講義用ホームページの作成	2020年～	講義や卒業研究で扱った資料や参考文献の情報を確認できるように，講義用のホームページをmanabaで作成し、運用している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
クリティカル・シンキングの技法テキスト	2020年～	講義内容についてまとめたテキストを作成した。2022年度はオンライン講義が主だったため、manabaの機能を利用して、資料等を配布した。
読解・作文の技法テキスト	2020年～	講義内容についてまとめたテキストを作成した。また、より理解を深めることを目的として、様々な配布資料を作成し、講義内で使用した。
卒業研究用の資料	2020年～	卒業研究に必要な知識をまとめた資料（プログラム、文章等）を作成し、PDF化してホームページからダウンロードして利用できるようにした。manabaの掲示板機能やレポート提出機能、slackなどのアプリケーションを用いて、指導を行った。
講義(情報工学基礎)の配付資料に関する工夫	2020年～	講義(情報工学基礎)では市販のテキストの他、毎回配付資料を用いた講義を行っている。配布資料は、当該回の講義内容をまとめたものに加えて、例題や課題を多く掲載し、学生の理解を深めることができるような工夫をしている。また、講義内の小テスト等をすべてmanaba上で実施可能とし、学生の利便性を上げるとともに、講義運営の効率化を図った。
講義(ソフトウェア開発演習Ⅰ)演習教材の開発	2020年～	講義(ソフトウェア開発演習Ⅰ)で用いる教材を作成した。教材はマイクロコンピュータ、センサ、プログラム等からなり、円滑な講義運営ができるように、何度も試行＆評価を繰り返して作成した。
講義(ソフトウェア開発演習Ⅰ)配付資料	2020年～	講義(ソフトウェア開発演習Ⅰ)で配布する講義内容をまとめた資料を作成。同資料には学習内容の定着を目的とした課題も記載されている。2020年度はオンライン講義が主だったため、manabaの掲示板機能やレポート提出機能を用いて対応した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	(ア)グループワークなど、学生同士が互いに相談し、より積極的に教え合う仕掛けを改善する。 (イ)すべての講義において、その講義の重要性に関して、実例と組み合わせて説明する。 (ウ)講義中の学生とのコミュニケーションを大切にする。
今年度の進捗状況	・上記目標(ア)について、週に数回、ゼミの他にグループミーティングを実施した。その際に、学生ごとに取り組むべき課題について、報告（発表）を実施し他の学生とのディスカッションをしやすくした。 ・上記目標(イ)について、講義の重要性に関する身近な時事問題を加えた。 ・上記目標(ウ)について、講義中に学生とインタラクティブに講義内容についての意見交換をするように務めた。
来年度の進捗目標	・上記目標(ア)について、グループワークの活性化について更に工夫 ・上記目標(イ)について、最新の時事問題に加え、事例紹介を充実させる。 ・上記目標(ウ)について、manabaのチャット機能などの活用を検討する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数

A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
How Do Markers Placed on BSC Effect on User's Information Seeking and Performance Evaluation	共著	2024年10月	Asia-Pacific Management Accounting Association 2024 Annual Conference Proceedings	Takaya Kubota and Manabu Gouko	pp.377-388
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
Learning Exploratory Behaviors in Robots for Effective Environmental Segmentation	単著	2025年2月	2025 9th International Conference on Artificial Intelligence, Automation and Control Technologies (AIACT 2025), TP006	Manabu Gouko	pp.
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	(ア)被験者参加型の実験を計画。 (イ)実験データの解析と、論文の執筆。 (ウ)積極的に学会発表を実施。
今年度の進捗状況	・上記目標(ア)については、実際に被験者に参加してもらい、実験を実施した。 ・上記目標(イ)については、データを解析し、その内容をまとて国際会議論文と学術論文として発表した ・上記目標(ウ)については、国際会議に参加して多くの研究者と議論した。
来年度の進捗目標	・より発展的な実験を計画し、実施する。 ・新たな論文の執筆を行う。 ・機械学習に関する新しい数理モデルの構築を開始する。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2017年7月～	日本家政学会 会員
2005年9月～	米国電気電子学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	工学部　情報基盤工学科	職名	教授	氏名	志子田　有光	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル）」（通称MDASH）申請と認定	2022年4月1日～	TGベーシック「東北学院大学　数理・データサイエンス・AI教育プログラム」を文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル）」（通称MDASH）として申請し認定された。
新たな講義において、毎回独自の教材を配布し、予習復習を啓蒙した。	2002年4月1日～	プリントやデジタルデータによる教材を配布し、予習復習を行いやすくする手法を試みた。
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進を図った。	2002年4月1日～	毎回の授業の冒頭で，前回の復習とその回の概略を必ず説明し，授業終了時にはその回のまとめを行っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
WRO（ワールドロボットオリンピアッド）2024公認宮城予選大会を会長として開催	2024年7月26日～2024年7月28日	レゴマインドストームを用いたロボット大会を開催。対象は宮城県を中心とした地域の小中高の児童、生徒

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
機械学習を用いたブレッドボード上の電線接続関係推定に関する試み	共同	2025年3月	情報処理学会第87回全国大会（立命館大学大阪いばらきキャンパス）	鈴木順、森島佑	
ブレッドボード上の回路パターン推定法に関する研究	共同	2025年3月	令和7年度　東北地区若手研究者研究発表会「音・光・電波・エネルギー・システムとその応用」（東北学院大学）	菅野又翔、鈴木順、森島佑	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤C	2024年度～	共同(研究代表者)	研究題目「データサイエンス系学生の自律的IoT課外学習に特化した実験システムの開発と検証」 データサイエンス系学生がIoT技術を学ぶにあたり、特に課外教材として用いるのに適した実験システムの開発と検証を行う。
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	工学部　情報基盤工学科	職名	教授	氏名	鈴木　利則	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
フィルタ処理を軽減したOFDMA向けCAF法の検討	単独	2024年8月	2024年度電気関係学会東北支部連合大会(秋田県立大学 本庄キャンパス)	◎鈴木 孝汰, 橘内 望, 鈴木 利則	
Wi-Fiセンシングを屋外異常検知へ応用するための一検討 ～ 農作物の鳥獣被害対策に向けて ～	共同	2024年7月	電子情報通信学会技術研究報告(北海道)	◎鈴木 利則, 森島 佑, 小倉 振一郎, 松浦 寛	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究（C）	2023年度～2025年度	共同(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	工学部　情報基盤工学科	職名	教授	氏名	吉川　英機	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
遠隔授業における双方向性の確保	2020年～	2020年度の遠隔授業ではオンデマンドが主となったが、時間割上の時間帯においてはZOOMにて質問対応ができるようにして、双方向性を確保した。
授業においてManabaを活用して、自作教材を自由に使えるようにした。	2017年～	
2．作成した教科書、教材、参考書		
授業において自著を使用している。	2019年～	三木、吉川「情報理論」コロナ社
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
学生相談員としての業務	2019年～	学生相談室に来室した学生・保護者の対応を行う。
多賀城市との連携協定事業の一環として開催する「21世紀のキーテクノロジーを学ぶ」の講師	2013年～	夏季休業中に多賀城市内の小中学校理科教諭に対し、授業に役立つと思われる内容について講習を行った。
教職課程センター所員としての業務	2010年～	教育課程履修の学生に対して教育実習の支援を行っている。
工学総合研究所啓発活動コラボ授業の講師	2010年～	夏季休業中に多賀城市立東豊中学校の生徒を対象として、情報通信に関連する講習と実習を行った。
工学基礎教育センター相談員	2010年～	数学、物理の学習支援を中心として、専門科目の相談も応じている。

現在の課題・目標	・担当科目に対して興味を引き出させること ・自主的に行うことができる内容の課題を出すこと ・講義内容を応用できるようになること
今年度の進捗状況	・担当科目に対して興味を引き出させること ・自主的に行うことができる内容の課題を出すこと ・講義内容を応用できるようになること
来年度の進捗目標	・上記の点について授業資料の内容を見直しながら継続する ・評価項目をより明確にする ・新たな教科書として「情報数学」を執筆中

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
『Pythonで学ぶ暗号理論』	共著	2024年9月	コロナ社	神永正博, 吉川英機	pp.1-208
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
On the bit error probability for constant Log-MAP decoding of convolutional codes with rate k/n	単独	2024年11月	Asia-Pacific Conference on Communication (APCC) 2024(Bali)	Hideki Yoshikawa	
H．翻訳（学術書や原典等）					

I. 特許	
現在の課題・目標	・従来より行っている誤り訂正符号の数学的解析を続けている ・学内において組織しているアタックラボで行っている差分電力解析による共通鍵暗号の解析 ・誤り訂正符号、および暗号システムの実装への応用 ・大学院生の指導
今年度の進捗状況	・これまでに国際シンポジウムに投稿した内容の論文投稿の準備をしている。 ・卒業研究において、軽量ブロック暗号や誤り訂正符の性能評価を研究テーマとした。 ・大学院生を指導した
来年度の進捗目標	・情報基盤工学科の新設に伴い、新カリキュラムの充実を全てに優先させる。 ・誤り訂正符号の解析テーマに関しては既発表の内容の論文投稿を行う。 ・ブロック暗号だけでなく、ストリーム暗号のアタックを行う。 ・暗号攻撃にFPGAボードを利用するためのスキルを身につける。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2022年6月～2024年6月	電子情報通信学会　基礎・境界ソサイエティ 出版委員
2019年～	計測自動制御学会 会員
2012年～	電気学会 会員
2009年～	電子情報通信学会　東北支部 運営委員
2005年～	電子情報通信学会 論文誌　査読委員
1992年～	The Institute of Electrical and Electronics Engineers (IEEE) 会員
1991年～	電子情報通信学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動
情報基盤工学科　学科長 理数教育センター相談員 学生相談員 教職課程センター運営委員

2024年度

所属	工学部　情報基盤工学科	職名	准教授	氏名	門倉　博之	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業理解促進のための資料作成と配布およびオンライン動画の作成配信	2024年4月12日～2025年1月24日	授業内容のポイントをまとめた資料の配布および授業のオンライン動画を作成配信し，授業理解促進を図った。
2．作成した教科書、教材、参考書		
工学総合演習Ⅱの演習資料の配布	2024年12月22日～2025年1月24日	3年後期の授業「工学総合演習Ⅱ（情報数学）」の教材を作成し配布した。
情報数理演習Ⅲの演習資料と小テストの配布	2024年9月26日～2025年1月23日	1年後期の授業「情報数理演習Ⅲ（微分積分学Ⅱ）」の教材を毎回作成し配布した。
微分積分学Ⅱの講義資料の配布	2024年9月26日～2025年1月23日	1年後期の授業「微分積分学Ⅱ」の教材を毎回作成し配布した。
土木情報学の講義資料の配布	2024年9月25日～2025年1月22日	環境建設工学科2年後期の授業「土木情報学」の教材を毎回作成し配布した。
情報数学演習の演習資料と小テストの配布	2024年4月19日～2024年7月31日	2年前期の授業「情報数学演習」の教材を毎回作成し配布した。
統計的思考の基礎の解説動画の配信および資料と小テストの配布	2024年4月17日～2024年7月23日	1年前期の授業「統計的思考の基礎」の教材の解説動画および資料と小テストを毎回作成し配信・配布した。
データサイエンス演習の演習資料の配布	2024年4月12日～2024年7月26日	3年前期の授業「データサイエンス演習」の教材を11回分作成し配布した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	授業内容が理解しやすいような，わかりやすい説明をする。 学習効果が得られるように教材を工夫して作成する。	
今年度の進捗状況	授業内容が理解しやすいように教材を工夫作成するなど，一定の進捗があったといえる。	
来年度の進捗目標	引き続き，よりわかりやすい説明と教材の工夫を行う。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
エラー関連電位に基づくBMIの精度向上の検討―学習データ拡張方法の考察―	共著	2025年1月	電気学会論文誌C（電子・情報・システム部門誌），145(1)	荒翔太，加藤和夫，門倉博之，石川敦雄	pp.52-58
Influence of Spatial Frequency on Human Subconscious and Related Neural Activity Using the Implicit Association Test	共著	2024年11月	International Journal of Affective Engineering	K. Kato, T. Suzuki, H. Kadokura, A. Ishikawa	pp.
空間周波数特性を有する移動ターゲットに対する視覚探索時の視線応答	共著	2024年10月	電気学会論文誌C（電子・情報・システム部門誌），144(10)	紺野圭伍，加藤和夫，門倉博之，石川敦雄	pp.978-984
The Impact of Road and Urban Infrastructure Variances on Electric Kick Scooter Travel	共著	2024年6月	HCII 2024	A. Tsuruoka, H. Kadokura, T. Shimizu, K. Aihara	pp.324-338
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
大学図書館閉架書庫内の避難行動に関する研究ー条件による歩行速度・経路等に関する考察ー	共同	2024年9月	第31回人間・環境学会大会(水戸)	小暮紘史, 門倉博之, 恒松良純	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標	①同専門領域の研究者との共同研究を進める。 ②高層建築物における避難時の滞留伝播について分析を行う。				
今年度の進捗状況	上記目標①については，共同研究にて複数の学術論文の投稿をすることができた。上記目標②については，新たな実験と分析を行い，一定の進捗があったといえる。				
来年度の進捗目標	上記目標①および②について，引き続き，学会での報告と学術論文として投稿する。				

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 科学研究費助成金若手研究	2019年度～2023年度	個別(研究代表者)	高層ビルにおける全館避難時の階段室内滞留のモデル化
科学研究費助成事業 科学研究費助成金基盤研究(C)	2019年度～2023年度	共同(研究分担者)	空間周波数が潜在的な感覚に与える影響と関連する大脳神経活動の評価

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動	
2005年5月～	日本火災学会会員 会員
2005年4月～	日本建築学会会員 会員
2002年6月～	情報処理学会会員 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動
教務委員

2024年度

所属	工学部　情報基盤工学科	職名	准教授	氏名	木下　勉	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
再履修者に対する演習科目指導体制の構築	2024年	ST(Student Tutor)やSA(Student Assistant)を活用し，情報数理演習II・応用線形代数学演習，確率統計学演習の再履修者が多い講義について，講義中に細かな指導と質問に対応できる体制を構築した．
2．作成した教科書、教材、参考書		
情報数理演習IIの演習資料と小テストを毎回配布	2024年	「情報数理演習II」の教材を，学習意欲の低い学生用に見直し，毎回作成し配布した．
応用線形代数学の予習資料と復習資料を毎回配布	2024年	「応用線形代数学」の記入式教材を毎回作成し，1週間前に公開することで予習がしやすいようにした． また，講義後に理解度を確認するテストを作成し，自宅での復習をしやすいようにした．
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	再履修者など，学習意欲の低い学生にも，講義内容が理解できるような仕組みを検討する．また，講義資料をブラッシュアップし，理解しやすいものにする．
今年度の進捗状況	各種講義資料について，前年度作成の資料を見直し，図表の追加および説明の追加を行った．
来年度の進捗目標	授業評価アンケートの結果を踏まえ，講義に向けて改善するべき項目に対処する．

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
土器片の空間配置推定手法に基づく土器片組立システムの検討	共同	2024年11月	NICOGRAPH2024(東京都市大)	◎川島大心，游梦博，木下勉，今野晃市	
実物の石器と計測点群の融合環境構築のための石器識別手法の高速化の検討	共同	2024年11月	NICOGRAPH2024(東京都市大)	◎瀬戸彩花，游梦博，木下勉，千葉史，今野晃市	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	①研究成果を学術論文，口頭発表などの形で発表する． ②外部資金等を獲得し，研究環境を整備する． ③学外の研究者と共同研究を実施する
今年度の進捗状況	①査読付き学術論文への投稿を行った．また，口頭発表では最優秀論文賞を受賞した． ②科研費は採択となった． ③岩手大学との共同研究を実施している．

来年度の進捗目標	①研究成果を学術論文，口頭発表などの形で発表する． ②研究室の運営に備え，外部資金獲得を目指す． ③学外の研究者との共同研究により，研究環境をよりよくする．

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2024年度～2026年度		従来の土器復元では，輪郭線や割れ口の形状などを手がかりに，隣接する土器片を探索し組み立てが行われる．しかし，出土した土器片の数が極端に少ない場合や，隣接する土器片を発見できない場合は，その土器片の配置や空間姿勢は，組立従事者の知識や主観にゆだねられる．そのため，土器片配置の真正性について，考古学者の推定を裏付ける定量的評価が必要である．そこで，土器片の数が極端に少ない場合や，隣接する土器片を発見できない場合でも，正しい組み立て姿勢・位置を仮想空間で推定する手法を確立する．土器の完成形状を回転体に近い形状と仮定し，土器を構成する土器片に対し，土器片の組付け姿勢・位置の推定を行う．

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

シラバス・時間割委員

2024年度

所属	工学部　情報基盤工学科	職名	准教授	氏名	深瀬　道晴	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
教育支援システムのmanaba folioを活用し、学生がいつでもどこでも課題等に取り組める仕組みを実施している。	2020年4月～	教育支援システムのmanaba folio上に授業の講義資料と課題・レポートを毎回アップロードし、学生が授業時間外においていつでもどこでも予復習や課題に取り組み、どこからでもレポートを提出できるように工夫している。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
「プログラミング基礎」の講義資料「プログラミング応用」の講義資料	2020年4月～	自身が今年度担当する講義について、独自の講義資料を作成した。それぞれについて、教科書・参考文献と整合性が適切に取れていること、一方で、教科書・参考文献の内容をより分かりやすくなるように学習の流れを整形し、必要な説明を加えながら、教科書・参考文献にはない発展的な内容・課題を取り入れた。
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 科学研究費補助金基盤研究（C）	2019年度～2023年度	個別	格子基底簡約アルゴリズムの改良とRSA暗号安全性解析への応用

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2024年度

所属	工学部　情報基盤工学科	職名	准教授	氏名	物部　寛太郎	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
Zoomの導入	2020年～	担当している授業全ててZoomを導入することで、遠隔授業を実施した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
Research for Japanese Input Method using Flick in Virtual Reality	共同	2025年3月	2025 4th Asia Conference on Cloud Computing, Computer Vision and Image Processing(Hampton by Hilton Guangzhou Dongxiaonan)	Kantaro Monobe, Masaki Ohishi	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年3月	The International Society for Applied Computing 会員
2021年6月～	日本バーチャルリアリティ学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2024年度

所属	工学部　情報基盤工学科	職名	講師	氏名	森島　佑	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		本年度の教育活動の主眼は、生成AI利活用に関する講義科目の全学展開にある。また、最新の生成AI技術を効果的に取り入れるため、柔軟性と実践性を備え、学生が実践的な利活用法を身につけられるような講義を構築し実施することが目標である。
今年度の進捗状況		本年度は、生成AI利活用に関する講義科目を全学的に実施し、約1700名の学生が受講した。受講後に実施したアンケート調査においては、平均評価4.4を獲得し、講義内容および実践的な授業運営に対する高い評価を得た。さらに、本プロジェクトは学長教育改革研究助成金に採択され、学内の各関係者との連携を強化するとともに、入学前教育等への展開も果たした。これにより、生成AIやデータ活用の先進的な教育手法が、実際の学習環境において有効に機能していることが確認された。
来年度の進捗目標		次年度は、既存の生成AI利活用講義をベースに、プログラミングや各専門分野への利活用に関する内容や情報のアップデートを検討する。具体的には、各学生の専門性を考慮した演習内容を取り入れ、生成AI利活用についてのより一層の実践的能力の涵養を目指す。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
機械学習を用いたブレッドボード上の電線接続関係推定に関する試み	共同	2025年3月	情報処理学会 第87回全国大会講演論文集(大阪府)	鈴木 順, 志子田有光, 森島 佑	
Wi-Fiセンシングを屋外異常検知へ応用するための一検討 ～ 農作物の鳥獣被害対策に向けて ～	共同	2024年7月	電子情報通信学会技術研究報告(北海道)	◎鈴木 利則, 森島 佑, 小倉 振一郎, 松浦 寛	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	本年度は、科研費に採択されたWi?Fiセンシング及び教育工学分野の研究を基軸とし、各領域における技術的課題の解決並びに応用可能性の拡大を図ることを目的とする。今年の目標は論文投稿及び対外発表を具体的な目標とし、加えて、学内の共同研究者と研究を進めているセキュリティに関する研究など研究費の獲得を目指し各種助成に応募する。
今年度の進捗状況	本年度は、分担として採択されている科研費のテーマであるWi?Fiセンシング及び教育工学分野の研究が進展し、それぞれの分野において学会での口頭発表を実施した。また、セキュリティに関する研究では、科研費基盤（C）の分担として新規採択された、関連論文を投稿中である。加えて、センシングとデータ連携を発展させた研究内容に関しては、学内の共同研究者と連携の上、新規プロジェクトの研究費に応募した。なお、今年度の主要な目標であった論文投稿及び対外発表は概ね達成されたと評価する。
来年度の進捗目標	次年度においては、現在進行中の各研究成果をもとに、論文化を進めることを目標とする。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2024年度～2026年度		遠隔授業において、組み込み開発やIoT分野で重要となる物理センサや電子回路に関連する知識を実体験で確認する対面による実習機会を安定的に充分確保するためには自律学習教材の提供や遠隔指導の機会を確保する必要があるが、特にエレクトロニクス実習においては、回路構築とその指導に非常に大きな人的・時間的コストがかかることが足かせとなる。そこで本研究では、従来目視のみに依存していた電子回路基板上の配線確認を自動化するため、既存技術では困難であった深層学習技術による、電線やワイヤーのような不定形線状物体検出技術を独自に開発する。
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2025年度	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2024年6月～	電子情報通信学会 情報理論研究専門委員会 幹事
2024年	電子情報通信学会 情報理論とその応用シンポジウム 実行委員（総務）
2021年6月～2024年5月	電子情報通信学会 情報理論研究専門委員会 委員
2013年～	電子情報通信学会 会員
2013年～	IEEE 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動
1. 総合ネットワーク管理委員会 委員 2. インターネット広報管理運営委員会 委員 3. 図書館委員会 委員 4. 未来探究学部未来探究学科(仮称)設置準備委員会 委員

教員業務・活動報告

地域総合学部

地域コミュニティ学科

政策デザイン学科

2024年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	教授	氏名	岩動　志乃夫	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 文科省科研費基盤研究B	2017年度～	共同(研究分担者)	「観光の組織化と地域構造変容のダイナミズムに基づく次世代観光戦略の構築」というテーマのもとで研究を遂行している。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2020年6月～2024年5月	立正地理学会 副会長
2020年4月～	日本地理学会 代議員6期
2019年8月～	宮城県特定大規模集客施設立地誘導審議会 委員
2019年4月～	日本観光研究学会 会員
2018年4月～	宮城県七ヶ浜町長期総合計画専門部会 委員
2015年4月～	仙台市泉区区民協同まちづくり事業評価委員 委員長
2015年4月～	仙台市大規模小売店舗立地法専門委員会 委員長
2006年4月～	東北都市学会 理事

1999年4月～	東北都市学会 会員
1997年4月～	経済地理学会 会員
1990年4月～	日本都市学会 会員
1988年4月～	人文地理学会 会員
1984年4月～	立正地理学会 会員
1984年4月～	日本地理学会 会員
1982年10月～	東北地理学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	教授	氏名	伊藤　晶文	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
manabaを用いたオンデマンド授業	2022年4月1日～	「環境の科学」において，動画および授業資料（アウトラインおよび図表資料），manabaの小テストおよびレポート機能を用いてオンデマンド授業を行った。また，manabaのコレクション機能を用いて，学生からの質問に回答した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
授業時の配布資料の作成	2022年4月1日～	講義については，アウトライン，図表資料（ともにPDF）をmanabaにて事前配布し，授業の流れを前もって把握できるようにしている。演習および実習については，授業計画全体の流れを示すとともに，必要に応じてレジュメ等の資料を作成・配布している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	教養教育科目，学部共通科目，学科専門科目の各授業について，標準的な担当科目数を実施するとともに，学生の理解度に応じた授業の実施を心がける。
今年度の進捗状況	本学の教学システムであるmanabaを活用し，小テスト機能や個別指導コレクション機能をとおして，学生の理解度を把握することに努めた。
来年度の進捗目標	今年度の状況把握をふまえて，各授業の内容および配布資料のブラッシュアップを行う。新たなLMSの活用に努める。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
沿岸巨礫堆積物の年代が示す過去の熱帯低気圧活動の変動	共同	2024年4月	日本堆積学会2024年熊本大会（熊本大学黒髪キャンパス）	◎南舘健太，石澤尭史，菅浩伸，横山祐典，小岩直人，伊藤晶文，後藤和久	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	COVID19の影響により進捗が遅れていた研究をできるだけ進め，成果をまとめる。
今年度の進捗状況	SfM-MVS処理，GIS解析等，室内作業を中心に進めたが，まとまった成果は得られなかった。
来年度の進捗目標	巨大津波後の砂浜海岸の変形に関する研究を引き続き進める。関連して得られた成果を発表する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年6月～	東北地理学会 評議員
2023年6月～	東北地理学会 幹事長
2017年1月～	宮城県環境影響評価技術審査会 委員
2003年10月～	日本地形学連合 会員
1997年5月～	日本第四紀学会 会員
1997年5月～	日本地理学会 会員
1995年4月～	東北地理学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

学生委員会委員
奨学会運営委員会委員
AO委員会委員
グループ主任（2年生）
運営委員会委員（地域総合研究所）

2024年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	教授	氏名	大迫　章史	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業アンケートの実施	2020年4月1日～	授業等の改善のため、manabaのアンケート機能等を活用して学生に授業アンケートを実施している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2020年8月～	日本国際教育学会　理事 会員
2020年8月～	日本国際教育学会 理事
2019年9月～	日本カトリック教育学会 紀要編集委員
2019年4月～	東北教育学会 紀要編集委員
2019年4月～	仙台白百合女子大学カトリック研究所 客員所員
2019年～	東北教育学会　紀要編集委員 会員
2019年～	日本カトリック教育学会　紀要編集委員 会員
2005年4月～	宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所 客員研究員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	教授	氏名	佐久間　政広	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	教授	氏名	清水　貴裕	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
体験により理解を深める講義（教育コミュニケーション論）	2018年4月～	コミュニケーションの中で生じる現象を実際に体験し，グループ討議をすることで授業内容に関する知識を深め，関心や学習意欲を持ちやすくするよう工夫している。
学生との間に双方向性を持たせる講義（健康の科学）	2018年4月～	一方的な講義にならないよう，授業内でスマートフォンを用いたリアルタイム・アンケート（Respon）を活用し，講義内容に関する質問や意見を求め，クラス内の意見を共有することによって双方向型の授業を行っている。
マルチメディア機器の利用	2018年4月～	パワーポイントやビデオ等によって図表や映像を提示することで視覚的にも理解を深めやすくなるよう努めている。
シャトルカードの利用（教育の相談と指導Ⅰ・Ⅱ，教育コミュニケーション論，教職実践演習）	2018年4月～	比較的少人数の授業においては，シャトルカードを用いて，学生の毎回の授業に対する感想・疑問・質問を求め，一人ひとりに対してコメントを返すことで授業に関するコミュニケーションを取っている。学生はシャトルカードに蓄積される自分と教員のコメントをみることで，授業全体の振り返りや理解の深まりにも役立てることができる。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	授業内容に学生が興味関心を持てるよう工夫する。
今年度の進捗状況	教職科目「教育相談の理論と方法」「社会コミュニケーション論」において，それぞれの総合評価が高く，当初の目標は達成されたと考えられる。
来年度の進捗目標	遠隔授業等も含め，引き続き学生が学修内容に興味関心を持てるよう改善していきたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
第8章カウンセリングⅠ－基本的な理論と方法『実践につながる教育相談』	編者（編著者）	2024年10月	北樹出版	黒田 祐二，清水 貴裕，飯田 順子	pp.109-121
『実践につながる生徒指導・キャリア教育』	編者（編著者）	2024年5月	北樹出版	黒田 祐二，清水 貴裕，永作 稔	pp.1-184
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	現在取り組んでいる研究課題について積極的に成果発表を行う。
今年度の進捗状況	現在行っている研究成果の一部を教職科目のテキストとして公刊した。

来年度の進捗目標	現在の研究課題への取り組みをさらに進めていきたい。		
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2019年1月～		日本心理学諸学会連合　心理学検定局常任運営委員 会員	
2018年4月～		日本応用心理学会　機関誌編集委員会委員 会員	
2016年4月～		日本催眠医学心理学会　編集委員会委員 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			
学生健康支援センター長，教職課程センター所員			

2024年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	教授	氏名	菅原　真枝	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ゼミ学生による社会貢献活動の実施	2024年4月～2025年3月	荒町児童館において、ゼミ学生を引率・指導し、放課後児童クラブに登録する児童を対象とする遊びの場を提供するイベントを実施することにより、社会貢献活動を実施した。
ゼミ卒業生を招き就職活動への意欲を高める工夫	2023年9月～	秋頃に、ゼミ卒業生を招き、演習の受講生に対して就職活動への意欲を高める交流会を実施している。
教育方法の工夫	2023年9月～	「福祉社会論」の講義において、テーマを指示し少人数のグループワークを実施し、その話し合いの成果を発表しあうことにより学習内容の理解を深めることができるような教育の工夫をおこなっている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年4月～	宮城県政策評価委員会 助言・指導
2023年4月～	若林区まちづくり評価委員
2021年5月～	みやぎ北ユネスコ協会 理事
2020年4月～	大崎市男女共同参画推進審議会委員長 委員長

2020年4月～	公益財団法人仙台市スポーツ振興事業団評議員 委員
2020年4月～	第36次宮城県社会教育委員会委員 委員
2019年3月～	日本在宅ケア学会会員 会員
2017年2月～	特定非営利活動法人とっておきの音楽祭 理事 委員
2016年9月～	特定非営利活動法人仙台バリアフリーツアーセンター 理事 委員
2016年4月～	東北学院大学教育研究所 所員 委員
2006年～	日本福祉文化学会 会員 会員
2006年～	大崎市男女共同参画推進審議会 委員 委員
2003年～	福祉社会学会 会員 会員
1998年～	日本社会学会 会員 会員
1996年～	東北社会学会 会員 会員
1996年～	東北社会学研究会 会員 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	教授	氏名	坪田　益美	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2017年10月～	全国社会科教育学会　JSSEA専門委員 会員
2016年6月～	東京書籍　教科書編集委員 委員
2016年6月～	東京書籍　教科書編集委員 編集委員
2016年4月～	日本社会科教育学会　評議員、学会誌編集委員 会員
2012年4月～	宮城県教育委員会　入学者選抜試験審議会　委員 委員
2008年4月～	全国社会科教育学会　学会員 会員
2007年6月～	日本カナダ学会　学会員 会員
2007年2月～	日本国際理解教育学会　学会員 会員
2005年4月～	日本公民教育学会　学会員 会員
2004年10月～	日本社会科教育学会　学会員 会員

2004年10月～		日本社会科教育学会　学会員 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	教授	氏名	原　義彦	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業への主体的参加と理解の促進	2022年4月～	授業の終わりにレスポンから質問や感想を記入してもらう。その結果の一覧を次の授業時に提示する。質問や感想へのコメントを行うとともに、前回授業の復習に役立てている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
教科書、参考図書の作成	2019年4月～	①『生涯学習概論』（理想社、2019）を共著で作成する。生涯学習概論の教科書として利用した。 ②『生涯学習支援の道具箱』（社会通信教育協会、2019）を共編で作成した。生涯学習概論等の授業の参考図書として利用した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
フォルケホイスコーレの基本価値の変容―2017年と2024年の基本価値の比較を通じて―	単著	2025年2月	東北学院大学地域総合研究所，東北学院大学地域総合研究所紀要，2	原，義彦	pp.19-29
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
『三訂　生涯学習概論ハンドブック』	編者（編著者）	2025年3月	国立教育政策研究所社会教育実践研究センター	清國 祐二，原 義彦，久井 英輔，山本 裕一，馬場 祐次朗，佐久間 章，松田 道雄，山田 智章，青山 鉄兵，山本 珠美，井上 伸良，田村 俊作，小川 義和，入江 優子，熊谷 愼之輔，志々田まなみ	pp.1-253
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
An analysis of self-evaluation practices in Danish folk high schools and their relationship to school values	単独	2025年3月	The Nordic Educational Research Association，NERA Conference 2025(Helsinki)	Yoshihiko Hara	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					

来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2022年11月～		国立花山青少年自然の家運営委員会委員 委員	
2022年11月～		日本生涯教育学会 会長	
2021年11月～		長野県公民館運営協議会　公民館職員支援講座 パネリスト, 講師	
2013年9月～		文部科学省優良公民館審査委員会 委員	
2000年8月～		国立教育政策研究所「社会教育主事講習」講師 講師	
1991年9月～		日本教育社会学会 会員	
1989年5月～		日本生涯教育学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	教授	氏名	平吹　喜彦	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
東日本大震災と復興に向き合い，活動する学習機会の導入	2020年～	「持続可能な地域の構築」，「健全な生態系・環境の持続を基軸とするSDGsの推進」という視点から，東日本大震災と復興について考え，行動につなげる機会を，すべての授業に導入してきた。また2011年以降，学術団体や市民団体,被災地住民らと協働で学習会やフォーラム，被災地での復興支援活動を企画・運営し，学生教育にも注意深く導入してきた。なお，2020・2021年度は，新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため，対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかったが，2022年度以降は感染防止対策を講じながら徐々に活動を活発化してきた。
「ヒトと自然のかかわり」に対する知的理解とともに，学習者の自己形成が育まれるような教育の創出	2020年～	景観生態学・植生学・ESD（持続を可能にする教育）を専門とする立場から，野生生物の生活史およびヒトー野生生物－環境間のつながりについて，その多様性や形成史，保全・保護に触れながら学習が深化し，あわせて学習者自身の自然観や人生観，世界観が醸成され得るような教育を心がけてきた。そのための一助として，身近にある自然や暮らしを見つめ直す学習，あるいは地域の児童・生徒や住民と向き合うフィールドワークの開発を積極的に行いながら，実体験と学習者自身による探求・課題解決を重視した取り組みを続けている。なお，2020・2021年度は，新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため，対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかったが，2022年度以降は感染防止対策を講じながら徐々に活動を活発化してきた。
「企画する，段取る，遂行する，分析する，まとめる，表現する，伝える」ことのスキルアップ	2020年～	さまざまな学習の内容・形態の中に，「学び」の基本として，このスキームを挿入してきた。なお，2020・2021年度は，新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため，対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかったが，2022年度以降は感染防止対策を講じながら徐々に活動を活発化してきた。
「ローカル（地域）」と「グローバル（地球，世界）」を俯瞰し得る視点の獲得をめざした学習の構築	2020年～	さまざまな学習の内容・形態の中に，「地域と地球・世界」，「多様性の意義」といったテーマや視点を挿入し，持続可能な地域の構築，あるいは地球市民の育成に貢献しうる教育を心がけてきた。また，海外学術調査に赴く際には，国内でフィールドワークを積んだ大学院生や学部学生に同行を促し，異なる自然や風土，文化を体験し得る機会を提供してきた。なお，2020・2021年度は，新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため，対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかったが，2022年度以降は感染防止対策を講じながら徐々に活動を活発化してきた。
導入教育として，「自然に浸る」体験を準備	2020年～	自然科学を志向する学生であっても，入学当初から豊かな自然体験を有する者はごく少数でしかない。そこで,「ヒトと自然のかかわり」を学ぶ際の導入段階にふさわしい，学内や近郊の二次的自然を活用した体験学習プログラムを開発してきた。この学習活動では，五感を働かせて自然を認知することの楽しさを味わうとともに，自然界（生態系）の営みが非日常的なスケールで複雑に展開していることに目を向けることをめざしている。なお，2020・2021年度は，新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため，対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかったが，2022年度以降は感染防止対策を講じながら徐々に活動を活発化してきた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
自然教育・環境教育・ESD（持続を可能にする教育）・SDGs（持続を可能にする開発目標）にかかわる学習素材・教材アーカイヴ	2020年～	自然教育・環境教育・ESD・SDGsを推進する任意団体を組織し，体験学習フィールドの開拓・維持や学習プログラムの開発を進めてきた。2020・2021年度は，新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため，オンライン学習への対応となったが，2022年度以降は感染防止対策を講じながら徐々に活動を活発化してきた。
講義・実験・実習で用いる説明文・図解資料（印刷物やパワーポイント映像，動画など），および標本類。2020・2021年度を中心に，新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため，オンライン授業の教材開発に努めた。	2020年～	学習者の理解を助け，しかも自立的な学習活動を織り込んだビジュアル教材の作成に努めてきた。2011年以降は，東日本大震災と復興，持続可能な地域づくりに関わる教材づくりにウエイトを置いている。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

東日本大震災に伴う大地震・大津波とその後の復興事業によって大きく変遷する海岸エコトーンと沿岸地域に着目して,「南蒲生/砂浜海岸エコトーンモニタリングネットワーク」と「生態系サービスの享受を最大化する‘里浜復興シナリオ’創出プロジェクト」(いずれも世話人代表),「地域の自然と歴史に学ぶ里浜復興研究会」(世話人),「カントリーパーク新浜(環境部)」の4つのプラットホームを運営。現場・地域に根ざした学術調査で収集したデータに基づいて,「ふるさと・里浜復興」に向けた情報やアイデア,実践の発信・分かち合い・学び合いを推進	2020年～	被災地住民や市民団体,学術団体,行政機関などのステークホルダーと協働して,「砂浜海岸エコトーンの構造と恵み,自律的再生に立脚したふるさと・里浜の復興」に関する学び合いを推進した(なお,2020・2021年度は,新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため,対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかったが,2022年度以降は感染防止対策を講じながら徐々に活動を活発化してきた)。それらの活動の骨子は,ホームページ https://sites.google.com/site/ecotonesendai/(随時不定期更新)などで自主的に公開している。
宮城県仙台市新浜地区や亘理町吉田浜地区などで,学生が現場で「地域づくり」を体験しうる「地域・市民団体と連携した学習活動」を実施(世話人)	2020年～	住民・市民団体の皆さんの手厚いサポートの下で,「里浜・里地・里山における景観の読み解き,自然環境と伝統的な暮らしの探求,賢い資源利用や災害適応術の考究」を体験活動として織り込み,復興・持続可能な地域づくりのあり方を模索する学び合いを企画・実施した。なお,2020・2021年度は,新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため,対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかったが,2022年度以降は感染防止対策を講じながら徐々に活動を活発化してきた。
市民団体・学校・学術団体等が主催する講座・自然観察会・環境保全活動を推進(講師・支援者)	2020年～	新浜町内会(仙台市宮城野区)主催の「新浜フットパス」,新浜町内会ほか主催の「新浜の自然と歴史の学習会」,東北学院中学校(2020年度)および高等学校(2021～2024年度)「総合的な学習・中高大一貫教育事業」,仙台市高砂市民センター・仙台市立岡田小学校ほか主催の「岡田新浜 花咲く浜辺づくり計画」,せんだい3.11メモリアル交流館主催の「夏色ドロップス ～あそんで味わう、せんだいの海辺～」などに参画して,学びの機会を提供した。なお,2020・2021年度は,新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため,対面による学習活動の一部を断念せざるを得なかったが,2022年度以降は感染防止対策を講じながら徐々に活動を活発化させてきた。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
The influences of anthropogenic modification after the Great East Japan Earthquake on ground insects and their relationship with vegetation	共著	2024年11月	Coastal Engineering Journal	Okoshi H., Matsushima H., Negishi J.N., Ohara M., Hirabuki Y., Kurosawa T. and Ueno H.	pp.1-18
津波で倒壊した海岸林における復興事業に伴う人為攪乱がマツ類の天然更新に与える影響	共著	2024年8月	日本緑化工学会誌, 50(1)	栗栖寛和, 岡浩平, 平吹喜彦, 松島肇	pp. 147-150.
Prediction of the impact of sea level rise in coastal areas where the tide embankments have been constructed	共著	2024年8月	Landscape and Urban Planning, 252	Xu M., Matsushima H., Zhong X., Hirabuki Y., Oka K., Okoshi H. and Ueno H.	pp.105193
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
『「よみがえる生きものと自然」に出会う 仙台・名取の海辺マップ』の作成と活用・プラットホーム化推進に関する覚え書き	共著	2025年2月	東北学院大学地域総合研究所紀要, 2	平吹喜彦, 赤谷加奈	pp.79-85
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					

G. 学会における研究発表					
「よみがえる生きものと自然」に出会う仙台・名取の海辺マップの作成・活用による里浜復興	共同	2025年2月	能登半島地震・豪雨災害と東日本大震災　自然環境・社会特性を活かした住民主体の復興・地域づくりを目指して(仙台)	◎平吹喜彦, 赤谷加奈, 遠藤源一郎, 田中ちひろ, 棟方有宗	
津波で倒壊した海岸林におけるクロマツの13年間の動態	共同	2025年2月	自然環境復元学会第25回全国大会(東京)	◎白鷺翔真, 岡浩平, 齊藤賢治, 平吹喜彦	
大津波被災地における『ふるさと 新浜マップ』の作成・更新活動と里浜植生の探究・保全の営み	共同	2024年10月	植生学会第29回大会(つくば)	◎平吹喜彦, 赤谷加奈, 遠藤源一郎, 菊池慶子	
Inward-shift of safe-sites for sandy beach plants following the huge earthquake/tsunami 2011: an importance of conservation of heterogeneity and redundancy in the fragile coastal ecotone	共同	2024年10月	The 14th Conference of International Consortium of Landscape and Ecological Engineering (ICLEE 2024)(北九州)	◎Hirabuki Y., Sato Y., Kanno H., Tomita M., Hirayama H., Oka K., Matsushima H., Kurosawa T. and Hara K.	
仙台湾岸でよみがえる ふるさとの自然	単独	2024年6月	ビオトープフォーラム in 仙台 2024 －私たちの豊かさは多様な生き物の棲む地球から－(仙台)	平吹喜彦	
大きな地震と津波、大規模な復興工事を経験した海辺でよみがえる、「ふるさとの生きものと自然」	共同	2024年6月	ネイチャーポジティブアクション ポスター展 in 青葉山 －人と自然が育みあう持続可能な社会の実現に向けて－(仙台)	◎平吹喜彦, 赤谷加奈, 田中ちひろ, 遠藤源一郎, 棟方有宗	
生育基盤保全区と盛土区におけるクロマツの樹高成長	共同	2024年6月	日本景観生態学会第34回仙台大会(仙台)	大垣岳斗, ◎富田瑞樹, 菅野洋, 平吹喜彦	
宮城県レッドリスト「植物群落」の実効性向上をめざした景観生態学的な取り組み	共同	2024年6月	日本景観生態学会第34回仙台大会(仙台)	◎菅野洋, 沖田葦, 齊藤賢治, 平吹喜彦	
小学生を対象とした景観体験による生物多様性保全	共同	2024年5月	日本地球惑星科学連合2024年大会(千葉市)	◎松島肇, 鈴木玲, 木村浩二, 大越陽, 植野晴子, 平吹喜彦	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2024年度～2026年度	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(A)	2023年度～2026年度	共同(研究分担者)	東日本大震災の津波で大きな被害を受けた東北地方太平洋側では，震災後10年の間にほぼ全ての海岸防災施設が復旧することができた。事業の過程で生じた植物多様性保全上の問題に対処するために，各地において多様でユニークな環境保全事業がなされた。本研究はこのような環境保全事業について，個々の事業の現状を記録し，保全の目標が達成したかを検証し，保全以外の多面的効果の発揮状況に関して調査・分析する。これらの試みの効果や限界，課題を明らかにすることにより，環境保全と防災が両立する海岸防災施設のあり方に関わる基本原理・技術を提示することを目的としている。

科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2025年度	共同(研究分担者)	大川小判決で学校関係者に自然災害に対する情報収集義務が課された。児童・生徒の教育を本来の職務とする教員が、学校区毎に異なる多種多様な自然災害（地震・台風・豪雨など）に対して防災科学の新知見を収集し続けることは難しい。官（地方気象台）・学（大学）が協力することで、個々の学校が必要とする最先端の自然災害情報の入手方法・集約方法を提案する。また、学校は継続的に運営されていく存在であり、官・学の協力による研究を行っている一定期間だけ情報収集義務を果たすための仕組みが構築されても成果は限定的である。継続可能な仕組みを、産（民間事業者）・官・学が協力して新規の事業を創出するための条件を明らかにする。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年4月～2025年3月	遠野市史跡鍋倉城跡保存活用計画策定委員会 委員
2023年～	植生学会 編集委員
2022年4月～	自然環境復元学会 会長
2022年3月～	亘理町三十三間堂官衙遺跡整備委員会 委員
2022年～	みやぎの運河群利活用推進会議 副座長
2020年～	亘理町史編纂委員会 委員, 委員長（2024～）
2020年～	植生学会 運営委員
2019年～	仙台市広瀬川清流保全審議会 副会長, 会長（2024～）
2018年～	国土交通省名取川水系河川整備学識者懇談会 委員
2018年～2025年3月	環境省自然環境保全基礎調査検討会植生分科会 委員
2016年7月～2025年3月	日本海岸林学会 会員
2016年～	国土交通省河川水辺の国勢調査アドバイザー（阿武隈川水系・名取川水系） 委員
2016年～2025年3月	宮城県土地利用審査会 委員・会長（2019～2025）
2015年～	環境省希少野生動植物種保存推進員 助言・指導, 情報提供, 調査担当
2013年～	宮城県野生動植物調査会植物群落分科会 分科会長
2013年～	宮城県希少野生動植物保護対策検討会 委員
2013年～2025年3月	宮城県文化財保護審議会松島部会 副部会長
2011年3月～	東日本大震災で被災した海岸域で,「ふるさとの自然環境と調和した持続可能な地域づくり」をめざして, 市民・行政・専門家らと協働で復興支援活動を展開 出演, コメンテーター, 取材協力, インタビュアー, 編集, 講師, 助言・指導, 情報提供, 企画, 運営参加・支援, 調査担当, 報告書執筆
2011年～	日本景観生態学会 会員
2009年～	自然環境復元学会 会員
2003年～	「仙台市杜々かんきょうレスキュー隊事業」や「子どもゆめ基金」の助成を受けるなどして, 里山や栗駒山などで, 市民を対象とした環境教育活動を実践（ただし2020年度以降は, コロナウイルス感染拡大防止のため, 実質的な活動を控えた） 情報提供, 調査担当
1985年～	植生学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	教授	氏名	増子　正	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
理解度の確認	2022年4月1日～	授業の冒頭で前回の重要事項について振り返りを行って理解度を確認している。
理解度の確認	2010年4月1日～	授業の冒頭で，前回の重要項目の確認を行っている。
フィールドワークによる実体験	2010年4月～	3年生，4年生の演習にフィールド調査を取り入れて，実際の現場で様々な人との関わりを持たせ，現場で起きている課題を知るための活動を実施している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 令和3年～令和6年 科学研究費補助金基盤研究（C）	2021年度～	共同(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2015年4月～	多賀城市こども子育て会議会長(多賀城市こども子育て会議会長)
2013年4月～	宮城県共同募金会評議委員 運営参加・支援
2012年4月～	宮城県社会福祉協議会評議委員 運営参加・支援
2012年4月～	七ヶ浜町社会福祉協議会地域福祉活動計画策定員会アドバイザー

2010年4月～		仙台市社会福祉協議会評議委員 運営参加・支援, 調査担当	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	教授	氏名	柳井　雅也	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	准教授	氏名	泉山　靖人	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
遠隔授業の併用	2022年4月～	一部授業についてその内容を録画し、欠席者に学習機会を提供している。
出席カードの活用	2017年4月～	講義科目においては、毎回の授業の最後にミニ課題（授業内容の整理、あるいは原則論を講義した際には例外の取り扱いに関する自らの意見の記入）を実施している。
出席カードの活用	2017年4月～	講義科目においては、毎回の授業の最後にミニ課題（授業内容の整理、あるいは原則論を講義した際には例外の取り扱いに関する自らの意見の記入）を実施している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
地域拠点としての図書館－島根県海士町事例－	単著	2024年10月	教育制度学研究(31)	泉山　靖人	pp.220-221
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究（C）	2021年度～	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2022年6月～2026年3月	一般社団法人全国私立大学教職課程協会 研究委員会委員

2022年4月～2026年3月	仙台市社会教育委員の会議 社会教育委員
2005年～	日本図書館文化史研究会運営委員 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	准教授	氏名	遠藤　尚	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
オンデマンド授業における双方向授業の取り組み	2022年4月1日～	オンデマンド授業の「地理学」において、responのアンケートを活用し、動画による授業内容に関する質疑やコメントを回答してもらい、次回の授業動画でそれについて解説するという形でできる限りの双方向授業の実現に取り組んだ。
教員独自の授業改善活動を実施している。	2020年～	実習を除いた全ての講義で毎回responを用いたミニレポートを実施し、学生の意見に応じた授業改善を行った。また，オンデマンドの授業においても，実習のような内容を取り入れた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	オンデマンドの授業においても，できる限り学生の意見を取り入れた双方向の講義を行う。 学生が主体的に取り組めるオンデマンド授業の実施。 大人数授業における学生のモチベーションの維持。 実習演習等において、研究手法やレポートの書き方を身につけさせること。
今年度の進捗状況	ほとんどの授業において、responを利用したクイズやアンケート、ミニレポートを毎回実施し、またそれらに対して回答、解説、授業改善などを行った。 動画や写真、調査先で入手した道具などを授業で積極的に活用した。 「地域コミュニティ学発展実習」において、松島町を対象地域として、対象地域の概要把握、予備調査、テーマの設定、資料や参考文献の収集分析、調査の設計・準備、現地調査、調査結果の分析、報告書の活用という一連の流れを一通り指導した。レポート作成にあたっては、コラトリエの資料を活用した。
来年度の進捗目標	対面およびオンデマンド授業における双方向授業の実現を引き続き目指す。 新キャンパス周辺に関する実習テーマや授業資料を開発する。 大人数授業における学生のモチベーションを維持するための取り組みを実施する。 実習演習等のフィールドワークでは、イベント的な体験学習では無く、客観的に対象地域を探究する手法を指導する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	2024年度2月、3月に実施した本調査の結果の分析、および、前年度の調査結果との比較、考察を行い、今年度が最終年度となる科研の最終成果を学会等で発表する。
今年度の進捗状況	インドネシア、西ジャワ州バンドゥン市近郊の農家と企業を対象に本調査を実施、調査結果を分析した。
来年度の進捗目標	2024年度までの研究成果を学会等で報告し、論文等にまとめる。 2025年度新規の科研費研究について、研究計画の詳細を決め、現地研究協力者と調査スケジュールを調整する。また、先行研究や資料の収集、分析を行う。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2020年度～2024年度	個別(研究代表者)	本研究の最終目的は、インドネシアを事例に、発展途上国における経済成長に伴うフードチェーンの変化による農村社会と農村世帯生計の変動について明らかにすることである。この点について考察するために、国内での商品調達が不可欠な生鮮野菜に注目して、外資系大型スーパーに至るフードチェーンの実態を捉える。そして、外資系大型スーパー向け生鮮野菜産地における生産状況、スーパー向け野菜導入による世帯や農村社会への影響を明らかにする。これら2点について検討するために、外資系大型スーパーや中間業者等に対する聞き取り調査と生産地における世帯調査を実施する。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年3月～	日本地理学会 広報委員
2018年9月～	東北地理学会 幹事
2005年5月～	アジア政経学会 会員
2003年12月～	日本地理学会 会員
2003年12月～	東北地理学会 会員
2002年8月～	人文地理学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

ハラスメント相談員、AO委員（連絡員）、教職課程センター所員

2024年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	准教授	氏名	大澤　史伸	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
地域構想学演習でのフィールドワークを実施及び成果の製本	2011年4月～	3年生地域構想学演習（ゼミ）において、これまで北海道、愛知県、大阪府、東京都、神奈川県をフィールドに、各都市の企業、福祉施設、学校、NPO等における事例研究を行い、その研究成果として報告書を作成した。
地域構想学発展実習の報告書作成	2011年4月～	2年生向けの実習において仙台YMCAが運営する幼稚園、保育園、児童館、スポーツクラブ、学童クラブ、NPO法人等でのフィールドワークを行い，報告書を作成する。
地域構想学発展実習でのフィールドワークの 実習及び成果の製本	2011年4月～	2年生選択科目における仙台YMCAでのフィールドワークの実施及びその成果を「『NPOを学ぶ』仙台YMCAをフィールドとして」と題する報告書にまとめた。
講義内容の理解促進	2011年4月～	毎回，講義の最初に前回の講義の復習を行い，学生の理解度を高めた。
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2011年4月～	毎回の授業の冒頭で、前回の復習とその回の概略を必ず説明し、授業終了時にはその回のまとめを行っている。
リアクションペーパーの導入	2011年4月～	授業時にリアクションペーパーを配布・収集し、次回授業時の冒頭で質問・コメントに回答し、授業内容の理解の促進を図っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
『楽しく学ぼう社会福祉の道しるべ』（学文社）	2024年9月～	本書は全学部全学科を対象に開講している1年生以上を対象にした『社会福祉論』の授業で使用している。本書は、社会福祉とは何か」ということをさまざまな角度からみていきながら、社会福祉の概念と、その根底にある原理を明らかにしていく。社会福祉について学ぶ人のための入門書である。
『市民活動論:ボランティア・NPO・CSR』（学文社）	2022年5月～	本書は、学部1年生以上を対象に開講している「市民活動論」の授業で教科書として使用している。本書の内容は、特に「市民活動」におけるボランティア,NPO,CSR についての現状と課題について論考する。ボランティア論、NPO(非営利組織)論、CSR(企業の社会的責任)論の3部構成から、それぞれの概念、歴史と実態、事例研究を紹介し、今後の課題をも考えていく。
『反福祉論－新時代のセーフティーネットを求めて』（ちくま新書）	2014年9月～	福祉が持っていた意義とその限界を見極めつつ、さらに発展させていくための方法を不法占拠者や生活困窮者、災害被災者、ホームレスなど、福祉の制度から漏れてきた人々が、公助に頼らず自助・共助によって展開する暮らしを検証している。本書は、地域構想学科1年時の地域構想学基礎購読のテキストとして使用している。
『福祉サービス論－ボランティア・NPO・CSR－』（学文社）	2014年3月～	本書は、著者が所属する東北学院大学教養学部で行っている「福祉サービス論」、および、大学院人間情報学研究科の講義科目「福祉市民活動論特講」、演習科目「福祉市民活動論演習Ⅰ」、「福祉市民活動論演習Ⅱ」の講義資料に基づいて、できるだけ平易で分かりやすく「ボランティア」、「NPO（非営利組織）」、「CSR（企業の社会貢献活動）」に興味を持ってもらえることを期待して執筆したものである。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	1.授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切にし、学生の相談に応じる。 2.実習系の科目については、できるだけ成果として報告書の作成を行う。 3.授業時にリアクションペーパーを配布し、授業の理解の促進をはかる。
今年度の進捗状況	1.オフィスワークの時間を使い、学生とのコミュニケーションを行った。 2.実習系の科目については報告書の作成をすることができた。 3.リアクションペーパーを毎回、配布し、学生の質問等について回答した。
来年度の進捗目標	1.授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切にし、学生の相談に応じる。 2.実習系の科目については、できるだけ成果として報告書の作成を行う。 3.授業時にリアクションペーパーを配布し、授業の理解の促進をはかる。

Ⅱ　研究活動					
著 書 ・ 論 文 等 の 名 称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
P.F.ドラッカー『非営利組織の経営』（ダイヤモンド社、1991年）から考える社会福祉法人の現状と課題	単著	2025年2月	ドラッカー学会編集委員会【編】, ドラッカー学会年報Vol.21　文明とマネジメント(21)	大澤　史伸	pp.80-88
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
『楽しく学ぼう　社会福祉の道しるべ』	単著	2024年9月	学文社	大澤　史伸	pp.1-240
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	1.非営利組織のミッションマネジメントの研究 2.障害者の就労支援に関する研究
今年度の進捗状況	1.小規模大学における「建学の精神」に基づく大学経営に関する研究を実施した。 2.障害者の就労支援に関する文献調査を行った。
来年度の進捗目標	1.非営利組織のミッションマネジメントの研究 2.障害者の就労支援に関する研究

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2020年4月～	東京富士大学経営学研究所客員研究員 助言・指導, 調査担当, 報告書執筆
2020年4月～	一般財団法人滋慶教育科学研究所特別研究員 助言・指導, 調査担当, 報告書執筆
2019年4月～	学校法人正則学院（東京都港区）評議員(学校法人正則学院（東京都港区）評議員)
2012年4月～	一般社団法人北海道地域農業研究所協力研究員(一般社団法人北海道地域農業研究所協力研究員)

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	准教授	氏名	品田　光春	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2．作成した教科書、教材、参考書		
講義レジメおよび図表	2023年4月1日～	授業の要点をまとめたレジメと図表のPDFファイルをmanabaで授業前に配布している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	今年度初めて担当する「地域コミュニティ学発展実習」のためのフィールドを開拓し、関連する教材を作成する。
今年度の進捗状況	実習で実施した複数の巡検コースを作成し、実習地である多賀城市に関する各種資料を収集し、その成果の一部は学内の紀要で発表した。実習もおおむね予定どおり実施することができた。
来年度の進捗目標	来年度初めて担当するの演習と、専門科目「地域システム論」の教材を準備し、本年度同様に受講生にとってわかりやすい授業を行う。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
日本の鉱業『経済地理学事典』	分担執筆	2024年10月	丸善出版	品田光春	pp.274-275
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
『史蹟多賀城案内』における「聖蹟」情報	単著	2025年2月	東北学院大学地域総合研究所紀要(2)	品田光春	pp.67-78
昭和初期の多賀城を描いた鳥瞰図	単著	2025年1月	東北文化研究所紀要(56)	品田光春	pp.97-105
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
シンポジウム「20世紀前半の東アジア海域における海上交通の発達と沿岸地域の動向」コメント	単独	2024年9月	日本地理学会2024年秋季学術大会(名古屋市、日本)	品田光春	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	1　これまで継続してきた新潟・秋田両県の石油鉱業に関する歴史地理学的研究の補足調査とその研究成果の発表。 2　宮城県の亜炭鉱業の歴史地理学的研究に関する文献資料収集および現地調査を行う。
今年度の進捗状況	本来紀要に投稿予定であった新潟県の油田開発に関する歴史地理学研究より、発展実習に関する多賀城市の研究を優先して投稿することになったので、当初計画は遅れてしまったが、多賀城に関する新たな研究分野を開拓することができた。
来年度の進捗目標	人文地理学会から依頼された学界展望（歴史地理　近現代）を執筆し、昨年度投稿できなかった新潟県の油田開発に関する歴史地理学研究を完成させたい。また、宮城県の亜炭鉱業の歴史地理学的研究に関する文献資料収集および現地調査を継続して行う。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2023年10月～		産業遺産学会 会員	
2010年4月～		鉱山研究会 会員	
2004年4月～		地理教育研究会 会員	
2003年4月～		日本地域経済学会 会員	
2002年4月～		日本地理教育学会 会員	
2002年4月～		日本地図学会 会員	
2000年4月～		地理科学学会 会員	
1997年4月～		東北地理学会 会員	
1997年4月～		歴史地理学会 会員	
1997年4月～		日本地理学会 会員	
1997年4月～		人文地理学会 会員	
1997年4月～		経済地理学会 会員	
1995年4月～		日本大学地理学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	准教授	氏名	庄子　元	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2025年度		
科学研究費助成事業 若手研究	2023年度～2026年度		

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年5月～	経済地理学会 評議員
2024年5月～	経済地理学会 常任幹事
2023年6月～	東北地理学会 庶務幹事
2022年5月～	経済地理学会 北東支部幹事
2021年5月～	東北地理学会 評議委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2024年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	准教授	氏名	目代　邦康	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
「島と海岸の魅力と地形学―五島列島（下五島エリア）ジオパークからの発信―」一般公開シンポジウム講演録に寄せて：日本のジオパーク活動とJGU 五島大会	共著	2024年	地形, 45(1)	目代邦康, 遠藤徳孝	pp.1-2
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
『わたしたちの地理総合―世界から日本へ（文部科学省検定済教科書高等学校地理歴史科用）』	その他	2025年1月	二宮書店	井田仁康, 秋本弘章, 後藤泰彦, 長谷川直子, 今野良祐, 林敦子, 髙井寿文, 河合豊明, 二宮書店, 永田成文, 齋藤亮次, 目代邦康, 佐藤博之, 渡来靖, 林靖子	pp.1-211
『地理総合―世界に学び地域へつなぐ（文部科学省検定済教科書高等学校地理歴史科用）』	その他	2025年1月	二宮書店	菊地俊夫, 田中隆志, 新堀毅, 松井圭介, 松山洋, 小林岳人, 時実香奈子, 中村洋介, 矢部直人, 二宮書店, 目代邦康, 渡会靖, 伊藤敦子, 北崎幸之助, 佐藤ゆきの, 沼畑早苗	pp.1-240
『地理探究（文部科学省検定済教科書高等学校地理歴史科用）』	その他	2025年1月	二宮書店	伊藤徹哉,大伴一成,小田宏信,菊池美千世,呉羽正昭, 中山秀晃,永田成文,松本穂高,中西僚太郎,松本至巨, 山下亜紀郎,二宮書店, 目代邦康, 松永謙, 渡来靖, 脇阪義和, 清沢創一, 小河泰貴	pp.1-323
『地形のきほん』	共著	2025年1月	誠文堂新光社	目代 邦康,笹岡 美穂	pp.1-144
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					

G. 学会における研究発表					
能登半島地震によって発生した河北潟周辺域の液状化現象の特徴	共同	2025年3月	2025年日本地理学会春季学術大会(駒澤大学)	目代邦康, 八反地剛, 小岩直人, 手代木功基, 丹羽孝仁, 伊藤悟	pp.338
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要		
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動					

2024年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	准教授	氏名	柳澤　英明	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
オンライン講義型の授業でもできる限り、実習形式の課題を出す。	2020年4月1日～	作図や簡易的な模型など作成する実習型の課題を出す。
2．作成した教科書、教材、参考書		
独自のプリントをオンライン配布する。	2020年4月1日～	授業に沿ったプリントを作成し、メモができるようにしている。また学生が授業内容を復習できるように，PPTをホームページにアップロードしている。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
建築研究所講師	2020年4月1日～	建築研究所にて海外の研修生に対し、津波シミュレーションについて講義している。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2018年～	日本地理学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2024年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	講師	氏名	一柳　貴博	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	・授業で、学生の主体的な学びを促す。 ・授業時間以外での学生とのコミュニケーションを大切にする。
今年度の進捗状況	・授業における学生の主体的な学びに関しては、respon等を用いながら授業への積極的な参加を促した。学生が自分の考えを述べるなど、主体的に授業内容を理解し、考えようとする姿勢がうかがわれた。 ・学生とのコミュニケーションにおいては、授業時間以外で個別相談等を受けることもあり、積極的にコミュニケーションをとることができた。ただ、コミュニケーションをとる学生が一部の学生に限られていたことは課題であると考える。
来年度の進捗目標	・授業では、グループワーク等も積極的に取り入れ、学生の主体的な学びを促していきたい。 ・学生とのコミュニケーションにおいては、来年度からゼミも始まるので、より多くの学生と積極的にコミュニケーションを取るようにしていきたいと考える。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	・実施済の研究の論文化 ・今後の研究計画の作成
今年度の進捗状況	・研究を論文化し、学術雑誌に投稿したが、まだ採択には至っていない。 ・今後の研究計画についてはまだ十分に考えを深められておらず、具体的な研究計画の作成ができていない。
来年度の進捗目標	・研究論文の学術雑誌への採択を目指す。 ・今後の研究計画について考えを深めたり、関連する先行研究を調べたりして、具体的な研究計画を作成する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2019年～	日本特殊教育学会 会員
2018年～	日本教育心理学会 会員
2017年～	日本発達心理学会 会員

2017年～	日本家族心理学会 会員
2016年～	日本心理臨床学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	教授	氏名	伊鹿倉　正司	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
毎回の講義の進め方における工夫	2010年4月1日～	講義ではパワーポイントを使用することで,学生がノートを取りやすい配慮を行っている。また,90分間の講義中に5分間の休憩時間を設けることで,学生が集中して受講できるような工夫を行っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	教授	氏名	石川　真作	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
レスポンの活用	2020年～	授業理解と取り組みの測定のため、レスポンを活用。
manabaシステムを活用した双方向的な授業展開	2017年4月1日～	manabaシステムを利用して、講義中にコメントを受け付けるなど双方向的な授業展開を行っている。
授業理解のための映像資料の活用	2015年4月1日～	時事に即した授業内容理解のため、ニュースやドキュメンタリーなどの映像資料を使用。
演習におけるフィールドワークの実施を通したアクティブ・ラーニングの実践	2015年4月～	多文化共生をテーマとする演習において、実情理解のために外国人支援活動現場で参与観察を実施。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
「ドイツにおける既存移民による移民・難民支援活動 ――「社会的多様性の家」の事例から――」	単著	2025年3月	『ヨーロッパ研究』(19)	石川真作	pp.83-116
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
「ハレ・ライプツィヒにおけるムスリム移民コミュニティと移民・難民の統合との関わりについて」	共同	2025年3月	科研費シンポジウム『ドイツの難民・移民の受容と地域社会 ― 旧東ドイツの事例を日本人研究者が観察して ―』(仙台)	石川真作・大河原知樹	
「塩釜国際交流協会の活動と東北学院大学学生の関わりについて」	単独	2024年6月	東南アジア学会 北海道・東北地区例会(仙台)	石川真作	
「『不法』になった私―中部地方のトルコ出身者コミュニティ事始め―」	単独	2024年5月	移民政策学会年次大会(東京)	石川真作	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)（一般）	2021年度～2024年度	個別(研究代表者)	本研究は、ドイツ在住トルコ系移民各世代の、トルコとドイツ双方での動向を現地調査することにより、第1世代が築き上げたトランスナショナルなネットワークやリソースをどのように活用し、さらに次世代にどのように継承しようとしているのかを捉える。それによって、国際環境の変化、生活状況の変化、世代の進行によって、移民の行動様式はどのように変化するかを明らかにし、グローバル化の進行に伴うヒトの流動の最新状況を捉えることを目的とする。
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2021年度～2024年度	(研究分担者)	旧東独地域の移民・難民の社会統合を目指した諸施策の現状と課題、課題克服の模索を冷戦終結後の同地域の社会背景を踏まえて検証する。 旧東独地域は、旧西独地域と難民・移民との関わり方に違いがみられ、反移民・難民政党や極右運動への支持も高い。 しかし、旧東独の自治体では、統一後の人口減も踏まえ、移民・難民の社会統合を独自に模索している。 日本同様に少子高齢化社会のドイツは、2012年に人口増に転じた。その要因の一つが移民・難民の存在で、彼らに対する政策が、自治体の人口動態にも影響している。コロナ禍は、難民・移民の状況に大きく影響しているが、その中でのドイツの状況の解明は日本への示唆となろう。

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2020年2月～	宮城県多文化共生社会推進審議会 委員
2018年4月～	塩釜国際交流協会 会員
2008年10月～	移民政策学会会員 会員
2002年6月～	日本移民学会会員 会員
2001年4月～	日本中東学会会員 会員
1993年4月～	日本文化人類学会会員 会員
1993年1月～	日本イスラム学会会員 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	教授	氏名	奥山　忠裕	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	数学系科目における学生の習熟度の差を如何に埋めるかが課題である。	
今年度の進捗状況	学習内容の要点を捉え、一定の理解度を深めることができたと考えている。	
来年度の進捗目標	図表に対する理解を深められるような教育を行いたい。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
不安削減便益の計測に基づく負の社会的事象に関する対策効果の検証	単著	2024年11月	土木学会論文集, 80(26)	奥山　忠裕	pp.
環境および非環境物品に対する負の風評の情報量格差の影響分析	単著	2024年9月	土木学会論文集, 80(27)	奥山　忠裕	pp.
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
不安削減便益の計測に基づく負の社会的事象に関する対策効果の検証	単独	2024年11月	第 52回環境システム研究論文発表会(関西大学(千里山))	奥山　忠裕	
環境および非環境物品に対する負の風評の情報量格差の影響分析	単独	2024年9月	第32回地球環境シンポジウム(熊本県立大学)	奥山　忠裕	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標	風評被害の調査研究を行うとともに、地域研究活動を行っていきたい。				
今年度の進捗状況	次年度の研究活動先の目途が立ったため、現地の協力者を探していきたい。				
来年度の進捗目標	地域研究の中でも公共事業評価を対象とした研究を行いたい。				

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2006年4月～	土木学会 会員
2005年10月～	日本経済学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	
引き続き関係者からの助言を受けつつ尽力したいと考えている。	

2024年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	教授	氏名	熊沢　由美	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ボランティアの紹介	2021年12月～	NPO法人アスイクの学習支援ボランティアを演習生に紹介した。
アルバイトの紹介	2018年～	仙台銀行でのアルバイト学生に紹介し、金融について理解を深める機会を設けた。
他大学との合同ゼミ	2003年～	他大学との合同ゼミを2回おこなった。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2020年6月～	宮城県後期高齢者医療審査会委員 委員
2020年4月～	宮城県地域年金事業運営調整会議委員 委員
2020年4月～	仙台市経営戦略会議委員 委員
2020年4月～	社会政策学会幹事 会員
2020年～	第2次多賀城市男女共同参画推進計画策定アドバイザー 委員
2017年5月～	石巻市男女共同参画推進審議会会長 委員
2016年6月～	宮城県公益認定等委員会委員 委員

2016年6月～	宮城県公益認定等委員会委員 委員
2014年10月～	仙台市民生委員推薦会委員 委員
2012年7月～	岩沼市男女共同参画審議会副会長 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	教授	氏名	黒坂　愛衣	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2022年度～	共同(研究代表者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2017年度～	個別	社会的少数者の家族成員間での体験共有と関係性の(再)構築をめぐる研究

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2006年5月～	ハンセン病市民学会会員 会員
2003年4月～	日本社会学会会員 会員
2003年3月～	日本解放社会学会会員（理事） 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2024年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	教授	氏名	佐藤　滋	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
LMSを利活用した授業到達度の確認、成績評価の透明化	2020年4月～	授業の理解度を確認するため、原則として毎回、manabaを通じて小テストを実施している。また、授業内容や小テストに対する質問・疑義については、manabaの掲示板を通じて受け答えを行っている。さらに、LMSを、成績評価の透明性を高めるためにも利用している。
他大学の学生との交流プログラムの実施	2011年4月～	他大学の複数のゼミと、合同ゼミ合宿、調査研究を実施している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年4月～	日本財政学会 理事
2020年4月～	日本地方財政学会 理事
2012年7月～	総務省「地方分権に関する基本問題についての調査研究会 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2024年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	教授	氏名	和田　正春	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
オンライン講義への対応と講義の質の確保	2020年4月1日～	COVID-19感染症への対応として、オンライン講義が導入されたが、導入科目を数多く担当していることからも、講義の質を低下させることなく、オンラインのメリットを拡大することで、新しい講義の手法の創造を目指した。受講者数が多い講義が大半であるため、動画配信のスタイルを取らざるを得なかったが、manabaを通じて質問を受け付け、それに丁寧に回答する（全て動画にし、自由に閲覧できるようにした）ことで、それぞれの疑問に答えるとともに、他者の考えを理解する機会にもなり、オンラインで失われがちな他者意見を知り、自分の考えと比較するきっかけにもなった。個別対応を進めたことが、受講意欲にも反映され、極めて負担の多い講義ではあったが、学生の満足度はとても高かった（学部内でも最高の評価を得た）。 個別対応重視は以前から取り組んできたことではあるが、オンラインにおいても継続することができた。対面が復活しても、この手法の成果を活かして、教育効果の向上を図りたい。
2．作成した教科書、教材、参考書		
理容師・美容師向け教科書の作成	1995年4月1日～	公益社団法人日本理容美容教育センター発行教科書「運営管理」の編集委員長として執筆にも関わる。 概ね5年ごとの改訂であるが、省令の変更などによりこの限りでない場合もある。今回は国家試験科目に運営管理がなることから、急遽内容を改めた。業界のサービス基準を構築するという意味でも教科書の持つ意味は大きく、国家試験科目にまでなったことはこの仕事を四半世紀以上担当してきたものとしては意義が会ったと考えている。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
東北学院榴ヶ岡高校との長期課題探求プロジェクトの実施	2020年4月1日～	今年度、榴ヶ岡高校の2年生を対象に、課題探求プロジェクトを実施している。内容は、仙台市交通局から依頼された自転車の交通安全という課題に対し、チームで提案を行うというものであるが、1年をかけた長期的なものであることや大学生がファシリテーターとして関わることなど、新しい要素を含んでいる。ありきたりな内容でなく、様々な調査や実験を行ったり、それを踏まえて提案を作成していくことで、高校生には示唆に富んだ内容になったが、大学生にとってもコミュニケーション面での学びが大きく、大きな成果が得られるものになった。次年度も継続していきたいと考えている。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					

G. 学会における研究発表			
H. 翻訳（学術書や原典等）			
I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2023年2月～		仙台四方よし企業大賞選考委員 委員	
2022年11月～		河北新報社　河北経済研究所シニアフェロー	
1992年～		公益社団法人日本理容美容教育センター　運営管理教科書編纂委員 委員	
1992年～		教科書編纂委員会運営管理委員長 委員長	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	准教授	氏名	小宮　友根	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 国際共同研究強化A	2020年度～2024年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	准教授	氏名	齊藤　康則	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学生の自発的発言の促進（基礎演習、政策デザイン実習、演習Ⅱ・Ⅲ）	2024年4月～	演習やフィールドワークなど、比較的少人数の科目では、グループワークを取り入れることによって、学生が自発的に発言できる雰囲気を作っている。4年次演習の最終報告は、他学年の受講者も聞くことができるようにし、学年を超えた学びの機会を設けてきた。
学習内容の定着（災害社会論、ボランティア・NPO論）	2024年4月～	毎回の授業の冒頭で、前回の授業で寄せられた質問内容に対する回答を行うことによって、学習内容の定着、および授業理解の促進を図っている。
授業理解の促進のため、リプライムービーを作成した（社会運動・コミュニティ論、ボランティア・NPO論）	2022年4月1日～	授業理解を促進するため、寄せられた質問・感想に対し、毎回、30分程度のリプライムービーを作成し、受講者の理解が深まるようにした。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	①講義（災害社会論、ボランティア・NPO論）では、毎回Q and Aを取り入れることにより、受講者が問題意識を持てるようにし、理解度の定着を図った。 ②演習（基礎演習（政策デザイン学科）、演習Ⅱ・Ⅲ（共生社会経済学科））について、受講者の主体性を引き出す。
今年度の進捗状況	①講義科目では、前週の質問内容に対する返答プリントを毎回作成し、配布した。また、半期講義においては3回ほど小テストを実施し、授業内容の定着を図った。 ②演習科目では、文献を輪読する場合など、LMSを用いて事前に質問を寄せてもらう形式とし、より受講者の主体性を発揮できるようにした。また、学生の意欲に応じて、適宜サブゼミを実施している。
来年度の進捗目標	①について、2025年度から政策デザイン学科の講義科目が本格的にスタートするが、同様の手法で講義を運営してゆく。 ②について、政策デザイン学科の演習Ⅰ・実習科目、共生社会経済学科の演習Ⅲにおいて、同様の手法で実習・演習を運営してゆく。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
『農業ボランティア　災害列島をめぐる人・組織の復旧記録』	共著	2025年3月	農山漁村文化協会	齊藤康則, 朝廣和夫	pp.1-352
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
災害と子育て支援NPO　東日本大震災を契機とした母親支援の展開にみられるミッションの確立と支援技法の彫琢	単著	2024年5月	地域社会学会年報, 36	齊藤康則	pp.57-71
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
令和元年東日本台風と千曲川堤外地　なぜ左岸と右岸では災後の営農が異なるのか	単独	2024年5月	地域社会学会第49回大会(滋賀県立大学)	齊藤康則	
H．翻訳（学術書や原典等）					

I. 特許	
現在の課題・目標	①被災者支援、コミュニティ形成の分析 ②被災した農業の復旧・復興の分析
今年度の進捗状況	①について、査読論文がアクセプトされ、2024年度に刊行された。 ②について、2024年度は福岡を4回、愛媛を3回、長野を6回訪問し、2017年九州北部豪雨、2018年西日本豪雨、2019年令和元年東日本台風からの生業の復旧・復興について、関係者からのヒアリング調査を実施した。これまでの研究成果を踏まえ、『農業ボランティア』という共著書籍を刊行した(2025年3月)。
来年度の進捗目標	①について、2024年度に十分調査できなかった、災害公営住宅のコミュニティ形成について、石巻市・気仙沼市をフィールドとしてヒアリング調査を実施する。 ②について、幸いにも科研費を得られることになったので(2025～29年度)、引き続き復興・再生期に関するヒアリング調査を進めてゆき、中間的な内容を学会報告する。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
競争的資金等の外部資金による研究	2023年度～	個別(研究代表者)	
競争的資金等の外部資金による研究	2023年度～	個別(研究代表者)	
競争的資金等の外部資金による研究 環境研究助成	2021年度～	共同(研究分担者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動	
2021年1月～	青葉区区民協働まちづくり事業評価委員会 委員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動
入試部主任として、高等学校高校・進学相談会における広報業務を担うとともに、推薦入試・大学入学共通テスト・一般入試などにおいて入試本部の運営に当たった。

2024年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	准教授	氏名	佐久間　香子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
視聴覚資料、および学生とのコミュニケーション方法を重視した授業づくり	2020年4月1日～	(1) PowerPointをベースに、概念図、写真資料、短い視聴覚資料を併用することを視覚的にわかりやすく授業内容を伝える。 (2) 毎授業後、受講生にリアクションペーパーの提出を貸すことで授業内容理解度を把握すると同時に、出席状況の確認、そして学生とのコミュニケーションに活用する。 以上を着実に実践することで、学生の授業評価アンケートにおいても高く評価された。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))	2021年度～2026年度	共同(研究分担者)	本研究は、インドネシア西カリマンタン州及びマレーシア・サラワク州において、小農による土地利用の変化について現地研究者とともに調査し、その変化の要因に関する比較研究を行うことである。そのうえで、両州で今後望まれる多様で持続可能な土地利用のあり方とそれを実現するための具体的施策について検討し、学術論文にまとめて現地社会にその成果を還元することが、本研究の最終的な目標である。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年1月～	東南アジア学会 北海道・東北地区理事
2022年4月～	日本マレーシア学会 編集委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	准教授	氏名	定池　祐季	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
事後学習のフィードバック	2023年4月～	
responを活用した授業実践	2023年4月～	
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
災害メモリアルのこれまでとこれから 残し方、伝え方	共著	2025年3月	被災学, 2	山内宏泰,吉川由美,三瓶秀文,諸橋和行,定池祐季,山﨑麻里子	pp.108-125
防災・減災への大学連携と地域連携 私大連フォーラム二〇二四レポート	単著	2025年3月	仙台：東北学院大学, 被災学, 2	定池祐季	pp.18-23
北海道胆振東部地震被災地 厚真町の今 メディアとの対話 住民運動を中心に	単著	2025年3月	仙台：東北学院大学, 被災学, 2	定池祐季	pp.102-107
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2021年度～	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年12月	地域防災「必要な助け」確認を～地域の輪・和5部 識者の提言編(5)(十勝毎日新聞)

2024年8月	胆振東部地震の爪痕　間近に＊教職員向け研修会＊厚真(北海道新聞)
2024年7月	南西沖地震31年　支援者、被災者が再結集＊島おこしへ　奥尻未来会議＊ウニ、なべつる岩、オオワシ…＊子どもらと魅力考える(北海道新聞)
2024年7月～	リアス・アーク美術館協議会 委員
2024年4月～	仙台市都市計画審議会 委員
2023年9月～	洞爺湖有珠火山マイスター運営委員会 委員
2023年5月～	厚真町津波防災地域づくり推進協議会 会長
2023年3月～	宮城県国民保護協議会 委員
2023年3月～	宮城県防災会議 委員
2021年11月～	国土交通省 国土審議会 豪雪地帯対策分科会 特別委員
2021年3月～	日本災害復興学会　学術推進委員会 委員
2019年11月～	厚真町 心のサポート・防災学習推進協議会 委員
2019年5月～	厚真町 地域防災アドバイザー
2018年9月～	徳島県 復興指針検討委員会 委員
2017年5月～	北海道開発局 石狩川流域委員会 委員
2017年～	日本安全教育学会 会員
2013年～	日本自然災害学会 会員
2009年～	地域社会学会 会員
2008年～	日本災害復興学会 会員
2008年～	日本災害情報学会 会員
2007年～	日本民具学会 会員
2006年～	日本社会学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	准教授	氏名	宮地　克典	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	新規担当科目のブラッシュアップ 少人数教育＝演習における主体的な参加の機会の提供
今年度の進捗状況	今年度新たにグローバル時代の労働問題入門という科目を担当することとなった。授業改善アンケートをみるかぎり、満足度は平均以上であり、抜本的な内容の刷新が必要な状況ではないと理解できる。 少人数教育についてはグループワークの回数を増やしたり、ディベートを導入するなどの工夫を行なった。
来年度の進捗目標	新たな科目については、上記アンケートにおいていただいたコメントを積極的に盛り込みたい。具体的には、responなどを用いて受講生の反応をみる機会を増やしたい。 演習については、明らかにインターンシップや採用選考などに受講生が参加する回数・人数が増えている。それを踏まえたうえでの授業運営の方法を模索したい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
『大阪社会労働運動史』	共著	2024年7月	耕文社, 10	公益財団法人大阪社会運動協会	pp.692-702
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	引き続き、雇用と社会保障の接続という観点から高齢期生活保障システムの在り方へとアプローチしたい。
今年度の進捗状況	2018年より始まった長期のプロジェクトの成果が2024年7月に大阪社会労働運動史第10巻として刊行に至った。以上を終えて、新たな研究テーマを探究している。
来年度の進捗目標	まずは資料収集を進めている途中であり、その作業をひと段落付けるのが目標である。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年11月～2024年11月	大阪労働大学「年金」講座 講師
2020年5月～	社会政策学会査読専門委員 会員
2009年4月～	社会政策学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	准教授	氏名	武藤　敦士	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
母子生活支援施設の利用率向上に向けた研究：認知度調査からみえた課題と対策	単著	2024年6月	社会的養護研究(4)	武藤敦士	pp.77-85
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
母子生活支援施設による地域協働を再考する	単著	2025年2月	東北学院大学地域総合研究所，東北学院大学地域総合研究所紀要(2)	武藤 敦士	pp.31-43
母子生活支援施設に求められるアフターケアの現状と課題	単著	2025年1月	総合社会福祉研究所，総合社会福祉研究(56)	武藤 敦士	pp.61-71
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
歴史研究からみる母子生活支援施設の現在地と今後の課題	単独	2024年10月	日本社会福祉学会第72回秋季大会(日本福祉大学東海キャンパス)	武藤 敦士	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 日本学術振興会 科学研究費助成事業 若手研究	2022年度～2026年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2022年6月～	社会政策学会 会員

2022年4月～	日本自然保育学会 会員
2010年3月～	日本地域福祉学会 会員
2009年12月～	日本社会福祉学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	講師	氏名	市川　樹	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	・新学科の学生に向けた専門科目の講義が本格的に始まることを踏まえ、多様な専門科目を受講した学生がどのような関心を持っているのか把握する ・外部の講師を招く特殊講義が開講されることから、学生が社会に関心を持てるように取り組む
今年度の進捗状況	・新学科向けの授業において経済学系統の履修がない学生もおり、必ずしも経済学において重視されてきたトピック以外の事項に関心を持つ学生も多いことが理解できた ・多様な外部講師を招く特殊講義においては、講演者のご尽力もあり授業評価アンケートも総合的に高い満足度を得ることができた。
来年度の進捗目標	・経済学以外のトピックに興味を持つ学生にとっても理解しやすく、関心をもてるよう幅広いテーマを扱いつつ、専門的な知識を得られるような工夫を行う ・新学科の演習が始まることから、学生が主体的な学習に取り組めるようにする ・少人数向けの政策デザイン実習を新たに開講する。新し取り組みではあるが、学生が講義形式の授業では得られないような経験を積めるようにする。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
日本におけるケアエコノミー研究に関する展望論文(1) ―持続可能なケアの社会圏・経済圏と産業連関分析活用の基礎的検討の視点から―	共著	2025年2月	横浜国際社会科学研究, 29(4)	市川　樹 須原　菜摘 相馬　直子	pp.85-110
介護保険制度における自治体の療養病床削減の実態と限界 ―介護保険事業計画の定性的比較分析を通じた検討―	単著	2024年9月	横浜国際社会科学研究, 29(2)	市川　樹	pp.43-62
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	・投稿中の論文について、審査を踏まえて適切に修正し、発行を目指す ・カナダの社会保障研究を進めるため、カナダでの実地調査、トロント大学の研究者とのディスカッションを実施する。 ・カナダの社会保障に関する共同論文を作成する。
今年度の進捗状況	・昨年度投稿した論文については2024年9月に発行された ・カナダでの現地調査及びトロント大学の研究者とのディスカッションも行うことができ、今後の研究の方向性を検討することができた。 ・カナダと日本の社会保障の比較を行うことを念頭に置いた共同論文を2025年2月に発行することができた。

来年度の進捗目標	・日本とカナダの社会保障の比較分析を進めていく。 ・日本とカナダの比較分析について海外での研究報告を実施する。 ・2024年に発行された日本の介護保険制度の分析を活かし、介護保険制度の課題などの分析を進めていく。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 国際共同研究加速基金（海外連携研究）	2023年度～	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2016年4月～	日本財政学会 会員
2015年4月～	日本地方財政学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	講師	氏名	河村　真実	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
manabaの活用	2023年～	授業内で使用した資料は、manabaを通じて公開した。また、受講生の理解度を確認するために、manabaを使用してコメントシートの回収や質問の募集を行った。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	学生が、政治や公共性に関する基礎的な概念や理論について、自身の言葉で説明できる程度まで理解を深められる授業を行うことを目標とした。
今年度の進捗状況	学生が、授業内容に関心を持ち、理解を深めることができるよう、具体的事例を多く用いるなど、授業方法の改善を試みた。
来年度の進捗目標	manabaで受け付けたコメントや質問により、学生の理解度を確認しながら、授業内容の進行を調整する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
Equal Recognition and Language Rights	単独	2024年8月	World Congress of Philosophy(イタリア・ローマ)	Mami Kawamura	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	集合的文化権の擁護論に対する批判への応答可能性を検討することにより、リベラルな多文化主義の今日的擁護可能性を明らかにすることを目標として研究を行った。
今年度の進捗状況	今年度は、特に、文化擁護の具体的政策を中心に研究を行い、関連資料の収集を進めた。
来年度の進捗目標	来年度は、収集した資料をもとに研究会報告を行い、論文にまとめる。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

科学研究費助成事業 若手研究	2023年度～2025年度	個別(研究代表者)	本研究は、文化維持に関する集団単位の権利（集合的文化権）の保障に対する根本的批判への応答可能性を検討することにより、リベラルな多文化主義の今日的擁護可能性を明らかにすることを目的とする。本研究では、多文化主義における集合的権利擁護論を、先住民等の文化的少数派に対して集合的文化権を保障すべきだと主張するキムリッカら第一世代と、一時労働者や難民等にまで権利主体を拡大し、より積極的な国家的支援が必要だと主張するパッテンら第二世代に区分し考察する。その上で、集合的文化権の意義それ自体を否定する批判論を考察し、反批判の可能性を検討する。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2023年～	移民政策学会 会員
2018年～	日本政治学会 会員
2017年～	American Political Science Association 会員
2017年～	アメリカ学会 会員
2017年～	政治思想学会 会員
2017年～	日本アメリカ史学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

教員業務・活動報告

情　報　学　部

データサイエンス学科

2024年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	石田　弘隆	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
「代数学Ⅱ」における添削指導	2024年9月～2025年1月	各回に課したレポートについて，履修者全員に対して提出された解答を添削，フィードバック，再提出を繰り返し，理解および正しく記述できるようになるまで行った．
「代数学Ⅰ」における添削指導	2024年4月～2024年8月	各回に課したレポートについて，履修者全員に対して提出された解答を添削，フィードバック，再提出を繰り返し，理解および正しく記述できるようになるまで行った．
2．作成した教科書、教材、参考書		
「線形代数学入門」におけるまとめ問題集の作成	2024年9月～2025年1月	線形代数学入門の講義内容に関わる問題演習として，まとめ問題とその解説をmanabaのコースコンテンツに準備した．
「線形代数学入門」におけるmanaba小テストおよびドリル機能を用いた事後学修教材の作成	2024年9月～2025年1月	manaba小テストおよびドリル機能を用いて練習ドリルと確認テストを作成して，「線形代数学入門」における毎回の講義の事後学修の教材とした．
「代数学Ⅱ」におけるテキストの作成	2024年9月～2025年1月	代数学Ⅱの講義内容に関するテキストを作成し，manabaのコースコンテンツに準備した．
「代数学Ⅱ」におけるmanaba小テストおよびドリル機能を用いた事後学修教材の作成	2024年9月～2025年1月	manaba小テストおよびドリル機能を用いて練習ドリルと確認テストを作成して，「代数学II」における毎回の講義の事後学修の教材とした．
「線形代数学A」におけるまとめ問題集の作成	2024年4月～2024年8月	線形代数学IIの講義内容に関わる問題演習として，まとめ問題とその解説をmanabaのコースコンテンツに準備した．
「線形代数学A」におけるmanaba小テストおよびドリル機能を用いた事後学修教材の作成	2024年4月～2024年8月	manaba小テストおよびドリル機能を用いて練習ドリルと確認テストを作成して，「線形代数学II」における毎回の講義の事後学修の教材とした．
「代数学I」におけるテキストの作成	2024年4月～2024年8月	代数学Iの講義内容に関するテキストを作成し，manabaのコースコンテンツに準備した．
「代数学I」におけるmanaba小テストおよびドリル機能を用いた事後学修教材の作成	2024年4月～2024年8月	manaba小テストおよびドリル機能を用いて練習ドリルと確認テストを作成して，「線形代数学II」における毎回の講義の事後学修の教材とした．
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					

I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	伊藤　則之	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
「情報リテラシー」の授業でのSAの活用	2023年4月1日～	「情報リテラシー」は前期に25コマ開講されており、BYODパソコンを使ったアクティブラーニング形式の授業であるため、各授業に2名のSAを割り当てて、スムーズな授業運営がなされるようにした。
オンデマンド授業「AI社会の基礎」の授業構成および評価方法への新規手法の導入	2023年4月1日～	オンデマンド授業「AI社会の基礎」を担当する専任教員4名により授業構成および評価方法への新しい工夫を盛り込み、授業担当者が異なっても授業内容および評価が同一になるような工夫を盛り込んだ。
対面授業において、欠席者へのオンデマンド指導の対応を実施	2022年4月1日～	対面授業の「情報化社会の基礎」において、欠席者については要望がある場合は、manabaの個別コレクション経由でオンデマンド教材を提供して指導の対応を実施
対面とZoomを併用したハイブリッド授業および総合研究指導	2022年4月1日～	「情報システム運用法A」では対面とZoomを併用したハイブリッド授業を実施し、総合研究指導では指導効率を考えて、適宜、対面とZoomを併用したかたちとした。
履修者へのBYODパソコンの調査結果をフィードバック	2021年4月1日～	「情報システム運用法A」において、履修者へのBYODパソコンの仕様を詳しくアンケートして、アンケート調査結果を履修者にフィードバックして、自分が持っているBYODパソコン仕様の全体のなかでに位置づけを確認できるようにした。
Zoomを利用したオンタイム授業および総合研究指導	2020年4月1日～	
授業支援システムmanabaを利用した遠隔授業の実施	2020年4月1日～	授業の連絡、授業資料の配布、小テストやレポートの提出・回収を実施した。
新聞や雑誌の記事を用いて学生の興味を喚起	2015年4月～	「情報化社会の基礎」において、情報セキュリティなどで実際に発生している問題の事例などを最近の新聞や雑誌から引用して，学生の興味を喚起した。
ゼミ形式演習におけるデザインパターンベースのプログラミング手法の適用	2015年4月～	スマートフォン用アプリの開発教育に，デザインパターンやアジャイルという手法を適用した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
オンデマンド授業「AI社会の基礎」の授業教材の作成	2023年4月1日～	オンデマンド授業「AI社会の基礎」の授業教材を専任教員4名で分担して作成し、4コマ分を担当した。
「情報科学演習」の教材アップデート	2022年4月1日～	
「情報リテラシー」の教材アップデート	2022年4月1日～	
「プログラミング上級」の教材アップデート	2022年4月1日～	
「情報システム運用法A」の教材アップデート	2022年4月1日～	
「情報システム運用法A」、「現代社会の諸問題」、「情報科学演習」の遠隔授業用講義資料	2020年4月1日～	遠隔授業となり、科目によりオンタイム形式またはオンエマンド形式のいずれかになるため、それぞれの形式に合わせて学生が受講しやすいかたちの講義資料を作成した。
「情報化社会の基礎」の遠隔授業用講義資料	2020年4月1日～	TGベーシック科目のために複数教員が同じ科目を担当するため、共通教材となる動画教材、前回授業のまとめ資料と確認テストを作成して、担当する先生方に配布した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	・対面授業での学生の興味を喚起することによる効果的授業の実施 ・ゼミ形式演習での実践的なデザインパターンを含む効果的なプログラミング教育 ・総合研究でのアプリ開発教育と論文作成指導 ・取りまとめ担当の「AI社会の基礎」・「情報リテラシー」の滞りない授業運営と改善

今年度の進捗状況	・対面授業では最新の新聞や雑誌の記事の引用などいくつかの新たな取り組みを実施 ・対面授業ではmanabaを使った複数回の短いレポート提出などアクティブラーニングの導入 ・ゼミ形式演習では予定通りの教育を実施。より理解度を高めることが課題 ・卒業研究ではゼミ生全員がそれぞれアプリを開発し、要旨をまとめることができた
来年度の進捗目標	・対面授業の2年目となる科目「情報理論基礎」の内容を今年度の経験をもとに改善し、滞りない授業運営 ・オンデマンド科目「AI社会の基礎」の振り返りと授業資料改善

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
東北学院大学における情報リテラシー教育概要と入学時のBYOD種別とパソコン習熟度の調査	共著	2025年2月	東北学院大学情報学部論集(2)	伊藤則之, 木村敏幸, 菅原研, 杉浦茂樹, 杉山佳子, 高橋秀幸, 田所裕康, 土原和子, 牧野悌也, 松尾行雄, 松本章代, 村上弘志, 渡邊圭	pp.25-29
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	「情報リテラシー教育概要と入学時のBYOD種別とパソコン習熟度の調査」の研究ノート作成
今年度の進捗状況	「情報リテラシー教育概要と入学時のBYOD種別とパソコン習熟度の調査」の研究ノート作成を完了
来年度の進捗目標	・今年度から始まった科目「情報基礎理論」において新たに実施した取り組みの論文化 ・ゼミ学生4年生の研究テーマの論文化とその発表指導

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2009年4月～	電子情報通信学会会員 会員
1988年4月～	情報処理学会会員 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

情報学部長

2024年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	坂本　泰伸	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究（C）	2023年度～2025年度	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 基盤研究（C）	2022年度～2024年度	共同(研究代表者)	我が国の中山間地域では、地域資源や観光コンテンツが乏しく産業の興隆が著しく困難で地域産業のDX化が望むべくもない地域も多い。また、自然災害の発生時に集落が孤立して住民生活が成立しなくなるなどの課題も有する。本研究では、中山間地域の自立型DX化の必要性に着目し、被災後の速やかな復興・復旧（レジリエンス）力の構築を目指し、平時から外部人材との交流を進め当該地域の認知度を向上させる取組を進める。自立型DX化の取組は、活動の成否が地域住民のITリテラシー能力と相関関係にあるので、住民の情報活用能力の測定方法、情報活用能力の醸成方法、外部人材との交流事業による接点増加に関する効果などを明らかにする。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	菅原　研	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
「考えて書く」の導入と「飽き」の防止	2020年9月11日～	講義中に適宜問題を課し，考えて書くことを促進した。また，学生が集中できる時間を考慮し，講義に関連するショートブレーク動画を使うことで飽きの防止を図った。
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2020年9月11日～	毎回の授業の冒頭で，前回の復習と小問の解答，質問・コメント欄に書かれたものへの回答を示し，当日の講義にスムーズに入れるようにした。さらに，授業終了時に振り返りの時間を設け，学習した内容をresponの自由記述でまとめる作業を義務付けた。
教師役の導入による学習深化	2020年5月7日～	教師役を積極的に割り振ることで学習の深化を図った。
予習課題による学習効率の向上化	2020年5月7日～	次回の学習に必要な事前学習を可能とするワークシートを配布した。講義・演習ののち、その内容に応じた簡単な確認テストを実施した。
振り返り小テスト、共同学習による理解の促進	2020年5月7日～	ほぼ毎回，小問を解く形で学習の振り返りを行った。また，学習内容に応じてグループによる学習を実施した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
メディア表現の技法B	2024年9月～2025年1月	
AI社会の基礎（発展クラス）	2023年9月～	
フレッシュパーソンセミナー	2023年4月～	
科学的思考の基礎	2020年9月11日～	市販されている書籍に教科書として適するものがないこと、受講者の理解度に応じて柔軟な対応が必要であることから独自の細かい教材を作成した
複雑系の科学	2020年5月7日～	教科書だけでは不十分な内容について補足するための、なるべく直感的に分かるように工夫した教材を作成した。
メディア表現の技法A	2020年5月7日～	教科書だけでは不十分な内容について補足するための教材（主にマルチメディアに関わる技術的な面を説明するもの）を作成した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
宮城県視覚支援学校におけるプログラミング授業の実施	2020年～	宮城県視覚支援学校に赴き、視覚障害をもつ小学生（特に2，4年生）を対象としたプログラミングの模擬授業を行った（9/16，11/5，2021/1/27）。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Test of the negative feedback hypothesis of colony size sensing in social insects	共著	2024年	Biology Letters，20(6)	Kikuchi，T. and Hayashi，Y. and Fujito，Y. and Fujiwara-Tsujii，N. and Kawabata，S. and Sugawara，K. and Yamaoka，R. and Tsuji，Kazuki	pp.20240102

Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
東北学院大学における情報リテラシー教育概要と入学時のBYOD種別とパソコン習熟度の調査	共著	2025年2月	東北学院大学情報学部論集(2)	伊藤則之, 木村敏幸, 菅原研, 杉浦茂樹, 杉山佳子, 高橋秀幸, 田所裕康, 土原和子, 牧野悌也, 松尾行雄, 松本章代, 村上弘志, 渡邊圭	pp.25-29
粉体効果を模した群ロボットによる搬送作業- ロボットの形状が搬送に与える影響について -	共著	2024年12月	第25回システムインテグレーション部門講演会(SI2024)	菅原 研, 鈴木 颯人	pp.1342
作って学ぶ群ロボット	共著	2024年9月	第42回日本ロボット学会学術講演会	菅原 研, 工藤 滉人	pp.RSJ2024AC2I1-05
視覚支援学校におけるプログラミング教育支援システム―低学年向け授業のためのシステムの拡充―	共著	2024年6月	日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会講演論文集	菅原 研, 高橋 凌人, 松本 章代	pp.2A2-T07(1)-2A2-T07(2)
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
視覚支援学校小学部における中・高学年のプログラミング授業の実践	共同	2025年3月	電子情報通信学会 福祉情報工学研究会(筑波技術大学(つくば市)), 124, 430	◎松本章代, 菅原研	pp.19-24
視覚支援学校における低学年向けプログラミング授業の環境開発	共同	2025年1月	2024年度 情報処理学会東北支部研究会(東北学院大学(仙台市))	◎劉 旻周, 菅原 研, 松本 章代	
スマートフォンで読み取るブロックプログラミングシステムの開発	共同	2024年9月	第32回視覚障害リハビリテーション研究発表大会(日本教育会館(東京))	◎松本章代, 菅原研	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 基盤C	2023年度～	個別(研究代表者)	
科学研究費助成事業 科学研究費補助金基盤C	2020年度～	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 科学研究費補助金基盤C	2020年度～2023年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2014年～2024年	科学的思考入門(2014-2017)、見る・観る・みる・視る(2018-2019)、科学的思考のススメ(2021-2022)、探求のウラにある科学的思考(2023-2024) 講師

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2024年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	杉浦　茂樹	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学習前の知識状況の把握のための小テストの実施	2020年4月1日～	学科コア科目では，初学者が多いために学習すべき事項が多くなる傾向がある。そのため，重点的に学習すべき事項を学習者自身に絞り込ませることを目的として，毎回の授業の冒頭に小テストを実施し，正解を発表し自己採点を行わせている。
予習の促進と重要項目に対する知識定着の向上を目的とした小テストの実施	2020年4月1日～	学科専門科目では，毎回の授業内容を理解し続けることで発展的な内容も理解が可能となる。そのため，授業理解のための予習を促進，および，重要項目の知識定着の向上を目的として，重要事項の小テストを毎回実施している。Webベースのシステムを利用することで，授業前の予習と授業後の復習の両方で小テストを活用している。
授業資料のインターネットへの公開	2020年4月1日～	授業を欠席した学生は自主的に授業内容の補完ができ，授業を聴講した学生は予習と復習に効果的に活用できるように配慮した，授業資料をインターネット上に掲載している。学生の参照期間に応じて資料を分割することにより，各回の授業が終了した後でも授業内容の確認に利用できるような工夫を行っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
「アルゴリズムとデータ構造」講義資料	2024年4月1日～	データサイエンス学科での開講への変更にともないアルゴリズムに関する説明を増強した。また，学科教育でのプログラミング言語であるPythonに適合するように説明を修正した。さらに，授業での使用を通して継続的に資料の改良を行っている。
「コンピュータ科学」講義資料	2023年4月1日～	データサイエンス学科1年の必修科目である「コンピュータ科学」のPDFによる解説およびWebシステムによる小テストを作成した。さらに，授業での使用を通して継続的に資料の改良を行っている。
「情報リテラシー」講義資料	2022年11月10日～	TGベーシック科目である「情報リテラシー」の講義資料を他の教員と共同で作成した。具体的な担当部分はオープンデータおよびExcelの利用方法の基礎についてである。さらに，授業での使用を通して継続的に資料の改良を行っている。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	①総合研究でのLMS（Learning Management System）の活用を進捗管理などに広げる。 ②『ネットワーク基礎論』の講義資料の内容を最新技術への対応を行う。 ③『コンピュータ科学』の講義資料の問題点の洗い出しと，それにもとづく修正を行う。 ④大学院『プログラム言語論』の演習環境の変更への対応を行う。
今年度の進捗状況	①今年度は進捗がなかったため，来年度も引き続き取り組む。 ②内容更新を行ったが，ネットワークに関する技術的進歩が急激なため今後も継続的な更新を行う。 ③受講生の理解度を向上するために図解化などを進めた。 ④今年度は受講生がいなかったため，来年度に取り組むこととした。
来年度の進捗目標	①大学院『プログラム言語論』の演習環境の変更への対応を行う。 ②『ネットワーク基礎論』の講義資料の内容を最新技術への対応を行う。 ③総合研究でのLMS（Learning Management System）の活用を進捗管理などに広げる。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					

東北学院大学における情報リテラシー教育概要と入学時のBYOD種別とパソコン習熟度の調査	共著	2025年2月	東北学院大学情報学部論集(2)	伊藤則之, 木村敏幸, 菅原研, 杉浦茂樹, 杉山佳子, 高橋秀幸, 田所裕康, 土原和子, 牧野悌也, 松尾行雄, 松本章代, 村上弘志, 渡邊圭	pp.25-29

D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）

E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）

G. 学会における研究発表

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	①研究室サーバを当日中のデータに復旧できるように実際にシステムを構築する。 ②大学の教育・研究に有効活用できるネットワーク構成の詳細設計を行い，試行環境でのテストを行う。
今年度の進捗状況	①従来手法を活用することで，1日以内のデータを復旧が可能となった。 ②優先順位の関係で，本課題は来年度に繰り越しとなった。
来年度の進捗目標	①研究室サーバでのデータ損失の可能性のある期間の短縮について検討する。 ②大学の教育・研究に有効活用できるネットワーク構成の詳細設計を行い，試行環境でのテストを行う。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2001年～	電子情報通信学会会員 会員
1992年～	情報処理学会会員 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	鈴木　努	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
Sonic Piを利用したプログラミング演習	2024年7月15日～2024年8月5日	
機械翻訳を利用した英語論文の講読	2024年4月15日～2024年7月8日	
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	Rを用いたデータ分析教育の充実
今年度の進捗状況	Rを用いて社会統計学やネットワーク分析について学ぶ授業を行ったが、プログラミングが難しいと感じる学生も多かった、
来年度の進捗目標	Rによるデータ分析に関する分かりやすい教育法、教材の開発。 統計的ネットワーク分析に関するテキストの執筆。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
大学生のAI利用に関する注意喚起文の効果――エントリーシートの添削を想定したランダム化比較試験――	共著	2025年2月	東北学院大学学術振興会，東北学院大学情報学部論集，2	鈴木努，小林信重	pp.17-24
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
点中心性からコアブロックへ：企業ネットワークへの応用	単独	2025年3月	日本社会関係学会第5回研究大会(獨協大学)	鈴木努	
全国紙と地方紙の新聞記事データベースの比較	単独	2024年11月	第97回日本社会学会大会(京都産業大学)	鈴木　努	
点中心性からコアブロックへ―確率的ブロックモデルとの関連から―	単独	2024年8月	第77回数理社会学会大会(東北大学)	鈴木　努	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	統計的ネットワーク分析の基本的考え方についての整理
今年度の進捗状況	統計的ネットワーク分析の基本的考え方について学会発表ができた。
来年度の進捗目標	統計的ネットワーク分析についての理解を進めるとともにテキストを執筆する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2024年度～2026年度		メールアート作家（中村恵一）が主宰する形でメールアート・イベントを数回立ち上げてもらい、10ステップまでのチェーンメールとして、インターネット調査会社や作家自身の紹介によってサンプル化された作家、素人・障がい者・いわゆる「こもり人」にメールアートイベントに参加してもらう。やり取りされたメールアートの内容分析（画像解析を含む）も行いつつ、イベントに参加することによって、彼ら（彼女ら）にどのような価値観、人生観の変化、社会ネットワークの広がりが生じるかを追跡的に調査する。
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2021年度～2023年度	共同(研究分担者)	
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	武田　敦志	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
クラウドサーバを用いた教育用情報演習システムの開発と運用	2022年9月1日～	クラウドサーバを用いてプログラミングやデータ解析の演習を実施できるクラウドサービスを開発した。このクラウドサービスはJupyterLabを用いて構築されており、受講生のノートPCからWebブラウザを介して利用できるため、受講生のノートPCの仕様が統一されていないBYOD環境においても同一の演習環境を提供できる。また、Kubernetesを用いた水平分散システムを採用しており、200名以上が同時にアクセス可能な状態で運用している。
自律走行するLEGOロボットを使ったソフトウェア開発教育	2020年4月1日～	LEGO社から販売されているLEGO Mindstormsを使ってソフトウェア開発手法に関する教育を行っている。この自律走行ロボットを題材としたソフトウェア開発教育では，現実に役に立つソフトウェアの設計や確実に動作するソフトウェアの開発に関する演習を効果的に行うことができた。
PowerPointを使った講義資料の配布とWebによる予習・復習のための情報発信	2020年4月1日～	PowerPointを用いて画像やアニメーションを取り入れた資料を作成し，この資料を使って講義を進めることにより，黒板のみを使った講義よりも高い教育効果が得られた。また，講義資料のデータをWebで公開しており，予習・復習を容易に行うことができるようした。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
出張講義の実施	2025年2月27日	酒田光陵高等学校において出張講義「ビッグデータが変える私達の生活」を実施した。

現在の課題・目標	情報系学生を対象としたデータサイエンス分野の教育方法を確立する。
今年度の進捗状況	データサイエンス教育のための教育教材を開発した。
来年度の進捗目標	データサイエンス教育のための教育教材を改善する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
大規模言語モデルを用いた情報システム異常検知手法の検討	単著	2024年7月	情報処理学会研究報告，2024-DPS-200(5)	武田 敦志	pp.
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	大規模言語モデルに基づいた自律的な情報システムの構築手法を確立する。
今年度の進捗状況	大規模言語モデルに基づいた自律的な情報システムの基礎的な設計を行った。
来年度の進捗目標	大規模言語モデルに基づいた自律的な情報システムの実現可能性を検証する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2022年4月～		情報処理学会　論文誌運営委員会　JIP編集委員会 編集委員	
2020年4月～		東北学術研究インターネットコミュニティ（TOPIC） 幹事	
2018年4月～		電子情報通信学会 会員	
2018年4月～		ETロボコン東北地区大会 技術委員 委員	
2011年2月～		情報処理大会東北支部研究会の開催(情報処理大会東北支部研究会の開催) 企画, 運営参加・支援	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
第16回UEC杯コンピュータ囲碁大会	電気通信大学	2024年7月～2024年7月	開発したコンピュータ囲碁プログラム「Maru」が独創賞を受賞した。
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	牧野　悌也	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
「感覚知覚情報論B」の改善	2020年9月～	・manaba，responを用いて，双方向型の授業を可能にした．具体的には，1）毎回の問をresponで提示し，受講生の解答をリアルタイムで示しながらコメントする，2）各回の振り返りを翌週まで行い，良いコメントなどを次回の授業で紹介する，ということを実施した． ・中間テスト，最終テストを廃止し，中間レポート課題，最終レポート課題を実施．さらに，提出課題を受講生自身で評価するようにした．具体的には，レポート課題提出の次の授業で1）受講生にすべてのレポート課題を見てもらい，各自良いレポートに3つの異なる賞を与える，2）受講生に4～5名の小グループを作るように促し，それぞれの賞を持ち寄って，グループ賞を3つ決める，この過程では，それぞれの賞に決めた根拠をグループ内で共有するよう議論を促す，3）グループ代表者に3賞とそれを選んだ根拠を発表してもらう，ことを実施した． また、上記の内容をZoom遠隔オンラインにより実施し、例年の対面授業と同程度の教育効果を上げることができた。
4年次総合研究の改善	2020年4月～	・ゼミ生全員での週2回の進捗状況報告会ミーティングをするとともに、議論する機会を増やした。 ・研究テーマの意味を学生自身で掘り下げさせるため、過度の説明はやめ、重要ポイントに関わる問いかけを繰り返し行うようにした。 上記のことを、Zoom遠隔オンラインにより試行錯誤的に実施し、例年の対面と同程度の教育効果を上げることができた。
3年次演習の改善	2020年4月～	・読書量の少なさ，議論する機会の少なさを補うため，読解と議論の方法を体験的に学ぶために山田ズーニー著「あなたの話はなぜ「通じない」のか」の輪講を前期冒頭に追加し，読み・書き・議論の演習を交えながら実施した。 ・資格の錯視に関する心理物理実験パートを組み込み，コンピューターシミュレーションのみでなく，より体感できる学びの実践を行った． また、Zoom遠隔オンラインによる授業を試行錯誤的に実施し、例年の対面と同程度の教育効果を上げることができた。
情報科学科1年次授業「情報科学基礎教育」の遂行，講義内容の改善	2020年4月～	2015年度より開始した情報科学科1年生にとっての「大学における勉学」への導入科目としての性格を持つ「情報科学基礎教育」（担当：石田，岩田，菅原，武田，，松本）の講義内容の標準化を行った。すなわち，講義は3パートオムニバスのため，受講生への教授内容に不一致がないように，また各パート間の連携が取れるように，綿密に事前打ち合わせを行った．さらに，授業終了後，来年度に向けての改善点の洗い出しを行った。 Zoom利用によるオンライン遠隔授業を効果的に行うための工夫を試行錯誤的に行い、例年の対面授業と同等の教育効果を上げることができた。
TGベーシック「科学的思考の基礎」：学生とのインタラクション	2020年4月～	・manaba，responを用いて，双方向型の授業を可能にした．具体的には，1）毎回の問をresponで提示し，受講生の解答をリアルタイムで示しながらコメントする，2）各回の振り返りを翌週まで行い，良いコメントなどを次回の授業で紹介する，ということを実施した． オンデマンド授業教材を作成した．また，オンデマンドによる双方向型授業を可能にするため，manaba、responの活用をはかった．
「生命の科学」：学生とのインタラクション	2020年4月～	・manaba，responを用いて，双方向型の授業を可能にした．具体的には，1）毎回の問をresponで提示し，受講生の解答をリアルタイムで示しながらコメントする，2）各回の振り返りを翌週まで行い，良いコメントなどを次回の授業で紹介する，ということを実施した． オンデマンド教材を作成した。また、オンデマンドによる双方向型の授業を可能にするため、manaba、responの活用をはかった。
2．作成した教科書、教材、参考書		
担当科目「生命の科学」の教科書化	2022年11月1日～	ミネルヴァサイエンスライブラリーの一冊として、担当科目「生命の科学」の教科書化。2025年2月刊行予定

「科学的思考の基礎」の教科書化	2020年4月～	TGB「科学的思考の基礎」で利用可能な、文理を問わない大学1年生向けの教科書を、情報科学科菅原, 土原, 村上とともに執筆し、脱稿した。現在出版社で初稿ゲラを作成中。2021年9月出版予定。

3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等

4. その他教育活動上特記すべき事項

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
東北学院大学における情報リテラシー教育概要と入学時のBYOD種別とパソコン習熟度の調査	共著	2025年2月	東北学院大学情報学部論集(2)	伊藤則之, 木村敏幸, 菅原研, 杉浦茂樹, 杉山佳子, 高橋秀幸, 田所裕康, 土原和子, 牧野悌也, 松尾行雄, 松本章代, 村上弘志, 渡邊圭	pp.25-29
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2024年6月～2024年7月	探究のウラにある科学的思考 Ver.2.0 第1回 6/ 29(土) 観察しよう、仮説を立てよう(東北学院大学公開講座) 講師
2012年3月～	日本VR学会香りと生体情報研究委員会委員 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	松尾　行雄	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2021年4月1日～	毎回の授業の冒頭で、前回の復習とその回の概要を必ず説明している。加えて、授業途中に重要項目についてresponのアンケート機能を用いて、理解度チェックを行い、講評を含め、コメントしている。授業終了時に授業内容の振り返りを実施している。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
東北学院大学における情報リテラシー教育概要と入学時のBYOD種別とパソコン習熟度の調査	共著	2025年2月	東北学院大学情報学部論集(2)	伊藤則之, 木村敏幸, 菅原研, 杉浦茂樹, 杉山佳子, 高橋秀幸, 田所裕康, 土原和子, 牧野悌也, 松尾行雄, 松本章代, 村上弘志, 渡邊圭	pp.25-29
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2014年5月～	生物音響学会理事 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2024年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	松本　章代	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
演習授業における学生の意欲を向上させるための取組	2024年	演習の授業において学生の学習意欲向上を図るため，課題の題材を「学生の興味を惹き各自工夫の余地がある内容」にすることを常に心がけている。かつ，制作物をウェブ上にアップして公開するといった取り組みを行っている。
プログラミング演習授業における作業手順動画の作成・提供	2024年	「プログラミング概論」においてプログラミングの作業手順を動画にして授業中に学生が各自閲覧できるようにし，自分のペースで作業が進められるようにした。
プログラミング演習授業における講義動画のウェブ公開	2024年	演習授業の解説部分を録画し動画にして，講義スライドとともにウェブ上に公開している。
プログラミング演習授業における課題自動回収および自動採点の仕組み作り	2024年	「プログラミング基礎」において学生が作った課題のプログラムを自動回収し自動採点する仕組みを構築し運用した。
プログラミング演習授業における課題提出サイトの構築・運用	2024年	「プログラミング基礎」の授業における課題提出サイトを構築し運用した。
プログラミングのレポート提出システムの構築および運用	2024年	学生が課題のレポートをウェブブラウザ上で相互評価できる仕組みを構築した。
「プログラミング概論」用ウェブサイト作成	2024年	「プログラミング概論」のウェブサイトを作成し，公開している。講義資料の閲覧や課題の提出ができるだけでなく，課題のプログラムを提出すると入力ミスを指摘する機能がついている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
「情報科学演習」講義資料	2024年	演習の説明用スライド，演習に利用する素材を作成した。
「プログラミング基礎」講義資料	2024年	講義用スライドを作成した。
「プログラミング概論」講義資料	2024年	講義用スライドおよび動画を作成した。
「プログラミングの基礎」講義資料	2024年	講義用スライドを作成した。
「AI社会の基礎」講義資料	2024年	第4回～第7回の講義用スライドおよび動画を作成した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
高校生を対象とした出張講義	2025年2月13日	「データサイエンスを学ぶと何ができるようになるか」というテーマで一関第二高校の生徒を対象として出張講義を行った。
高校生を対象とした出張講義	2024年11月21日	「データサイエンスを学ぶと何ができるようになるか」というテーマで一関第二高校の生徒を対象として出張講義を行った。
高大連携事業地域公開講座	2024年10月15日	「AI・データサイエンスを学ぶと何ができるようになるか」というテーマで石巻高校で講義を行った。
高校生を対象とした出張講義	2024年7月8日	「データサイエンスを学ぶと何ができるようになるか」というテーマで一関第一高校の生徒を対象として出張講義を行った。
日本視覚障害者団体連合からの依頼によるオンラインプログラミング講座の実施	2024年	視覚障害を持つ小学生～高校生の児童・生徒を対象としてオンラインプログラミング講座をおこなった。
視覚支援学校でのプログラミング授業	2024年	宮城県立視覚支援学校・沼津視覚特別支援学校にて小学部の児童にプログラミングの授業をおこなった。
データサイエンス学科主催公開講座の実施	2024年	データサイエンス学科主催の公開講座「小学生向けプログラミング講座」を企画し講師を務めた。

現在の課題・目標	①「情報科学演習」において学生が主体的にプログラミングに取り組めるだけのスキルを身に付けさせる。 ②1～2年生向け実習科目「プログラミング概論」「プログラミング基礎」において学生がプログラミングに興味を持つような指導を行う。 ③学生が適切なレポートを作成できるよう指導する。 ④学生に外国語会話を身に付けさせるためのシステムを開発・運用する。 ⑤manabaとresponをより多くの科目で導入し授業改善を図る。
今年度の進捗状況	①「情報科学演習」では学生一人一人が自ら企画した作品を完成させており，ほぼ達成できた。 ②「プログラミング概論」では，スマホアプリという学生に身近な題材によって興味を惹く工夫をした。「プログラミング基礎」はデータサイエンス学科の新科目でPythonによるゲーム作成がメインとなり，意欲的に課題に取り組む学生が増えたと感じた。 ③「プログラミングの基礎」の授業において，生成AIを正しく利用してレポートを作成するよう指導した。 ④外国語会話訓練システムは今年度，不具合なく動画を学生のスマホに配信できるアプリの開発を目指した。 ⑤「AI社会の基礎」「情報リテラシー」「プログラミング概論」「プログラミング基礎」「プログラミングの基礎」「情報科学基礎演習B」の6科目でmanabaとresponを活用し授業改善を図った。
来年度の進捗目標	①来年度の「情報学演習」についても目標を達成できるよう引き続き努力する。 ②プログラミングの初期教育において，授業についてこられない学生の割合は確実に減っているが，全体的なレベルの向上につながっているかどうかは不明なので，意識的に取り組む。 ③学生が適切なレポートを作成できるよう，指導をより徹底する。 ④外国語会話訓練を目的とした動画配信アプリは各学生のレベルに応じた動画の配信を目指す。 ⑤LMSをより活用し授業改善を図る。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
東北学院大学における情報リテラシー教育概要と入学時のBYOD種別とパソコン習熟度の調査	共著	2025年2月	東北学院大学情報学部論集(2)	伊藤則之，木村敏幸，菅原研，杉浦茂樹，杉山佳子，高橋秀幸，田所裕康，土原和子，牧野悌也，松尾行雄，松本章代，村上弘志，渡邊圭	pp.25-29
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
視覚支援学校小学部における中・高学年のプログラミング授業の実践	共同	2025年3月	電子情報通信学会 福祉情報工学研究会(筑波技術大学(つくば市)), 124, 430	◎松本章代，菅原研	pp.19-24
視覚支援学校における低学年向けプログラミング授業の環境開発	共同	2025年1月	2024年度 情報処理学会東北支部研究会(東北学院大学（仙台市）)	◎劉 旻周，菅原 研，松本 章代	
健常者における視覚・聴覚障害への理解を深める体験型VRアプリケーションの開発	共同	2025年1月	2024年度 情報処理学会東北支部研究会(東北学院大学（仙台市）)	◎佐久間 和男，松本章代	
スマートフォンで読み取るブロックプログラミングシステムの開発	共同	2024年9月	第32回視覚障害リハビリテーション研究発表大会(日本教育会館（東京）)	◎松本章代，菅原研	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	①子どものプログラミング教育に関する研究を進める。 ②文書解析に関する研究を進める。 ③外国語会話教育システムに関する研究を進める。 ④視覚障害をもつ児童のプログラミング教育に関する研究を進める。 ⑤学校向け教育システムに関する研究を進める。
今年度の進捗状況	①については子ども向けプログラミング講座を開催しプログラミングの家庭での取り組みへの影響について分析をおこなった。 ②についてはスマホアプリのレビューを分析しその適切性に関する研究を進めた。 ③については動画をスマホに配信するアプリの開発を目指した。 ④については視覚障害をもつ児童・生徒に対するプログラミング教育について，教材開発およびシステム開発をおこなった。 ⑤についてはカリキュラムマネジメントシステムを安定運用した。
来年度の進捗目標	①については視覚障がいをもつ児童・生徒のためのプログラミングシステムを新たに開発する。 ②については最先端のAI技術を用いた文書分析の研究を新たに始める。 ③については各学生の会話レベルに応じた動画の配信を目指す。 ④については視覚障害をもつ子どもに対するプログラミング教育を体系化し普及に向けて取り組む。 ⑤については新規システムを考案し構築する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2026年度	共同(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2015年11月～	日本教育工学会会員 会員
2009年1月～	教育システム情報学会会員 会員
2008年9月～	日本データベース学会会員 会員
2007年7月～	電子情報通信学会会員 会員
2005年3月～	情報処理学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

東北学院大学情報処理センター長

2024年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	村上　弘志	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業内容に関するアンケート	2023年4月1日～	毎回の講義に関する質問・意見や感想をオンラインアンケートで尋ね、翌授業回に返答している。 質問のうち他の回に関わるものについては、最後にまとめて振り返って回答している。
学習内容の実践による理解の促進	2020年4月1日～	自然の科学の毎回の授業の中で講義に関連した天体イベントなどを紹介し，実際に体験することで定着を図っている。
学習内容の定着と理解の促進	2020年4月1日～	毎回の講義の最後にその回の内容に関わる小問を出し次回以降に解説する。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					

Soft X-ray Imager of the Xtend system on board XRISM	共著	2025年3月	Oxford University Press (OUP), Publications of the Astronomical Society of Japan	Hirofumi Noda,Koji Mori,Hiroshi Tomida,Hiroshi Nakajima,Takaaki Tanaka,Hiroshi Murakami,Hiroyuki Uchida,Hiromasa Suzuki,Shogo Benjamin Kobayashi,Tomokage Yoneyama,Kouichi Hagino,Kumiko Nobukawa,Hideki Uchiyama,Masayoshi Nobukawa,Hironori Matsumoto,Takeshi Go Tsuru,Makoto Yamauchi,Isamu Hatsukade,Hirokazu Odaka,Takayoshi Kohmura,Kazutaka Yamaoka,Tessei Yoshida,Yoshiaki Kanemaru,Junko Hiraga,Tadayasu Dotani,Masanobu Ozaki,Hiroshi Tsunemi,Jin Sato,Toshiyuki Takaki,Yuta Terada,Keitaro Miyazaki,Kohei	pp.
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
Pile-up simulator for XRISM/Xtend	共著	2024年8月	SPIE, Space Telescopes and Instrumentation 2024: Ultraviolet to Gamma Ray	Tomokage Yoneyama,Tsubasa Tamba,Hirokazu Odaka,Aya Bamba,Hiroshi Murakami,Koji Mori,Yukikatsu Terada,Masayoshi Nobukawa,Tsunefumi Mizuno	pp.227-227

New CCD driving technique to suppress anomalous charge intrusion from outside the imaging area for soft x-ray imager of Xtend onboard XRISM	共著	2024年8月	SPIE, Space Telescopes and Instrumentation 2024: Ultraviolet to Gamma Ray	Hirofumi Noda,Mio Aoyagi,Koji Mori,Hiroshi Tomida,Hiroshi Nakajima,Takaaki Tanaka,Hiromasa Suzuki,Hiroshi Murakami,Hiroyuki Uchida,Takeshi Go Tsuru,Keitaro Miyazaki,Kohei Kusunoki,Yoshiaki Kanemaru,Yuma Aoki,Kumiko K. Nobukawa,Masayoshi Nobukawa,Kohei Shima,Marina Yoshimoto,Kazunori Asakura,Hironori Matsumoto,Tomokage Yoneyama,Shogo B. Kobayashi,Kouichi Hagino,Hideki Uchiyama,Kiyoshi Hayashida	pp.226-226
Initial operations of the Soft X-ray Imager onboard XRISM	共著	2024年8月	SPIE, Space Telescopes and Instrumentation 2024: Ultraviolet to Gamma Ray	Hiromasa Suzuki,Tomokage Yoneyama,Shogo B. Kobayashi,Hirofumi Noda,Hiroyuki Uchida,Kumiko K. Nobukawa,Kouichi Hagino,Koji Mori,Hiroshi Tomida,Hiroshi Nakajima,Takaaki Tanaka,Hiroshi Murakami,Hideki Uchiyama,Masayoshi Nobukawa,Yoshiaki Kanemaru,Yoshinori Otsuka,Haruhiko Yokosu,Wakana Yonemaru,Hanako Nakano,Kazuhiro Ichikawa,Reo Takemoto,Tsukasa Matsushima,Marina Yoshimoto,Mio Aoyagi,Kohei Shima,Yuma Aoki,Yamato Ito,Kaito Fukuda,Honoka Kiyama,Daiki Aoki,Kaito Fujisawa,Yasuyuki Shimizu,Mayu Higuchi	pp.228-228

Status of Xtend telescope onboard X-Ray Imaging and Spectroscopy Mission (XRISM)	共著	2024年8月	SPIE, Space Telescopes and Instrumentation 2024: Ultraviolet to Gamma Ray	Koji Mori,Hiroshi Tomida,Hiroshi Nakajima,Takashi Okajima,Hirofumi Noda,Hiroyuki Uchida,Hiromasa Suzuki,Shogo B. Kobayashi,Tomokage Yoneyama,Kouichi Hagino,Kumiko K. Nobukawa,Takaaki Tanaka,Hiroshi Murakami,Hideki Uchiyama,Masayoshi Nobukawa,Hironori Matsumoto,Takeshi Go Tsuru,Makoto Yamauchi,Isamu Hatsukade,Hirokazu Odaka,Takayoshi Kohmura,Kazutaka Yamaoka,Manabu Ishida,Yoshitomo Maeda,Takayuki Hayashi,Keisuke Tamura,Rozenn Boissay-Malaquin,Toshiki Sato,Tessei Yoshida,Yoshiaki Kanemaru,Junko S.	pp.54-54
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
東北学院大学における情報リテラシー教育概要と入学時のBYOD種別とパソコン習熟度の調査	共著	2025年2月	東北学院大学情報学部論集(2)	伊藤則之, 木村敏幸, 菅原研, 杉浦茂樹, 杉山佳子, 高橋秀幸, 田所裕康, 土原和子, 牧野悌也, 松尾行雄, 松本章代, 村上弘志, 渡邊圭	pp.25-29
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					

X線分光撮像衛星XRISM搭載軟X線撮像装置Xtendの現状(2)	共同	2024年9月	日本物理学会(北海道大学)	村上弘志, 小林翔悟, 森浩二, 中嶋大, 冨田洋, 岡島崇, 野田博文, 内田裕之, 鈴木寛大, 萩野浩一, 信川久実子, 米山友景, 田中孝明, 信川正順, 内山秀樹, 松本浩典, 鶴剛, 山内誠, 廿日出勇, 小高裕和, 幸村孝由, 山岡和貴, 石田学, 前田良知, 林多佳由, 田村啓輔, R.Boissay-Malaquin, 佐藤寿紀, 吉田鉄生, 金丸善朗, 伊師大貴, 水野恒史, 平賀純子, 堂谷忠靖, 尾崎正伸, 常深博, 東竜一, 亀井貴光, 福田将大, 早川海都, 善本真梨那, 袴田知宏, 青柳美緒, 島耕平, 井上峻, 青木悠馬, 伊藤耶馬斗, 青木大輝, ニ之湯開登, 清水康行, 樋口茉由, 大塚芳徳, 横須晴彦, 米丸若菜, 市川雄大, 中野瑛子, 岳本廉央, 松島司, 浦瀬怜香, 倉嶋順, 淵琴美, 林田清, 他 XRISM/Xtend チーム	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2024年12月～2024年12月	シミュレーションで迫るブラックホールの真の姿 講師
2024年8月～2024年8月	高大連携講座宇宙2024ブラックホール 講師
2024年7月～2024年7月	探究のウラにある科学的思考 Ver.2.0 第2回 良い仮説にするには 講師
2013年7月～	日本物理学会会員 会員
2003年7月～	国際天文学連合(IAU)会員 委員
1999年8月～	高エネルギー宇宙物理学連絡会会員 委員
1997年7月～	日本天文学会会員 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	准教授	氏名	岩田　友紀子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
各回の講義でのresponの活用	2020年4月1日～	講義の終了時に，毎回responによる学生の理解できなかった部分などの感想を書き込んでもらうことをした．講義中に質問できなかった学生の声を拾うことができるようになった．
ホワイトボード機能を用いた授業	2020年4月1日～	黒板の字よりもPCのホワイトボード機能で記述した字の方が見やすいとのことで，ワコムの液タブを用いて講義を行う．
2．作成した教科書、教材、参考書		
解析学I，IIにおいてmanabaのドリル機能を用いた小テストを作成した．	2020年4月1日～	manabaのドリル機能を用いて制限時間10分程度で無制限回挑戦できる小テストを課し、学生の講義の『復習』の時間を増やすことを図った。
確率・統計IIの授業で，Excelによる演習問題を15回分作成した．	2018年4月1日～	
解析学I,IIの講義ノートを作成した．	2017年4月1日～	解析学I,IIでの講義全ての講義ノートを作成した．数IIIを受けていない学生が一人で読んでも理解できる内容にしている．
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2011年4月～	日本数学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	准教授	氏名	片方　江	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	・分かりやすい授業の実施 ・manabaの小テストおよびドリルの充実 ・ゼミ生への丁寧な指導
今年度の進捗状況	・授業評価アンケートの内容を参考に授業改善計画を立てた ・ゼミ生への丁寧な指導および輪講に関する助言を行った ・卒業論文および卒論発表会に関する指導を行った
来年度の進捗目標	・分かりやすい授業の実施 ・LMSの小テストおよびコンテンツの充実 ・学生とのコミュニケーションを大切にする ・ゼミ生への丁寧な指導

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	・有理関数および超越整関数の力学系の研究
今年度の進捗状況	・具体的な超越整関数の力学系を考察した ・研究成果の発表を行うことができなかった
来年度の進捗目標	・超越整関数の力学系特有の現象を解析すること ・日本数学会での研究成果発表

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	准教授	氏名	木村　敏幸	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
4年生セミナーへの3年生の参加	2024年10月～2025年1月	4年生向けセミナー「卒業研究Ⅱ」に3年生を参加させ，3年生に4年生の発表を聴講させることで，3年生に研究室の研究内容を自主的に学習させている．
2．作成した教科書、教材、参考書		
「メディア表現の技法B」講義スライド	2024年9月～2025年1月	音声信号に関する基本的な処理技術の原理・特徴やHCI(Human Computer Interaction)とマルチメディアの関わりを説明したスライドを計7回分作成し，manabaを通じて配布した．
「研究・発表の技法」講義スライド	2024年4月～2024年7月	組版ソフトウェア(TeX Live)やプレゼンテーションソフト(Microsoft PowerPoint)を用いて発表資料(レジュメ，スライド，ポスター)をどのようにして作成するかについて解説したスライドを計15回分作成し，manabaを通じて配布した．
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	●学生が授業内容を容易に理解できるように，授業を分かりやすく説明する． ●学生が自信を持って発表できるようにジュニアセミナー及び卒業研究を指導する． ●学生に研究開発の重要性を理解させ，学生の大学院進学率を向上させる．
今年度の進捗状況	●卒業研究指導学生8名が研究成果を外部に発表できた． ●卒業研究指導学生9名のうち1名が進学を希望し，本学大学院に進学した． ●就職を希望している卒業研究指導学生7名全員が就職内定を獲得した．
来年度の進捗目標	●「分かりやすい」という評価がより多く得られるように授業内容を工夫する． ●就職を希望している指導学生全員が就職内定を獲得できるように指導する． ●できるだけ多くの卒業研究指導学生が進学するように研究開発の重要性を理解させる． ●指導学生全員が研究成果を外部に発表できるように研究を指導する．

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
東北学院大学における情報リテラシー教育概要と入学時のBYOD種別とパソコン習熟度の調査	共著	2025年2月	東北学院大学情報学部論集(2)	伊藤則之，木村敏幸，菅原研，杉浦茂樹，杉山佳子，高橋秀幸，田所裕康，土原和子，牧野悌也，松尾行雄，松本章代，村上弘志，渡邊圭	pp.25-29
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
フォトグラメトリを用いた五橋キャンパスのVRコンテンツ開発	共同	2025年3月	令和7年東北地区若手研究者研究発表会(東北学院大学)	鈴木伊織，木村敏幸	
大画面ディスプレイ越しの音源に対する腹話術効果の比較検討	共同	2025年3月	令和7年東北地区若手研究者研究発表会(東北学院大学)	小林拓豊，木村敏幸	

垂直パニングによる音像定位の極限法による有効距離及び有効高さの閾値測定	共同	2025年3月	令和7年東北地区若手研究者研究発表会(東北学院大学)	川村琉青, 木村敏幸	
MVP方式を用いた遠隔会議システムのためのマイクロホン配置が音像位置に及ぼす影響	共同	2025年3月	令和7年東北地区若手研究者研究発表会(東北学院大学)	蒔田恭平, 木村敏幸	
モーションコントローラを用いたジェスチャ入力演奏システムの開発	共同	2025年3月	令和7年東北地区若手研究者研究発表会(東北学院大学)	舘股杜和, 木村敏幸	
個人用三次元音場再生を用いた遠隔操作システムのための映像・音響収録技術の開発	共同	2025年3月	令和7年東北地区若手研究者研究発表会(東北学院大学)	中西健太, 木村敏幸	
三次元放射音場再生のための放射型スピーカアレイの試作	共同	2025年3月	令和7年東北地区若手研究者研究発表会(東北学院大学)	遠藤健太, 木村敏幸	
三次元放射音場再生のためのMRゴーグルを用いた放射型映像提示システムの開発	共同	2025年3月	令和7年東北地区若手研究者研究発表会(東北学院大学)	荒木崚我, 木村敏幸	
Multiple Vertical Panningを用いた立体音響システムにおける移動距離の奥行表現への影響	単独	2024年9月	日本音響学会秋季研究発表会(関西大学)	木村敏幸	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	●実験装置を構築し, 実験を実施する. ●競争的資金を獲得する. ●研究成果を外部に発表する.
今年度の進捗状況	●個人研究費や学内予算により物品を調達し, 実験装置を構築することができた. ●研究成果を外部に発表することができた.
来年度の進捗目標	●引き続き実験装置を構築し, 研究成果を得るための実験を実施する. ●指導学生の研究成果を外部発表を経済的に支援する. ●引き続き実験によって得られた成果を外部に発表する.

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2023年4月～	日本音響学会東北支部 顧問
2017年4月～	日本音響学会東北支部 会員
2012年5月～	電子情報通信学会ソサイエティ論文誌編集委員会 会員
2012年5月～	電子情報通信学会ソサイエティ論文誌編集委員会 査読委員
2007年12月～	日本音響学会編集委員会 会員
2007年12月～	日本音響学会編集委員会 査読委員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	准教授	氏名	小林　信重	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
大学生のAI利用に関する注意喚起文の効果――エントリーシートの添削を想定したランダム化比較試験――	共著	2025年2月	東北学院大学学術振興会, 東北学院大学情報学部論集, 2	鈴木努, 小林信重	pp.17-24
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年11月	DiGRA 2025 Program Committee
2023年～	日本メディア学会ネットワーク社会研究部会 幹事
2021年～	Replaying Japan Journal 査読委員
2018年～	国際ゲーム開発者協会（IGDA）日本　同人・インディーゲーム部会 正世話人

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2024年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	准教授	氏名	佐藤　篤	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業での数値計算ソフトウェアの活用	2020年9月～	「数理情報学」と「数値解析」の授業において GeoGebra、gnuplot、octave、pari-gp、R を利用したデモを行い、理解する助けとした。
個人のウェブページの活用	2020年4月～	これまでに書いた文書を公開した。その中には過去の授業等で配布したものも含まれる。また、いくつかの文書については改訂も行った。さらに、「幾何学 I」「幾何学 II」「数理情報学」「数値解析」のページを作成し、配布資料等をダウンロードできるようにした。
授業での動的数学ソフトウェアの活用	2020年4月～	「幾何学I」と「幾何学II」の授業において GeoGebra を利用したデモを行い、定理等の意味を理解する助けとした。
2．作成した教科書、教材、参考書		
教材の作成	2020年4月～	「数理的思考の基礎」のオンデマンド授業用の資料を作成した。
教材の作成	2020年4月～	「情報科学基礎演習A」の授業において「データ処理の基礎」の教材を作成した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
教員採用試験（数学）対策講座 講師	2024年11月12日	2022年実施分の宮城県・仙台市の教員採用試験（数学）の解説を行った。
出張講義 講師	2024年7月10日	岩手県立一関第一高等学校において「有理数による実数の近似」という題で講義を行った。

現在の課題・目標	(1) 講義全般について、受講者の現状に沿った内容にする。 (2) 演習について、学生とのコミュニケーションを重視し、「数学を理解すること」がどういうことなのかを学んでもらうよう努める。 (3) 数学科以外の学生を対象とした代数学の演習書を執筆する（共著）。
今年度の進捗状況	(1) については、改善が見られるが、まだまだ満足できる状況とは言えない。 (2) については、まだ満足できる状況とは言えないが、発表の仕方に進歩が見られる。卒業論文の進捗にも改善が見られた。 (3) については、自分の担当箇所についてはほぼ完成したが、さらなる手直しが必要。
来年度の進捗目標	(1) については、引き続き講義内容の見直しを行う。アンケートでポジティブな回答が多くなるよう努めたい。 (2) については、適当なテキストの探索を続け、知識よりも考え方を重視するような演習を継続的に行えるようにする。 (3) については、共著者と共に早期の完成を目指す。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	(1) 楕円曲線の同種写像を利用して、代数体の不分岐拡大の塔を具体的に構成すること。 (2) 二次体上定義された、位数11の有理点をもつ楕円曲線の族を用いて、類数が11で割り切れるような代数体の無限族を構成すること。 (3) 楕円曲線上の点の還元に関する振る舞いと、形式群や Tate 曲線との関係を明らかにすること。
今年度の進捗状況	(1) については、同種写像の核に属する全ての点が良還元をもつような素点の分岐について、一定の成果が得られた。 (2) については、コンピュータを利用した計算機を行ったが、計算結果が複雑で扱いかねる状態のままである。 (3) については手付かずの状態である。
来年度の進捗目標	(1) については、引き続き計算を進め、代数体の類数の可除性の話に結び付けたい。また、既に得られている成果について論文に纏めたい。 (2) については、あまり進展は見込めないかもしれないが、引き続き突破口を見つけるよう努めたい。 (3) については、まずは文献による学習を進め、特に形式群の理解が深くなるよう努力したい。 上記に加えて、Morleyの定理をGalois理論の観点から説明することに挑戦したい。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

1992年4月～	日本数学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	准教授	氏名	高橋　秀幸	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
3年生のゼミ生が岩手もりおか学生デジタルアイデアコンテスト2024の最終審査会に出場し、最優秀賞を受賞した。	2024年5月13日～2024年11月23日	
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	改組に伴う新規担当科目の教材作成や授業準備の時間を十分に確保し、様々な工夫を凝らした授業を行うことで、学生が授業内容に関心や興味を持ち、自らさらに学びたいと思えるような授業運営を行うことが目標である。また、ゼミ生に対しては、積極的に学びながら学会発表などを視野に入れつつ、学生自ら研究を進めることができる体制を構築することが目標である。
今年度の進捗状況	改組に関わる様々な用務、授業準備などに多くの時間を割くこととなった。4年生のゼミ生全員が総合研究に取り組めるような環境構築の改善を行った。また、3年生のゼミ生が岩手もりおか学生デジタルアイデアコンテスト2024で最優秀賞を受賞するなど、学部3年生としては、貴重な経験を積むことができた。さらに、ゼミ生の4年生のうち3名が学会発表を行うなどの教育研究に関する多くの成果を得ることができた。
来年度の進捗目標	学生間の交流にも繋がるようなディスカッションやグループワークなどを積極的に取り入れた授業展開を実施することが目標である。また、学生のスキル向上やアクティビティを高めるために積極的にプログラミングコンテストなどへの出場の機会を与えるとともに、総合研究を通して、学生が国内外の研究者と議論できるような教育研究活動を行うことを目標とする。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Deconvolution of 3D Data Measured by FMCW LiDAR Based on Image Sensor Under Influence of Spatially Inhomogeneous Frequency Modulation	共著	2024年10月	IEEE, Proc. of the 2024 IEEE 13th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE2024)	Nobuhide Yokota, Masato Ohira, Hideyuki Takahashi, Kazuya Sugiyasu, Hiroshi Inokawa, Hiroshi Yasaka	pp.1219-1220
Design of Dynamic Connection Switching Control Function Based on Coordination of Mini-Drones	共著	2024年10月	IEEE, Proc. of the 2024 IEEE 13th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE2024)	Hideyuki Takahashi, Miduki Watanabe, Koto Tanita, Kazuya Sugiyasu, Nobuhide Yokota	pp.1223-1224
Aquaculture AI Drone for Automatic Feeding	共著	2024年4月	Proc. of the 5th International Conference on Artificial Intelligence, Robotics, and Control (AIRC 2024)	Toru Kobayashi, Yudai Tanaka, Rina Ishishita, Taketo Handa, Kazuki Fukae, Hideyuki Takahashi, Tetsuo Imai, Kenichi Arai	pp.
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					

東北学院大学における情報リテラシー教育概要と入学時のBYOD種別とパソコン習熟度の調査	共著	2025年2月	東北学院大学情報学部論集(2)	伊藤則之, 木村敏幸, 菅原研, 杉浦茂樹, 杉山佳子, 高橋秀幸, 田所裕康, 土原和子, 牧野悌也, 松尾行雄, 松本章代, 村上弘志, 渡邊圭	pp.25-29
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
完全自動養殖を可能とするAIドローンの研究	共同	2025年3月	ライフインテリジェンスとオフィス情報システム研究会（2025年3月研究会）(沖縄県宮古島市), 124, 444	半田丈都, 戸川大樹, 深江一輝, 荒井研一, 高橋秀幸, 今井哲郎, 宮島洋文, 服部充, 小林透	pp.44-49
スマート養殖向けオンデマンドデジタルツインの研究	共同	2025年3月	ライフインテリジェンスとオフィス情報システム研究会（2025年3月研究会）(沖縄県宮古島市), 124, 444	原田凌, 戸川大樹, 深江一輝, 今井哲郎, 荒井研一, 宮島洋文, 服部充, 高橋秀幸, 小林透	pp.38-43
水産養殖の全自動化に向けたAI水中ドローンの研究	共同	2025年3月	ライフインテリジェンスとオフィス情報システム研究会（2025年3月研究会）(沖縄県宮古島市), 124, 444	梶原康輝, 戸川大樹, 深江一輝, 高橋秀幸, 今井哲郎, 荒井研一, 小林透	pp.32-37
Meta AI Architectureにより完全自動養殖を可能とするAqua Colony Platformの提案	共同	2025年3月	ライフインテリジェンスとオフィス情報システム研究会（2025年3月研究会）(沖縄県宮古島市), 124, 444	深江一輝, 原田凌, 山脇令央那, 梶原康輝, 半田丈都, 戸川大樹, 服部充, 宮島洋文, 高橋秀幸, 今井哲郎, 荒井研一, 小林透	pp.21-25
機械学習を用いた養殖ブリの価格予測に関する研究	共同	2025年3月	ライフインテリジェンスとオフィス情報システム研究会（2025年3月研究会）(沖縄県宮古島市), 124, 444	宮島洋文, 戸川大樹, 深江一輝, 服部充, 高橋秀幸, 今井哲郎, 荒井研一, 小林透	pp.50-55
オープンデータを活用した避難所運営支援システムの設計と試作	共同	2025年1月	2024年度 情報処理学会東北支部研究会（東北学院大学）(宮城県仙台市)	佐藤奈実, 高橋秀幸	
災害時の自動車利用を前提とした共助支援機能の設計	共同	2025年1月	2024年度 情報処理学会東北支部研究会（東北学院大学）(宮城県仙台市)	佐藤希咲, 高橋秀幸	
分散避難を考慮したSNS型避難行動・把握支援システムの設計と試作	共同	2025年1月	2024年度 情報処理学会東北支部研究会（東北学院大学）(宮城県仙台市)	佐々木舞, 高橋秀幸	
Design of Dynamic Connection Switching Control Function Based on Coordination of Mini-Drones	共同	2024年10月	2024 IEEE 13th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE 2024)(福岡県北九州市)	Hideyuki Takahashi, Miduki Watanabe, Koto Tanita, Kazuya Sugiyasu, Nobuhide Yokota	
Deconvolution of 3D Data Measured by FMCW LiDAR Based on Image Sensor Under Influence of Spatially Inhomogeneous Frequency Modulation	共同	2024年10月	2024 IEEE 13th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE 2024)(福岡県北九州市)	Nobuhide Yokota, Masato Ohira, Hideyuki Takahashi, Kazuya Sugiyasu, Hiroshi Inokawa, Hiroshi Yasaka	

Aquaculture AI Drone for Automatic Feeding	共同	2024年4月	The 5th International Conference on Artificial Intelligence, Robotics, and Control (AIRC 2024)(エジプト・カイロ)	Toru Kobayashi, Yudai Tanaka, Rina Ishishita, Taketo Handa, Kazuki Fukae, Hideyuki Takahashi, Tetsuo Imai, Kenichi Arai	pp.64-67

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	学術論文への投稿および査読付き国際会議論文の発表を積極的に行い、モノのインターネット、マルチエージェント技術、防災・減災に関する研究テーマについて国内外の研究者から評価を受けることを目標とする。また、国際共同研究に加えて、産学官連携も検討し、東北エリアの地域の課題を解決するための研究活動も積極的に行っていく。
今年度の進捗状況	改組に関わる新たな授業準備等で十分な研究活動を行うことができなかったが、国際会議2件、国内学会発表8件の発表を行うことができた。また、岩手県復興防災DX研究会の構成員として、様々な防災・減災への取り組みに参加し、一部がテレビ番組に取り上げられた。加えて、岩手県庁の岩手県復興防災DX研究会を通して、防災・減災に関する新たな研究テーマを始めることができた。
来年度の進捗目標	筆頭著者として研究成果に関する学術論文への投稿、外部発表を積極的に行い、国内外の研究者と議論を行う。また、国際会議や企画セッションなどの開催も積極的に行い、国内外の研究者とのコミュニティ構築や提供も行いながら国際共同研究プロジェクトなどの立ち上げを目指す。加えて、東北エリアの官公庁と連携し、地域の課題解決や今後の防災・減災に備えた対策などについて、研究活動を通して社会貢献を目指していく。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 基盤研究(A)	2024年度～2028年度	(研究分担者)	本研究では、新たな飼料 として注目されている昆虫の生産とそれを飼料とする水産養殖を統合することで、総合的な生産管理を自律的に行うAqua Colony Platformの実現を目指す。具体的には、高度な自律育成 AIを持つ分散型昆虫育成装置: Worm Podの開発と、魚群の成長過程に応じて自律的に調整可能なスマート生け簀を開発する。また、マルチエージェントAIにより複数ドローンを仮想化して飼料を運搬するスマートドローンを開発する。さらに、水産市場動向に基づき3つのAIを制御することで、飼料と養殖魚の生産管理を自動化するMeta AI Architectureを明らかにする。
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2024年度～2026年度	(研究代表者)	近年, 地震, 豪雨など想像を超える大規模自然災害が多頻度で発生している. 東日本大震災後, ハード面の復興事業が完了した津波被災地は多いが, 人口減少, 少子高齢化といったソフト面の課題解決と復興はこれからという実状がある. 本研究は, 地域の防災に携わる人手不足, 災害発生時の消防団等による要救助者発見, 見回り・広報活動の負担や危険性に関する問題に着目し, 有事の際の救助支援, 平時の見回り支援などを包括的に捉え, 状況に応じてIoT機器が地域の人々と協力して支援を行う共助力強化のための能動的な地域防災支援プラットフォームの実現を目的として, 理論的な枠組みとシステム構築基盤技術の開発, 地域実証の実施を目指す.

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2025年2月～2025年2月	仙台市立六郷小学校で防災教育を実施 講師
2024年9月～2024年9月	「陸前高田市消防・防災フェスタ2024」に参加 ドローン実演企画を実施(陸前高田市消防・防災フェスタ2024) 講師, 助言・指導, 運営参加・支援, 実演
2024年9月～2024年9月	福島県いわき市薄磯地区で開催の「行ってみっぺよUSUISO 秋まつり2024」に参加し、ドローン操作企画を実施(行ってみっぺよUSUISO 秋まつり2024) 出演, 企画, 運営参加・支援, 実演
2024年8月～2024年8月	宮古市総合防災訓練に参加し、防災用ドローン操縦体験企画を実施(宮古市総合防災訓練) 講師, 助言・指導, 運営参加・支援, 実演

2024年7月～2024年7月	体験ブース「ドローンとハザートマップを活用した防災を体験しよう！」を出展(学都「仙台・宮城」サイエンスデイ2025 inララガーデン長町) 出演
2024年3月～2024年11月	2024 IEEE 13th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE 2024) Organized Session Chair
2023年4月～	情報処理学会 論文誌コンシューマ・デバイス&システム編集委員会　編集委員
2023年4月～	情報処理学会 コンシューマ・デバイス&システム研究運営委員会　運営委員
2022年1月～	COMPSAC (IEEE Signature Conference on Computers, Software, and Applications) Program committee member
2021年12月～	The 7th Special Session on Intelligent and Contextual Systems (ICxS 2022) in conjunction with the 14th Asian Conference on Intelligent Information and Database Systems (ACIIDS 2022) Program Committee Member
2021年12月～	The 7th International Conference on Communication, Image and Signal Processing (CCISP 2022) Technical Committee Member
2021年4月～2025年3月	情報処理学会 ユビキタスコンピューティングシステム研究運営委員会 特集号編集委員
2021年4月～2025年3月	情報処理学会 ユビキタスコンピューティングシステム研究運営委員会　運営委員
2020年6月～	IEEE 会員
2012年2月～	電子情報通信学会 会員
2004年10月～	情報処理学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
岩手もりおか学生デジタルアイデアコンテスト2024	岩手教育会館	2024年5月～2024年11月	最優秀賞

現在の課題・目標	展示会などに積極的に出展し、現在取り組んでいる研究内容やプロジェクトに関する紹介を行う。さらに産学連携による研究開発の推進やスタートアップなどへの挑戦を目標とする。
今年度の進捗状況	東北エリアのベンチャー企業、福島県、岩手県の官公庁および地方自治体との意見交換を行い、様々な共同研究を推進するために討論を行なった。その様子の一部などが、2024年7月18日岩手めんこいテレビ、8月25日NHK盛岡放送局、11月10日岩手放送、岩手朝日テレビ、NHK盛岡放送局、岩手めんこいテレビ、11月21日岩手朝日テレビで放送された。
来年度の進捗目標	産学官連携による共同研究や新たなプロジェクトを開始し、様々な応用分野や地域の課題などを考慮した研究開発の推進に加えて、スタートアップなどを視野に入れた活動を目指す。

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

学院総合ネットワーク管理小委員会
産学連携推進センター副センター長
知的財産審査委員会
オープンキャンパス準備委員会

2024年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	准教授	氏名	田所　裕康	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
東北学院大学における情報リテラシー教育概要と入学時のBYOD種別とパソコン習熟度の調査	共著	2025年2月	東北学院大学情報学部論集(2)	伊藤則之, 木村敏幸, 菅原研, 杉浦茂樹, 杉山佳子, 高橋秀幸, 田所裕康, 土原和子, 牧野悌也, 松尾行雄, 松本章代, 村上弘志, 渡邊圭	pp.25-29
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
Test particle simulation of keV electron elastic collisions with water molecules around Enceladus: reconsideration of elastic collision model	共同	2025年3月	第26回惑星圏シンポジウム(東北大学)	田所 裕康,加藤 雄人	
Elastic scattering of keV electrons by water molecules around Enceladus: A test particle simulation	共同	2024年11月	第156回地球電磁気・地球惑星圏学会(国立極地研究所)	田所 裕康,加藤 雄人	
Role of the mirror force on the collision rate due to relativistic electron precipitation	共同	2024年4月	EGU General Asssembly(Vienna, Austria & Online)	Katoh, Y., P. S. Rosendahl, Y. Ogawa, Y. Hiraki, and H. Tadokoro H	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2024年11月		（地球電磁気・地球惑星圏学会 一般公開イベント）地球・宇宙のミステリーを語りつくせ！ 科学探偵になろう！ 企画, 運営参加・支援	
2023年11月～2024年11月		第32回衛星設計コンテスト 企画委員	
2020年12月～		日本教育工学会 会員	
2019年7月～		電子情報通信学会 会員	
2018年4月～		日本物理教育学会 会員	
2018年4月～		日本環境教育学会 会員	
2018年2月～		地球電磁気・地球惑星圏学会 将来構想検討WG委員	
2009年4月～		地球電磁気・地球惑星圏学会 アウトリーチ部会メンバー	
2009年4月～		地球電磁気・地球惑星圏学会 若手アウトリーチ部会(STEPLE)ワーキンググループメンバー	
2009年1月～		日本地球惑星科学連合 会員	
2007年1月～		American Geophysical Union(アメリカ地球物理学連合) 会員	
2006年4月～		地球電磁気・地球惑星圏学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	准教授	氏名	土原　和子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
パワーポイントによる講義と授業用独自プリントの連動・併用、講義データのダウンロード	2020年4月1日～	講義をより効果的にするため、パワーポイントを使用した授業と、独自プリントを併用した。特にパワーポイントには写真や動画を多く採用し、また、プリントはカラーのため、HPをつくってそこにカラーの図表を講義前にアップロードしておき、ダウンロードできるようにした。
オンデマンド講義における、わかりやすい動画の作成	2020年4月1日～	オンデマンド講義において、学生がわかりやすいように動画を作成した。90分しゃべり続けるのではなく、復習、イントロ、講義内容1、2，3、まとめのように区切って作成した。また、講義前に資料をアップロードし、講義を聴きながら書き込むなど併用できるようにした。
教員独自のリアクションカードによる授業評価をおこなっている	2016年4月1日～	講義のたびにリアクションカードを配布し、質問事項や講義における改善点を学生に記入してもらい、質問の多かった点や、気づいた点については、次回以降の講義でフィードバックしている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
独自プリントの作成	2020年4月1日～	学生が書き込める穴埋め式の配布資料も準備して「書いて覚える」ということを徹底した。これにより、学生はその単元のポイントがわかり、そのプリントをコピーして学生が使用し、しっかり復習できるようにした。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
補習授業	2018年4月1日～	正規の授業のほかに、授業が終了した夕方やオフィスアワーの時間を活用して、補講をおこなった。その週の授業でででてきた基礎知識の確認、および授業でわかりにかった箇所等を学生からつのり、噛み砕いて説明した。これにより、授業の理解が深まり、次の授業へスムーズにはいれるようになった。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
ゲノムデータに基づく線虫における化学受容体の解析	単著	2025年3月	東北学院大学 データサイエンス研究所論集(2)	土原和子	pp.1-8
東北学院大学における情報リテラシー教育概要と入学時のBYOD種別とパソコン習熟度の調査	共著	2025年2月	東北学院大学情報学部論集(2)	伊藤則之，木村敏幸，菅原研，杉浦茂樹，杉山佳子，高橋秀幸，田所裕康，土原和子，牧野悌也，松尾行雄，松本章代，村上弘志，渡邊圭	pp.25-29
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					

G. 学会における研究発表			
H. 翻訳（学術書や原典等）			
I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	准教授	氏名	星野　真樹	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学習した事項の定着と授業理解の促進	2021年4月1日～	授業内に演習を行うことによって、能動的な学習を促すとともに、その場で自己採点できるように解説を加え、学生にフィードバックできるようにする。
教員と学生の双方向による授業展開	2021年4月1日～	授業内で適宜学生を指名し，学生を授業に参加させることによって、学生のつまずきやすい点や理解度などを確認する。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	授業内で学生と双方向授業を展開する
今年度の進捗状況	病気療養のため授業を実施していないため評価できない
来年度の進捗目標	引き続き同じ目標をおく: 授業内で学生と双方向授業を展開する

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Exact convergence rate of solutions for a semilinear heat equation with a critical and a supercritical exponent revisited	単著	2024年	.J. Elliptic Parabol. Equ., 10(1)	Masaki Hoshino	pp.329–359
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	・藤田型方程式の解の漸近挙動の解析 ・他の偏微分方程式の研究のための資料収集
今年度の進捗状況	・藤田方程式の解の漸近挙動について別証明の結果を出すことが出来た ・他の偏微分方程式の研究のための資料収集についてはほとんど出来なかった
来年度の進捗目標	・藤田型方程式の解の漸近挙動の解析 ・他の偏微分方程式の研究のための資料収集

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2007年10月～	日本数学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	講師	氏名	杉山　佳子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
外部環境と職務の特性が企業変容に与える影響 －女性代表取締役CEO登用事例の探索的分析－	単著	2025年2月	組織学会, AAOS Transactions, 13(2)	杉山佳子	pp.1-13
長期的な視点による 新興国へのサステナブルファイナンス	単著	2024年6月	『日本経営倫理学会第32回研究発表論文集』, 16.	杉山 佳子	pp.
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
政策保有株式の増減傾向と長期雇用人材・企業業績の関係	単著	2025年2月	証券経済学会年報別冊 59	杉山佳子	pp.1-11
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
東北学院大学における情報リテラシー教育概要と入学時のBYOD種別とパソコン習熟度の調査	共著	2025年2月	東北学院大学情報学部論集(2)	伊藤則之, 木村敏幸, 菅原研, 杉浦茂樹, 杉山佳子, 高橋秀幸, 田所裕康, 土原和子, 牧野悌也, 松尾行雄, 松本章代, 村上弘志, 渡邊圭	pp.25-29
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
持ち合い株式の増減傾向と取締役会構成・資本の効率性との関係	単独	2024年9月	第96回 証券経済学会全国大会(南山大学)	杉山佳子	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

科学研究費助成事業 若手研究	2023年度～2025年度	(研究代表者)	本研究は、調整型市場経済のひとつとされる日本について、企業金融とコア人材を、株式所有構造の変化と長期雇用人材、企業業績の関係から捉えて実証的な分析を行うことを目的とする。直接金融への流れの中、改訂コーポレートガバナンス・コードを契機に株式の政策保有に変化が生じることは、日本企業のコア人材にどのような影響を有するのか、新しい人材(転職者、女性、・外国人など)との関係にも着目して検証を行う。そして企業のステークホルダーとして雇用関係と、株式売却で関係解消可能な株主では異なる時間軸にあることに留意しつつ、新しい株主によるガバナンスが人的資本の観点から企業業績に持つ意義を明らかにすることを試みる。
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2021年度～2024年度	(研究分担者)	本研究では、企業の経済活動がグローバルなサステナビリティ(持続可能性)を実現するものとなるために求められるガバナンス・メカニズムを解明する。会社法学ではコーポレートガバナンス(とりわけ取締役会・監査役会の構成)が企業活動に与える影響、契約法学ではサプライチェーンの契約の仕組みとサステナビリティの実現、経済学からは金融・資本市場によるサステナビリティの実現に対する評価の実証分析を行う。その上で、超学際研究(フューチャー・アース・プログラム)と会社法学・契約法学を接合して、地球社会のサステナビリティを実現するためのガバナンス・メカニズムに関する実践的提言に結びつけることを目指す。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	講師	氏名	渡邊　圭	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
東北学院大学における情報リテラシー教育概要と入学時のBYOD種別とパソコン習熟度の調査	共著	2025年2月	東北学院大学情報学部論集(2)	伊藤則之, 木村敏幸, 菅原研, 杉浦茂樹, 杉山佳子, 高橋秀幸, 田所裕康, 土原和子, 牧野悌也, 松尾行雄, 松本章代, 村上弘志, 渡邊圭	pp.25-29
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
地域防災推進に向けた地域福祉実践の位置づけに関する一考察	単独	2024年6月	日本地域福祉学会第38回大会(東京,文京学院大学)	渡邊圭	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤C	2023年度～	共同(研究分担者)	
競争的資金等の外部資金による研究	2022年度～2024年度	個別(研究代表者)	
科学研究費助成事業 基盤C	2022年度～	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年6月～	土木学会土木情報学委員会,災害弱者に向けた情報通信技術を活用した防災・減災技術研究小委員会（第二期） 委員
2023年5月～	日本社会事業史学会 会員
2022年6月～2024年5月	土木学会土木情報学委員会,災害弱者に向けた情報通信技術を活用した防災・減災技術研究小委員会 委員
2022年4月～	国立岩手山青少年交流の家運営協議会 運営委員
2022年4月～	にこにこ児童館応援隊
2021年4月～	日本地域福祉学会 会員
2018年6月～	国立岩手山青少年交流の家 テンパークボランティア養成事業 講師
2015年～	日本災害復興学会 会員
2011年～	日本社会福祉学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

教員業務・活動報告

人間科学部

心理行動科学科

2024年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	天野　和彦	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学習理解の定着と双方向による実践授業への取り組み	2024年4月1日～2025年3月31日	課題と振り返りを、manabaを活用することで当該回の授業内容の理解の定着に努める また、双方向への取り組みとして、授業内で創出された課題を共同で解決する思考を、同じくmanabaを活用し実現する
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
学生によるスポーツ政策提言	2024年10月19日	SPJ2024にて、指導の演習生が「優秀発表賞」を受賞する
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	学生の学び（理解度）の拡充への取り組み
今年度の進捗状況	積極的に事例を取り上げた（また双方向での意見交換を積極的に行い、評価した）
来年度の進捗目標	体系的理解に向けた、授業の再構築を検討する

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	「自校愛」とスポーツ課外活動の関係
今年度の進捗状況	継続で研究対象に縦断的な調査を行っている
来年度の進捗目標	2026年度に4年の調査が完了するので、その際には文章化したい

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年4月～	日本体育・スポーツ・健康学会　政策検討・諮問委員会 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	硬式テニス部の女子が少なく、部活動が性別で成り立たない
今年度の進捗状況	より積極的に地域の大会に出向き、指導者と交流しながら、本学に良い学生の進学を進めたい
来年度の進捗目標	女子も東北大会で優勝させたい

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	井川　純一	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学生授業評価及び教員相互評価	2015年4月1日～	各期末に学生授業評価を施行している。授業の分かりやすさ，質問への対応等の10の質問項目からなる授業評価であり，過去担当した全ての科目において5段階評定の4以上を継続している。 また，学内のFD研修の一貫として行われている教員の相互評価においても常に高い評価を得ている。
マルチメディア機器の活用	2015年4月～	講義は座学と演習，実習形式の内容をバランスよく配置し，manaba，Moodleの利用などマルチメディア機器を使用した講義を展開している。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	現代の教育における主要な課題の1つは、個々の学生の多様性への適応である。異なる学習スタイルやニーズを理解し、それに応じて教育プログラムを提供することが求められている。現在担当している講義について、包括的な教育環境を構築し、すべての学生が成功できるよう支援するため、LMSツールを利用し、学生とのコミュニケーションを強化を目指す。
今年度の進捗状況	LMSツールを積極的に活用し、学生とのコミュニケーションを強化する取り組みを進めている。オンライン講義では、それらを使用して教材や課題を提供し、学生の学習進捗を把握、アンケートを活用して定期的なフィードバックや質問への迅速な対応を行っている。さらに、対面講義においても教材の多様化やグループワークの導入など、異なる学生のニーズに応じた教育プログラムの提供にも取り組んでいる。包括的な教育環境を構築し、すべての学生を支援する目標に向けて着実に進展している。
来年度の進捗目標	来年度は、教育プログラムの多様性を拡大し、個々の学生のニーズにより適した学習環境を提供することを目指す。本年度と同様に、ITツールを更に効果的に活用し、オンラインや対面の授業での双方向性を強化する。また、対面講義においても教材のアクセシビリティを向上させ、異なる学習スタイルに対応できるよう配慮し、学生とのコミュニケーションを密にし、フィードバックを通じて個々の成長をサポートする体制を強化する。これにより、包括的な教育環境をさらに充実させ、すべての学生が自己実現を果たせるよう取り組む。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Does Enthusiasm for Work Lead to Typical Burnout? A Three-Wave Panel Study with Caregivers1, 2	単著	2024年7月	Wiley, Japanese Psychological Research	Junichi Igawa,Toshiki Fukuzaki,Ryosuke Iotake,Daisuke Nakanishi	pp.
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
オンライン上のコメント機能に関する探索的研究 (3)――コメント投稿者および閲覧者の動機とコンテンツのジャンルに着目して――	共著	2025年2月	東北学院大学学術振興会，東北学院大学人間科学部論集，1	井川，純一,五百竹，亮丞,今井，真,中西，大輔	pp.27-43
オンライン上のコメント機能に関する探索的研究 (1)――脱抑制とコメント投稿者の個人特性に着目して――	共著	2025年2月	東北学院大学学術振興会，東北学院大学人間科学部論集，1	井川，純一,五百竹，亮丞,今井，真,中西，大輔	pp.1-13
オンライン上のコメント機能に関する探索的研究 (2)――コメント閲覧者の個人特性と非閲覧理由のプラットフォーム比較――	共著	2025年2月	東北学院大学学術振興会，東北学院大学人間科学部論集，1	井川，純一,五百竹，亮丞,今井，真,中西，大輔	pp.15-25

オンライン上のコメント機能の利用動機に関する研究：YouTube及びYahoo!ニュースユーザーを対象とした探索的検討ーA Study on the Usage and Motivation of Online Comment Function：An exploratory study of Yahoo! News and YouTube users	共著	2024年9月	広島：広島修道大学ひろしま未来協創センター，健康科学研究 = Studies in the health sciences，8(1)	井川 純一,中西 大輔	pp.31-47

C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文

D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）

E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）

G. 学会における研究発表

恐怖喚起説得の綱引き: ワクチンの効果と副反応の表示が接種意図に及ぼす影響	共同	2024年11月	中四国心理学会第80回大会(比治山大学)	桑原 慶人，七海 陽花，井川 純一	
改訂版同調志向尺度の開発 (1)	共同	2024年11月	中四国心理学会第80回大会(比治山大学)	藤川 真子，井川 純一，中西 大輔	
高齢アルコール依存症者の社会病理は何かー定年退職というライフイベントに着目した質的調査ー	共同	2024年11月	中四国心理学会第80回大会(比治山大学)	五百竹 亮丞，井川 純一，田中 瑞樹，長尾 早江子	
YouTubeにおけるコメント機能の利用動機に関する探索的検討ージャンルの違いに着目してー	共同	2024年11月	中四国心理学会第80回大会(比治山大学)	井川純一，今井真，五百竹亮丞，中西大輔	
典型的バーンアウト測定の試み (3) 縦断調査による妥当性の確認	共同	2024年9月	日本心理学会第88回大会(熊本城ホール)	井川 純一，徳岡 大，五百竹 亮丞，中西 大輔	
インターネット上の人々の行動とその影響 コンピューター媒介コミュニケーション (CMC) 研究における学際的アプローチ	共同	2024年9月	日本心理学会第88回大会(熊本城ホール)	井川 純一，大林 真也，温 若寒，鳥海 不二夫，三浦麻子	
ニュースサイトにおけるコメントの影響力 (2) コメントの感情価とコメントへの注視に着目して	共同	2024年9月	日本社会心理学会第65回大会(オンライン)	井川純一，中西大輔，今井真，五百竹亮丞	
ニュースサイトにおけるコメントの影響力 (1) コメントの論調と社会的証明に着目して	共同	2024年9月	日本社会心理学会第65回大会(オンライン)	中西大輔，井川純一，五百竹亮丞，今井真	
User characteristics influencing the frequency of viewing comments on news and video websites	共同	2024年7月	33rd International Congress of Psychology(チェコ)	Junichi IGAWA，Daisuke Nakanishi	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	現在のメインの研究テーマは、バーンアウトやネット上のコミュニケーションに関する研究である。前者については典型的バーンアウトの定義やそれらに対する介入ツールを開発すること、後者についてはコメント機能の社会的影響に関連した実験的検討を行なっている。
今年度の進捗状況	学外の助成金を複数受託し、研究を継続している。国際学会、日本心理学会、パーソナリティ心理学会、日本社会心理学会国内外の学会に参加し、学術論文を公刊している。
来年度の進捗目標	研究計画にそって引き続き研究活動を継続する。国際学会、日本心理学会、パーソナリティ心理学会、日本社会心理学会等で成果を発表する予定である。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2024年度～2028年度	(研究分担者)	定年退職をきっかけに飲酒量が増加し、アルコール依存症に罹る高齢者が急増している。本研究では、定年退職者をアルコール依存症に至らしめる社会的要因への支援を盛り込んだアルコール依存症予防プログラムを開発し、その有効性を評価することを目標とする。本研究で開発したプログラムの有効性が示されれば、地域住民の健康増進に貢献することが期待される。

科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2021年度～2024年度		人口減少社会の今後の到来に伴い、財政難に直面する多くの地方公共団体では、現在の公共サービスの水準を維持できず、市民生活にも大きな支障が生じることが予想される。従来から我が国では、この課題に対する有効な地域政策として「自治体の連携と集約」がとられてきた。しかし、国内外の分析結果を見ると両者の効果に必ずしも肯定的でない。この要因は実施する分野や形態で異なるその効果を、総括的に分析しているためと推測する。そこで、本研究では自治体の連携と集約が公共サービスの供給費用と品質に及ぼす効果を分野別と形態別に分析して、持続可能で住民も満足できるそのあり方を効果的な分野と形態を中心に明らかにする。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年4月～	日本パーソナリティ心理学会経常的研究交流委員会 国際交流企画班・大会外企画班
2017年4月～	九州心理学会 会員
2017年4月～	パーソナリティ心理学会 会員
2015年4月～	セルフヘルプ宝町第三者委員 運営参加・支援
2011年4月～	産業・組織心理学会 会員
2009年4月～	中四国心理学会 会員
2009年4月～	日本心理学会 会員
2009年4月～	社会心理学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

教養学部の教務委員、総務委員に加え、心理行動学科においても複数の委員を兼任している。本年度も継続して学内における管理運営業務に関わる。

2024年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	岡﨑　勘造	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
宮城県小児肥満対策マニュアルの作成	2021年～	宮城県小児科医会による「宮城県小児肥満対策マニュアル」の作成コアメンバーとして活動している。本マニュアルは、宮城県内の幼稚園を含む学校に配布予定である。宮城県は肥満児が多い県であり、このマニュアルは、子どもの肥満を予防・改善するための一助となるよう学校、一次医療機関（校医）に活用してもらえるマニュアルである。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
小学生の身体活動，眠気とQOLとの関連	共同	2024年9月	第78回日本体力医学会大会(佐賀県)	岡崎勘造，前田駿太，小山雄三，大河原一憲	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2025年度	(研究代表者)	本研究は，子どもの睡眠と身体活動に関する健康教育の基盤づくりの展開に寄与することを目標に，①現代社会の子どもの睡眠，身体活動，心身の元気さの現状を明らかにし，②その睡眠，身体活動は子どもの心身の元気さに影響を及ぼしているのか，という2つの視点で進める。本研究の特徴は，質問紙では測りにくい睡眠，身体活動を見える化し，心身の元気さとの関連を包括的に検討することが特徴の一つである。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年8月～2025年3月	仙台市部活動地域移行検討教委議会委員 委員長
2023年～	日本睡眠学会 会員
2022年12月～	仙台市スポーツ推進審議会 副会長
2021年～	日本学校保健学会 会員
2020年～	仙台市スポーツ推進計画（2022-2031の施策）検討委員会 委員
2020年～	宮城県小児科医会「宮城県小児肥満対策マニュアル」作成委員会コアメンバー委員
2019年12月～	仙台市スポーツ推進計画検討委員 委員
2018年～	仙台市スポーツ推進審議会 委員
2012年1月～	日本発育発達学会 会員
2012年～	International Society for Physical Activity and Health 会員
2011年6月～	東北大学バスケットボール連盟 理事
2011年1月～	日本スポーツ産業学会 会員
2011年～	European College of Sport Science 会員
2010年5月～	日本公衆衛生学会 会員
2006年8月～	日本体育学会 会員
2006年6月～	日本体力医学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
東北大学バスケットボールリーグ　1次リーグ（男子）	東北学院大学	2015年9月～2215年9月	2位

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	加藤　健二	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
統計授業（心理学統計法）における情報処理センター及び統計アプリHADを用いた実習的活動の活用	2020年4月1日～	心理統計に関する専門科目において，エクセル及び統計パッケージを用いた自作の例題実習を取り入れて，理解定着を図っている。
心理学専門科目の授業における、動画を含めた映像資料、プリント資料、実験実施を活用した動機づけ・理解促進の工夫	2020年4月1日～	毎時間の授業時に，動画を含めた映像資料とプリント資料を提供し動機づけを高めている。一部授業（知覚・認知心理学）では、学生各自に心理実験を実施させ、その結果を回収してグラフ化してフィードバックしている。
教養科目におけるクラウド型学習支援システムmanaba course、及びアプリケーションResponを活用したアクティーブラーニング型授業の実施	2020年4月1日～	担当している講義授業それぞれにおいて，manaba courseの諸機能を使い，授業進行に伴う情報を提供し，また提出課題の確認ができるようにしている。また、毎授業の最後に振返りコメントを提出させて、それを一覧にして提供し、学生自らの学習状況について自覚させるよう工夫している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
Lab.jsを用いた心理学実験用プログラムの作成（メンタル・ローテーション実験）	2024年4月1日～	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
各種学内FD研修会に参加	2023年4月1日～	2023.10.05 人間科学部FD研修会「TG-folioの基本と効果的な運用法」に参加 2024.01.25 人間科学研究所講演会「オンライン実験の心理学での活用」に参加 2024.04.10 人間科学研究所講演会「オンライン実験の心理学での発展的活用」に参加
各種学内FD研修会に参加	2020年4月1日～	・4月14日　新任教員研修会にて「今年度前期の授業運営について」のタイトルで話した。 ・9月16日　新任教員座談会にて司会を務めた。 ・9月16日　学内FD研修会にて「後期授業に向けて」と題して、教員向けアンケートの結果概要とあわせ、遠隔授業、特にハイブリッド授業実施について話した。 ・10月17日～　SD研修会に参加。オンラインによる「TG Grand Vision 150 第Ⅱ期中期計画概要及び実行計画作成説明会」。 ・12月10日　FD研修会「コロナ禍での授業運営について」に参加。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					

H. 翻訳（学術書や原典等）			
I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2001年4月～		日本イメージ心理学会 会員	
1986年4月～		日本教育心理学会 会員	
1985年4月～		日本心理学会 会員	
1979年4月～		東北心理学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	金井　嘉宏	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
心理学の研究技法を効果的に習得させるために，自作マニュアルを用いた実習授業を複数教員により体系的に運営している。	2021年4月1日～	2年生向けの心理学に関する実験実習授業において，担当教員の綿密な打ち合わせの上で作成されたマニュアルを用い，心理学各領域の代表的・基本的なデータ収集・分析技法を体験的に学習させている。授業後，学生が提出したレポートについて，予め公開してある基準に従って丁寧に添削し，コメントをつけて返却する。学生には，修正したレポートの提出を義務づけている。全体をシステム化して運営しているのが特徴である。
授業理解の促進と学習内容の記憶への定着を目的とした工夫	2021年4月1日～	講義では，パワーポイントを用いて画像や図表など，情報（資料）の効果的な提示を心がけている。また，重要な部分を空白にしたパワーポイントの資料を配布し，自分で記入することによって記憶にとどめるようにしている。さらに，DVDなどの視聴覚教材や授業時間内での簡単なレポート課題を取り入れ，自分の経験と授業内容を結びつけることによって内容の理解を深められるようにしている。学生同士での議論や教えあう活動を通して能動的な学習の要素を取り入れている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

科学研究費助成事業 基盤研究(A)	2021年度～2025年度	(研究分担者)	「かわいい」は，日ごろもっともよく見聞きする言葉の1つである。本研究では，対象の属性である「かわいさ」と，対象に接することで個人内に生じる「かわいい感情」とを区別するという枠組みに基づき，(1)かわいい感情に及ぼす認知と身体感覚の役割の検討，(2)「かわいいもので癒される」現象の解明，(3)動きや対象同士の関係性といった新しいかわいさの発見と定量化，(4)かわいい感情を活用した瞑想（メンタルトレーニング）の実践と体系化を目指す。
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2021年度～2024年度	(研究代表者)	社交不安症とうつ病に対する認知行動療法（CBT）は，ネガティブな感情を減らすことを主な目的としてきたが，ネガティブ感情（不安や抑うつ）が下がってもポジティブ感情の欠如があると効果は低い。本研究は，これまでの研究でポジティブ感情を高めることが明らかにされている，他者への親切行動や慈悲の瞑想といったコンパッション（思いやり）に基づく介入が，既存のCBTの効果に及ぼす影響と作用機序を明らかにし，CBTの改善率向上を目指す。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年2月～	仙台少年鑑別所　地域援助業務アドバイザー 委員
2020年8月～	一般社団法人　公認心理師の会　専門資格委員会委員長 委員長
2020年6月～	日本認知・行動療法学会　公認心理師対応委員会委員長 会員
2020年3月～	日本不安症学会　学術委員会委員 会員
2019年9月～	日本認知療法・認知行動療法学会　常任編集委員 会員
2019年8月～	一般社団法人　公認心理師の会　理事 委員
2018年12月～	公認心理師の会　設立委員・運営委員 委員
2017年7月～	日本心理学会「心理学ワールド」編集委員 会員
2016年7月～	日本認知・行動療法学会常任編集委員 会員
2016年7月～	日本認知・行動療法学会常任編集委員 会員
2016年6月～	日本認知・行動療法学会代議員 会員
2016年6月～	日本認知・行動療法学会理事 会員
2012年8月～	宮城県薬物乱用対策有識者会議委員 委員
2012年8月～	宮城県薬物乱用対策有識者会議委員 委員
2011年8月～	日本認知療法学会編集委員 会員
2011年8月～	日本認知療法学会編集委員 会員
2010年4月～	日本不安症学会評議員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	神林　博史	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
オンデマンド授業における動画版／スライド版の同時公開	2021年4月1日～	オンデマンド授業を実施する場合、音声解説つきの授業動画である「動画版」と、音声解説なしでも理解できるよう作成された授業スライドのみの「スライド版」を両方同時に公開し、学生が受講しやすい形態を選択させた。
manabaおよびresponを用いた学生が能動的に参加できる授業運営	2020年4月1日～	・講義系科目において、学生が能動的に授業に参加できるようResponを積極的に利用した。 ・授業で使用したスライドおよび資料をmanabaで公開し、授業後の学修を効率的に行えるようにした。 ・学習内容の確実な定着のための補助となるよう、一部担当科目でmanabaを用いた小テストを実施した。 ・以上3点について、オンライン授業でも対応できるよう工夫した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
地方自治体による東日本大震災関連の社会調査の資料保管状況：岩手・宮城・福島の3県調査から	共著	2025年3月	社会と調査, 34	神林博史, 三輪哲, 阿部晃士, 小川和孝, 鈴木努, 鈴木伸生	pp.50-54
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
中途採用に際しての人事担当者の評価と選好―ヴィネット調査と事後インタビュー調査に基づいて	共同	2024年11月	第97回日本社会学会大会(京都府京都市（京都産業大学）)	◎有田伸, 永吉希久子, 竹ノ下弘久, 神林博史	
過去の健康問題と社会経済的不平等:ウェブ調査を用いた予備的検討	単独	2024年8月	第77回数理社会学会大会(宮城県仙台市（東北大学川内キャンパス）)	神林博史	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 科学研究費補助金基盤研究C（一般）	2023年度～2025年度	個別(研究代表者)	
科学研究費助成事業 科学研究費補助金　基盤研究A	2020年度～2024年度	共同(研究分担者)	「国際調査を通じた報酬格差の受容・正当化メカニズムの比較社会学研究」（研究代表：有田伸）
科学研究費助成事業 科学研究費補助金　基盤研究A	2019年度～2024年度	共同(研究分担者)	「階層意識全国調査の時系列データの収集と標本抽出WEB調査法の確立」（研究代表：吉川徹）

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年6月～	公益財団法人せんだい男女共同参画財団 理事
2010年12月～	American Sociological Association 会員
2005年4月～	International Sociological Association 会員
1998年4月～	日本社会学会 会員
1998年4月～	数理社会学会 会員
1995年7月～	東北社会学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	坂本　譲	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業理解の促進（コメントペーパーの利用）	2015年4月～	毎回の授業終了時に指定した内容に対する小レポート及び質問・感想を書かせ提出させることで，授業の要点を受講者自身に確認させた．
授業内容理解の促進（プレゼンテーションソフトの利用と資料配付）	2015年4月～	授業内容をプレゼンテーションソフトで提示すると共に同様のものを資料として配付し，各自復習できるように配慮した．
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	講義内容の理解と学生の考える力を向上させうる効果的な方法についての検討。
今年度の進捗状況	コメントペーパーを利用した授業理解の促進に関する試行を行っている。
来年度の進捗目標	現状把握と方法論の検討。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
COVID-19流行下の活動制限が大学生の心身の健康に及ぼす影響、2年間の比較．	単独	2024年10月	第83回日本公衆衛生学会総会(札幌)	坂本　譲	
Effects of long-term voluntary running exercise on immunoreceptor-mediated regulation of allergy.	共同	2024年9月	16th International Society for Exercise and Immunology Symposium(Vienna, AUS)	Sakamoto Y, Takai T.	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	現在進めている研究課題について成果発表を積極的に行う。
今年度の進捗状況	現在の研究課題については国内・国際学会において学会発表を行った。
来年度の進捗目標	現在の研究課題について，特に論文発表を積極的に行っていく。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2022年度～2025年度	個別(研究代表者)	
競争的資金等の外部資金による研究 東北大学加齢医学研究所共同利用・共同研究助成	2022年度～2024年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年2月～	東北体育・スポーツ学会 監査
2017年4月～	東北体育・スポーツ学会 会員
2013年6月～	European College of Sport Science 会員
2012年6月～	日本発育発達学会 会員
2010年9月～	日本運動免疫学研究会 運営委員
2009年4月～	日本学校保健学会 会員
2009年4月～	日本体育・スポーツ・健康学会 会員
2005年7月～	日本分子生物学会 会員
2002年9月～	日本運動免疫学研究会 会員
2001年7月～	日本公衆衛生学会 会員
2001年2月～	International Society of Exercise and Immunology 会員
2000年1月～	日本免疫学会 会員
1997年10月～	日本体力医学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

人間対象研究審査委員会委員
学生部長

2024年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	櫻井　研三	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
三種の心理物理学的測定法でみる精度と確度 (https://www.ipc.tohoku-gakuin.ac.jp/psy3/psycho/ja/introduction.html)	2020年4月1日～	メディア授業等にも対応できるよう，従来の心理物理学的測定法学習サイトをHTML5とJavaScriptに対応させ，スマートフォンやタブレット等の携帯情報端末でも利用できるように調整して，バージョンアップを継続中。
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
第Ⅱ部　第13章　奥行き知覚：3 次元空間知覚の方向・距離・順序『感覚・知覚心理学ハンドブック 第三版』	分担執筆	2025年3月	誠信書房, 第三版	櫻井　研三, 下野　孝一, 一川　誠, 田谷　修一郎, 光藤　宏行, 木原　健, 松宮　一道	pp.1-72
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
身体上昇と足裏の非接地による身体浮上感が高めるベクション強度	共同	2024年9月	日本視覚学会2024年夏季大会 (東京, 日本)	櫻井　研三, 坂本　菜穂	
Circular shape distortion illusions caused by adaptation of curvature detectors	単独	2024年8月	European Conference on Visual Perception in Aberdeen, Scotland. ECVP 2024(Aberdeen, UK)	Kenzo Sakurai	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究（A）一般	2021年度～2024年度	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年1月～	日本心理学会第89回大会実行委員会 副委員長
2024年1月～2025年1月	日本心理学会第88回大会実行委員会 実行委員
2017年3月～	日本心理学会代議員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	宍戸　隆之	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
Google Form振り返りカード	2020年5月7日～	2020年度のオンライン授業における学生の授業後の振り返りカードとして、Google Formを活用して授業時間の振り返りと課題の提出を実施した。新型コロナウイルス感染症予防のため、特に、後期からの対面授業においても、教員と学生相互のソーシャルディスタンスを保つために、プリントアウトした配布物を極力減らし、接触する機会を減らした。スートフォンやPCを授業に持参させ、対面授業であってもオンラインでの課題提出ができる教材を提供している。
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
『教育・人間関係・まちづくりと環境　人間環境学研究からのアンソロジー』	分担執筆	2025年1月	ユニオンプレス, 1	八田武志・唐沢かおり・川口潤　編著	pp.90-102,117-134,156-173
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
Incorporating the AI-based Marker less Motion Capture Analysis app in Elementary School Athletics Long Jump Unit	共同	2024年9月	BERA Conference 2024 and WERA Focal Meeting(マンチェスター)	Takayuki SHISHIDO, Mao HASHIMOTO, Kenshiro FUMOTO	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2022年度～2024年度	共同(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2021年6月～		日本学校改善学会 会員	
2018年～		日本CLIL教育学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	仙田　幸子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ICT利用による自主学習の促進	2023年4月1日～	
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	心理学に関心のある学生に社会の個人心理に与える影響を認識させる	
今年度の進捗状況	あまり十分とはいえない	
来年度の進捗目標	学生が、社会が個人の心理に与える影響について、より自分に引き付けて考えられるように授業内容を工夫する	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
非婚出生と職業の関係	単独	2024年9月	第34回日本家族社会学会大会(東京)	仙田幸子	
女性の職業の妊娠の結果に対する効果	単独	2024年6月	日本人口学会第76回大会(東京)	仙田幸子	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標	出生と女性の職業の関係を、とくに非婚出生に焦点を当てて研究する				
今年度の進捗状況	2つの学会発表は行ったものの、予定より大きく遅れている。				
来年度の進捗目標	本の刊行の契約はすんでいるので、研究を進捗させる。				

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)（一般）	2023年度～	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2022年6月～	International Journal of Sociology and Anthropology reviewer

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	
外国語教育運営委員、ハラスメント委員	

2024年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	高橋　信二	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2025年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2013年～	日本体育測定評価学会理事 会員
2010年～	European College of Sport Science学会員 会員
2001年～	American College of Sports Medicine学会員 会員
1999年～	日本体育学会学会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	萩原　俊彦	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
本学「授業改善のための学生アンケート」実施委員会が実施する「授業改善のための学生アンケート」	2020年4月1日～	2020年度前期・後期授業アンケート結果（5点満点中）： 心理学基礎論A（総合評価）4.5 発達心理学（総合評価）4.3 教育心理学（総合評価）4.2 心理学（総合評価）4.6 心理学実験実習B（総合評価・複数教員担当）4.6 人間科学演習A・B（総合評価）4.6（A），4.9（B）
manabaのresponやGoogleフォームを用いた学生コメントの共有と実験結果の即時提示	2020年4月1日～	無料で大小様々のアンケートフォームをつくり、インターネットを介して回答してもらうmanabaのresponやGoogleフォームを用いて、心理学の簡単な実験や意見調査を実施し、授業で直ちに結果をフィードバックした。学生は自分たちが参加した心理学実験や意識調査の結果をすぐ知ることができ、教授事項への関心を高めることができた。
心理学の研究技法を効果的に習得させるために，自作マニュアルを用いた実習授業を複数教員により体系的に運営している。	2020年4月1日～	2年生向けの心理学に関する実験実習授業において，担当教員の綿密な打ち合わせの上で作成されたマニュアルを用い，心理学各領域の代表的，基本的なデータ収集・分析技法を体験的に学習させている。授業後，学生が提出したレポートについて，予め公開してある基準に従って丁寧に添削し，コメントをつけて返却する。学生には，修正したレポートの提出を義務付けている。全体をシステム化して運営しているのが特徴である。
授業内容に関連する視聴覚資料の提示	2020年4月1日～	インターネットを活用し，過去の著名な心理学実験や視聴覚資料を提示した。視聴覚資料を用いることで，心理学の知見が過去の研究の蓄積によって構成されていることを実感させるようにした。
PowerPointアニメーションを活用した解説	2020年4月1日～	初学者にはイメージしにくい心理学の諸概念について，図表に加えアニメーションを用いて解説した。これによって，抽象的な心理学概念を視覚的にイメージしやすくし，理解を助けるようにした。
学期終了前の講義総覧	2020年4月1日～	試験前にこれまでの講義内容を総覧することで，授業が共通するいくつかの視点によって構成されていることを再確認させ，学習への動機づけを高めるようにした。また，一定の枠を設けたまとめを行うアドバイスにより，学生の要約力を高めるようにした。
学生コメントの活用	2020年4月1日～	毎講義時に学生の質問や，授業進行に関するコメントを記入させた。記入内容についてのフィードバックを次回講義時に行い，授業規模にかかわらず受講生と講師の双方向コミュニケーションができるよう配慮した。
ワークの実施（個人・全体）	2020年4月1日～	授業で取り扱った事項について，自分の場合はどうだったか，受講生が自己省察を行うための短時間のワークを講義時間内に実施した。これによって講義内容への受講者の自我関与を高めるようにした。また，ワークの結果を少人数グループやクラス全体で共有することにより，受講生が他者の経験を理解・受容する機会を提供した。なお，プライバシーには最大限配慮し，発言の自由とともに秘匿の自由を保証した。
初回講義における履修契約	2020年4月1日～	授業の最初に授業計画とともに，講義時間中に受講生が遵守すべきルールを提示した。これによって，受講生が講義時間内に守るべきルールを自覚できるようにした。
実証的・批判的検討を経た科学的知見の教授と問題解決能力の育成	2020年4月1日～	実証的・批判的検討を経た科学的知見について、基礎的教養から専門的知見までを教授した。これによって，学生が大学入学までに形成してきた既成概念へのとらわれに自ら気付き，データに基づいた客観的な分析・考察によって，現実の問題を把握し，その解決法を構想し実現できるよう指導した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
心理実験実習・心理学実験実習Bにおける実験でのマニュアル・プリント類の作成・配布	2020年4月1日～	心理学各領域の代表的，基本的なデータ収集・分析技法を体験的に学習させるために，担当教員の綿密な打ち合わせの上でマニュアルを作成し，配布している。

授業内容のレジュメ資料を毎回配布	2020年4月1日～	1回の講義で解説する事項を示した自作のレジュメ資料を配布することで，受講生が講義内容の全体像をつかめるようにした。

3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等

4. その他教育活動上特記すべき事項

現在の課題・目標	Ⅰ教育活動-来年度の進捗目標 ①学習支援システムのより高度な活用を目指す。対面授業効率化のための学習支援システム活用について更に検討する。 ②引き続き実験・調査のデモデータを活用したり、他の魅力ある資料を収集・更新して教材に取り入れる。 ③特に実習授業が新学科での開講となり状況が変わるので、これまでのルーブリックを活用しながら改善点を検討していく。
今年度の進捗状況	Ⅰ教育活動-今年度の進捗状況 ①については、本年度も実験動画やアプリケーションの説明動画などを対面授業の学修をより深めるため活用した。授業時間後も繰り返し視聴できるということで好評であった。 ②については授業の課題などにも活用し教材への取り入れが進んだ。生成AIによりデータを生成して統計の授業（心理学統計法）に役立てることも試みた。 ③については実習授業で改善したルーブリックを運用し、授業内容と齟齬なく利用することができた。 目標①～③について、以上のような進捗があった。
来年度の進捗目標	①学習支援システムのより高度な活用を目指す。対面授業効率化のための学習支援システム活用について更に検討する。特に次年度は新システムが稼働するため、適切に移行できるようにする。 ②引き続き実験・調査のデモデータを活用したり、他の魅力ある資料を収集・更新して教材に取り入れる。一部で生成AIの活用なども検討する。 ③実習授業でのルーブリックの活用範囲が拡大する可能性があるので、その場合の改善点を検討していく。

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
高等専門学校におけるキャリア教育を内包した科目教育に関する研究（3）	共同	2024年10月	キャリア教育学会 第46回研究大会(上越教育大学)	畔田博文，小菅清香，杉本英晴，萩原俊彦	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	Ⅱ研究活動-来年度の進捗目標 ①他機関の共同研究者と科研の研究課題（「高専教育におけるキャリア教育による内発的動機付けと学ぶ力への効果検証」（基盤研究(C)一般・科研費研究課題番号：22K02879・研究分担者）に引き続き取り組む。 ②引き続き、①の研究進捗状況について年1回以上学会発表する。 ③今年度の研究成果と問題点を踏まえ、①の研究に関連するキャリア研究資料を収集し、共著での論文投稿を目指す。
今年度の進捗状況	①については7・8月にZoomでの研究打ち合わせ、2025年3月16・17日に本学して対面・Zoom併用での打ち合わせを行った。また、研究課題に関わる調査を実施した。 ②については2024年10月20日に、上越教育大学で開催されたキャリア教育学会第46回研究大会にて学会発表を行った。 ③については、②の発表に関する研究で仮説と逆の結果が示されたため、分析内容や研究計画について再検討する必要が生じた。そのため、論文投稿には至らなかった。 目標①～③について、以上のような進捗があった。

来年度の進捗目標	①他機関の共同研究者と科研の研究課題(「高専教育におけるキャリア教育による内発的動機付けと学ぶ力への効果検証」(基盤研究(C)一般・科研費研究課題番号:22K02879・研究分担者)に引き続き取り組む。 ②引き続き、①の研究進捗状況について年1回以上学会発表する。 ③今年度の研究成果と問題点を踏まえ、①の研究に関連する研究計画を見直したうえで、調査等で更に研究資料を収集し、共著での論文投稿を目指す。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)一般	2022年度～	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年1月～2024年12月	日本キャリア教育学会 監事
2017年12月～	日本キャリアデザイン学会会員 会員
2010年6月～	日本キャリア教育学会会員 会員
2005年11月～	日本教育心理学会会員 会員
2005年1月～	日本心理学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	平野　幹雄	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学生からの授業評価(全教科)	2020年4月～	第一回の講義開始時に講義への要望について調査し講義内容に反映するよう努力している。加えて、講義内容についての感想や要望をマナバの「レポート」に毎回書いてもらい、その代表的なもののいくつかを次回講義の開始時にコメントバックしている。
授業における興味関心の喚起(講義形式の授業)	2020年4月～	今日的課題を取り上げている視聴覚教材・パワーポイントをできるだけ多く提供し、視聴の観点を示してそこから掘り下げて問題を整理するよう指導している。また、タブレット端末の手書き機能を積極的に活用し、手書きで概念図等を作成して理解しやすいに工夫をしている。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
海外の資料の訳出	2019年4月～	National Institute of Mental Healthが編集している自閉症スペクトラム障害のガイドの翻訳(人間科学演習で使用)
海外の資料の訳出	2018年4月2日～	National Dissemination Center for Children with Disabilitiesのwebpageに所収されている障害類型別のガイドの翻訳(人間科学演習で使用)
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
福島県私立幼稚園認定こども園連合会キャリアップ研修講師	2024年8月	
令和6年度宮城県総合教育センター「児童生徒支援ネットワーク事業」児童生徒支援研修会（学校単位研修会、宮城県貞山高校）講師	2024年7月	
令和6年度宮城県金成支援学校専門性向上研修会講師	2024年7月	
令和6年度宮城県総合教育センター「児童生徒支援ネットワーク事業」児童生徒支援研修会講師	2024年5月	
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Changes in the Friendships of Persons with Intellectual Disabilities before and after Graduation from a Special Needs High School	共著	2024年10月	Asian Journal of Human Services, 27	Sasaki, K., Hirano, M., & Noguchi, K.	pp.155-165
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					

知的障害者における学校時代からの友人との関係性に関する研究―友人との関係の満足度や心理面にもたらす影響に焦点をあてて―	共同	2024年9月	日本特殊教育学会第62回大会(福岡国際会議場)	佐々木健太郎・平野幹雄・野口和人	

H. 翻訳(学術書や原典等)	
I. 特許	
現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動	
2024年11月	在仙大学教育実習等連絡協議会 会長
2024年6月～2024年8月	令和6年度仙台市立義務教育諸学校教科用図書協議会 委員
2021年4月～	名取市公立保育所巡回指導・講師 講師
2018年～	宮城県社会福祉協議会宮城いきいき学園講師 講師
2011年～	日本発達心理学会 会員
2007年～	日本発達障害学会 会員
2002年～	アメリカ心理学会 会員
1996年～	日本心理学会 会員
1995年～	日本特殊教育学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動	

2024年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	福野　光輝	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
演習活動における統計分析に関する学修メニューの提供	2022年～	統計分析スキルを少しでも養うため、毎回の演習活動時の一部の時間を当てて、統計分析教育を行っている。
LMS manaba による配布資料の配信	2017年～	授業で配布した資料や関連資料、リンクなどをウェブから入手できるようにしている。
授業ウェブによる配布資料の配信	2016年～	授業で配布した資料や関連資料、リンクなどをウェブから入手できるようにしている。
ミニットペーパーのオンライン収集	2016年～	講義形式の授業において、Google フォームを利用したミニットペーパーを実施し、すべての回答と質問への返答をまとめた資料を毎回配布している。
学生による予習課題評価	2016年～	演習の最後に、予習課題の用紙を演習参加者にランダムに配布し、学生自身が他人の予習課題の内容にコメントを書き込ませる。同じ文献を読んでも多様な観点からの読みが可能であることを気づかせるとともに、学生自身にコメントを書かせることで、文献の読み方を考えさせる（その後、予習課題を回収し、教員が再度コメントをつけて返却している）。
演習における予習の可視化	2016年～	演習参加者全員が文献の該当箇所を事前に読み、要約と疑問点、意見を書いた短いレポートを予習課題として毎回提出する。これにより、予習を可視化するとともに、読む力、書く力、考える力の基礎を身につけさせる。
演習におけるグループ議論	2016年～	予習課題をもとに、小グループに分かれ、自分なりの読みや疑問点を他者と共有しながら、文献に対する批判的検討を行う。グループ議論を導入することで、全員が学び、また発言することになるため、演習でありがちな報告者と教員のみの禅問答状態を回避できる。
メッセージングアプリ Slack を利用した演習活動	2016年～	演習における研究活動を補助するために、2016年度後期から、ビジネス向けチャットツール Slack を導入している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
公認心理師大学院科目「心理実践実習」における司法犯罪関係施設の実習先開拓と調整	2021年～	「心理実践実習」における実習先として、宮城刑務所、東北少年院、青葉女子学園、仙台少年鑑別所、仙台保護観察所、宮城県警察科学捜査研究所の開拓および日程調整、内容調整、各種書類の作成等を行っている。
公認心理師学部科目「心理実習」における司法犯罪関係施設の実習先開拓と調整	2019年～	「心理実習」における実習先として、宮城刑務所、東北少年院、青葉女子学園、仙台少年鑑別所、仙台保護観察所、宮城県警察科学捜査研究所の開拓および日程調整、内容調整、各種書類の作成等を行っている。

現在の課題・目標	(1)「心理学概論」および「社会・集団・家族心理学」における授業評価の総合評価点で4.70以上を目指す。 (2)演習における学生の研究リテラシーの向上
今年度の進捗状況	(1)心理学概論の総合評価は4.686（履修者198名中140名回答）、「社会・集団・家族心理学」のそれは4.6（履修者175名中68名回答）となり、目標に到達しなかった。 (2)今年度は演習中のグループ議論において「えんたくん」を導入して議論の活性化とともに批判的思考力の向上を図った。また、本演習では2017年度よりゼミ研究をグループではなく個人単位にしている。そのことによって各自の研究活動への動機づけも高まり、研究リテラシーの向上にもつながっていると考えられる。さらに、2022年度から引き続き今年度も、演習活動の一部として、データ分析スキルの向上を目指して統計ソフトの使用法についても指導を始めた。
来年度の進捗目標	(1)「心理学概論」および「社会・集団・家族心理学」における授業評価の総合評価点で4.70以上を目指す。 (2)演習における学生の研究リテラシーの向上 (3)総合研究における研究倫理申請の恒常化

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
関係価値は戦争中の国に対しても融和的態度を促進するか	共同	2024年9月	日本社会心理学会第65回大会（日本大学文理学部（オンライン開催））	◎福野光輝, 加藤祐人	
身体に対する自己対象化は性別ステレオタイプを助長するか	単独	2024年8月	東北心理学会(宮城学院女子大学)	福野光輝	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	(1) 科研費の申請を必ず行う。 (2) 研究スキルの向上を目指す。 (2) 学生と行った対人葛藤に関する研究を学会で発表し、論文化を進める。
今年度の進捗状況	(1) 科研費申請はできなかった。 (2) Rに習熟したかったができなかった。多変量解析系の復習は多少できた。オンライン実験課題作成のためのlab.jsの使用に関して、昨年度に引き続き人間科学研究所の公開講演会を自ら企画した。 (3) 国内学会での学会発表を2件行ったが、論文化は進まなかった。ただし、教科書の執筆を終えることができた。
来年度の進捗目標	(1) 科研費の申請を必ず行う。 (2) 研究スキルの向上を目指す。 (2) 学生と行った対人葛藤に関する研究を学会で発表し、論文化を進める。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2024年4月～	東北心理学会宮城県理事 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

1. 人間科学部学部長（2023年4月1日～現在）

2024年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	准教授	氏名	臼倉　瞳	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	日常・社会生活に生かすことのできる知識を授業の中で扱う。
今年度の進捗状況	受講生の感想や授業アンケートから、自身の経験や体験になぞらえて学習内容を理解することができている様子がうかがえた。例年とは受講する学年の幅が広がり、受講者数が多かったが、教育の質を落とさないよう、より分かりやすく具体的に解説できるよう講義資料をアップデートした。
来年度の進捗目標	日常・社会生活に生かすことのできる知識を授業の中で扱うとともに、より分かりやすく、受講生の興味関心が広がるような工夫を行う。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
感情表現の柔軟性尺度の作成と信頼性・妥当性の検討	単独	2024年10月	日本パーソナリティ心理学会第33回大会(茨城県つくば市)	臼倉瞳	
保健・福祉領域における対人援助職の援助要請と精神的不健康との関連 ―役割葛藤に着目して―	共同	2024年9月	日本認知・行動療法学会第50回記念大会(神奈川県横浜市)	半澤はなみ, 臼倉 瞳, 東海林 渉, 金井嘉宏	
（精神神経学雑誌編集委員会企画シンポジウム「論文作成にあたってのラストオーサーの役割」）論文作成の経験から：原著	共同	2024年6月	第120回日本精神神経学会学術総会(北海道札幌市)	臼倉瞳, 富田博秋	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	科研費研究について、縦断調査の実施に着手する。
今年度の進捗状況	本学学生を対象に学部を跨いで研究協力者の募集を行い、縦断調査の1回目をスタートさせることができた。成果の一部は学会発表を行った。
来年度の進捗目標	科研費研究について、論文化に着手する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

科学研究費助成事業 若手研究	2022年度～2025年度		トラウマ体験後も心の健康を維持し、社会適応を実現するために役立つ能力として「情動の柔軟性」（状況に応じて感情を表現したり抑制したりする能力）に着目し、18歳以上を対象に、(1) 情動の柔軟性尺度の日本語版を作成し、信頼性・妥当性を検討した上で、(2) 様々な心理社会的適応との関連メカニズムを解明するとともに、(3) 4時点の縦断データに基づき、情動の柔軟性がトラウマ体験後の心の健康の変化パターンに及ぼす影響を検討する。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年4月～	日本感情心理学会 会員
2023年4月～	日本パーソナリティ心理学会 会員
2021年9月～	東北精神保健福祉学会 会員
2020年9月～	日本精神神経学会 会員
2020年7月～	日本精神保健・予防学会 会員
2019年8月～	日本認知療法・認知行動療法学会 会員
2016年4月～	日本トラウマティック・ストレス学会 会員
2013年7月～	日本心理学会 会員
2011年9月～	日本カウンセリング学会 会員
2011年6月～	日本教育心理学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	特に取り組んでいる課題はない		
今年度の進捗状況	特に取り組んでいる課題はない		
来年度の進捗目標	特に取り組んでいる課題はない		

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

特に取り組んでいる課題はない

2024年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	准教授	氏名	東海林　渉	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
・双方向型授業の実践・アクティブラーニングの積極的活用	2019年4月1日～	健康の科学，心理学，健康心理学，公認心理師の職責の授業において，知識教授型の講義に加えて，授業内でICTシステム（manaba，Respon）を使用した双方向型授業を行い，学生の積極的な授業参加を促す工夫を試みた。また，授業後に資料をシステム上にアップロードし，学生が復習しやすい学習環境の整備に努めた。さらに授業内ではミニディスカッション等を取り入れたり，視聴覚教材を活用して意見交換できるようにするなどアクティブラーニングに相当する活動を頻繁に行い，学生が自らの知識と理解を用いて考える授業を試みた。加えて，授業ではICTシステムを活用して聴取した感想や疑問等について，毎回冒頭で紹介しフィードバックを与えるようにしている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
・授業スライド教材，配布教材の作成・視聴覚補助教材の研究と利用・独自の体験型教材の考案と作成	2019年4月1日～	担当した各授業の内容に合わせてスライドおよび学生用のレジュメを作成した。レジュメは学生のレベルに合わせて目標とする学習が適切に進むように情報量を調整した。さらに、適宜、授業内容の理解が促進されるよう映画や動画などの視聴覚教材を各授業の補助教材として導入した。また、独自に体現型の教材（ワーク，エクササイズ）を考案し、学生に教材を用いて諸現象を実体験してもらうことを通して学習の補助とした。ゼミでは、学生が著作権を意識しながら授業レポートを適切かつ効率的に執筆できるよう、レポート作成の手引きを作成した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2021年11月～		日本心理学会 認定心理士資格認定委員	
2021年8月～		日本心理学会『心理学ワールド』 編集委員	
2019年9月～		日本認知療法・行動療法学会 非常任編集委員（編集委員会）	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	准教授	氏名	吉田　雄大	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ICT（manaba, respon, Google各種機能等）を活用した双方向性を意識した授業	2020年～	学修支援システムである、manaba、respon、Google各種機能などを活用した授業を行うことができた。オンタイム授業では質問用responやチャット機能などを用いて、可能な限りリアルタイムに回答することを試みた。また、授業後にも感想および質問をresponで受付け、次回の授業で回答することを試みた。今年度はオンライン授業がメインの年度であったが、学生の協力もあり滞りなく授業を実施することができた。オンラインで実施した授業評価の総合評価は全て4を超えていたため、学生の満足度も比較的高かったと考えられる。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	座学および実技、両方の授業において、一方的な授業にならないように心がけている。座学でも簡単な実技や実習など、アクティブラーニングの要素も取り入れるよう努力している。実技では安全を第一優先にして、活発な活動になるよう心がけている。学生とのコミュニケーションの時間を大切にし、学生からのさまざまな相談に応じる。オンライン授業では、学生の不利益が極力ないように心がける。
今年度の進捗状況	専門実技など、新カリキュラムでの運営となったが、安全かつ円滑に運営できた。オンライン授業、対面授業問わずICT教材などを活用して、学生の理解を深める努力ができた。
来年度の進捗目標	専門科目で学生の授業評価を踏まえて、改善できるよう準備をしている。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
機械学習を用いたボール投げ動作の技能評価と評価ポイントの可視化	共同	2024年7月	第52回 可視化情報シンポジウム（沖縄産業支援センター）	吉田雄大，相原伸平	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
姿勢推定システム、姿勢推定装置、姿勢推定方法、学習装置、及び学習済みモデル	特許第7594778 号	2024年11月27日			

現在の課題・目標	機械学習を用いたスポーツの技能評価に関する研究を行っている。
今年度の進捗状況	進捗を学会で発表することができた。
来年度の進捗目標	スポーツ技能の評価に関する文献研究および調査を行う。ラグビーの競技パフォーマンスに関する研究を進める。また、機械学習を用いたスポーツの技能評価に関する研究の発表を行う。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2020年4月～	宮城県ラグビーフットボール協会 女子委員会委員・コーチ

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	体育会ラグビー部監督として、東北北海道地区優勝、大学選手権出場を目指す。		
今年度の進捗状況	東北リーグで3位となってしまい、目標を達成することができなかった。		
来年度の進捗目標	体育会ラグビー部監督として、チームを立て直し東北北海道地区優勝、大学選手権出場を目指す。		

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動
1. 学生委員 2. 第65期執行委員（副執行委員長） 3. 体育科目コーディネーター 4. 学科パンフレット編集委員

教員業務・活動報告

国　際　学　部

国 際 教 養 学 科

2024年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	教授	氏名	アンドリューズ　デール	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
国際学部（新設学部）の国際学概説の講義を用意・実施	2023年4月1日～	
responアプリを使用	2022年4月1日～	授業中に履修者の出席・欠席を計るために、responアプリを使用する。
対面授業への対応	2022年4月1日～	新型コロナウイルス感染症対策の中にすべての授業開講して、アクティブラーニングの授業に工夫したり、感染による欠席した学生のために対応をしたりする。
2．作成した教科書、教材、参考書		
講義に配布する資料の作成	2011年～	パワーポイントに基づいた資料を作成して、受講生に配布することとなっている。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
個人ホームページの利用	2019年～	学生のため、個人ホームページにクラス・スケジュールや授業の解説などを公開している。

現在の課題・目標	① 新カリキュラム（国際学部）の講義を担当する。 ② 旧カリキュラム（教養学部）の講義・演習を担当する。
今年度の進捗状況	上記目標①については，新カリキュラム（国際学部）の二年生の講義の教材を作成、配布資料を用意する。 上記目標②については，旧カリキュラム（教養学部）を維持する。
来年度の進捗目標	上記目標①については，新カリキュラム（国際学部）の三年生の講義・演習の教材を作成、配布資料を用意する。 上記目標②については，来年度、旧カリキュラム（教養学部）を維持する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	① 他の専門領域の研究者との交流を進める ② 新しい研究課題に挑戦する。 ③ 過去の調査資料を整理して、論文を書く。
今年度の進捗状況	上記目標①については，国外の研究者グループが刊行する論集にアニメのファンの美学について論文を書き、投稿した。 上記目標②については，厠神信仰という新しいテーマで、調査を実施する。 上記目標③については、過去に調べた絵馬奉納のデータを分析、論文を書いている。
来年度の進捗目標	上記目標①については，来年度、発表をしたり、論文を書いたりする計画を立てる。 上記目標②については，来年度、研究調査を実施する。 上記目標③については，過去の調査データを整理したり、論文を積極的に投稿する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年6月～	日本デジタルゲーム学会（DiGRA JAPAN）会員
2021年6月～	印度学宗教学 常任理事
2017年10月～	日本宗教民俗学会 会員
2016年6月～	日本民具学会 会員
2016年6月～	現代民俗学会会員 会員
2013年9月～	日本宗教学会 評議員
2012年6月～	印度学宗教学 理事
2012年6月～2024年6月	東北民俗の会 常任委員
2010年4月～	日本民俗学会 会員
2009年11月～	Anthropology of Japan in Japan 会員
2008年7月～	American Anthropological Society 会員
2008年6月～	印度学宗教学 評議員
2007年3月～	The American Folklore Society Lifetime Member
2006年3月～	The American Folklore Society 会員
2005年3月～	国際宗教学宗教史学会 会員
2002年3月～	青森県民俗の会 会員
1999年4月～	東北民俗の会 会員
1998年6月～	日本宗教学会 会員
1998年4月～	印度学宗教学 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

①東北文化研究所の所員（2023年4月1日～現在）
②東北学院大学人間情報学研究所の研究員
③推薦・AO A・帰国生特別入学試験実施委員
④敬和会幹事（2023年4月1日～現在）
⑤インターネット広報管理運営委員会委員（2023年4月1日～現在）
⑥学校法人東北学院ブランドデザインプロジェクトワークショップ参加者
⑦国際教養学科のオープーンキャンパスに参加
⑧言語文化学科のDX推進委員会委員
⑨際教養学科のDX推進委員会委員

2024年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	教授	氏名	郭　基煥	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2009年～	日本社会学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	教授	氏名	佐々木　郁子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
課題探究演習Bにおけるマイナビ課題探究プロジェクトの導入	2023年～	課題探究演習Bで、課題探究プロジェクトを実施。学生たちがチームを組み、企業が求める新規事業や新領域でのビジネスについての企画書作成とプレゼンを行う。マイナビ課題探究プロジェクトと連動して行うため、優秀なチームは全国大会へ出場する機会がある。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
アスリートの食事の重要性ー硬式野球部と宮城学院女子大学との共同プロジェクト	2021年～	宮城学院女子大学の協力を得て，アスリートにとって食が重要性であることを意識づける取り組みをおこなっている。
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Survey on Revenue Management of Japanese Accommodation Facilities in a Period of Shrinking Demand	共著	2024年8月	The 5th International Conference on Tourism and Business, The 5th International Conference on Tourism and Business	Aoki,A ., I.Sasaki, and T.Uetake	pp.211-215
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
サブスクリプション・ビジネスのタイプに基づく顧客生涯価値の決定要因―管理会計上の問題の所在と提示―	共著	2025年3月	日本管理会計研究学会，日本管理会計学会 産学共同研究グループ『サブスクリプション・ビジネスのモデル化とその評価に関する研究（2021 年度～2022 年度）最終報告書』	青木章通・佐々木郁子	pp.
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
新型コロナウイルス感染症のパンデミックの経営実践への影響	単独	2024年9月	日本学術会議　公開シンポジウム「パンデミックと経営ー危機にどう備えるかー」（日本学術会議講堂）	佐々木郁子	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					

来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究（B）	2022年度～2025年度	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 基盤研究（B）	2022年度～2025年度	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 科学研究費・基盤研究（C）	2018年度～2024年度	個別(研究代表者)	「原価および収益の構造と顧客関係性の変容に関する研究」（代表）
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2023年4月～2026年3月		日本管理会計研究学会 理事	
2023年～2024年		宮城県第二総合運動場懇話会 座長	
2020年10月～2026年9月		日本学術会議連携会員 委員	
2019年6月～		日本経営会計専門家研究学会	
2018年9月～		日本原価計算研究学会 会員	
2014年～		公益財団法人仙台市産業振興事業団非常勤理事 委員	
1998年4月～		日本管理会計研究学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	教授	氏名	古川　弘子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		1．学生が主体的に授業に参加し、自ら課題を見つけ、考え、自分のことばで伝える力を養うための工夫を行う。 2．学生の疑問や感想、要望を授業内容に取り入れたり、共有したりする工夫を行う。 3．学生の授業理解度を高めるための工夫を行う。
今年度の進捗状況		1.ディスカッション、個人でのプレゼンテーションやグループでのプレゼンテーションなどの「アクティブ・ラーニング」を可能な限り授業に取り入れた結果、受講生が「①考えながら学ぶこと、②学んだことをもとに自分で課題を見つけること、③その課題に対する自分の意見を整理すること、④整理した意見を言語化して他者に伝えること」の4点について、能力を養うことができた。 2.毎回の授業後に、受講生にマナバ「アンケート」機能を使って授業中に考えたこと、疑問、感想や要望を送ってもらった。この内容を次の授業の最初に他の受講生と共有した結果、受講生が授業を通して考えたことを整理し、言語化する力を養う効果があった。また、他の受講生の意見を知ることで、多様な視点や意見への気づきがあり、受講生の学びをさらに深める効果もあった。そして、疑問などには回答をしたり受講生と一緒にさらに考えたりしたことも、学びを深める効果があった。さらには、受講生からの要望も可能な限り授業に反映させることで、受講生のより主体的な授業参加がみられた。 3．受講生が日常生活でなじみのある映画などの動画、外部ウェブサイトなどを必要に応じて活用することで、授業で紹介する理論的なことや概念的なことがらについての理解を促進し、身近な事例と結び付けて考えることができるようになった。加えて、マナバの「レスポン」機能を使って授業中にグループワークの成果を共有したり、それを見ながら発表してもらったりすることで、受講生の理解度が進んだだけではなく、受講生の主体性が高まる非常に大きな効果も見られた。
来年度の進捗目標		来年度も今年度同様、上記(1)～(3)の目標達成のために努力していく。新学科では3年生の演習が始まるため、学生の興味や問題意識に合うような授業を提供できるように工夫していきたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
『南大日本学研究（第四巻）』	共著	2024年	中译出版	古川弘子、蒋云芸（訳）	pp.pp. 39-60
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
『翻訳をジェンダーする』	単著	2024年9月	筑摩書房	古川弘子	pp.pp, 1-256
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
ノンバイナリー代名詞の日本語への翻訳―『少女、女、ほか』を例として	単独	2024年9月	日本通訳翻訳学会第25回年次大会(神戸大学)	古川弘子	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	今年度の主な課題・目標は、科研で採択された課題「女性のからだに関する翻訳テクストの分析と受容研究」での分析結果をもとに、「①女性がどう訳されてきたか、②女性はどう訳してきたか、③ジェンダー平等を実現するために翻訳に何ができるのか」について、考えをまとめ、研究成果を発表することであった。
今年度の進捗状況	1. 上記の分析結果をもとに、翻訳をジェンダーの視点から考察した書籍『翻訳をジェンダーする』(古川弘子著、筑摩書房)を出版することができた。 2. ノンバイナリー代名詞の翻訳への影響についての分析結果をもとに、日本通訳翻訳学会第25回年次大会(神戸大学)にて、「ノンバイナリー代名詞の日本語への翻訳―『少女、女、ほか』を例として」と題した口頭発表を行うことができた。 3. 南京大学日本語学科から招待を受け、自著論文「女ことばに起因する翻訳の問題」の中国語訳を書籍『南大日本学研究(第四巻)』にて発表することができた。
来年度の進捗目標	今年度の目標は主に下記3点である。 1. すでに口頭発表とパネル運営をすることが決まっているInternational Pragmatics Associationの年次大会(オーストラリア・ブリスベン、6月)にて、ノンバイナリー代名詞のAVTに関する発表を成功させる。 2. 昨年度に分析と学会発表を行った、文学作品に使われるノンバイナリー代名詞の日本語の翻訳への影響についての研究結果を論文にまとめる。 3. 他大学の研究者4名と新たに立ち上げる共同研究「日本のTranslator Studies確立のための基盤研究プロジェクト」(研究代表者:古川弘子)を軌道に乗せる。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 科学研究費補助基盤研究(C)	2020年度～2024年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2024年～	IPrA (International Pragmatics Association) 会員
2023年～	社会言語科学会 会員
2022年～	認定NPO法人ウィメンズ アクション ネットワーク(NPO法人WAN) 会員
2012年～	日本通訳翻訳学会 (JAITS) 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	教授	氏名	松谷　基和	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
Education, Religion, and Politics in Colonial Korea: Soongsil College and Tohoku Gakuin in the late 1920s	単独	2024年9月	Symposium：“Toward a Postnationalist History of Korea” w(Cambridge, MA,, USA)	Motokazu Matsutani	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	教授	氏名	三須　拓也	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
メールおよびmanabaでの掲示板を通じた授業改善。	2017年4月1日～	講義科目「グローバル政治論I・II」「グローバル・トピックス」で実施。講義の際に、学生からの改善要望を募ることを心がけている。数回の小テスト、中間課題を実施し、修学の成果を測るとともに、学生の習熟程度に応じた講義内容の微修正を行った。
小テスト、リアクション・ペーパーを通じた授業改善。	2017年4月1日～	講義科目「グローバル政治論I・II」「グローバル・トピックス」で実施。講義の際に、学生からの改善要望を募ることを心がけている。小テストないし中間課題を課し、講義の効果を測るとともに、学生の習熟程度に応じた講義内容の微修正を行った。
映像を用いた学習効果の向上	2017年4月1日～	講義科目「グローバル政治論I・II」「グローバル・トピックス」において実施。図説だけでは説明しにくい箇所を動画を用いつつ説明したところ、以下の改善がはかれた。（1）学生からのリアクション・ペーパー等で、理解できなかった箇所を具体的に理解できた、とのコメントを貰った。（2）また映像データの一部をインターネットなどで閲覧できるようにし、学生の自学自習に役立たせることができた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
講義用プリント、パワーポイントデータの作成。	2019年4月1日～	講義科目「国際政治論I・II」「現代の政治」「クリティカル・シンキング」「平和学」において実践。講義で使用するプリントを毎回準備、配布している。また講義で使ったパワーポイントのプレゼンテーション・データをmanaba上にアップロードし、講義内容の復習に役立てて貰えるようにした。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
文章作成、就職活動支援	2017年4月1日～	主に4年生向け演習で実施。希望者に限定されるが、就職活動中の学生の文章力向上の指導を行った。具体的には 、エントリーシートや志望理由書などのチェックを行った。狙いは学生が自分の言葉で志望動機などをまとめられるようにすることにある。副次的効果として、教員が学生の就職活動の進捗状況を知ることで、適切な指導を行えた。
演習での個別研究の実施、指導。	2017年4月1日～	3年生、4年生向け演習科目で実施。東北学院大学学生懸賞論文の応募に向けて、学生が主体となった研究活動を実施した。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					

『コンゴ民主共和国を知るための50章』	共著	2024年7月	明石書店	朝倉恵里子, 安渓貴子, 安渓遊地, 池谷和信, 伊丹正典, 市川光雄, 井戸栄治, 大石晃史, 岡安直比, 梶茂樹, 北川勝彦, 小林有人, 坂巻哲也, 佐藤千鶴子, 佐藤哲, 澤田昌人, 島高行, 末原達郎, 髙田礼人, 高村伸吾, 竹元博幸, 田中真知, 寺嶋秀明, 寺田佐恵子, 長谷部葉子, 八角幸雄, 華井和代, 原子壮太, 藤井香織, 藤本麻里子, 古市剛史, 古田国之, 松浦直毅, 三須拓也, 安本暁, 山極壽一, 山口亮太, 湯本貴和, 横塚彩, 米﨑英朗	pp.1-328

E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）

G. 学会における研究発表

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(A)	2021年度～2024年度	共同(研究分担者)	従来の国際関係史研究では、冷戦期に生じた様々な対立や紛争の大半は、いわゆる「冷戦の終焉」すなわち米ソ対立の解消あるいはソ連の消滅とともに自然に解消したと考える傾向が強い。これに対して本研究は冷戦の終焉を米ソ対立の終焉とのみ同一視するのではなく、様々な次元で生じた「複数の冷戦の終焉」の集合体として捉え、各国の公文書史料を用いたマルチアーカイヴァル手法に基づく実証的分析によって、「冷戦は世界の異なる場所でいつどのように終焉を迎え、その過程でどのような変化をもたらしたのか」という問いに答えることを目指す。

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2004年12月～	日本アメリカ史学会 会員
1996年6月～	日本国際政治政治学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	教授	氏名	渡部　友子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	1. 学生の習熟度に合わせて、教材や指導方法を変える。 2. 言語文化学科で(第二外国語だけでなく)英語を学びたい学生に、英語力をつけさせる。 3. 講義科目において、学生間の学び合いや講義外での学びを促す。 4. 英文を読む時に、自分の知識を使って行間を埋めることが重要であることを学生と教員に伝える。
今年度の進捗状況	1.「総合英語II」において、習熟度の差を考慮した課題の出し方を工夫した。 2.「英語ライティングセミナー」において、自動翻訳や生成系AIを導入し、学習者の自立を促した。 3.「Topics in Japanese Linguistics」において、講義後にグループ活動を実施し、学び合いができる運営を行った。 4.「総合英語IA・IB」と「英語で学ぶ時事問題」において、自分で考えさせるための発問を工夫した。
来年度の進捗目標	1.「総合英語II」に加えて「英語で学ぶ時事問題」においても、習熟度の差を考慮した工夫をする。 2.「英語ライティングセミナー」において、自動翻訳や生成系AIを活用した学びを、引き続き促す。 3.「Topics in Japanese Linguistics」において、授業外での学びを促す課題を出す。 4.「英語で学ぶ時事問題」において、教材の選択と発問をよりよいものにする。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	1.「英文法」の本の執筆を目指し、講義を通して内容を精選する。 2. 英語教育に関する活動を、学内外で発表する。
今年度の進捗状況	1. 他の研究者が新しく書いた教育用の英文法書を収集することを目標としたが、全くできなかった。 2. 英語教育の学会や研修会などで、自動翻訳や生成系AIの利用に関する情報を積極的に収集することができたが、自身の実践例は発表できなかった。
来年度の進捗目標	1. 他の研究者が新しく書いた教育用の英文法書を収集する。 2.「英語ライティングセミナー」での取り組みを、学会や研修会等で報告する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動
国際学部長として、同役職に付随する諸々の用務を遂行した。

2024年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	教授	氏名	渡辺　祐子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	（設定せず）	
今年度の進捗状況	今年度4月に本学に着任し、新しい授業の準備に追われる日々で、そのための資料を幅広く読み、レジュメの準備を入念に行った。	
来年度の進捗目標	2025年度はこれまで担当していた授業に加えて、初めてゼミを持つことになる。座学の授業の準備と並行して、ゼミの学生個々人の興味関心を丁寧にすくい上げながら、学術論文の読解、論理的文章執筆のための訓練を行いたい。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
『近代中国社会におけるキリスト教と宣教師　伝道の使命と国家』	単著	2025年2月	かんよう出版	渡辺祐子	pp.1-318
『災禍において改革された教会　その祈りと告白、、実践の歴史と現在』	共著	2024年7月	教文館	大石周平、石原知弘、吉田隆等	pp.231-260
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
在日宣教師と日清戦争	共同	2024年5月	第16回東アジア文化交渉学会（福井県あわら温泉）	劉家鋒, 李恵源	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況	単著の出版の準備に多くの時間を費やした一年であった。 2月20日に『近代中国社会におけるキリスト教と宣教師』（かんよう出版）を出版した。				
来年度の進捗目標	すでに温めている以下のテーマの考察を進めたい。 ・学院設立に尽力した宣教師ホーイの中国伝道について ・日本、朝鮮、中国のミッションスクールの比較研究について（科研に応募する予定） ・19世紀末以降の中国における「信教の自由」概念の受容について				

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年4月～	アジアキリスト教交流史研究会 副代表

2013年1月～	アジアキリスト教交流史研究会 会員
2012年12月～	中華圏プロテスタント研究会 代表
2012年12月～	中華圏プロテスタント研究会 会員
2010年～	キリスト教史学会 理事
2005年～	キリスト教教育学会 会員
1999年～	キリスト教史学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	准教授	氏名	金　亨貞	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	准教授	氏名	佐藤　真紀	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
アクティブラーニングの実施	2021年4月～	毎回の授業に，学生同士のピア・ラーニング（グループディスカッションやプロジェクトワーク等）を取り入れ，学生が主体的に学べるような取り組みを行った。zoomを用いた場合も極力ブレイクアウトルームを活用し，学生同士が良好な関係を構築し，共に学べるような機会を多く提供するようにした。
授業内容の理解促進と自律的な学びの促進	2021年4月～	毎回の授業の冒頭で，前回の復習とその回のねらいを必ず説明することで，学生が学ぶ内容を常に念頭に置き，知識のネットワークを作れるように配慮している。また，授業終了時にはその回のまとめをし，学生自身による内省の時間を設定することで，理解の定着を促している。
留学生と日本人学生の交流促進	2019年4月1日～	留学生の日本語科目で，聴講で日本人学生が参加する機会を提供し，留学生と日本人学生がプロジェクトワークを通して協働し，双方にとって学びとなる場を提供した。
授業内容の理解促進と自律した学びの促進	2019年4月1日～	毎回の授業の冒頭で，前回の復習とその回のねらいを必ず説明した。また，授業終了時にはその回のまとめをし，学生自身によるふり返りの時間を設定することで，学生が内省できるようなサイクルを作った。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
仙台市内を中心とした地域日本語教育への貢献（HANDS）	2019年4月1日～	地域の外国人に日本語を教えるボランティアサークル"HANDS"の顧問を務めた。毎週火曜と金曜の19:00-21:00，土樋キャンパスに赴き，継続して活動を行った。当該団体に登録し活動をしている日本人学生は40名ほど，地域の外国人参加者も述べ40～50名ほどである。 日本語を学ぶ/教える活動を実践することで，参加者双方に多文化共生について考える機会を提供した。
EPA介護福祉候補生への日本語学習支援の実施(みんぴ)	2019年4月1日～	名取市の介護施設から要請があり，EPA介護福祉候補生への日本語学習支援を行う団体(みんぴ)を組織した。具体的には，言語文化学科佐藤ゼミで日本語教育学を学ぶ学生達と，地域構想学科菅原ゼミで福祉学を学ぶ学生達が協働し，インドネシアのEPA介護福祉候補生10名に，毎週1～2回の学習支援を行った。
外国につながる子どもの学習支援の実施（LAMP）	2018年9月～	近年増加・多様化している「外国につながる子ども」の学習支援を行う団体(仙台LAMP)を立ち上げ，学生達を組織し，毎週1回90分～120分の学習支援を継続して実践している。2020年度以降は新型コロナ感染症の影響を受け，zoomを用いた遠隔支援を行っている。学生達が多文化共生において自分自身に出来ることを模索する場を提供できている。
EPA介護福祉候補生への日本語学習支援の実施(みんぴ)	2018年6月～	名取市の介護施設に勤務する EPA介護福祉候補生への日本語学習支援を行うグループ(みんぴ)を組織した。言語文化学科佐藤ゼミで日本語教育学を学ぶ学生達と，地域構想学科菅原ゼミで福祉学を学ぶ学生達が協働し，インドネシアのEPA介護福祉候補生10名程度を対象に，毎週1～3回の学習支援を継続して行っている。学生達には多文化共生社会で自身に出来ることを自問自答し，模索する機会を提供できている。
仙台市内を中心とした地域日本語教育の実施(HANDS)	2015年4月～	地域の外国人に日本語を教えるボランティアサークル"HANDS"の顧問として企画・運営に関わっている。毎週火曜と金曜の19:00-21:00に継続的な活動を実施している。対面活動が可能であった頃は土樋キャンパスにて活動を実施していたが、2020年度～2021年度は新型コロナ感染症の影響を受け、zoomによる遠隔活動を継続して行っている。当該団体に登録し活動をしている日本人学生は50名ほど，地域の外国人参加者も述べ40名ほどである。 日本語を共に学び，交流する活動を実践することで，参加者双方に多文化共生について考える機会を提供できている。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	

来年度の進捗目標					
Ⅱ　研究活動					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2020年10月～	仙台市「『日本語教育の体制整備』総合調整会議」への参加
2018年6月～	EPA介護福祉士の日本語学習支援「みんぴ」運営参加・支援
2016年7月～	日本語教育学会 審査・運営協力員
2016年2月～	協働実践研究会 会員
2015年4月～	地域日本語学習支援サークル「HANDS」助言・指導, 企画, 運営参加・支援
2004年3月～	特定非営利活動法人「子どもLAMP」企画, 運営参加・支援
1999年12月～	日本語教育学会 会員
1999年4月～	日本言語文化学研究会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	准教授	氏名	城山　拓也	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
講義科目（「中国語圏の言語と文化」、「中国語圏文化論」）の運営	2024年4月1日～	前期の講義科目「中国語圏の言語と文化」では、テキスト『中華生活文化誌』（関西学院大学出版会、2018年）をネタに、日常生活から中国・中華圏の言語や文化について論じた。授業ではテクスト以外にも、研究書の記述のほか、図像や動画、それに音声資料を駆使し、中国文化研究の面白さを紹介したつもりである。後期の「中国語圏文化論」では前期の内容を深めるため、日本語訳のある文学作品を取り上げ、中国語圏の諸問題について論じた。特に、恋愛や結婚など、学部生にとって親近感のあるテーマを取り上げ、論を深めるよう努めている。
中国語スピーチコンテストを通じた中国語学習	2022年9月1日～	中国語教育の一環として、有志の学生を募り、全日本中国語スピーチコンテストへの参加を促している。主に1、2年生を対象に、授業外で中国語作文の添削やスピーチ指導などを自主的に進めた。結果として、2022年度は宮城県大会スピーチの部において、本学の学生が優勝・準優勝を獲得することが出来た。2023年度は3位の成績を収めた。2024年度は惜しくも受賞はならなかったものの、学生の中国語学習への意欲を掻き立てることができたと思われる。
外国語科目（中国語）の運営	2020年4月1日～	外国語科目（中国語）については、適宜小テストを行い、学習へのモチベーション維持を図っている。また、1か月半～2か月が過ぎたところで、復習の週を設けた上で、振り返りの中テストを行っている。さらに、中国、台湾で撮ってきた写真を紹介したり、また動画を見せたりと、より「活きた」中華圏の姿を紹介するようにしている。
演習科目（「原典講読」）の運営	2020年4月1日～2025年3月31日	演習形式の授業では、常に学生の主体的な発表と議論を促すよう努力している。当ゼミでは、発表者1名のほか、別にコメンテーター1名を事前に指名しておき、発表内容についてコメントしてもらう。そのほかのゼミ生にも、質問事項を事前に考えてきてもらい、学生が主体的に発言できる場になるよう努めている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	①外国語科目（「初級中国語」）を受講する一年生は、昨今の日中関係悪化のためか、中国・中華圏への基礎的知識に乏しい。したがって、中国語を学ぶことで何が得られるのか、具体的なイメージもできていないように見受けられる。一年生向けの中国語の授業では、学生自身の学習目的を明確にし、何より「中国語って面白い！」と思ってもらうことを目標としている。 ②講義科目（「中国語圏の言語と文化」、「中国語圏文化論」）はいずれも、今年度から設計、開始した授業であったため、議論に荒っぽいところがあったかもしれない。今後はより学生の目線に立った授業を設計し、こちらも「中国研究の面白さ」を伝えることを目標としたい。 ③演習科目（「原典講読」）では、日本の学生を取り巻く環境と中国文化の差異が大きすぎるせいか、後期になるにつれて勉強のモチベーションがなくなる傾向が強い。まずは読書の習慣をつけてもらい、自分の力で中国文化について考える癖をつけてもらいたいと思っている。
今年度の進捗状況	①授業の合間に図像、動画、音声資料を紹介したり、また雑談を入れたりして、できるだけリアルな中国・中国語圏の姿を見せるよう努めている。また、本学の留学経験者（上級生）に、現地での様子を話してもらう機会も設けた。なお、今年度は中国のビザ免除も再開され、中国留学に行く学生も出てきた。今後が楽しみである。 ②毎回の授業終了時にコメントシートを配布し、次回の授業開始時にフィードバックしている。学生の反応も上々なようだ。また、講義内容は、出来るだけ学生の目線に立って、中国文化について論じるよう努めている。同時に、私自身が面白いと思う研究成果についても積極的に紹介している。 ③後期の授業で、「ミニ・ビブリオバトル」と称して、普段の自らの読書について紹介する回を設けた。自分の問題意識にひきつけつつ、中国文化について学んでもらうよう、関連図書の紹介も積極的に行った。 ＊なお、特記事項として、2024年度は、言語文化学科の学生2名が日中友好協会主催の全日本中国スピーチコンテスト東北大会に出場した。受賞は叶わなかったものの、同協会主催のイベントに参加するなど学習意欲の向上につながったようである。

来年度の進捗目標	①成績の悪い学生には、専用のプリントを配布するなどして、なんとか中国語レベルの向上を目指してもらいたい。また、定期的に検定試験問題を解答させたり、すこし難易度の高い内容を提出させたりして、学習のモチベーション維持にも努める。 ②来年度は、今年度の講義内容の調整、洗練に努め、より面白い講義を展開したい。毎回の授業のコメントシートの配布、フィードバックについても続けるつもりである。 ③来年度からは、国際学部ではじめて演習科目がはじまる。ゼミ生全員が自立して中国文化について調査、考察し、また授業中に積極的に発言できるような場を設けたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
政治宣傳與裝飾藝術——以張光宇《西遊漫記》為例（陳敏訳）『二戦前後的中日身体表現芸術：影像・戯劇・舞踏・音楽・漫画』	分担執筆	2024年10月	新鋭文創	城山拓也	pp.190-207
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
中華人民共和国建国直後の中国画——葉浅予のプロパガンダ制作をめぐって——	単著	2025年3月	立命館言語文化研究, 36(3)	城山　拓也	pp.3-20
葉浅予「舞踏人物画」成立考—1950-60年代の雑誌『舞踏』を手がかりに	単著	2025年2月	東北学院大学教養学部論集(195)	城山　拓也	pp.11-30
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
張光宇「装飾芸術」再考——『西遊漫記』から『張光宇挿図集』まで	単独	2024年12月	中国における漫画とモダニズム（立命館大学）	城山　拓也	
葉浅予「舞踏人物画」成立考——1950-60年代の雑誌『舞踏』を手がかりに	単独	2024年11月	東アジア日本研究者協議会第8回国際学術大会(淡江大学)	城山　拓也	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	①個人研究「中華人民共和国における「装飾芸術」——中央工芸美術学院の歴史的役割」（科研費研究、2023-2025年度）……中華人民共和国建国前後の芸術発展を、「装飾芸術」というテーマで、一貫性をもって論じることが目的である。主に張光宇、張?、?薫?らに着目して考察を進めている。 ②共同研究「冷戦期東アジアを移動する身体芸術メディア・プロパガンダ——潜伏する文化記憶」（科研費、2023-2027年度）……冷戦期の東アジアを範疇に、戦前から潜伏するトランスナショナルな「文化記憶」の実態を解明することを目的とした共同研究である。私の担当は、中国の画家・葉浅予の創作に着目して検討を進めることである。
今年度の進捗状況	①北京にて講演と資料調査（2024年9月）、その成果をもとに立命館大学にて研究報告を行った（2024年12月）。また、上海で資料調査（2025年2月）、同じく東京でも資料調査を行った（2025年3月）。これらの成果の一端を論文化し、発表した（『立命館言語文化研究』、2025年3月）。なお、資料調査が多い理由は、前年度まで新型コロナウイルスの影響により、中国への出張が難しかったからである。 ②東京で資料調査（2024年9月）し、その成果をもとに台湾にて報告した（2024年11月）。また、名古屋にてシンポジウムのコメンテーターを担当した（2025年1月）。台湾での研究報告に基づき、論文を執筆、発表した（『東北学院大学教養学部論集』、2025年2月）。 ＊2024年度研究功績等表彰（東北学院大学、2025年1月）
来年度の進捗目標	①2024年度の資料調査の成果を、日本現代中国学会全国大会にて発表する予定である（2025年5月）。上手く論を立てることができれば活字化し、学術誌に投稿したい。また、立命館にて研究報告したものの一部を、論文として執筆している最中である。こちらも2025年度中に発表したい。 ②2024年度中の研究活動を通じて、新しいテーマを発見するとともに、資料の収集も行うことができた。2025年度中に研究報告を行いたい。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(A)	2023年度～2027年度	(研究分担者)	冷戦期東アジアにおいて、政治的には正式な往来はないはずの国・地域間で、個人・団体レベルの芸術文化交流の例は多く、時には頻繁であった。それはなぜか。戦後日本は政治文化的に米国の影響下にあったため、アメリカナイゼーション面が強調されてきた。中国・韓国・台湾では、日本占領期の痕跡を抹消し、民族文化の振興が奨励された。しかし戦時期のトランスナショナルな文化記憶は、身体の記憶を通じて東アジア諸国に潜伏し、冷戦期を経て現在まで文化生産に影響を与え続けている。本研究では東アジア諸国・地域を対象に、芸術文化の影響関係を多ジャンル横断的に（映画、音楽、演劇、漫画、舞踊）日中韓の研究者により明らかにする。
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2025年度	(研究代表者)	本研究は、1956年に誕生した中央工芸美術学院における一連の形式実験を、「装飾芸術」という枠組みの下で捉え返し、新たな美術史構築を目指すものである。当時の中国では、挿絵、壁画、アニメーションなどの分野で、多様な形式実験を行っていた人々が存在していた。本研究では、特にホウ薫栞・張光宇・張テイといった人々の動向に着目し、新聞・雑誌など一次資料の調査を行いながら、当時の工芸美術の実態を浮き彫りにする。20世紀中国美術史における連続性と断絶性に着目しながら、中央工芸美術学院の歴史的役割を再考し、新たな文化史記述を構築することが目的である。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年1月	戦時における身体メディア芸術の力――興隆・淘汰の歴史と現状(名古屋大学文系総合館7階 カンファレンスホール) パネル司会・セッションチェア等
2024年10月	中国研究所2024年第2回定例学術研究会 パネル司会・セッションチェア等
2023年7月～	中国現代文学研究者懇話会 世話人
2016年4月～	日本マンガ学会 会員
2011年4月～	中国人文学会 会員
2010年4月～	中国モダニズム研究会 会員
2008年4月～	日本現代中国学会 会員
2008年4月～	中国文芸研究会 夏合宿幹事
2005年4月～	中国文芸研究会 会員
2005年4月～	大阪市立大学中国学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

教養学部・国際学部教務委員
教養学部FD委員
外国語教育センター運営委員会委員
学生による授業評価委員会（国際教養学科）委員
2024年度国際教養学科グループ主任
入試採点委員
AO面接委員
国際学研究所所員

2024年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	准教授	氏名	房　賢嬉	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
オンデマンド授業における学生間のインタラクション	2021年4月1日～	オンデマンド式の授業では学生間のコミュニケーション機会が損なわれることになるため、少しでも互いの意見や考え方が共有できるように工夫した。具体的には、毎回授業で取り上げた問題に対する受講生からの意見やふり返りを紹介するという方法を取った。この方法は学生に好評で、「受講生の意見共有がしっかりとなされていてよい」との声が聞かれた。次のふり返りで仲間の意見に言及する学習者が増えてきたものの、「仲間の意見が参考になった」、「そのように考える人もいて驚いた」などの浅い感想が多く、さらに深めることはできなかった。その問題点を踏まえ、いくつか対立する意見をピックアップし、それに対する意見をふり返りに述べるように促し、それらを次回の授業で丁寧に取り上げて議論するというサイクルを作ったところ、より多様な意見が飛び交うようになり、オンデマンドという悪条件でも議論を深めることができた。上記の工夫によって、批判的思考や内省の過程を経た自他対立、理解のプロセスを作ることがある程度できたと考えられる。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	学生が授業中に配布するPPTやハンドアウトだけに頼らず、文献を積極的に読むような仕組みを引き続き作っていく。
今年度の進捗状況	授業のテーマ毎にmanabaのアンケート機能を用いて学生の考えを調査し、授業で扱う内容に照らし合わせて文献を読ませて考察させることで、授業で扱う理論の理解を深めることがある程度達成できた。来年度も引き続き、実践していきたい。
来年度の進捗目標	授業のテーマ毎にLMSの小テスト機能を用いて、文献を読んだら簡単に解ける問題を設定することで、文献を積極的に読むようにしていきたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
キャラクタースピークの観点から見た韓日ミステリードラマの登場人物の言語行動分析－ドラマ「シグナル」を中心に－	共著	2024年11月	言語事実と観点（언어사실과 관점）	房賢嬉・白以然	pp.
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
言語生態学的アプローチに基づく新しいキャリア教育の提案－「4 つの問い」で促される生態学的主体性の形成過程－	共著	2025年2月	東北学院大学教養学部論集(195)	房賢嬉・野々口 ちとせ・岡崎眸	pp.49-80
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	①言語生態学を理論的背景とする実践の分析 ②日韓のドラマにおけるキャラクタースピークの分析 ③新聞における漢語「芸術家」とカタカナ語「アーティスト」の使用状況の分析－日韓の比較を通して－
今年度の進捗状況	①課題「言語生態学を理論的背景とする実践の分析」については、論文「言語生態学的アプローチに基づく新しいキャリア教育の提案－「4 つの問い」で促される生態学的主体性の形成過程－」にまとめ、『東北学院大学教養学部論集』に掲載された。 ②課題「日韓のドラマにおけるキャラクタースピークの分析」については、論文「An Analysis of the Speech Behavior of Characters in Korean-Japanese Mystery Dramas from the Perspective of Character Speak－Focus on the drama The Signal－」にまとめ、韓国の学術誌『言語事実と観点』に投稿し掲載された。
来年度の進捗目標	①課題「言語生態学を理論的背景とする実践の分析」については、残された課題があったため、引き続き分析する予定である。 ②課題「日韓のドラマにおけるキャラクタースピークの分析」については、スタイルレベルシフトに焦点を当てた分析を試みている。 ③課題「新聞における漢語「芸術家」とカタカナ語「アーティスト」の使用状況の分析－日韓の比較を通して－」については、韓国の大学の研究者1名と週に1回、zoomで勉強会とミーティングをしながら分析を進めており、論文としてまとめ、投稿する予定である。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2020年～	言語文化教育研究学会 会員
2010年～	協働実践研究会 会員
2004年～	日本語教育学会 会員
2002年～	お茶の水女子大学日本言語文化学研究会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	准教授	氏名	フリック　ウルリッヒ	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
Colonial Past as 'Historical Memory': Dealing with Manchuria in postwar Japan	単著	2025年2月	東北学院大学・教養学部論集, 195	Flick, Ulrich	pp.81-113
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
王楽著『満洲国における宣撫活動のメディア史―満鉄・関東軍による農村部多民族支配のための文化的工作』	単著	2025年3月	皓星社, 日本植民地教育史研究年報, 27	Flick, Ulrich	pp.126-132
G. 学会における研究発表					
The Tōhoku Earthquake of 2011 – Personal experience and the aspect of disaster relief	単独	2024年5月	Chiba University/Global Study Program(千葉市)	Flick, Ulrich	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年4月～	日本植民地教育史研究会 年報編集委員
2020年4月～	近現代東北アジア地域史研究会 会員
2010年10月～	日本植民地教育史研究会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	准教授	氏名	李　承赫	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
英語教育に関する重要課題と目標	2020年4月～	2020年に赴任してから、東北学院大学の教養学部で英語教育に携わった。学生たちが実際の能力とは別に、自分の英語力に自信を持っていない場合が多いということが明確になった。学年度が終った後、目に見える形で自分の英語力が伸びたということをどうすれば気づかせることができるか。これが教員としての主な課題であった。そのため、有名な英語原典の本、あるいは有名な英語スピーチを一冊丸ごと完全に読み切り、すべての単語がわからない場合でも文脈で理解できる「推理能力」を養わせることに集中した。この「推理能力」に基づいた英語読解力で学生が自らの力で内容を把握できるように指導した。学年度が終わった時点で、自分の力で英語の本を全部読み切ったという、目に見える形の達成感の存在こそが学生の自信につながると確信する。2023年からは国際学部の所属になったが、現在も学生たちができるだけ「自分の英語」で自分の考え方が表現できるように指導している。
③　多文化共生・グローバル化に関心を寄せる英語教育	2020年4月～	国際的・社会的な問題を扱った英文を様々な視点から比較して読むことにより、多様な文化的な背景を持つ世界中の人々の文化を理解することが重要であるということを認識させるのを目標とした、グローバライゼーションに相応しい英語力の養成を目指した。2023年、国際学部が始まった以降は、特に国際学部の新入生たちに「多文化」と「グローバル的」人材が備えないといけない、英語能力以外の「多文化理解力」につながる教養についても実例を挙げながら指導している。
②　オフィスアワーを使った、英会話講座の実施	2020年4月～	コロナ禍でのZoomオフィスアワーの時に、希望する学生を対象に教員と英会話ができる時間を設けた。授業で習った用語と表現を使って自分の意見を簡単な英語で述べることができるように指導した。2023年五橋キャンパスに移転してからも、希望する学生を対象に英会話の時間を不規則ではありながら続けている。
①「推理能力」を養う、総合的な英語読解力	2020年4月～	すぐ辞書をひくのではなく、慣れない単語や表現が出ても、先ず自分がわかる範囲で内容の「大きな図」を把握し、そこから細かい内容の理解まで自力でたどり着つことができるよう、英語読解における「推理能力」の向上を優先にして指導した。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					

H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2021年4月～		日本政治学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	講師	氏名	沓掛　沙弥香	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		・授業時間内の学生との対話を大切にし、学生たちの授業意欲を高め、積極的・能動的な態度での学習を促す。 ・すべての授業で、学科過程における学びの位置づけを明確にし、学習内容の連環を意識した構成にする。 ・授業評価の基準を明確に提示すると同時に、学生の個性（発表は得意だが書くのは苦手、書くのは得意だが発表は苦手）による極端な偏りのない、公平な評価基準を定める。
今年度の進捗状況		・上記3つの項目すべてについて、おおむね達成できた。
来年度の進捗目標		・来年度は、ゼミの運営が始まるため、授業外での学生とのコミュニケーションも大切にしつつ、就活と卒業論文の執筆の両立による不安を軽減する適切なサポートができるよう努める。 ・学生たちの基本的なアカデミックスキルの教育を徹底する。 ・明確かつ公平な評価基準を定め、遵守する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
第3部第3章　地域研究『言語政策研究への案内』	分担執筆	2024年10月	くろしお出版	村岡 英裕, 上村 圭介（編著）	pp.124-131
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
アフリカの言語実践から〈人間経済〉を照射する	単独	2024年10月	負債の動態に関する比較民族誌的研究(2) 2024年度第2回研究会(東京外国語大学（東京都府中市）)	沓掛沙弥香	
アフリカにおける言語政策：言語政策はトランスランゲージングできるのか	単独	2024年8月	日本言語政策学会特定課題研究会「国家・民族・言語の国際比較研究」2024 年度第 1 回研究会(オンライン)	沓掛沙弥香	
Bridging the Gap between Language Policy and Language Practice in Africa: For a Comprehensive Analysis	単独	2024年8月	World Congress of African Linguistics 11(Nairobi University (Kenya))	KUTSUKAKE Sayaka	
アフリカ型多言語主義に関する予備的考察：「人間経済」との接点を探る	単独	2024年5月	日本アフリカ学会第61回学術大会(大阪大学（大阪府箕面市）)	沓掛沙弥香	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標		アフリカ諸国の言語政策・言語実践に関する文献研究及び国際関係に係る動向分析を進めるとともに、アフリカでの現地調査によるデータ収集を行う。			

今年度の進捗状況	文献研究や国際関係に係る動向分析はおおむね予定通り進捗した。アフリカでの現地調査とデータ収集は、ケニアでの学会発表が生じたことによる時間的・金銭的制約により、当初の予定どおりには進まなかった。		
来年度の進捗目標	・自分の対象地域とは異なる地域を研究対象とする同一専門分野の研究者との共同研究を進める。 ・アフリカ諸国の憲法の言語条項についての資料をまとめ、学術誌に投稿する。 ・アフリカ諸国の「国語」についての考察を論文にまとめ、学術誌に投稿する。 ・タンザニアおよびガーナでの研究調査を実施する。		
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

教員業務・活動報告

教養学部

人間科学科

言語文化学科

地域構想学科

2024年度

所属	教養学部　地域構想学科	職名	教授	氏名	松原　悟	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
アクティブラーニングの活用を工夫した。	2020年4月1日～	講義形態を変え、従来の一方的な講義形態から、学生との双方向的な授業に改善した。毎回の小レポートやテーマに基づいたグループワークを取り入れた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
パワーポイントの作成	2021年4月1日～	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
実習系科目の改善	2020年4月1日～	地域調査の集団での活動が困難なため、地域構想学発展実習（2年）演習（3年）の授業では、各自が暮らしている地域について、個別に調査を行い、よりよい街づくりに対して成果を報告させた。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2018年4月～	日本サッカー協会 公認マッチコミショナー
2016年4月～	仙台市クラブリーグ連盟会長 委員
2001年4月～	日本サッカー協会マッチコミショナーとして日本フットボールリーグの運営を補助 2019年からはJリーグも担当している 委員
1980年4月～	日本体育学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

教員業務・活動報告

教養教育センター

2024年度

所属	教養教育センター	職名	教授	氏名	今井　奈緒子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
manabaのオンライン小レポート機能の使用	2020年5月7日～	遠隔授業の実施に伴い、従来の出席カードに替わるものとして毎回オンラインによる小レポートの提出を義務づけ、学生に授業内容についての所見、質疑を記すよう求めた。優れた内容の、あるいは他の学生の参考になると思われるコメントを、次週の授業冒頭に（授業進行上その時間が取れないときは、プリントにまとめて配信）紹介し、質問に回答するなどしてフィードバックに役立てている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
講義科目における各回授業の資料フォルダ（プリント・CD音源・スライドショー）	2020年5月7日～	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年6月～	日本オルガン研究会 年報『オルガン研究』編集委員長
2023年5月～	日本オルガン研究会 会長
2023年5月～	一般社団法人 日本オルガニスト協会 監事
2023年5月～	一般社団法人 日本オルガニスト協会 会員

2021年5月～	一般社団法人日本オルガニスト協会 会長（代表理事）
1983年4月～	一般社団法人日本オルガニスト協会 会員
1978年5月～	日本オルガン研究会 運営委員・年報編集委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
VOIX et ORGUE	Eglise l'Etoile, Paris, France	2025年3月～2025年3月	バッハ、メンデルスゾーンのソロ及び声楽曲、坂本日菜作曲「讃歌II」(オルガンとソプラノ)を演奏
ジングアカデミー東京 第16回定期演奏会	日本基督教団霊南坂教会	2025年3月～2025年3月	
仙台バロック合唱団演奏会	カトリック元寺小路教会	2025年3月～2025年3月	D. Buxtehude Membra jesu nostri, カンタータ BuxWV41
東北学院大学同窓会クリスマス演奏会	五橋キャンパス押川記念館ホール	2024年12月～2024年12月	オルガン連弾（共演：小野なおみ氏）、独奏を担当
今井奈緒子オルガン演奏会	片倉キリストの教会	2024年11月～2024年11月	S. Schmidt, J.P.Sweelinck, D. Buxtehude, N. Lebegue, J.S. Bachのオルガン作品を独奏
霊南坂教会水曜チャペルコンサート	日本基督教団霊南坂教会	2024年11月～2024年11月	D. Buxtehude Te drum他を演奏
ヴェネツィアの古くて新しい風	日本基督教団霊南坂教会	2024年11月～2024年11月	A./G. ガブリエッリ、B. マリーニ、D. カステッロ、G. ピッキのアンサンブル作品を演奏
泉音楽堂オルガン移設披露演奏会	東北学院大学泉キャンパス音楽堂	2024年10月～2024年10月	
霊南坂教会水曜チャペルコンサート	日本基督教団霊南坂教会	2024年10月～2024年10月	M. プレトリウス、バッハ、メンデルスゾーンのオルガン作品を演奏
時代の音』レクチャーコンサートシリーズ2024 vol.2	東北学院大学五橋キャンパス押川記念館ホール	2024年10月～2024年10月	
コアクライス・バッハナール合唱団演奏会	東京オペラシティタケミツメモリアルホール	2024年8月～2024年8月	メンデルスゾーン作曲詩編42、ブラームス作曲ドイツ・レクイエムをオルガンで伴奏
時代の音』レクチャーコンサートシリーズ2024 vol.1	東北学院大学五橋キャンパス押川記念館ホール	2024年7月～2024年7月	小川氏のレクチャー、モーツァルト、ベートーヴェン他のフォルテピアノを中心とするピアノ五重奏作品の演奏をプロデュース
オルガンメディテーション	東京カテドラル聖マリア大聖堂	2024年7月～2024年7月	グリニーの賛歌、バッハのコラール幻想曲 BWV1128、メンデルスゾーンのソナタop.65-4
今井奈緒子オルガンリサイタル	東北学院大学五橋キャンパス押川記念館ホール	2024年7月～2024年7月	ヘンデル:オルガン協奏曲（オルガンソロ版）、グリニーの賛歌、バッハのコラール作品、メンデルスゾーンのソナタをオルガン独奏で、パーセル、ヘンデル、坂本日菜作品をアンサンブルで演奏
霊南坂教会水曜チャペルコンサート	日本基督教団霊南坂教会	2024年7月～2024年7月	ヘンデル、坂本日菜の作品をアンサンブルで演奏
霊南坂教会水曜チャペルコンサート	日本基督教団霊南坂教会	2024年5月～2024年5月	Gabrielli, Marini, Castilloのアンサンブル作品
日本基督教団霊南坂教会チャペルコンサート	日本基督教団霊南坂教会	2024年4月～2024年4月	Tunder, Bohem, Guilmantのオルガン作品
東洋英和楓の会主催 東洋英和女学院 PRE! 創立140周年記念オルガンコンサート	東洋英和女学院マーガレット・クレイグ記念講堂	2023年11月～2024年11月	同女学院卒業生4名のオルガニストによるガラ・コンサート
オルガンプロムナードコンサート400回記念スペシャル	神奈川県民小ホール	2023年4月～2024年4月	同ホールのプロムナードコンサート第400回を記念し、各奏者の独奏、合奏を披露
『時代の音』レクチャーコンサートシリーズ2021 vol.3（収録配信）	東京赤坂霊南坂教会（収録）	2022年3月～	H. v. ヘルツォーゲンベルク《受難》全曲の収録配信
『時代の音』レクチャーコンサートシリーズ2021 vol.2（収録配信）	本学多賀城礼拝堂	2022年3月～	J. ブラームス《4つの厳粛な歌》op.121, コラール前奏曲po.122 より数曲
現在の課題・目標			

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2024年度

所属	教養教育センター	職名	教授	氏名	岸　浩介	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
manabaを利用した授業内・授業外課題作成	2020年～	講義科目（「言語基礎論IA」「原典講読A, B」「言語文化学演習A, B」「対照言語学」「言語論」など）において、オンラインシステムmanabaのレポート機能を用い、授業外課題（振り返り課題）の作成を課した。また、外国語科目（「英語IA, B」「英語IIA, B」）において、同システムの小テスト機能を用い、授業内・外の演習問題解答課題を課した。
responを利用した双方向形式授業の展開	2020年～	講義科目（「言語基礎論IA」「原典講読A, B」「言語文化学演習A, B」「対照言語学」「言語論」など）と外国語科目（「英語IA, B」「英語IIA, B」）において、オンラインシステムresponを用い、教員と学生間の双方向の情報伝達を活用した授業を展開した。
「ワークシート」を活用した授業運営・改善の実施	2019年～	講義科目（「対照言語学」）では、コロナウィルス感染症の影響により遠隔授業を実施した期間を除き、ほぼ毎回「ワークシート」を配布し、樹形図の作成や統語構造の理解促進に利用した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	講義科目については、授業内外のディスカッションや意見交換、ワークシート作成、振り返り課題の提出などにより、学生による主体的な授業参加と授業内容理解の促進を図る。語学科目（英語）については、外国語教育センター英語セクションの方針に従い、4技能を重視した授業展開を行う。
今年度の進捗状況	講義科目については、ワークシート作成および振り返り課題の提出はほぼ毎回実施できたが、授業内外のディスカッションや意見交換などの時間が多く持てなかった。語学科目（英語）については、4技能を重視した授業展開を心掛けた。
来年度の進捗目標	2025年度に担当するTGベーシック科目はもちろんのこと、講義科目についても、引き続き、授業内外のディスカッションや意見交換などの時間をより多く持つように授業を展開する。語学科目（英語）については、4技能を重視した授業展開を引き続き心掛けるとともに、4技能のバランスを考慮した授業展開を行う。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	日・英語の名詞を含む修飾表現、特に非制限同格表現の分析を行う。
今年度の進捗状況	英語を中心とした非制限同格表現の先行研究の内容を確認している段階にとどまっている。
来年度の進捗目標	英語を中心とした非制限同格表現の先行研究の内容と問題の所在を確認し、同表現の分析としてどのようなものが妥当かを検討する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2005年3月～		高次機能障害学会会員 会員	
2004年4月～		The Formal Linguistics Circle会員 編集委員	
2004年4月～		The Formal Linguistics Circle会員 学会開催責任者	
2000年4月～		日本英語学会会員 会員	
1998年4月～		The Formal Linguistics Circle会員 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			
外国語教育センター長として、外国語教育センター内部の統括業務に従事した。また、教養教育センター副センター長として、教養教育センター長の補佐としての業務に従事した。			

2024年度

所属	教養教育センター	職名	教授	氏名	金　永昊	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
일본인이 조선어로 번역한 중국 고전소설-동경대학교 오구라 문고 소장『금고기관』을 중심으로-（和訳：日本人が朝鮮語で翻訳した中国古典小説－東京大学小倉文庫所蔵『今古奇観』を中心に－）	単著	2024年4月	韓国日本思想史学会，日本思想(46)	金永昊	pp.129-155
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
井原西鶴『懐硯』巻五の第一話「俤の似せ男」とフランス映画＜かくも長き不在＞比較	単独	2024年12月	韓国日本古典文学研究会(韓国)	金永昊	
浅井了意の『三綱行実図』 翻訳	単独	2024年5月	第17回WEB日韓古典研究会(日本、韓国)	金永昊	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

競争的資金等の外部資金による研究 名著翻訳支援（韓国研究財団）	2018年度～	共同	本研究は、韓国研究財団（旧、韓国学術振興会）の支援により、井原西鶴の『武家義理物語』を韓国語で訳注、解説を付けて刊行する作業である。この作品の翻訳・紹介を通して、現在の日本人の考え方を支えている「義理」という概念はいかなるようなものなのか、これは韓国人が日本を理解するうえでどのように役に立つかを提示することが出来ると思われ、文学・社会学・思想・宗教などの関連分野において非常に重要な意義を持つと考えられる。
科学研究費助成事業 科研費基盤C	2017年度～	個別	本研究は、日本と韓国における中国短編白話小説の受容様相を比較し、そこから見出せる日本と韓国文学の特質を究明することにその目的がある。これまでは日韓両国における『三国志演義』『水滸伝』などの長編白話小説の受容様相についての研究は活発に行われたが、三言二拍に代表されるいわゆる短編白話小説については充分な研究が行われていなかった。一般的に比較研究といえば、どちらが優秀なのかについて焦点が当てられがちだが、本研究ではバランスの取れた視点から日韓両国の根底にある文化的背景と特質について考察することに目的がある。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年～	韓国日本語文学会 会員
2019年～	和漢比較文学会会員 会員
2019年～	（韓国）ウリ語文学会 会員
2010年～	（韓国）韓国日本言語文化学会会員 会員
2010年～	（韓国）韓国日本思想史学会会員 会員
2010年～	（韓国）韓国日語日文学会常任理事、文学分科編集委員 会員
2007年～	日本近世文学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	教養教育センター	職名	教授	氏名	佐伯　啓	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	教養教育センター	職名	教授	氏名	信太　光郎	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	教養教育センター	職名	教授	氏名	千葉　智則	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
運動処方を取り入れたスポーツ実技Bの運営	2024年4月1日	
運動処方を取り入れたスポーツ実技の運営	2023年4月1日～	スポーツ実技の内容として、毎回、体重と体脂肪率の測定、レジスタンストレーニング、有酸素運動を取り入れ、さまざまなスポーツ種目の実践を通じて、受講者の健康と体力の向上を図る。 スポーツ実技の内容として、毎回、体重と体脂肪率の測定、レジスタンストレーニング、有酸素運動を取り入れ、さまざまなスポーツ種目の実践を通じて、受講者の健康と体力の向上を図る。 スポーツ実技の内容として、毎回、体重と体脂肪率の測定、レジスタンストレーニング、有酸素運動を取り入れ、さまざまなスポーツ種目の実践を通じて、受講者の健康と体力の向上を図る
人工環境制御室を利用した運動生理学的研究教育	2021年～	人間科学演習および総合研究では、人工環境制御室および呼吸代謝装置をもちいて，高温多湿，低酸素といった特殊な環境条件下における運動パフォーマンスに関わるユニークな教育研究を試みてきた。 体育実験実習Bにおいては、人工環境制御室で運動負荷試験を実施した際のデータ収集法，データ解析，さらには実験結果をプレゼンテーションするまでの方法を体系的に学習する授業を試みてきた。
運動処方理論を導入したスポーツ実技（フィットネス）	2020年～	従来のスポーツ技能向上型のスポーツ実技授業ではなく，運動処方理論の理解と実践を中心とした授業を試みてきた。授業は有酸素的および無酸素的トレーニングを組み合わせたスーパーサーキットトレーニングさらに軽スポーツで構成される。毎回，受講者が体重，体脂肪率の測定を実施し，授業で実施した運動の総エネルギー消費量を記録しながら，健康関連指標である身体組成，全身持久力および筋力の向上を目的とする試みである。
2．作成した教科書、教材、参考書		
スポーツ実技Bにおけるトレーニング記録ノートの作成	2024年4月1日	
スポーツ実技（フィットネス）のための教材	2021年～	健康・体力関連の最新の資料と運動処方の具体的な実践法をまとめた教材である。受講生が毎回身体組成および授業時の総エネルギー消費量を記録しながら，運動処方理論の理解と実践ができるように工夫されている。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					

D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）			
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）			
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）			
G. 学会における研究発表			
H. 翻訳（学術書や原典等）			
I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2016年4月～		日本生理人類学会会員 会員	
2016年4月～		日本体育学会会員 会員	
2016年4月～		日本運動生理学会評議員 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	教養教育センター	職名	教授	氏名	塚本　信也	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年4月～	東方学会 会員
2021年4月～	日本中国学会 会員
2021年4月～	日本中国語学会 会員
2017年9月～	宮城テレビ放送番組審議委員会 委員
2017年～	全日本中国語スピーチコンテスト東北大会審査委員会 委員長

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	教養教育センター	職名	教授	氏名	中村　教博	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
理工系の研究室運営を目指す人材の特性を俯瞰するための試行と考察	共著	2025年3月	工学教育, 73(2)	和田由理恵、中村教博、野地智法	pp.49-59
Miocene Magnetostratigraphy and Relative Paleointensity of Deep-Sea Sediments at IODP Site U1490 in the WesternEquatorial Pacific	共著	2025年1月	Wi, Journal of Geophysical Research (Solid Earth), 130	Yuho Kumagai, Norihiro Nakamura, Toshitsugu Yamazaki	pp.1-21
Ancient Tsunami Records in the Viscous Remanent Magnetization of Reworked Boulders in the Kingdom of Tonga	共著	2024年11月	Wiley, Geophysical Research Letters, 51(21)	Tetsuro Sato, Norihiro Nakamura, Masahiko Sato, Chie Kato, Kazuhisa Goto, Masashi Watanabe, Kenji Satake, Taaniela Kula	pp.1-10
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
効果的な研究室運営の構造分析を目的とした海外調査―メンタリング制度と人材育成を中心とした包括的アプローチ―	共著	2025年3月	未来教育研究所紀要, 13	和田由里恵、中村教博、野地智法	pp.14-21
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
西太平洋赤道域IODPU1490の深海底堆積物の約900～1800万年前の相対古地磁気強度	共同	2024年11月	地球電磁気・地球惑星圏学会(国立極地研究所、立川、東京)	中村教博、熊谷祐穂、山崎俊嗣	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2024年12月～2024年12月		宮城県高等学校理科研究会　宮城県高等学校文化連盟自然科学専門部 令和6年度第2回生徒研修会兼全国総文祭最終選考会 選考委員	
2024年11月～2024年11月		宮城県高等学校理科研究会　宮城県高等学校文化連盟自然科学専門部 第77回宮城県生徒理科研究発表会　審査委員	
2024年9月～2024年12月		地球電磁気・地球惑星圏学会　2024年優秀発表者審査会 審査委員	
2023年12月～		国際学術雑誌(Earth, Planets and Space)の編集者 編集者	
2023年9月～2024年9月		地球電磁気・地球惑星圏学会　2023年秋学会コンビーナ 地磁気・古地磁気・岩石磁気セッションコンビーナ	
2021年4月～2025年3月		地球電磁気・地球惑星圏学会　大林奨励賞選考委員 選考委員	
2003年9月～		地球電磁気・地球惑星圏学会 会員	
1996年7月～		アメリカ地球物理学会 会員	
1992年6月～		日本地質学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	教養教育センター	職名	教授	氏名	坂内　昌徳	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業外学習としての英語多読活動の積極的実施	2021年4月1日～	英語授業の評価に授業外の英語多読を組み入れ、学生が受ける英語インプットを格段に増大
英語の授業における4技能統合型言語活動	2021年4月1日～	受講者全員が90分間を「聞き」「話し」「読み」「書く」ことが求められる授業展開
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
英語多読活動の継続的実施	2021年4月1日～	
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	教養教育センター	職名	教授	氏名	楊　世英	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
小テストや自己点検など	2021年4月1日～	学生の学習状況を正確的に把握するために、教育方法の改善の根拠となるものである。TGベシック授業「地球社会を生きる」において課題調査をしました。
小テストや自己点検など	2021年4月1日～	学生の学習状況を正確的に把握するために、教育方法の改善の根拠となるものである。TGベシック授業「地球社会を生きる」においてアンケート調査をしました。
小テストや自己点検など	2021年4月1日～	学生の学習状況を正確的に把握するために、教育方法の改善の根拠となるものである。
授業の進め方を工夫、とくに国際涵養に関わる科目（地球社会を生きる）	2021年4月1日～	授業の区切りをよく考えながら、とくに板書の設計を配慮して授業を進める。視聴覚教材を活用している。基礎の弱い生徒に個別指導が行なった。講義者に対して受講者が多く、授業はなるべく細かく区切りして、キーワードを明確化する。
学習した内容および関連する知識への理解への定着に促進	2021年4月1日～	常に授業の前で、復習を通して知識の定着に努め、授業終了の際にはまとめを行っている。語学授業のみを行われた。
授業の進め方を工夫	2021年4月1日～	授業の区切りをよく考えながら，とくに板書の設計を配慮して授業を進める。視聴覚教材を活用している。基礎の弱い生徒に個別指導が行なった。
教員独自の「個別面談による授業評価」を実施している。	2021年4月1日～	とくに語学授業なので，授業の合間や休み時間を利用してヒアリング調査を行っている。2年生会話授業にそれぞれ5分ずつあたる練習を行いました（少人数クラス）
学習した内容および関連する知識への理解への定着に促進	2021年4月1日～	常に授業の前で，復習を通して知識の定着に努め，授業終了の際にはまとめを行っている。語学授業のみを行われた。
小テストや自己点検など	2021年4月1日～	学生の学習状況を正確的に把握するために、教育方法の改善の根拠となるものである。TGベシック授業「地球社会を生きる」においてアンケート調査をしました。
2．作成した教科書、教材、参考書		
語学教材として自ら作ったフリントテキスト配布	2021年4月1日～	シラバスに基づきだけではなく、小テストや自己点検などによる学生に合う内容に（14回）90分授業の時間配分を着目する。現代アジア事情授業
語学教材として自ら作ったフリントテキスト配布	2021年4月1日～	シラバスに基づきだけではなく、小テストや自己点検などによる学生に合う内容に（14回）90分授業の時間配分を着目する。
地球社会を生きる	2021年4月1日～	グローバル化世界の貧困・雇用・人口問題の核心に迫る
授業で使用している補助教材（配布プリント）	2021年4月1日～	語学会話授業で生きる言語を学生に伝えるため，大学生に身近の場面設定で会話教材を作って利用した。（中国語会話Ⅰ，Ⅱ）ほかには講義の授業でもプリントをも使っていた。 自ら取ったビデオ（短期語学引率のため中国大学生との語学交流場面）は生の教材として利用した。
語学教材として自ら作ったフリントテキスト配布	2021年4月1日～	シラバスに基づきだけではなく、小テストや自己点検などによる学生に合う内容に（14回）90分授業の時間配分を着目する。現代アジア事情授業
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著 書 ・ 論 文 等 の 名 称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）					
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要		
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動					

2024年度

所属	教養教育センター	職名	教授	氏名	リース　エイドリアン	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2024年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年11月～	Applied Linguistics Association of Australia 会員
2021年4月～	東北英語教育学会 事務局長
2021年4月～	全国英語教育学会 幹事
2020年4月～	日本大学英語教育学会 紀要編集委員長
2020年4月～	日本大学英語教育学会 理事
2010年4月～	日本大学英語教育学会 会員
2010年4月～	東北英語教育学会 会員
2010年4月～	全国英語教育学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	教養教育センター	職名	准教授	氏名	井上　正子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
適者生存の恋愛劇―ジーン・リースの『カルテット』再考―	単著	2024年12月	文教大学文学部「文学部紀要 38-1」, 38(1)	井上正子	pp.69-95
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年8月～2024年8月	テーブルトーク ～その“描かれ方”、モヤっとします コメンテーター, 情報提供
2019年4月～	MLA 会員
2017年4月～	日本アメリカ文学会 会員
2016年4月～	日本比較文学会 会員
2013年4月～	The Society for Caribbean Studies (UK) 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2024年度

所属	教養教育センター	職名	准教授	氏名	巖谷　睦月	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
イタリアと日本――ルーチョ・フォンタナと瀧口修造を軸としたパースペクティヴ『イタリアと日本の前衛　20世紀の日伊交流』	分担執筆	2024年4月	水声社	太田岳人, 巖谷睦月, 筒井彩	pp.75-82
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 ルーチョ・フォンターナの新しいモノグラフィの為に：補完研究として	2018年度～2023年度	個別(研究代表者)	日本学術振興会 科学研究費補助金（若手研究）

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年4月	フォンタナを通して見る「イタリアと日本の前衛」展（専門家によるギャラリートーク）講師
2019年4月～	イタリア近現代史研究会 会員
2018年6月～	イタリア学会 会員
2009年4月～	日伊協会 会員
2004年4月～	美術史学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	教養教育センター	職名	准教授	氏名	原　貴子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
オンデマンド授業における学生の学習意欲維持の工夫	2024年4月1日～2025年3月31日	「文学」などのオンデマンド形式の授業では、ノートやメモの取りやすさと授業内容の理解度の促進を図るために、毎回、講義動画を3本に分けて作成し、それに関するキーワードの穴埋め形式のプリントを配布した。また、毎回の課題において、その穴埋めにしたキーワードも評価対象にした上で、それ以外の課題の難易度や出題形式などに幅を持たせるように努めた。また、学期末に実施する小テストに向けておさらいをしたが、その際には、重要な箇所について改めて、小説から根拠となる箇所を提示したり、考え方の手順を説明し直したりした。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	①小説を論理的に解読する力を養成する。 ②明治期～昭和期までの文学（小説）の流れを理解した上で、主要な作品・事項に関する知識を身に付ける。
今年度の進捗状況	目標①は、教養教育科目の「文学」が該当する。学科や個人などによって差はもちろんあるが、振り返り課題や小テストにおいて、学生たちが小説の構造を捉えた上で、テクストから証拠を具体的に挙げながら意見を構築できるようになってきたため、少しずつ達成されつつあると捉えている。 目標②は、「日本文学史Ⅰ・Ⅱ」が該当する。昨年度に比べると、内容を理解した上で知識を覚えるという基本的な勉強を苦にする傾向が認められた。この現状を受け止めて、学生に過重な負担がかからないように出題範囲を狭めたり出題形式を工夫したりするなど、期末試験のあり方について改めて考える必要がある。
来年度の進捗目標	目標①については、学科によって達成度に違いが見られるため、引き続き、普段文学になじみのない学生たちが小説の論理的な分析力を身につけられるように教育方法を工夫する。 目標②については、詳細に説明すべき点とそうではない点を改めてよく考えて、講義内容にめりはりをつけ、全体的な知識量を調節するようにする。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	これまで研究対象としてきた森?外の現代小説以外にも、幅広く新たな研究対象を探すこと。
今年度の進捗状況	小説本文の分析や先行研究の批判的検討を済ませ、具体的に新たな研究対象を見定めた。
来年度の進捗目標	新たな研究対象に関連する調査をした上で、改めて分析し直して論文としてまとめること。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2024年4月～	森鷗外記念会 評議員
2011年6月～	昭和文学会 会員
2010年4月～	森鷗外記念会 会員
2009年4月～	日本近代文学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	教養教育センター	職名	准教授	氏名	翠川　博之	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学生の主体性を引き出す外国語教育（フランス語）	2024年4月～	受け身になりがちな外国語学習において、学習者の主体性を引き出し、意欲をもって課題に取り組むことができるよう種々の工夫を行っている。授業内で行う発音練習や会話練習に相互指導を組み合わせるなどアクティブラーニングを充実させるほか、事前・事後学修においても、クラウド型教育支援システム manaba course の諸機能を有効に活用している。特に初級フランス語の授業においてはSA を配置し、上級生による学習サポートの機会を設けて初学者への学習支援態勢を強化している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	① 学生の能動性と主体的取り組みの強化 ② 質問や相談に対するきめ細やかな対応 ③ 初級フランス語複数クラスにおける学習内容の規格化
今年度の進捗状況	上記目標①については、昨年度と同様に会話練習や練習問題の取り組みに学習者による相互指導を取り入れたが、今年度はこの方法があまりうまく機能せず、受講生の積極性を十分に引き出すことができなかった（目標達成率60％）。②について、manaba course「個別指導」の利用に加えて、今年度も初級フランス語のクラスにSAを配置した。授業で理解が不十分であったところや難しい文法項目についてSAが受講生の質問に答えたり説明を補足したりする機会を設けることで、学習支援態勢を強化できている（目標達成率90％）。③について、初級フランス語の授業において「何をどこまで教えるのか」を規格化し、クラスを担当する複数の教員と学修内容の標準化に関し連繋を図っている。中級フランス語の授業には初級授業においてクラスの異なる学生が受講しているが、フランス語運用能力に大きなばらつきはなく、一定の成果が得られている（目標達成率90％）。
来年度の進捗目標	上記目標①について、アクティブラーニングの導入形態をさらに工夫する必要がある。内気な受講生に対しても学習意欲を高め積極性を引き出すことができるよう、言語学習だけでなく文化を主題とするようなアプローチを考えてみたい。②については良い成果が得られているので、引き続き学修支援態勢の維持に努めたい。③について、初級クラスを履修した後に中級文法を学ぶクラス、会話に特化したクラスに進む学生が予想以上に少ない。授業の規格化に加え、学習意欲を高める工夫を複数の教員間で共有する必要がある。そのためにどのような方法が考えられるか検討したい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
サルトル初期戯曲の研究III　単独者たち	単著	2025年2月	東北学院大学教養学部論集(195)	翠川博之	pp.115-133
サルトル演劇における〈単独者〉の系譜	単著	2024年12月	サルトル研究　エレウテリア(2)	翠川博之	pp.51-73
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	① J.=P.サルトルの演劇理論と演劇作品に関する研究 ② J.ミシュレの歴史学および思想に関する研究

今年度の進捗状況	① 1930年に25歳のサルトルが執筆した哲学的試論『真理伝説』の草稿群を精査して、サルトル初期の知的・倫理的規範像として「単独者」概念を定義。後に制作されたサルトル演劇における主要登場人物の造形がこの人物像に由来していることを2編の論文で明らかにした。また、「サルトルと映画」という新領域の研究に着手し、未刊のシナリオなど必要資料を入手した。 ② ミシュレの著作『宴』(邦訳『万物の宴』)における「宴」概念に着目し、主にバンヴェニスト『インド=ヨーロッパ諸制度語彙集』に依って「歓待」概念との比較考察を行っている。
来年度の進捗目標	① 未発表シナリオ『レジスタンス』の読解から、後の『弁証法的理性批判』に見られる「集団論」の萌芽がそこに認められることを検証し、論文にまとめる。「サルトルと映画」について収集した資料の分析を進める。 ② ミシュレにおける「宴」概念を「歓待」概念および「贈与」概念と比較し、社会倫理おけるミシュレ思想の有効性について考察をさらに進める。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

1999年4月～	日本サルトル学会 会員
1997年4月～	日本フランス語フランス文学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	教養教育センター	職名	准教授	氏名	文　景楠	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	教養教育センターで行う授業を充実させるとともに、言語文化学科に所属する学生の演習を円滑に行う。	
今年度の進捗状況	言語文化学科での演習を通して、哲学を題材に卒業論文を選ぶ学生が増えた。	
来年度の進捗目標	教養教育センターで行う授業を充実させるとともに、言語文化学科に所属する学生の卒業論文指導を円滑に行う。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
哲学史における分析的アプローチ：アリストテレス的観点から	単著	2024年6月	東北哲学会，東北哲学会年報，40	文 景楠	pp.49-67
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
門脇俊介と哲学書の読み方を習う	単独	2025年3月	門脇俊介先生没後15年追悼シンポジウム(東京大学駒場キャンパス)	文 景楠	
趣旨説明・質疑応答	単独	2024年8月	「哲学的古典の普遍性とその解釈の方法：シールズ『古代哲学入門：分析的アプローチから』を通じて」合評会(東洋大学白山キャンパス)	文 景楠	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	1. アリストテレスの伝記研究を翻訳出版すること。 2. 採択された科研費プロジェクトを進めること。
今年度の進捗状況	1. 1名の共訳者とともに作業を進めている。 2. 共同研究者とともに研究会を定期的に実施している。
来年度の進捗目標	1. 2025年度中の出版を目指している。 2. 研究計画の通りに進める。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2026年度	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2023年10月～2025年9月	東北哲学会 編集委員
2023年4月～	西洋古典研究会 会員
2017年9月～	ギリシャ哲学セミナー 会員
2017年6月～	古代哲学会 会員
2017年5月～	東北哲学会 会員
2012年12月～	日本哲学会 会員
2010年10月～	日本西洋古典学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2024年度

所属	教養教育センター	職名	講師	氏名	遠海　友紀	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2．作成した教科書、教材、参考書		
コラトリエ　ライティングガイド	2024年3月31日～	ラーニング・コモンズで提供する教材としてライティングガイドを作成し、HP上に学内者限定で公開している。 ラーニング・コモンズでの学習相談対応時の活用に加え、リーディング＆ライティングの補助教材として位置づけ、授業中に学生に案内している。 2024年3月31日に1版を発行し、2025年3月31日に2版を発行した。
リーディング＆ライティングの共通教材の作成	2023年4月1日～	選択必修科目として実施されているリーディング＆ライティングの教材（シラバス、教案、授業用スライド、小テスト、ワークシート、レポート評価の観点、その他授業に必要な資料）を作成し、授業を担当する全教員へ展開している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
遠隔授業実施ガイドの修正・公開作業	2020年5月1日～	コロナ禍に入ってから活用されている「学生のための遠隔授業受講ガイド」「教職員のための遠隔授業実施ガイド」の修正、公開する作業に携わっている。
ラーニング・コモンズの運用・学習支援の実施	2016年4月1日～	ラーニング・コモンズの運用や、そこで実施している学習支援を担当している。学習支援では、施設利用に関するガイダンス、個別相談、セミナー、ピアサポート支援、学生スタッフの育成などに取り組んでいる。

現在の課題・目標	学生が大学でよりよく学べるよう、正課、正課外それぞれにおいて、個々の学生に合わせた支援に取り組むことを目標としている。
今年度の進捗状況	正課においては、今年度もリーディング＆ライティングの授業のとりまとめを担当し、他の担当教員と協力しながら、シラバスや各種教材（教案、授業スライド、ワークシート、小テストなど）の作成に取り組んだ。その結果、共通シラバス・共通教材で授業を実施することができた。また、昨年度作成したライティングガイドを修正し、2025年度の授業に向けて2版を発行した。 正課外においては、ラーニング・コモンズの学習支援担当教員として、施設の運用・セミナーや個別相談対応、スタディグループ活動の支援、学生スタッフの育成に取り組んだ。
来年度の進捗目標	正課においては、リーディング＆ライティングの授業において、2024年度の課題を解決することに加え、2025年度秋からの新システムに対応できるよう準備を進める。また、生成AIについても初年次ライティング科目としてどう対応していくべきなのか、検討する。 正課外においては、ラーニング・コモンズの運用に関わるスタッフの体制が変わるため、状況に合わせて円滑に業務に取り組めるよう対応する。また、継続して学生スタッフの育成に取り組む。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
台湾の高等教育における学習環境・学習支援のデザイン 2	共著	2025年3月	関西大学高等教育研究, 16	川面きよ, 遠海友紀, 嶋田みのり, 千葉美保子, 池澤智也	pp.71-80
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
『教育の方法・技術とICT活用　教育工学と教育心理学のコラボレーション』	共著	2024年	北大路書房	岩﨑千晶,田中俊也ら	pp.243-250

『学習環境デザインブック』	分担執筆	2024年	三恵社	千葉 美保子, 村上 正行, 岩﨑 千晶, 川面 きよ, 浦田 悠, 遠海 友紀, 嶋田 みのり, 多田 泰紘, 石井 和也	pp.43-49
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
教員・学生・図書館の協働による自律的な学習者の育成	共著	2025年3月	2024年度「学長教育改革研究助成金・学長研究助成金」研究成果報告書	松村尚彦、吉植庄栄、斎藤渉、遠海友紀、曽根邦敏	pp.1-6
G. 学会における研究発表					
正課外における学習コミュニティを創出するための学習支援の検討ー国内外の大学の学習支援の事例分析から	共同	2025年3月	第31回大学教育研究フォーラム(オンライン)	嶋田みのり, 遠海友紀	pp.83
高大接続を意識したライティング教育の検討ー論理国語の教科書分析からー	共同	2024年11月	大学教育学会2024年度課題研究集会(新潟大学)	嶋田みのり, 遠海友紀	pp.60-61
自律的な学習者を育成する学習評価とその土台となる 教師の「わざ」	共同	2024年9月	日本教育工学会 2024年秋季全国大会(東北学院大学)	杉浦真由美, 岩田貴帆, 近藤孝樹, 沙華哲, 遠海友紀, 甲斐晶子, 長濱澄	pp.11-12
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	自律的な学習者の育成を研究の主テーマにし、初年次ライティング科目や大学における学習環境・学習支援に着目した研究を研究課題としている。
今年度の進捗状況	2024年度は、初年次ライティングに関する研究として、論理国語の教科書分析を実施した。また、大学における学習環境および学習支援に関しては、ラーニング・コモンズにおける学生スタッフの育成に関するヒアリング調査を行った。さらに、台湾および韓国の大学を視察し、スタディグループの取り組みに関する調査も実施した。
来年度の進捗目標	初年次ライティング科目に関しては、生成AIの活用と円滑な授業運営に関する調査研究に取り組む。また、学習環境および学習支援に関しては、これまでに実施したヒアリングの内容を分析・評価する。さらに、学習支援に関する先進的な知見の収集と、調査・分析の実施に向けた準備を進めている。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究（C）	2020年度～2024年度	共同(研究代表者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2017年2月～	一般社団法人大学教育学会 会員
2009年9月～	日本教育メディア学会 会員
2009年5月～	初年次教育学会 会員
2007年7月～	一般社団法人日本教育工学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

ラーニング・コモンズ運営委員、ラーニング・コモンズの学習支援担当教員として、施設の運用や学習支援の体制構築、運用に継続して取り組んだ。

2024年度

所属	教養教育センター	職名	講師	氏名	齋藤　涉	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2023年度 教育功績等優秀教員	2024年8月	
地域課題の探究	2024年4月1日～	
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	2024年度は初年次教育「地域ボランティア活動の探究」、「リーディング＆ライティング」の授業を担当することとなる。授業においては、高等学校までの解を求める受動的な学習から、根拠を調べ、自らの主張を述べられる論理的思考力を養うために、「事前学修-授業-事後課題」を1サイクルとして「何を学び身に着けたか」学修者自らが説明できるように工夫を行うこととする。 できる限り多くの発言を促すため、LMSを活用し意見を述べる、説明するというそれぞれの機会を設けることで大学での学びの第一歩を歩みだせる工夫を行う。
今年度の進捗状況	身につけた知識やスキル、特に「自らの主張を客観性を持って説明できる能力」と「論理的思考力」に焦点を当てて振り返りたい。 まず、授業を通じて、自分の意見や考えを客観的に、そして明確に伝える能力が向上した。これまで、自己の考えを他者に伝える際、主観的な感情や個人的な経験に頼りがちであった。しかし、客観性を持って自らの主張を展開するためには、事実やデータ、論理的な根拠に基づいて話を組み立てることが重要であることを学んだ。このプロセスを繰り返すことで、 学生は自分の意見をより説得力のあるものにすることができた。 次に、学生の論理的思考力についても大きな進歩が見られた。教育活動を通じて様々なテーマや問題について深く考える機会があり、その過程で問題解決のための論理的なアプローチを学ぶことができた。特に、問題を小さな部分に分解し、それぞれに対して根拠に基づいた解決策を考える方法を身につけることができた。この能力は、複雑な問題に直面したときに冷静に対処し、効果的な解決策を見つけ出すのに非常に役立つ。 この教育活動を通じて得られた知識とスキルは、今後の学業や職業、さらには日常生活においても大いに役立つと確信している。自らの主張を客観性を持って説明できる能力と論理的思考力をさらに発展させるために、学んだことを実践に活かし、継続的に自己改善に努めていく所存である。
来年度の進捗目標	授業の在り方については、着任初年度でもあり改善を行うことができる。授業後の課題において課題の意図とは異なる提出について、授業中の説明や資料の工夫によって学生の学びの定着をより一層はかるための工夫を行う予定である。また、2023年度において、それぞれの授業科目において理解できた回、理解が難しかった回を授業後にLMSでアンケートを取ることができたためこの結果を踏まえてシラバスの改定も実施した。 グループワークが苦手な受講生もおり、誰一人取り残さない授業を実施するためにグループワークに入りやすいアイスブレイクや雰囲気づくりを工夫することができる。 また、探究学習においては、調べ学習とならないように「アウトプット」の機会を意識的に設ける工夫が必要となる。そのために、学修者自らの興味・関心と授業における目標が一致するように序盤の授業では学び方を学ぶ工夫も必要である。 2025年度はこれらを踏まえた授業運営をこころがけ、学修者が大学の授業、学問の楽しさを理解できるような授業を展開していく。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
私立大学への私学助成政策の変化と影響『官邸主導時代の高等教育政策：変貌の諸相と課題』	分担執筆	2025年3月	東信堂	羽田, 貴史,丸山, 和昭,白川, 優治,荒井, 克弘,塙, 武郎,大場, 淳,Tanaka, Masahiro, 辻, 優太郎,中田, 晃, 両角, 亜希子,齋藤, 渉,田中, 秀明 (公共政策),磯田, 文雄,林, 透, 小山, 竜司,日本高等教育学会	pp.200-224

私立大学への私学助成政策の変化と影響『官邸主導時代の高等教育政策』	分担執筆	2025年3月	東信堂	齋藤渉	pp.200-2024
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
教学マネジメントの推進アクターに求められる役割・知識・経験	共著	2025年3月	日本高等教育開発協会, 高等教育開発, 4	山咲 博昭,白藤 康成,荒木 俊博,井上 一成,岩野 摩耶,堀 佑二,齋藤 渉	pp.1-10
IR担当者は不安でいっぱい？ IR担当者が感じる執行部との意識の違いの調査	共著	2024年11月	第13回大学情報・機関調査研究集会 論文集	和嶋 雄一郎,齋藤 渉,山本 亮,津久井 浩太郎	pp.54-60
学生の生成 AI 利用とその利用目的に関する一考察 学生意識調査の結果から	単著	2024年11月	第13回大学情報・機関調査研究集会 論文集	齋藤渉	pp.119-125
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
教員・学生・図書館の協働による自律的な学習者の育成	共著	2025年3月	2024年度「学長教育改革研究助成金・学長研究助成金」研究成果報告書	松村尚彦、吉植庄栄、斎藤渉、遠海友紀、曽根邦敏	pp.1-6
G. 学会における研究発表					
学生の生成AI利用とその利用目的に関する一考察	単独	2024年11月	第13回大学情報・機関調査研究集会(関西大学　梅田キャンパス)	齋藤渉	
IR担当者は不安でいっぱい？ IR担当者が感じる執行部との意識の違いの調査	単独	2024年11月	第13回大学情報・機関調査研究集会(関西大学　梅田キャンパス)	和嶋 雄一郎, 齋藤 渉, 山本 亮, 津久井 浩太郎	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	現在、日本高等教育学会会長特別プロジェクトにおいて、「私立大学政策の変容」について研究している。具体的には、私学助成による誘導と規制に関する研究であり、本学の補助金獲得への可能性も広げていく研究を行っている。
今年度の進捗状況	2024年度は高等教育学会において、「高等教育財政の新たな動向と課題 ―国立大学・私立大学への資源配分の変化と影響― 」について発表を行った。また、科学研究費に採択され「教学マネジメントの推進基盤に係る総合的研究」の研究を行っている。 これらの成果は出版物として、さらに研究成果としてまとめ発刊される予定である。
来年度の進捗目標	学校法人のガバナンス改革として私立学校法改正による影響等を非営利組織論の観点から研究し、学会等にて報告を考えている。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 高等教育学	2024年度～	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年8月～	全国マイプロジェクト宮城事務局 全国マイプロジェクト宮城マイプロジェクトアドバイザー
2021年12月～	大学教育学会 会員
2018年10月～	日本インスティテューショナル・リサーチ協会 会員
2017年8月～	非営利法人研究学会 会員
2017年4月～	日本高等教育学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2024年度

所属	教養教育センター	職名	講師	氏名	西田　昌之	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業外学習の推奨	2023年4月1日～	学生にコラトリエの個別指導の利用や、教員のオフィスアワーへの訪問を積極的に勧めている。また研究、留学、進路に関して、個人やグループの相談にのっている。
授業理解を確実なものにする工夫	2023年4月1日～	授業の理解を促すために、事前事後課題を必ず出題している。また次の授業の始めにスライドを用いて、課題の回答を共有したり、授業の始めに学生に模範回答をしてもらったりして、理解を確認している。
橋渡しとしての初年次ライティング教育	2023年4月1日～	専門化する前の初年次ライティング教育として、可能な限り専門科目との関連を授業の中に組み込み、さらなる学びの深淵へと橋渡しとなるように工夫している。文学、科学哲学、歴史学、文化人類学、社会学などの諸理論やトピックを例題に組み込み諸学問への興味を刺激するようにしている。また大学の文章記述の発展の経緯が分かるように、書き手・読み手の問題、客観性、著作権、文章批判などの諸問題も、難解な理論概念を用いずに事例で示しつつ、ディスカッションをしている。執筆行為がいかにさまざまな学問を反映して成立し、かつ諸学問を繋いでいるのか、またさまざまな執筆様式がいかなる限界や課題をかかえているのかを理解できるように構成している。
対話型授業の実施	2023年4月1日～	授業の進行全体を、学生一人一人と対話し、問答や確認をすることを通じて、考えさせる授業を目指している。そのために話易い雰囲気づくり、議論しやすいディスカッションテーマの設定、学生の巻き込みかたを工夫している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	・「クリティカルシンキング」において、大学生として適切な議論のしかたと民主的な態度が身につくように授業設計と教材を作成する。 ・適切な客観性、証拠重視の姿勢、資料批判を伴った学術的文章が書けるようにわかりやすい授業設計と教材を作成する。 ・授業外においても、豊かな学びの世界に学生が触れられるように、研究室等での学生相談や質問に応じる。
今年度の進捗状況	・「クリティカルシンキング」の授業において、学生との問答を中心として授業が進行するように設計した。アンケート評価から見るとある程度の成果は得られたと考える。 ・レポート作成法においても、レポート作成に必要な技術のトレーニングをとりあえず一通り教えることができた。 ・当初より指摘している通り、批判的議論方法とレポート作成法を同時に教授することで、詰込み型となり、信仰に無理が生じている。十分に議論やトレーニングを行う前に、次の課題に移らねばならず、学生の理解にばらつきが生じており、課題数の削減を行っている。 ・APAスタイルに準じた参考文献・文中出典表示のスタイルブックの作成は、十分な時間が取れず、作成途中となっている。 ・無批判なインターネット資料・AIの利用が目立ち、本学の誇る図書館資料が充分に活用されていない。そのために授業で図書館を活用しなくてはいけない課題を加えた。他方で図書館にどうしても行きたくない、図書を借りたくないという学生の姿が浮き彫りになっている。要約手法の未熟さやコピペ、AIの無批判な利用が関連している可能性を考慮され、書籍の利用方法教授の改善を行う必要がある。 ・授業外では、多くの学生が授業後、研究室に質問に来てくれたり、コラトリエへと向かったようである。授業内で話した東南アジア研究や調査の話から、タイ語の勉強がしたいとのことで、週一回の自主ゼミを立ち上げ、年末に学生5名とタイ・チェンマイで調査・研修を行った。
来年度の進捗目標	・参考文献等のスタイルブックの作成。 ・授業課題の改定・修正。 ・図書館資料の活用を促す工夫づくり。 ・研究室などでの学生相談の継続。 ・学びの面白さに引き込めるように、授業内で研究や調査の話を課題文などへ活用。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数

A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
魂のゆくえを訊ねて ーータイ北部コン・ムアン山村における死後観の多様性ーー	単著	2024年7月	日本タイ学会, 年報 タイ研究(24)	西田 昌之	pp.45-69
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
旧制安積中学校同窓会・校友会誌における海外知の蒐集と利用：安積歴史博物館中学校資料の調査から	単著	2025年1月	リテラシー史研究会, リテラシー史研究(18)	西田昌之	pp.3-17
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
力の源としての死後世界：タイ国安南派仏教団（アンナムニカーイ）における心霊譚の活用	単独	2024年11月	景福寺資料調査研究会(京都・京都大学)	◎西田 昌之	
Supporting Hoya (Sea Squirt) to be Main-Stream Food: Change from the Inedible to the Edible by Using Local Subculture in Northern Japan	単独	2024年11月	The 18th Annual National Conference for the Japanese Studies Association of Thailand(Thailand, Chiang Mai University)	◎Masayuki Nishida	
BL Returns to the Womb: Content Analysis on Japanese Dojinshi of Thai BL Television Series ″SOTUS″	単独	2024年7月	**วายไทย:มองมุมใหม่สไตล์ญี่ปุ่น**(Y Culture: Perspectives from Japan)(Thailand, Chulalongkorn University)	◎Masayuki Nishida	
母胎回帰するボーイズラブ ―日本におけるタイBLTVドラマ『SOTUS』同人誌の内容分析―	単独	2024年7月	日本タイ学会2024年度研究大会(大阪・公立大阪大学)	◎西田昌之	
〈安積歴史博物館中学校資料〉旧制安積中学校同窓会・校友会誌における海外知の蒐集と利用	単独	2024年5月	リテラシー史研究会(東京・早稲田大学)	◎西田昌之	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	・科研および依頼の論文が多いので、時間を作って書いてゆく。 ・これまでに構想だけ発表して終わっている論文を仕上げる。 ・単著の出版機会を探る。 ・将来の論文のネタとなる調査、資料収集も適宜行っていく。 ・自分野だけではなく、新しい分野を組み込み、常に研究が最新のものになるように注意する。 ・国内学会から海外学会への比重をずらしてゆく。 ・日本語論文が書けることは示せたので、日本語論文から英語論文へ比重を戻してゆく。
今年度の進捗状況	・タイBLドラマ研究の論文を刊行、2回のパネル発表を終えて研究終了。書籍出版には至らなかった。 ・タイの障がい者教育に関する論文を刊行。 ・タイ人の外国旅行記の論文2編を執筆中。 ・先住民権に関する基礎資料を収集中。 ・京都大学と合同でタイにおけるベトナム仏教寺院の調査を行い、10月に発表。現在論文執筆中。今後、スピンオフしたテーマで、神戸大の教員とインドシナ冷戦検証のグループを立ち上げ、海外学会での発表を狙っていく準備を進めている。 ・早稲田大学と合同で福島県旧制安積中学の同窓会資料の調査を春と秋に早稲田で行った。研究成果の一部を論文にして、1月に刊行した。 ・7月にタイ民間宗教「魂のゆくえを訊ねて―タイ北部コン・ムアン?村における死後観の多様性―」を刊行。 ・京大東南研グループで科研Aを申請したが落選。京大東南研の競争資金「重層信仰論再考」の助成を受けて勉強会（仇討ち隊）を結成、初期メンバーとして参加。クリフォード・ギアツ講読会、岩田慶治講読会に参加中。 ・京大東南研のドキュメンタリー・フィルム保存グループの本学での講演会に参加。 ・京大大学院の大学院英語授業に講師として招聘を受け、ポリティカル・エコロジーについての講義を行う。 ・京大L-insightプロジェクトに呼ばれ、マルチバースの国際会議のファシリテーターとして加わる。

来年度の進捗目標	・論文執筆を時間を見つけて行っていく。 -タイ人の外国旅行記関連（科研C） -世界遺産保全関連（中国伝媒大学） -先住民族に関する論文（科研B） -障害に関するサービスラーニング（科研萌芽） -タイ・ベトナム仏教関連（科研B）「力の源としての死後世界：タイ国安南派仏教団（アンナムニカーイ）における心霊譚の活用」 -投稿が滞っている「嵐を警告するキリスト:フィリピン・レイテ島における災害フォーク・カトリシズムの発生と展開」の投稿。 ・調査に関しては、以下のものを行う。 -夏、タイ・チェンマイ、ラワ族集落への聞き取り -宮城県沿岸、ホヤ養殖業社への聞き取り ・学会発表の予定 -7月タイ学会で発表予定 -10月中国でパネル発表の予定 ・博士論文の出版助成金へ応募する。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
競争的資金等の外部資金による研究 共同利用・共同研究拠点「グローバル共生に向けた東南アジア地域研究の国際共同研究拠点（GCR）」令和6年度共同研究	2024年度～2025年度	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 挑戦的研究(萌芽)	2023年度～2025年度	(研究分担者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2023年度～2027年度	(研究分担者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2027年度	個別(研究代表者)	
競争的資金等の外部資金による研究 サントリー文化財団 2022-2023年度研究助成「学問の未来を拓く」(2024年延長)	2022年度～2024年度	個別(研究協力者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2022年度～2025年度	(研究分担者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2025年2月	L-INSIGHT Career Program - Cyber-Physical Systems and Law: Through the Lens of “Pluriverse” パネル司会・セッションチェア等
2025年1月	2024年度 東北学院大学グローバル教育センター講演会『世界の現場を行く～TVドキュメンタリーディレクターの仕事とは～』司会，企画，運営参加・支援
2025年1月	2024年度 東北学院大学教養教育センター講演会『国際援助の現場から：世界の人々のために力を尽くしたい君のために』司会，企画，運営参加・支援
2025年1月～2026年12月	政治社会学会 監事
2023年1月～2024年12月	東南アジア学会 北海道・東北地区運営委員
2023年1月～2024年12月	政治社会学会 事務局運営委員
2021年8月～	東南アジア学会 会員
2015年11月～	Japanese Studies Association of Thailand 会員
2015年4月～	日本タイ学会 会員
2015年4月～	政治社会学会 会員
2014年4月～	日本文化人類学会 会員
2011年5月～	Association of Asian Studies 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

・グローバル教育センター派遣主任
- グローバル教育センターの立ち上げ業務
- 留学予定者の面接アレンジ、面接実務
- 所員会議、センター会議の運営実務
- 学内国際交流イベントの企画運営、サポート、広報
- 来訪者接遇（韓国大学群、タイ・カセサート大学、韓国領事館など）
- 外部イベントの代表出席（韓国領事館、韓国留学フェアなど）
- チェンマイ大学、淑明女子大学のMOU協定交渉と締結作業
- フィリピン大学、ベトナム国家大学、インド工科大学とのMOU交渉
- 学生への渡航前指導

・2024年度 東北学院大学グローバル教育センター講演会「世界の現場を行く～ TVドキュメンタリーディレクターの仕事とは～ 」企画・実施、司会を行う。
・2024年度 東北学院大学教養教育センター講演会「国際援助の現場から：世界の人々のために力を尽くしたい君のために 」を企画・実施し、司会を行う。

2024年度

所属	教養教育センター	職名	講師	氏名	宮本　直規	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
・学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2020年4月1日～	毎回の授業の冒頭で，前回の復習とその回の概略を必ず説明し，授業終了時にはその回のまとめを行っている。
・学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2020年4月1日～	毎回の授業の冒頭で，前回の復習とその回の概略を必ず説明し，授業終了時にはその回のまとめを行っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	①授業以外での課外の活動として，東松島をフィールドに地域産業を学生たちと共に学ぶ。 ②ゼミ，総合研究指導にあたり学生各人の興味関心に沿った指導を心がける。 ③授業中の時間の使い方に気を配り，効率的に学習が進むように配慮する。
今年度の進捗状況	①活動も14年目に入ったが，毎年あらたに興味を持って参加を希望する学生がいることから，活動自体が安定してきていると言える。 ②総合研究のテーマの多様性を鑑み，ある程度は達成できていると思われる。 ③内容の性質上、特に進捗に関して報告できない。
来年度の進捗目標	①地域との人的な交流を深める。 ②継続して取り組む。 ③フランス語の授業での成果があがることを期す

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	1．フランス語の中性代名詞の振る舞いについて
今年度の進捗状況	コーパスの調査とインフォーマントチェック
来年度の進捗目標	論証をまとめたい

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年6月～	日本フランス語フランス文学会研究情報委員会 委員
2004年～	日本フランス語フランス文学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2024年度

所属	教養教育センター	職名	助教	氏名	千葉　真哉	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	・2023年度カリキュラムにおける2023年度からの開講科目である「地域ボランティア活動の探究」、2024年度新規開講科目である「地域課題の探究」について学生に魅力的で評価される科目となるよう設計し、授業運営に取り組む。 ・旧カリキュラムである地域教育科目群の講義運営を実施する。特に全学部必修科目である「地域の課題Ⅰ」について、通常履修が終了し、再履修者が対象となるため丁寧な講義運営を行う。また、発展科目である「地域の課題Ⅱ（地域企業版）」、演習科目である「地域課題演習（地域企業版）」については、共同で担当する教員とともに学生にとって魅力的な講義運営を目指す。演習科目の学外活動においては事故が起きないように配慮する。
今年度の進捗状況	・「地域ボランティア活動の探究」及び「地域課題の探究」について、共同で担当する教員とともに講義運営を行うことができた。 ・「地域の課題Ⅰ」の授業運営について、再履修者を対象に計画通り講義運営を行うことができた。 ・「地域の課題Ⅱ（地域企業版）」及び「地域課題演習（地域企業版）」について、共同で担当する教員とともに講義運営を行うことができた。 ・「地域課題演習（地域企業版）」については、学外の演習においても事故がなく実施することができた。
来年度の進捗目標	・「地域ボランティア活動の探究」及び「地域課題の探究」について、学生の学びが深まり、学生の満足度が高い科目となるよう、科目の改善を共同して担当する教員とともに行う。 ・旧カリキュラムの全学部必修科目である「地域の課題Ⅰ」について、単位未修得者が無くなるように丁寧な科目運営と小まめな連絡を行う。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	・ボランティアに関する文部科学省における推進についての研究を進める。 ・通信教育におけるコンテンツ及び大学教育に関する運用についての研究を進める。 ・地域に関する協働の実践についての研究を進める。 ・研究協力を行う科研費（大学進学における機会格差）の研究推進を行う。
今年度の進捗状況	・日本通信教育学会の研究論集に投稿を行った。 ・日本都市学会及び東北都市学会に入会した。 ・大学教育学会に入会し、2024年度JACUEスクールを修了した。
来年度の進捗目標	・通信教育、ボランティアに関する研究を継続する。 ・地域における協働をテーマとした研究を進める。その研究成果を日本都市学会で発表する。 ・研究協力を行う科研費の研究の推進を図る。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2021年度～2023年度	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年9月～	地域づくりパートナープロジェクト推進助成事業検討会 検討会委員
2024年7月～	大学教育学会 会員
2024年6月～	東北都市学会 会員
2024年6月～	日本都市学会 会員
2023年5月～	日本ボランティアコーディネーター協会 会員
2022年～2024年	全国高校生MY PROJECT AWARD 宮城県Summit サポーター
2021年12月～	日本社会福祉学会 会員
2021年～2024年	地域づくりパートナープロジェクト推進助成事業審査委員会 審査委員
2020年4月～	日本通信教育学会 会員
2008年～	東北地区大学ラグビーフットボール連盟 理事（事務局・会計担当）
2008年～	宮城県ラグビーフットボール協会 理事（施設・競技委員長）

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	東北学院大学も所属する東北地区大学ラグビーフットボール連盟、宮城県ラグビーフットボール協会の活動により、東北地区における大学ラグビーフットボールチームの強化とラグビーフットボールの普及による社会貢献に取り組む。
今年度の進捗状況	・宮城県ラグビーフットボール協会の活動において、日本代表の国際試合を宮城県に誘致した。 ・東北地区大学ラグビーフットボール連盟として、北海道地区との対戦により勝利をおさめ、東北地区から全国大会出場チームが出た。
来年度の進捗目標	・東北地区における大学ラグビーフットボールチームの強化とラグビーフットボールの普及による社会貢献に取り組む。 ・より良い環境でラグビーフットボールができる環境整備に取り組む。 ・ラグビーフットボールの普及に向けて各種試合の誘致に取り組む。 ・東北地区大学ラグビーフットボール連盟の所属チームが全国大会で勝利できるように強化・普及活動を行う。

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

・地域連携センター所員
・みやぎ・せんだい地域人材育成協働事業プラトフォーム運営担当
・東北学院大学地域総合研究所所員
・東北学院大学教育総合研究所所員
・東北学院大学生協総代

東北学院大学教員業務・活動報告書
2024

発　行　日　2025（令和7）年10月31日

編　　集　東北学院大学点検・評価委員会　教育・研究業績編集委員会

発　　行　東北学院大学

問い合わせ先　東北学院大学研究支援部研究支援課

〒980-8511　仙台市青葉区土樋一丁目3番1号

TEL. 022（264）6459

E-mail：c.kikaku@mail.tohoku-gakuin.ac.jp

印　　刷　ハリウ コミュニケーションズ株式会社

LIFE LIGHT LOVE
SINCE 1886

東北学院大学
TOHOKU GAKUIN UNIVERSITY